福岡市埋蔵文化財調査報告書第1354集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka Kuwabara 元岡・桑原遺跡群29

―第42次(5)・52次調査の報告―

２０１８

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1354集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

Motooka Kuwabara

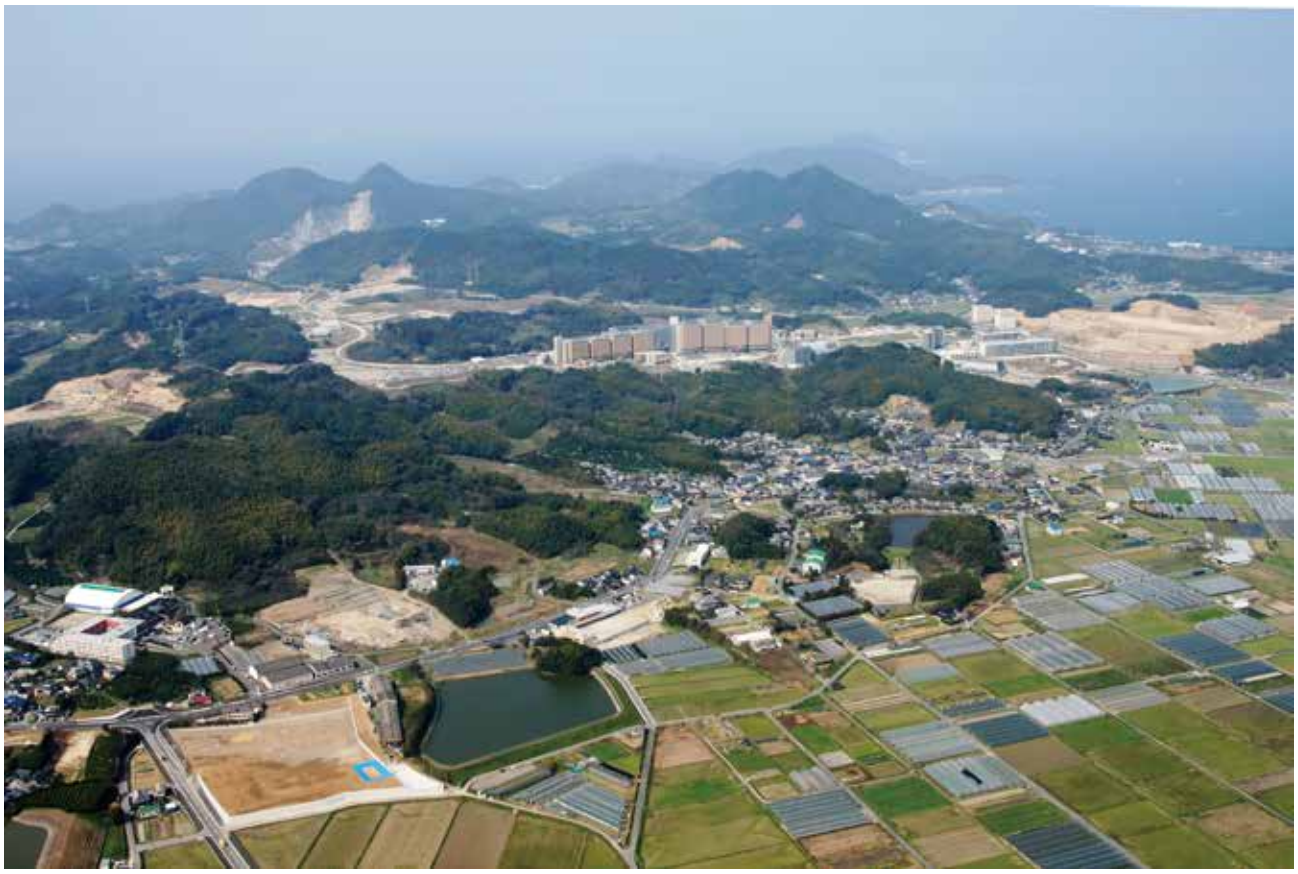
元岡・桑原遺跡群29

—第42次(5)・52次調査の報告—

遺跡略号　MOT－42・52
調査番号　0451・0763

２０１８

福岡市教育委員会



第 42・52 次調査区と伊都キャンパス（南より）

第 42・52 次調査区（北西より）

52 次調査地点縄文時代の調査区（東より）

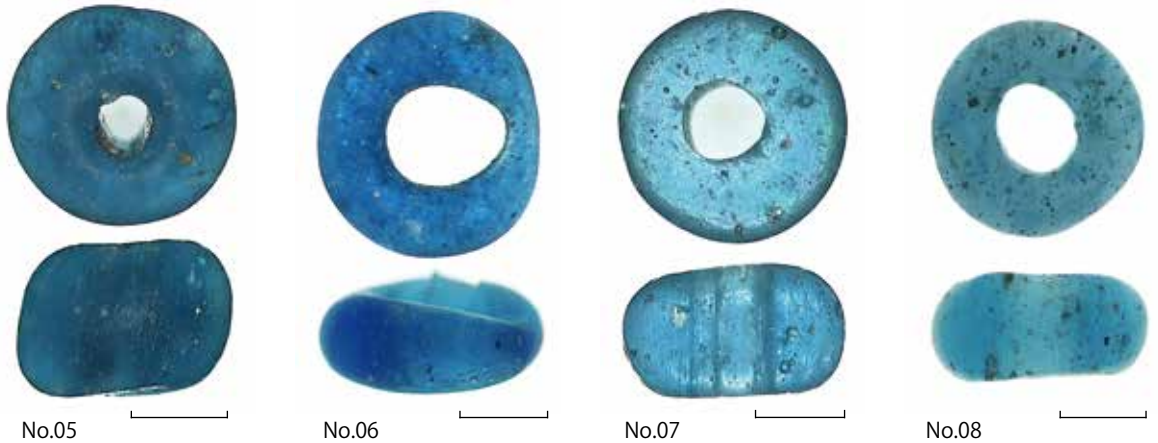
52 次調査地点土層堆積状況

中細銅戈の鋳型（B-10 区）

剣形木製品（土器群 121）

線刻画のある琴（土器群 121）

No.01　No.02　No.03　No.04



No.05　No.06　No.07　No.08

No.09　No.10　No.17　No.27

No.105　No.194　No.262　No.290

元岡・桑原第52次出土ガラス玉・滑石製臼玉拡大画像（スケールは1mm）

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・筑紫地区のキャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原・糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めており、平成17年度から移転が開始され、現在は平成31年度までの第Ⅲステージにはいっています。

福岡市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域のまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における埋蔵文化財の事前発掘調査もこの一環として平成７年度から当教育委員会が取り組んでおり、当初は土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社の委託による発掘調査を行い、つづいて平成14年度からは九州大学の委託による発掘調査を行ってまいりました。

本書で報告する元岡・桑原遺跡群第 42 次・52次調査では、縄文時代から弥生・古墳時代にいたる集落跡や流路など、長期にわたる遺構・遺物が確認されました。調査では、縄文草創期の石器や土器、自然流路内から、弥生時代から古墳時代初頭にかけての膨大な量の土器や、大陸との交流を示す資料が出土し、地域の歴史を明らかにする貴重な発見となりました。

本書が文化財保護の理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。調査にご協力いただいた九州大学をはじめとする関係機関ならびに地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例　言

1．本書は福岡市が九州大学統合移転に伴い、西区大字元岡地内で平成16 ～ 21年度に発掘調査を実施した元岡・桑原遺跡群第 42次・52次調査の報告書である。
2．発掘調査および整理報告書作成は、受託事業として実施した。
3．実測図作成および写真撮影の実施者は、以下のとおりである。

	第 42 次調査
遺構実測図作成	米倉秀紀、常松幹雄、吉留秀敏 、木下博文
遺構写真撮影	米倉、常松、木下
遺物実測図作成	常松、林田憲三、山崎賀代子、井上加代子
遺物写真撮影	常松
製図	山崎、林田、常松

	第 52 次調査
遺構実測図作成	常松幹雄、吉留秀敏
遺構写真撮影	常松、吉留
遺物実測図作成	米倉秀紀、萩原博文、常松、林田憲三、山崎賀代子、髙橋幸作
遺物写真撮影	米倉、萩原、常松、比佐陽一郎
製図	米倉、萩原、山崎、林田、常松

4．本書に使用した空中写真撮影は、福岡市土地開発公社が制作委託し、その成果を使用した。
5．本文に掲載した公共座標は世界測地系である。
6．本文中に掲載した方位は、すべて磁北を示す。
7．本文中に使用した遺構略号とその性格は、以下のとおりである。
SB：掘立柱建物　SC：竪穴住居跡　SD：溝　SK：土坑　P：ピット（柱穴）
SX：その他の遺構
8．本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
9．調査・整理・報告書作成にあたり、多くの方々のご協力を賜った。
10．執筆は、米倉、萩原、常松、比佐陽一郎、松園菜穂が担当した。
11．本書の編集は、米倉との協議のもと、常松が行った。

遺跡名	元岡・桑原遺跡群	調査次数	42 次	調査略号	MOT- 42
調査番号	0451	分布地図図幅名	140　元岡	遺跡登録番号	2782
調査地	福岡市西区大字元岡地内			調査面積	4,800㎡
調査期間	平成 16（2004）年 10 月 1 日～平成 21（2009）年 6 月 30 日				

遺跡名	元岡・桑原遺跡群	調査次数	52 次	調査略号	MOT- 52
調査番号	0763	分布地図図幅名	140　元岡	遺跡登録番号	2782
調査地	福岡市西区大字元岡地内			調査面積	3,900㎡
調査期間	平成 20（2008）年 1 月 21 日～平成 21（2009）年 6 月 30 日				

本文目次

Ⅰ　元岡・桑原遺跡群第42次・52次調査の概要 …… 1
1.　元岡・桑原遺跡群の調査経過 …… 2
2.　第42次・52次調査区 …… 2
3.　本書の構成 …… 3
4.　調査の組織 …… 4
Ⅱ　52次調査Ⅰ区縄文時代の調査 …… 5
1　Ⅰ区の概要と地形 …… 5
（1）　概要 …… 5
（2）　地形と層序 …… 6
2　出土遺物 …… 7
（1）　土器 …… 7
（2）　石器 …… 9
①　出土石器の概要 …… 9
②　出土石器の特徴 …… 13
（付）D-10・11区以外の自然流路等の出土石器 …… 31
3　遺物分布 …… 33
①　遺物分布の概要 …… 33
②　石器類の分布状況 …… 33
a　ユニットA …… 33
b ユニットB・C …… 36
c ユニットD・ユニット外 …… 36
③　各ユニットの組成 …… 39
4　石器の使用痕 …… 41
①　ユニットA …… 41
②　ユニットB・C …… 43
③　ユニットD・ユニット外 …… 45
④　使用痕と集団行動 …… 45
5　出土遺物の特徴 …… 52
①　遺跡の立地 …… 52
②　遺物分布と使用痕 …… 52
③　出土石器の形態的特徴 …… 54
6　考察 …… 56
（イ）　スクレーパーの使用痕 …… 56
はじめに …… 56
①　サイド・スクレーパー …… 56
②　大原D・元岡型スクレーパー …… 57
③　円形掻器 …… 57
④　温暖期と寒冷期のスクレーパー使用痕 …… 58

（ロ） 第52次調査地点の編年的位置 …… 67
はじめに …… 67
① 元岡・桑原遺跡群第58次調査地点 …… 67
② 元岡・桑原遺跡群3次調査地点 …… 70
③ 大原Ｄ遺跡群 …… 73
④ 福岡地方縄文時代初頭の編年的理解 …… 75
⑤ 第52次調査地点の位置 …… 77
第3次調査地点の石器実測図 …… 82
Ⅲ 元岡・桑原遺跡群第52次調査の報告（1）…… 115
Ⅳ 元岡・桑原遺跡群第42次調査の報告（5）…… 115
1 調査区の概要 …… 116
掘立柱建物 …… 120
SB155 …… 120
SB156 …… 120
SB157 …… 120
竪穴住居跡 …… 122
SC211 …… 122
2 遺物の出土状況 …… 123
1区 …… 123
2区 …… 123
3区 …… 124
第52次Ⅱ区出土の土器・土製品 …… 125
第52次Ⅰ・Ⅱ区出土の木製品 …… 168
第42次Ⅱ区出土の土器・土製品・石器・石製品1 …… 191
第42次・52次出土の石器 …… 213
元岡・桑原42次・52次調査出土ガラス小玉の保存科学的調査 …… 215
1. はじめに …… 215
2. 調査の方法 …… 215
3. 結果 …… 215
4. まとめ …… 216
元岡・桑原遺跡群42次調査出土木製品の自然科学的分析 …… 229
1. はじめに …… 229
2. 試料と方法 …… 229
3. 結果 …… 229
4. 所見 …… 232
結語 …… 249

巻頭図版目次

巻頭図版１　第42・52次調査区と伊都キャンパス（南より）
　　第42・52次調査区　全景　（北西より）
巻頭図版２　第52次調査地点縄文時代の調査区（東より）
　　第52次調査地点土層堆積状況
巻頭図版３　第52次調査区出土の鋳型・木製品
巻頭図版４　元岡・桑原第52次出土ガラス玉・滑石製臼玉拡大画像（スケールは1㎜）

挿図目次

第１図　縄文時代草創期調査区位置図 …… 5
第２図　縄文時代草創期調査区D-10･11区の位置 …… 6
第３図　第52次調査Ⅰ区（東半）土層概念図（吉留原案、米倉改） …… 7
第４図　第42次調査C-3区遺構面下土層柱状図 …… 7
第５図　縄文グリットｂ-4～ｃ-4区南壁土層断面図 …… 7
第６図　第52次調査Ⅰ区出土縄文時代草創期土器（1/2） …… 8
第７図　縄文時代草創期の平底（1/4） …… 8
第８図　石材別の石器一覧（1/2） …… 12
第９図　出土石器実測図（D-10･11①） …… 14
第10図　出土石器実測図（D-10･11②） …… 15
第11図　出土石器実測図（D-10･11③） …… 16
第12図　出土石器実測図（D-10･11④） …… 18
第13図　出土石器実測図（D-10･11⑤） …… 19
第14図　出土石器実測図（D-10･11⑥） …… 21
第15図　出土石器実測図（D-10･11⑦） …… 22
第16図　出土石器実測図（D-10･11⑧） …… 23
第17図　出土石器実測図（D-10･11⑨） …… 24
第18図　出土石器実測図（D-10･11⑩） …… 25
第19図　出土石器実測図（D-10･11⑪） …… 26
第20図　出土石器実測図（D-10･11⑫） …… 27
第21図　Ⅰ区自然流路等出土遺物（3/4） …… 32
第22図　元岡・桑原遺跡群52次調査地点（D-10･11区）遺物水平・垂直分布図 …… 34
第23図　元岡・桑原遺跡群52次調査地点ユニットＡ遺物分布図 …… 35
第24図　元岡・桑原遺跡群52次調査地点ユニットＢ・Ｃ遺物分布図 …… 37
第25図　元岡・桑原遺跡群52次調査地点ユニットＤ・ユニット外遺物分布図 …… 38
第26図　ユニット別の石器一覧（1/2） …… 40
第27図　元岡・桑原遺跡群52次調査地点ユニットＡ使用痕分布図 …… 42
第28図　元岡・桑原遺跡群52次調査地点ユニットＢ・Ｃ使用痕分布図 …… 44
第29図　元岡・桑原遺跡群52次調査地点ユニットＤ・ユニット外使用痕分布図 …… 46
第30図　元岡・桑原遺跡群58次調査地点における石器群の変遷（1/2） …… 69

第31図　元岡・桑原遺跡群3次調査地点における石器群の変遷（縮尺1/2）…… 71
第32図　大原Ｄ遺跡群の編年関係（縮尺　石器1/2・土器1/6～1/12）…… 74
第33図　福岡地方における縄文時代初期編年（1）（縮尺石器1/2　土器1/4～1/12）…… 79
第34図　福岡地方における縄文時代初期編年（2）（縮尺石器1/2　土器1/6～1/12）…… 80
第35図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（1）石鏃 …… 82
第36図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（2）石鏃 …… 83
第37図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（3）石槍 …… 84
第38図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（4）楔形石器、彫器 …… 85
第39図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（5）石錐、石匙、スクレーパー類 …… 86
第40図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（6）スクレーパー類 …… 87
第41図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（7）スクレーパー類 …… 88
第42図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（8）スクレーパー類 …… 89
第43図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（9）スクレーパー類 …… 90
第44図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（10）スクレーパー類 …… 91
第45図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（11）スクレーパー類 …… 92
第46図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（12）加工痕のある石器、使用痕のある石器 … 93
第47図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（13）使用痕のある石器、剥片、砕片 …… 94
第48図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（14）石核 …… 95
第49図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（15）石核 …… 96
第50図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（16）石核 …… 97
第51図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（17）石核 …… 98
第52図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（18）石核 …… 99
第53図　元岡・桑原遺跡群第3次調査出土石器（19）石核、石核素材 …… 100
第54図　元岡・桑原遺跡群第42次・52次調査区主要遺構配置図（1/1,000）…… 117
第55図　元岡・桑原遺跡群第42次・52次Ⅱ区グリッド配置図（1/500）…… 118
第56図　元岡・桑原遺跡群第52次調査Ⅰ区遺構配置図（1/200）…… 119
第57図　155号住居跡（SB155）遺構実測図（1/60）…… 120
第58図　156号、157号住居跡（SB155・SB157）遺構実測図（1/60）…… 121
第59図　211号住居跡（SC211）遺構実測図（1/60）…… 122
第60図　元岡・桑原遺跡群第42次・52次調査区遺構配置図（1/400）…… 折込
第61図　元岡・桑原遺跡群第52次SD02 1区土器群121・122・132遺物出土状況実測図（1/50）・ 折込
第62図　元岡・桑原遺跡群第52次SD02 2区土器群124・125・130・131遺物出土状況実測図（1/50）・ 折込
第63図　元岡・桑原遺跡群第52次SD02 3区土器群127・128・129遺物出土状況実測図（1/50）・ 折込
第64図　52次土器群121出土土器実測図（1）（1/4）…… 125
第65図　52次土器群121出土土器実測図（2）（1/4）…… 126
第66図　52次土器群121出土土器実測図（3）（1/4）…… 127
第67図　52次土器群121出土土器実測図（4）（1/4）…… 128
第68図　52次土器群122出土土器実測図（1）（1/4）…… 129
第69図　52次土器群122出土土器実測図（2）（1/4）…… 130
第70図　52次土器群122出土土器実測図（3）（1/4）…… 131
第71図　52次土器群122出土土器実測図（4）（1/4）…… 132

第72図　52次土器群124出土土器実測図（1）（1/4）…… 141
第73図　52次土器群124出土土器実測図（2）（1/4）…… 142
第74図　52次土器群125出土土器実測図（1）（1/4）…… 143
第75図　52次土器群125出土土器実測図（2）（1/4）…… 144
第76図　52次土器群125出土土器実測図（3）（1/4）…… 145
第77図　52次土器群125出土土器実測図（4）（1/4）…… 146
第78図　52次土器群127出土土器実測図（1）（1/4）…… 147
第79図　52次土器群127出土土器実測図（2）（1/4）…… 148
第80図　52次土器群128出土土器実測図（1）（1/4）…… 149
第81図　52次土器群128出土土器実測図（2）（1/4）…… 150
第82図　52次土器群129出土土器実測図（1）（1/4）…… 151
第83図　52次土器群129出土土器実測図（2）（1/4）…… 152
第84図　52次土器群129出土土器実測図（3）（1/4）…… 153
第85図　52次土器群129出土土器実測図（4）（1/4）…… 154
第86図　52次土器群130出土土器実測図（1）（1/4）…… 155
第87図　52次土器群130出土土器実測図（2）（1/4）…… 156
第88図　52次土器群131出土土器実測図（1）（1/4）…… 157
第89図　52次土器群131出土土器実測図（2）（1/4）…… 158
第90図　52次土器群132出土土器実測図（1/4）…… 160
第91図　52次包含層出土土器実測図（1）（1/4）…… 161
第92図　52次包含層出土土器実測図（2）（1/4）…… 162
第93図　52次遺構出土土製品実測図（1）（1/2）…… 165
第94図　52次遺構出土土製品実測図（2）（1/4）…… 166
第95図　52次遺構出土土製品実測図（3）（1/2）…… 167
第96図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（1）（1/4）…… 169
第97図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（2）（1/2）…… 170
第98図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（3）（1/4）…… 171
第99図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（4）（1/4）…… 172
第100図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（5）（1/4）…… 173
第101図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（6）（1/4）…… 174
第102図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（7）（1/4･1/6）…… 175
第103図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（8）（1/4）…… 176
第104図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（9）（1/6）…… 177
第105図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（10）（1/4）…… 178
第106図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（11）（1/4･1/5）…… 179
第107図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（12）（1/4）…… 180
第108図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（13）（1/4･1/8）…… 181
第109図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（14）（1/4）…… 182
第110図　52次調査Ⅱ区出土木製品実測図（15）（1/4）…… 183
第111図　52次調査Ⅰ区出土木製品実測図（1）（1/4）…… 187
第112図　52次調査Ⅰ区出土木製品実測図（2）（1/4）…… 188

第113図　52次調査Ⅰ区出土木製品実測図（3）（1/6）…… 189
第114図　52次調査Ⅰ区出土木製品実測図（4）（1/4）…… 190
第115図　42次土器群112出土土器実測図（1/4）…… 193
第116図　42次土器群117出土土器実測図（1/4）…… 194
第117図　42次土器群120出土土器実測図（1/2・1/4）…… 195
第118図　42次遺構出土土器実測図（1/4）…… 196
第119図　42次遺構出土石器実測図（1/2）…… 197
第120図　52次遺構出土石器実測図（1）（1/2）…… 198
第121図　52次遺構出土石器実測図（2）（1/3）…… 201
第122図　52次遺構出土石器実測図（3）（1/3）…… 202
第123図　52次遺構出土石器実測図（4）（1/4）…… 203
第124図　52次遺構出土石器実測図（5）（1/4）…… 204
第125図　52次遺構出土石器実測図（6）（1/4）…… 205
第126図　52次遺構出土石器実測図（7）（1/4）…… 206
第127図　52次遺構出土石器実測図（8）（1/2）…… 207
第128図　52次遺構出土石錘実測図（1）（1/2）…… 208
第129図　52次遺構出土石錘実測図（2）（1/2）…… 209
第130図　52次遺構出土石錘実測図（3）（1/2）…… 210
第131図　52次遺構出土石錘実測図（4）（1/2）…… 211
第132図　42次・52次調査区出土石器実測図（2/3）…… 214
第133図　52次調査Ⅱ区出土玉類実測図（1）（実大・1/2）…… 219
第134図　52次調査U-8区出土須恵器実測図（1/3）…… 224
第135図　52次調査Ⅱ区出土玉類実測図（2）（実大）…… 225
第136図　52次調査Ⅱ区出土玉類実測図（3）（実大）…… 226
第137図　52次調査Ⅱ区出土玉類実測図（4）（実大）…… 227
第138図　52次調査Ⅱ区出土玉類実測図（5）（実大）…… 228
第139図　52次B-10区出土の中細形銅戈鋳型　（1/3）…… 250

図版目次

図版1　第52次調査D-10・11区発掘風景 …… 107
　　石鏃14出土状況 …… 107
図版2　石鏃1出土状況 …… 108
　　尖頭器27出土状況（接合資料）…… 108
図版3　第52次調査D-10・11区（北東から）…… 109
　　第52次調査D-10・11区（西から）…… 109
図版4　D-10区　古土壌の分布（西から）…… 110
　　D-10区　古土壌の堆積（石器出土状況）…… 110
図版5　遺物出土状況 …… 111
図版6　出土土器 …… 112
図版7　出土石器（1）…… 113
図版8　出土石器（2）…… 114
図版9　第42・52次調査区 SD02全景（東より）…… 251
　　第42次調査区（北東より）…… 251
図版10　第52次調査区（東より）…… 252
　　第52次調査区西半（東より）…… 252
図版11　第52次調査区SD02（北より）…… 253
図版12　第52次調査区SD02（南より）…… 254
図版13　第52次調査区SD02　V-7・8区（北西より）　255
　　第52次調査区（北西より）…… 255

図版14　第52次調査区SD02　V-7・8区（南西より）・ 256
図版15　第52次調査区211号住居跡（SC211）（北より）・ 257
第52次調査区211号住居跡（SC211）（北より）・ 257
第52次調査区211号住居跡（SC211）作業風景・ 257
図版16　土器群131下部出土状況（南より）…… 258
土器群131下部出土状況（南より）…… 258
図版17　樹痕検出状況W-8区（西より）…… 259
樹痕検出状況W-8区（東より）…… 259
図版18　剣形木製品97-2出土状況土器群121（東より）・ 260
剣形木製品97-2出土状況土器群121（北より）・ 260
図版19　桶104-80・105-83出土状況（東より）…… 261
桶104-80・105-83出土状況（西より）…… 261
図版20　竪杵113-22出土状況（西より）…… 262
竪杵113-22出土状況（南より）…… 262
図版21　椅子101-61・鍬出土状況（南東より）…… 263
椅子101-61・鍬出土状況（北より）…… 263
図版22　二又鋤106-88出土状況土器群121（東より）・ 264
三又鍬107-98出土状況 …… 264
図版23　縦斧膝柄101-63出土状況（西より）…… 265
縦斧膝柄101-62出土状況土器群121（東より）・ 265
図版24　T字柄の刳物杓子（第1246集42-195）…… 266
出土状況（南より）
杓子100-55出土状況（南より）…… 266
図版25　作業台105-84出土状況（北より）…… 267
碇102-64出土状況（西より）…… 267
図版26　杓子の柄100-53出土状況土器群122（西より）・ 268
火鑽臼99-38出土状況土器群121（南東より）・ 268
三又鍬108-109出土状況土器群122（西より）・・ 268
図版27　杓子100-52出土状況（西より）…… 269
舟形木製品97-7出土状況（北東より）…… 269
杓子100-55出土状況 …… 269
図版28　石錘128-113出土状況土器群129（東より）・・ 270
石錘130-141出土状況土器群129 …… 270
石錘130-139出土状況土器群129 …… 270
石錘130-138出土状況土器群129 …… 270
図版29　第52次調査区土器群121出土土器 …… 271
図版30　第52次調査区土器群121・122出土土器 …… 272
図版31　第52次調査区土器群122出土土器…… 273
図版32　第52次調査区土器群124・125出土土器 …… 274
図版33　第52次調査区土器群125出土土器…… 275
図版34　第52次調査区土器群127・128出土土器 …… 276
図版35　第52次調査区土器群128出土土器…… 277
図版36　第52次調査区土器群129出土土器…… 278
図版37　第52次調査区土器群129・130出土土器 …… 279
図版38　第52次調査区土器群130・132出土土器 …… 280
図版39　第52次調査区土器群131・包含層出土土器 ・・ 281
図版40　第52次調査区包含層出土土器 …… 282
図版41　第42次調査区土器群112出土土器…… 283
図版42　第42次調査区土器群117・120出土土器 …… 284
図版43　第42次調査区包含層出土土器・石器 …… 285
図版44　第52次調査区遺構出土土製品（1）…… 286
図版45　第52次調査区遺構出土土製品（2）…… 287
図版46　第52次調査区遺構出土石器（1）…… 288
図版47　第52次調査区遺構出土石器（2）…… 289
図版48　第52次調査区遺構出土石器（3）…… 290
図版49　第52次調査区遺構出土石器（4）…… 291
図版50　第52次調査区遺構出土石器（5）…… 292
図版51　第52次調査区遺構出土石器（6）…… 293
図版52　第52次調査区遺構出土石器（7）…… 294
図版53　第52次調査区遺構出土石錘（1）…… 295
図版54　第52次調査区遺構出土石錘（2）…… 296
図版55　第52次調査区遺構出土石錘（3）…… 297
図版56　第52次調査区遺構出土石錘（4）…… 298
図版57　第52次調査Ⅱ区出土木製品（1）…… 299
図版58　第52次調査Ⅱ区出土木製品（2）…… 300
図版59　第52次調査Ⅱ区出土木製品（3）…… 301
図版60　第52次調査Ⅱ区出土木製品（4）…… 302
図版61　第52次調査Ⅱ区出土木製品（5）…… 303
図版62　第52次調査Ⅱ区出土木製品（6）…… 304
図版63　第52次調査Ⅱ区出土木製品（7）…… 305
図版64　第52次調査Ⅱ区出土木製品（8）…… 306
図版65　第52次調査Ⅱ区出土木製品（9）…… 307
図版66　第52次調査Ⅱ区出土木製品（10）…… 308
図版67　第52次調査Ⅱ区出土木製品（11）…… 309
図版68　第52次調査Ⅱ区出土木製品（12）…… 310
図版69　第52次調査Ⅱ区出土木製品（13）…… 311
図版70　第52次調査Ⅱ区出土木製品（14）…… 312
図版71　第52次調査Ⅱ区出土木製品（15）…… 313
図版72　第52次調査Ⅰ区出土木製品（1）…… 314
図版73　第52次調査Ⅰ区出土木製品（2）…… 315
図版74　第52次調査Ⅰ区出土木製品（3）…… 316
図版75　第52次調査Ⅰ区出土木製品（4）…… 317
図版76　第52次調査Ⅰ区出土木製品（5）…… 318

表目次

表1　ユニット別遺物出土数 …… 10
表2　器種別石材の数 …… 10
表3　石器観察表（第52次調査地点）① …… 28
表4　石器観察表（第52次調査地点）② …… 29
表5　石器観察表（第52次調査地点）③ …… 30
表6　石器観察表（第3次調査地点）① …… 101
表7　石器観察表（第3次調査地点）② …… 102
表8　石器観察表（第3次調査地点）③ …… 103
表9　石器観察表（第3次調査地点）④ …… 104
表10　石器観察表（第3次調査地点）⑤ …… 105
表11　石器観察表（第3次調査地点）⑥ …… 106
表12　第52次土器群121出土土器観察表（1） …… 127
表13　第52次土器群121出土土器観察表（2） …… 128
表14　第52次土器群121出土土器観察表（3） …… 132
表15　第52次土器群121出土土器観察表（4） …… 133
表16　第52次土器群122出土土器観察表（1） …… 134
表17　第52次土器群122出土土器観察表（2） …… 135
表18　第52次土器群124出土土器観察表 …… 135
表19　第52次土器群125出土土器観察表（1） …… 136
表20　第52次土器群125出土土器観察表（2） …… 137
表21　第52次土器群127出土土器観察表 …… 138
表22　第52次土器群128出土土器観察表 …… 139
表23　第52次土器群129出土土器観察表 …… 140
表24　第52次土器群130出土土器観察表（1） …… 154
表25　第52次土器群130出土土器観察表（2） …… 159
表26　第52次土器群131出土土器観察表（1） …… 159
表27　第52次土器群131出土土器観察表（2） …… 160
表28　第52次土器群132出土土器観察表 …… 160
表29　第52次包含層出土土器観察表（1） …… 163
表30　第52次包含層出土土器観察表（2） …… 164
表31　第52次遺構出土土製品観察表（1） …… 166
表32　第52次遺構出土土製品観察表（2） …… 184
表33　第52次調査Ⅱ区出土木製品観察表（1） …… 184
表34　第52次調査Ⅱ区出土木製品観察表（2） …… 185
表35　第52次調査Ⅱ区出土木製品観察表（3） …… 186
表36　第52次調査Ⅰ区出土木製品観察表 …… 186
表37　第42次土器群112出土土器観察表 …… 191
表38　第42次土器群117出土土器観察表 …… 191
表39　第42次土器群120出土土器観察表 …… 192
表40　第42次遺構出土土器観察表（1） …… 192
表41　第42次遺構出土土器観察表（2） …… 197
表42　第42次遺構出土石器観察表 …… 198
表43　第52次遺構出土石器観察表（1） …… 198
表44　第52次遺構出土石器観察表（2） …… 199
表45　第52次遺構出土石器観察表（3） …… 200
表46　第52次調査Ⅱ区出土石錘観察表 …… 212
表47　第52次出土ガラス玉の調査結果 …… 217
表48　第42次出土ガラス玉の調査結果 …… 217
表49　第52次調査Ⅱ区出土玉類観察表（1） …… 219
表50　第52次調査Ⅱ区出土玉類観察表（2） …… 220
表51　第52次調査Ⅱ区出土玉類観察表（3） …… 221
表52　第52次調査Ⅱ区出土玉類観察表（4） …… 222
表53　第52次調査Ⅱ区出土玉類観察表（5） …… 223
表54　第52次調査U-8区出土須恵器観察表 …… 224
表55　第42次調査Ⅱ区出土木製品の樹種同定結果 … 234

Ⅰ　元岡・桑原遺跡群第 42 次・52 次調査の概要

Ⅱ　52 次調査Ⅰ区縄文時代の調査

Ⅰ　元岡・桑原遺跡群第42次・52次調査の概要

１．元岡・桑原遺跡群の調査経過

九州大学の福岡市西区元岡・桑原地区への統合移転が決定したことを受け、福岡市教育委員会は平成７（1995）年に対象地内の踏査を行い、平成８（1996）年にはこの事業を担当する大規模事業等担当課を設置した。造成予定地の詳細な試掘調査は平成８年３月から同年９月までに行い、あわせて桑原金屎古墳や元岡石ヶ原古墳などの確認調査を実施した。

移転用地は福岡市土地開発公社が全域を先行取得した後に九州大学が再取得することとなったため、造成工事に伴う発掘調査は福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結び、平成８年から平成20（2008）年まで実施された。しかし、造成工事計画の変更などで、未造成のまま九州大学が再取得した地区についても造成工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。そして、調査範囲は大規模な面積に及ぶことから、九州大学と福岡市は協議を行い、福岡市教育委員会が発掘調査を受託することで、合意し協定書を締結した。この協定書に基づき、福岡市は、平成15（2003）年から平成27（2015）年度まで受託契約による発掘調査を実施した。

移転用地内の埋蔵文化財包蔵地は、古墳などを除いて「元岡・桑原遺跡群」と総称しており、同遺跡群内では平成27（2015）年度までに66 次に及ぶ調査が実施されてきた。

２．第42次・52次調査区（第54・56図）

糸島地域は、福岡平野の西に位置する早良平野と山塊を隔てた一帯の呼称である。玄界灘に突出する糸島半島は、東西から湾入する入海をはさんで北の志摩郡と南の怡土郡とに分かれている。元岡・桑原遺跡群は、旧志摩郡の東部に展開する九州大学伊都キャンパス用地（約280ｈａ）がその主体をしめている。

元岡・桑原遺跡群第42次・52次調査区は九州大学伊都キャンパスの南西部、福岡県道85号福岡志摩線に近接した糸島市との市境に位置している。第42次調査区と北に接する52次調査区は、防災調整池が計画されたキャンパス西端にあたる。調整池の掘削工事によって埋蔵文化財が影響をうけることから発掘調査を実施したものである。

調査区は南から見ると逆台形を呈した緩斜面で、南側から約60ｍの６区までを42次調査区、７区から以北を52次調査区としたが、もともと連続する遺跡である。さらに42次・52次調査は、調査区を東西に分け東側をⅠ区、西側をⅡ区と呼称してきた。第３図の南北のグリット線を目安にするとＡ軸を境に東側がⅠ区、西側がⅡ区にあたる。

42次調査は、2004年10月に東半分（Ⅰ区）の表土を除去して遺構検出に着手した。その結果、谷筋を南北にはしる流路から多量の土器が出土したことから、西側（Ⅱ区）にかけても調査区を拡張した。その結果、調査区は、東西約110ｍ、南北60ｍの約4、800㎡に及ぶ（調査番号：0451）。

さらに2008年１月から調査区を北側に拡張した。この52次調査区は、東西約110ｍ、南北30～50ｍの約3、900㎡に及んだ（調査番号：0763）。42次調査は、平成16（2004）年10月１日に着手し、52次調査を平成20（2008）年1月21日に拡張し、両者を併行して発掘調査をすすめ、平成21（2009）年６月30日に終了した。

３．本書の構成

第42次・52次調査の出土遺物は多量で、小コンテナに換算すると１万箱を超す遺物が出土している。遺物の種類も土器・石器にとどまらず多岐にわたるため、どのような括りで報告するかについて改めて担当者間で協議をおこなった。

まず2012年に刊行したのが「元岡・桑原遺跡群21」で、42次調査区Ｉ区の流路SD 01南側で検出された土器類を主体に報告した（福岡市第1174集）。

つづく「元岡・桑原遺跡群23 」では42次調査区西半部（Ⅱ区）の流路SD 02で検出された木製品について事実報告を行った。さらに同書では金属器類の全容を示すため、第42次Ⅰ・Ⅱ区と第52次調査区出土の銅鏡などの資料を掲載した。この報告で南西部出土の木製品と、金属器など要保存処理遺物について報告した（福岡市第1246集）。

「元岡・桑原遺跡群24」では42次調査区東半部（Ⅰ区）の流路SD 01で検出された土器類および木製品について事実報告を行った（福岡市第1275集）。また流路SD 01とSD 02にはさまれた42次調査区の掘立柱建物と竪穴住居跡について事実報告を行った。

「元岡・桑原遺跡群25」では42次調査区西半部（Ⅱ区）の流路SD 02で検出された土器類および石器類について事実報告を行った（福岡市第1276集）。

本書「元岡・桑原遺跡群29」に収録するのは、52次調査区Ｉ区で検出された縄文時代の遺構・遺物と52次調査西側Ⅱ区の土器・石器など一般遺物、そしてＩ区・Ⅱ区の木器類と42次調査区西半部（Ⅱ区）の補遺の報告である。このほか流路SD 01とSD 02にはさまれた52次調査区の掘立柱建物と竪穴住居跡についても事実報告を行うものである。

本書の構成は、52次調査区Ｉ区で検出された縄文時代の遺構・遺物とSD 02の流路内および周辺部の遺物出土状況を示した。ここでは土器群を構成する主だった器種について図示し、土製品、石器・石製品についても典型となる資料について図化につとめた。調査区の全容が把握できるよう努めたが、十分とはいえないかもしれない。出土遺物は、未図化の資料も含めて埋蔵文化財センターに収蔵される予定なので、展示をはじめ幅広い研究にご活用いただきたい。

【参考文献】

福岡市教育員会 2012「元岡・桑原遺跡群21」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1174集
福岡市教育員会 2014「元岡・桑原遺跡群23」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1246集
福岡市教育員会 2015「元岡・桑原遺跡群24」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1275集
福岡市教育員会 2015「元岡・桑原遺跡群25」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第1276集

４．　調査の組織

調査組織

第42次調査：平成16（2004）年度～平成21（2009）年度

第52次調査：平成19（2007）年度～平成21（2009）年度

調査主体：福岡市教育委員会

教育長　　植木とみ子（16～18年度）山田裕嗣（19～21年度）

文化財部長　　山崎純男（16～18年度）矢野三津夫（19～20年度）宮川秋雄（21年度）

調査担当：埋蔵文化財第２課（現埋蔵文化財課）　課長

力武卓治（16～19年度）　田中壽夫（20･21年度）

調査担当　　米倉秀紀　常松幹雄　吉留秀敏　池田祐司　木下博文

報告書作成：平成29年度

調査主体：福岡市経済観光文化局

文化財部長　　髙山嘉樹

報告書作成担当：埋蔵文化財課

課長　　常松幹雄

調査第２係長　大塚紀宜

報告書担当　　常松幹雄　米倉秀紀

庶務担当：文化財保護課

課長　　宮崎誠二

管理係長　　藤　克己

管理係　　松原加奈枝

平成23年度までの調査組織については、「元岡・桑原遺跡群21･23」に記している。本書では平成16（2004）年度から21（2009）年度までの発掘調査体制と平成29（2017）年度の整理体制について記した。この間、文化財部は、平成24年４月１日に教育委員会から経済観光文化局に移管された。

Ⅱ　52次調査Ⅰ区縄文時代の調査

1　Ⅰ区の概要と地形

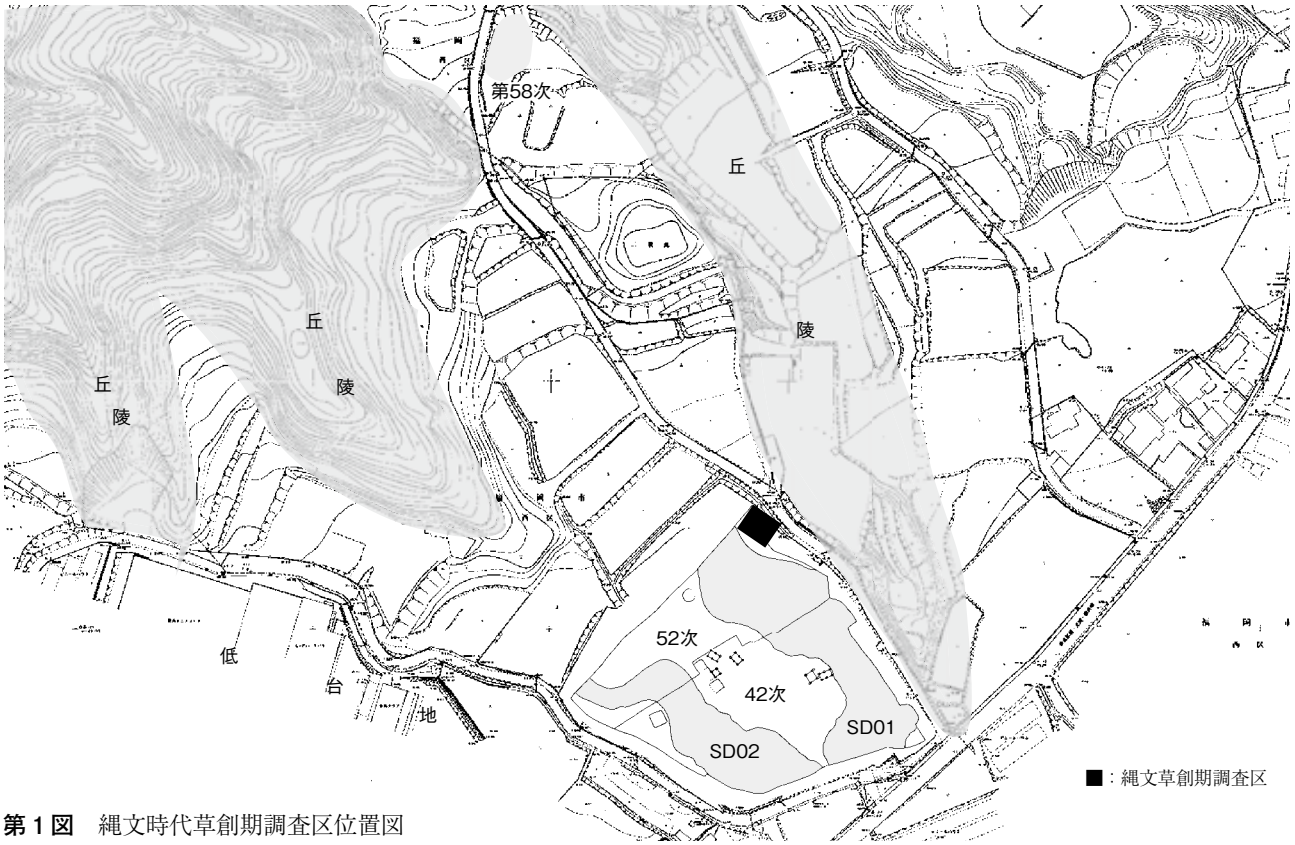
（1）概要

第52次調査Ⅰ区（第52次調査東半：Ａ～Ｅ－７～11区）は吉留秀敏が調査を行ったが、平成25年に吉留が逝去したため、吉留が残した記録類を元に、米倉・萩原が報告を行う。

Ⅰ区は、調査区東側と西側に北から伸びてくる狭い尾根（西側は尾根の先端部が沖積微高地を成している）と、両尾根に挟まれた谷（自然流路ＳＤ０１）から成っている。西側の尾根及び沖積微高地上には、弥生時代から古墳時代の竪穴住居などの遺構があるが、その大部分は調査区西半のⅡ区に属している。自然流路ＳＤ０１は、南側隣接地の第42次調査ＳＤ０１の上流にあたり、弥生時代中期から古墳時代初頭を中心とする遺物が大量に含まれている。

ＳＤ０１は幅30ｍ内外、深さ１～２ｍを測る流路で、その東側は幅の狭い丘陵である。丘陵の西側斜面は、当調査区の南側に隣接する第42次調査区ではかなり急な角度の斜面を成しているが、当調査区では傾斜がかなり緩くなっている。

Ⅰ区の発掘調査は、調査区の大部分を占めるＳＤ０１を掘削することにほぼ費やされていたが、調査の終盤近くになり、ＳＤ０１東岸の上記緩斜面上でパティナの古い石器が出土したことから、弥生時代遺構面を掘り下げたところ、縄文時代草創期と考えられる石器が点々と出土したため、遺物の出土位置のドットを取りながらこの地点を掘り下げた。遺物群はいくつかの集中地点があり、約617点の石器・剥片・石屑、33点の土器片が出土した。石器の中には、近似例がほとんどない大型の石鏃や、石槍・スクレイパーなどを含み、また土器片には微隆起線文土器に似た土器片を含んでいる。



第１図　縄文時代草創期調査区位置図

（２）地形と層序

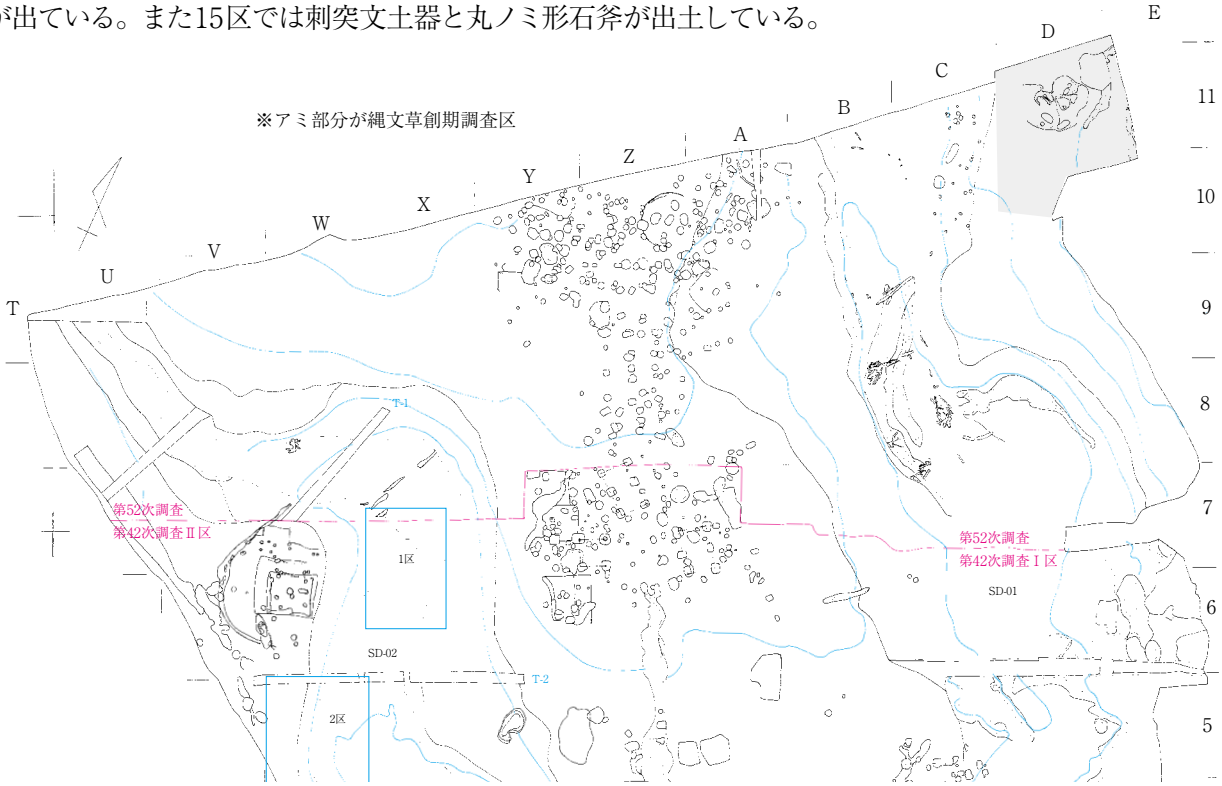
上述のように縄文時代草創期遺物群が出土した地点は、谷に面する西側斜面に立地する。調査区周辺をやや広く見れば、42･52次調査区東側に狭い丘陵、同西側にはやや低平で幅広な丘陵（台地）があり、当調査区はほぼ全面がその両丘陵・台地に挟まれた谷の中に入る。全体の基盤層は花崗岩の岩盤である。

上記丘陵と低台地の間には、丘陵がもう１本あるが、調査区まで伸びていない。縄文時代晩期にはこの中央の低い丘陵の東側にＳＤ０１、西側にＳＤ０２の流路が流れ出している。

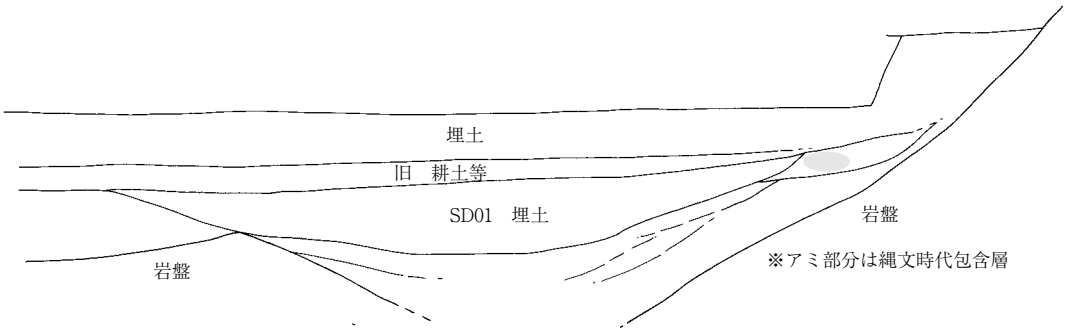
両流路は、白色系のシルト層を切り込んで流れているが、第42次調査でこのシルト層以下を掘削した（第４図）。シルト層の下は粘土層・砂層などの互層で、遺構面下1.2ｍ前後で樹木を含む黒褐色粘土層があり、Ｃ^{14}年代は19110±70年B.P.であった。この年代は最終氷期の最寒冷期に近い。一方最上面のやや厚いシルト層は縄文時代晩期開削のＳＤ０１に切り込まれており、当遺跡の南約３ｋｍにある周船寺遺跡と同じような状況で、縄文時代後半のどこかで形成されたものと思われ、縄文時代草創期は、谷全体が湿地状を呈し、時折北側の山地から砂が供給され、徐々に谷が浅くなっている状況であろう。

遺物が出土した地点は、調査区グリッドＤ－10区･11区で、東側の狭い丘陵から伸びる西向きの緩斜面上に位置し、段丘状を呈していたものと考えられる。遺物が出土したのは、弥生時代の遺構面の下の黒色シルト層・黒褐色～暗褐色粘質土層で、もっとも厚い部分で厚さ15㎝を測る。弥生時代層と当該層の間は、記述が無く不明であるが、当該層の下は小礫を含む砂質層である。

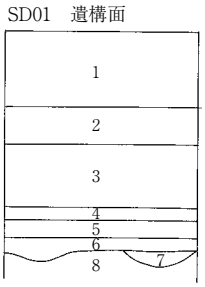
遺跡内の別地点でも、縄文時代草創期から早期前半の遺跡見つかっている。本調査区の北側200ｍ地点の第58次調査[①]では、数枚の文化層から石組炉などの遺構や多くの土器・石器が出土した。最下層では、条痕文土器にいわゆる三角鏃が出土し、Ｃ^{14}年代はB.C.8000年代前半の数値が出ている。その上面では、刺突文土器や初期押形文土器が出土している。本調査区の北東約1.2㎞の地点にある第３次調査[②]では、無文土器・条痕文土器・撚糸文土器などが数枚の文化層から出土し、最下層は平底を含む無文・条痕文土器が出土している。本遺跡の東北約3.5㎞にある大原Ｄ遺跡第６次調査[③]14区では、最下層の第３層から平底を含む無文土器（主）・条痕文土器が出土し、焼失家屋が発見され、Ｃ^{14}年代測定は数点行われ、概ねB.C.11000年.前後が出ている。また15区では刺突文土器と丸ノミ形石斧が出土している。



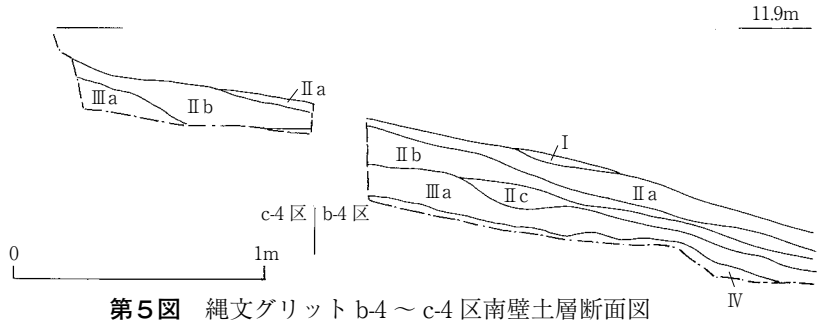
第２図　縄文時代草創期調査区 D-10・11 区の位置



第３図　第 52 次調査Ｉ区（東半）土層概念図（吉留原案、米倉改）



第４図
第 42 次調査Ｃ－３区遺構面下土層柱状図



第５図　縄文グリット b-4 ～ c-4 区南壁土層断面図

1　にぶい黄褐色細砂まじりシルト（遺構面）
2　黄灰色～にぶい橙色粘土
3　灰白色～黄灰色細砂
4　明緑灰色シルト
5　明灰オリーブ色粗砂
6　明黄褐色粘土
7　粗砂
8　黒褐色粘土（19110±70B.P.）

Ⅰ　明黄褐色粘質土
Ⅱa　暗褐色粘質土に微細礫少量含む
Ⅱb　暗褐色粘質土に小礫多量に含む
Ⅱc　黒褐色粘質土に微細礫少量含む
（Ⅱa～Ⅱc：包含層）
Ⅲ　黄褐色粘質土微細礫多量に含む
局所的に灰褐色砂質土のまとまりあり
Ⅳ　暗灰褐色砂質土（花崗岩風化土）
※Ⅱ層が遺物包含層と思われる。

２　出土遺物

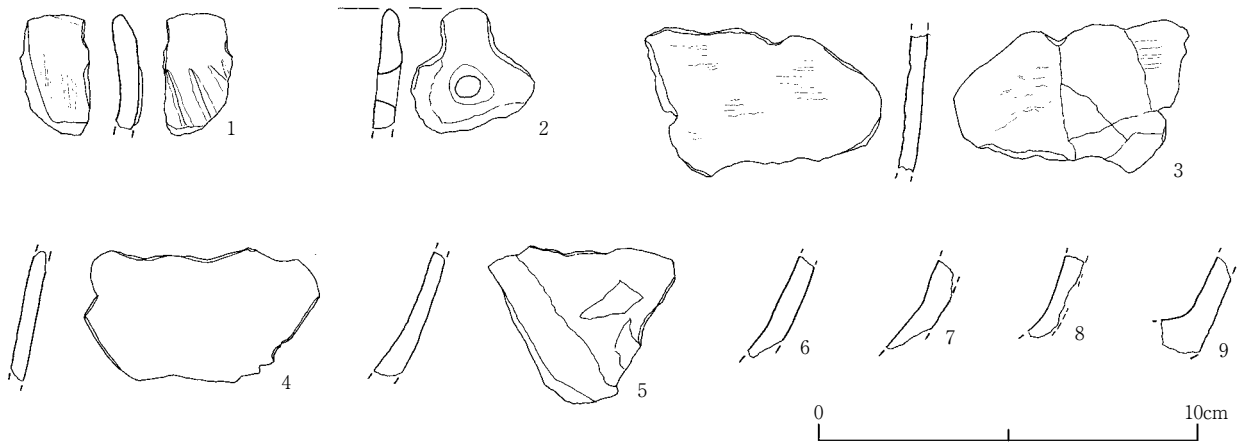
（１）土器

土器は33片出土した。ほとんどが２㎝以下の細片で、９点を実測した。１～２㎜大の白色の鉱物をやや多く含み、中には黒色鉱物や石英・金雲母と思われる校欝を含んでいるものがあり、焼成はあまり良くない。おおむね暗褐色に近い色調のものが多いが、白色に近いものが数点ある。

１は口縁部片と思われる。端部はやや内湾気味に細くなる。口縁端部下１㎝のところから縦方向の微隆起線文状の突帯が少なくとも２条あり、破片の右端部分も盛り上がっている。突帯は貼り付けではなく、突帯周囲をなでて窪ませる、または突帯をつまみ出すことによって整形していると思われるが、遺存部分が少なく判断がつかない。外面はナデもしくは粗い指ナデで仕上げている。内面には縦方向の擦痕が見られるが、ナデの痕跡か。器厚は、６㎜前後を測る。縄文調査区Ｃ－３グリッドNo.545。

２は破片の中央部に焼成後の穿孔が施され、補修孔であろう。内面はほぼ平坦であるが、本来の器面ではなく器面が剥離している可能性が高い。表面の器面は凹凸がやや激しく、器厚が４～６㎜を測る。図の上部は先が尖り気味になっており、１と同様に口縁片の可能性が高いものと思われる。

３～８は胴部の破片であるが、天地左右、傾き等の判断がつかないものばかりである。３は無文の胴部片で外面・内面に線状の痕跡がある。外面は、破片の右側に５～６列の直線状、破片中央から左に「くちゃくちゃ」と表現できるようなかすかな痕跡が認められる。内面にも短い直線状の痕跡がある。調整時の痕跡であろうか。厚さ３～５㎜を測る。４も無文の胴部片で、擦痕や調整痕は見られない。内面器面は小さな窪みが多くある。外面は暗淡黄褐色で、内面は黄白色に近い。５～８は底部に近い破片であろう。



第６図　第 52 次調査Ⅰ区出土縄文時代草創期土器（1/2）

５は破片の厚みが徐々に増し、４～６㎜を測る。白色鉱物をかなり多く含み、内面は黒色味を帯びた色調である。６・７も５に近い形状であるが、破片が小さく底部に近いと断言はできない。７は白色味を強く帯びた色調で、粘土が縞状になっている。８は径が小さく、天地と考えられる方向も湾曲しているところから底部に近いものと判断できる。外面はほぼ全面剥離しているが、厚さ７㎜と他の胴部片より厚い。

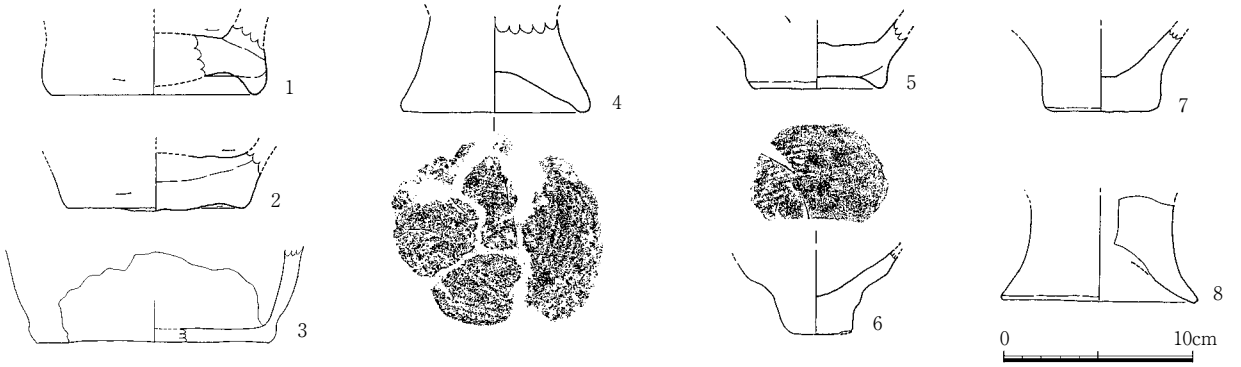
９は平底の底部と思われる。破片部分を見る限り、径は比較的大きくなりそうである。通常の平底になるのか、大原Ｄ遺跡で出土したような脚台がつくかはわからない。

出土土器の特徴を簡単にまとめる。焼成は悪く、胎土には砂粒（鉱石）を多めに含み、バインダー等の保存措置を講じないと脆い状態であり、大原Ｄ遺跡群や元岡遺跡群３次・58次、早良区松木田遺跡などと共通する。厚さは５～６㎜と比較的薄く、上記の諸遺跡のうち、草創期末～早期初頭の刺突文土器・撚糸文土器など（厚さ１㎝以上）とは一線を画し、大原Ｄ遺跡最下層Ⅲｂ類無文土器（同５㎜前後）に近い。

文様がある土器は１の微隆起線文状のもの１点であるが、２の土器片も表面に凹凸があり、あるいは隆起線文系統の土器の可能性もある。いずれも小片のため、全体の文様構成等はわからない。注目できるのは、平底と考えられる底部片である。草創期の一時期に、平底が出現する時期がある。近隣では福岡市大原Ｄ遺跡最下層無文土器、長崎県泉福寺洞穴④では隆線文土器文化層などがあり、南九州では鹿児島県掃除山遺跡⑤、同奥ノ仁田遺跡⑥ほか遺跡数は多い。

詳細を検討する余裕はないが、上記の特徴や平底の存在から、本調査区の土器群は隆起線文土器から大原Ｄ遺跡最下層出土の無文土器と前後する時期のものとみて大過ないであろう。

① 福岡市教育委員会「元岡・桑原遺跡群26」 2016
② 福岡市教育委員会「元岡・桑原遺跡群３」2004
③ 福岡市教育委員会「大原Ｄ遺跡４」2003
④ 麻生優編「泉福寺洞穴の発掘記録」1985　築地書店
⑤ 鹿児島市教育委員会「掃除山遺跡」1992
⑥ 西之表市教育委員会「奥ノ仁田遺跡　奥嵐遺跡」1995



第７図　縄文時代草創期の平底（1/4）

１・２　掃除山遺跡　　３　泉福寺洞穴（隆線文土器文化層）
４～６　大原Ｄ遺跡（条痕文土器・無文土器）
７・８　元岡・桑原遺跡群第3次（条痕文土器か）

（2）石器

① 出土石器の概要

第52次調査地点は幅100ｍほどの谷部に形成された遺跡で、縄文時代初期の纏まった遺物群（土器・石器）は、その東側の古い小さな丘陵と新しい自然流路（河川）に挟まれた、緩やかな傾斜地（段丘）より検出されている。隣接する第42次調査地点の成果によると、谷部は基盤の花崗岩岩盤の上位に旧石器時代の堆積物である泥炭質土層（5層)、その上にシルト質土壌と粗砂の互層（4層）が載っている（米倉2012)。出土した遺物を包含する土層は、基本層位4層の一部に相当すると思われる。

縄文時代初期の遺物が検出されたＤ-10･11区は、東側の丘陵に接する河岸段丘に認められ、厚い堆積層が形成されている。河川や洪水による影響が少なく、堆積土が比較的良く保存されたのである。

二つの自然流路に挟まれた地区もこれに近い条件下にあり、Ｘ－9区では別掲のようにローム層中出土品が報告されている。出土層位の詳細やその年代は明らかでないが、谷の端部以外にも古い遺物包含層が存在している可能性が指摘できる。

四ヶ所の遺物集中より、原位置に近い状態で検出されている。元岡・桑原遺跡群に限らず、福岡地方でも稀な事例といえる。これらは遺物集中度、出土レベルなどの検討により極めて短期間に形成されたものと考えられる。それは、石鏃や石槍など定形石器の型式学的特徴においても追認できる。石皿や磨石など大形石器が無い点も、短期間の居住と思われる。当地方では、極めて稀な混在のほとんどない遺物群と考えられ、出土数は比較的少ないが、縄文時代初頭の編年や生活の復元など、各方面に貴重なデータを提供するものと思われる。

第１表にみるように、各ユニットは均質な存在でなく、それぞれ違いが認められる。連続するユニットＡ・Ｂ・ＣとユニットＤは、器種組成に大きな違いが認められる。後者は砕片の割合が少なく、特に小さなものが無い。他のユニットと異なり、石鏃など定形石器の製作が行われていないと考えられる。その代り土器を組成し、スクレーパー類の割合も高いことから、日常的な生活空間であったと思われる。土器とスクレーパー類はユニットＡにも認められ、両者の機能を併せ持っていたと考えられる。同じ場に、定形石器製作と日常的空間が重複しているのである。なお、本遺物群には石核が認められず、剥片の割合（石鏃3.7％より低い3.4％）も低いことから、石器素材の生産活動を行っておらず、僅かな量の剥片を持ち込み、定形石器などの製作を行う、石器製作に関する一部の行動のみが行われていたと考えられる。しかも定形石器の種類も少ないことから、比較的単純な行動であったと思われる。

定形石器の大部分が破損品である点は一般的遺跡とは異なり、本石器群を特徴づけている。特に狩猟具である石鏃と石槍に著しく、先端部や脚部などが欠損している。これらは使用中または製作時に破損したと考えられ、遺跡はその廃棄の場になっていたと考えられる。破損は全てのユニットに著しく、Ａ・Ｂ・Ｃ各ユニットで石鏃（狩猟具）の補充活動が展開されたと考えられる。

第１表・第26図にみるように、ユニットＡは定形石器・砕片共に出土数の大半を占め、多様な形態の石器が含まれている。石鏃には側辺部の小破片（17･19）を含み、製作中に生じたと思われる。砕片は86.9％であり、かなり高い割合である。ユニットＢ・Ｃも、破損品の石鏃（18～22）によって特徴づけられ、砕片の割合も高い（ユニットＢ：93.4%、Ｃ：88.6％)。ユニットＤは石鏃1点（23）のみだが、スクレーパー類（36～38）や使用痕ある石器（56～61）の割合は高く、砕片は少ない（56.7％)。疎らに分布するユニット外の資料群も、同じような傾向にあると言えよう。

表１　ユニット別遺物出土数

	ユニットA	ユニットB	ユニットC	ユニットD	ユニット外	計
石鏃	16	3	2	1		23
尖頭器	3				2	5
楔形石器	1					1
スクレーパー類	8	1		3	1	13
加工痕ある石器	2	1	1		1	5
使用痕ある石器	8	4	1	5	1	19
剥片	13	1		7	1	22
砕片	346	126	31	21	5	529
土器	5			28		33
炭化物				1		1
計	403	136	35	66	11	651

表２　器種別石材の数

	腰岳 ob	針尾島系 ob	ハリ質安山岩	安山岩	花崗岩	石英	流紋岩	その他
石鏃	8	2	13					
尖頭器		2	3					
楔形石器			1					
スクレーパー類	2	1	6	2	1		1	
加工痕ある石器	2		2					1
使用痕ある石器	15	2	2					
剥片	4	4	11		2		1	
砕片	310	135	74		3	2		5
計	341	146	112	2	6	2	2	6

第２表に石材別の石器数量を示した。佐賀県伊万里市腰岳系の黒曜石が最も多く、次いで長崎県佐世保市針尾島を原産地とする淀姫系黒曜石、ハリ質安山岩（原産地不明）が用いられ、他の石材はそれぞれ 10 点以下である。本遺跡の淀姫系黒曜石とハリ質安山岩は、いずれも磨りガラス状を呈し、外観が極めて良く類似している。これらのガラス質石材は石鏃など細かな調整を施した利器に用いられ、石質の粗い安山岩などはスクレーパー類の素材に採用されている。

第１表・第８図にみるように、各器種間で石材の割合に大きな差が認められる。黒曜石は腰岳あるいは松浦産の黒色のものを中心に針尾島産（淀姫、針尾中町）で構成され、全体の 80％近くを占めている。使用痕ある石器や砕片の割合は高いが、定形石器は比較的低率である。これに対し、ハリ質安山岩は 20％弱なのだが、定形石器では５割を超えている（60.5％）。石鏃、尖頭器、スクレーパー類、剥片は、ハリ質安山岩が最も高い割合である。安山岩（37・39）・流紋岩（34）・花崗岩（38）はやや大形のスクレーパー類の素材に利用されている。これらは砕片が殆どみられず、本遺跡で製作された可能性は殆どない。

砕片を含めた数量は黒曜石が圧倒的多数を占めるが、定形石器を基準に考えると、ハリ質安山岩主

体の石器群と考えられる。脚部U次状の大形石鏃、14のような特殊な石器、尖頭器など本石器群を代表する石器はハリ質安山岩製である。スクレーパー類も、丁寧な調整を加えたもの（29～32）はハリ質安山岩が用いられている。しかし、最終的な石器製作において主に黒曜石を採用している点を考慮すると、黒曜石主体石器群へと変化するきざしが感じられる。

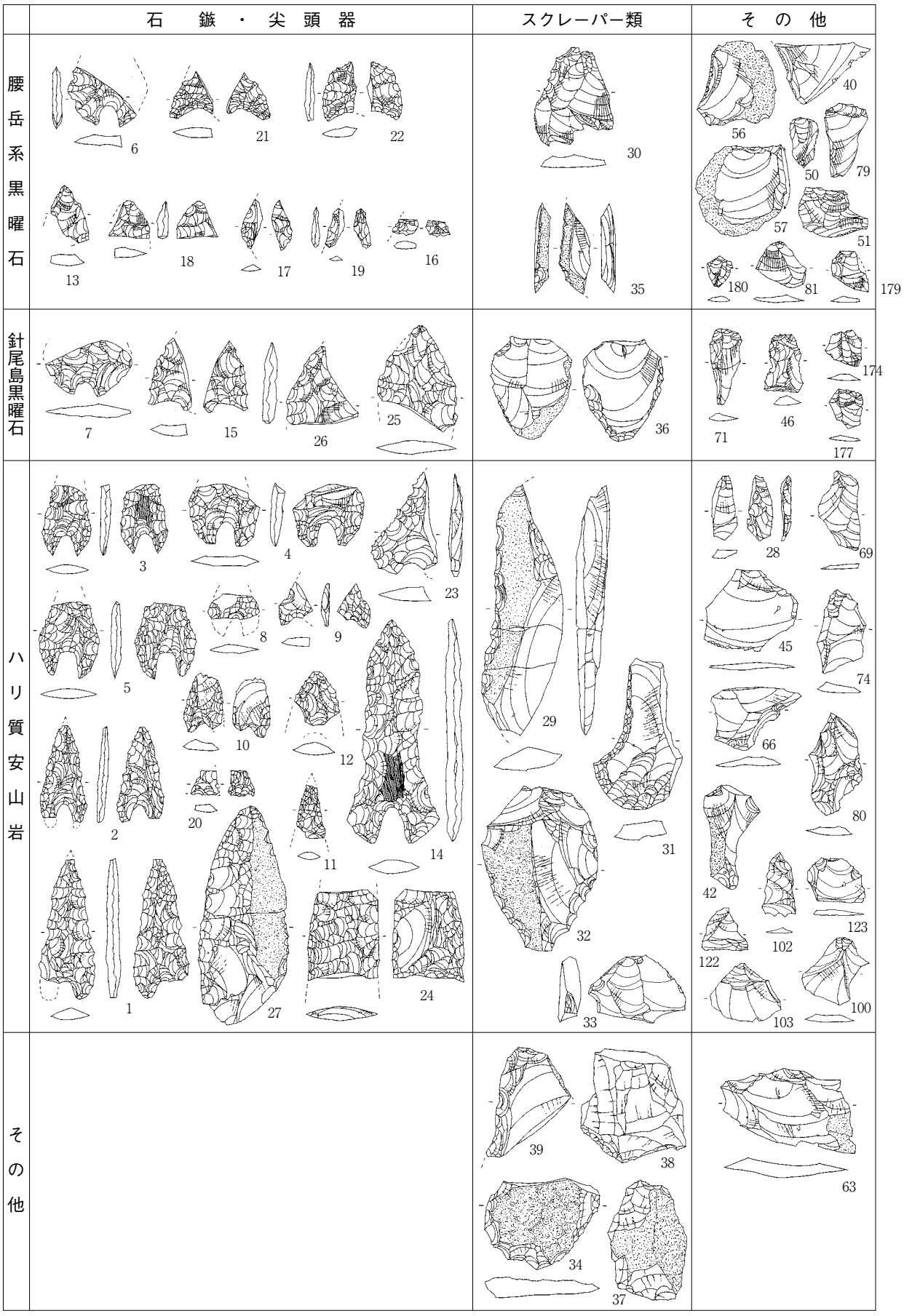
黒曜石は砕片の割合が高く、主にユニットA・B・Cで多数検出されている。これは本地点での石器製作が、主に黒曜石を用いていたことを示している。本遺跡に移動する前は、ハリ質安山岩に近い石材を加工し製品を得ていたと考えられる。その原産地は明らかでないが、本地域での石器原石供給は腰岳など西北九州との関係が強く、ハリ質安山岩から西北九州産黒曜石へと移りつつある過程を示しているのではないかと思われる。黒曜石の中でも、ハリ質安山岩に近い淀姫系を介在して変化が促進されたと考えられる。第8図のように、淀姫系黒曜石から比較的大形の石鏃（7・15）や石槍（25・26）が作られているのである。

黒曜石製石鏃には、ハリ質安山岩にない抉りの浅い特徴的な形態（15・21・22）が組成されている。これは本人類集団には本来なかった形態と考えられ、新たに組み込まれたと考えられる。黒曜石を素材とすることから、九州独自の形態である可能性が高い。スクレーパー類（30・35・36）や、大形の使用痕ある石器（56・57など）にも黒曜石が用いられている。道具製作や食事など日常的な行動に用いられたと思われる。

ハリ質安山岩製の楔形石器（28）が1点認められる。楔形石器は時間幅のある石器であるが、北部九州福岡地方では縄文草創期終末より、早期にかけて大量に検出されている。極めて小形で薄い本資料は、その魁をなすものと思われる。本地域の楔形石器は、側面に樋状剥離痕が認められる点に特徴があるが、図28には認められない。

ユニット間でも違いがある。ユニットAは黒曜石76.3%（内腰岳系53.9%）、ハリ質安山岩21.7%である。ユニットBは黒曜石94.9%（内腰岳系72.1%）、ハリ質安山岩5.1%、ユニットCは黒曜石91.4%（内腰岳系48.6%）、ハリ質安山岩2.9%と両者は黒曜石の割合が極めて高い。ユニットDは黒曜石45.9%（内腰岳系21.6%）で、ハリ質安山岩は35.1%と最も高い。ユニット外の資料もこれと近い割合を示す。定形石器の形態的特徴においてもユニットB・Cは九州的と言え、石材も西北九州との関係が強い。これと最も遠いのがユニットDと言えよう。ユニットAは中間的性格であり、ハリ質安山岩などの豊富な定形石器と石器製作時に生じた黒曜石製砕片を併せ持っている。遺物総数も最も多く、中心的な空間と言える。しかも道具の種類も揃っており、ユニットAを中心に多様な行動が行われていたと考えられる。

本石器群はこれを残した人類集団の行動全体をカバーするものでなく、その多くが欠落している。まず第1点は、石器素材製作活動が行われていない。定形石器製作は黒曜石を中心に、一部ハリ質安山岩でも実施されているが、その素材（剥片）は以前製作した場所より持ち込んでいるが、さほど多い量でないと推定される。第2点は石皿のような重量感のある大形石器が存在せず、土器の数も極めて少ない点である。これは生活が長期に及ぶ住居址的機能がないことを示しており、集落の存在を示すような、定住的要素が少ないのである。狩猟具が多い点から、狩猟活動に伴うキャンプ・サイトと考えられる。しかし、ユニットAとユニットDには土器が認められ、微細使用痕や線状痕のある石器が検出されており、スクレーパーも纏まって出土していることから、道具製作や食事などのキャンプに係わる一般的行動は行われている。上流部に所在する、58次調査地点Ⅳ層と類似する行動が想定されるのである。



第８図　石材別の石器一覧（縮尺 1/2）

② 出土石器の特徴（第９～20図）

617点中195（2点の接合資料含む）点を図示した。石鏃・石槍・楔形石器・スクレーパー類は全点、加工痕･使用痕ある石器､剥片はその大半を図化している。砕片は､比較的大形のものを中心に図示した。これにより、石器群の全体像が理解できると思われる。後述するが、使用痕の観察から砕片の多くが人類によって用いたと考えられ、小片ではあるが何らかの役割を担っているのである。

a **石鏃**（1～17 ユニットA、18～20 ユニットB、21・22 ユニットC、23 ユニットD）

6・13・16～19・21・22は腰岳系の黒色黒曜石、7・15は灰色の磨りガラス状を呈する淀姫系黒曜石､その他はハリ質安山岩である。全ての資料が､比較的丁寧な細調整により薄く仕上げている。1（推定全長5㎝以上）に代表されるように、大形品が多い。10のような小形品でも全長2㎝を超える。3と14は中央部に研磨を施しており、薄くすることを意図している。破損品が多いのは、このためかも知れない。九州では、最も古期段階の部分磨製石鏃である可能性が指摘できる。他地域の人類集団より、その技術を習得したと考えられる。

脚部に深い抉りを入れ、U字状を呈するものが大半を占め、細身のものと幅広製品がある。細身のものは、脚部の尖るもの（3・5）と丸味を帯びるもの（1・2・4）がある。幅広のものは、下部が幅広で丸味を帯びるように調整を加えている。細長品に比べ抉りはやや浅いが、同じく脚部の先端が尖るもの（6・7）と丸味を帯びるもの（23）がある。これらは極めて特徴的な形状であり、九州には類例のない資料と言える。14も抉りがU字状を呈するが、形状は他と異なり、極めて大形である。独特の形状を呈し、完形である点を考慮すると、実用的なものではないのかもしれない。本遺跡で完形品はこれ以外認められず、大きく欠損したものが大半を占める。8～10も、U字状抉りをもつ石鏃の破損品または失敗品と考えられる。これらは小形品で、大形の抉りU字状石鏃とは異なる。対象動物が違うのかも知れない。

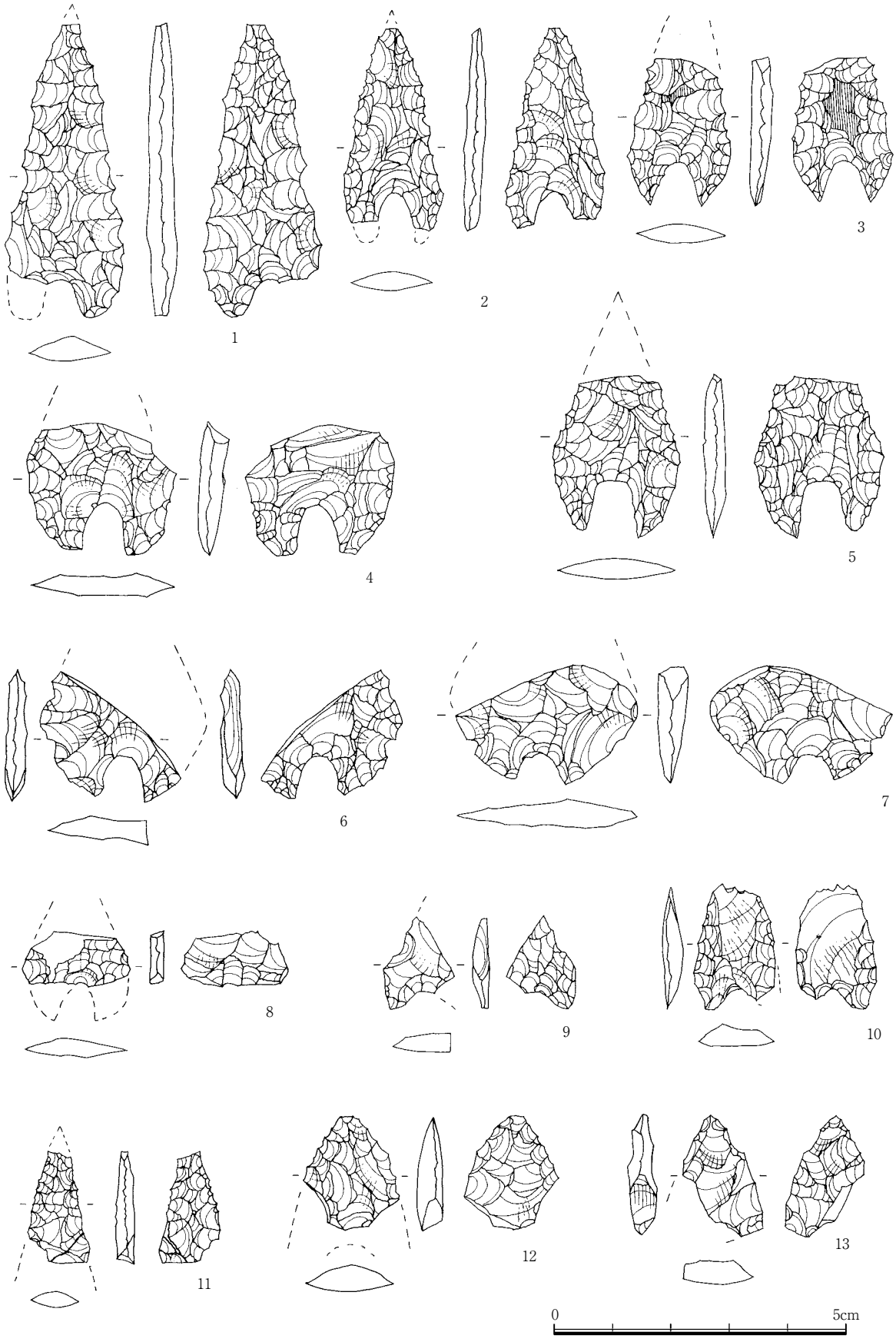
20は抉りのない小形の石鏃で、北部九州の草創期末に一般的な形態と同じと思われるが、部分品のため詳細は明らかでない。15・21・22は、浅い抉りを入れた特徴的な形態である。しかし、いずれも破損品のため明確には言えないが、北部九州草創期末を特徴づける浅い抉りを入れた三角鏃とは異なるようであり、宮崎県の隆帯文土器と共伴する石鏃と類似しているように思える（清武町教育委員会2005、宮崎県埋蔵文化財センター2006）。

11～13、16～19は部分品のため、全体の形状は明らかでない。ただし、細身の先端部（11）、やや幅広の先端部（12・13）を持つ石鏃は、U字状の抉りが施されていた可能性がある。側辺部片は、丸味を帯びるもの（17）と直線状のもの（19）がある。頭部片（18）はやや丸味を帯びている。

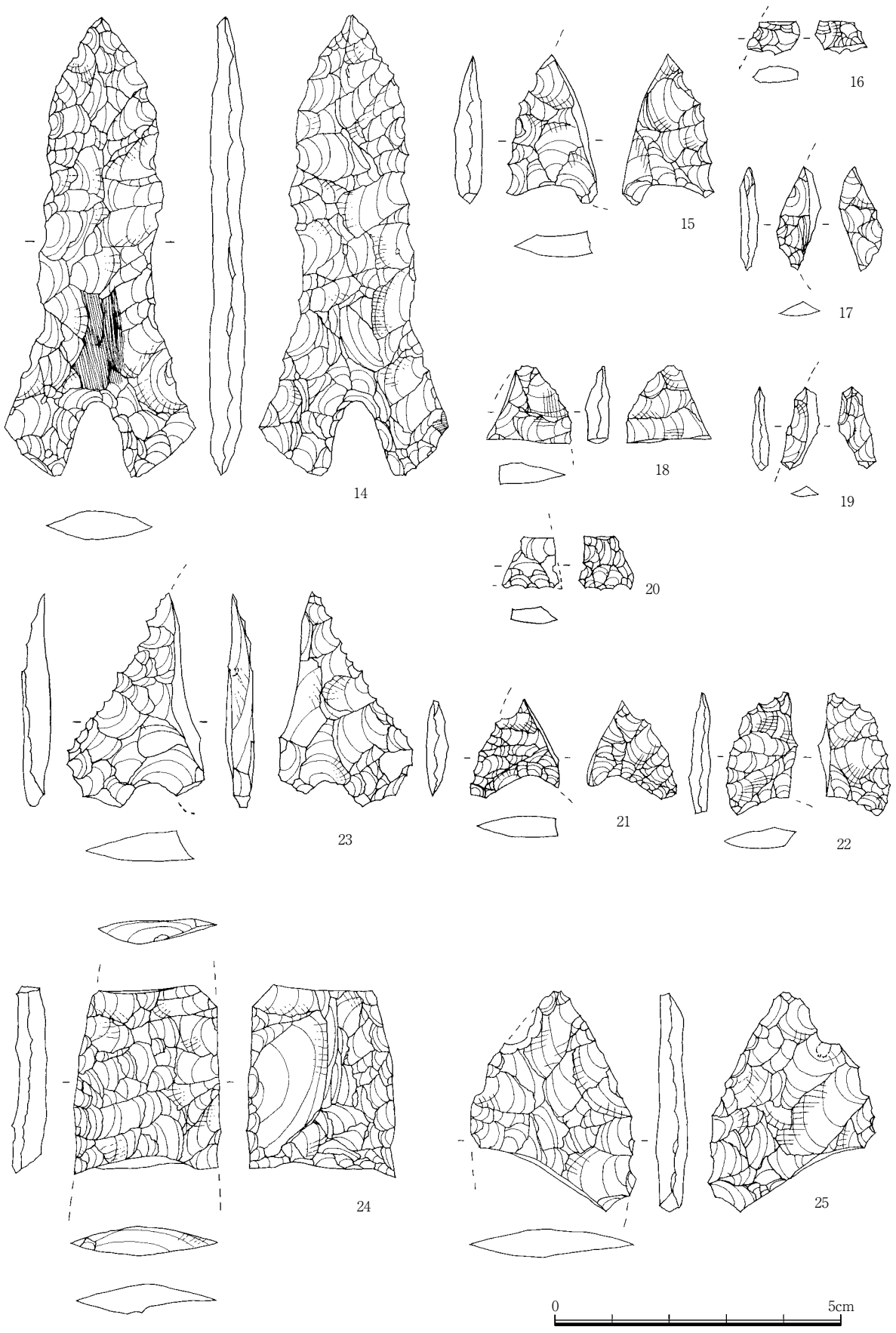
前述のように、本遺跡の石鏃は大形品に特徴がある。現在確認される資料による限り、福岡地方の縄文草創期終末から早期前半の石鏃は小形品が主体を占めている。大形品は押型文土器文化期の鍬形鏃の登場を待たねばならない。また、その形態的特徴も九州では他に例がないようである。よって、本石器群の時間的位置づけは極めて困難な状況にあると言えよう。

b **尖頭器**（24～26 ユニットA、27 ユニット外）

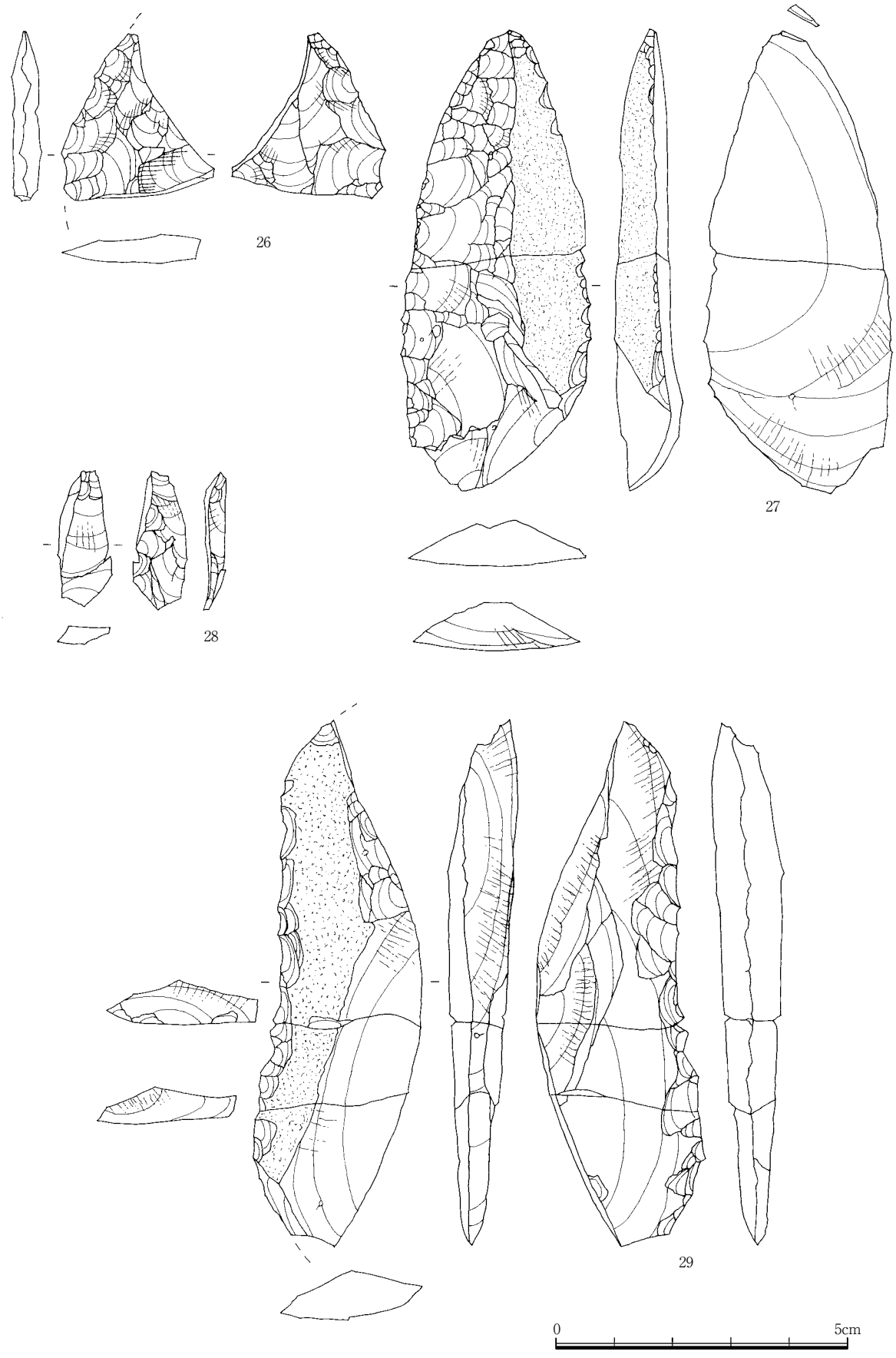
両面加工品3点、片面加工品1点（接合資料）が検出されている。25・26は淀姫系黒曜石、他はハリ質安山岩である。いずれも薄く仕上げているのが特徴と言え、比較的丁寧な細調整が施されている。24は細身製品の中間部で、両端が折断されている。背面の大きな剥離は、加撃に失敗したものと思われる。25は先端部、26は側辺部であるが、24に比べるとやや幅広と思われる。27は正面左側辺よりの加撃で自然面を取り除いているが、右側辺は微細な加工に止まっている。製作中、中央部で折断したため、途中で製作放棄されたと思われる。



第9図　出土石器実測図（D－10・11　①）



第 10 図　出土石器実測図（D － 10・11　②）



第 11 図　出土石器実測図（D － 10・11　③）

北部九州では、松木田遺跡などより尖頭器（石槍）が纏まって検出されているが、厚手のものが主体であり、形態的に異なっている（米倉 2001）。完形品がないため明確ではないが、このような尖頭器は九州の伝統の中には見当たらないように思える。

c　**楔形石器**（28　ユニットA）

上下両面（上端は正背両面）に調整痕があり、楔形石器の範疇にあると考えられる。小形で薄い製品である。前述のとおり、両側面に樋状剥離痕は観察出来ない。北部九州の縄文草創期・早期に発達する楔形石器は、両側辺への樋状剥離によって特徴づけられ、これとは一線が画されるのである。ハリ質安山岩製。

d　**スクレーパー類**（29 ～ 34　ユニットA、35　ユニットB、36 ～ 38　ユニットD、39　ユニット外）

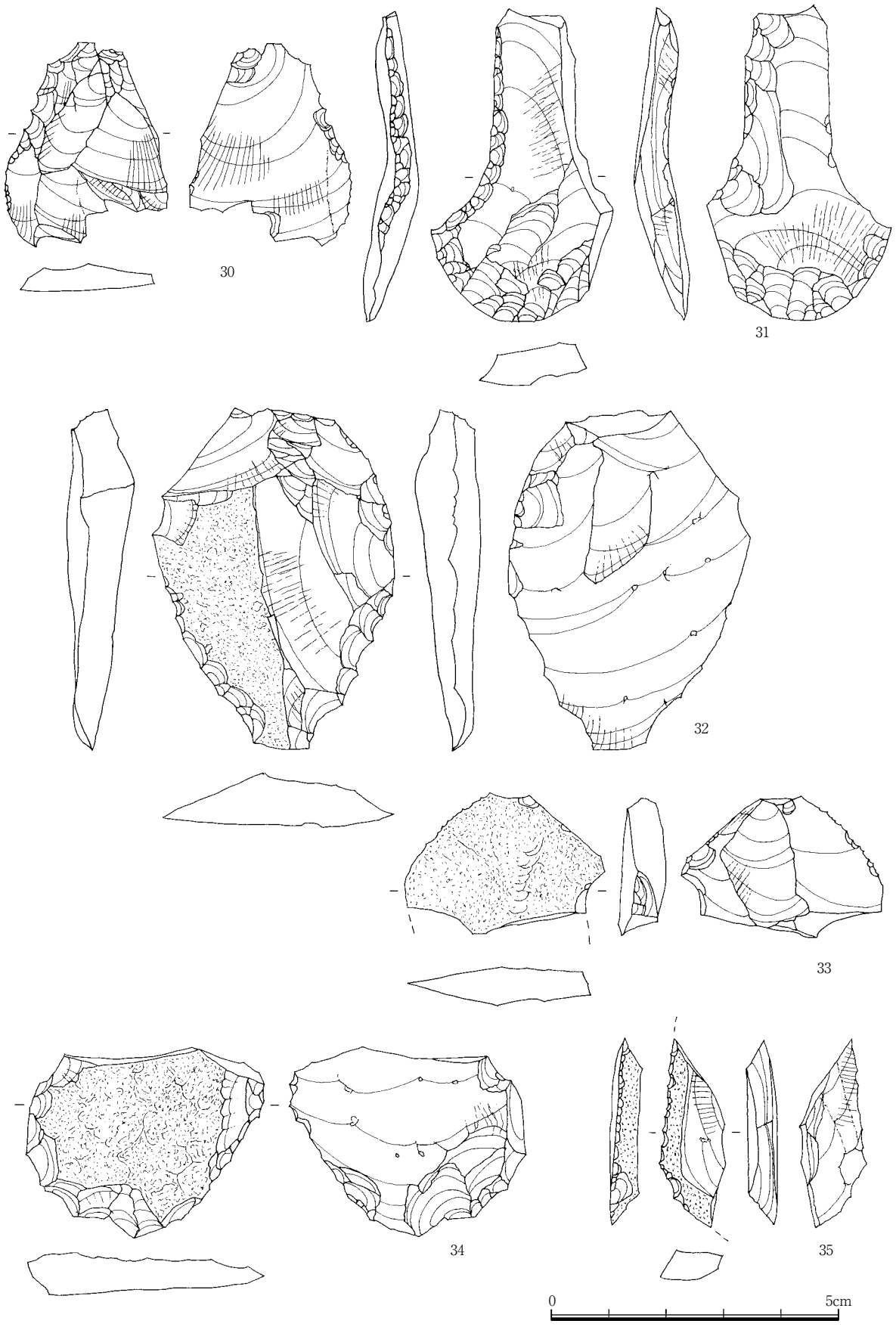
30・35 は腰岳系黒曜石、36 は針尾島中町黒曜石、29・31 ～ 33 はハリ質安山岩、34 は流紋岩、37・39 は安山岩、38 は花崗岩である。各ユニットに跨って、多様なスクレーパー類が検出されている。29 は左側辺正背両面に斜め細調整が認められるが、右側辺は折断されている。3 分割されていることからも、製作中の失敗品と考えられる。両面に調整を施し、細長い形状をしていることから、尖頭器を意図していた可能性もある。30 は幅広不定形剥片を素材とし、左側辺正面に斜め細調整を施している。背面にも調整痕が認められる。31 は斜め細調整と平坦細調整により形状を整えた特徴的なスクレーパーであるが、右側面は折断されている。平坦細調整は正背両面の広範囲に及ぶが、斜め細調整は左側辺のみに施されている。ヘラ状の形状を意図していると思われるが､北部九州には類例のない形態である。斜め細調整による左側面はサイド・スクレーパーとし、下端部は両面に平坦細調整を施し、半円形状に仕上げ、円形刃部スクレーパーを意図しているように思える。32 は整った幅広剥片の両側辺に斜め細調整を施した、サイド・スクレーパーと思われる。先端が尖っているため、尖頭器を意図していた可能性がある。

33 は下半部が欠損しているため全体の形状は明らかでないが、連続的な斜め調整を施しているものと思われる。正面は自然面に覆われた不定形の製品といえる。34 は両面に粗い加工を施した円形刃部のスクレーパーである。上半部は折断している。35 は左側辺に細かな加工痕が認められる。右側辺は折断されており、全体の形状は不明であるが、サイド・スクレーパーの一種であろう。36 は 32 のように、幅広剥片の両側辺に細調整を加え、尖頭状に仕上げている。尖頭器というよりも、サイド・スクレーパーとすべきであろう。37 は不定形剥片の正面や背面に調整を加えた厚手のサイド・スクレーパーである。38 は不定形剥片の下端部に粗い調整痕を施した不定形スクレーパーである。39 は折断品であるが、左側辺正面に明確な斜め細調整を施したサイド・スクレーパーである。背面には平坦細調整が認められる。

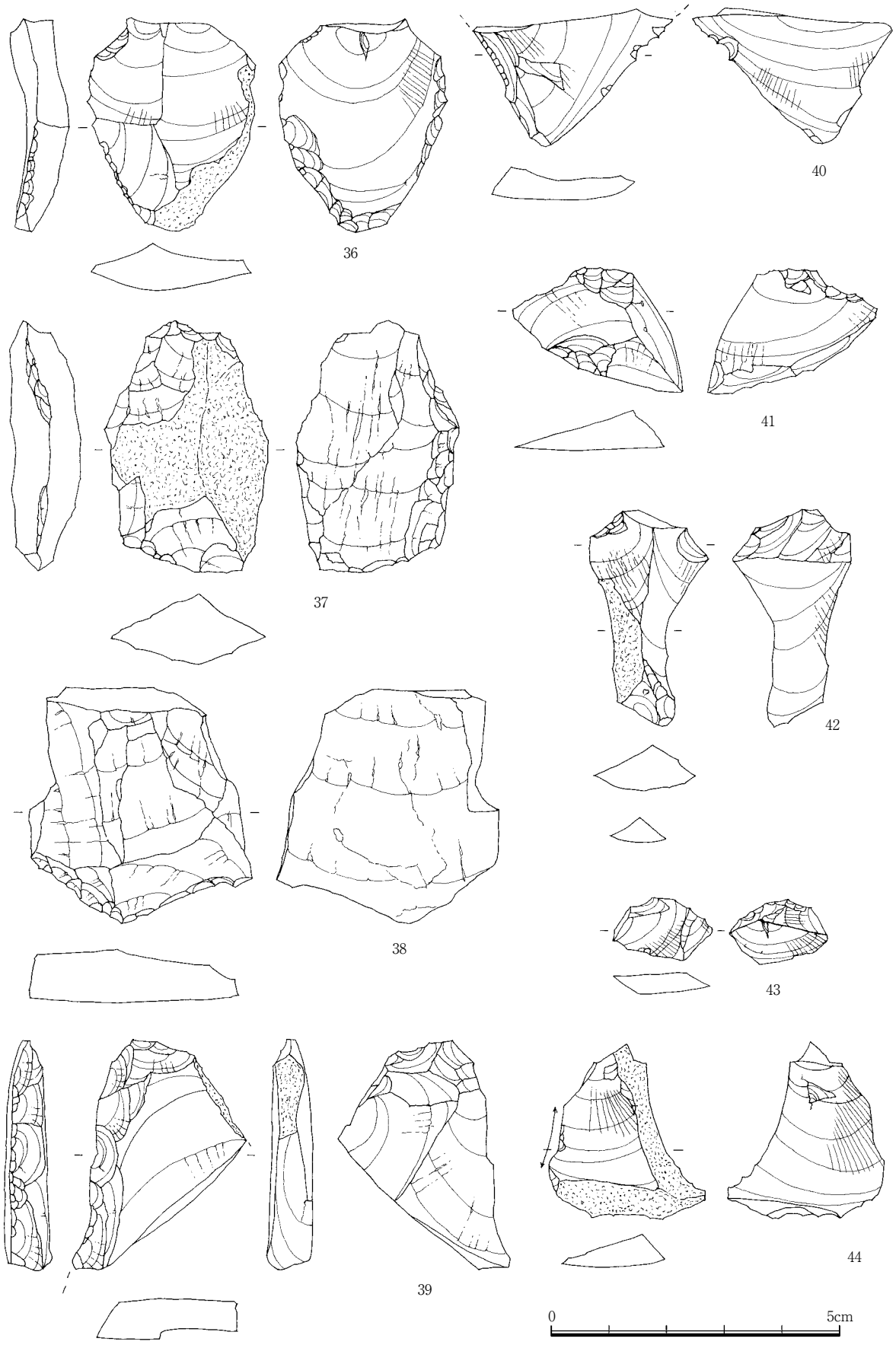
多種の石材で多様な形態の石器を作っているが、寒冷期に発達する特徴的な形態の円形刃部スクレーパーは認められない。円形スクレーパーは、大原D遺跡 14 地区に代表されるように、西北九州の黒曜石を素材とする周辺加撃石核より剥離された剥片に加工を加えた、極めて統一的な形態を有している（池田ほか 2003、大森編 2016）。この石器や大原D・元岡型スクレーパーが全く認められず、側辺に細調整を加えたサイド・スクレーパーが主体となっている。この種のスクレ―パー類は温暖な時期に特徴的に組成されており（萩原 2016）､円形刃部スクレーパーとは異なる時空間に発達する器種といえる。

e　**加工痕ある石器**（40・41　ユニットA、43　ユニットB、42　ユニット外）

40 と 43 は腰岳系黒曜石、他はハリ質安山岩である。40 は幅広剥片の左側辺に調整痕が認められる。折断されている上半部にも調整が施されていれば、サイド・スクレーパーとすべきであろう。顕著な使用痕（線状痕）が認められる。41 は小形剥片（砕片）に部分的な調整痕が認められる。42 は縦長状



第 12 図　出土石器実測図（D － 10・11　④）



第 13 図　出土石器実測図（D － 10・11　⑤）

剥片の上下端部に部分的加工痕が認められる。43 は加工痕の認められる砕片で、調整時に生じた部分品と思われる。

f　**使用痕ある石器**（44 ～ 51　ユニットＡ、52 ～ 54　ユニットＢ、55　ユニットＣ、56 ～ 61　ユニットＤ、62　ユニット外）

46・47 は淀姫系黒曜石、45・60 はハリ質安山岩、他は腰岳系黒曜石である。44・45 は比較的大きな剥片で、使用痕と考えられる刃こぼれが認められる。46・47・51 は小剥片に部分的な微細剥離痕（使用痕）が観察される。48 ～ 50 は砕片に細かな使用痕が施されている。

54 は比較的小形の剥片に微細な使用痕が認められるものである。52・53 は小砕片に微細剥離痕が認められる資料である。55 は小剥片に刃こぼれが認められる。

56・57 は自然面を残す比較的大きな不定形剥片で、連続する微細剥離痕が認められる。58 ～ 61 は小剥片に細かな使用痕が認められる資料である。62 も、小形剥片を素材とする同様のものである。

砕片状の小形品に使用痕が認められた。これは元岡・桑原遺跡群 58 次調査地点などでも確認されており（大森編 2016）、一般的な事例と思われる。佐世保市福井洞窟でも、細石刃や小砕片に使用痕が認められる（桝田編 2016）。しかしその用途は明らかにされたとは言い難く、今後の研究に委ねられている。

g　**剥片**（63 ～ 73　ユニットＡ、74　ユニットＢ、75 ～ 79　ユニットＤ、80　ユニット外）

63 は流紋岩、64・72・76・79 は腰岳系黒曜石、68・71 は淀姫系黒曜石、他はハリ質安山岩である。63 は幅広の不定形剥片で、薄く剥離している。64･68･69･71･74･79･80 は一見縦長状の不定形剥片で、正面の剥離痕は多方向であるものが多い。65 ～ 67・70・72・73・75 ～ 78 は周辺加撃石核（求心状剥離石核）から剥離された、幅広不定形剥片である。

本遺跡で検出された少数の剥片には多方向からの剥離痕が認められ、その大部分は周辺加撃石核から生産されたものと思われる。寒冷期（ヤンガー・ドリヤス期）の大原Ｄ遺跡 14 地区（池田ほか 2003、大森編 2016）の主体的な石核は周辺加撃石核（求心状剥離石核）であり、主に円形掻器や石鏃の素材生産のため開発されたものと考えられる。しかし本遺跡は、黒曜石製の刃部円形掻器は組成されず、石鏃の多くは大形であるため、大原Ｄ遺跡 14 地区とは異なる石器の素材に利用されていたと考えられる。

h　**砕片**（81 ～ 145　ユニットＡ、146 ～ 172　ユニットＢ、173 ～ 182　ユニットＣ、183 ～ 189　ユニットＤ、190 ～ 192　ユニット外）

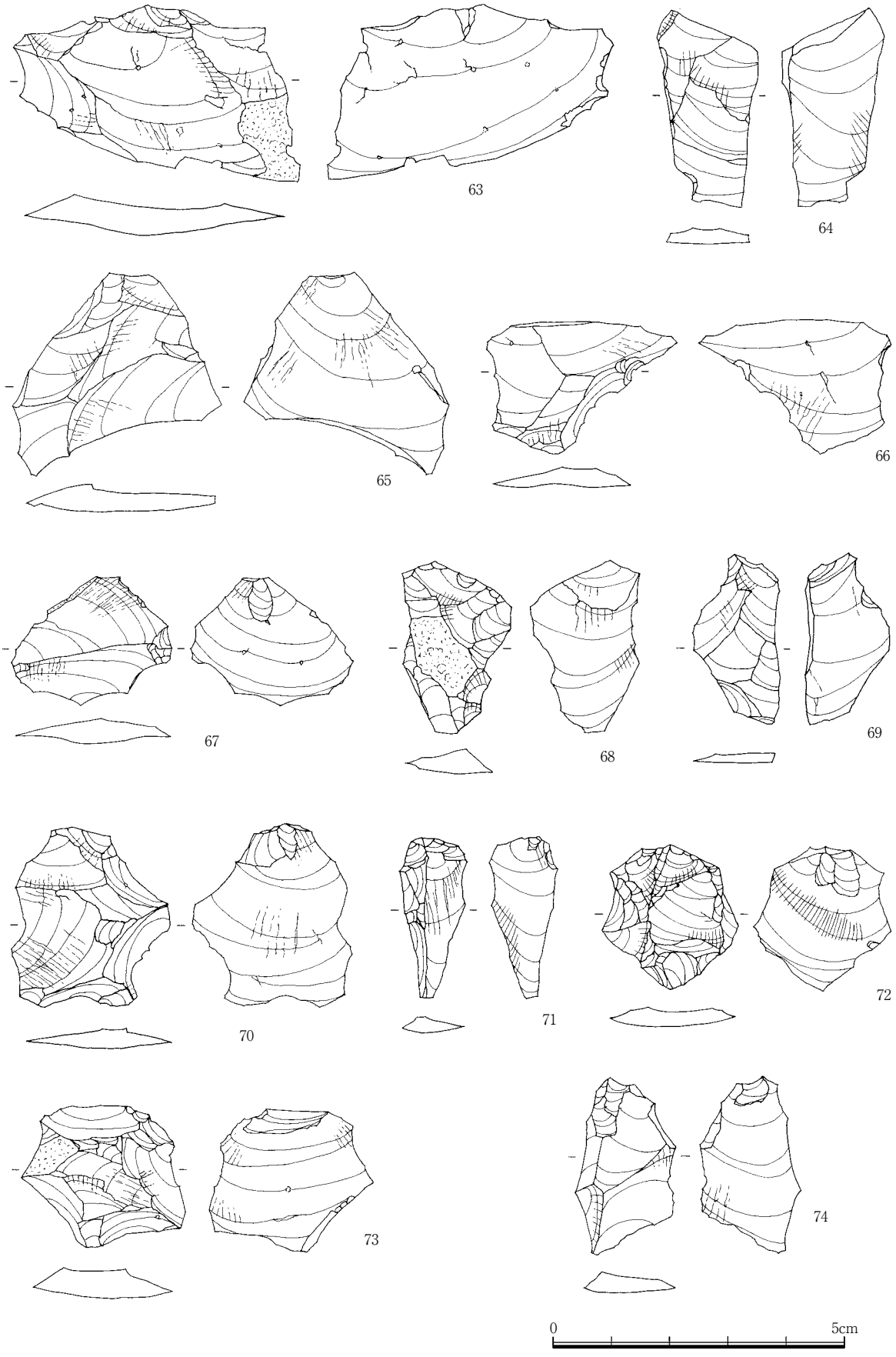
これらは、定形石器製作時に生じた砕片と思われる。自然面を大きく残す資料（84・89 など）のあることから、石器素材製作時に生じた可能性もある。加撃方向が一定のもの（88 など）もあるが、その多くは多方向の加撃が確認される。これは剥片の傾向と同様であり、意外と石核整形時に生じたものが多いのかも知れない。

とはいえ、132 ～ 145 のように石鏃などの製作時生じた小形品が大半を占め、これらは腰岳系黒曜石の割合が高い。その中には、169 のように底面をもつブランティング状の資料もある。やや大形であるが、159 も同様のものと言えよう。

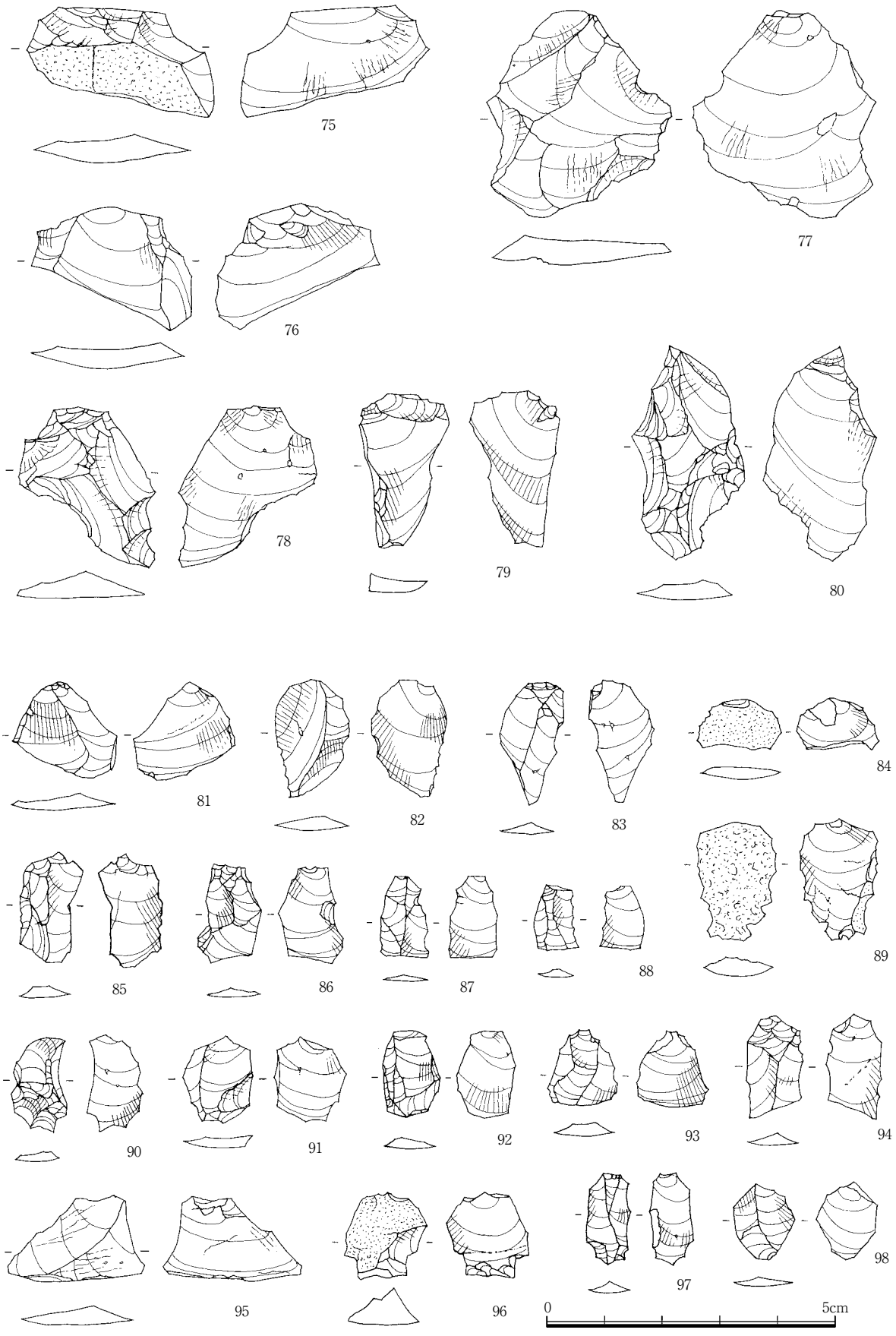
ユニットＤは大形の砕片（183 など）が多く、石器として使用されていた可能性も否定できない。ユニットＡにも大形のもの（99 ～ 106）があるが、その割合は低い。石材は、ハリ質安山岩は比較的大きなものが多く、腰岳系黒曜石は極小の砕片が多い傾向にある。ユニットＤは石器製作関連の行動を伴わない空間と考えられ、ここに存在する小形の石片（砕片）は当人類集団によって、食事等に係わって使用されていたと想定される。

その他実測した資料の詳細や石材等については、第３～５表の石器観察表を参照いただきたい。

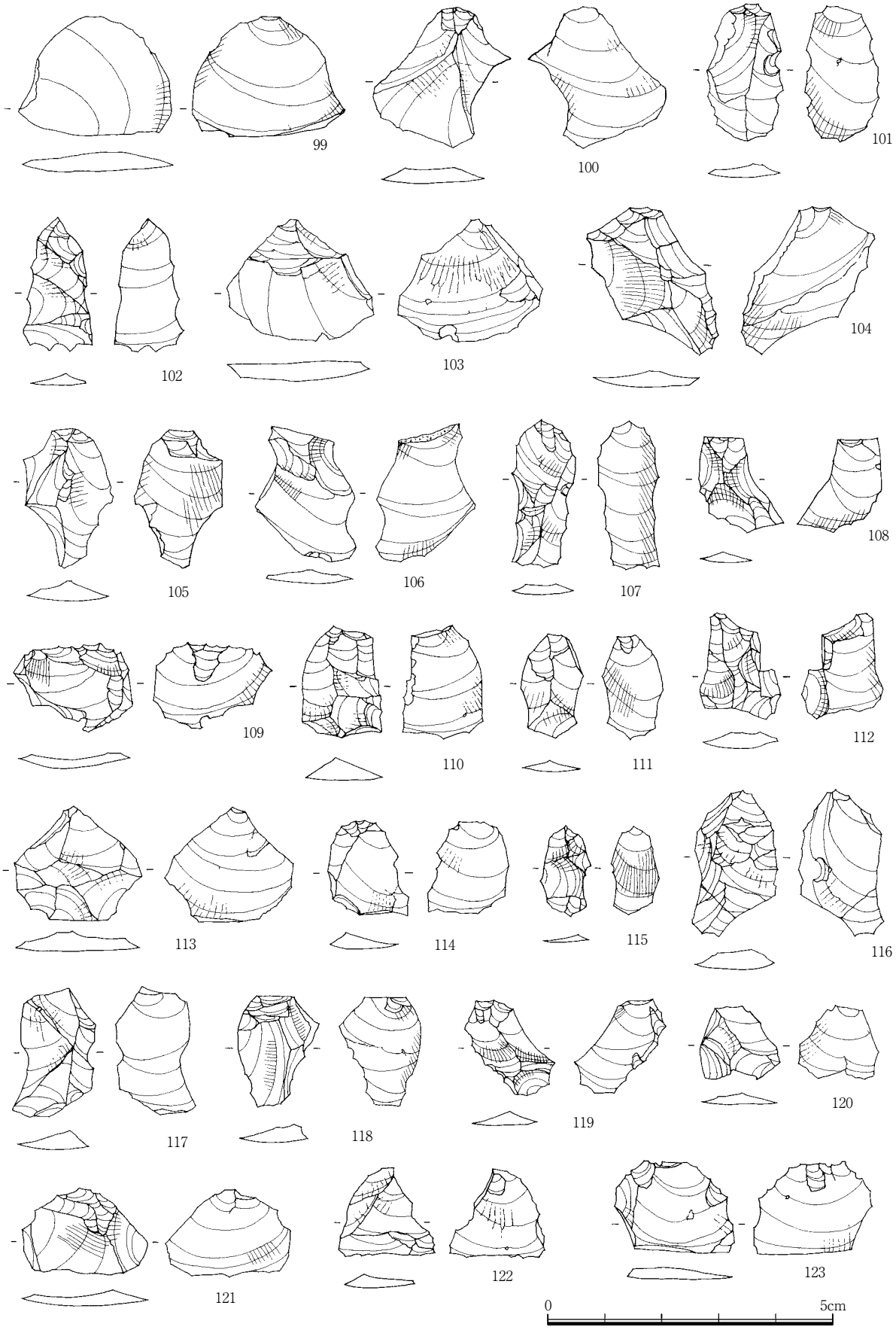
第 14 図　出土石器実測図（D － 10・11　⑥）



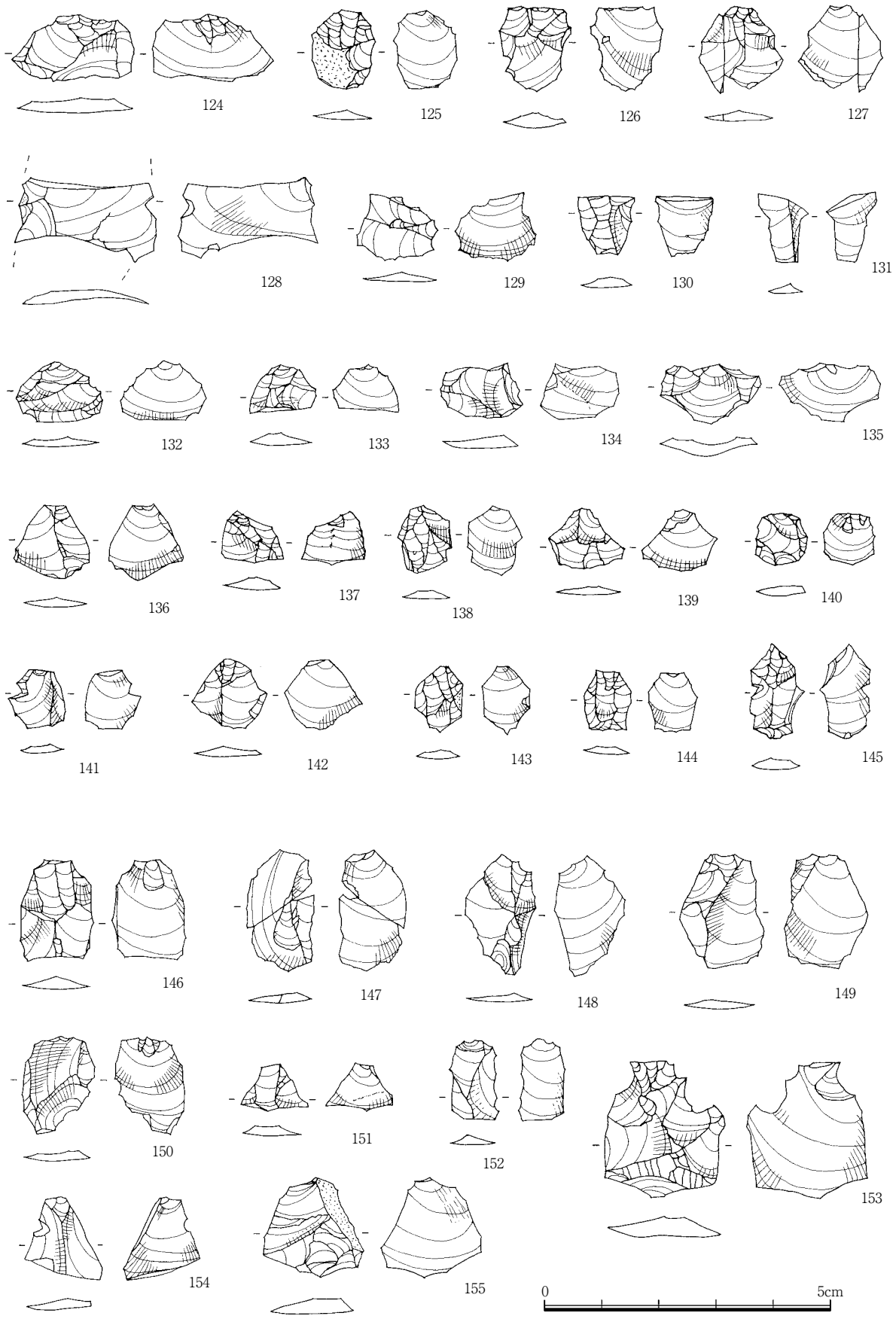
第 15 図　出土石器実測図（D － 10・11　⑦）



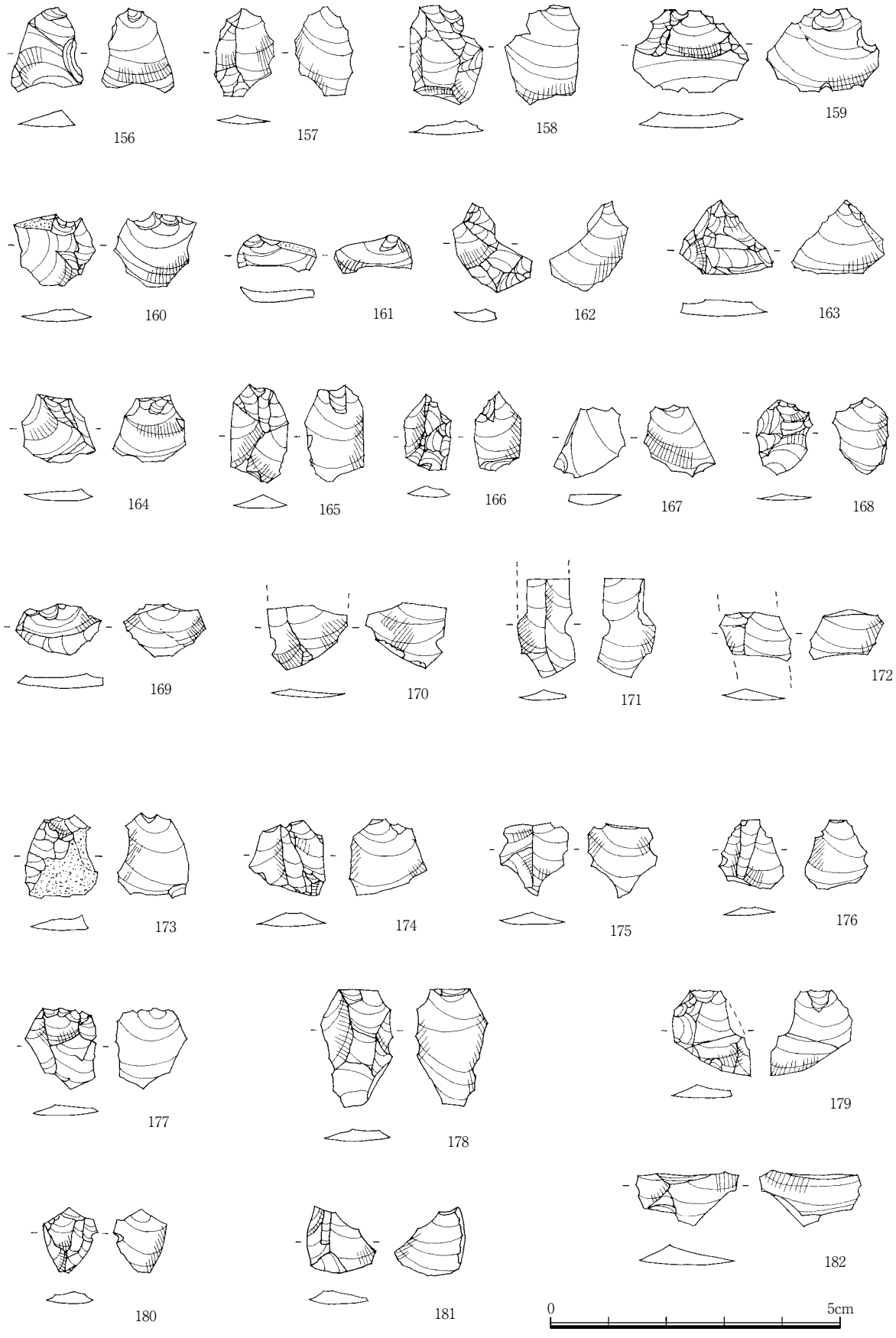
第 16 図　出土石器実測図（D － 10・11　⑧）



第 17 図　出土石器実測図（D － 10・11　⑨）

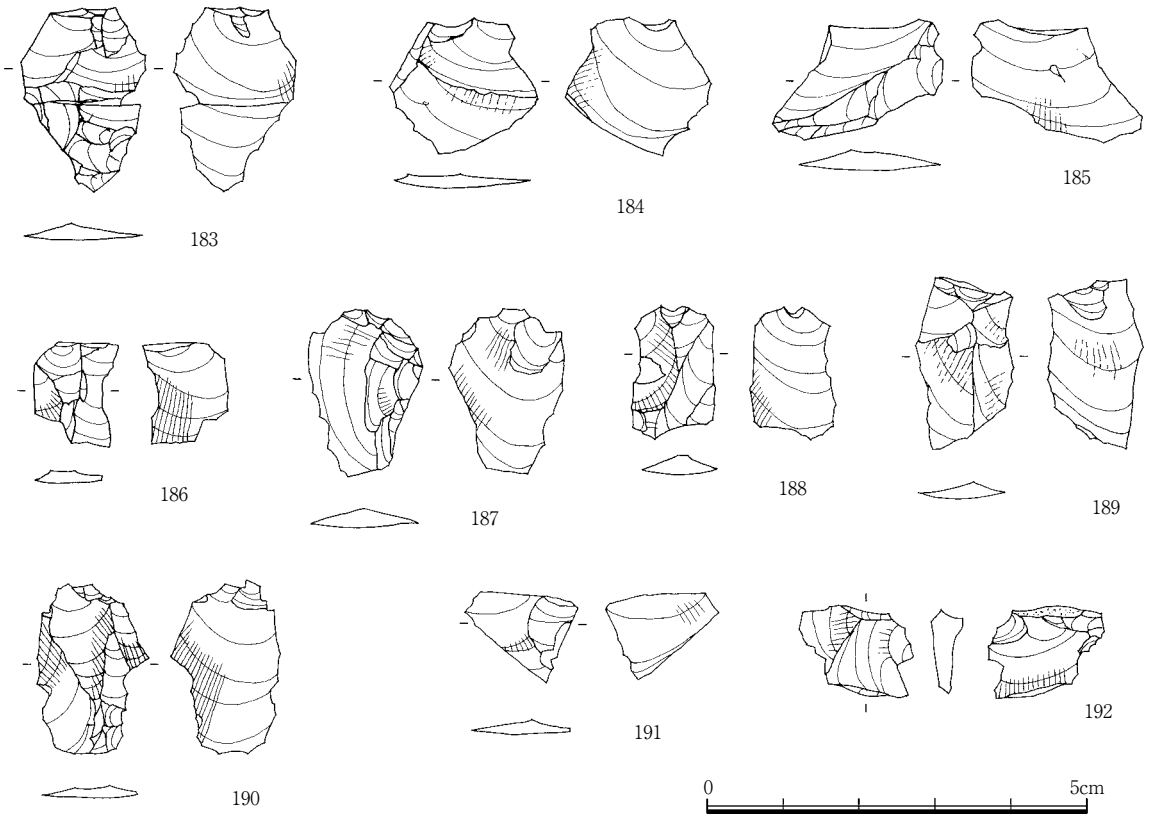


第 18 図　出土石器実測図（D － 10・11　⑩）



第 19 図　出土石器実測図（D－10・11　⑪）

引用・参考文献（編著者五十音順）
池田祐司ほか 2003『大原Ｄ遺跡群４―大原Ｄ遺跡群第４次・第５次・第６次調査報告　縄文時代編―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 741 集
大森麻衣子編 2016『元岡・桑原遺跡群 26―第 58 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1301 集
清武町教育委員会 2005『上猪ノ原遺跡第５地区』（清武町埋蔵文化財調査報告書第 19 集）
萩原博文 2016「大原Ｄ・元岡型スクレーパーについて」（大森麻衣子編『元岡・桑原遺跡群 26―第 58 次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1301 集）
宮崎県埋蔵文化財センター 2006『東畦原第１遺跡（三・四次調査）』（宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第 128 号）
桝田祐三編 2016『福井洞窟発掘調査報告書』（佐世保市教育委員会）
米倉秀紀 2001『松木田遺跡群２―第３次下層（縄文時代早期）遺物編―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 686 集
米倉秀紀 2012『元岡・桑原遺跡群 21―第 42 次調査の報告１―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1174 集



第 20 図　出土石器実測図（Ｄ－ 10・11　⑫）

表３　石器観察表（第 52 次調査地点）　①

番号	グリッド	取上	レベル	ユニット	器　種	石　材	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ（g）	備　考
1	d6	43	56	A	石鏃	ハリ質安山岩	5.00	2.00	0.42	3.58	大形で抉りＵ字状　先端・片脚欠
2	d6	109	63	A	石鏃	ハリ質安山岩	3.38	1.61	0.34	1.56	脚部の抉りＵ字状　ほぼ完形
3	e6	467	52	A	石鏃	ハリ質安山岩	2.45	1.67	0.32	1.25	部分磨製　先端部欠　抉りＵ字状
4	c5	517	79	A	石鏃	ハリ質安山岩	2.25	2.54	0.43	1.90	先端部折断　抉りＵ字状
5	d6	372	61	A	石鏃	ハリ質安山岩	2.71	2.14	0.32	1.72	先端部欠損（折断）　抉りＵ字状
6	d5	347	68	A	石鏃	透明黒曜石	2.32	2.45	0.31	1.06	右側辺折断　失敗品か　抉りＵ字状
7	d5	495	57	A	石鏃	淀姫系黒曜石	2.00	3.07	0.46	2.20	先端部欠　失敗品　抉りＵ字状
8	e6	436	54	A	石鏃	ハリ質安山岩	0.85	1.78	0.25	0.45	先端・脚部欠
9	d5	345	63	A	石鏃	ハリ質安山岩	1.46	1.16	0.27	0.36	脚部片
10	d5	361	62	A	石鏃	ハリ質安山岩	2.05	1.37	0.32	0.83	両面に第一次剥離面を残す
11	e6	448	49	A	石鏃	ハリ質安山岩	1.92	1.01	0.27	0.41	先端・脚部欠損
12	d6	287	58	A	石鏃	ハリ質安山岩	1.97	1.60	0.41	1.19	先端部片
13	d5	327	53	A	石鏃	腰岳系黒曜石	2.10	1.23	0.45	0.76	脚部欠損
14	d6	78	71	A	石鏃	ハリ質安山岩	7.96	3.22	0.55	9.61	抉りＵ字状　大きさ重量的には石槍の範疇
15	d5	579	58	A	石鏃	淀姫系黒曜石	2.44	1.54	0.38	1.03	右側辺欠損（折断）
16	e6	213	37	A	石鏃	黒色黒曜石	0.48	0.85	0.29	0.14	石鏃の一部分　両面に加工痕
17	e6	219	42	A	石鏃	黒色黒曜石	1.69	0.70	0.22	0.21	側辺の一部
18	d6	600	67	B	石鏃	黒色黒曜石	1.37	1.51	0.34	0.48	側辺と下部が折断
19	d7	163	68	B	石鏃	腰岳系黒曜石	1.42	0.50	0.26	0.10	側辺の一部
20	d6	265	76	B	石鏃	ハリ質安山岩	0.86	0.97	0.33	0.27	基部（脚部片）
21	d8	222	76	C	石鏃	黒色黒曜石	1.69	1.54	0.35	0.59	右側辺折断
22	d7	255	94	C	石鏃	腰岳系黒曜石	2.06	1.24	0.33	0.62	右側辺欠損
23	b4	16	137	D	石鏃	ハリ質安山岩	3.66	2.32	0.43	2.63	右側辺欠
24	e5	478	51	A	尖頭器	ハリ質安山岩	3.29	2.52	0.56	4.94	折断品の中間部　大きな剥離は階段状
25	d6	619	78	A	尖頭器	淀姫系黒曜石	3.85	2.89	0.47	3.81	薄手幅広品　基部側は折れて欠損
26	d6	106	61	A	尖頭器	淀姫系黒曜石	2.91	2.64	0.48	2.50	右側面二ヶ所折断
27	a5 a5	373 374	136 130	外 外	尖頭器	ハリ質安山岩	7.85	3.24	0.79	19.99	先端部欠　接合　調整痕は正面の一部に止まる　片面加工尖頭器
28	d5	505	61	A	楔形石器	腰岳系黒曜石	2.27	0.91	0.24	0.60	上部両面に調整痕
29	d5 d5 d5	325 335 358	52 57 59	A A A	スクレーパー	ハリ質安山岩	9.00	2.90	1.01	19.95	接合例　右側辺折断 斜細調整と平坦細調整が認められる 尖頭器の可能性もある
30	d6	67	64	A	スクレーパー	腰岳系黒曜石	3.67	2.82	0.61	3.68	線状痕が認められる
31	e5	475	45	A	スクレーパー	ハリ質安山岩	5.42	3.12	0.55	8.13	斜細調整・平坦細調整を施す　一部抉状を呈す
32	d5	484	75	A	スクレーパー	ハリ質安山岩	5.85	4.14	1.02	21.44	両側縁に斜細調整を施し、先端尖る
33	d6	41	60	A	スクレーパー	ハリ質安山岩	2.46	3.51	0.71	5.24	自然面を残す　角礫使用
34	d5	326	52	A	スクレーパー	流紋岩	3.34	4.07	0.69	10.67	自然面を残す　幅広剥片使用
35	d7	208	88	B	スクレーパー	腰岳系黒曜石	3.21	1.12	0.51	1.48	右側辺折断　線状痕が認められる
36	b5	20	128	D	スクレーパー	針尾中町黒曜石	3.73	2.96	0.72	6.74	線状痕が認められる
37	c4	521	83	D	スクレーパー	安山岩	4.29	2.78	1.14	12.36	正面に自然面を残し、平坦細調整を用いる
38	b4	13	127	D	スクレーパー	花崗岩	4.01	3.77	1.03	19.38	斜細調整痕が認められる
39	c6	27	102	外	スクレーパー	安山岩	4.00	3.02	0.71	7.44	尾部欠（折断）　左側辺に斜め細調整を施す
40	d5	352	58	A	加工痕ある石器	黒色黒曜石	2.36	3.37	0.74	2.80	線状痕が認められる
41	d5	329	52	A	加工痕ある石器	ハリ質安山岩	2.13	3.01	0.63	3.06	尾部欠　幅広剥片使用
42	c6	31	105	外	加工痕ある石器	ハリ質安山岩	3.75	1.98	0.91	3.13	連続する微細剥離痕あり
43	d7	138	66	B	加工痕ある石器	黒色黒曜石	1.07	1.68	0.45	0.47	調整時の失敗品　線状痕あり
44	e6	392	53	A	使用痕ある石器	腰岳系黒曜石	2.98	2.66	0.62	2.91	自然面を大きく残す　線状痕あり
45	d6	628	55	A	使用痕ある石器	ハリ質安山岩	2.96	3.40	0.24	2.00	鋸歯状微細剥離痕　線状痕あり
46	d5	492	67	A	使用痕ある石器	淀姫系黒曜石	2.06	1.37	0.25	0.74	鋸歯状微細剥離痕あり
47	e5	474	41	A	使用痕ある石器	淀姫系黒曜石	1.84	1.21	0.17	0.28	左側縁の一部に微細剥離痕
48	d6	295	53	A	使用痕ある石器	腰岳系黒曜石	1.00	1.08	0.23	0.21	微細剥離痕と線状痕あり
49	d5	493	69	A	使用痕ある石器	黒色黒曜石	1.70	1.37	0.22	0.37	連続する微細剥離痕あり
50	d5	344	65	A	使用痕ある石器	腰岳系黒曜石	1.76	1.01	0.20	0.28	微細剥離痕・線状痕あり
51	d6	65	65	A	使用痕ある石器	腰岳系黒曜石	1.72	2.54	0.34	1.00	貝殻状剥片素材　線状痕あり
52	d7	212	78	B	使用痕ある石器	腰岳系黒曜石	0.83	1.53	0.43	0.32	プランティング・チップ状　線状痕あり
53	d6	130	75	B	使用痕ある石器	黒色黒曜石	1.57	0.91	0.17	0.19	微細剥離痕・線状痕あり
54	d7	136	61	B	使用痕ある石器	腰岳系黒曜石	1.91	1.92	0.63	1.66	線状痕あり　自然面残す
55	d7	197	95	C	使用痕ある石器	腰岳系黒曜石	2.51	1.87	0.26	0.78	微細剥離痕・線状痕あり
56	b4	14	134	D	使用痕ある石器	松浦黒曜石	3.11	2.97	0.68	4.09	連続する微細剥離痕・線状痕あり
57	b4	10	118	D	使用痕ある石器	松浦黒曜石	3.24	3.24	0.62	7.18	細かな刃こぼれ、線状痕あり
58	b5	18	123	D	使用痕ある石器	腰岳系黒曜石	2.73	1.60	0.29	0.91	微細剥離痕・線状痕あり
59	c4	558	88	D	使用痕ある石器	透明黒曜石	2.21	1.70	0.24	0.64	微細剥離痕・線状痕あり
60	b4	554	129	D	使用痕ある石器	ハリ質安山岩	2.35	2.22	0.26	1.37	折断剥片の尾部使用
61	b4	6	116	D	使用痕ある石器	黒色黒曜石	1.92	1.09	0.45	0.65	線状痕あり
62	b6	24	132	外	使用痕ある石器	腰岳系黒曜石	1.94	1.18	0.62	0.77	左側辺部欠　線状痕あり
63	d6	86	60	A	剥片	流紋岩	3.09	4.94	0.51	6.90	横長の剥片
64	d6	33	49	A	剥片	黒色黒曜石	3.35	1.73	0.31	1.42	頭部欠
65	d6	310	62	A	剥片	ハリ質安山岩	3.57	3.51	0.42	3.79	幅広剥片の尾部欠

表4　石器観察表（第52次調査地点）　②

番号	グリッド	取上	レベル	ユニット	器　種	石　材	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ（g）	備　考
66	d5	333	57	A	剥片	ハリ質安山岩	2.28	3.19	0.27	1.59	頭部欠
67	d5	357	61	A	剥片	ハリ質安山岩	2.15	2.71	0.37	1.62	貝殻状剥片の尾部欠
68	d5	348	55	A	剥片	淀姫系黒曜石	2.90	1.91	0.35	1.59	打面部欠損
69	d5	340a	61	A	剥片	ハリ質安山岩	2.92	1.51	0.35	1.04	周辺加撃石核から生じた小剥片
70	d5	354	56	A	剥片	ハリ質安山岩	3.07	2.76	0.33	1.97	求心的剥離が認められる
71	e5	470	41	A	剥片	淀姫系黒曜石	2.75	1.04	0.27	0.64	先端が尖っている
72	d6	89	53	A	剥片	透明黒曜石	2.39	2.26	0.45	1.51	貝殻状剥片　線状痕あり
73	d5	339	60	A	剥片	ハリ質安山岩	2.44	2.77	0.54	2.65	幅広剥片　周辺部からの剥離痕あり
74	d7	192	84	B	剥片	ハリ質安山岩	3.01	1.81	0.29	1.19	小形の薄手剥片
75	b5	19	125	D	剥片	ハリ質安山岩	1.84	3.18	0.48	2.34	頭部欠（折断）
76	b4	17	152	D	剥片	腰岳系黒曜石	2.11	2.82	0.56	1.83	幅広の剥片　尾部欠
77	c4	375	－	D	剥片	ハリ質安山岩	3.59	3.12	0.39	3.35	幅広の薄い剥片
78	b4	7	121	D	剥片	ハリ質安山岩	2.80	2.35	0.46	1.95	幅広で、尾部欠
79	b4	11	125	D	剥片	黒色黒曜石	2.62	1.46	0.34	0.91	線状痕あり
80	c6	28	111	外	剥片	ハリ質安山岩	3.65	1.97	0.37	2.17	頭部欠
81	e6	217	43	A	砕片	黒色黒曜石	1.67	1.80	0.24	0.47	尾部欠　線状痕あり
82	e6	627	48	A	砕片	黒色黒曜石	1.97	1.30	0.22	0.49	剥離面調整時の砕片
83	d5	570	50	A	砕片	ハリ質安山岩	2.06	1.08	0.22	0.34	砕片の頭部（尾部折断）
84	d6	249	54	A	砕片	黒色黒曜石	0.85	1.42	0.22	0.23	大きく自然面残す
85	d5	500	58	A	砕片	淀姫系黒曜石	1.87	0.96	0.19	0.31	石器製作時の砕片
86	d6	59	60	A	砕片	黒色黒曜石	1.64	1.11	0.19	0.26	線状痕あり
87	d6	105	65	A	砕片	黒色黒曜石	1.35	0.81	0.13	0.11	細長砕片　線状痕あり
88	d6	273	67	A	砕片	黒色黒曜石	1.07	0.65	0.13	0.09	細石刃状を呈する
89	d6	116	61	A	砕片	松浦黒曜石	1.98	1.36	0.31	0.77	正面全面自然面
90	d5	561	52	A	砕片	黒色黒曜石	1.57	0.91	0.16	0.20	線状痕あり
91	d6	102	57	A	砕片	ハリ質安山岩	1.44	1.14	0.26	0.38	石器製作時の砕片
92	d6	32	46	A	砕片	黒色黒曜石	1.48	1.00	0.17	0.22	線状痕あり
93	d5	341	59	A	砕片	腰岳系黒曜石	1.29	1.14	0.21	0.25	線状痕あり
94	d5	513	61	A	砕片	黒色黒曜石	1.72	0.91	0.19	0.26	線状痕あり
95	d6	629	52	A	砕片	ハリ質安山岩	1.46	2.30	0.25	0.78	横広の砕片　尾部欠
96	d5	351	53	A	砕片	腰岳系黒曜石	1.47	1.35	0.52	0.87	表皮剥離時の破片　自然面残す
97	d6	36	54	A	砕片	黒色黒曜石	1.57	0.71	0.16	0.14	細長の砕片
98	d6	63	65	A	砕片	淀姫系黒曜石	1.27	1.01	0.16	0.17	石器製作時の砕片
99	c5	516	84	A	砕片	淀姫系黒曜石	2.06	2.61	0.33	1.97	尾部が階段状剥離
100	d5	559	50	A	砕片	ハリ質安山岩	2.42	2.41	0.37	1.22	正面に主要剥離面残す
101	d5	512	82	A	砕片	淀姫系黒曜石	2.41	1.27	0.24	0.63	剥離面調整時の薄い砕片
102	d5	574	54	A	砕片	ハリ質安山岩	2.31	1.15	0.14	0.33	剥離面調整時の薄い砕片
103	d6	70	65	A	砕片	ハリ質安山岩	2.13	2.56	0.32	1.74	貝殻状砕片
104	d6	69	67	A	砕片	淀姫系黒曜石	2.54	2.38	0.27	1.08	幅広の砕片
105	d6	81	76	A	砕片	淀姫系黒曜石	2.41	1.53	0.33	0.82	石器製作時の砕片
106	d5	506	58	A	砕片	腰岳系黒曜石	2.45	1.71	0.32	0.78	打面は自然面
107	d6	99	57	A	砕片	透明黒曜石	2.51	1.04	0.15	0.42	細長の砕片　線状痕あり
108	d6	100	57	A	砕片	黒色黒曜石	1.64	1.07	0.20	0.26	線状痕あり
109	d6	85	54	A	砕片	黒色黒曜石	1.46	2.07	0.17	0.36	貝殻状砕片
110	d6	83	55	A	砕片	ハリ質安山岩	1.88	1.43	0.34	0.82	石器製作時の砕片
111	d5	486	70	A	砕片	淀姫系黒曜石	1.80	1.03	0.20	0.29	石器製作時の砕片
112	d6	45	53	A	砕片	黒色黒曜石	1.83	1.38	0.29	0.58	線状痕あり
113	d5	353	62	A	砕片	ハリ質安山岩	1.96	2.20	0.32	1.13	貝殻状の砕片
114	d6	57	58	A	砕片	ハリ質安山岩	1.61	1.34	0.27	0.44	尾部欠損
115	d6	91	54	A	砕片	黒色黒曜石	1.53	0.87	0.15	0.14	石器製作時の砕片
116	d5	494	58	A	砕片	ハリ質安山岩	2.53	1.45	0.35	1.12	尾部欠　剥離面調整時の砕片
117	d5	365	65	A	砕片	ハリ質安山岩	2.26	1.34	0.31	0.81	剥離面調整時の砕片
118	e5	469	34	A	砕片	黒色黒曜石	1.93	1.37	0.39	0.66	剥離面調整時の砕片
119	e6	446	50	A	砕片	黒色黒曜石	1.64	0.91	0.20	0.34	線状痕あり
120	d6	368	67	A	砕片	ハリ質安山岩	1.24	1.33	0.11	0.17	石器製作時の薄い砕片
121	d6	248	55	A	砕片	淀姫系黒曜石	1.52	2.17	0.25	0.63	貝殻状の砕片
122	d5	356	62	A	砕片	ハリ質安山岩	1.51	1.63	0.23	0.42	石器製作時の砕片
123	d5	485	72	A	砕片	ハリ質安山岩	1.65	2.03	0.17	0.66	折断砕片の頭部
124	d6	80	73	A	砕片	黒色黒曜石	1.10	2.05	0.28	0.44	幅広の砕片
125	d5	334	57	A	砕片	腰岳系黒曜石	1.34	1.07	0.16	0.23	石鏃製作時の砕片
126	e6	450	49	A	砕片	黒色黒曜石	1.45	1.21	0.29	0.32	石器製作時に生じた砕片
127	d6	60	62	A	砕片	淀姫系黒曜石	1.50	1.45	0.20	0.34	石器製作時の砕片
128	c5	515	87	A	砕片	淀姫系黒曜石	1.24	2.40	0.20	0.56	折断を受けている
129	d6	103	60	A	砕片	黒色黒曜石	1.12	1.36	0.12	0.14	貝殻状砕片
130	d6	79	71	A	砕片	ハリ質安山岩	1.02	0.93	0.22	0.20	折断砕片の尾部
131	d6	292	60	A	砕片	ハリ質安山岩	1.20	0.86	0.24	0.11	折断砕片の尾部

表５　石器観察表（第 52 次調査地点）　③

番号	グリッド	取上	レベル	ユニット	器　種	石　材	長さ(cm)	幅（cm）	厚さ(cm)	重さ（g）	備　考
132	d6	72	68	A	砕片	黒色黒曜石	1.11	1.45	0.18	0.23	貝殻状砕片。線状痕あり
133	d5	364	64	A	砕片	ハリ質安山岩	0.82	1.14	0.22	0.18	折断砕片の頭部
134	d6	313	－	A	砕片	黒色黒曜石	0.93	1.42	0.20	0.24	折断砕片の尾部
135	d5	577	57	A	砕片	腰岳系黒曜石	1.00	1.73	0.17	0.20	貝殻状の幅広砕片
136	d6	269	65	A	砕片	黒色黒曜石	1.28	1.24	0.16	0.19	線状痕あり
137	d6	112	56	A	砕片	黒色黒曜石	0.82	1.11	0.18	0.12	線状痕あり
138	d6	40	59	A	砕片	黒色黒曜石	1.11	0.89	0.17	0.12	石鏃製作時の小砕片
139	d6	77	69	A	砕片	透明黒曜石	1.00	1.28	0.14	0.11	石鏃製作時の小砕片
140	e6	404	44	A	砕片	黒色黒曜石	0.81	0.87	0.18	0.13	石鏃製作時の小砕片
141	e5	471	44	A	砕片	淀姫系黒曜石	1.01	0.90	0.13	0.10	石器製作時の薄い砕片
142	d6	68	64	A	砕片	黒色黒曜石	1.17	1.26	0.17	0.21	線状痕あり
143	d6	275	61	A	砕片	黒色黒曜石	1.13	0.84	0.15	0.11	石鏃製作時の小砕片
144	d6	104	58	A	砕片	黒色黒曜石	0.97	0.83	0.12	0.10	石鏃製作時の小砕片
145	d6	75	58	A	砕片	黒色黒曜石	1.59	0.90	0.21	0.23	線状痕あり
146	d6	120	64	B	砕片	淀姫系黒曜石	1.73	1.23	0.25	0.60	打面を持つことから、剥離面調整時のもの？
147	d7	195	74	B	砕片	黒色黒曜石	2.06	1.17	0.19	0.38	石器調整により生じた薄い砕片
148	d7	190	76	B	砕片	淀姫系黒曜石	2.07	1.11	0.14	0.27	石器製作時の薄い砕片
149	d7	167	75	B	砕片	淀姫系黒曜石	1.97	1.40	0.22	0.43	石器製作時の薄い砕片
150	d7	189	82	B	砕片	黒色黒曜石	1.74	1.20	0.19	0.33	平坦細調整による砕片
151	d6	597	62	B	砕片	腰岳系黒曜石	0.79	1.13	0.13	0.09	石器製作時の薄い砕片
152	d6	613	72	B	砕片	ハリ質安山岩	1.35	0.76	0.16	0.14	細長の砕片　尾部欠
153	d7	207	88	B	砕片	黒色黒曜石	2.39	2.11	0.29	1.20	線状痕あり
154	d7	204	84	B	砕片	淀姫系黒曜石	1.52	1.31	0.22	0.33	剥離面調整時の砕片
155	d6	611	72	B	砕片	ハリ質安山岩	1.70	1.70	0.35	0.78	尾部欠　自然面残す
156	d7	202	87	B	砕片	黒色黒曜石	1.40	1.20	0.29	0.38	剥離面調整時の砕片
157	d7	194	74	B	砕片	淀姫系黒曜石	1.50	1.00	0.16	0.20	石器調整時に生じた薄い砕片
158	d6	127	69	B	砕片	黒色黒曜石	1.71	1.24	0.20	0.32	石鏃製作時の砕片
159	d6	133	74	B	砕片	黒色黒曜石	1.38	1.94	0.25	0.50	貝殻状の砕片　線状痕あり
160	d7	171	76	B	砕片	黒色黒曜石	1.12	1.35	0.33	0.30	両面加工石器製作時の砕片
161	d7	188	81	B	砕片	淀姫系黒曜石	0.54	1.34	0.22	0.14	幅広の小砕片
162	d7	209	76	B	砕片	黒色黒曜石	1.20	0.86	0.24	0.27	石器製作時の小砕片　折断品
163	d6	266	74	B	砕片	腰岳系黒曜石	1.21	1.57	0.31	0.42	線状痕あり　自然面残す
164	d7	182	74	B	砕片	黒色黒曜石	1.13	1.20	0.24	0.24	平坦細調整時の砕片
165	d6	615	81	B	砕片	黒色黒曜石	1.63	0.95	0.17	0.24	平坦細調整による砕片
166	d7	253	77	B	砕片	黒色黒曜石	1.28	0.77	0.19	0.16	石器製作時の小砕片　線状痕あり
167	d6	115	61	B	砕片	黒色黒曜石	1.20	1.19	0.20	0.15	石器製作時の砕片
168	d6	121	63	B	砕片	透明黒曜石	1.22	0.95	0.12	0.13	石器調整時に生じた薄い小砕片
169	d7	143	64	B	砕片	黒色黒曜石	0.89	1.42	0.25	0.23	プランティング・チップ状
170	d7	263	80	B	砕片	淀姫系黒曜石	1.11	1.35	0.12	0.18	薄い砕片の尾部
171	d7	161	68	B	砕片	黒色黒曜石	1.69	0.97	0.16	0.23	縦長の砕片
172	d7	200	80	B	砕片	黒色黒曜石	0.74	1.16	0.17	0.14	折断されている
173	d8	239	89	C	砕片	淀姫系黒曜石	1.44	1.20	0.21	0.29	自然面残す
174	d8	238	80	C	砕片	淀姫系黒曜石	1.30	1.29	0.24	0.35	小砕片の頭部
175	d8	234	74	C	砕片	淀姫系黒曜石	1.19	1.12	0.20	0.19	砕片の尾部
176	d8	230	70	C	砕片	淀姫系黒曜石	1.16	1.02	0.14	0.15	石器調整時に生じた薄い小砕片
177	d8	227	99	C	砕片	淀姫系黒曜石	1.31	1.18	0.14	0.19	石器調整時に生じた薄い小砕片
178	d8	236	77	C	砕片	淀姫系黒曜石	2.02	1.23	0.20	0.40	打面部リップ状
179	d8	243	63	C	砕片	黒色黒曜石	1.53	1.16	0.20	0.23	石器調整時に生じた薄い砕片
180	d8	225	93	C	砕片	黒色黒曜石	1.06	0.84	0.17	0.12	石器調整時に生じた薄い小砕片
181	d8	223	84	C	砕片	淀姫系黒曜石	1.11	1.13	0.23	0.24	小砕片の尾部
182	d7	625	97	C	砕片	淀姫系黒曜石	0.92	1.71	0.33	0.40	砕片の尾部。折断品
183	b4	5	119	D	砕片	淀姫系黒曜石	2.44	1.67	0.22	0.64	大形石器製作時の砕片
184	b4	8	113	D	砕片	ハリ質安山岩	1.74	1.87	0.19	0.54	石器調整時に生じた薄い小砕片
185	b4	555	125	D	砕片	ハリ質安山岩	1.47	2.33	0.26	0.64	頭部欠
186	b5	22	134	D	砕片	淀姫系黒曜石	1.40	1.08	0.16	0.26	頭部調整を施す
187	b4	556a	135	D	砕片	淀姫系黒曜石	2.16	1.50	0.29	0.64	尾部欠
188	c4	519	85	D	砕片	淀姫系黒曜石	1.72	1.06	0.20	0.39	剥離面調整時の砕片
189	b5	21	131	D	砕片	ハリ質安山岩	2.22	1.22	0.22	0.53	頭部・尾部欠
190	c5	518	101	外	砕片	淀姫系黒曜石	2.24	1.47	0.17	0.44	石器調整時に生じた薄い砕片
191	c6	26	93	外	砕片	淀姫系黒曜石	1.15	1.36	0.13	0.17	薄い砕片
192	c6	29	113	外	砕片	腰岳系黒曜石	1.15	1.42	0.40	0.43	自然面を打面としている
			L=12.5m								

（付） Ｄ－10･11区以外の自然流路等の出土石器

ここでは、Ｄ－10･11区以外で出土した資料を紹介する（第21図）。原位置で検出されたものは少なく、他の遺物と混在の状態で出土したものである。定形石器を中心に、石核、使用痕ある石器などについて、概要を述べる。

図1は典型的な石刃を素材とするナイフ形石器で、右側辺の一部にブランティングを施している。両端が折断された中間部である。刃部には刃こぼれが認められる。腰岳系の黒色黒曜石製。Ｖ－7区、土器群130より出土。

2･3はＸ－9区、ローム層中出土とされたものである。隣接する第42調査地点では約2万年前の泥炭層が検出されており、ナイフ形石器の出土も認められることから、近くに旧石器時代の包含層が存在していた可能性は高い。2は淀姫系の乳白色黒曜石製の剥片、3は腰岳系の黒色黒曜石製の折断剥片で、いずれも不定形の資料で使用された形跡はない。

4～8は石鏃またはその未製品である。4は腰岳系の黒色黒曜石製の逆ハート形石鏃である。背面に第一次剥離面を残し、右脚が欠損している。Ｖ－7区、土器群131出土。5はハリ質安山岩製の細長石鏃で、両脚が欠損している。やや粗いが、両面の全体に細調整が及んでいる。Ｕ－8区、整地面出土。6は腰岳系の黒色黒曜石製の三角形鏃で、脚部の抉りは認められない。両面に丁寧な細調整を加え、薄く仕上げている。Ｕ－8区、土器群129出土。7はハリ質安山岩製で、両面に粗い加工を施している。脚部は凸状を呈し、尖頭状石器とすべきかも知れない。Ｕ－8区、整地面出土。8は両面に第一次剥離面を大きく残すが、先端部両面に細調整痕がみられることから、石鏃未製品と考えられる。腰岳系黒色黒曜石製。ＳＤ01下部礫層中出土。

9は、腰岳系黒色黒曜石製のやや厚手不定形剥片を素材とする典型的な石錐（ドリル）である。剥片の端部両面に丁寧な細調整を加え尖らしているが、先端部は使用中欠損したものと思われる。Ｖ－7区、土器群131出土。

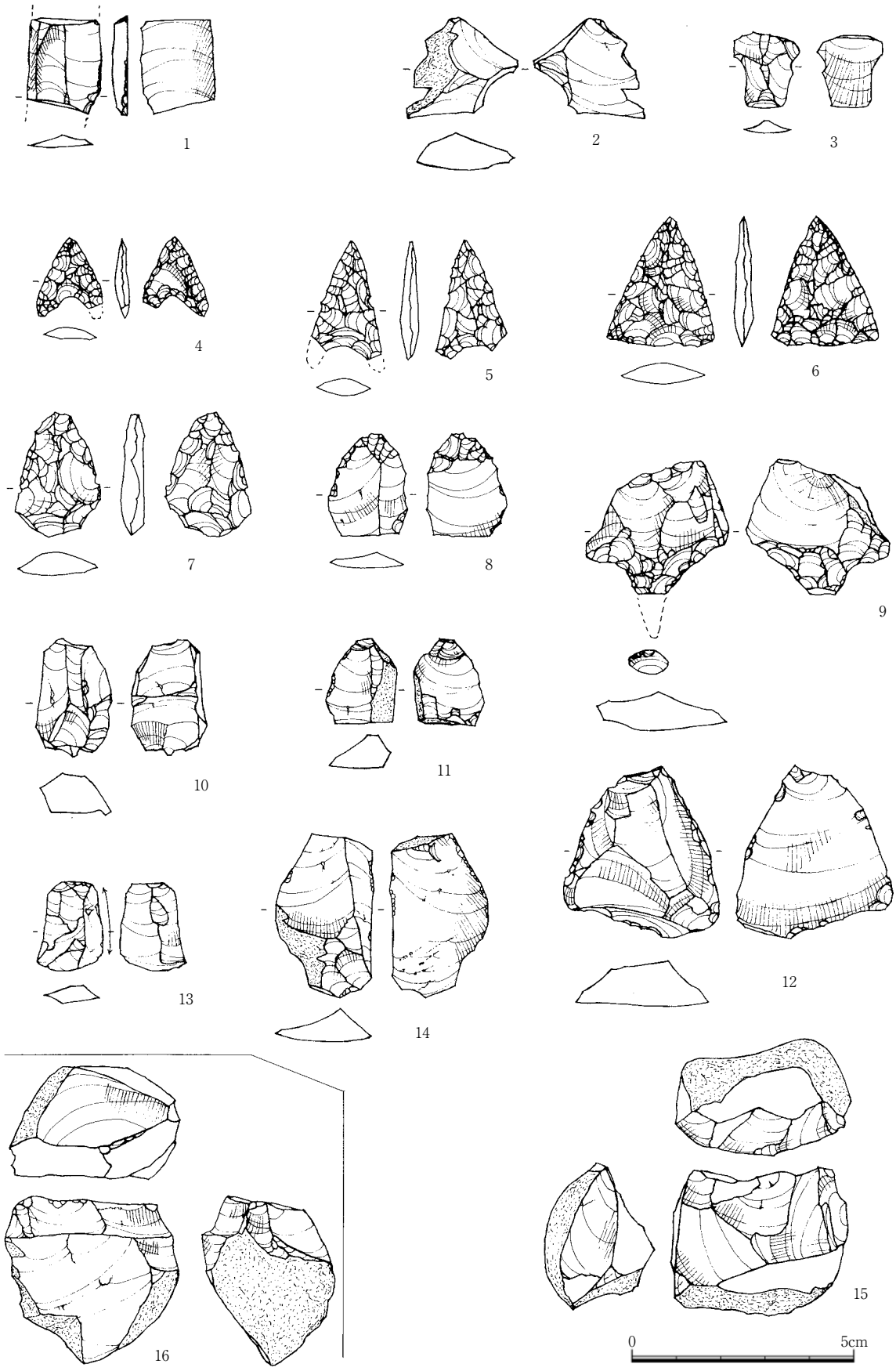
10･11は、いずれも腰岳系黒色黒曜石製の楔形石器である。10は背面の剥離面のリングの状況からバイボーラ・テクニックによると考えられる。11は上端両面、下端背面に調整痕が認められる。10はＣ－9区、ＳＤ01下部基盤礫層中、11はＶ－7区、土器群130出土。

12は、腰岳系の黒色黒曜石製厚手幅広剥片の周囲に細かな調整痕が認められ、スクレーパー類の一種と考えられる。左側辺の細調整痕は連続している。下端部は欠損しているが、使用中生じた可能性もある。ＳＤ01下部礫層より出土。

13･14は、いずれも腰岳系黒曜石製の使用痕ある石器である。13は小形の資料で、右側辺に連続する刃こぼれが認められる。14は縦長剥片の両側辺に目立つ微調整痕または刃こぼれが認められる。13はＷ－7･8区上層ベルト、14はＳＤ01下部礫層中出土。

15･16は、腰岳系黒色黒曜石製の石核である。15は新しいキズ痕で明確でないが、剥片剥離の加撃方向が複数で、打面転移石核と考えられる。Ｗ－7･8区、下層ベルト出土。16は打面より周囲に剥片剥離を行っているが、最終的には階段状を呈し、目的剥片の剥離に失敗しているようだ。隣接する第42次調査地点、Ｄ－2区左上層出土。

ナイフ形石器の存在や旧石器時代の泥炭質土壌から、谷部を旧石器時代に利用した可能性が指摘できる。当初谷全体が河川だったと考えられ、土壌が乾いた状態は部分的と思われ、小規模な利用に止まったと考えられる。



第 21 図　Ⅰ区自然流路等出土遺物（縮尺　3/4）

３　遺物分布

①　遺物分布の概要（第22図）

第22図のように、8×12m（100㎡弱）の範囲より、651点（石器617点、土器33点、炭化物1点）の遺物が出土したが、住居祉をはじめ炉址・礫群などの遺構は検出されていない。平面分布図や垂直分布図にみるように拡散が少なく、本地方では稀な原位置を保った纏まった資料と言えるだろう。平面的には、4つの纏まり（ユニットＡ～Ｄ）とその外部に少数の疎らな分布が認められる。これらのユニットは直径2～4m程度である。それぞれ、一人から三人程度の人間の行動によって形成されたものと思われる。土器はユニットＤの南側、ユニットＡ中央部に少数存在している。石器とは異なる分布状況であり、行動の違いが想定される。なお、Ａ～Ｃユニットの西側は遺物が極めて疎らで、一部空白地帯が広がっている。

ユニットＡ・Ｂ・Ｃは南北に連続しており、順に小面積となり、遺物数も少なくなる。遺物密度もユニットＡが最も高い。これらは、黒曜石製の砕片の割合が高いという共通点があるが、遺物数・定形石器の豊富さにおいてユニットＡが群を抜いている。垂直分布図においては20㎝以内に納まっており、ユニットＡ・Ｂでは垂直分布に差が認められず、ユニットＣも緩やかな傾斜に沿っており、同時期と考えられる。

ユニットＤは垂直分布において高低差はないが、分布密度はユニットＡに比べ格段に低い。第22図において、ユニットＡなどと段差があるように見えるが、ユニットＤが西側に分布し、河岸段丘の傾斜の影響を受けているためである。a～e-5区の垂直分布のように、堆積土はやや傾斜しているのである。土器と石器が、空間的に南北に二分されている点も他にはない特徴である。その北側にさらに疎らな少数の遺物が検出されている。土器は認められないが、石器はユニットＤと同じような傾向にあると思われる。

第22図を詳細に検討すると、ユニットＡ・ＢとユニットＤが最も平らな部分に形成されていることが分かる。本遺物群を残した人類集団にとって、最も重要な地点だったと思われる。ユニットＣは、やや傾斜の始まる地点である。Ａ・Ｄユニットは食事などの日常活動が行われていたと考えられ、キャンプ・サイトの中核をなす空間といえる。

本調査地点の上流に位置する第58次調査地点に比べ、傾斜が格段に緩やかなのが明らかである。そのため、遺物の上下運動が少なく、その垂直分布に差がなく、文化層間の混在が少ないと考えられる。本遺跡においては単一文化層であるため、その分離をする必要はなかったが、人類集団の行動を明らかにするうえでより良好な環境にあることは疑いない。平面分布においても、当初の範囲から広がらず、狭い部分に集中しているのである。

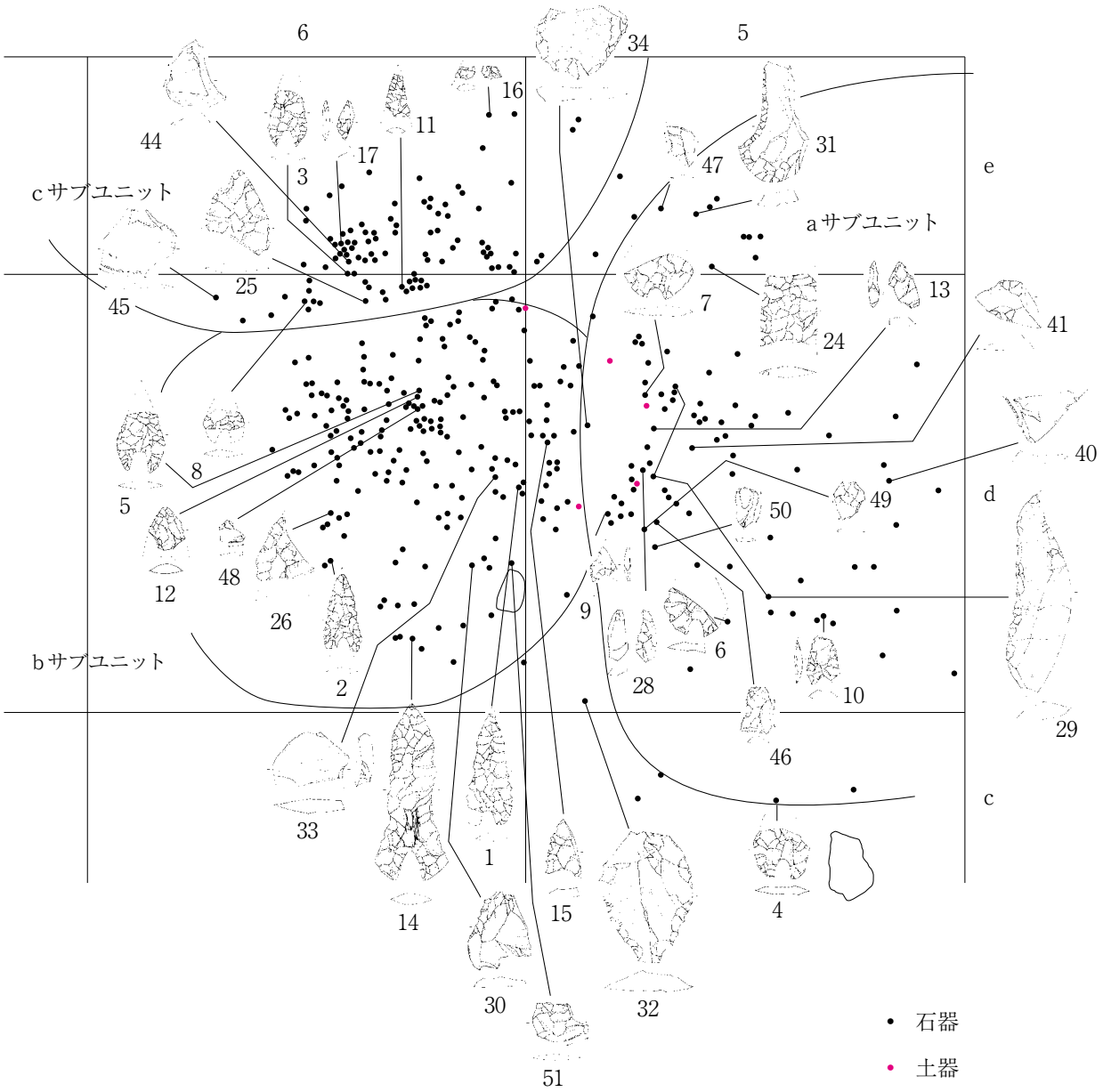
②　石器類の分布状況

a　ユニットＡ（第23図）

最も多い403点（60.4％）が検出されている（第１表）。石鏃16、尖頭器3、楔形石器1、スクレーパー類8、加工痕ある石器2、使用痕ある石器8、剥片13、砕片346、土器5である。本遺跡における主要な器種は全て揃っており、本遺跡で最も複雑な行動が、この場で展開されたと思われる。これらの定形石器はこの空間で使用されたと思われるが、その多くが破損品であるため、遺跡を去る時廃棄された可能性が高い。

第 22 図　元岡・桑原遺跡群 52 次調査地点（D―10・11 区）遺物水平・垂直分布図

中心部の土器を境に、南北の二つに分離できる。さらに北側の分布域は、d区（bサブユニット）とe区（cサブユニット）に二分できる。第23図のように、南側のaサブユニットは、抉りがU字状で幅広の石鏃（4･6･7）、抉りのやや浅い小形の石鏃（9･10）、石鏃の破損品（13）、細身尖頭器（24）、サイド・スクレーパー（29･31･32）、楔形石器（28）などが含まれている。加工痕ある石器（40･41）や使用痕ある石器（46･47･49･50）も出土している。土器の多くは、このサブユニットで検出されている。



第 23 図　元岡・桑原遺跡群 52 次調査地点ユニットＡ遺物分布図

幅広のU字状抉りの石鏃が纏まって認められ、特徴的な形態のサイド・スクレーパーも存在する。楔形石器は唯一の出土例である。このような石器群は福岡地方に認められず、極めて個性的である。サイド・スクレーパーの接合例（29）は、上部が最も標高の高い位置に、下部は低い位置に分布している。分割後、移動したものと考えられる。

bサブユニットは、U字状抉りの細身の石鏃（1･2･5）、特異な形態の大形鏃（14）、浅い抉りの特殊な石鏃（15）、石鏃の破損品（12）、幅広尖頭器（26）、円形スクレーパー（34）、サイド・スクレーパー（30･33）、使用痕ある石器（48･51）など最も多数の石器が検出された。細身のU字状抉りの石鏃、部分磨製の大形石鏃は九州に例がなく、極めて特徴的な石器群である。

cサブユニットは、U字状抉りの細身部分磨製石鏃（3）、石鏃の破損品（8･11･16･17）、幅広尖頭器（25）、使用痕ある石器（44･45）などが出土している。石鏃や尖頭器の形態などにおいて､bサブユニットとの共通点が指摘できる。

本遺跡の石鏃を特徴づける、抉りがU字状を呈するものは各サブユニットに認められ、これが全体を結び付けている。各サブユニットに、尖頭器を組成する点も共通する事例の一つである。これらは、各サブユニットで空間が分離出来ないことを示していると思われる。行動の場において、お互いに助け合う存在と考えられる。

しかし、aとb･cサブユニットで、石鏃や尖頭器の形態的特徴に差異のある点は興味深い。スクレーパー類にも違いがあるようである。この微妙な違いは空間の使われ方に起因していると思われる。小面積ながら、ユニットAの各サブユニットは同質の場ではなく、異なる行動が行われていたと想定されるのである。

b　ユニットB・C（第24図）

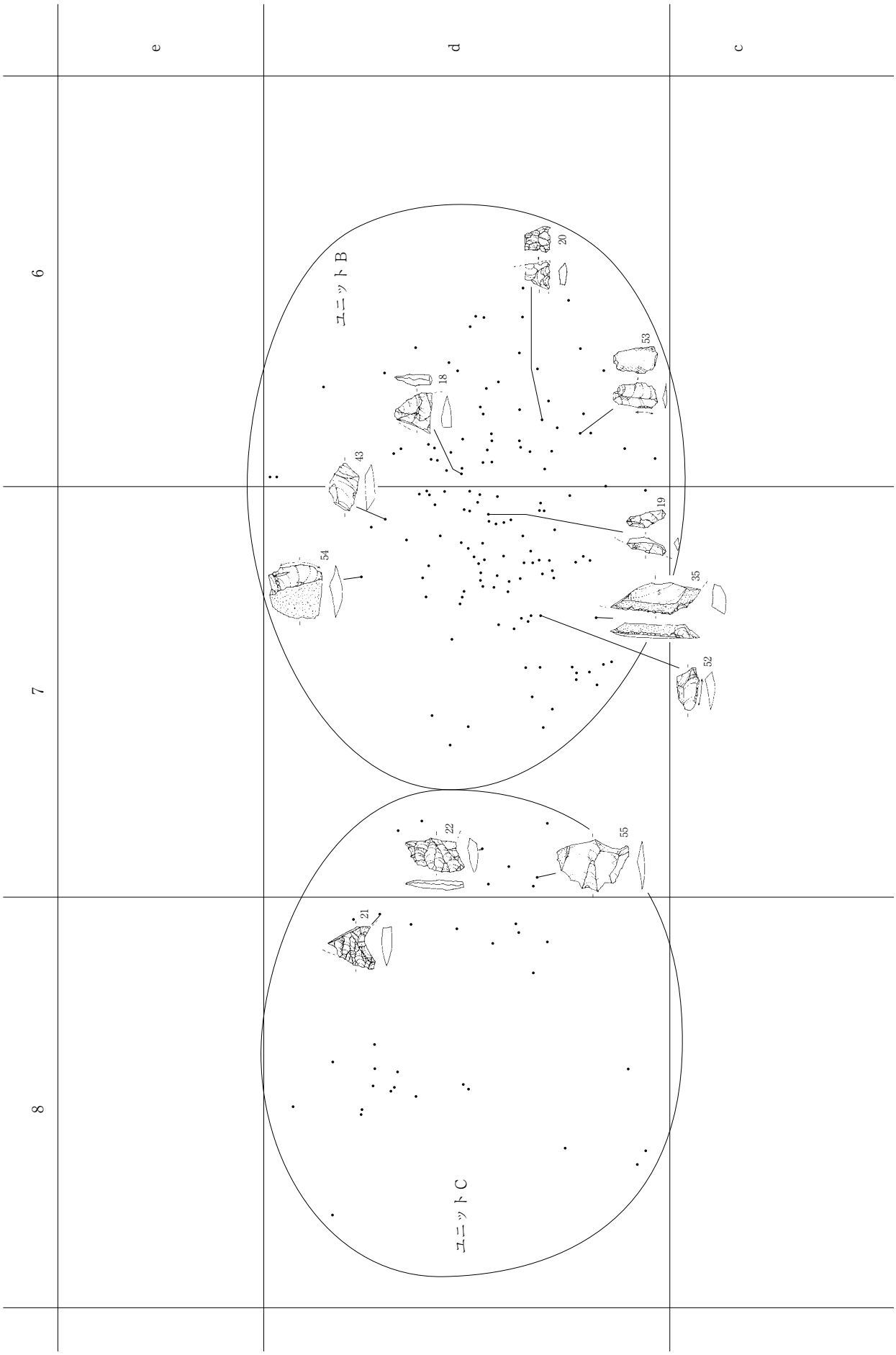
両者ともに直径2m程度で、ユニットAに比べて小面積である。ユニットBはユニットAに匹敵する密度を誇り中央部に纏まって検出されるが、ユニットCは疎らで、しかも二つあるいは三つに分離できる（第24図)。ユニットBは中央部の密度が濃く、ユニットCは中央に空白部分がある。ユニットBは石鏃3、スクレーパー類1、加工痕ある石器1、使用痕ある石器4、砕片127、計136点（全体の20.9％)、ユニットCは石鏃2、加工痕ある石器1、使用痕ある石器1、砕片31、計35点（5.4％）である。石器の種類は単純で、ユニットAのような多様な形態のものは認められない。定形石器が極端に少ない、ということもできる。

第24図のように、ユニットBの中心部に石鏃が位置し、スクレーパーや加工痕ある石器（43)、使用痕ある石器（52～54）は周辺部に認められる。石鏃は抉りのない三角形鏃（20）のほか破損品（18･19）であるが、明らかにユニットAのものとは形態的に異なる。スクレーパー（35）は左側辺に細かな調整を施したもので、他にはない形態である。

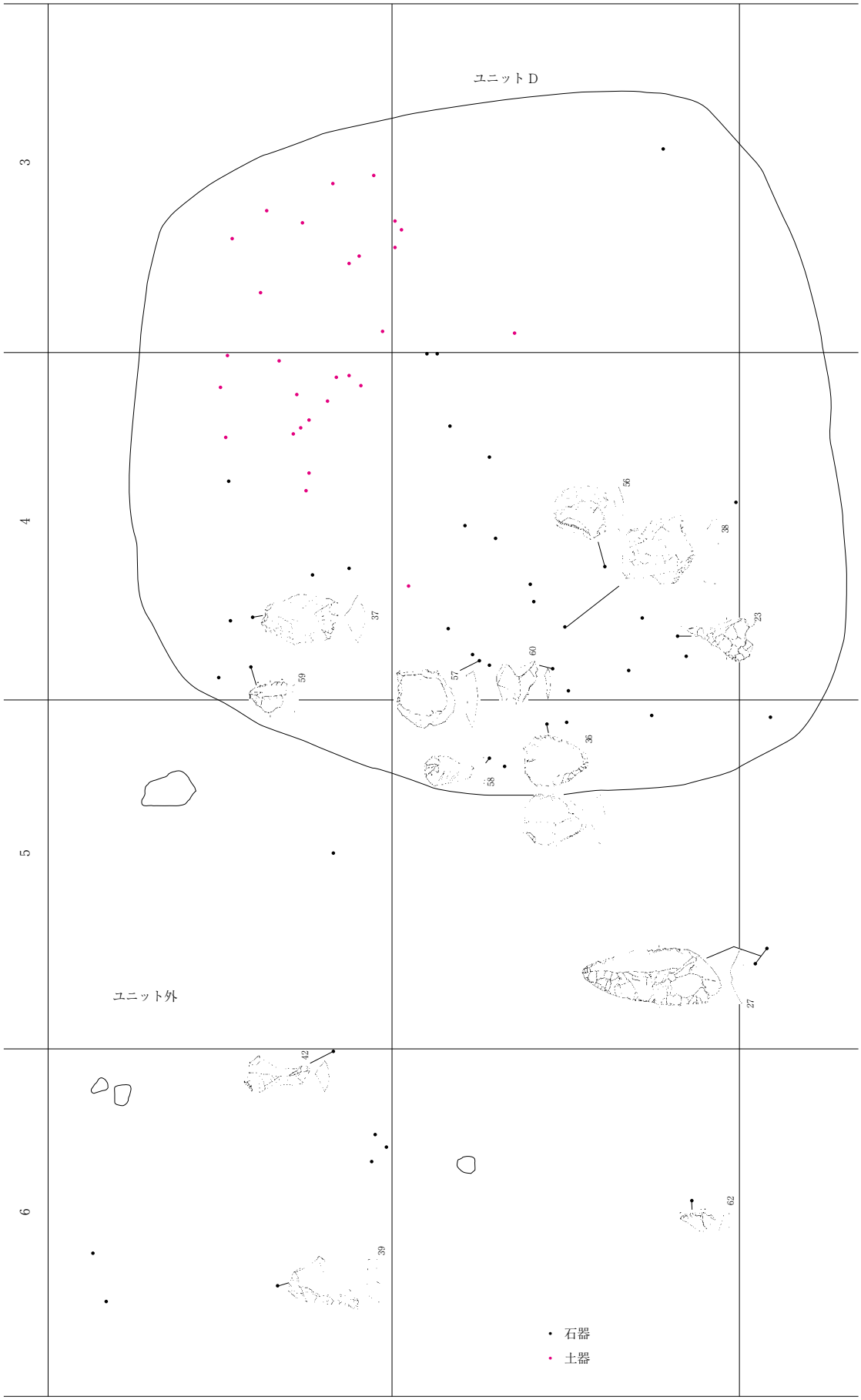
ユニットCは、南側のサブユニットに2点の石鏃、加工痕ある石器、使用痕ある石器（55）が分布し、北側のサブユニットには砕片のみが認められる。石鏃は抉りの浅い特徴的な形態（21･22）で、ユニットAのbサブユニットにも同様の形態（15）が認められる。ユニットB・Cの遺物は、ユニットAと大きく異なるが、若干の共通点もある。

c　ユニットD・ユニット外（第25図）

直径4mで、その面積はユニットAと比較しやや広いが、遺物数は66点（10.1％）と各段に少なく、比較的広い範囲に疎らに分布している。南側の土器主体のサブユニットと北側の石器中心の分布域に



第 24 図　元岡・桑原遺跡群 52 次調査地点ユニットＢ・Ｃ遺物分布図



第 25 図　元岡・桑原遺跡群 52 次調査地点ユニットD、ユニット外遺物分布図

分離できる。石鏃1、スクレーパー類3、使用痕ある石器5、剥片7、砕片21、土器28、炭化物1が検出されている。土器の多い点が他にない特徴で、スクレーパー類も多様な形態が認められる。土器と石器が明確に分離できる点は、空間の使い分けがなされていたと考えられる。

石鏃は抉りU字状の極めて大形幅広品（23）で、サイド・スクレーパー（36）の存在とともに、Aユニットaサブユニットとの共通点が指摘できる。その他のスクレーパー類は不定形（37･38）のものである。その他、大小の使用痕ある石器（56～61）、剥片（75～79）、砕片（183～189）が出土している。ユニットA～Cに比べ、大形の剥片・砕片が多いのが特徴といえる。土器等を除くと、定形石器の割合は1割を超える。

ユニットDの北側に、極めて疎らに少数の石器が出土している。尖頭器2（接合）、スクレーパー1、加工痕ある石器1、使用痕ある石器1、剥片1、砕片5が出土している。Dユニットより定形石器の割合が高く、唯一砕片が5割以下である。

尖頭器（二つに折断）は未製品と思われ、背面や正面の一部に細調整を行っていない（27）。サイド・スクレーパーは左側辺に斜め細調整、背面に平坦細調整を行った特殊な形態である（39）。加工痕ある石器は縦長状剥片を用い（42）、使用痕ある石器は小形の破損品である（62）。剥片は周辺加撃石核より剥離された縦長状のもの（80）、砕片（190～192）は比較的大形である。ここに分布する石器は使用された形跡が認められ、それはユニットDよりさらに顕著である。

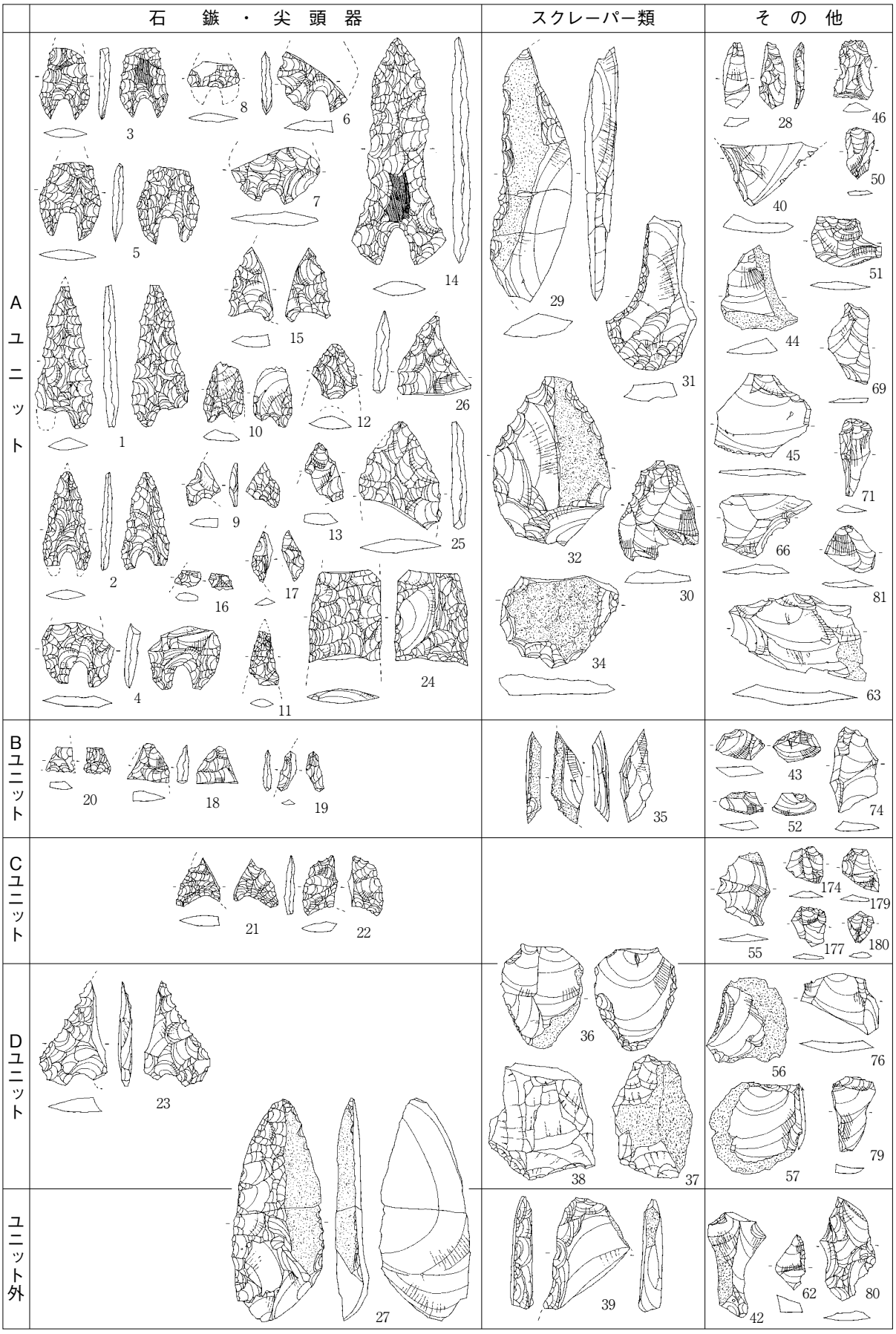
③　各ユニットの組成（第26図）

このような、ユニット別の主要遺物を示したのが第26図である。ユニットAで最も多量の遺物が検出されており、全ての器種、形態が認められる。抉りU字状の細長石鏃（1～3、5）、部分磨製の大形で特異な石鏃（14）、両面加工尖頭器（24）、楔形石器（28）は他のユニットに認められない。スクレーパー類も多様な形態（29～34）がみられる。これらは、狩猟具製作や食事等の日常生活に係わる道具類と考えられる。

他のユニットは、ユニットAの一部分であると考えられ、同じ形態の石器が少数検出されている。その点が、本遺跡の時間的同時性を裏付けているとも言える。ただし、Bユニットの抉りのない石鏃（20）はAユニットにない要素である。Cユニットの抉りの浅い石鏃（21･22）、Dユニットの抉りU字状の幅広石鏃（23）、ユニット外の薄い尖頭器（27）・サイド・スクレーパー（39）はAユニットに同様のものが認められる。石器製作技術の一致する複数の「ヒト」によって、形成されたものと思われる。

ユニットAの中心をなす狩猟具は、九州では従来知られていない形態である。他の地域から齎された可能性が指摘できる。それは、ハリ質安山岩製のものに良く表れているように思える。本遺跡は、黒曜石素材に移ろうとする魁と思われる。その過程で、石材産地での石器製作技術が齎された可能性が指摘できる。しかし、本遺跡のハリ質安山岩製品の多くは北部九州産と考えられ、石材においては完全に地元産に移行しているものと思われる。

ユニットB・Cは黒曜石製砕片の割合が高いことから、九州在地形態の石鏃製作が行われていたと想定される。それは抉りの浅い石鏃（21･22）と考えられる。しかし、抉りの浅い石鏃（21･22）は黒曜石産地の西北九州に一般的な形態とは言えず、他の地域の集団との接触があったものと思われる。この時代の文化要素の学習や石器製作技術の伝播はかなり複雑に展開しているようであり、周辺地域の状況を明らかにする必要がある。



第 26 図　ユニット別の石器一覧（縮尺 1/2）

４　石器の使用痕

使用痕には、剥離痕や線状痕、磨滅痕などがあるが、ここでは実体顕微鏡による観察を行った線状痕を中心に報告したい。石器観察は、福岡市埋蔵文化財センターで行った。その過程で、同センターの服部氏のご協力があり、感謝の意を表したい。石器両面のほぼ全体を観察し、倍率は20～160である。線状痕は、ガラス質黒色黒曜石製のものに良く認められるが、安山岩製品などはほとんど観察されなかった。磨りガラス状の淀姫系黒曜石も観察できない場合が多かった。なお、石器の転がり等による自然的要因による線状痕もあるが、区別の困難なものもある。

以下、ユニット別に報告する。主に腰岳系の黒色黒曜石に認められた。僅かに他の石材にも認められるが、明確なものではなかった。スクレーパー類、使用痕ある石器、剥片・砕片に認められた。剥片・砕片に線状痕の観察例の多いのは以外であった。石器に加工されていない剥片・砕片も、人類によって使用されている可能性が極めて高いと思われる。石器製作過程で生じた砕片の多くが、日常生活の中で良く用いられているのである。このような小砕片への線状痕は、58次調査地点（大森編2016）や長崎県福井洞窟（桝田編2016）などでも確認されている。

①　ユニットＡ（第27図）

最も多量の石器類が出土し、線状痕の観察される例も多い。その現れ方は多様なものがあり、複雑な行動のあったことが想定される。

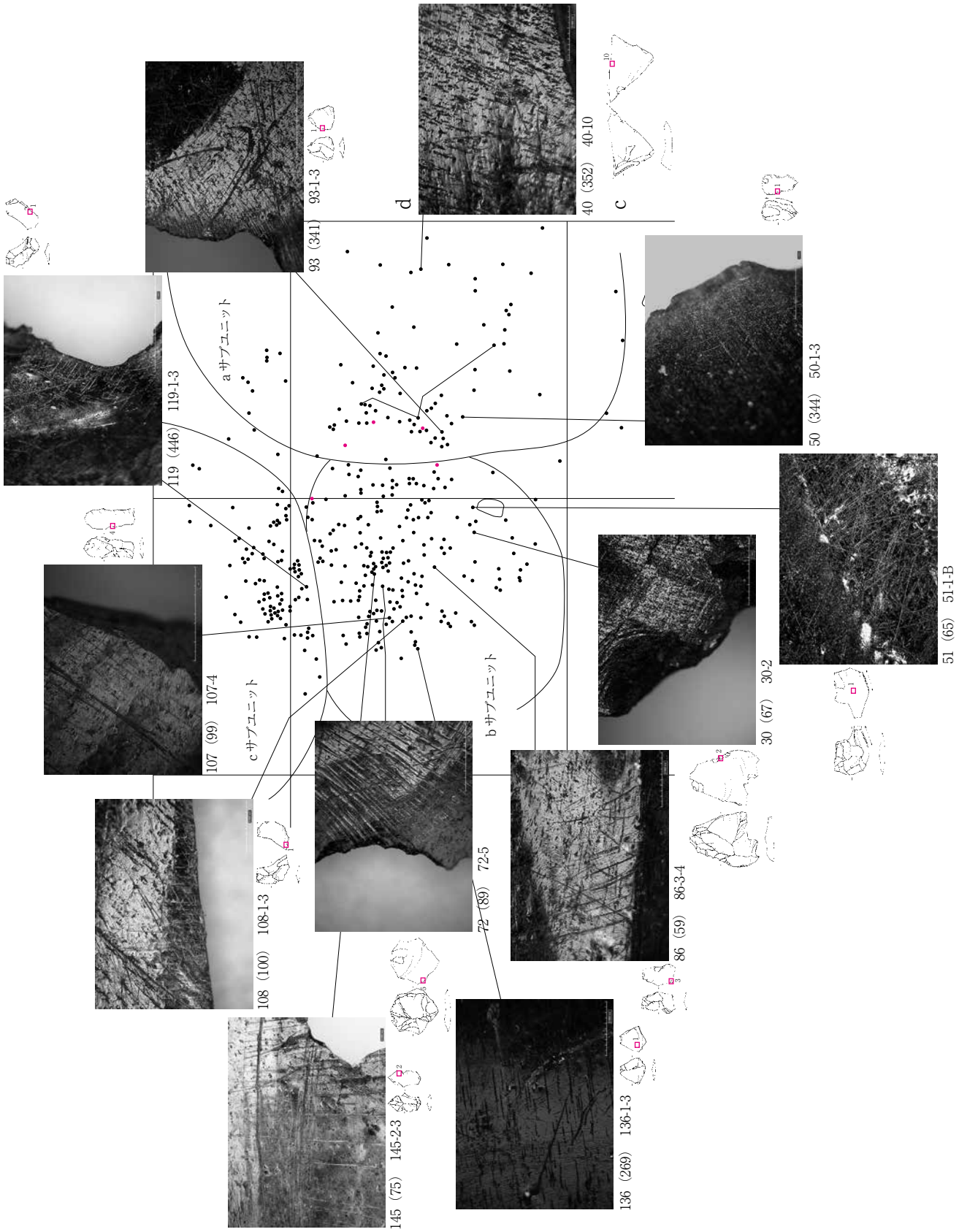
30（スクレーパー）は、フィッシャーと直交するやや深めの線状痕が、0.05㍉間隔でみられる（30-2、写真１）。また、背面中央部（30-1）や正面（30-4、刃部と平行）にも線状痕が観察される。部位により、線状痕の生じる状況に違いが認められる。

40（加工痕ある石器）は両面の各所に線状痕が認められ、背面の折断面と平行・直交するやや深めのものに特徴がある（40-6～10、写真2）。正面は、刃部に斜交するなど複雑な線状痕が認められ（40-5）、剥離痕も生じている。

44（使用痕ある石器）は、背面に刃部と直交する細かな線状痕（44-1）、正面に平行する線状痕（44-2）がみられる。50（使用痕ある石器）は、刃部と平行・直交・斜交する細く浅い線状痕が認められ、微細剥離痕も観察される（50-1、写真3）。51（使用痕ある石器）の背面中央部は複雑だが、やや斜交する線状痕に規則性が認められる（51-1、写真４）。また刃部近くには、それと平行・斜交する線状痕が認められる（51-2）。

72（剥片）は、フィッシャーと交差（刃部とほぼ平行）する0.1㍉間隔のやや深い線状痕がみられる（72-5、写真９）。また刃部と斜交する細く浅い線状痕もある（72-2、72-6）。

86（砕片）は、刃部とほぼ直交（86-1）、刃部と斜交する浅い線状痕（86-2、写真11-1）がみられる。背面下端部付近には、太い線状痕と細く浅い0.05㍉間隔以下のものがみられる（86-3、写真11-2）。正面のもの（86-4）はフィッシャーとも考えられるが、剥離面にも及んでいることから、少なくとも一部は使用によるキズ痕と考えられる（写真11-3）。92（砕片）は、下端部に斜交する線状痕がみられる（92-1）。93（砕片）は刃部と平行（93-2）、平行・斜交（3）する線状痕がみられる。また、フィッシャーと交差する深く幅広の線状痕（93-1、写真12）がみられるが、不規則な部分もあり自然に生じた可能性もある。107（砕片）の4（写真13）の一部はフィッシャーと考えられるが、刃部に平行するものの中で、短いもの、間隔の0.05㍉以下のもの、交差しているものは使用痕と考えられる。ほかに刃部と直交するもの（107-1、107-6）がある。108（砕片）は若干深めの間隔0.05㍉以下の刃部に直交する線状痕がみられる（108-1）。それに斜交する太めのものもある（写真14- 1）。写真14-2はフィッシャーに交差するやや深い線状痕で、



第 27 図　元岡・桑原遺跡群 52 次調査地点ユニット A 使用痕分布図

一部は剥離面に及んでいる（108-2）。写真14-3も同じようにフィッシャーと交差する線状痕だが、正面に形成されている（108-4）。ほかに、刃部と斜交・直交するもの（108-3）もある。119（砕片）の刃部と斜交するものはフィッシャーの可能性もあるが、それと交差するものは使用痕と考えられる（119-1、写真15）。ほかに刃部と平行する線状痕がみられる（119-2）。132（砕片）はやや浅めの刃部と直交・斜交する線状痕がある（132-1）。136（砕片）の背面中央付近に短く深い線状痕がみられ、これと交差するものもある（136-1、写真16-1）。正面左側辺付近にはやや浅めの交差する線状痕がみられる（136-2、写真16-2）。137（砕片）は下端と平行するやや浅めの線状痕が観察できる（137-1）。145（砕片）は刃部（フィッシャー）と直交する浅めと深い線状痕が認められる（145-2、写真17）。153（砕片）は、フィッシャーと交差するやや細く浅めの線状痕がみられる（153-1､153-2）。159（砕片）はフィッシャーと交差する深めの線状痕があり、一部は剥離面にも及んでいる（159-1、写真18）。163（砕片）は刃部と平行（163-1）、斜交（163-2）する丸味を帯びる線状痕が認められる。166（砕片）はフィッシャーと方向は同じだが、より細く、浅いものが刃部付近を中心に認められる（166-1、写真19）。ほかに刃部と平行な線状痕もある（166-2）。

線状痕の生じた部位は刃部が多いが、背面中央部に認められる例もある。刃部付近のものは微細剥離痕を伴う例があり、大きな力が加わったと考えられる。また、剥離痕に線状痕の認められる例があり、剥離後も使用が継続されている。線状痕の形状は、深いもの浅いもの、幅広・細いものなどがあり、多種多様である。種類の異なる行動の結果生じたものと考えられる。

ユニットＡは三つのサブユニットで構成され、前述のように定形石器の形態等において、それぞれ行動に違いがあったことが想定されている。使用痕では明確な差を見いだすことは出来ないが、各サブユニットで多様な使用痕が認められ、それぞれの場で複雑な行動が行われていたと考えられる。

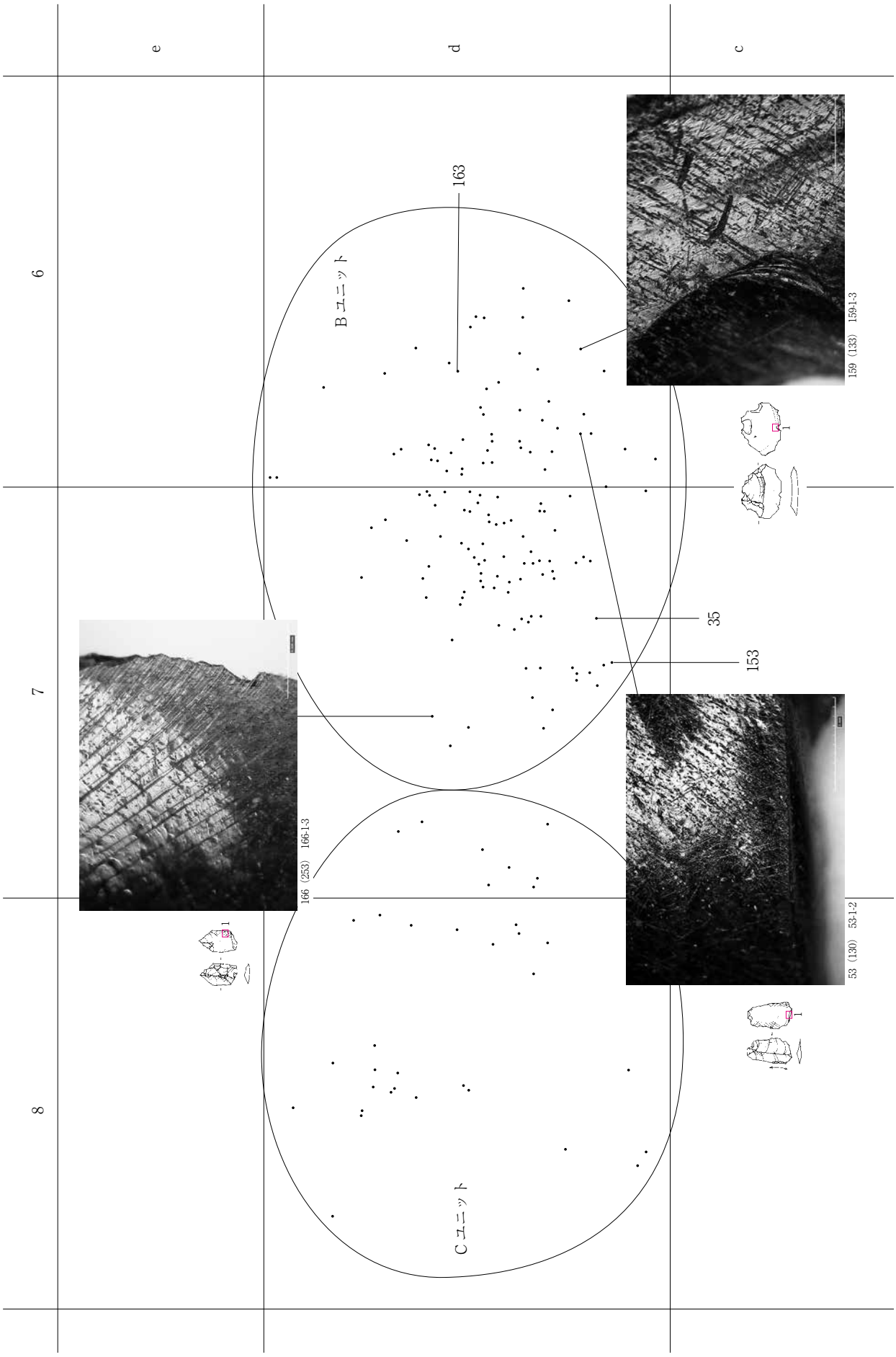
本ユニットは出土石器の種類等から道具製作の場と考えられているが、使用痕から多様な日常活動が行われていたと思われる。石皿や磨石などの大形石器がなく、土器も少ないことから定住の拠点とは考えられないが、移動生活におけるキャンプの一部と考えられる。大形道具の少なさや狩猟具（石鏃、尖頭器）の割合の多いことから、狩猟活動に伴うキャンプと想定される。

使用痕の認められる石器は、中央部より周辺部に多い点が注目される。これはスクレーパー類や加工痕・使用痕ある石器の分布と一致し、中央部にある土器とは異なっている。狩猟具は中央部にもあるが、その多くは周辺部に位置している。特に、完形に近いものは周辺部に認められ、線状痕の認められる石器などと良く類似している。石器製作は中心部、日常生活は周辺部という場の違いが想定されるのである。

② ユニットＢ・Ｃ（第28図）

スクレーパー、使用痕ある石器、砕片に線状痕が認められる。規模等で劣るが、Ａユニットと同様の在り方と思われる。

35（スクレーパー）は、フィッシャーと交差する間隔の広い線状痕が認められる。細いものと幅広のものがある（35-1）。53（使用痕ある石器）は、刃部とほぼ直交する0.1㍉間隔の短い線状痕が認められる（53-1、写真5）。153（砕片）はフィッシャーと交差するやや浅めの線状痕がみられる（153-1、153-2）。159（砕片）は、フィッシャーと交差する深めの線状痕がみられ、一部は剥離面にも及んでいる（159-1、写真18）。163（砕片）は刃部と平行し、一部は直線でなく丸味を帯びている（163-1）。166（砕片）は、フィッシャーと方向はほぼ同じだが、より細く浅いものが刃部付近を中心に認められる（166-1、写真19）。また、刃部と平行な線状痕もある（166-2）。



第 28 図　元岡・桑原遺跡群 52 次調査地点ユニットＢ・Ｃ使用痕分布図

ユニットＢも、周辺部のものに使用痕が観察される例が多い。中心部に位置する石鏃とは異なるが、スクレーパーや使用痕ある石器も周辺部に位置している。石鏃はいずれも大きく破損したものであり、Ａユニットと同じ在り方と考えられる。

Ｃユニットは、明確な線状痕が観察される資料はなかった。この場では日常的な活動が行われなかった可能性もあるが、資料の少なさに起因していると思われる。

③　ユニットＤ・ユニット外（第29図）

使用痕ある石器や剥片に線状痕が認められた。砕片も大きいものが多く何らかに使用していたと思われるが、その多くがハリ質安山岩や淀姫系黒曜石のため、線状痕を観察することが出来なかった。

第29図にその分布を示したが、大半に顕著な線状痕が認められる。

56（使用痕ある石器）は、交差する線状痕（0･1㍉程度の間隔）が認められ（写真6）、細いものと幅広のものがあり、幅広のものはやや深めである（56-3）。ほかの部位では、刃部と平行（56-1）、斜交（56-2）する線状痕が認められる。これらは細く浅い線状痕である。57（使用痕ある石器）は、0.1㍉以下の間隔で刃部と直交する長さ1㍉以下のやや幅広で浅い線状痕が認められる（写真7）。刃部付近は消えており、磨滅によるものと思われる（57-6）。このほか、刃部と平行（57-1）、斜交（57-2）、直交（57-5）するやや細く浅い線状痕がある。59（使用痕ある石器）は、刃部と平行（0.2㍉間隔）、斜交（0.05㍉以下の間隔）する線状痕が認められる（59-2、写真8）。そのほか、57-6と同じような0.1㍉間隔で直交するやや深い線状痕が認められる（59-1）。79は剥片の端部に0.05㍉以下の間隔で、浅い密集したやや幅広の線状痕が部分的に認められる（79-2、写真10）。ほかに、刃部とほぼ平行するやや深めの線状痕（79-1）もある。

図示していないが、58（使用痕ある石器、ユニットＤ）は0.1㍉間隔以下の刃部と直交・平行する線状痕がみられる。62（使用痕ある石器、ユニット外）は、刃部と平行する線状痕が0.1㍉以下の間隔で認められる。

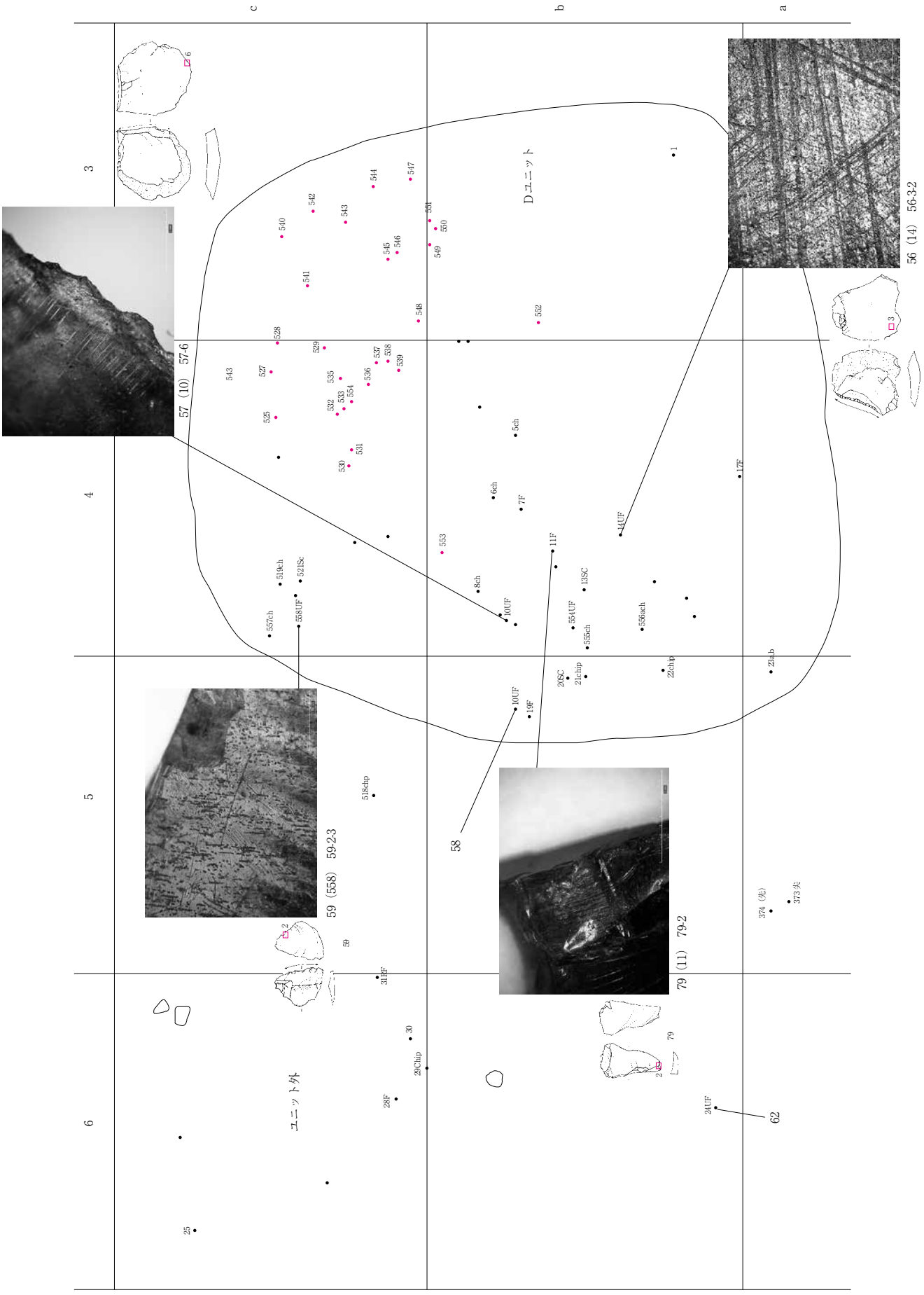
ユニットＡ・Ｂ・Ｃと異なり、土器集中地点を除き万遍なく分布している。これは、本ユニットに石器製作地点がないことに起因していると思われる。この地点の砕片は、使用することを前提にして持ち込まれており、石器製作の過程で生じたほぼ全ての砕片が残っているユニットＡ・Ｂ・Ｃとは違いが認められるのである。

④　使用痕と集団行動

このような、遺物分布と使用痕の関係は58次調査地点でも検討された（大森編2016）。ここでも、分布域の機能と使用痕の形状の関連性が追及され、Ⅱ層とⅢ③層で住居祉的な機能を有する「場」で使用痕を持つ石器が検出された。刃部と平行・直交・斜交するものがあり、石皿、磨石、礫器等の大形石器やスクレーパー類との結びつきが強いように思われる。複合的な行動を集中して行う場であり、58次調査地点では各生活面に１ヶ所形成されているようである。

福井洞窟の各層でも、顕著な使用痕は炉址あるいはそれと推定される「場」に資料が偏っていた（柳田2016）。これらの多くは食事に関連するものと考えられ、キズ痕の付いた小骨片も検出されている。細石刃や砕片のような小さなものにも、顕著な線状痕や微細剥離痕が観察された。骨片へのキズ痕は、これらの道具によってなされた可能性が指摘できる。また、大原Ｄ14区でも住居址SC003でも顕著な使用痕のある石器が出土している。

小さな砕片の多くに線状痕が認められた。これは本遺跡に限らないようであり、石器製作システム



第 29 図　元岡・桑原遺跡群 52 次調査地点ユニット D、ユニット外使用痕分布図

の中に組み込まれているものと思われる。小さな砕片のみを剥離したと考えられる小石核が認められるが、これはまさに砕片剥離専用と思われるのである。本遺跡では、石核は検出されなかったが、58次調査地点ではこのような小石核が認められるのである。

だが、使用痕を詳細に検討した事例は少なく、詳細が明らかにされたとは言い難い。58次調査地点でも、分析したのは一部にとどまっており、充分な成果を得ることが出来なかった。今後も、研究の蓄積が求められるところである。

ユニットＡ・ＢとユニットＤにおいて、分布上の若干の違いが認められた。それは、石器製作を行うか否かによって、場の機能に違いがあると考えられる。ユニットＤは砕片の密集がなく石器製作を行っておらず、日常生活の空間と言える。住居祉に近い場の機能であったと思われる。食事や就寝、道具の修理などが行われていたと考えられるのである。また、57･79のようなやや幅広で浅く短い線状痕は大原Ｄ・元岡型スクレーパー（萩原2016）に認められ、特殊な行動が考えられる。58次調査地点では、大原Ｄ・元岡型にほぼ同じ使用痕が認められた（大森編2016）。52次調査地点の事例は、端部から始まる点では大原Ｄ・元岡型と同じであるが、剥片中央部に線状痕が形成されておらず、ほかの部位の使用痕も異なることから、全く同じ機能とは言えない。しかし、同じような行動を含むことは確かだと思われる。このような線状痕は、ほかのユニットには認められず、ユニットＤは58次調査地点のⅣ層と同じような特殊な活動が行われていた可能性が指摘できる。それは狩猟活動に関するもので、皮革加工に伴うものと考えられる。

線状痕の顕著さ、規則性を基準にすると、ユニットＤ→ユニットＡ→ユニットＢの順と思われる。ユニットＤは自然によって生じたと考えられるものは少なく、規則的な線状痕が観察できる。また、両面に認められるものも多い。土器も日常的な道具であることから、ユニットＤ・Ａの線状痕が顕著であることと相関している。ただ、土器が中央部に集中するユニットＡと端部（南側）に分布するユニットＤでは違いがある。ユニットＤは土器と石器の分布域が二分され、地点を異にしてそれぞれの行動が行われているのである。

ユニットＡ・Ｂは、空間の周辺部に線状痕ある石器が認められた。ほかの石器も考慮し、石器製作の周辺部でユニットＤと同じような行動がなされていると思われる。石器製作と一般的な日常空間が分離していないと考えられるのである。

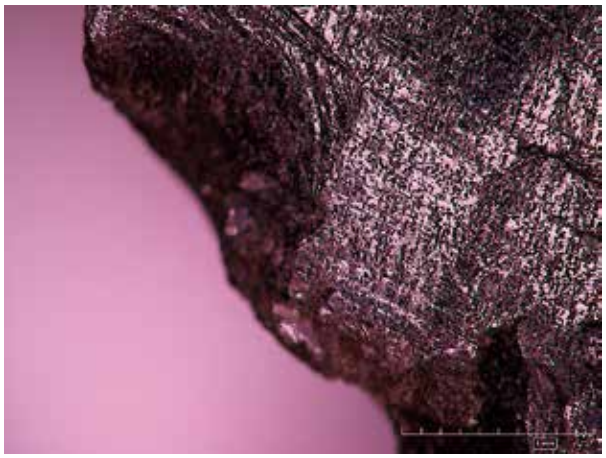
ここに紹介した資料が全て人類の行為によって生じたものでなく、自然的要因によるものもあるかも知れないが、規則性のある線状痕が認められるのも事実である。今後は調整痕あるいは微細剥離痕との関連など、多方向からのアプローチが必要とされよう。各種使用痕間の関連性を明らかにすることが必要なのである。また、使用痕がどのような行為によって生じたかを確定するため、実験的手法が必要なのかも知れない。

引用・参考文献（編著者五十音順）

大森麻衣子編2016『元岡・桑原遺跡群26―第58次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集

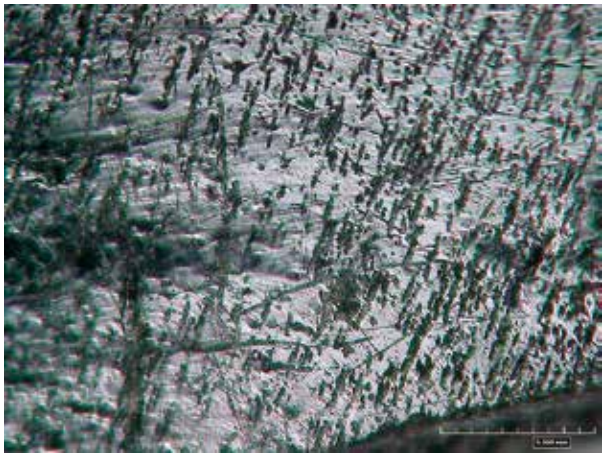
萩原博文2016「大原Ｄ・元岡型スクレーパーについて」（大森麻衣子編『元岡・桑原遺跡群26―第58次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集）

桝田祐三編2016『福井洞窟発掘調査報告書』（佐世保市教育委員会）



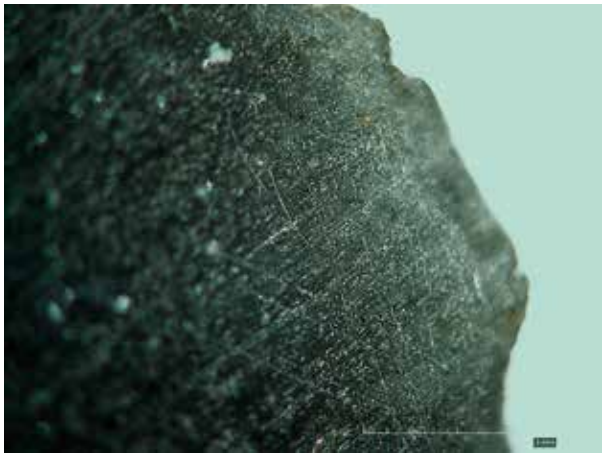
1　30（67）　30-2

4　51（65）　51-1- B

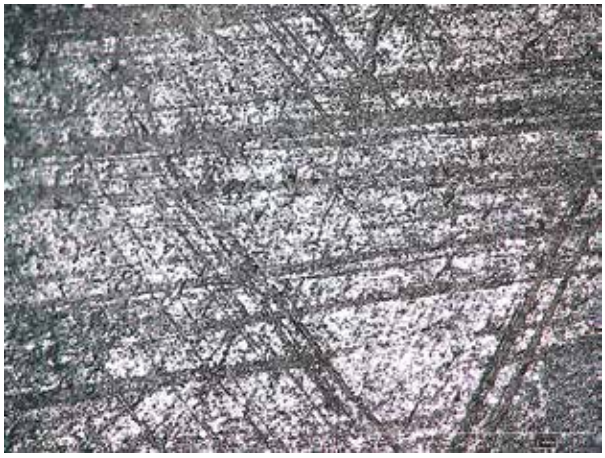


2　40（352）　40-10

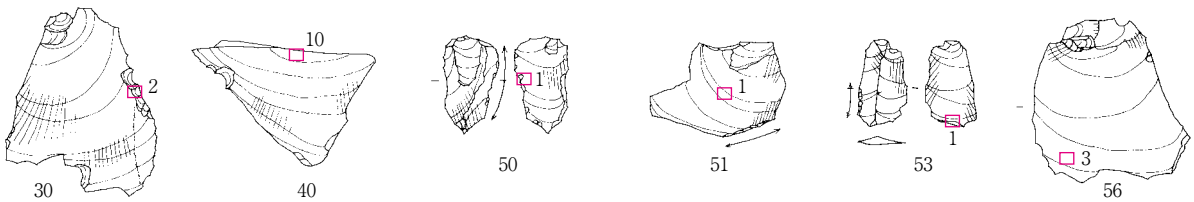
5　53（130）　53-1-2



3　50（344）　50-1-3

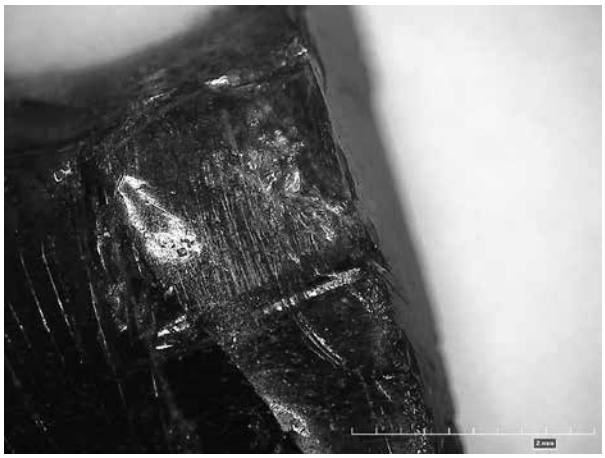


6　56（14）　56-3-2

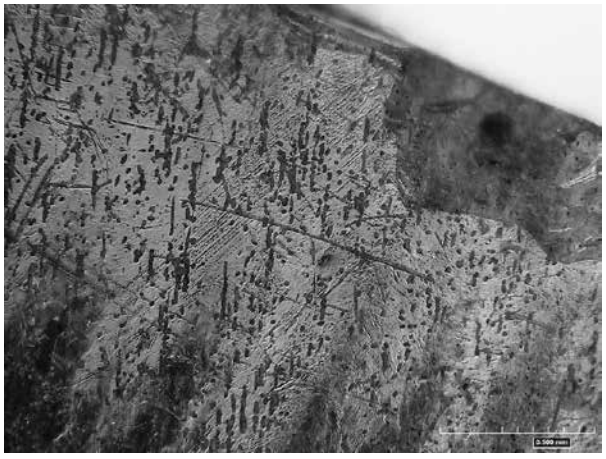


52 次調査地点出土石器使用痕写真（1）

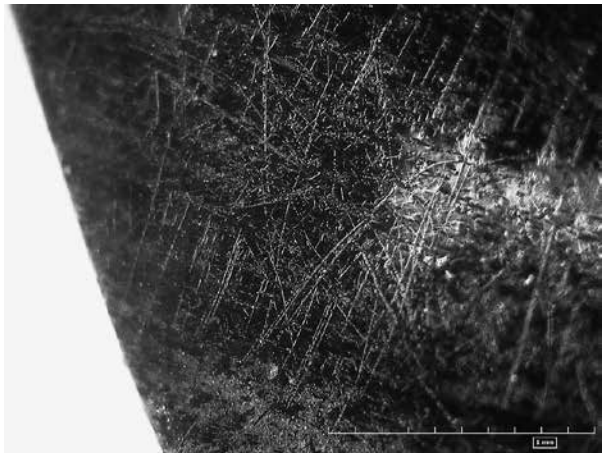
7　57（10）　57-6



10　79（11）　79-2

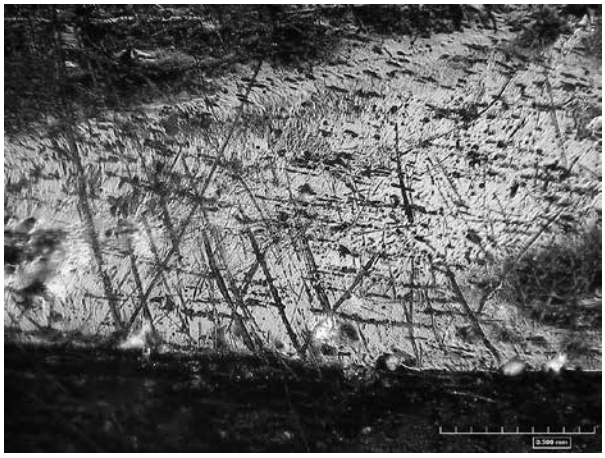


8　59（558）　59-2-3

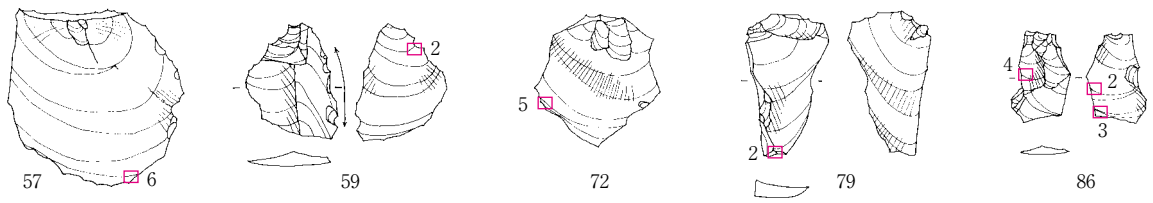


11－1　86（59）　86-2-3

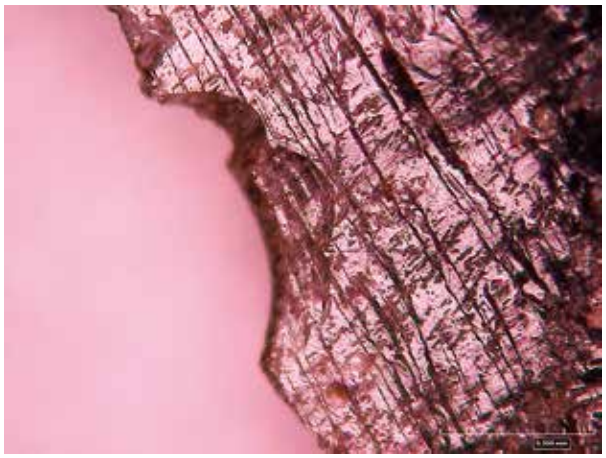
9　72（89）　72-5



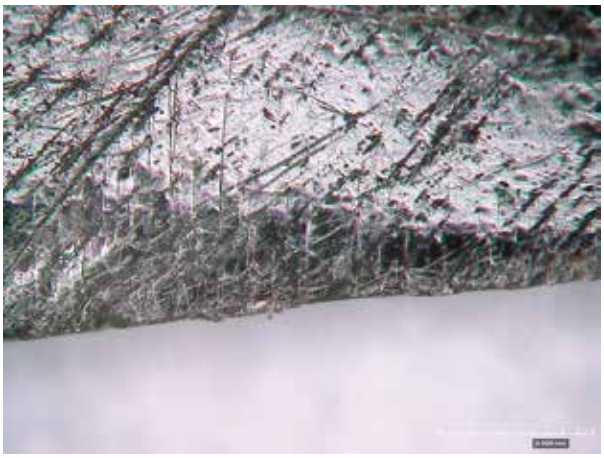
11－2　86（59）　86-3-4



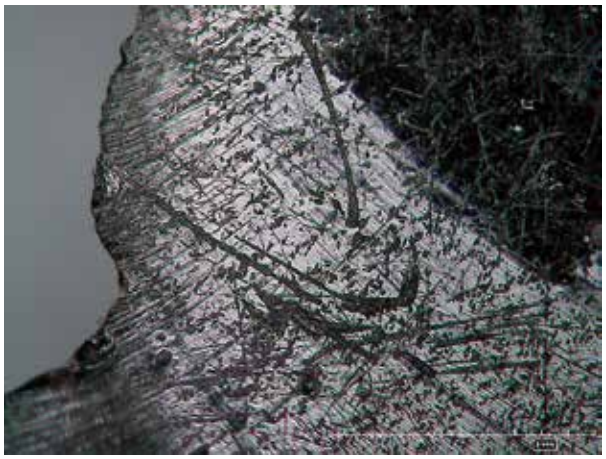
52 次調査地点出土石器使用痕写真（2）



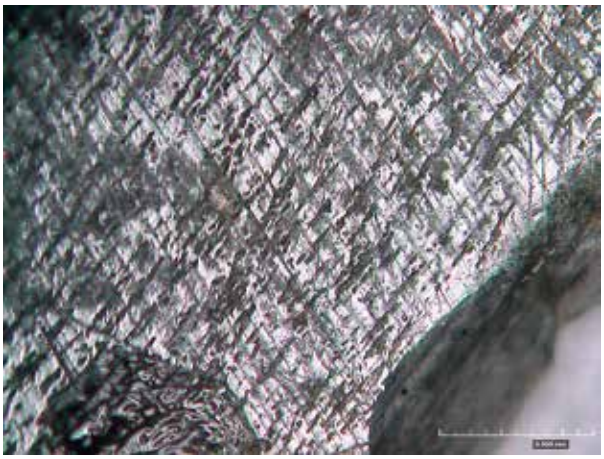
11 － 3　86（59）　86-4-3



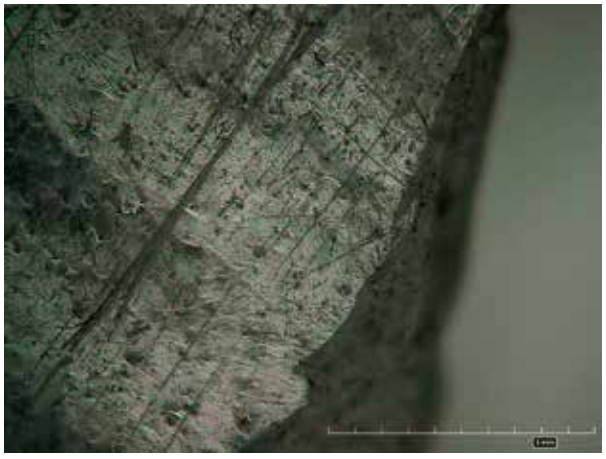
14 － 1　108（100）　108-1-3



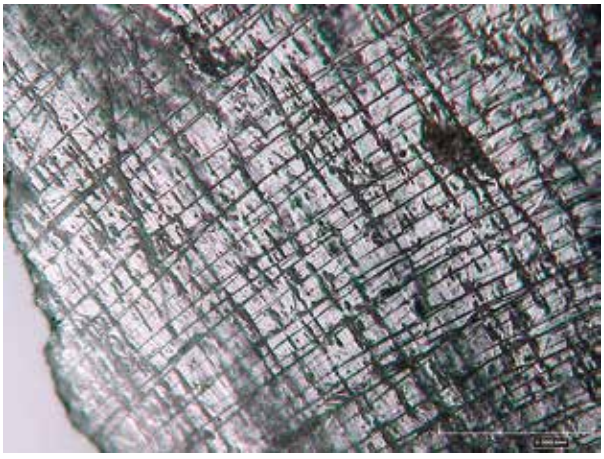
12　93（341）　93-1-3



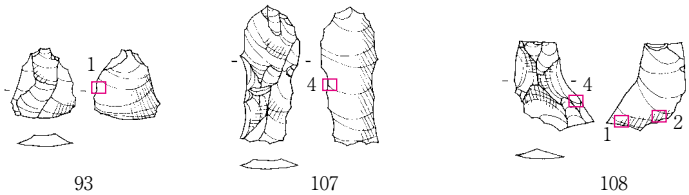
14 － 2　108（100）　108-2-3



13　107（99）　107-4



14 － 3　108（100）　108-4-3

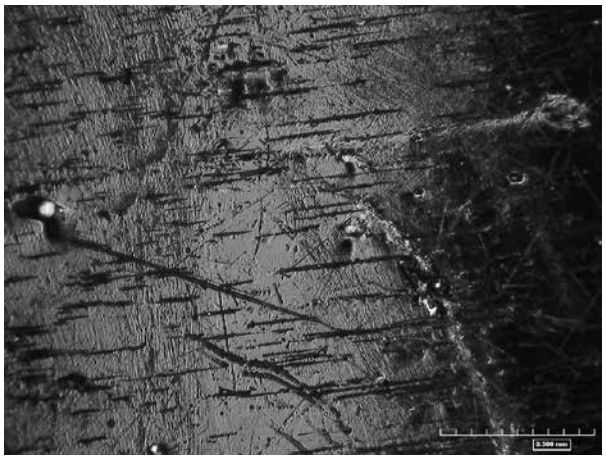


93　107　108

52 次調査地点出土石器使用痕写真（3）

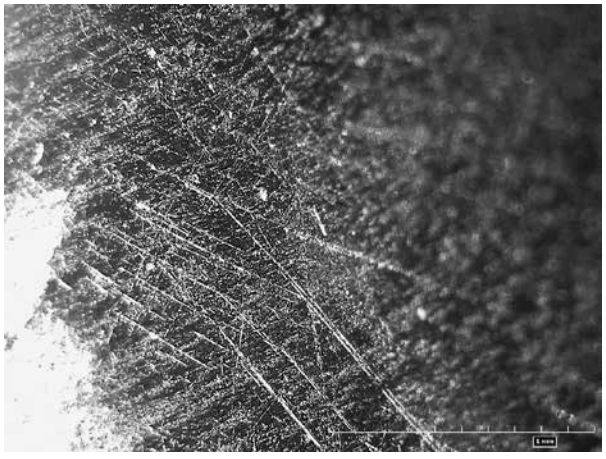
15　119（446）　119-1-3

17　145（75）　145-2-3



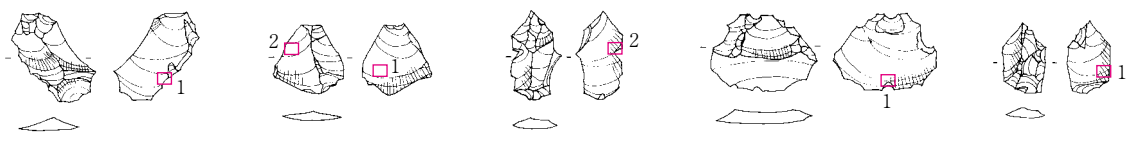
16 － 1　136（269）　136-1-3

18　159（133）　159-1-3



16 － 2　136（269）　136-2-3

19　166（253）　166-1-3



119　136　145　159　166

52 次調査地点出土石器使用痕写真（4）

５　出土遺物の特徴

前述の器種組成や石材組成、定形石器の形態的特徴、ユニット別遺物分布や使用痕、遺跡立地などを踏まえ、52次調査地点の石器を中心とする資料を総括したい。本石器群の特徴を導きだし、他の遺跡・文化層との比較検討の素材を提供したい。

①　遺跡の立地

本遺跡は､58次調査地点下流の沖積低地と接する緩やかな丘陵（河岸段丘）に立地しているが､元岡・桑原遺跡群の縄文時代初期遺跡では稀と言える。糸島半島では、傾斜のより急な上流の「崖下遺跡」に認められる場合が多い。崖下遺跡は、旧石器時代の石器や縄文時代草創期の細石刃石器群を共伴しているが、本地点の遺物包含層（各ユニット）には一切そのような古い遺物は認められない。しかし別に報告しているように、Ｄ－10･11区遺物密集区外側の自然流路などにこれらが混入しており、かつて近くの地点に古い包含層が存在していた可能性が考えられる。崖下遺跡は古い遺物が土壌ごと近くから運ばれているが、本地点はこれとは別の方法で堆積したものと思われる。古い河岸段丘との関係が、崖下遺跡とは異なると考えられるのである。

隣接する第42次調査地点では旧石器時代の泥炭層（19110±70 B.P）が確認されており（米倉2012）､本遺物集中の下位に旧石器時代の遺物が包含されている可能性が指摘できる。泥炭層の存在は、その周辺部の離水があまり進んでいない状況を示しており、湿地であるため、大規模な旧石器・細石器文化層が存在している可能性は低いと思われる。乾燥した限られた時期に、地域集団あるいはその一部が小規模に利用したと考えられる。元岡・桑原遺跡群では、旧石器時代の遺物は原位置で検出された例は極めて稀だが、多くの地点で多様な石器群が出土しており、当初の遺物包含状態を明らかにする必要があるのではないかと思われる。

崖下遺跡で最も古いのは大原Ｄ遺跡14区Ⅲ下層で､放射性炭素年代測定などから寒冷期（ヤンガー・ドリヤス期）の始まる頃に位置付けられる（池田ほか2003）。段丘礫層の形成はその直前と考えられ、その直後にこの新しい段丘に人類集団が住み始め、住居祉を建設したと考えられるのである。58次調査地点では、縄文時代早期の包含層中に草創期の細石刃石器群を含み、接合資料もある（大森編2016）ことから、近接する古段丘に包含されていたものと思われる。本遺跡はこれらの崖下遺跡より広い幅100ｍの谷部に形成されており、これらとは別の堆積環境が考えられる。後述のように本文化層は、大原Ｄ14区Ⅲ下層より古い可能性が高く、ヤンガー・ドリヤス期より古い堆積土に文化層が形成されているのである。

崖下遺跡が西北九州の洞窟・岩陰遺跡と類似するのに対し、本遺跡は旧石器時代に一般的な河岸段丘に立地する遺跡と言えよう。花崗岩風化土の傾斜地（段丘）に形成された崖下遺跡は、押型文土器期の温暖期に生じた土石流により長期間生活の痕跡が途絶えることになる。その下流に位置する本遺跡は直接の影響は少ないと考えられるが、縄文時代晩期以前に利用された形跡はなく、崖下遺跡と大きな違いはない。だが、地形や環境と遺跡形成の関係に関して研究が成熟しているとは言い難く、自然災害により破壊された遺跡も多いので、さらに検討が必要と思われる。

②　遺物分布と使用痕

3次調査地点や58次調査地点より、傾斜の少ない本遺跡のほうが原位置に近い状況と考えられ、当時の人間行動をより深く詳細に把握できると思われる。それは、出土位置や使用痕を分析することに

より明らかに出来ると考えられる。このような分野は研究が蓄積されていないため、特定の事項に対し明確な解釈をすることは出来ないが、事例を積み重ねることにより明らかにすることが出来ると思われる。

旧石器時代遺跡と良く似た遺物分布で、四つのユニットより成る。土器を含めた遺物数、その分布範囲、遺物の種類などを考慮すると、バンド（一般的な成員数の平均10家族50人）の構成員が揃った場所（ベースキャンプ）ではないと考えられる。住居祉や炉址・集石などの遺構もなく、石皿や磨石などの大形石器を組成せず、土器も少ないことから、少人数による短期的なキャンプと考えられる。遺物の大半が狩猟具とそれに関連する道具と考えられることから、短期に形成された狩猟キャンプと思われる。

遺物集中は、ユニットＡ・Ｂ・Ｃの連続する密集した分布と、ユニットＤ・ユニット外の疎らな分布に分離できる。前者は石器製作に係わる部分を含み、後者は主に日常活動を行っていた空間と考えられる。石核が認められないことから、石器素材生産は別地点（遺跡）で行われている。ところがユニットＡとＤは土器を共伴し、スクレーパーの割合が高いという共通点があり、石器製作を除くと同じような行動パターンであったと思われる。ユニットＡ・ＢとユニットＤは最も平らな部分である点も、最も重要な行動を行っていた地点と考えられるのである。

ユニットＡとＤの最も大きな違いは狩猟具にある。ユニットＡには大小様々な形態の石鏃16点、尖頭器3点が検出されているのである。完形品は極めて少なく、大半が破損品である。楔形石器も他のユニットには認められない。本ユニットは、大量の砕片の存在から狩猟具の製作が行われていたと考えられるが、完形に近い石鏃や多様なスクレーパー類を含むことから、その補修が行われていた可能性も指摘できる。大形の実用品とは思われない図14も含まれており、狩猟活動に関する何らかの精神的な行動がなされていたものと思われる。これに対しユニットＤは大形の破損品が1点のみで、スクレーパー類の形態的特徴も異なっている。図36のサイド・スクレーパーはユニットＡなどにも類例があるが、37･38は安山岩や花崗岩製の粗雑なものである。狩猟具に関する活動は、明らかに中心をなすものではないと考えられる。

石鏃や尖頭器など定形石器の破損が著しく、先端部や脚部などが欠損している。これらは製作中に生じたものもあるが、大半は使用時のものと考えられる。破損品は全てのユニットに認められ、ユニットＡ・Ｂ・Ｃでは石鏃等の製作活動が行われ、狩猟具の補充を実施していたと思われる。本遺跡は、狩猟を順調に進めるための空間であったのである。

またユニットＤには、やや幅広の浅く短い特徴的な線状痕の石器（57･使用痕ある石器、79･剥片）が近接して認められる。線状痕は、いずれも下端部に認められる。58次調査地点Ⅳ層の大原Ｄ・元岡型スクレーパー（Ｓ349･Ｓ352）の上下両端にも同じような使用痕が認められ、類似する行動が行われていた可能性が指摘できる。Ⅳ層も磨石のような大形石器は認められず、Ⅱ・Ⅲ層とは異なる空間利用であったと考えられ、同じような場の機能が考えられる。

しかし、52次調査地点は細調整を施していない剥片などに使用痕が認められ、3次調査地点ではサイド・スクレーパーに観察される。寒冷期に特徴的な大原Ｄ・元岡型スクレーパーは皮革加工のような特殊な行動が推定され、温暖期にはこれと異なる形態の石器で代用していた可能性が指摘できるのである。温暖期とはいえ冬場は相当寒く、動物の毛皮を用いた衣服は必要であったと考えられる。ユニットＤや58次調査地点ⅣＡ・Ｂユニットは、動物の毛皮製の衣服製作が行われていたと思われるのである。ただ、ユニットＤの資料や3次調査地点のサイド・スクレーパーは、正面や背面の中央付近に線状痕が確認されていない。また、他の部位の使用痕にも違いがある。よってこれらの石器の使用法は、

大原Ｄ・元岡型スクレーパーと同じとは言えないが、狩猟活動に伴うキャンプ・サイトで出土しており、狩猟に関連する行動に伴うものと思われる。

ユニットＡ・Ｂでは、やや大きめの砕片に顕著な使用痕が認められる。これは58次調査地点にもみられた（大森編2016）。ユニットＤも同様と思われるが、腰岳系の黒色黒曜石が少ないため線状痕を観察することが出来なかった。一般的に、剥片や砕片は使用することを目的にしていないが、細石刃文化期の福井洞窟でも細石刃や砕片など小さな石器にも顕著な使用痕が観察された（桝田編2016）。福井洞窟における遺物分布や使用痕分析から、小形石器の顕著な線状痕は炉址や骨片集中と相関し、小骨のキズ痕とも関連する可能性が高いことから、食事に係わるものと考えられる。本遺跡もその可能性が高く、石器製作時に生じた適当な砕片を使用したと考えられる。

③　出土石器の形態的特徴

石鏃は脚部がＵ字状をなすものが特徴的に認められ、尖頭器は薄く仕上げている。このような形態の狩猟具は北部九州に類例がないようである。特に、ハリ質安山岩製の石器は九州にはない形態と言える。図14は実用品ではないと思われるが、正面に研磨を施し、独特の形態に仕上げている。現在のところ、このような石器群は現在のところ周辺地域でも発見されていないが、九州外から齎されたものと思われる。

ところが、抉りの浅い特徴的な形態の15･21･22は、宮崎県の隆帯文土器と共伴する石鏃と類似しているようである（清武町教育委員会2005、宮崎県埋蔵文化財センター2006）。また、草創期末の大分県森の木遺跡（綿貫編2016）にも類例がある。抉りの浅い石鏃は西北九州の黒曜石を素材としており、主にハリ質安山岩を用いるＵ字状の脚部を持つものと違いがあり、形態による石材の使い分けが行われていた可能性がある。北部九州への移動前に製作していた道具に近い石材を用いたと考えられるのである。抉りの浅い石鏃は、北部九州に来てからで採用したものと思われる。ただし、Ｕ字状脚部を持つ石鏃の中でも図6と7は黒曜石製であり、九州化（黒曜石主体石器群）が進みつつあるのではないかと思われる。

石材による形態差は尖頭器にも認められ、図24（ハリ質安山岩）と25･26（黒曜石）では違いがあるようである。24が細く薄く仕上げており、細調整も丁寧である。磨りガラス状の針尾島（淀姫系）黒曜石はハリ質安山岩に近く、尖頭器2点が製作されている。スクレーパー類は大きな違いはないようであるが、図29･31･32のように丁寧に仕上げているのはハリ質安山岩製品である。特に31は平坦細調整と斜め細調整により丁寧な加工を加え、掻器と削器の両者の機能を併せ持つ石器としている。定形石器はハリ質安山岩製品が多いが（第８図）、全体では黒曜石それも腰岳系の黒色黒曜石が圧倒的割合を占めている。それは砕片の数に良く現れており、本遺跡で黒色黒曜石の剥片を用いて石器製作が行われたことを示している。石器素材も、次第に黒曜石化している様子が窺われる。砕片は黒曜石445点に対し、ハリ質安山岩74点なのである（第２表）。

石鏃は、ハリ質安山岩製の大形品が多いのが特徴である。福岡地方の縄文時代草創期末から早期前半の石鏃の多くは小形品であり、大形化するのは鍬形鏃の登場を待たなくてはならない。その点でも本石器群は特異である。形態的にも草創期終末段階は二等辺三角形、早期前半は逆ハート形を主体としている。このように、本石器群は周辺地域の石鏃との共通点が少ない。部分磨製石鏃は草創期末の大原Ｄ14区に少数認められ（池田ほか2003）、早期初頭の松木田3次調査地点で最盛期に達している（米倉2001）。また、部分磨製を含めた石槍の割合も高くなっている。松木田遺跡の石槍は、細身ではあるがやや厚手のものを主体とし、薄く仕上げている本遺跡のものとは異なっている。押型文土器段階に

なると、石槍の出土は極端に少なくなる。

スクレーパー類はサイド・スクレーパーを主体とし、ヤンガー・ドリヤス期に特徴的な大原Ｄ・元岡型スクレーパー（萩原2016）、黒曜石製小形円形スクレーパーは認められない。サイド・スクレーパーは温暖期を特徴づける形態であり、完新世の温暖化の始まる頃の松木田3次調査地点などで検出されており、後氷期の温暖期（ベーリング・アレレード期）にも認められる（萩原2016）。前述のように、本石器群は松木田遺跡の石器群とは石鏃や石槍の形態等で異なり、共通点が少ないことから同時期のものでない可能性が高い。撚糸文土器を主体とする松木田遺跡とは、土器の文様構成等においても異なるのである。

むしろ、ヤンガー・ドリヤス期以前の後氷期（アレレード期）に位置付けるべきと思われる。大原Ｄ14区Ⅲ下層より古く位置付けた方が、本石器群を良く説明できると思われる。この時期の石器群は北部九州では未検出であるが、南九州の隆帯文土器群最後半頃に位置付けられるのではないかと思われる。ただし、脚部Ｕ字状の石鏃は押型文土器文化期にも比較的類似した形態が認められ、その可能性が全くないとは言い切れない。

本石器群の時間的位置付けについては、主体的道具である石鏃や尖頭器の形態的特徴では行うことがかなり困難であった。同じ形態のものが、近隣に認められないからである。その代り、近年北部九州におけるスクレーパー類の時間的変遷が明らかにされており、その位置が推定可能になりつつある。また、スクレーパー類の使用痕も研究が進みつつあり、寒冷期と温暖期の違いが明らかにされようとしている。さらには土器においても、大原Ｄ14区Ⅲ下層の薄手無文土器（池田ほか2003）との関連が指摘できる。

引用・参考文献（編著者五十音順）

池田祐司ほか2003『大原Ｄ遺跡群４―大原Ｄ遺跡群第4次・第5次・第6次調査報告　縄文時代編―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第741集

大森麻衣子編2016『元岡・桑原遺跡群26―第58次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集

清武町教育委員会2005『上猪ノ原遺跡第5地区』清武町埋蔵文化財調査報告書第19集

萩原博文2016「大原Ｄ・元岡型スクレーパーについて」（大森麻衣子編『元岡・桑原遺跡群26―第58次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集）

宮崎県埋蔵文化財センター2006『東畦原第1遺跡（三・四次調査）』宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第128号

桝田祐三編2016『福井洞窟発掘調査報告書』佐世保市教育委員会

米倉秀紀2001『松木田遺跡群２―第3次下層（縄文時代早期）遺物編―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第686集

米倉秀紀2012『元岡・桑原遺跡群21―第42次調査の報告１―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1174集

綿貫俊一編2016『森の木遺跡発掘調査報告書』大分県教育庁埋蔵文化財センター

６　考察

（イ）　スクレーパーの使用痕

はじめに

福岡地方の縄文草創期・早期のスクレーパー類は、縦長素材の側辺に細調整を施したサイド・スクレーパー、大原Ｄ・元岡型スクレーパー、小形円形掻器に特徴があり、時間的な形態変化の著しい器種である。また、寒暖の変化を最も良く表している石器と言える。

円形掻器は大原Ｄ14区Ⅲ下層（池田ほか2003、大森編2016）に見るように、ヤンガー・ドリヤス期の初頭に西北九州産黒曜石を素材として大量生産され、その後終末期まで存続している。西北九州の黒曜石円礫と強く結びついた、特殊なスクレーパーと言えよう。

大原Ｄ・元岡型スクレーパーは、大原Ｄ15-3区（池田ほか2003）や元岡・桑原遺跡群58次調査区（大森編2016）のように、ヤンガー・ドリヤス期後半に定型化している。形状は一般的なエンド・スクレーパーやサム・スクレーパーに類似しているが、大原Ｄ14区Ⅲ下層以降の形態的発展を追うことが出来る貴重な型式と言えよう。定型化へ至る経過を追うことが出来るのである。

サイド・スクレーパーは温暖期に発達する器種（萩原2016）であり、完新世初頭には第34図の56・93のように特殊な形態が認められる。52次調査地点は、各種サイド・スクレーパーを中心に構成されており、温暖期の特徴を良く示していると言えよう。

元岡・桑原遺跡群52次調査地点はサイド・スクレ―パーの検出はあるが、他の型式が未検出のため3次調査地点（管波ほか2004）・58次調査地点（大森編2016）を加え、スクレーパー類の型式別使用痕（線状痕）の特徴を明らかにしたい。

①　サイド・スクレーパー（写真１～7-5）

写真により1点ごとに特徴的な線状痕を説明し、最後に各形態の特徴的な使用痕を説明し、それらの共通点を纏めることにする。

写真1（S265-2、58次）は表面にやや深い縦、横および交差する線状痕がみられる。写真2（S355-1、58次）は、上下方向にやや密に細く長い線状痕が形成されている。写真3（30-2-7、52次）は、刃部と直交・平行する細く浅い線状痕で、斜交するものは深く一部剥離面に及んでいる。写真4（35-1-1、52次）はフィッシャーとは別に、間隔の広い上下方向の線状痕がみられる。細いものと幅広のものがある。

写真5-1（3378-2-2､3次・160）は刃部とほぼ直交する細い線状痕で､5-2（3378-3-2）は刃部と平行・直交し密集する細い線状痕、5-3（3378-5-2）は上下方向の細い線状痕がみられる。各部位ともに、細い線状痕に特徴がある。

写真6-1（3398-1-2､3次・158）はフィッシャーと交差する細く浅い線状痕､6-2（3398-2-3）もフィッシャーと交差する部分的な細い線状痕、6-3（3398-3-2）は刃部と斜交するやや幅広の浅い線状痕、6-4（3398-4-3）はフィッシャーより細くそれと平行・斜交する線状痕。6-3は刃部より始まっており、微細剥離痕と関連すると考えられる。

写真7-1（3570-1-4、3次・165）は刃部と平行する細く浅い線状痕など、複雑なキズ痕が認められる。7-2（3570-2-3）は多方向かつ線の深さ・幅も多様であるが、一定の規則性が認められる。7-3（3570-3-2）は他とは異なり円形状をなすキズ痕である。背面中央部に認められる。7-4（3570-4-3）は刃部に直交するやや浅く細い線状痕で、刃部から1.5㍉程度まで認められる。微細剥離痕と関連する線状痕と

思われる。7-5（3570-5-1）は多方向の密集する線状痕であるが、一部のものには規則性が認められる。各部位で異なる形状の線状痕が認められる。

このようにサイド・スクレーパーは、浅い比較的密集した線状痕が多い。刃部と平行するものが多いが、斜交（あるいは直交）するものもある。複数の部位で観察されるものが多く、方向は異なるがほぼ同じような線状痕（写真5、3378）と部位により深さや太さが異なるもの（写真6・3398、写真7・3570）がある。微細剥離痕との関連が想定されるものもある。写真2（S 355）のように、風雨等の影響で転がることによって生じたと考えられるものもある。

② 大原D・元岡型スクレーパー（写真8-1～11-2）

写真8-1（S349-3、58次）はフィッシャーと交差するやや浅い0.05㍉以下の間隔で形成された線状痕で、背面上端部に認められる。8-2（S359-2-3）は、フィッシャーと交差する0.2㍉程度の間隔で顕在化している深い線状痕で、背面中央に認められる。8-3（S349-4-3）は細いフィッシャーと交差する写真8-2と同じような線状痕で、剥離面の内部に認められる。そのほか、刃部（背面下端部）と直交する浅いやや幅広の線状痕もある（S349-5）。これは、サイド・スクレーパーの写真6-3（3398-3-2）と類似する特徴的なものと言える。また、第52次調査地点の57（写真7）・79（写真10）とも類似する線状痕である。

写真9（S352-2-2、58次）は、背面下端部に認められる刃部とほぼ直交する浅い線状痕である。上端部にも同じような線状痕が、刃部とほぼ直交して認められる。これらはS349-5と同じような使用痕であり、石器の端部に形成されている。

写真10-1（3354-1-2、3次・149）は、それぞれ間隔の異なる交差する二種の線状痕が形成されている。10-2（S3354-3-2）は交差する浅く細い線状痕がみられ、その一部は剥離面に及んでいる。10-1は背面、10-2は正面に形成されている。

写真11-1（3600-1-4、3次・144）はやや細く浅い、短い線状痕が、正面中央部付近に認められる。11-2（3600-2-2）は刃部と斜交するやや幅広だが浅い、短い線状痕で、背面左側縁近くに認められる。部位は異なるが、S352-2（写真9）などと類似している。

一定方向に顕著な線状痕が認められる場合が多い。浅めのものが一般的であるが、S349（58次）は浅いものと深めの線状痕が認められる。刃部付近に認められるもの（S349・58次、S352・58次、3600・3次）があり、やや幅広の浅い線状痕に特徴がある。剥離痕とも関連し、サイド・スクレーパーの3398-3-2（写真6-3､3次・158）と類似している。顕著な線状痕が、石器の中央付近（S349-2-3・58次、3354-3・3次、3600・3次）や剥離面（S349-4-3・58次、3354-3-2・3次）内に認められる場合が多い。また、両面に形成されているのが特徴と言える。

③ 円形掻器（写真12～18）

写真12（S258-1-1、58次）は刃部と直交する細い線状痕が認められ、剥離痕と関連するものと思われる。写真13-1（3474-2-3、3次・141）は斜めに走る細く浅い線状痕で、背面中央部に認められる。13-2（3474-3-3）も同じような線状痕で、正面中央付近に認められる。

写真14-1（3605-1-2、3次・135）は自然的要因で形成されたと思われるが、刃部と直交するやや深い規則的な線状痕が認められる。14-2（3605-2-2）も同様だが、斜交する線状痕に規則的なものが認められる。写真15（3657-1-2、3次・137）はフィッシャー（太く深いもの）と斜交する細い線状痕がある。

写真16-1（3660-1-3、3次・129）は細い線状痕とそれと直交するやや太く深いものがある。16-2

（3660-2-4）は斜めに走る細い線状痕である。

写真17-1（3665-1-3、3次・136）は、刃部近くにそれと平行する深く太いものと直交する細く短い線状痕がある。前者の一部は剥離面にも及び、剥離面が形成された後も使用が継続されたことを示している。17-2（3665-2-3）は、刃部付近に太く深い二種の線状痕がみられるが、ヒトの関与があったのかは不明。斜交するものは、やや規則的に見える。17-3（3665-3-2）は刃部に斜交する線状痕で、一部これと交差するものもある。17-4（3665-4-3）は背面中央部に認められるもので、斜めのやや深めの線状痕とこれと交差するものがある。17-5（3665-5-2）は正面中央部に認められ、細く浅い線状痕が多方向に走っている。

18（3781-1-1、3次・138）は、刃部とほぼ平行するやや深めの線状痕が背面端部に確認される。剥離痕とも関連するものと考えられる。

浅く細めの線状痕に特徴があり、ほぼ全ての資料にみられる。写真17-1（3665-1）のように刃部と平行する深い線状痕もあるが、例外と言える。多くは刃部と関連する線状痕だが、中央付近の両面に認められるものもある。

④　温暖期と寒冷期のスクレーパー使用痕

スクレーパー類は安山岩などを素材とする場合が多く、線状痕が観察される場合が少ない。52次調査地点も例外でなく黒曜石の割合は少ないが、3次調査地点や58次調査地点の出土資料を加え、一定量の資料を観察することが出来た。そのため、類型・型式別の違いを検討することが可能となった。これらのスクレーパーの各型式は寒冷期と温暖期を特徴づける（萩原2016）ものであり、環境による使用痕の違いを明らかにできる可能性が指摘される。現状では明快に使用法を明らかにすることは出来ないが、大まかな寒暖差による違いを推定することは可能と言えよう。

サイド・スクレーパーは主に温暖期に発達し、写真3、5、6に代表されるような使用痕がみられる。写真3は多方向の線状痕で構成され、その細さや深さに違いがある。5はいずれもやや細めの線状痕で、刃部と平行しているものが多いが、直交するもの（写真5－1）もある。6も細い線状痕を主体とするが、刃部から連続するやや幅広の短い（1㍉以下）もの（写真6－3）がみられる。サイド・スクレーパーは、部位により線状痕の在り方に違いのある場合が多く、一つの石器で複数の行動が行われていた可能性が高い。これは、ほかの石器にも言えることではある。

他のエンド系のスクレーパーは、寒冷期（ヤンガー・ドリヤス期）を特徴づけるものである。大原D・元岡型スクレーパーは、写真8と11に代表される。8は、端部（写真8－1）と中央部（8－2、8－3）では線状痕の形状が異なっている。上端部（8－1）は、刃部から始まるやや細い密集した線状痕がみられ、下端はやや幅広で浅く短いものがみられ、両者で使用法は異なっている。中央部付近は剥離面内部を含め、幅広で深い線状痕（8－2､8－3）がみられる。11は背面刃部にやや幅広で短い線状痕（11－2）、正面中央部にやや幅広で浅いもの（11－1）がみられる。

円形スクレーパーは、写真16のように各部位に細く浅い線状痕がみられる。しかし写真17-1のように、剥離面にも及ぶ幅広で深い顕著な線状痕も認められる。

このように、各形態は共通点もあるが、違いも認められる。線状痕は平坦な面に形成される場合が多いため、背面に形成される例が多いが、正面に認められる場合もある。両面に形成されているものは、サイド・スクレーパー7点中2点、大原D・元岡型スクレーパー4点中2点、円形スクレーパー7点中2点で、大きな違いはない。幅広で深い顕著な線状痕は、サイド・スクレーパー1点、大原D・元岡型スクレーパー2点、円形スクレーパー1点である。刃部とほぼ直交する幅広で浅い特徴的な線状痕は、サ

イド・スクレーパー1点、大原D・元岡型3点、円形スクレーパーには認められなかった。ところが、52次調査地点の57-6（使用痕ある石器）、79-2（剥片）にも同じような線状痕が認められた。また、側辺などの（微細）剥離痕と関連するものは多くのスクレーパーに認められるが、中央部付近はサイド・スクレーパー2点（内1点は円形状のキズ痕）、大原D・元岡型3点、円形スクレーパー4点で、寒冷期のものの割合が高い。細調整痕の部位や線状痕を考慮すると、皮剥ぎや皮なめしのような行動が想定される。寒冷期は、その寒さを生き抜くため温かい衣服や住居が必要とされ、それを行うための道具として大原D・元岡型スクレーパーや円形スクレーパーが存在したのではないかと思われる。

寒冷期のスクレーパーは、写真8の大原D・元岡型スクレーパー、写真17の円形スクレーパーに代表されるように、幅や深さのある顕著な線状痕によって特徴づけられる。大原D・元岡型スクレーパーに特徴的なやや幅広で浅く、短い特徴的な線状痕（写真9、11－2）もこの時期の代表的なものかも知れない。ところが、温暖期と考えられる52次調査地点では、使用痕ある石器（57）や剥片（79）に類似する線状痕が認められた。これらはDユニットの近接した地点で検出されており、同じような行動に用いたと考えられる。58次調査地点Ⅳ層でも近接して大原D・元岡型が検出されており、近くで複数の「ヒト」が同じ作業を行っていたと考えられる。3次調査地点のサイド・スクレーパー（写真6-3）にも同様の使用痕が観察された。これらは、ほかの部位には異なる使用痕が認められることから、全く同じものではないが、一連の行動の中に同様の動作を含むものと考えられる。温暖期には、異なる形態の石器または細調整を行わないで、同じような行動をしていた可能性が指摘出来るのである。温暖期とはいえ冬季の寒さは相当厳しく、当然衣服は必要とされたと思われるが、それ専用の道具を持っていなかったと考えられる。だが、円形刃部スクレーパーが消滅する理由の説明は困難である。

寒冷期と温暖期では、スクレーパー類の形態的特徴に差のあることが明らかにされていた（萩原2016）。寒冷期には円形刃部スクレーパーが形を変えて登場し、温暖期には縦長のサイド・スクレーパーが認められるのである、本稿では使用痕（線状痕）からの追及を行ったが、思わぬ成果を得ることが出来た。温暖期にも寒冷期と同じような行動（作業）を、形態の異なる石器を用いて行っていた可能性が、示唆されたのである。しかしこの問題は結論を急ぐべきでなく、さらに詳細に検証する必要があると思われる。

資料が限定されているため充分なものではないが、環境（寒暖差）による大まかな傾向を示せたと思われる。今後さらに分析資料を増やし、研究を深めていく必要があると思われる。スクレーパーは寒暖差による形態変化が著しく（萩原2016）、それがいかなる行動によって生じたかを明らかにする必要がある。本稿は、その入口に立ったものである。

引用・参考文献（編著者五十音順）

池田祐司ほか2003『大原D遺跡群４―大原D遺跡群第4次・第5次・第6次調査報告　縄文時代編―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第741集

大森麻衣子編2016『元岡・桑原遺跡群26―第58次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集

管波正人ほか2004『元岡・桑原遺跡群３―第3･4･8･11次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集

萩原博文2016「大原D・元岡型スクレーパーについて」（大森麻衣子編『元岡・桑原遺跡群26―第58次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集）

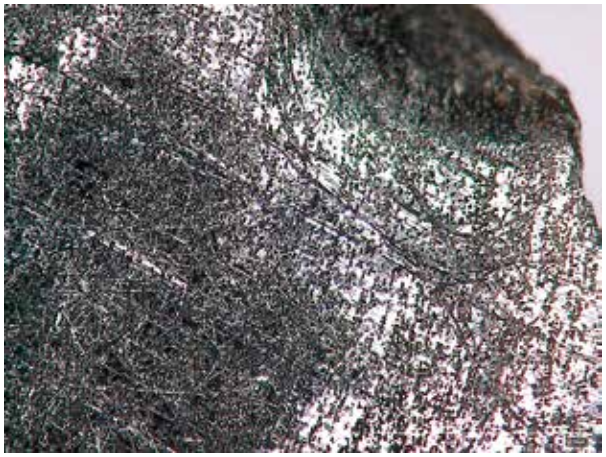
サイド・スクレーパー

1　S265-2（58 次）

4　35-1-1-（52 次）

2　S355-1（58 次）

5 － 1　3378-2-2（3 次・160）

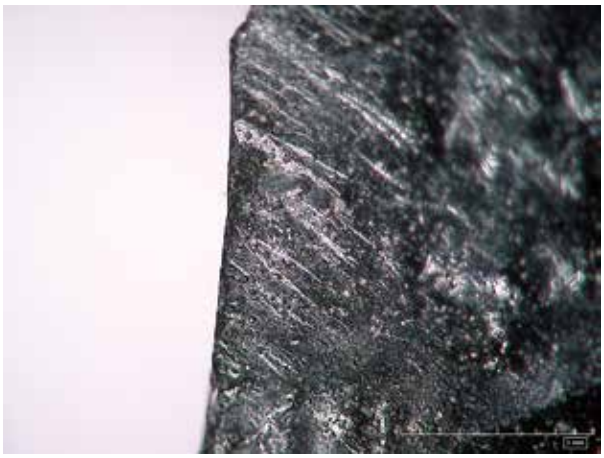


3　30-2-7（52 次）

5 － 2　3378-3-2（3 次・160）

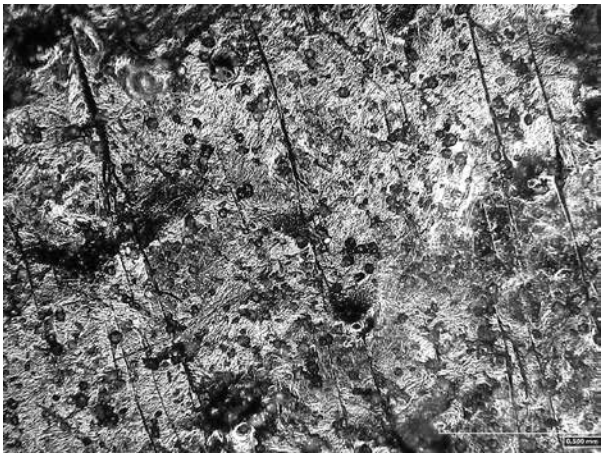
スクレーパー使用痕写真　1 ～ 5 － 2

5 － 3　3378-5-2（3 次・160）

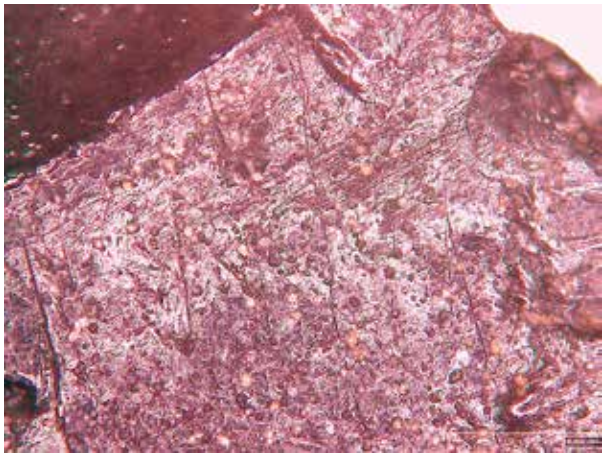


6 － 3　3398-3-2（3 次・158）

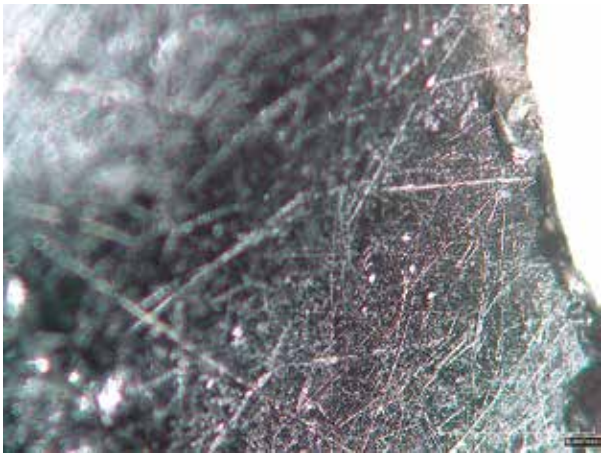
6 － 1　3398-1-2（3 次・158）



6 － 4　3398-4-3（3 次・158）

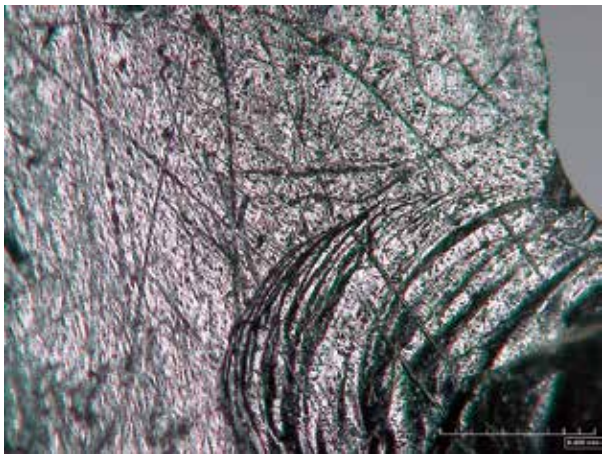


6 － 2　3398-2-3（3 次・158）



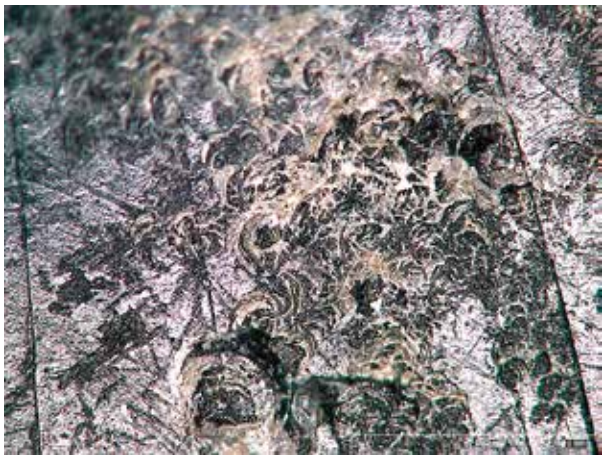
7 － 1　3570-1-4（3 次・165）

スクレーパー使用痕写真　5 － 3 ～ 7 － 1

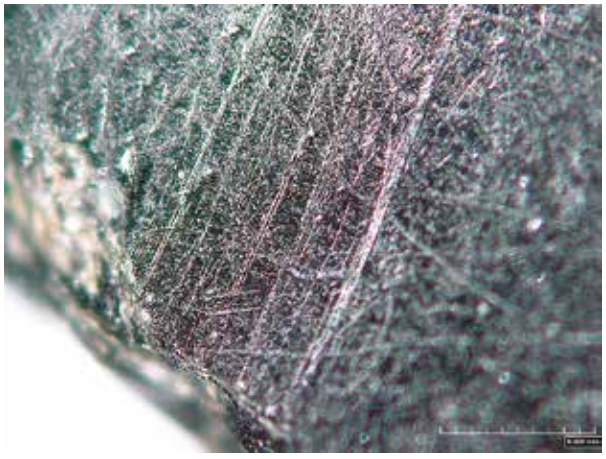


7 － 2　3570-2-3（3 次・165）

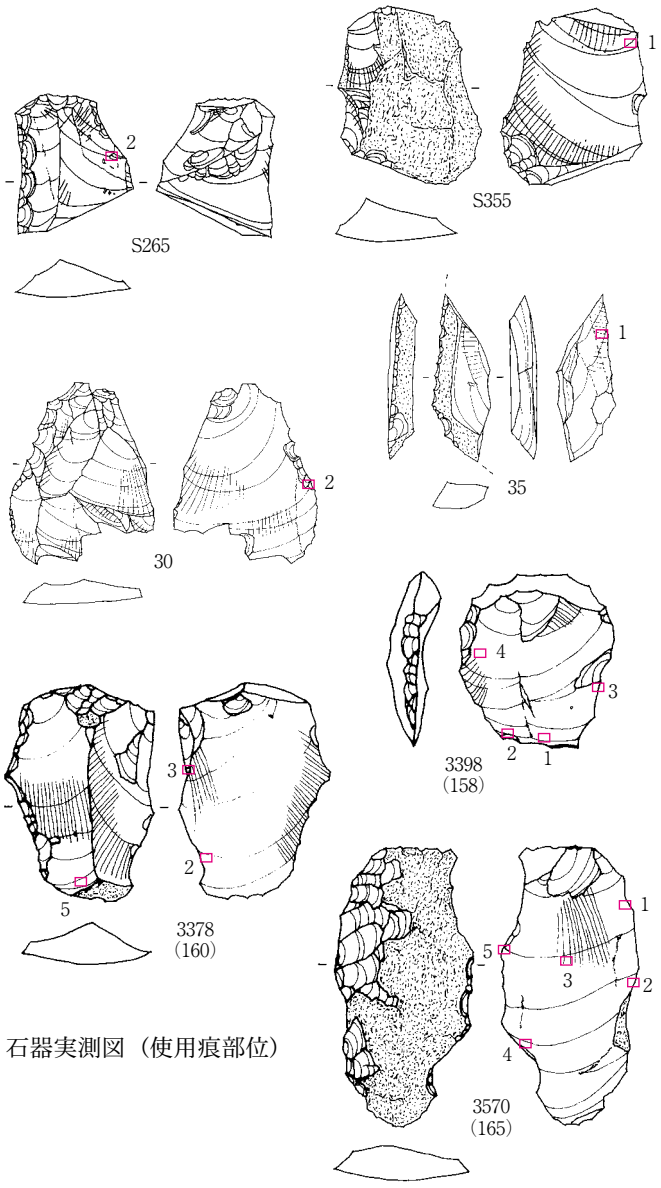
7 － 5　3570-5-1（3 次・165）



7 － 3　3570-3-2（3 次・165）



7 － 4　3570-4-3（3 次・165）



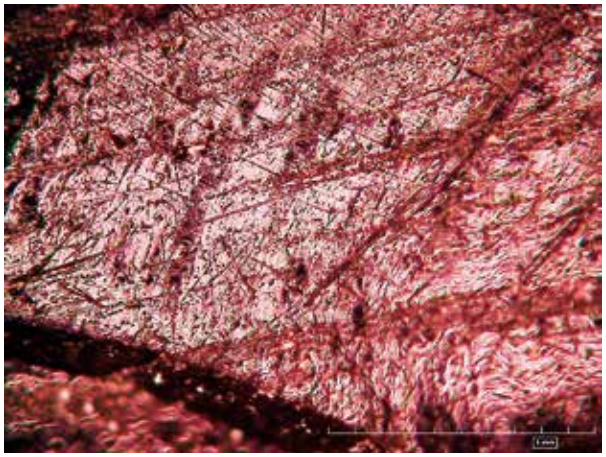
石器実測図（使用痕部位）

スクレーパー使用痕写真　7 － 2 ～ 7 － 5

大原Ｄ・元岡型スクレーパー

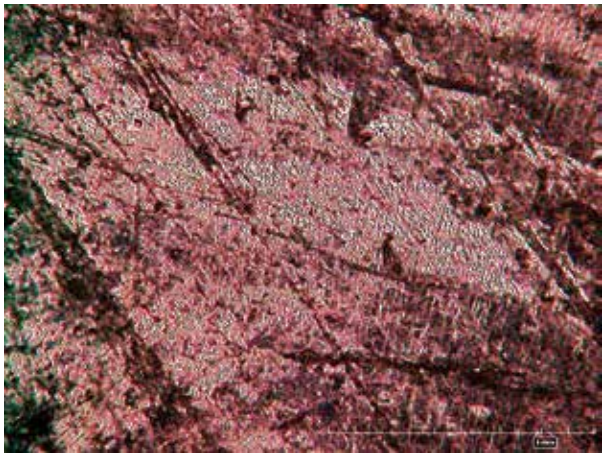
8 － 1　S349-3（58 次）

9　S352-2-2（58 次）

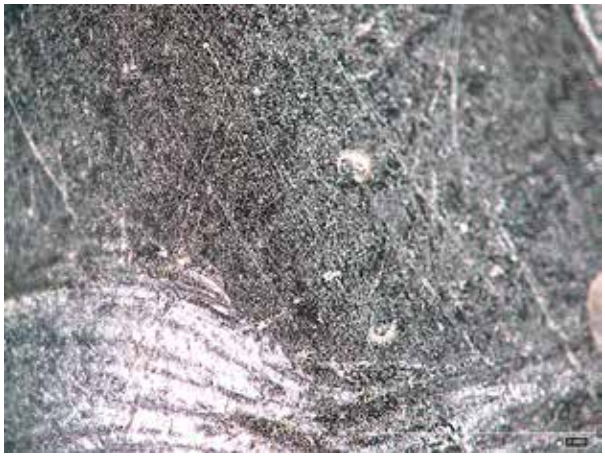


8 － 2　S349-2-3（58 次）

10 － 1　3354-1-2（3 次・149）



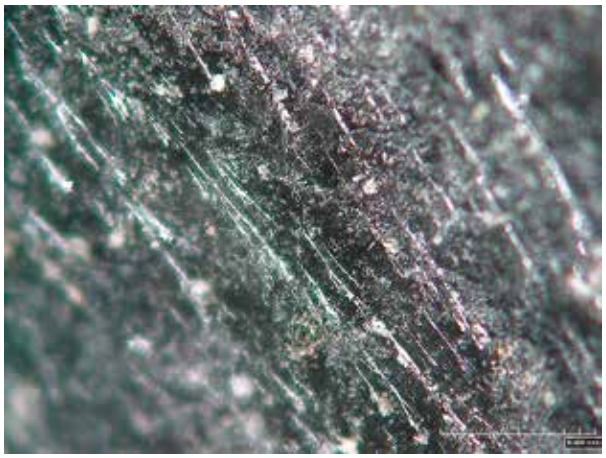
8 － 3　S349-4-3（58 次）



10 － 2　3354-3-2（3 次・149）

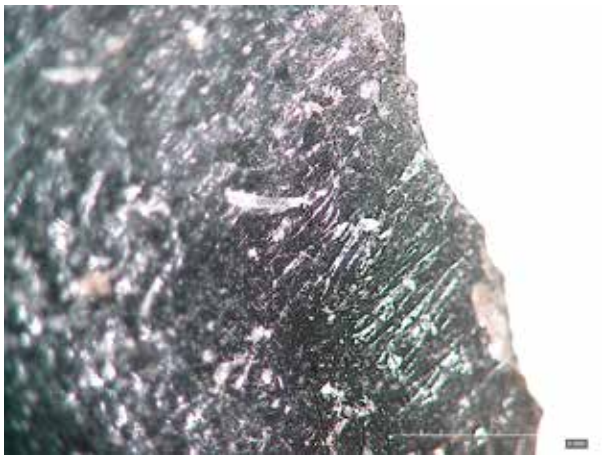
スクレーパー使用痕写真　8 － 1 ～ 10 － 2

円形スクレーパー

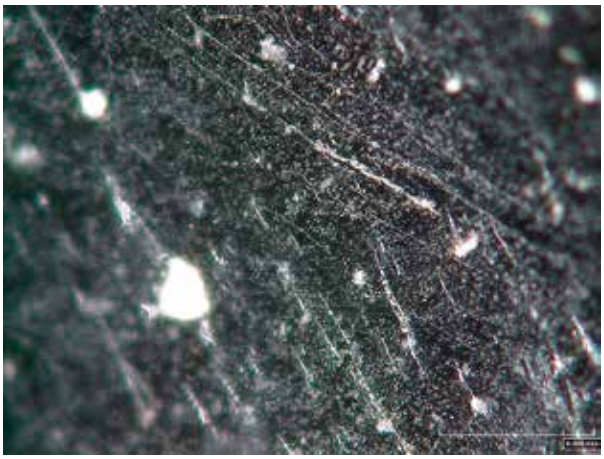


11 － 1　3600-1-4（3 次・144）

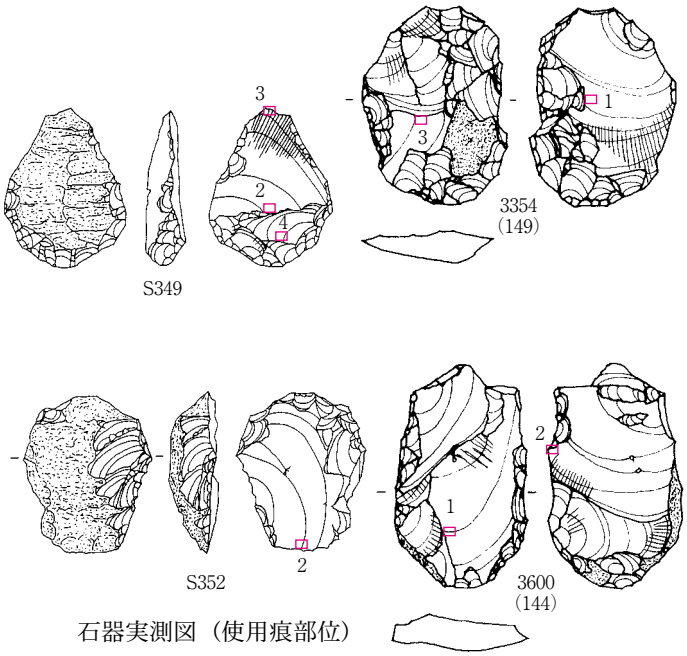
12　S258-1-1（58 次）



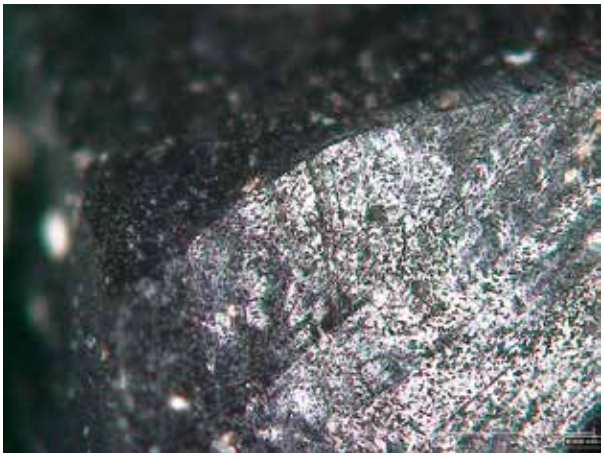
11 － 2　3600-2-2（3 次・144）



13 － 1　3474-2-3（3 次・141）



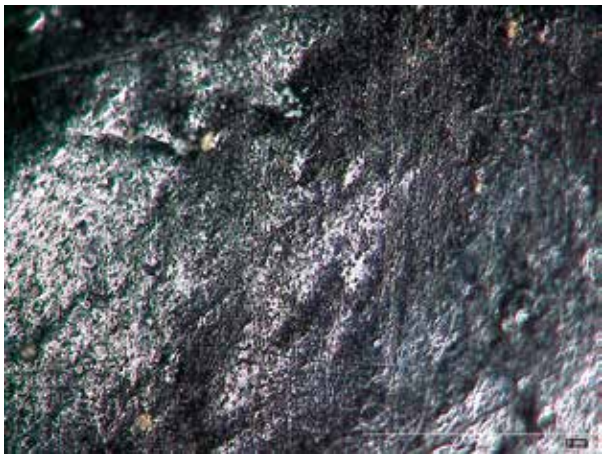
石器実測図（使用痕部位）



13 － 2　3474-3-3（3 次・141）

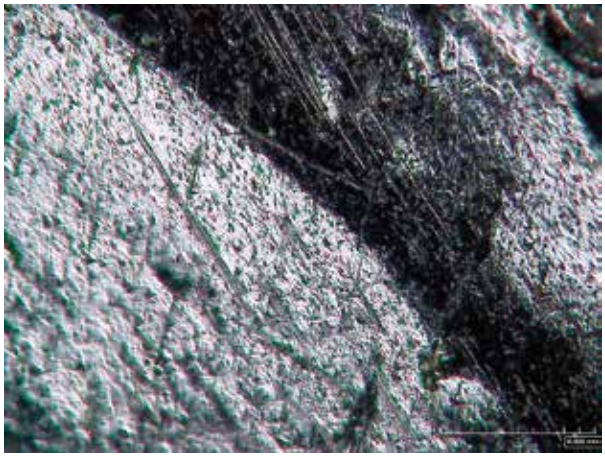
スクレーパー使用痕写真　11 － 1 ～ 13 － 2

14 － 1　3605-1-2（3 次・135）



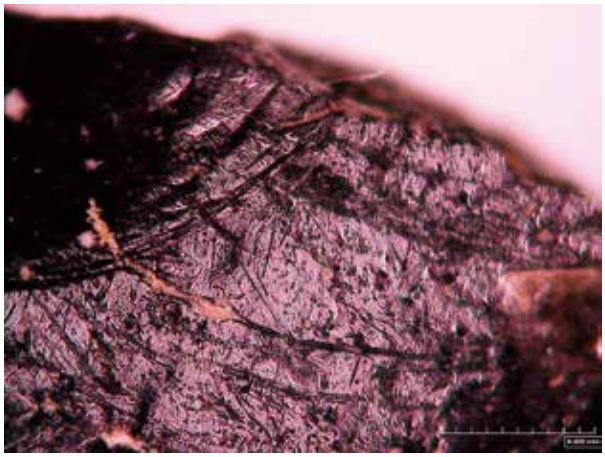
16 － 1　3660-1-3（3 次・129）

14 － 2　3605-2-2（3 次・135）



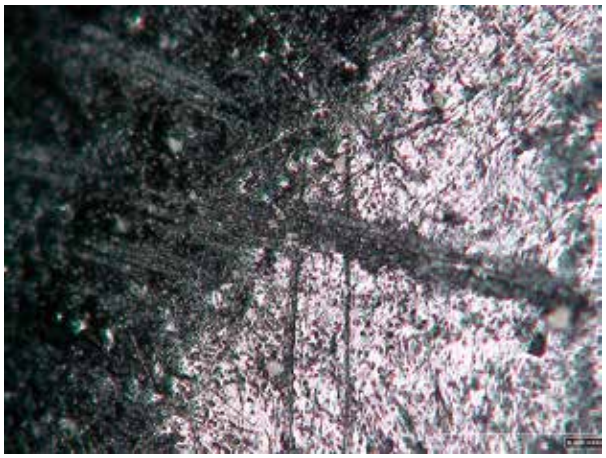
16 － 2　3660-2-4（3 次・129）

15　3657-1-2（3 次・137）

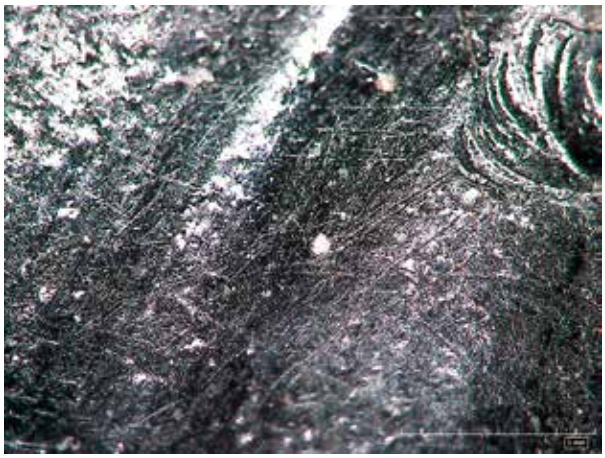


17 － 1　3665-1-3（3 次・136）

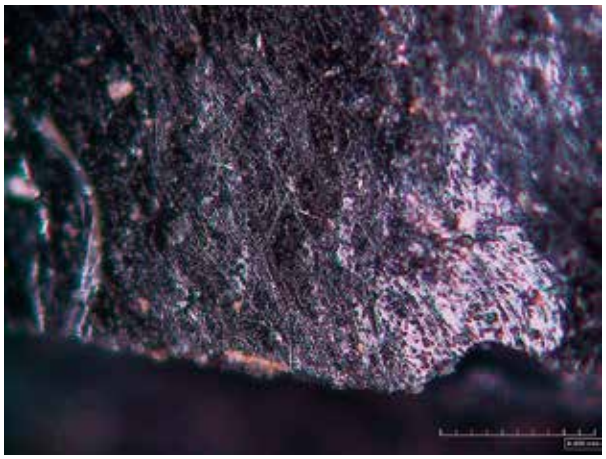
スクレーパー使用痕写真　14 － 1 ～ 17 － 1



17 － 2　3665-2-3（3 次・136）

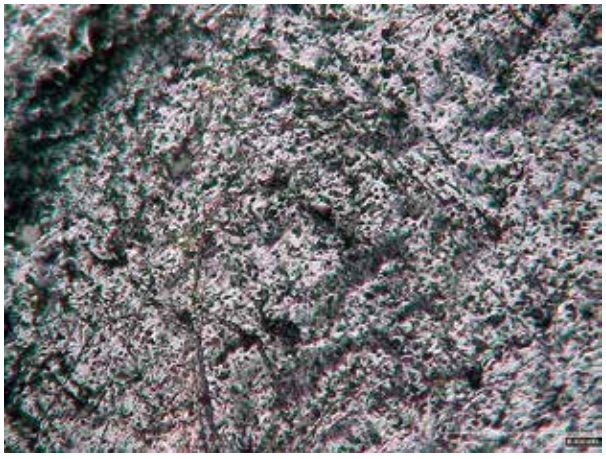


17 － 5　3665-5-2（3 次・136）

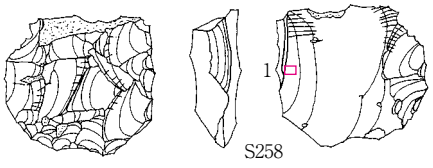


17 － 3　3665-3-2（3 次・136）

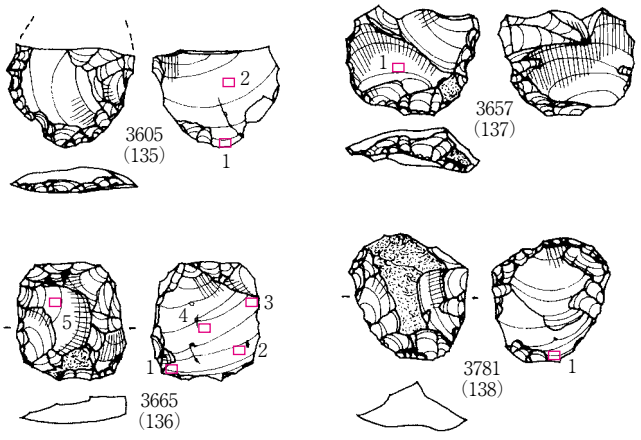
18　3781-1-1（3 次・138）

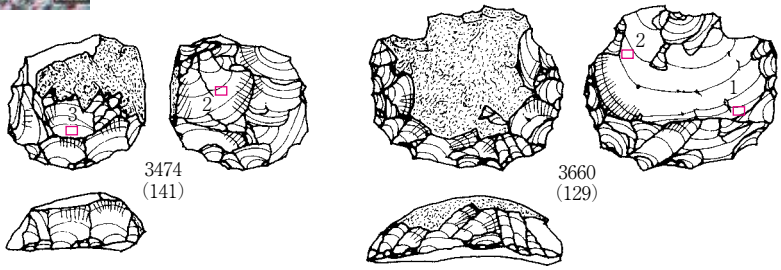


17 － 4　3665-4-3（3 次・136）



石器実測図（使用痕部位）





スクレーパー使用痕写真　17 － 2 ～ 18

（ロ） 第52次調査地点の編年的位置

はじめに

本石器群は北部九州に例のない特異なものと思われるが、石鏃の一部などに九州の石器群と共通する要素も認められることから、その中での編年的位置を明らかにすることは可能と思われる。そこで、本遺跡の立地する糸島半島の縄文時代草創期末（後期細石刃石器群以降）から早期前半以前の編年関係を明らかにし、それらの中で最も類似する遺跡・文化層を見出し、第52次調査地点の編年的位置を明確にしたい。

元岡・桑原遺跡群では、小規模河岸段丘に「崖下遺跡」と呼ぶべき特殊な環境下に発達した縄文時代初期（草創期末～早期前半）の居住の痕跡が認められ、各遺跡で複数の文化層が検出されている。特に第3次と58次調査地点において、縄文時代草創期・早期の多層遺跡が発掘調査されている。また、近隣の大原Ｄ遺跡群からも同様の多数の資料が発見されている。しかし、完新世の温暖化に伴い大規模土石流が広範囲に発生し、この地方から人類の痕跡が途絶えたのである。各遺跡で再び人類が姿を現すのは、かなりの時間が経過してからである。

ここでは、これらを詳細に検討し、第52次調査地点との比較を行いたい。これらの遺跡群では、縄文時代の堆積土中より旧石器時代や細石器文化の石器が検出されている。磨滅痕があまり認められず、接合資料もあることから、近くから土壌ごと運ばれたと考えられる。旧石器時代や細石器文化の段丘堆積物が、近くに存在していると考えられるのである。古い堆積物を削って形成された新しい小規模段丘に形成された縄文時代初頭の遺跡は、大規模土石流によって覆われ、暫く人類の痕跡が絶えている。このため、断続的に人類によって利用された遺跡群と言える。特に縄文時代草創期から早期前半にかけて、当時の人類集団にとって良好な環境だと思われ、多数の文化層が形成されている。西北九州の洞窟遺跡と同様、当時の人類に好まれたのである。

第52次調査地点はこれらの下流に位置し、やや規模の大きい幅約100ｍの谷部に形成された段丘上の傾斜の緩やかな地点に遺物が包含されている。このような立地条件では、現在のところ本遺跡以外には縄文時代初頭の文化層は発見されていない。大雨の時には冠水する可能性が高いため、長期に及ぶ大規模遺跡は形成されなかったものと思われる。しかし、原位置に近い状況での検出という研究上の好条件を備えており、今後の発見が期待される。

① 元岡・桑原遺跡群第58次調査地点（第30図）

第52次調査地点上流部の、標高30～34ｍの小規模な河岸段丘上に立地している。約200㎡という小規模な調査にも係わらず、良好な複数の文化層が検出された（大森編2016）。最下層のⅣ層やⅢ③層の一部は寒冷期に特有の灰色系の土壌に包含されており、堆積土の色調においてもヤンガー・ドリヤス期の所産である可能性が指摘できる。52次調査地点に比べ、凹石、磨石、石斧などの大形石器を多く含み、土器の数量も多いことから、比較的長期間利用された遺跡と思われる。住居祉は認められないが、石組炉や埋納遺構が検出されている。第3次調査地点の押型文土器文化層下位の土石流堆積物は、第Ⅰ層より新しい堆積物と考えられる。

Ⅳ層とⅢ③層は寒冷期（ヤンガー・ドリヤス期）の所産と考えられ、典型的な円形掻器（図81・82）、大原Ｄ・元岡型スクレーパー（83・84）を組成している。円形掻器は、大原Ｄ遺跡14区Ⅲ層に比べると大形になっている。大原Ｄ・元岡型スクレーパーは、下端部の斜め細調整に加え側辺部（斜め細調整）や背面（平坦細調整）にも加工が施され、完成された整った形態で、図83は刃部付近や背

面中央付近に顕著な使用痕（線状痕）が認められる。スクレーパー類の割合は上位の温暖期文化層に比べ高いが、大原Ｄ14区Ⅲ層や同15－3区よりも低い。条痕文土器、刺突文土器に加え撚糸文土器が組成されている。条痕文や撚糸文が横方向や斜めに施されており、古い様相と思われる。本遺跡では、上層ほど縦方向条痕文を施文している。

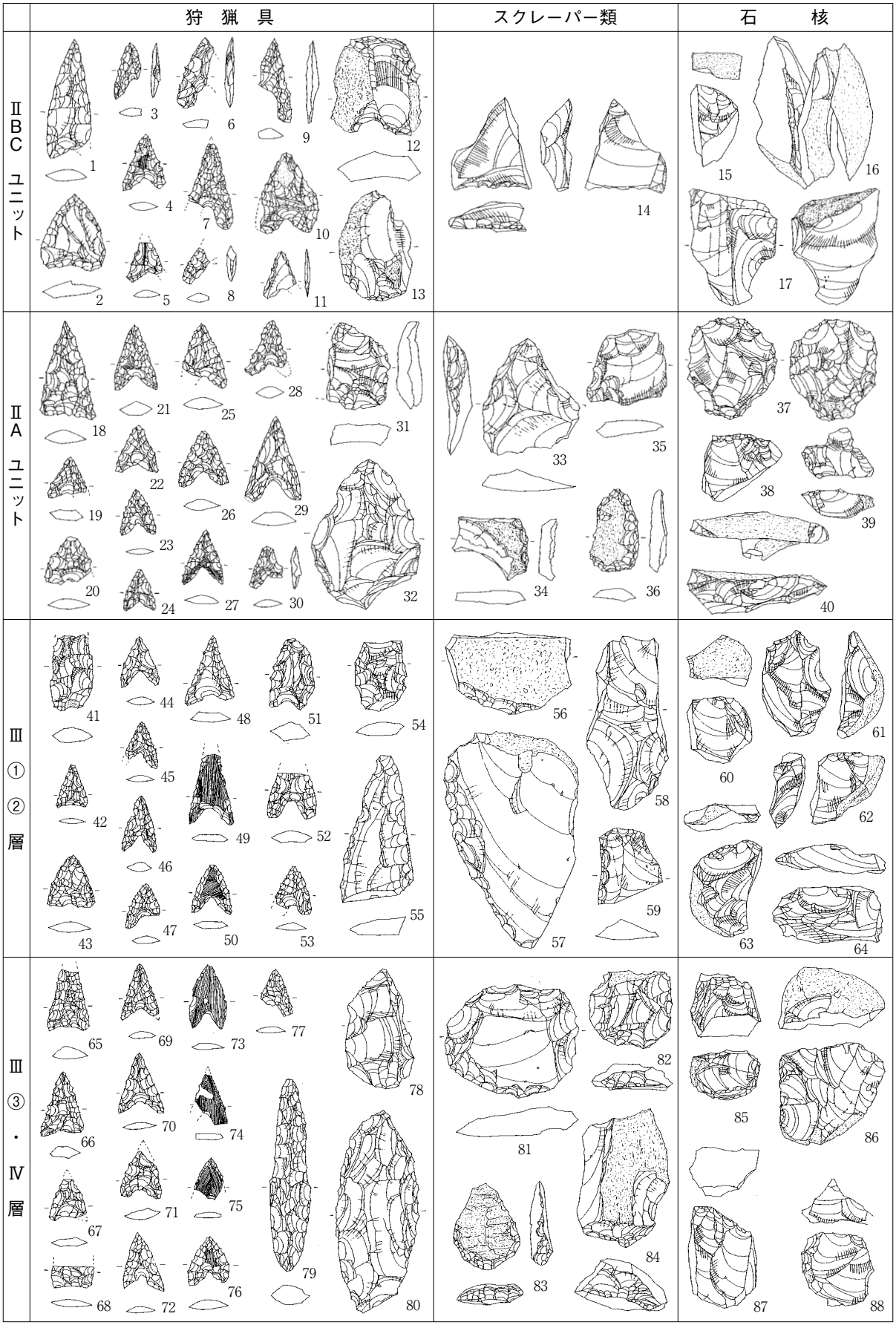
石鏃は抉りの殆どない三角形鏃（67）、細長石鏃（65･66）よりも深い抉りを入れたもの（69～77）の割合が高い。抉りへの細調整の最後に深い特徴的な加工を加えたもの（72）は、大分県二日市洞穴第8文化層（橘1980）に類例がある。部分磨製石鏃（73～76）も一定量組成されている。石槍は定形化しており、細長のもの（79）とやや幅広のもの（80）がある。石核は打面転移石核（85･87･88）や周辺加撃（求心状剥離）石核（86）が検出されている。上層の剥片素材の石核に比べると厚いものが多く、礫素材が多かったと思われる。

Ⅲ①②層は小円形刺突文（①－1類）土器が新たに組成される。スクレーパー類は劇的に変化し、サイド・スクレーパー（57～59）が目立つ存在となり、円形掻器や大原Ｄ・元岡型スクレーパーは消滅している。特に大形の57のような形態のサイド・スクレーパーは寒冷期には存在せず、新しい型式と言える。松木田遺跡群第3次調査地点でも検出されている（第34図･93～95）。抉りの浅い三角形鏃（41～43）も認められるが、大原Ｄ14区Ⅱ層などにみられた細長の特徴的な形態は姿を消しているように思える。抉りの深い石鏃（44～53）は、Ⅳ・Ⅲ③層が脚部の尖るもの主体なのに対し、丸味を帯びるもの（47･48･52･53）の割合が高くなる。部分磨製石鏃（49･50）も認められるが、Ⅳ・Ⅲ③層に比べるとその割合は低くなっている。定形的な石槍は認められず、粗雑な調整を施したもの（55）が組成されている。石核は周辺加撃石核（61･63･64）、打面転移石核（60･62）などがあるが、両面に剥片剥離を行ったものや剥片素材品が多くなるようである。本文化層は柏原Ｆ遺跡Ⅲ層（山崎ほか1983）の一部と良く類似しており、押型文土器出現直前頃と考えられる。

Ⅱ層ⅡＡユニットは、押型文土器の出現によって下層と画期される。大分県の川原田式に匹敵する九州最古の押型文土器である（大森編2016）。スクレーパー類は、不定形剥片を素材とするサイド・スクレーパー（33～35）が主体であるが、36のような小形エンド・スクレーパーを組成している。温暖期ではあるが、刃部円形掻器を使用する行動があったと思われる。三角形鏃（18～20）や脚部の尖るもの（21～25）、部分磨製石鏃（27）も認められるが、鍬形鏃（28･29）が出現し大型化する。典型的石槍は認められず、不定形のもの（32）がみられる。石核は両面に剥片剥離を行う円盤状のもの（37）を組成し、側辺部に目的剥片剥離を行う特徴的なもの（38～40）がみられる。

ⅡＢ・Ｃユニットの押型文土器は、大分県の稲荷山式古相段階に対比できる。スクレーパー類に定形的なものは認められず（14）、刃部円形掻器も存在しない。石鏃は細長の大久保（帖地）型（1）、大形の三角形鏃（2）、脚部の尖るもの（3）もあるが、鍬形鏃（6～9）が主体を占めている。異型石器（12）や不定形の尖頭状石器（13）も検出されている。異型石器は、異型部分磨製石器の影響を受けているように思える。佐世保市針尾島中町産黒曜石原石のデポが検出され、その中には分割剥片の接合資料（16）も認められた。1層のデポには腰岳産の大形黒曜石1個が埋納されていることから、この間石材や石核素材に変化の兆しが認められる。剥片製石核（17）が、下層や大原Ｄ14区に比べその割合が増しているように思われる。同じような事例は、柏原Ｆ遺跡でも認められる（山崎編1983）。周辺加撃石核（求心状剥離石核）より主に石鏃用の薄手剥片を生産していたものと思われる。Ⅱ層最新段階のＣユニット、1号石組炉の放射性炭素年代は8850～8900BP（約10100calBP）であり、福岡地方押型文土器初源段階の基準となる年代値と言える。

本遺跡は、縄文時代早期初頭の土器の変遷と石鏃など狩猟具、スクレーパー類の変化を追える貴重



第 30 図　元岡・桑原遺跡群 58 次調査地点における石器群の変遷（縮尺　1/2）

な存在である。寒冷期にあたるヤンガー・ドリヤス期末から、急激に温暖化する完新世初頭の状況が良く示されているのである。寒暖の差を最も良く表しているのはスクレーパーであるが、土器は古いものの残存と共に新しい要素が次々と現れ、短期間の文化変化を良く示している。石鏃も抉りのない二等辺三角形より、脚部の尖るもの、脚部が丸味を帯びるもの、鍬形鏃という新しい要素が出現している。石槍はヤンガー・ドリヤス期末の段階で形態的に完成しており、その後温暖化と共に急激に衰えるようである。石核は保守的な存在であるが、押型文土器出現の頃、腰岳産黒曜石の剥片素材が主体を占めるようになると思われる。薄い素材が好まれるようになったと思われる。この頃は、大原D遺跡14区のようなスクレーパー類の素材には用いられなくなったと思われる。このように、石核は時間をかけて変化の兆しが認められるのである。

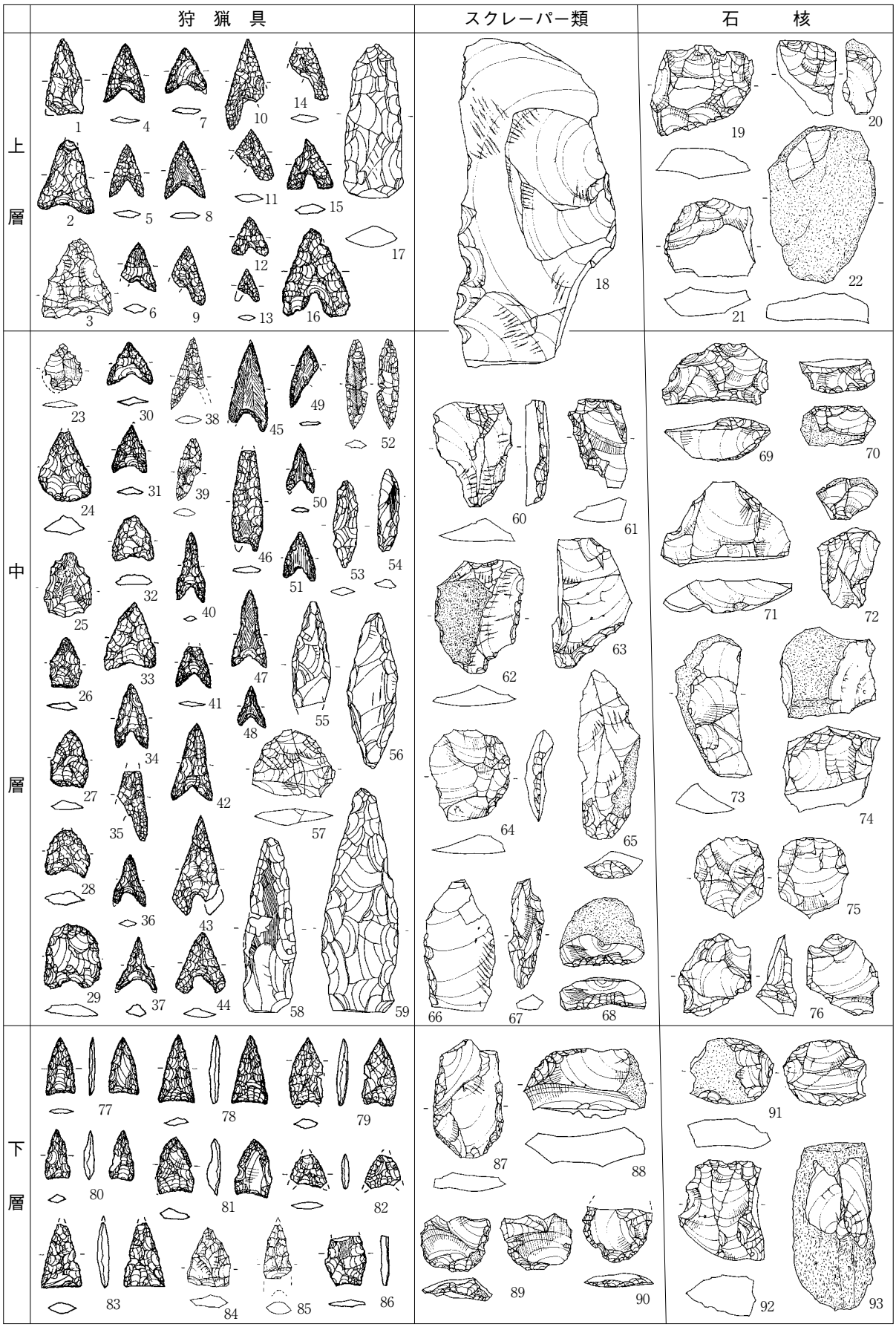
② 元岡・桑原遺跡群3次調査地点（第31図、第35～53図）

標高13～19mの狭い段丘上に立地し、集石遺構や炉穴に伴って縄文時代草創期末から早期押型文土器までの複数の文化層が検出された（管波ほか2004）。標高は52次調査地点と大きな違いはないが、遺跡のあり方は58次調査地点や大原D遺跡群と類似している。58次調査地点では接合資料の検討により、各層間で遺物の混在が認められた。標高の高い地点より、低い場所に転がる事例が多かった。3次調査地点の接合資料はないが、石器の稜などに磨滅した痕跡が認められ、原位置を大きく離れたものも存在していると考えられる。それは石器の型式学においても確認でき、古いものが上位の文化層に包含されているものも相当数存在しているものと思われる。なお、調査担当者のご厚意により未発表資料の一部公表が許されたので、スクレーパー類や石核、石鏃、楔形石器を中心に図化し（第35～53図）、石器観察表（第６～11表）を掲載している。これにより、定形石器の大半は図化しており、石器群の内容が明らかになったと思われる。

出土土器の器形や文様構成、石器の形態的特徴、遺構の出土レベルなどから、大きく三時期に分類できる。下層は、大原D14区とほぼ同時期の上げ底底部の条痕文土器の文化層で、草創期末に編年される。中層は撚糸文土器などを含む文化層で、広い範囲から最も多量の遺物が検出されている。垂直分布も上下に及ぶことから、複数の生活面があるものと思われる。中層に属する遺構の放射性炭素年代測定値は､9245～9405BPの範囲である。早期初頭の松木田遺跡（米倉2001）とほぼ同時期と思われ､58次調査地点Ⅲ①②層より古く位置付けられよう。上層は中層との間を明確に分ける土石流堆積物の上位に位置し、押型文土器（稲荷山式、早水台式、下菅生B式）などが認められ、複数の生活面より成りたっているものと思われる。放射性炭素年代測定値は、8495～8675BPである。58次調査地点Ⅰ層より上位の資料と言える。

下層（第31図、77～93）は、上げ底土器の出土状況から少なくとも36～38区下層に包含層があるものと想定できる。底部が上げ底の条痕文土器は、36Ⅰ区９層、38Ｇ区10層より検出されている。三角形鏃も36Ｇ9層、37Ｇ10層、38Ｇ10層などに位置することから、この地点の標高の高い部分に包含されていたと思われる。しかし、三角形鏃はこれより広範囲に分布し、小形円形掻器、大原D・元岡型スクレーパー類似品の分布域も広いことから、最初にこの地に来た集団はかなり広い空間を利用していたものと思われる。例えば、小形円形掻器は38Ｇ10層、39Ｊ8層、41Ｑ8層など30Ｋ区から46Ｐ区、大原D・元岡型は18Ｊ、29M、31Ｊ、47Ｐにも認められる。これらの一部は中層に浮き上がった状態のものであり、原位置を離れたものも多い。

石鏃は抉りのない小形二等辺三角形のもの（77･78･80･83）が主体で、三角形（81･84）、やや抉りのあるもの（79･82）、五角形状のもの（86）などがある。ほぼ大原D14区Ⅱ層と同じで、正三角



第 31 図　元岡・桑原遺跡群 3 次調査地点における石器群の変遷（縮尺　1/2）

形に近い形態を主体とするⅢ層下部やⅢａ層とは異なる。石槍は、確実に下層に所属するものは認められなかった。スクレーパー類は、円形掻器（89･90）、大原Ｄ・元岡型（87）スクレーパー類似品などが出土しており、これも大原Ｄ14区Ⅱ層と同じである。石核は、周辺加撃（求心状剥離）石核（91、第49･50･52図317･325･358）、不定形の打面転移石核（92）、チョピング・ツール状のもの（93）などがある。そのほか、楔形石器、彫器などが検出されている。土器は上げ底底部の条痕文土器で、横方向の貝殻条痕を施している。無文土器を共伴すると思われるが、詳細は不明である。

このように、下層は大原Ｄ14区Ⅱ層とほぼ同時期と思われ、石器や土器の特徴が一致している。二等辺三角形鏃を主体とする松木田遺跡第4次2区（長家ほか2013）も同じ時期と考えられ、ヤンガー・ドリヤス期前半に位置付けられる可能性が高い。土器の詳細は不明だが、黒曜石製の小形円形掻器を組成している。

中層（第31図、23～76）は遺跡の広い範囲に認められ、複数の生活面から成り立っていると思われる。上層との境には無遺物の土石流堆積物が存在するが、下層とは明確に区分出来ない。42区から46区は土石流堆積物が存在せず、後世消失したと考えられる。傾斜地のため、円形掻器や大原Ｄ・元岡型スクレーパーなど下層の資料が混在している。風雨の影響で、標高の高い地点より転がってきたものと思われ、崖下遺跡では良くみられる。土器は条痕文土器、撚糸文土器、刺突文土器、無文土器が共伴している。これは、ほぼ撚糸文土器単純の松木田遺跡2次調査地点（米倉2001）と異なるが、元岡・桑原遺跡群58次調査地点Ⅲ層とは良く類似している。土器製作において、複数の文様が共存していたものと思われる。

石鏃は多様な形態が認められ、部分磨製石鏃の割合も高い。脚部が凸状のもの（23～25）、抉りのないもの（26･27）、やや浅い抉りのあるもの（28～33）、深い抉りで脚部の尖るもの（34～42、45～51）、脚部が丸味を帯びるもの（43･44）、柳葉形石鏃（52～54）などがある。この中で45～52、54は部分磨製石鏃である。また、先端が丸味を帯びる29や細長い形態の46･47は特殊な形態と言える。24は片脚が形成されていない特殊なものと思われるが、失敗品かも知れない。このように、多様な形態を含むのが本文化層の特徴である。部分磨製品を含む柳葉形石鏃は、松木田遺跡第3次調査地点などに類例があるが（米倉2001）、極めて珍しい存在である。

尖頭状石器（57）や石槍（55･56･58･59）は定形化したものが多い。細身の柳葉形のものが多く、細調整も丁寧である。福岡地方でも例の少ない部分磨製石槍（58）を含んでおり、これも柳葉形石鏃と同様、松木田遺跡3次調査地点（米倉2001）と良く類似している。

スクレーパー類は縦長のサイド・スクレーパー（60～62、64･66･67、第40･41図155･159～162･167･178）を主体とし、エンド・スクレーパー（65）、不定形スクレーパー（63･68）などが含まれる。サイド・スクレーパーは多様な形態を含んでおり、温暖期を特徴付けている。

石核は、背面に礫面を残す周辺加撃石核（求心状剥離石核、69･71）、剥片製周辺加撃石核（73）、剥片製円盤状石核（75･76）、剥片製打面転移石核（70）、円礫製打面転移石核（72･74）などがある。ハリ質安山岩製の大形石核素材（第53図385）も出土している。剥片・礫製の多様な形態の周辺加撃石核によって特徴付けられる。このほか、楔形石器、石錐（第39図126･127）などが共伴している。

上層は、押型文土器の文化層である。浅い谷で区分された、11区から31区の西エリアに包含層が形成されている。押型文土器は複数の型式を伴うことから、生活面は一つでないと考えられる。中層と同様多数の集石遺構が検出されており、遺構のレベルから見ても、複数の生活面があるものと考えられる。

石鏃は抉りのない二等辺三角形鏃（1）、浅い抉りを造り出した正三角形鏃（2･3）、脚部が尖るもの（4

～8)、脚部が丸味を帯びるものあるいは鍬形鏃（9～16）がある。16のような大形鍬形鏃がみられる。17の石槍は中層の出土資料と同じ形態であるが、14Ｆ区1層の出土であり、中層との間に無遺物の土石流堆積物を含むことから、上層のものである可能性が高い。

スクレーパー類は大形品（18、第45図234）が見られる。18は背面に粗い調整を施したハリ質安山岩製の削器である。安山岩幅広剥片製の234は、右側辺の一部に粗い調整を加えている。このほか、縦長剥片製のサイド・スクレーパー（第41図164）が出土している。

石核は、礫面を残す円盤状石核（19)、剥片製周辺加撃石核（21)、剥片製打面転移石核（20）などが検出されている。22は、腰岳産黒曜石の礫面を残す大形剥片製の石核素材である。このほか、石錐（第39図125）などが出土している。

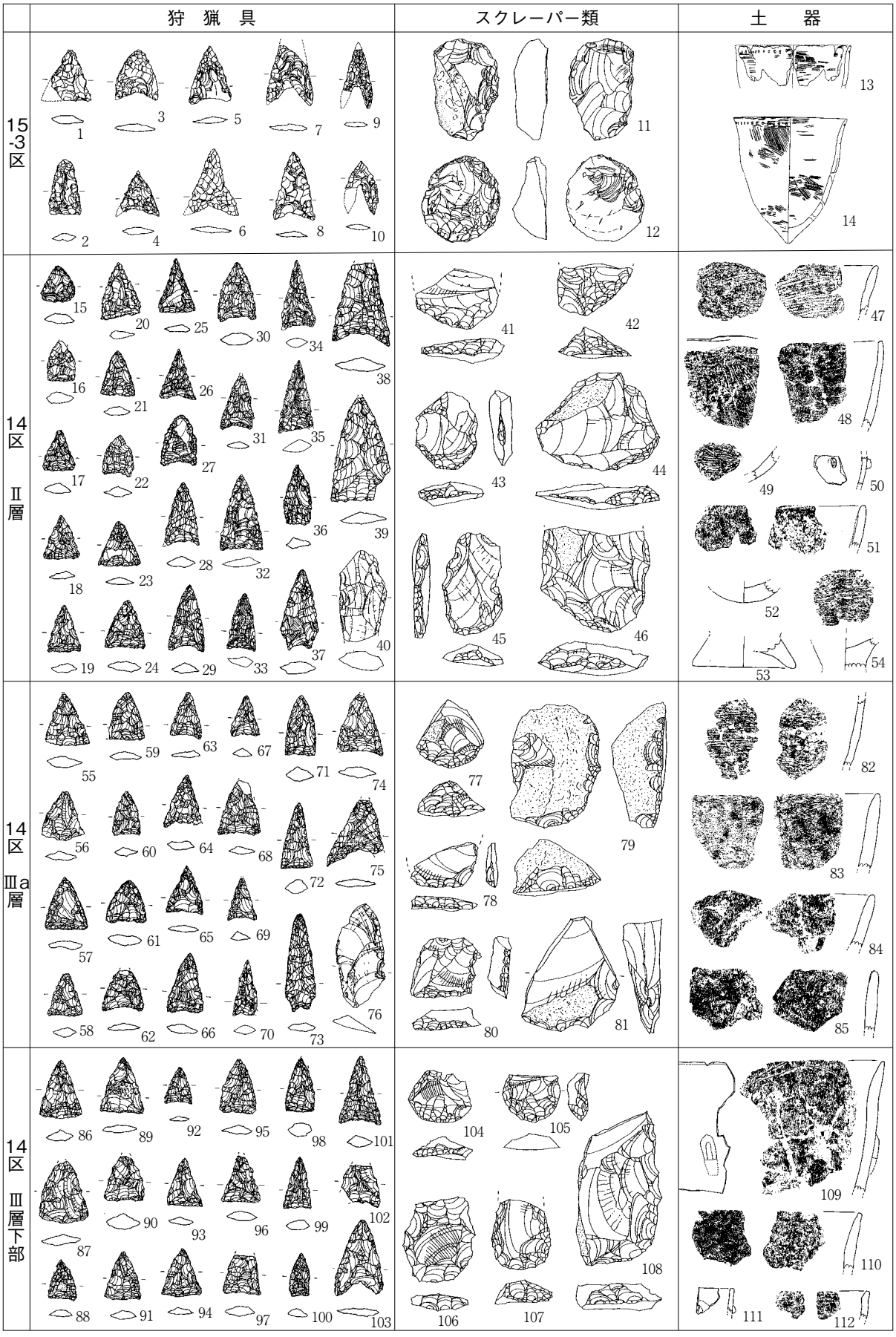
58次調査地点が早期前半の比較的短い期間営まれたのに対し、それよりも新しい時代と古い時代を含み、比較的長期間の遺跡である。層位間で遺物の混在が認められ、文化層単位での抽出は困難であるが、下層より上層にかけて大まかな遺物変遷が確認される。今後さらに詳細に分析すれば、細かな変遷を追うことが可能になると思われる。

③　大原Ｄ遺跡群（第32図）

元岡・桑原遺跡群の北部に位置する。元岡・桑原遺跡群第3次調査地点と同じような小規模段丘上に立地する、福岡地方最大の縄文時代草創期遺跡群で、住居祉などの検出に成功し、多くのことが明らかになっている。14区は標高28～37ｍの河岸段丘上に立地し、消失住居などの遺構と共に、大量の遺物が検出されている（池田ほか2003)。これらは、寒冷期に特有な灰色系の土壌に包含されている。縄文時代草創期末に位置付け可能なものは、Ⅲ層下部（Ⅲｂ層以下)、Ⅲａ層、Ⅱ層に大別できる。放射性炭素年代測定値は、Ⅱ層に属するSC014住居跡10680±130BP（β)、Ⅲ層に属するSC003住居跡10880±110BP（β)、Ⅲａ層11200±40BP（ＡＭＳ)、Ⅲｈ層11110±40BP（ＡＭＳ)、Ⅲｋ層11330±60BP（ＡＭＳ）である。ＡＭＳ法とβ線係数法で行われているが、両者間で大きな違いはなく、下層と上層の間の矛盾も殆どない。同時期と考えられる鹿児島県建昌城跡ともほぼ同じ値で（深野ほか2005）で、年代値の信用性は高いと思われる。10000年代後半前から11000年代初頭前の比較的短期間であるが、ヤンガー・ドリヤス期の文化層が複数認められる例として貴重である。

14区の石鏃は正三角形鏃（24など)、やや細長の二等辺三角形鏃（33など）を主体とし、少数だがやや深い抉りを入れたもの（75･103）もある。上層ほど細長の石鏃の割合が高くなり、それが極限に達し、しかも小形化したのが松木田遺跡4次調査2区の石器（長家ほか2013）と言える。このような傾向は岩下洞穴（麻生1968）など西北九州においても確認でき、南九州を含めかなり広域的に認められる現象である。部分磨製石鏃（37･75）も若干組成するが、上層ほど割合が高い。細長五角形の特徴的な形態（37･73）が極めて少数検出されている。石槍は不定形のもの（40･76）で、形態的に完成されたものはない。本遺跡の出土量を考えると全てが失敗品ともいえず、集団による石槍製作の学習が充分ではなかったと考えられる。

土器は、各層でかなり明確に分けられる。Ⅲ層下部は無文土器を主体とし、器厚が10㎜を超えるもの（109）より5㎜程度の薄いもの（110～112）が多い。Ⅲａ層は条痕文土器（82）の出土が目立ち、無文土器も器厚が10㎜を超えるもの（83～85）の割合が高くなる。Ⅲ層下部とⅡ層の中間的様相と言える。Ⅱ層は条痕文土器（47～49、52～54）主体で、無文土器（50･51）もかなり出土している。無文土器はⅢａ層よりも器厚5㎜程度の薄手製品の割合が高い。底部は鹿児島県建昌城跡（深野ほか2005）と同じ上げ底（53）や丸底（52）がある。当該期の北部九州は平底を基本としているが、地域



第 32 図　大原Ｄ遺跡群の編年関係（縮尺　石器 1/2　土器 1/6 ～ 1/12）

的特色が保持されているので、本遺跡例はそれを良く表している例と言えよう。

掻器はⅡ層30点、Ⅲ層53点、削器Ⅱ層87点、Ⅲ層126点が出土している。その他の層位を含め計433点である。定形石器に占める割合は、掻器（Ⅱ層2.9％、Ⅲ層7.0％）、削器（Ⅱ層8.5％、Ⅲ層16.5％）であり、石鏃（32.0％）、加工痕・使用痕ある石器（26.5％）に次いでいる。200点以上の石核が検出されており、明らかに石器素材の製作が行われている。寒冷化の始まりと共に、黒曜石製のスクレーパーが大量生産された様子が窺える。スクレーパーの割合が急速に低下する様子は、土器出現期の様相に類似しており興味深い。松木田遺跡4次調査2区は、石鏃とその未製品62点に対し、スクレーパー類4点とその割合がさらに低くなっている。スクレーパー類の多くは周辺加撃（求心状剥離）石核から剥離された剥片を素材としており、佐世保市針尾島産原石などが用いられている。円形掻器は当初極めて小形である（104･105）が、Ⅱ層ではやや大形のもの（41）が認められる。Ⅲa層の77のような厚手のものは佐世保市岩下洞穴Ⅸ層にも認められ（麻生1968）、地域を超えて共通している。縦長の大原D・元岡型スクレーパー類似品は定形化したものは認められず、形態的統一感もない（46･81･106など）。

隣接する15－3区は標高26ｍ前後の埋没谷に位置し、砂礫中より多量の遺物が検出された（池田ほか2003）。14区とは石鏃や土器に違いが認められるが、この時期の典型的なスクレーパー類が出土しており（図11･12）、少なくともその一部はヤンガー・ドリヤス期後半に位置付けられよう。

15－3区は原位置の状態で検出されたものではないが、一部を除き纏まった遺物群と思われる。石鏃は三角形鏃（1、3～6）や細長鏃（2）も組成するが、抉りの深いもの（7～10）が一定量認められ、14区の様相とは異なっている。土器は条痕文土器も認められるが、刺突文土器（13･14）が主体を占める。刺突文土器は条痕調整（13･14）によるものが多く、14区からの発展によるものと思われる。条痕を横方向に施したものが多い点も14区Ⅱ層と共通している。しかし底部は乳房状尖底であり、これまでの平底基調とは大きく異なっている。無文土器主体から、条痕文→刺突文という新しい要素が次々と現れる点が土器編年の基本となっており、底部も乳房状尖底という新しいものが現れる。だが、新しい要素の出現後も古い要素は維持されているのである。条痕文土器や刺突文土器は、その後も暫く共伴関係が認められるのである。

石鏃とその未製品17点に対し15点のスクレーパー類が検出されており、再びその割合が高くなっている。その中には、典型的な厚手円形掻器（12）、大原D・元岡型スクレーパー（11）が含まれている。これらのスクレーパー類はヤンガー・ドリヤス期の典型的なものであるが、放射性炭素年代は9170±110BP（10575～10160calBP）、9210±80BP（10575～10215calBP）であり、1000年程新しい年代値が報告されている。恐らく、これらは円筒形土器を伴う文化層の年代であると思われる。

このように、15－3区は複数の文化層が混在しているが、ヤンガー・ドリヤス期の遺物群を含むのは間違いない。それは刺突文土器と円形掻器、大原D・元岡型スクレーパーを組成する文化層と思われる。石鏃は完全に分離出来ず、深い抉りを形成したものは新しい時期の文化層に伴う可能性も考えられる。しかし、ほぼ同時期の元岡・桑原遺跡群58次調査地点Ⅲ③・Ⅳ層に抉りの深い石鏃を含むことから、ヤンガー・ドリヤス期末にも存在していたと思われる。

④　福岡地方縄文時代初頭の編年的理解

ここでは、これまで述べた糸島半島の遺跡を中心にその周辺部を含め、縄文時代草創期から早期前半の様相を明らかにしたい。後氷期やヤンガー・ドリヤス期、完新世初頭を含む時代で、最終氷期から温暖化の著しい完新世へと続く、大規模な寒暖差が短期間で起こる激動の時代である。この間、旧

石器時代から縄文時代へと大きな文化変化を遂げている。動植物の移動と共に、同じ環境を求めて人類集団が移動した可能性もあるのである。よって、複数の人類集団が同じ地域に共存していた可能性があるのである。

元岡・桑原遺跡群の幾つかの調査地点で福井型細石刃核が含まれており、縄文時代草創期前半の遺跡（文化層）が各調査地点の近くに存在していたのは間違いない。福岡地方の細石器文化を代表する門田遺跡では谷地区で爪形文土器が検出されている（木下1976）。多数の接合資料が得られた吉武遺跡群第9次調査では土器は検出されていないが（小畑編2002）、細石刃石核の形態等から草創期前半に位置付けられよう。福岡地方の細石刃核は西北九州の黒曜石を素材とするものが多く、その形態も泉福寺洞窟（麻生編1985）や福井洞窟（桝田編2016）などと大きな違いはない。よって、西北九州と同じような変遷を辿ったと考えられるが、詳細は明らかでない。

その後、草創期末の大原Ｄ14区Ⅲ下層より早期の押型文土器まで、連続した文化層の存在が明らかにされている。しかし、南九州の隆帯文土器と同時期の温暖期（アレレード期）の資料が明らかでない。当然ながら、細石刃石器群の終末の状況も不明である。細石刃石器群の終末から石鏃中心の狩猟具へと移行する過程が明らかにされていないのである。

アレレード期からヤンガー・ドリヤス期にかけて、遺物の変遷は北部九州と南九州で違いがあるようである。南九州は、温暖化に伴い隆帯文土器を伴う遺跡群が認められ、それ以前の土器を少数伴う細石刃石器群からの発展が考えられる。多数の遺構を伴い、移動のあまりない高度な文化が花開いたと考えられる。これに対し、北部九州はこの時代の遺跡が不明確である。ヤンガー・ドリヤス期になると、前述のように遺跡数は増加し連続した文化層が認められることから、その変遷が明らかにされている。大原Ｄ14区では、住居祉などの遺構も検出されている。ところが、南九州は建昌城跡（深野ほか2005）以外明確でない。温暖期には南九州の文化が発展し、寒冷期には北部九州に多くの遺跡が展開しているのである。

西北九州では洞窟遺跡の層位的成果により、初源期土器と細石刃石器群後半期の状況が明らかにされている（麻生編1985、桝田編2016）。最終氷期終末から、後氷期、ヤンガー・ドリヤス期にかけての変遷が明らかとなった（萩原2016）。しかしながら、アレレード期の状況は不明確といえ、細石刃石器群の終末から石鏃出現期にかけての遺跡は明らかにされていない。福岡地方も同様であり、大原Ｄ14区Ⅲ下層以前の状況は明らかでない。

大分県二日市洞穴は石鏃の形態において福岡地方と若干異なるが、第8･9文化層は円形掻器を含む点や堆積土の色調などからヤンガー・ドリヤス期に位置付けられる。第8文化層は、元岡・桑原遺跡群58次調査地点Ⅳ・Ⅲ③層出土の石鏃と抉りの作り出し（第30図･72）が同じであり、ほぼ同時期と考えられる。その放射性炭素年代測定値は9900BP前後であり（遠部2006）、ヤンガー・ドリヤス期終末に位置付けられる可能性が高い。県南の森の木遺跡は隆帯文土器や無文土器と共に、細長の三角形鏃や円形刃部掻器が検出されている（綿貫編2016）。平底の無文土器は、大原Ｄ14区や建昌城跡の土器と近い関係にあるのではないか思える。大分県北部は、福岡地方などと同様アレレード期の状況は明らかではないが、県南は南九州の影響を受けているものと考えられる。

このように、福岡地方の縄文時代初期は西北九州や東北九州の影響を受け、発展してきたと言える。南九州とも何らかの交流があったものと思われる。この時代、それぞれの地方で独自の遺物が認められることから、影響は受けつつも地域集団の独自性が形成されていたものと考えられる。スクレーパー類などは本州も含めた広域で変化しているが、大分地方のように影響のあまりない地域も認められるようである。しかし、これは日本列島規模の現象であり（堤2000）、地域による違いの原因を明らかに

していかねばならない。

完新世初期の状況は、松木田遺跡群（米倉2001、長家ほか2013）、元岡・桑原遺跡群3次調査地点（管波ほか2004）、同58次調査地点（大森2016）、柏原遺跡群（山崎ほか1983・1987・1988）などの発掘調査により、押型文土器の出現まで土器と石器の変化が比較的詳細に明らかにされている。この中に、第52次調査地点のような遺物群を見出すことは出来ない。とはいえ、アレレード期の所産としてふさわしいとは言えない。細石刃石器群終末期や大原Ｄ14区Ⅲ下層との共通点があまりにも少ないのである。このため、現段階の資料による限り、第52次調査地点の編年的位置付けは簡単なものでなく、詳細な検討が必要とされる。

⑤　第52次調査地点の位置

この点を踏まえ、52次調査地点の遺物群に対し多方向から検討を加えたい。遺物の形態的・技術的特徴の比較である。

第52次調査地点を代表する遺物は、脚部にＵ字状の抉りを入れた大形石鏃である。細長のもの（第９図1～5）と下部が幅広で丸味を帯びるもの（6･7）がある。3～5は下部がやや丸味を帯びており、23の大形品は後者と同様のものだろう。丸味を帯びるものは西北九州産黒曜石が使用されているが、細長品はハリ質安山岩のみが用いられている。このような石鏃は福岡地方には存在せず、Ｕ字状脚部を持つものは押型文土器と共に出現する鍬形鏃を待たねばならない。それ以前には全く認められない、脚部の形態なのである。鍬形鏃の形状は本遺跡の事例とは異なるが、地元産黒曜石を用いない点をも考慮すると本州の影響を受けたのではないかと想定される。

本州でもこれらと同じようなものは現在のところ確認できないが、細長のＵ字状脚部を持つ石鏃は新潟県小瀬が沢洞窟（中村1960）、静岡県葛原沢第Ⅳ遺跡（池谷ほか2001）で検出されている。これらは、及川氏の編年によるとⅠ期およびⅡａ期（及川2003）に位置付けられており、本州の爪形文土器前後の比較的古い段階のものである。中国地方などの状況が明らかでないため明確なことは言えないが、アレレード期以前に位置付けられる可能性が浮上したのである。しかし、押型文土器出現期のものである可能性が消えたわけではないと思われる。

脚部に浅い抉りを入れた特徴的なもの（15･21･22）は、上猪ノ原遺跡第5地区など宮崎県の隆帯文土器を伴う石鏃と類似している（清武町教育委員会2005、宮崎県埋蔵文化財センター2006）。この形態の石鏃は黒曜石を用いており、ハリ質安山岩主体の脚部Ｕ字状石鏃とは異なっている。北部九州の伝統的形態でなく、東南九州の影響を受けている点の解釈は困難だが、ここでもアレレード期の所産である可能性が指摘できる。

尖頭器は完形品がなく、所属時期を明らかにすることは出来ないが、58次調査地点Ⅳ・Ⅲ③層や松木田遺跡3次調査地点の石槍とは厚みにおいて異なっている。石槍はその後あまり発達せず、終末期細石刃石器群に共伴することから、アレレード期を否定するものでもない。

スクレーパー類は円形刃部状のもの（31･34）を若干含むが、サイド・スクレーパーが圧倒的に多い。これらの形態的特徴から、所属時期を明らかにすることは出来ないが、このような在り方はヤンガー・ドリヤス期には認められず、温暖期の所産である可能性が高い。寒冷期の大原Ｄ・元岡型スクレーパーに認められる線状痕が、使用痕ある石器や剥片に認められる点も、温暖期であることを示唆しているように思える。

定形石器による分析では、アレレード期に位置付けられる可能性が指摘された。次に土器編年を考えてみたい。小片が少量検出されたにすぎず明確なことは言えないが、本文化層の土器は薄手の無文

土器と考えられる。無文土器は各時代に認められ、これをもって編年関係を明らかにすることは出来ないが、縄文時代初源期に限定すると、明らかにできることがある。例えば大原Ｄ14区においては、Ⅲ下層、Ⅲａ層、Ⅱ層間で、薄手無文土器→条痕文土器・厚手無文土器→条痕文土器・薄手無文土器という変遷が認められた。大分県南部の森の木遺跡でも、隆帯文土器→無文土器という変遷が考えられている（綿貫ほか2016）。鹿児島県建昌城跡も無文土器である（深野ほか2005）。これらのことから、ヤンガー・ドリヤス期直前は九州全域で無文土器が展開していた可能性がある。よって、本文化層の薄手無文土器から大原Ｄ14区Ⅲ下層へと発展したという可能性が指摘できるのである。

このように、アレレード期に位置付けられる可能性が高いことが明らかになったが、やや細長の脚部Ｕ字状石鏃を共伴する押型文土器期の可能性が全く消えたわけではないので、福岡地方における詳細な編年関係を通して、さらに検討したい。

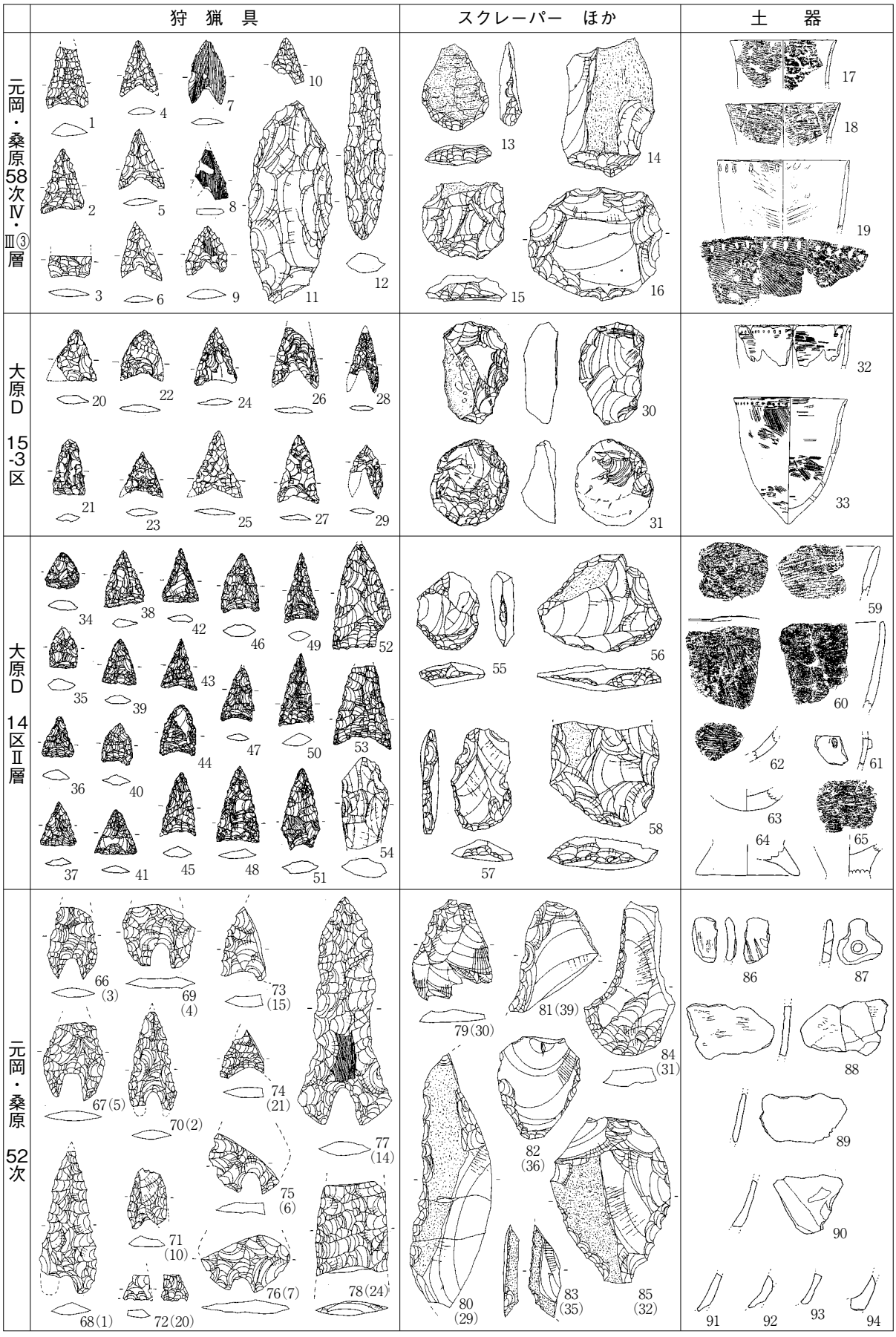
福岡地方の縄文時代草創期後半から早期前半の遺物変遷は、第33･34図に示すとおりである。前述した、複数の多層遺跡の調査成果から編年が可能になったのである。混在の少ないと考えられる文化層により構成している。第52次調査地点は、前述の点を踏まえ大原Ｄ14区Ⅲ下層より古いアレレード期後半に、とりあえず位置付けている。

石鏃や土器は古い形態の遺物の残存が認められるものの、次々と新しい要素が出現し、次第に変化する過程が明らかである。石鏃は、正三角形鏃（大原Ｄ14区Ⅲ下層）→二等辺三角形鏃（大原Ｄ14区Ⅱ層、松木田4次2区）→抉りの深い長脚鏃（大原Ｄ15－3区）→長脚鏃への部分研磨鏃（元岡・桑原58次Ⅳ・Ⅲ③層）→円脚鏃（松木田3次）→多様な形態（元岡・桑原3次中層、元岡・桑原58次Ⅲ①②層）→鍬形鏃（元岡・桑原58次Ⅱ層、柏原ＦⅢ層4ブロック）のように、新たな形態が現れているのである。土器も同様で、薄手無文土器（大原Ｄ14区Ⅲ下層）→条痕文土器（大原Ｄ14区Ⅱ層）→刺突文土器（大原Ｄ15－3区）→撚糸文土器（元岡・桑原58次Ⅳ・Ⅲ③層）→撚糸文土器単純（松木田3次）→刺突文①類（口縁部への小形円形刺突文連続施文、元岡・桑原58次Ⅲ①②層）→押型文土器（元岡・桑原58次Ⅱ層）、と変化している。この間、無文土器、条痕文土器、刺突文土器、撚糸文土器は長い期間存続するが、細かな変化が認められるのである。

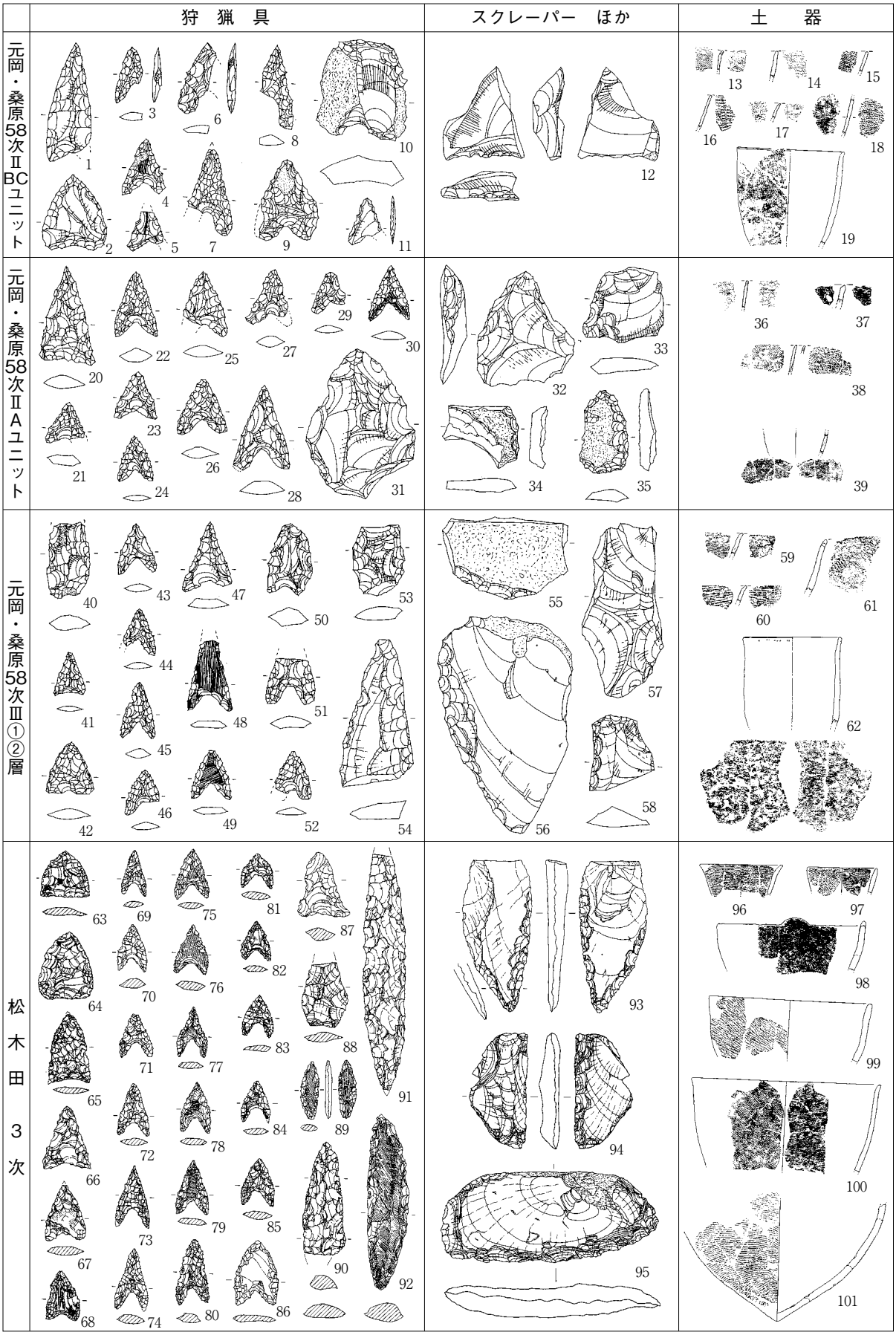
土器は元岡・桑原52次調査地点からの連続性が認められるが、石鏃はその形態的特徴が後世に継続していない。Ｕ次状脚部の石鏃は、大原Ｄ14区以降の文化層に認められないのである。三角形鏃は細石刃石器群終末期に認められるので、第52次調査地点の石鏃が、それ以前の九州にない形態である可能性が強く、ほかの地域から齎されたことを示唆している。

定形的な石槍は継続して製作されるのではなく、完新世初頭の松木田3次において最盛期を迎え、部分磨製品も多く製作されている。これは西北九州でも同様で、岩下洞穴Ⅵ層（麻生1968）で部分磨製を含む多数の石槍が検出されている。これらは、第52次調査地点の尖頭器（石槍）とは厚みなどが異なっている。大原Ｄ遺跡群に定型的なものが組成されていないことから、その影響は受けていないものと考えられる。

前述のとおり、スクレーパー類は寒冷期と温暖期で形態的な違いが認められる。第52次調査地点のものは、サイド・スクレーパーを主体とすることから、温暖期の所産である可能性が高い。松木田3次調査地点などとの共通点が、大原Ｄ遺跡群などヤンガー・ドリヤス期のものより多いと言えよう。
これらを総合すると、52次調査地点の編年的位置付けとして、大原ＤⅢ下層直前の可能性が高いと言えよう。根拠が薄い点もあり、九州においては特異な文化層であることから、今後さらに検討すべきであろう。



第 33 図　福岡地方における縄文時代初期編年（1）（縮尺　石器 1/2　土器 1/4 ～ 1/12）



第34図　福岡地方における縄文時代初期編年（2）（縮尺　石器1/2　土器1/6～1/12）

引用・参考文献（編著者五十音順）

麻生　優1968『岩下洞穴の発掘記録』（佐世保市教育委員会）

麻生　優編1985『泉福寺洞穴の発掘記録』（佐世保市教育委員会）

池谷信之ほか2001『葛原沢第Ⅳ遺跡（a・b区）発掘調査報告書１―縄文時代草創期・縄文時代―』沼津市文化財調査報告書第77集

池田祐司ほか2003『大原Ｄ遺跡群４―大原Ｄ遺跡群第4次・第5次・第6次調査報告　縄文時代編―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第741集

及川　穣2003「出現期石鏃の型式変遷と地域的展開―中部高地における黒曜石利用の視点から―」『黒曜石文化研究』第2号

大森麻衣子編2016『元岡・桑原遺跡群26―第58次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集

小畑弘己編2002『吉武遺跡群―吉武遺跡群第9次調査旧石器時代調査報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第731集上巻

遠部　慎2006「北・東九州における縄文時代草創期末～早期前半の諸様相―大分県九重町二日市洞穴の年代測定―」『九州縄文時代早期研究ノート』第4号（九州縄文時代早期研究会）

管波正人ほか2004『元岡・桑原遺跡群３―第3･4･8･11次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第829集

木下　修1976「門田遺跡」『日本の旧石器文化　３遺跡と遺物』（雄山閣出版）

清武町教育委員会2005『上猪ノ原遺跡第5地区』清武町埋蔵文化財調査報告書第19集

橘　昌信1980『大分県二日市洞穴発掘調査報告書』（別府大学博物館）

堤　　隆2000「掻器の機能と寒冷適応としての皮革利用システム」『考古学研究』第47巻第2号

中村孝三郎1960『縄文早期　小瀬が沢洞窟』（長岡科学博物館考古学研究室）

長家　伸ほか2013『松木田３―松木田遺跡第4次調査1～3･7･8区の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1204集

萩原博文2016「大原Ｄ・元岡型スクレーパーについて」（大森麻衣子編『元岡・桑原遺跡群26―第58次調査の報告―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1301集

深野信之ほか2005『建昌城跡―平成11～15年度発掘調査報告書―』鹿児島県姶良町文化財発掘調査報告書第10集

宮崎県埋蔵文化財センター2006『東畦原第1遺跡（三・四次調査)』宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書第128号

桝田祐三編2016『福井洞窟発掘調査報告書』（佐世保市教育委員会）

山崎純男ほか1983『柏原遺跡群Ⅰ―縄文時代遺跡Ｆ遺跡の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第90集

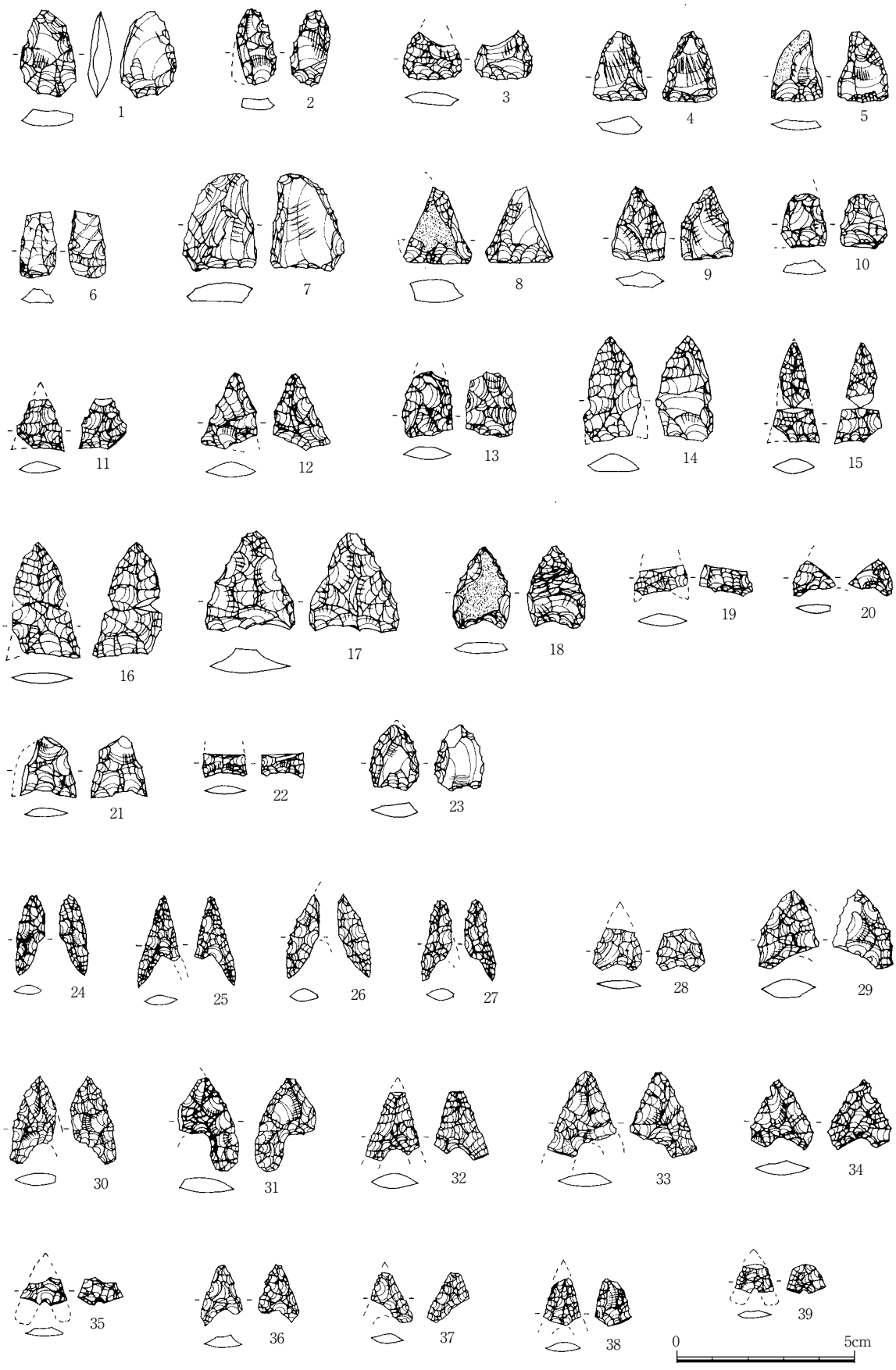
山崎純男ほか1987『柏原遺跡群Ⅳ―縄文時代A-1・Ｅ遺跡の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第158集

山崎純男ほか1988『柏原遺跡群Ⅴ―先土器・縄文時代遺跡A-2・Ｃ・Ｈ・Ｊ～Ｎ遺跡の調査―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第190集

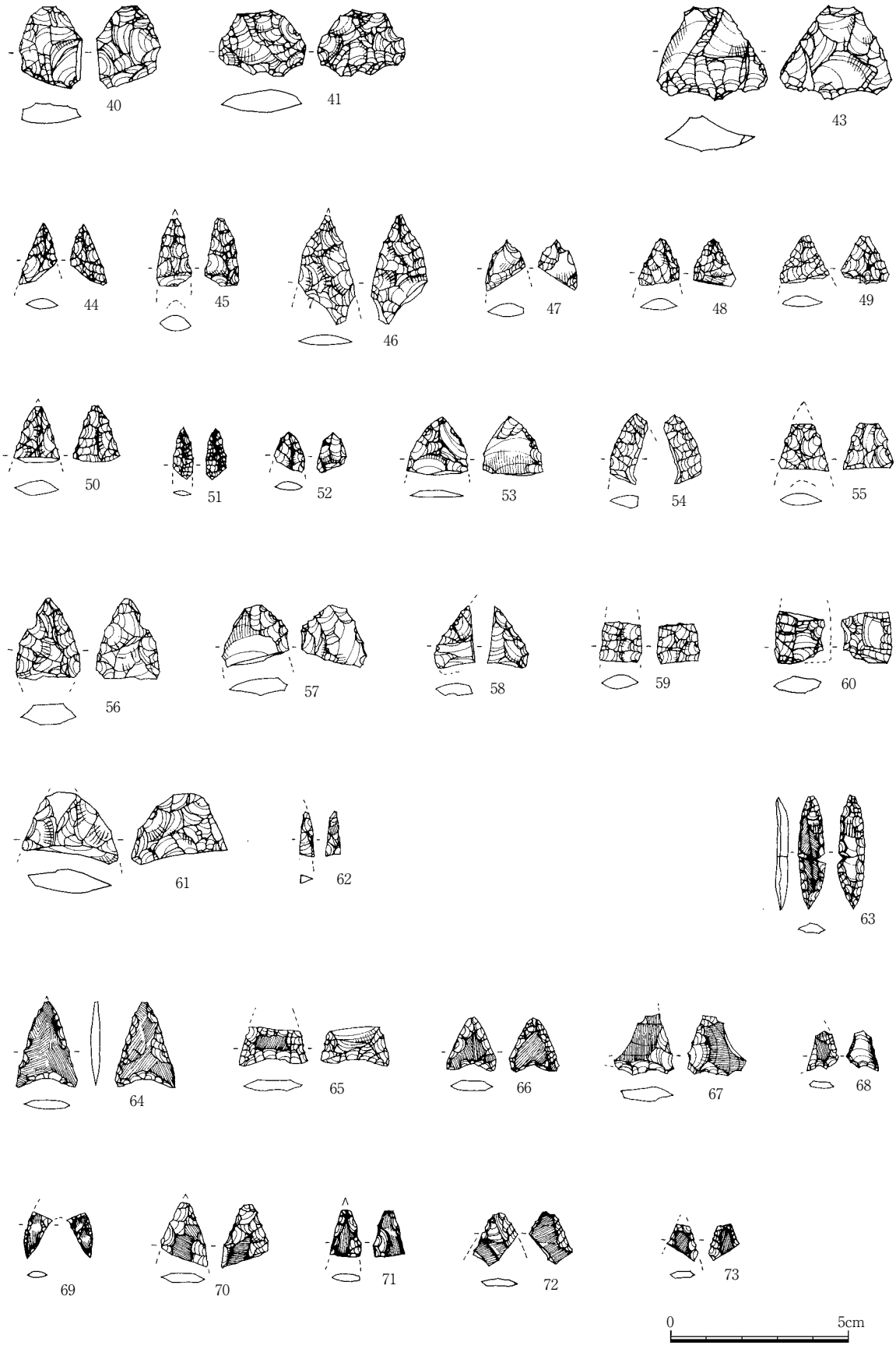
米倉秀紀2001『松木田遺跡群２―第3次下層（縄文時代早期）遺物編―』福岡市埋蔵文化財調査報告書第686集

綿貫俊一編2016『森の木遺跡発掘調査報告書』（大分県教育庁埋蔵文化財センター）

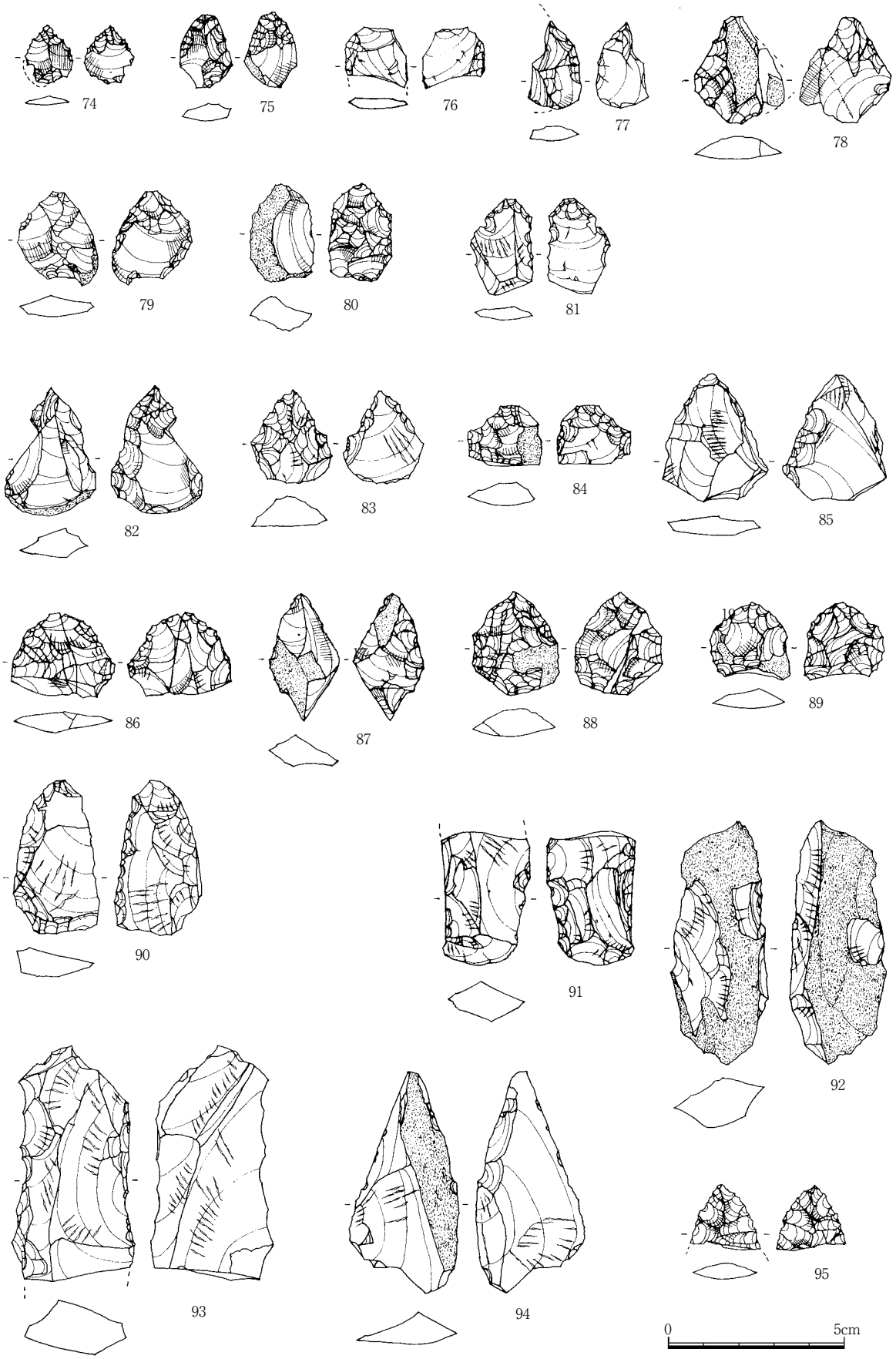
第３次調査地点の石器実測図



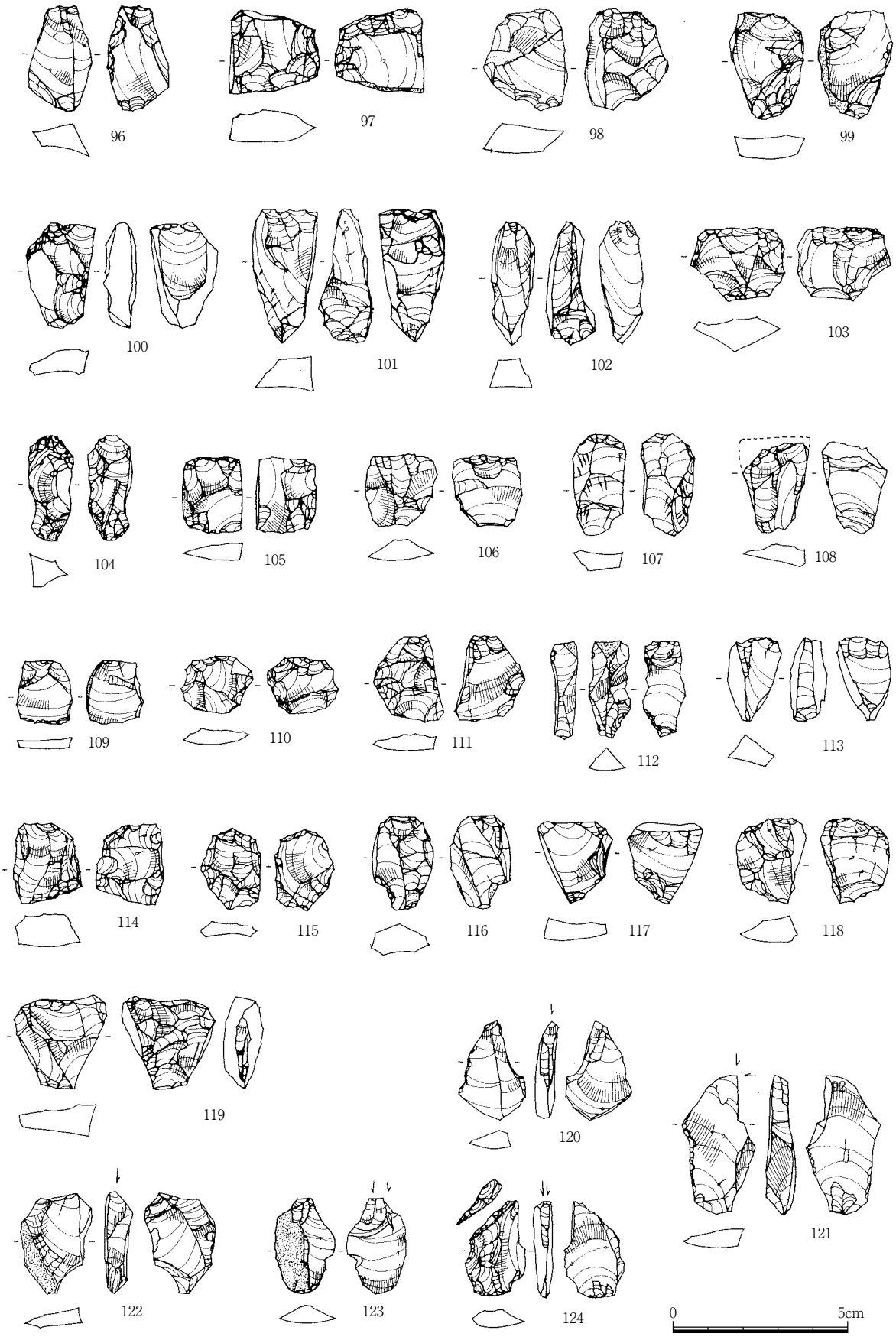
第 35 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（1）石鏃



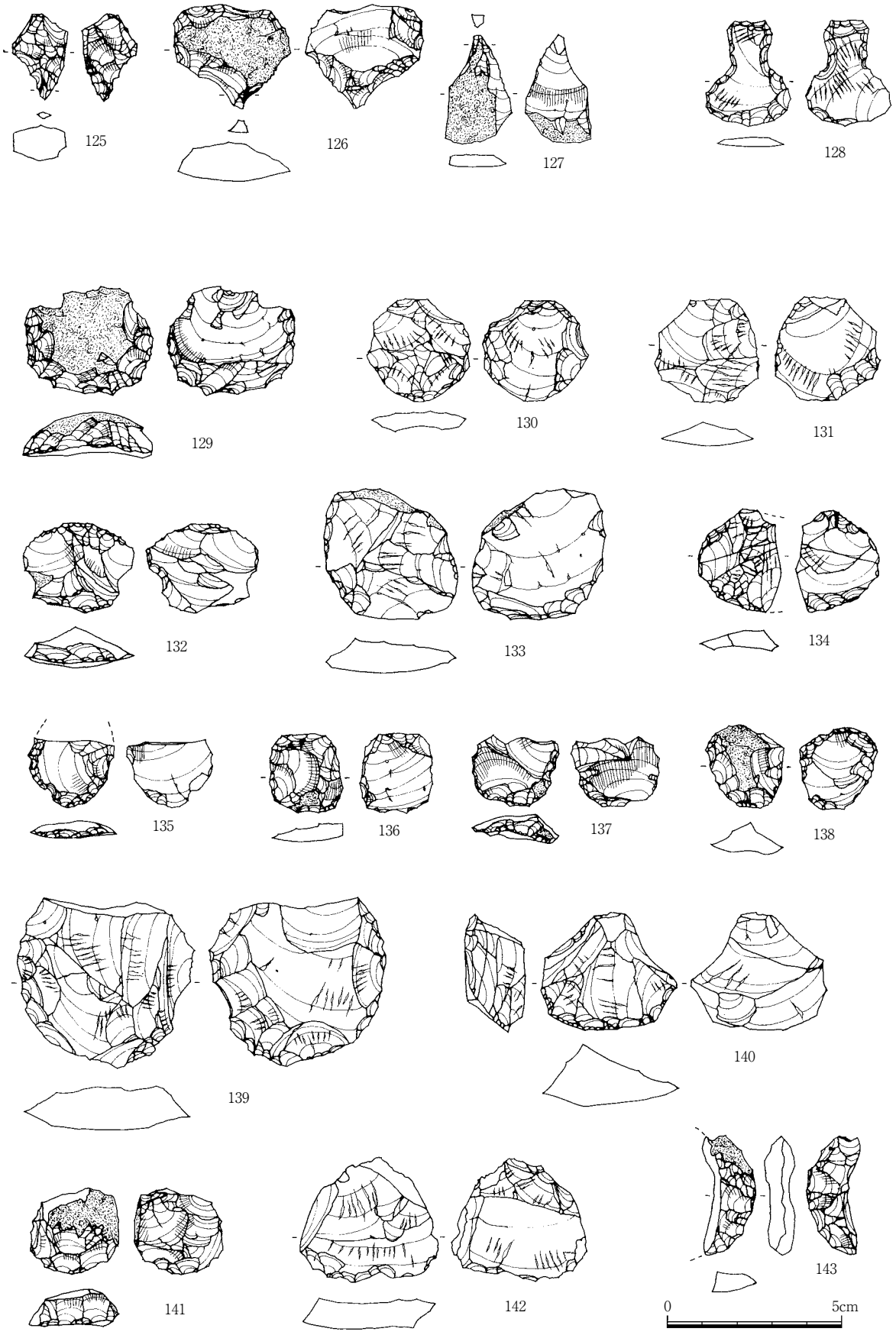
第 36 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（2）石鏃



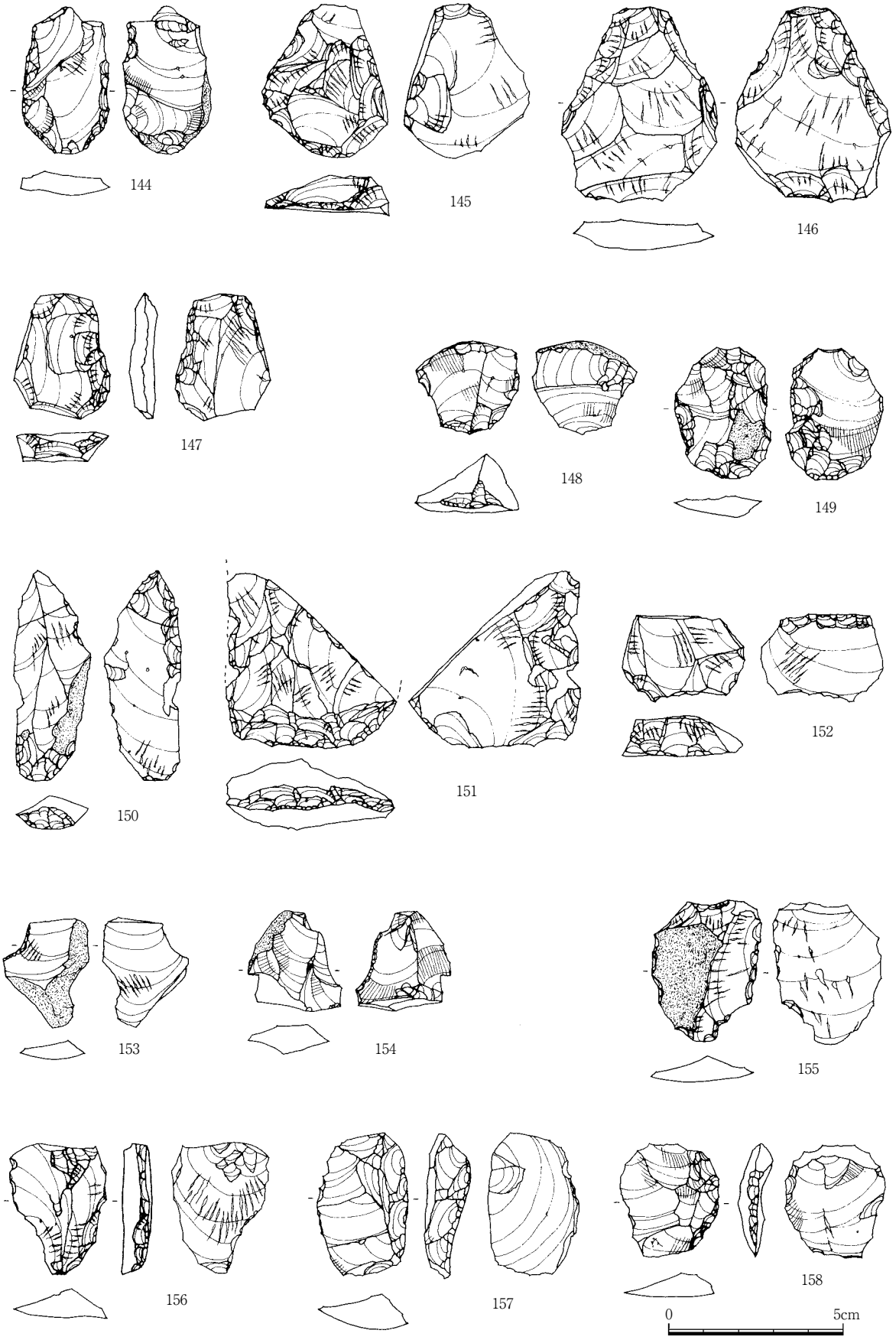
第 37 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（3）石槍



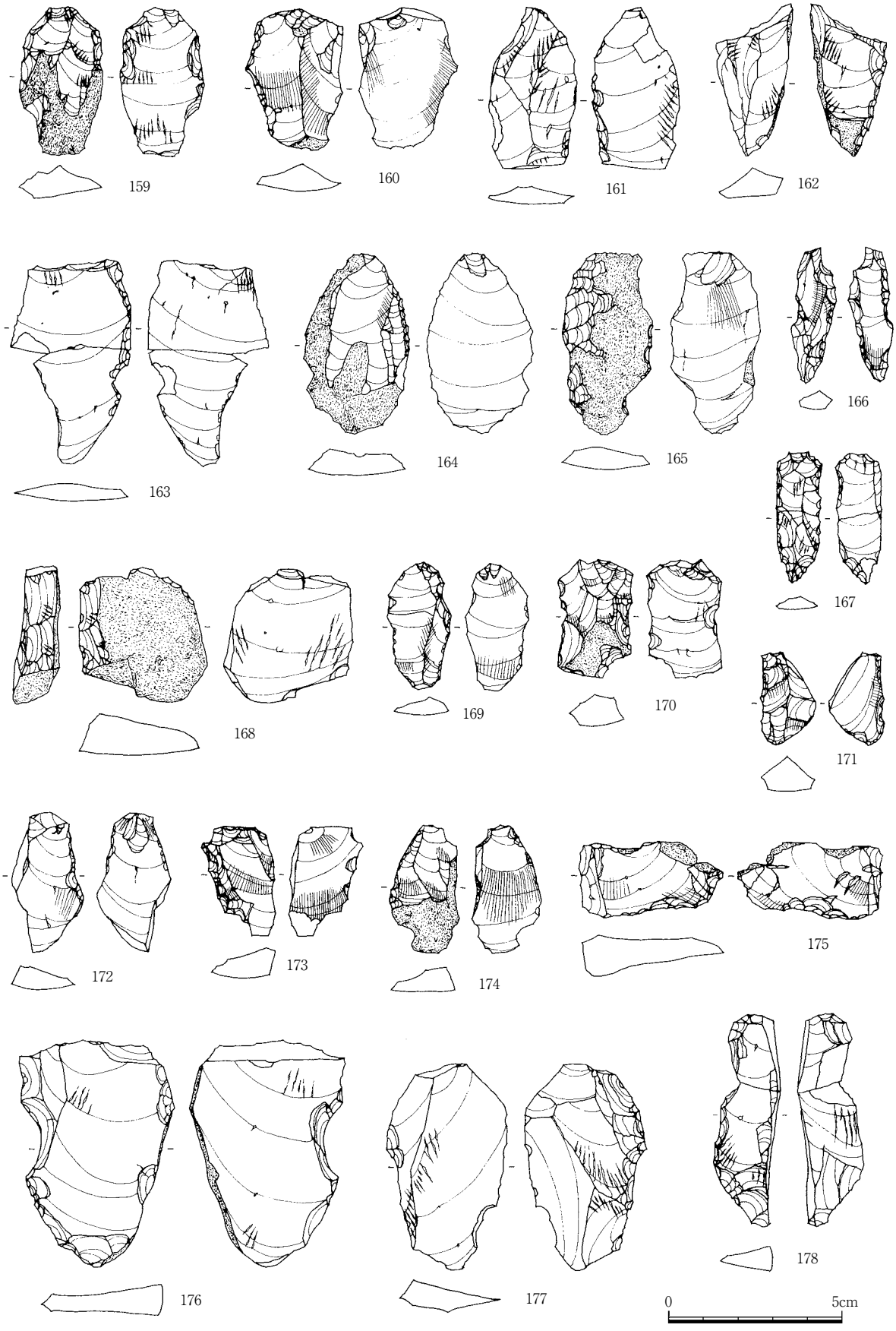
第 38 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（4）楔形石器、彫器



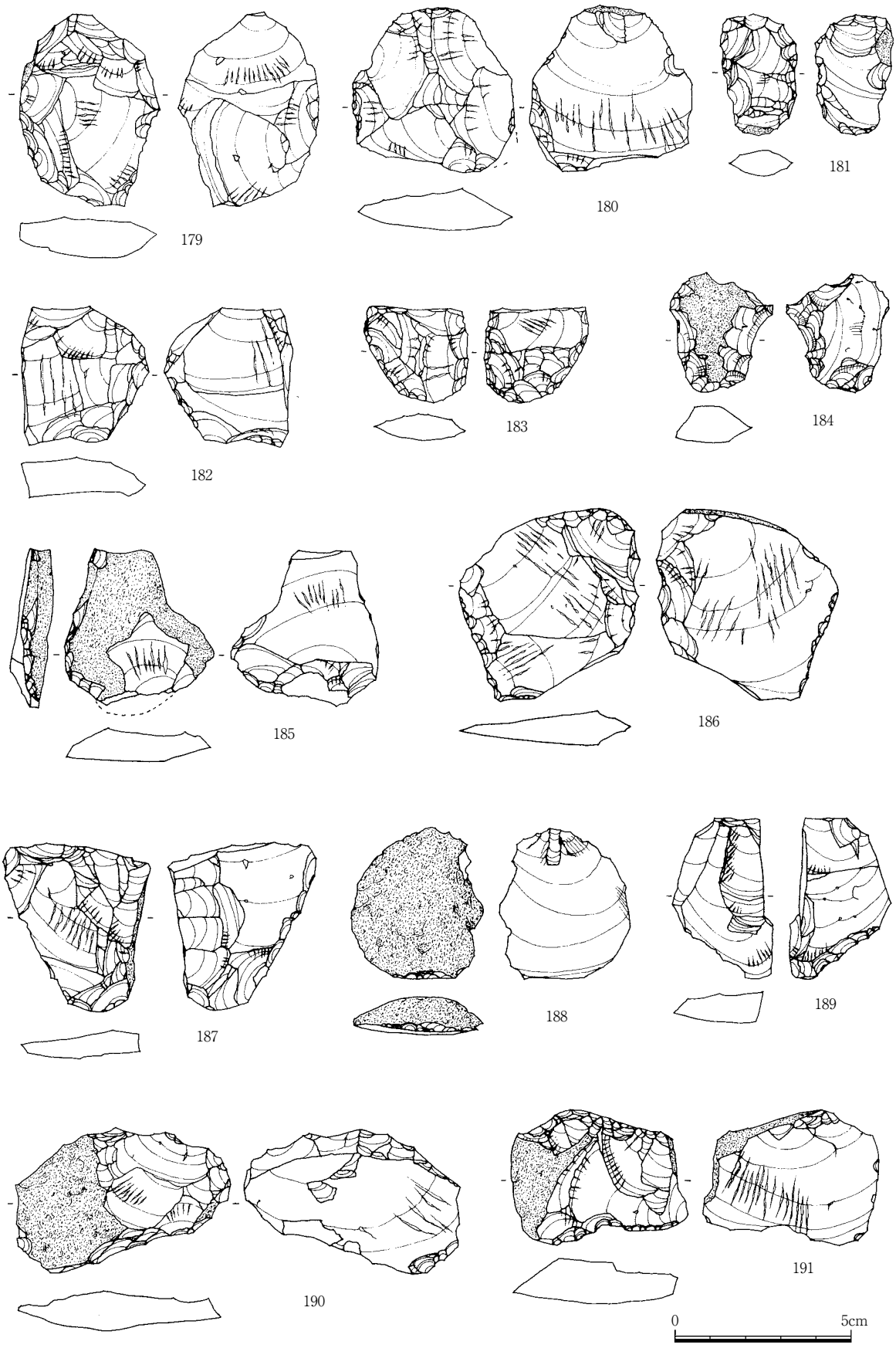
第 39 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（5）石錐、石匙、スクレーパー類



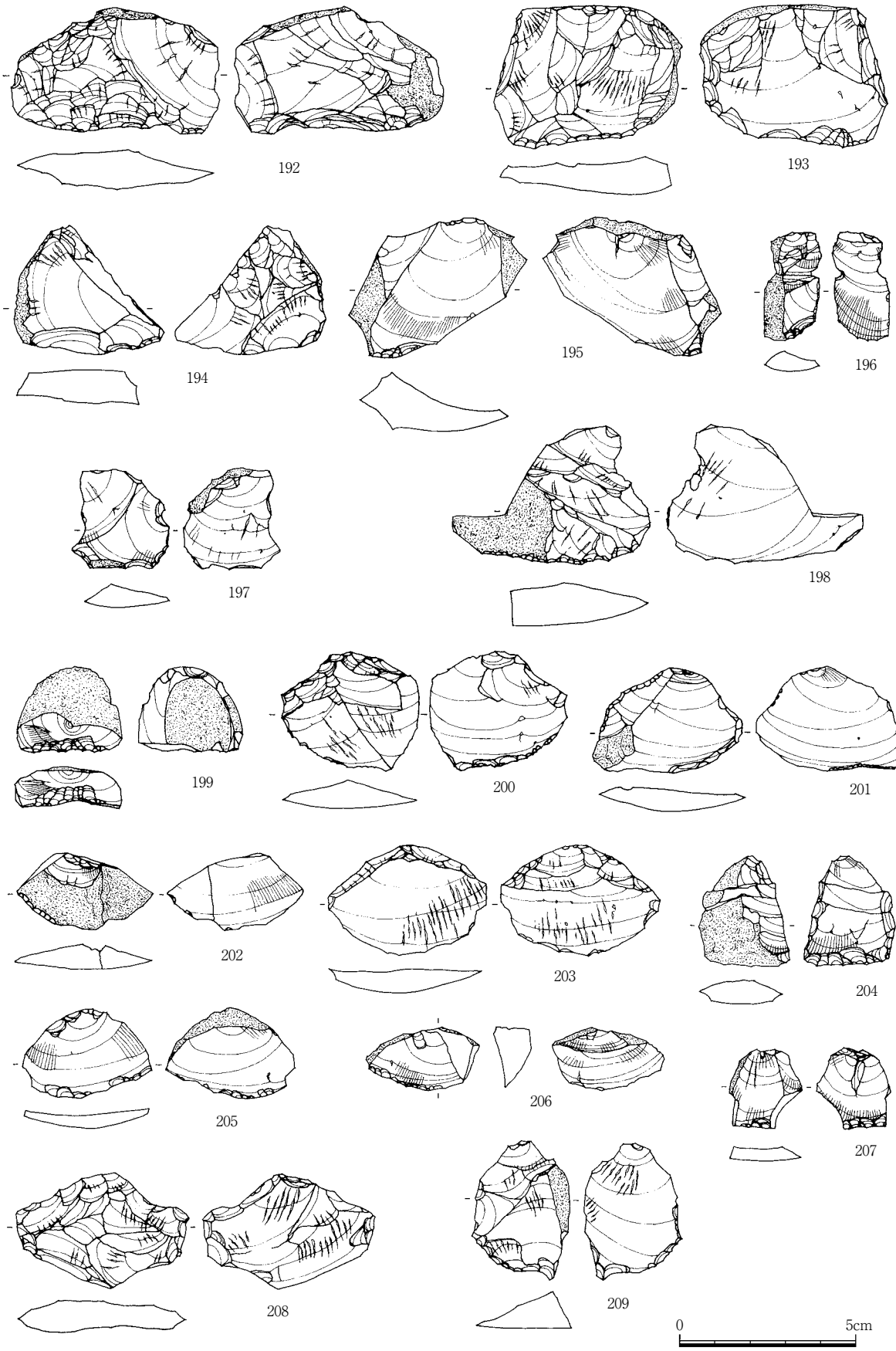
第 40 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（6）スクレーパー類



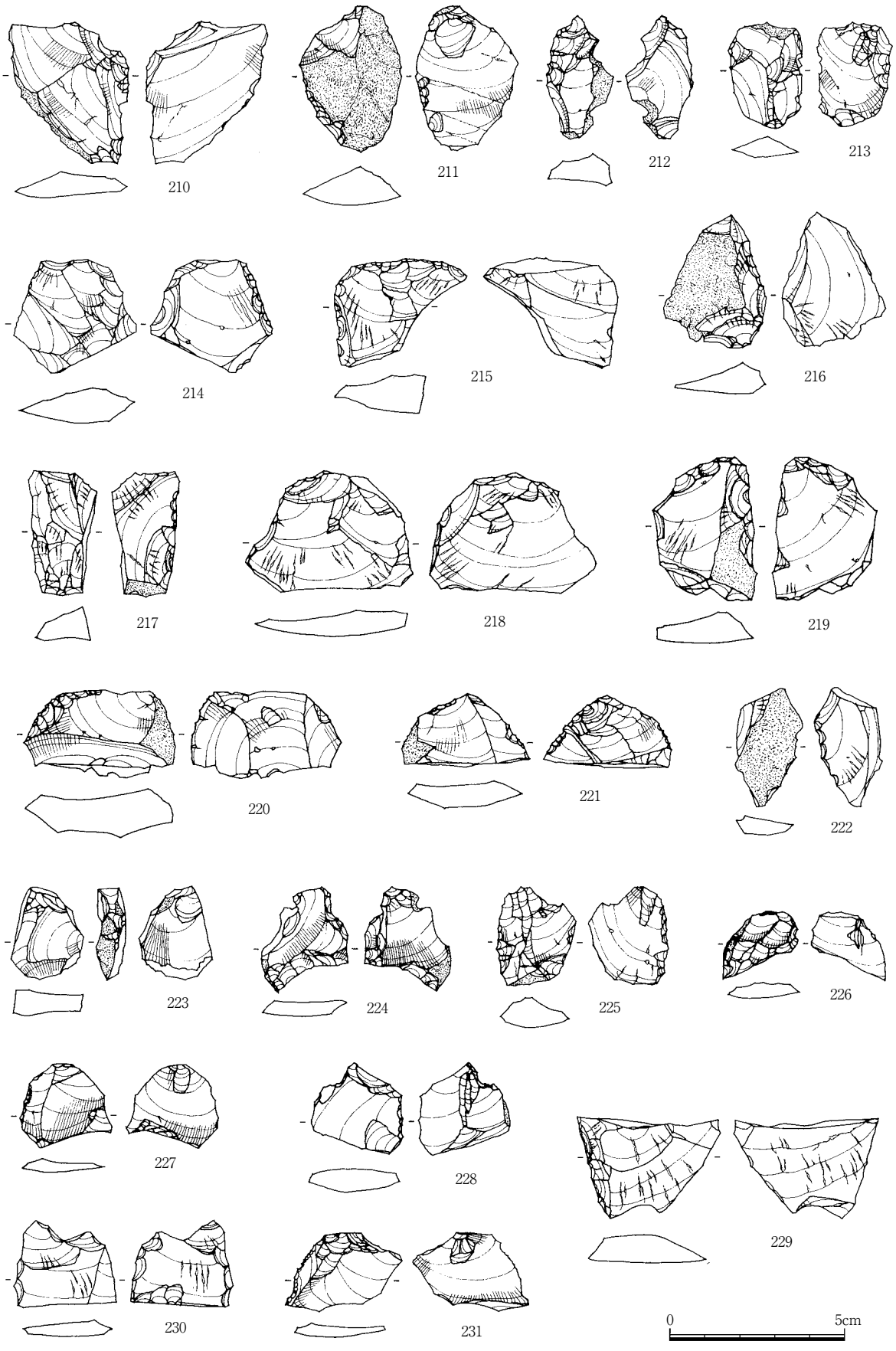
第 41 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（7）スクレーパー類



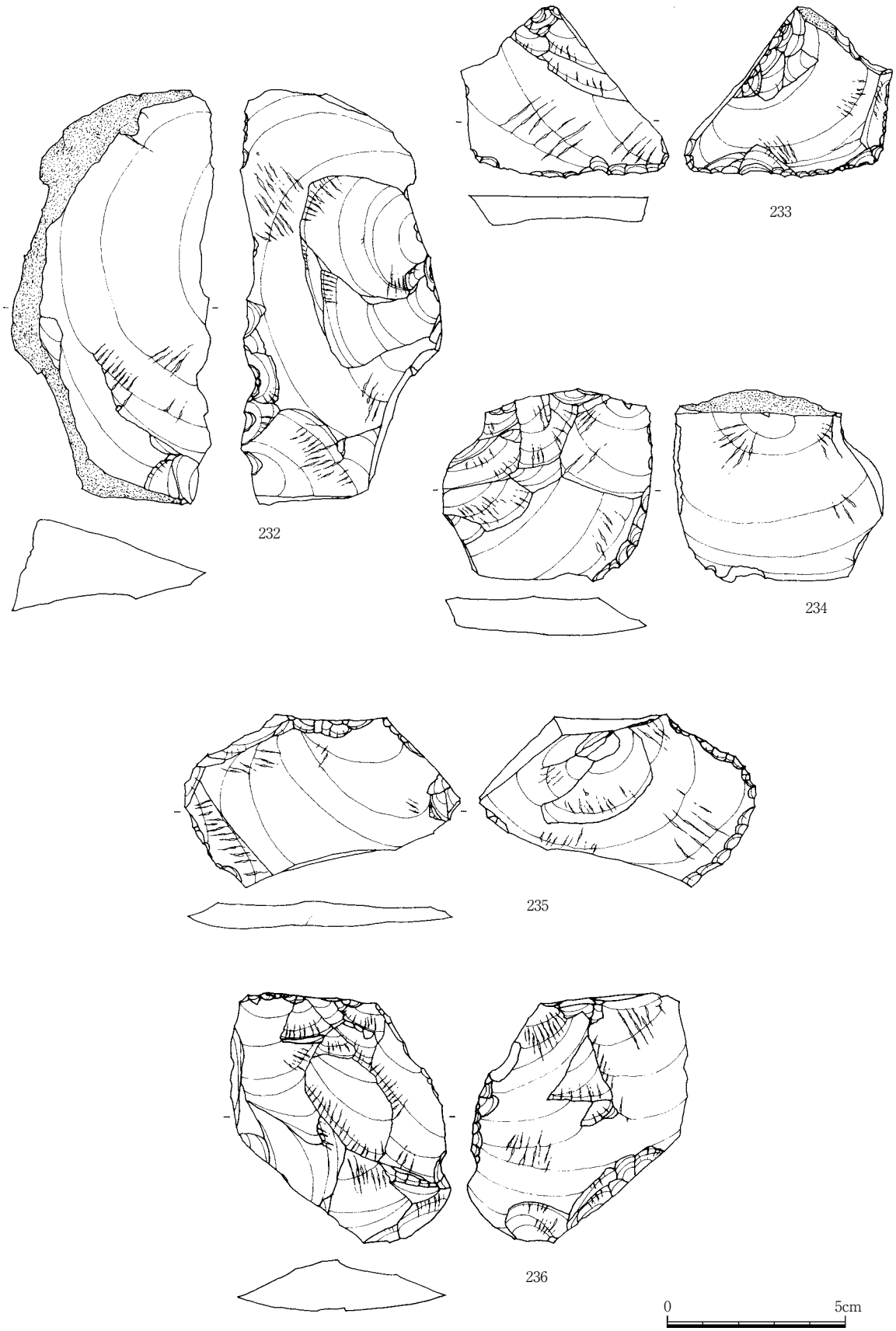
第 42 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（8）スクレーパー類



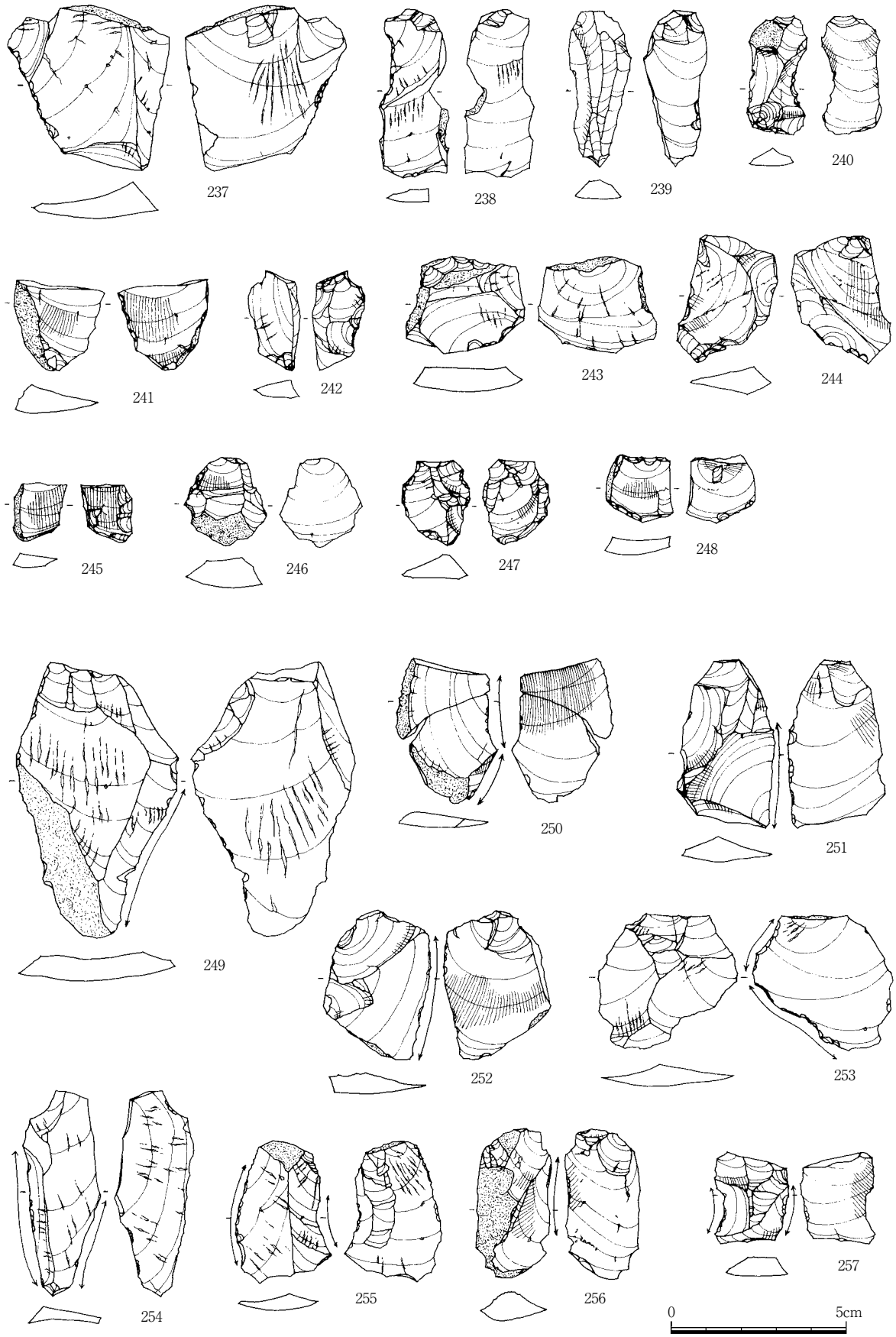
第 43 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（9）スクレーパー類



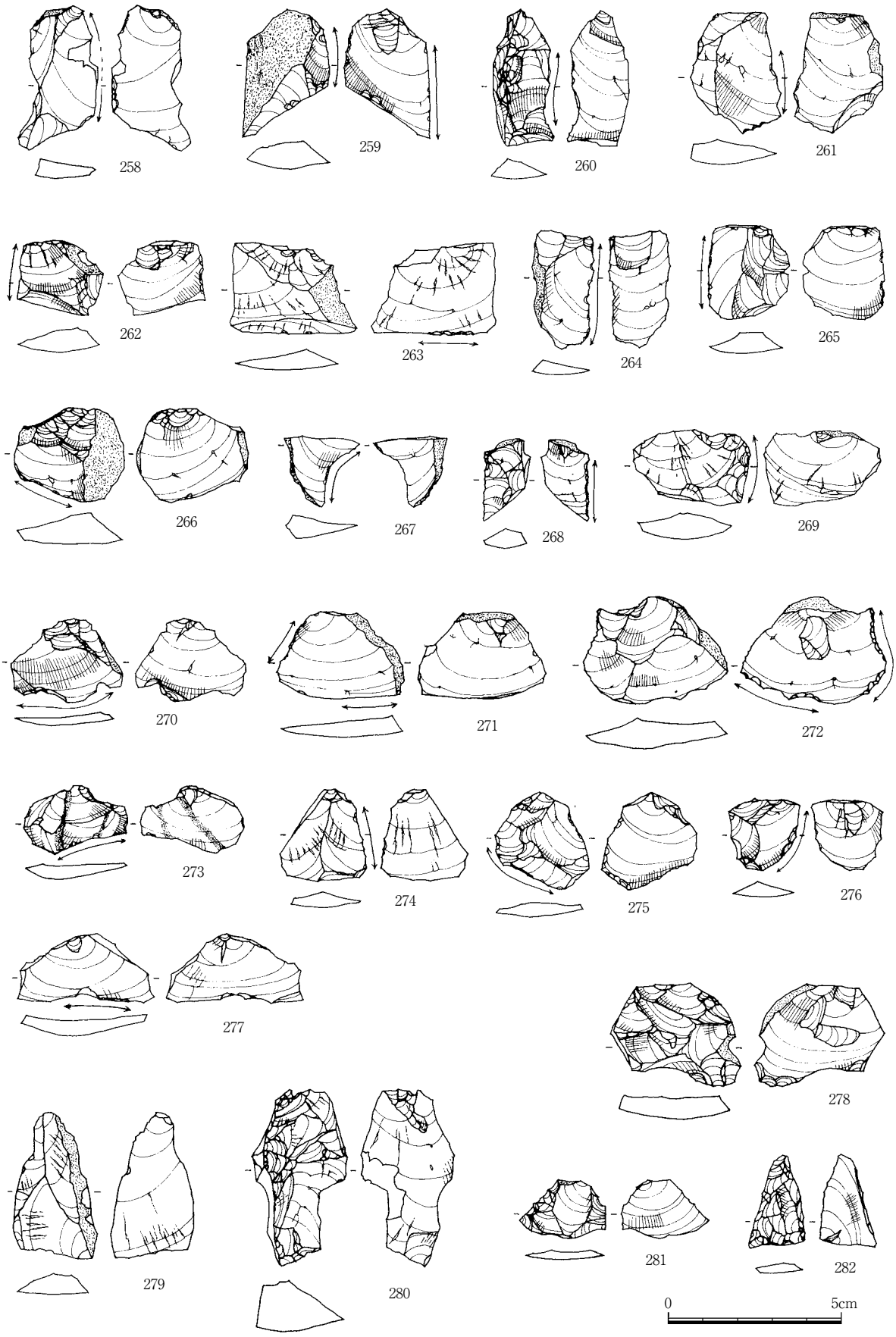
第 44 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（10）スクレーパー類



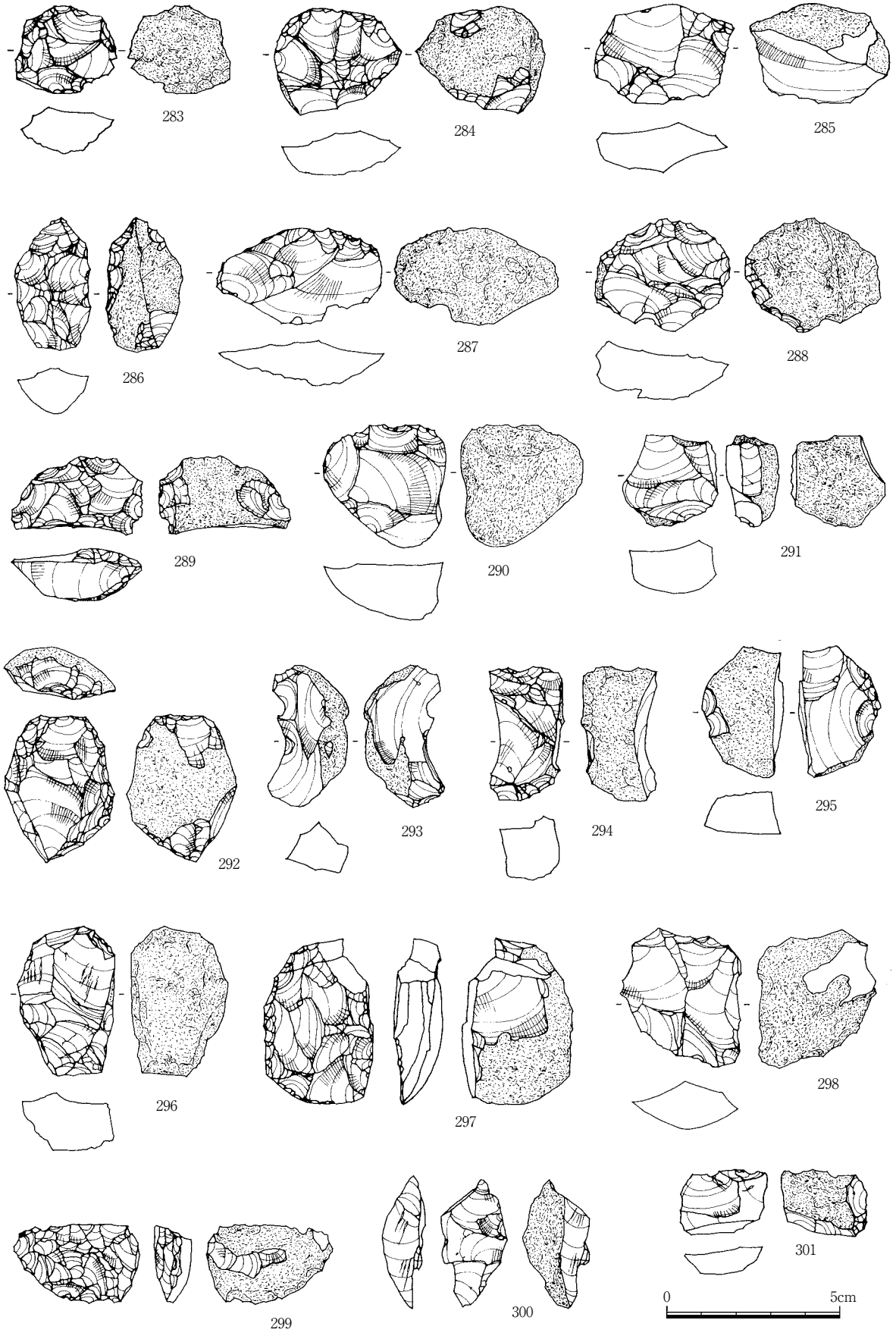
第 45 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（11）スクレーパー類



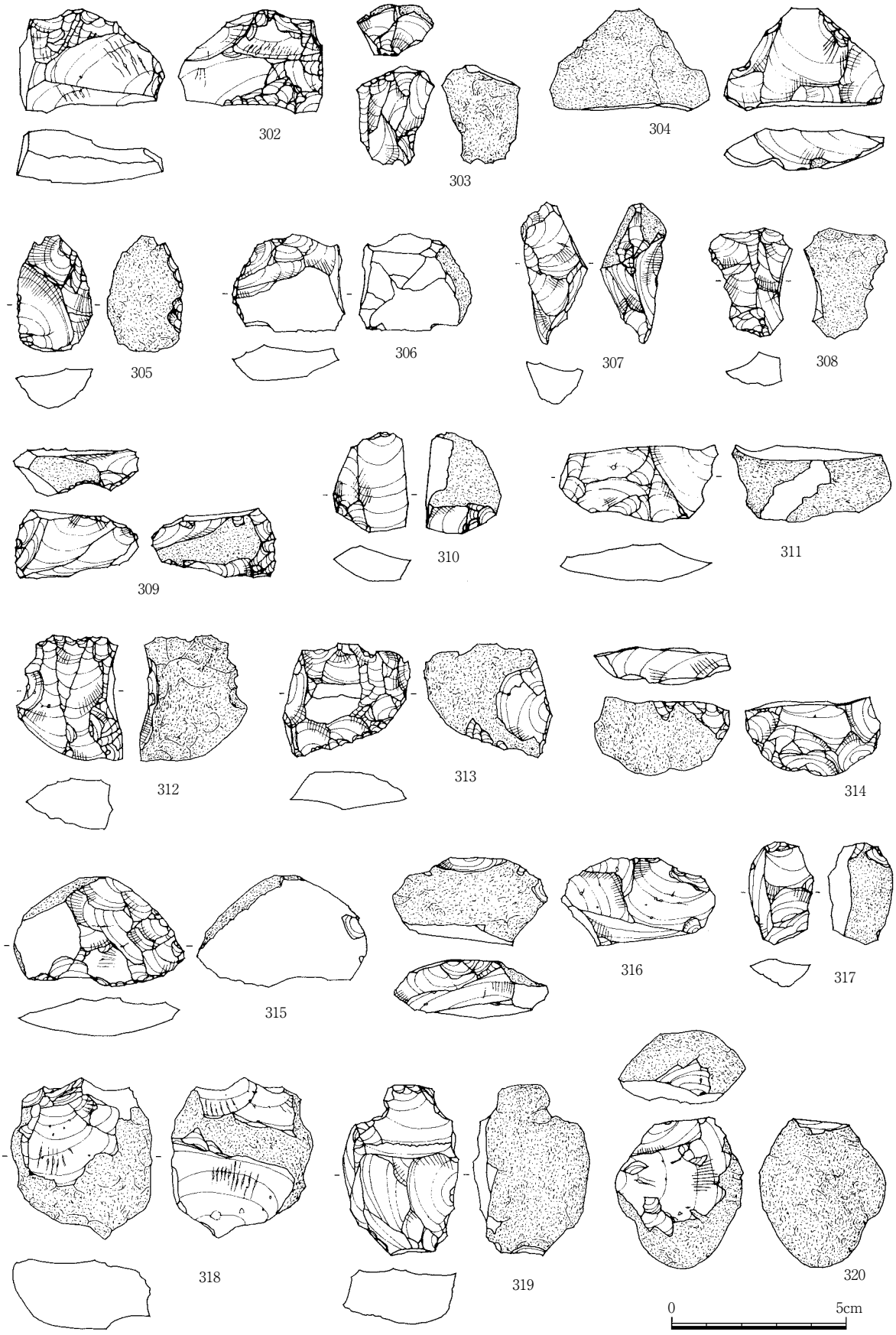
第 46 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（12）加工痕のある石器、使用痕のある石器



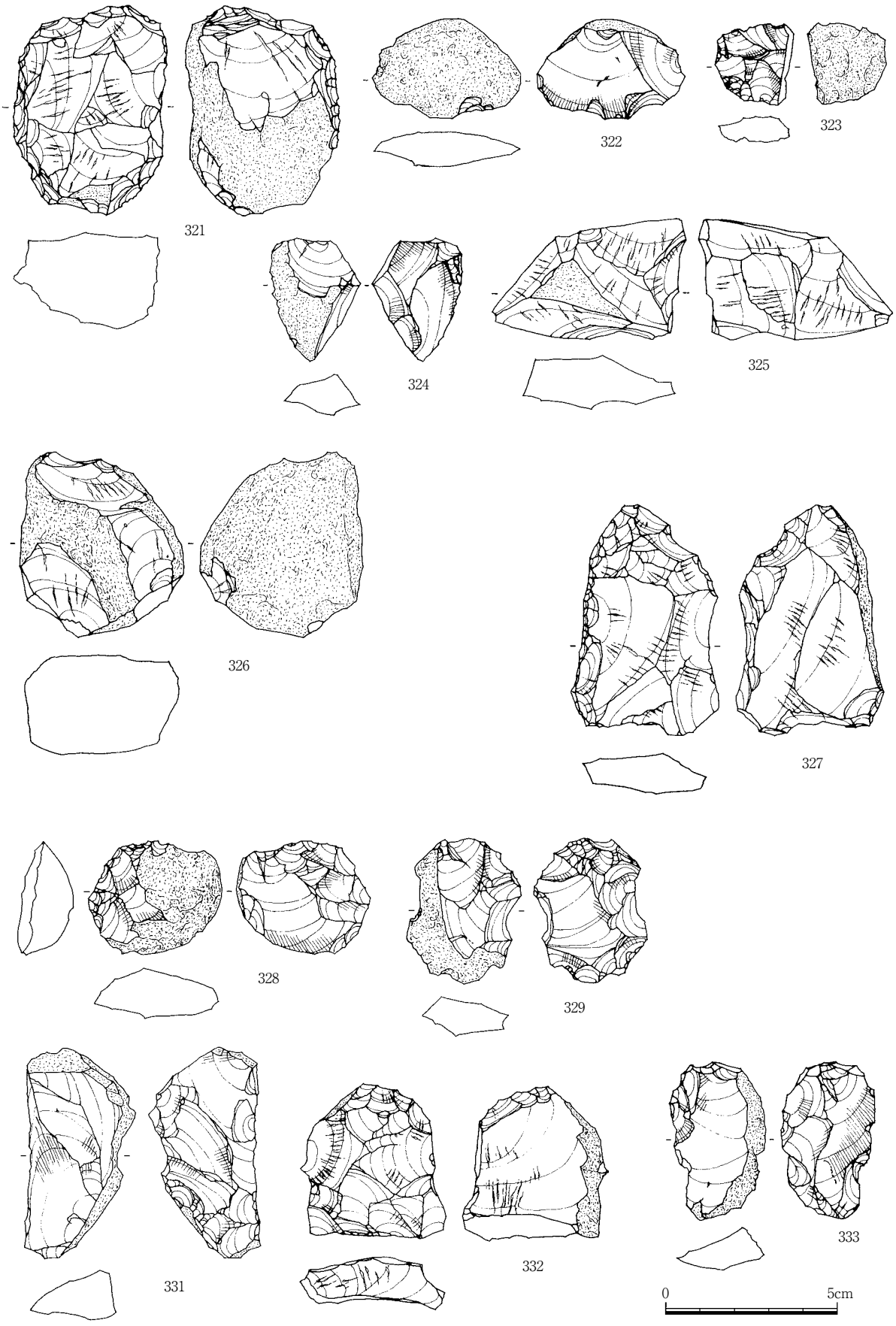
第 47 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（13）使用痕のある石器、剝片、砕片



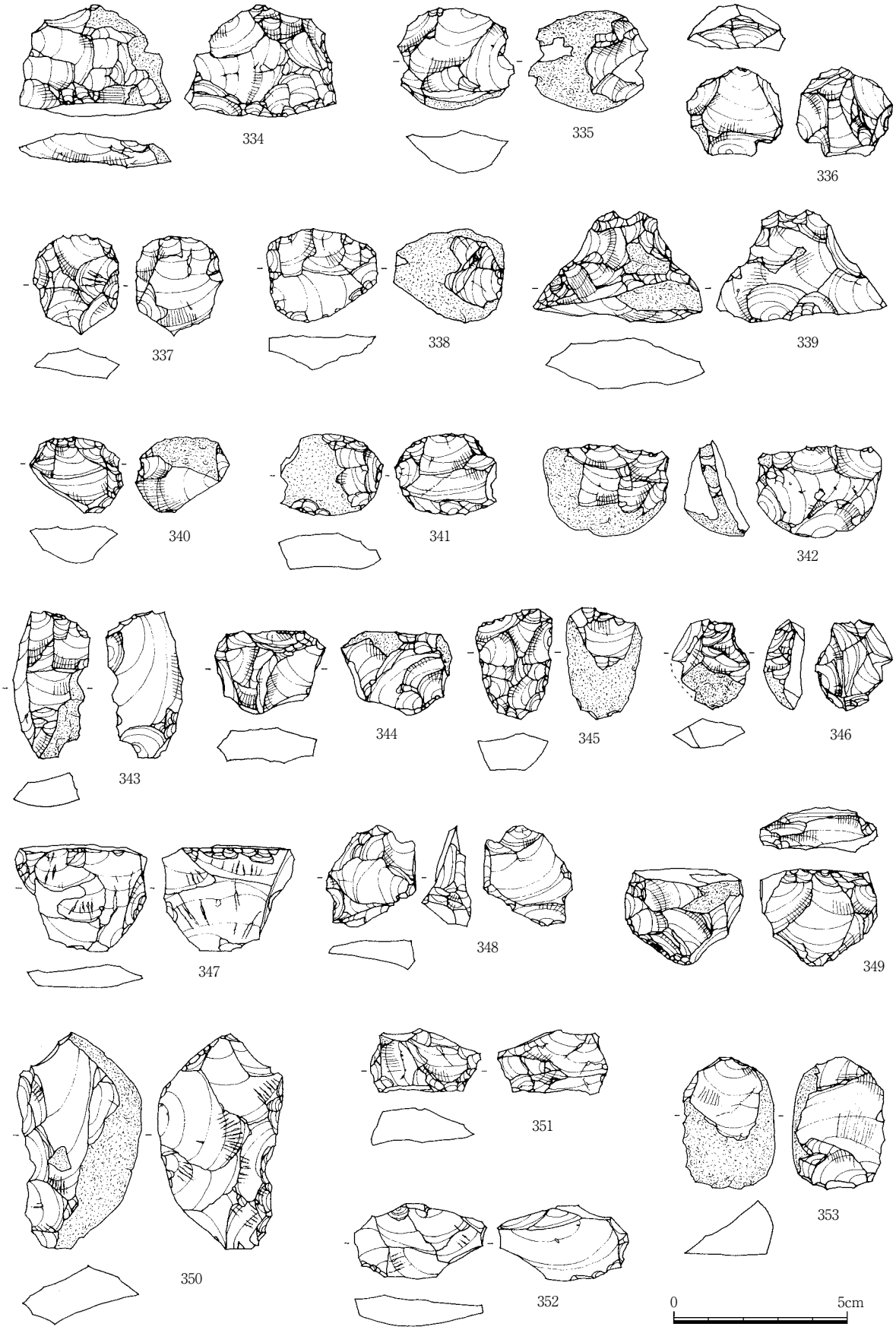
第 48 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（14）石核



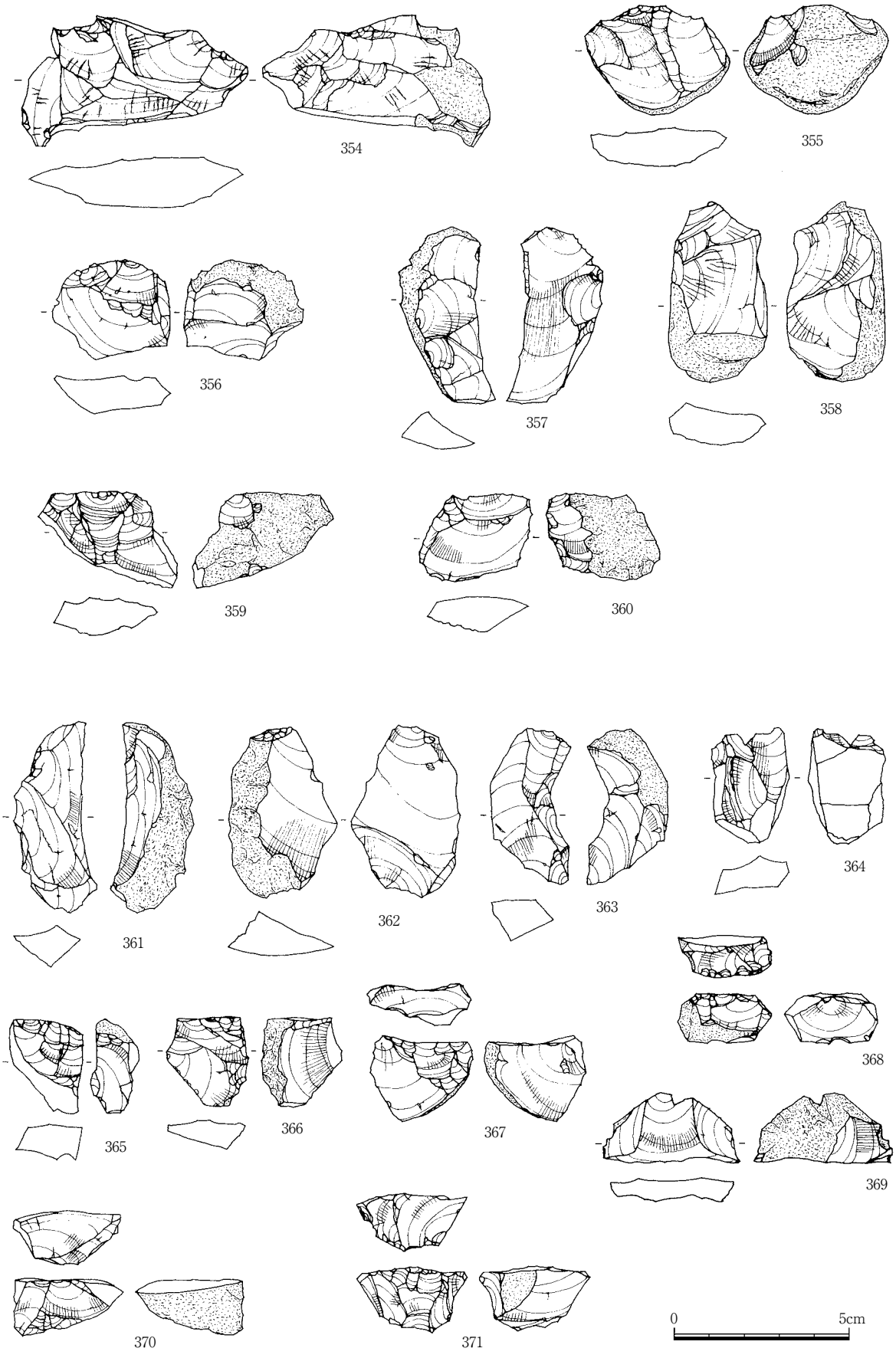
第 49 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（15）石核



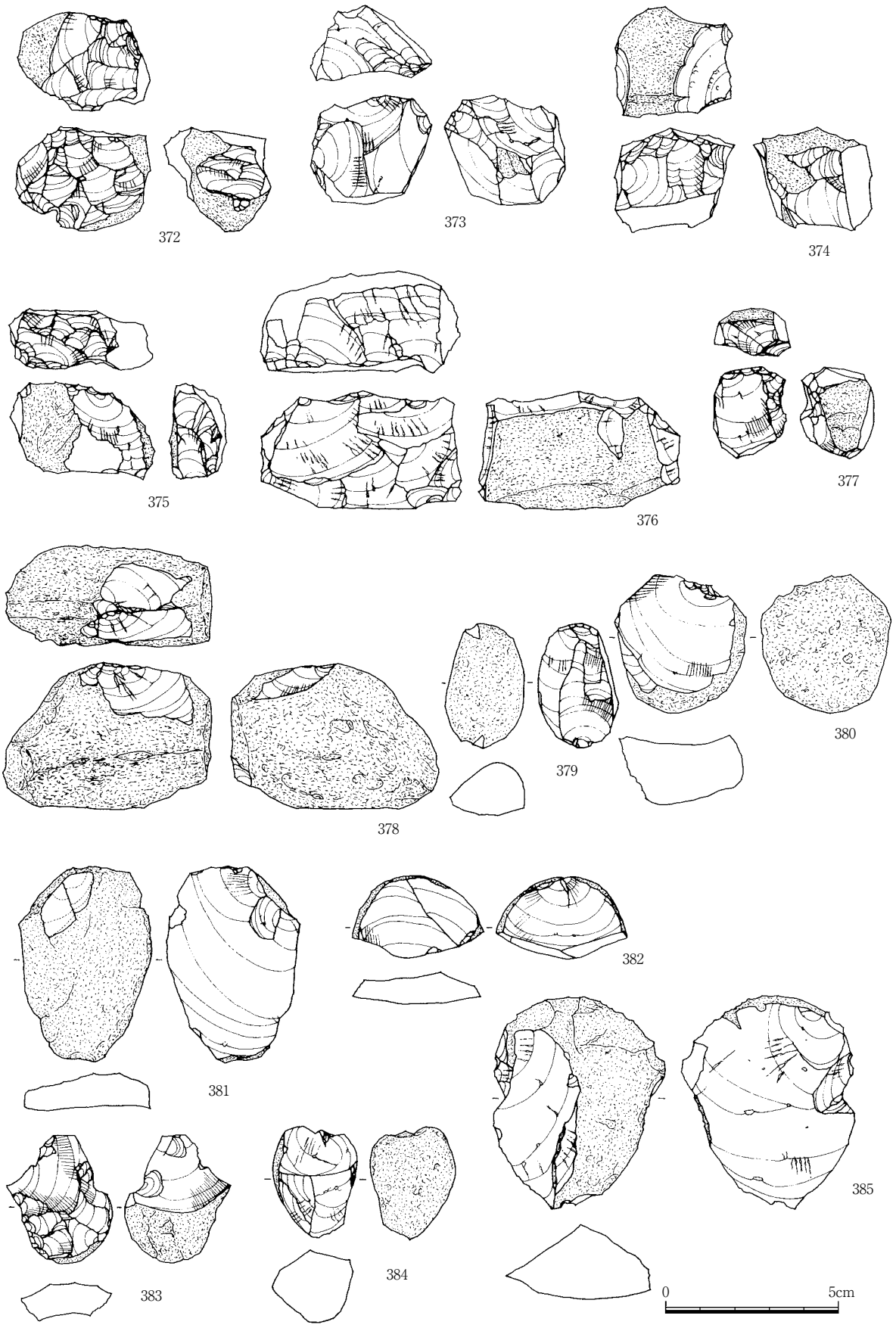
第 50 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（16）石核



第 51 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（17）石核



第 52 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（18）石核



第 53 図　元岡・桑原遺跡群第３次調査出土石器（19）石核、石核素材

表6　石器観察表（第３次調査地点）　①

図番号	収蔵番	区	取上	層	器種	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	備　　考
1	3336	１３Ｆ	18	４層	石鏃	黒色黒曜石	2.45	1.58	0.52	1.83	第一次剥離面を残すが、細調整により形状を整えている
2	3283	４４Ｏ	9		石鏃	黒色黒曜石	2.07	1.13		0.67	粗い細調整を施し、第一次剥離面を残している
3	3191	３８Ｊ	43		石鏃	ハリ質安山岩	1.33	1.62	0.46	0.89	両面に粗い調整を施す　先端部欠損
4	3265	43・4L			石鏃	ハリ質安山岩	1.91	1.50	0.51	1.26	両面に第一次剥離面を残す
5	3051	１５Ｈ	48	３層	石鏃	腰岳黒曜石	2.03	1.42	0.38	0.95	右側折断時の失敗品
6	3106	３０Ｋ			石鏃	青灰色黒曜石	1.87	1.03	0.39	0.81	両面に第一次剥離面を大きく残す
7	3379	３７Ｇ	15	１０層	石鏃	安山岩	2.79	2.02	0.59	3.39	調整が粗く、背面に第一次剥離面を大きく残す
8	3119	３２Ｊ	198	６層	石鏃	針尾中町黒曜石	2.16	1.87	0.67	2.07	左側辺が折断している
9	3137	３５Ｉ		７層	石鏃	ハリ質安山岩	2.04	1.46	0.46	1.18	両面に粗い調整が施されている
10	3002	９Ｆ	2		石鏃	ハリ質安山岩	1.52	1.29	0.43	1.01	先端や左側辺が欠損している
11	3205	３９Ｉ	78・1	５層	石鏃	黒色黒曜石	1.40	1.29	0.35	0.52	正三角形に近い石鏃
12	3136	３５Ｈ	64	７層	石鏃	灰色黒曜石	2.12	1.56	0.47	0.95	右脚欠損　三角形鏃
13	3620	３３Ｈ	24	３層	石鏃	黒曜石（不純物）	1.75	1.42	0.39	0.94	抉りを形成せず、先端部は欠損している
14	3342	３６Ｉ	46	８層？	石鏃	黒色黒曜石	2.91	1.51	0.54	1.82	断面三角形状を呈するが、調整は比較的丁寧
15	3193	３８Ｋ	11	３層	石鏃	灰色黒曜石	2.83	1.32	0.39	0.37	両面に丁寧な細調整を施した二等辺三角形鏃
16	3315	４７Ｐ	45		石鏃	青灰色黒曜石	3.29	1.90	0.36	1.63	加工の丁寧な薄い製品で、抉りの浅い三角鏃
17	3095	２３Ｊ	1	１層	石鏃	ハリ質安山岩	3.70	3.46	0.64	2.91	正面中央は調整が及ばず、階段状をなす
18	3082	１７Ｏ	2	３層？	石鏃	ハリ質安山岩	2.26	1.61	0.35	1.08	浅い抉りを入れた三角形鏃
19	3223	４０Ｉ	61	９層	石鏃	黒色黒曜石	0.85	1.46	0.34	0.34	先端・両脚欠損
20	3264	４２Ｑ	59	８層？	石鏃	黒色黒曜石	1.01	1.18	0.26	0.21	先端・片脚欠損
21	3234	４０Ｌ		表採	石鏃	ハリ質安山岩	1.73	1.55	0.28	0.63	両面に比較的粗い調整が施されている
22	3101	２９Ｌ	65	７層	石鏃	黒色黒曜石	0.61	1.22	0.23	0.18	先端部欠損　抉りの浅い薄い石鏃
23	3221	４０Ｊ	30	３層	石鏃	ハリ質安山岩	1.74	1.33	0.40	0.97	両面に第一次剥離面を残す
24	3252	４１Ｋ	91	１層	石鏃	黒色黒曜石	2.21	0.72	0.27	0.37	右脚が形成されていない
25	3241	４１Ｋ	1	１層	石鏃	黒色黒曜石	2.50	1.16	0.30	0.39	両面に丁寧な調整を施した脚部の長い石鏃
26	3220	３９Ｐ	1		石鏃	黒色黒曜石	2.35	0.72	0.37	0.42	脚部片　鋸歯状調整で、抉りは深く整形している
27	3239 ①	41・2HI			石鏃	灰色黒曜石	2.26	0.76	0.24	0.28	片脚欠　やや鋸歯状　先端部やや丸みを帯びる
28	3341	３３Ｉ		２層	石鏃	青灰色黒曜石	1.15	1.32	0.29	0.42	先端部の欠けた薄い石鏃
29	3132	３５Ｈ		１層	石鏃	黒色黒曜石	2.20	1.70	0.50	1.25	片脚折断　やや抉りのある幅広の石鏃
30	3306	４６Ｑ	7		石鏃	黒色黒曜石	2.41	1.33	0.36	0.77	やや深い抉りを形成　右脚折断
31	3289	45・6OP		最上層	石鏃	黒色黒曜石	2.61	1.68	0.38	1.18	深い抉りのある鍬形鏃
32	3290	45・6OP		最上層	石鏃	黒色黒曜石	1.93	1.50	0.45	0.95	入稔な細調整を加えた鍬形鏃
33	3308	４６Ｒ	1		石鏃	黒色黒曜石	2.36	1.89	0.38	1.10	両脚欠ける　鍬形状を呈する
34	3224 ①	４０Ｊ		３層	石鏃	黒色黒曜石	1.96	1.70	0.40	0.93	両面全体に細調整を施しているが、形状はやや不定形
35	3321	４８Ｏ	9		石鏃	黒色黒曜石	0.75	1.21	0.24	0.21	先端および両脚が欠損している
36	3081	１７Ｎ		表採	石鏃	黒色黒曜石	1.66	1.17	0.35	0.43	両面にやや粗い細調整を加えている　先端・片脚欠損
37	3219	３９Ｏ	4		石鏃	黒色黒曜石				0.31	両面に入念な細調整を施している
38	3311	４７Ｎ	11		石鏃	黒色黒曜石	1.36	1.00	0.28	0.34	先端部・両脚欠　やや鋸歯状を呈する
39	3285	４４Ｏ	17		石鏃	黒色黒曜石	0.80	1.05	0.27	0.22	両面に丁寧な細調整を加えた小形石鏃
40	3647	３６Ｉ	68	８層	石鏃	黒色黒曜石	2.23	1.69	0.73	2.45	未製品または失敗品と思われる
41	3604	３０Ｋ	158	７層	石鏃	黒色黒曜石	1.87	2.37	0.66	2.32	両面に粗い調整を施した不定形のもので、失敗品と思われる
42	欠番										
43	3553	４５Ｌ	2	１層	石鏃	黒色黒曜石	2.65	3.04	1.00	5.38	楔形石器の可能性もあるが、形状より石鏃失敗品と判断した
44	3227	４０Ｊ	67	８層	石鏃	灰色黒曜石	1.70	0.98	0.35	0.32	先端部片　丁寧に仕上げている
45	3146	３６Ｇ	10	９層	石鏃	黒色黒曜石	1.92	0.97	0.47	0.68	背面に下端からの加撃痕があり、抉りを入れていたと思われる
46	3291	４５Ｋ	27	１層	石鏃	ハリ質安山岩	3.04	1.57	0.30	1.26	基部が折断されているが、薄く仕上げた鮎地型であろうか？
47	3271	４３Ｐ	32	３層	石鏃	黒色黒曜石	1.41	1.12	0.35	0.32	折断したことによる失敗品
48	3133	３５Ｈ	19	７層	石鏃	灰色黒曜石	1.31	1.13	0.34	0.37	下半分は新しい破損
49	3033	１３Ｉ	1	７層	石鏃	青白色黒曜石	1.31	1.40	0.34	0.41	下部が折断しているが、抉りの痕跡が認められる
50	3253	４１Ｋ	98	１層	石鏃	ハリ質安山岩	1.56	1.26	0.43	0.66	基部欠損　両面にやや粗い調整を施す
51	3140	３５Ｊ	15	２層	石鏃	黒色黒曜石	1.40	0.53	0.16	0.12	下端部欠損だが、両面に入念な調整を施した柳葉形石鏃か？
52	3278	４４Ｎ	45	３層	石鏃	黒色黒曜石	1.10	0.81	0.24	0.16	比較的粗い調整の先端部片
53	3020	１２Ｆ		４層	石鏃	黒色黒曜石	1.64	1.68	0.22	0.53	薄い剥片に平坦細調整を施すが、基部は折断している
54	3247	４１Ｊ	36	４層	石鏃	灰色黒曜石	1.92	0.81	0.38	0.57	基部・側辺が欠損している
55	3094	２２Ｆ	25	２層	石鏃	黒色黒曜石	1.31	1.38	0.33	0.56	先端と基部が折れている
56	3288	４４Ｐ	17		石鏃	ハリ質安山岩	2.25	1.75	0.62	1.95	両面に粗い調整を施している　下部は折断
57	3569	１２Ｆ	33	４層	石鏃	灰色黒曜石	1.67	1.78	0.46	1.24	両面に細調整を施す　調整に失敗したと思われ、折断している
58	3128	３４Ｊ	61	３層	石鏃	黒色黒曜石	1.65	1.11	0.35	0.54	基部は調整に失敗し、右側辺は折れている
59	3111	３１Ｉ	68	５層	石鏃	黒色黒曜石	1.05	1.14	0.40	0.56	両端欠損、細長の石鏃と考えられる
60	3034	１３Ｉ	2	７層	石鏃	黒色黒曜石	1.44	1.43	0.70	1.49	基部抉りのない、厚手の小形細長石鏃か？
61	3608	３１Ｈ	156	5’層	石鏃	ハリ質安山岩	2.06	2.68	0.83	3.08	剥離中に折断したと思われ、失敗品と考えられる
62	3203	３９Ｈ	11	５層	石鏃	黒色黒曜石	1.25	0.41	0.26	0.10	石鏃の側辺部と思われる
63	3011	１１Ｆ	6	３層	石鏃	黒色黒曜石	3.08	0.75	0.31	0.62	両面に細かな調整を施すが、正面を研磨した柳葉形石鏃
64	3001	9E		表採	石鏃	灰色黒曜石	2.41	1.66	0.24	0.78	両面を研磨し、浅い抉りを入れている

表7　石器観察表（第３次調査地点）　②

図番号	収蔵番	区	取上	層	器種	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	備　　考
65	3309	４６R	5		石鏃	黒色黒曜石	1.05	1.84	0.29	0.54	正面に研磨痕　先端部欠損
66	3296	45・6OP		最上層	石鏃	黒色黒曜石	1.46	1.38	0.31	0.50	両面を研磨　両側辺にも研磨痕あり
67	3307	４６Q	8		石鏃	黒色黒曜石	1.73	1.60	0.42	0.89	両面に研磨を施し、粗い剥離も認められる
68	3299	４６L	74	２層	石鏃	黒色黒曜石	1.13	0.80	0.22	0.16	研磨を施した極めて小形の石鏃
69	3183	３８I	27	２層	石鏃	黒色黒曜石	1.22	0.50	0.17	0.11	局部磨製　長めの脚部を持つ
70	3275	４４M		３層	石鏃	灰色黒曜石	1.81	1.34	0.24	2.72	中央部を研磨し、薄く仕上げている
71	3167	３８G	60	１０層	石鏃	灰色黒曜石	1.27	0.82	0.28	0.27	局部磨製　基部は折れているが、先端は新しいキズ
72	3232	４０K	69	２層	石鏃	黒色黒曜石	1.43	1.26	0.20	0.30	両面を研磨した後、細かな細調整を実施
73	3231	４０K	63	２層	石鏃	黒色黒曜石	1.05	0.86	0.17	0.12	両面を研磨した後、細調整を行っている
74	3281	４４N	74	３層	石鏃	黒色黒曜石	1.63	1.32	0.28	0.44	小形剥片に部分的細調整を加えたもの　基部は凸状を呈する
75	3634	３５I	21	２層	石鏃	松浦黒曜石	2.12	1.42	0.65	1.58	抉りが形成されず、凸状をなすと考えられる
76	3007	１０G	9		石鏃	灰色黒曜石	1.68	1.76	0.30	0.99	部分的に細調整を施した石鏃未製品
77	3205	３９I	78・2	５層	石鏃	灰色黒曜石	2.44	1.50	0.43	1.13	一部に粗い調整を施した未製品　左側辺は欠損
78	3587	１７J	26	３層	石鏃	腰岳黒曜石	3.02	2.50	0.65	3.73	両面に平坦細調整を施すが、自然面、第一次剥離面を残す
79	3712	４１K	4	１層	石鏃	黒色黒曜石	2.68	2.28	0.63	3.15	未製品　主に背面に調整を施している
80	3682	３９I	81	５層	石鏃	松浦黒曜石	2.71	1.80	1.77	2.95	背面の調整を行っているが、正面は未加工
81	3613	３１K	138	５’層	石鏃	ハリ質安山岩	2.74	1.72	0.37	1.71	両面の一部に調整を加えており、石鏃未製品と考えられる
82	3607	３１H	32	４層	尖頭状石器	松浦黒曜石	4.25	2.54	0.92	7.18	背面の一部に調整痕が認められる
83	17351	３３J	43		尖頭状石器	安山岩	2.60	2.18	0.85	4.36	背面は一部平坦細調整、正面は斜め細調整状を呈する
84	3776	４６O	135		尖頭状石器	黒色黒曜石	1.72	2.05	0.67	2.53	両面に粗い調整を施している　下部は折断
85	3580	１６G		７層	尖頭状石器	ハリ質安山岩	3.60	2.97	0.53	5.90	部分的ではあるが、両面に平坦細調整を施している
86	3706	４０K	67	２層	尖頭状石器	ハリ質安山岩	2.40	2.92	0.70	3.83	粗い調整痕で、下部欠損
87	3765	４６M	61	２層	尖頭状石器	腰岳黒曜石	3.53	1.98	0.84	3.57	背面の一部に調整痕が認められる　未製品
88	3721	４２J	26	４層	尖頭状石器	松浦黒曜石	2.91	2.45	0.88	5.12	凸状の基部をもち、両面に粗い加工を施している
89	3763	４６L	71	２層	尖頭状石器	針尾中町黒曜石	2.15	2.30	0.55	2.47	基部欠損　両面に粗い調整を施している
90	3330	３４G		表採	尖頭状石器	ハリ質安山岩	4.40	2.44	0.80	9.36	横広剥片の両面に粗い調整を施している
91	3716	４１P		表採	石槍	ハリ質安山岩	3.86	2.54	1.27	12.17	正面の調整は極めて部分的で、両端が欠損している
92	3625	３４I	22	２層	石槍	安山岩	6.74	2.88	1.37	26.51	扁平な礫を素材とし、両面に調整を行おうとする意図が窺える
93	3736	４３Q	14	３層	石槍	玄武岩	6.65	3.55	1.80	41.15	未製品　正面の両側縁からの粗い加工が認められる
94	3748	４４O	20		石槍	安山岩	6.25	3.23	0.97	13.22	未製品　一部に細調整、微調整を施している
95	3238	４０P	8		石槍	黒色黒曜石				1.23	下半部が欠損しており、石鏃の可能性もある
96	3744	４４N	46	３層	楔形石器	針尾中町黒曜石	3.01	1.82	0.73	3.55	上下両端からの剥離痕と右側辺に樋状剥離痕が認められる
97	3396	１４F	26	３層	楔形石器	腰岳黒曜石	2.36	2.54	1.01	6.89	上下両端、右側縁からの加撃が認められる
98	3547	３７G	9	１０層	楔形石器	黒色黒曜石	2.90	2.43	0.94	5.19	背面に上下両面からの調整痕が認められる
99	3554	４７M	17		楔形石器	松浦黒曜石				5.42	左側縁は折断による
100	3413	１４H	12	３層？	楔形石器	黒色黒曜石	3.00	2.01	0.81	4.69	旧石器時代のやや厚手の剥片（石器）を素材　二重パティナ
101	3546	３６L	2		楔形石器	針尾中町黒曜石	3.84	1.82	1.46	8.06	下端より両側辺に樋状剥離を行ったとみられる
102	3552	４４K	1	１層	楔形石器	黒色黒曜石	3.52	1.24	1.32	4.77	上下両端に剥離痕あり　樋状剥離により細石核から剥離か？
103	3544	３５I	41	７層	楔形石器	灰色黒曜石	2.11	2.67	0.99	4.07	上下両端に調整痕あり　樋状剥離は明確でない
104	3423	１７M	4	３層？	楔形石器	腰岳黒曜石	3.09	1.32	1.01	3.57	上下両面に加工を施し、左側辺は樋状剥離が認められる
105	3695	４０I	50	７層	楔形石器	黒色黒曜石	2.16	1.79	0.53	2.17	上下両端と左側辺に平坦細調整を施している
106	3754	４５M	41	３層	楔形石器	黒色黒曜石	2.01	2.08	0.63	2.30	上下両端に加工痕が認められる
107	3654	３６K	21	７層	楔形石器	ハリ質安山岩	2.93	1.60	0.60	2.67	右側辺に樋状剥離痕が認められる
108	3543	３５G	5	７層	楔形石器	黒色黒曜石	2.64	1.86	0.65	3.05	上下両端に調整痕あり　比較的薄い剥片素材
109	3687	３９J	89	３’層	楔形石器	松浦黒曜石	1.85	1.60	0.41	1.49	上下両面に加撃痕あり
110	3697	４０I	55	９層	楔形石器	黒色黒曜石	1.63	2.07	0.47	1.23	小形で薄い剥片素材　樋状剥離痕は認められない
111	3652	３６J	101	７層	楔形石器	黒色黒曜石	2.43	1.98	0.52	2.33	右側辺は折断面
112	3690	３９J	126	８層	楔形石器	黒色黒曜石	2.80	1.20	0.75	2.03	左側辺に樋状剥離、上下両端に調整痕あり
113	17245	３２J	196		楔形石器	灰色黒曜石	2.51	1.46	0.98	2.40	上下両端に調整痕、両側辺に樋状剥離痕あり
114	3542	３４J	32	２層	楔形石器	黒色黒曜石	2.26	1.96	0.90	4.41	正面上下両端に剥離痕あり　左側辺に樋状剥離痕
115	3550	３９J	117	８層	楔形石器	黒色黒曜石	2.26	1.76	0.53	1.90	両面に細調整痕あり　石鏃の可能性もある
116	3549	３８I	85	５層	楔形石器	黒色黒曜石	2.67	1.84	0.98	3.75	右側縁に樋状剥離痕あり　上下両端に調整を施している
117	3700	４０J	70	８層	楔形石器	黒色黒曜石	2.33	2.14	0.71	3.15	左側辺は折断面　石核の可能性もある
118	3545	３６I	65	８層	楔形石器	黒色黒曜石	2.45	1.95	0.75	3.47	上下両端に加撃痕　右側辺に樋状剥離痕
119	3548	３７I			楔形石器	黒色黒曜石	2.77	2.70	0.95	6.20	両側縁に樋状剥離痕あり
120	3655	３７F	1		彫器	黒色黒曜石	2.81	1.91	0.56	2.14	右側辺に樋状剥離痕が３ヶ所認められる
121	3689	３９J	119	８層	彫器	灰色黒曜石	4.00	2.08	0.84	5.24	左側辺に細かな調整を施す
122	3725	４２Q	56	８層？	彫器	松浦黒曜石	2.93	2.00	0.70	3.57	右側辺（２面）と下部に樋状剥離痕が認められる
123	3791	４８P	7		彫器	松浦黒曜石	2.72	1.72	0.61	2.02	左右両辺に樋状剥離痕が認められる
124	3705	４０K	53	７層	彫器	黒色黒曜石	2.81	1.66	0.46	2.02	両側面に樋状剥離痕が認められ、その打面に調整を施す
125	3517	１４G	17	１層	石錐	黒色黒曜石	2.46	1.56	0.99	2.81	両面への調整により先端を尖らせている
126	3675	３９H	65	５下層	石錐	松浦黒曜石	2.95	3.38	1.10	9.34	先端部の状況から、未製品と考えられる　調整は粗い
127	3648	３６J	11	２層	石錐	松浦黒曜石	3.11	1.95	0.88	3.25	右側辺は調整、左側辺は折断により整形している
128	3519	１２G		４層	石匙	ハリ質安山岩	3.03	2.44	0.37	2.30	両側辺に抉り状加工　端部両面に調整痕が認められる

表８　石器観察表（第３次調査地点）　③

図番号	収蔵番	区	取上	層	器種	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	備　　考
129	3660	３８H	23	５層	スクレーパー	黒色黒曜石	3.15	3.71	1.10	12.89	正面に斜め細調整、背面に平坦細調整が施されている
130	3677	３９H	71	５下層	スクレーパー	安山岩	2.94	2.94	0.55	5.51	両面のほぼ全周に調整を加え、円形に仕上げている
131	3777	４６O	147		スクレーパー	安山岩	2.97	2.91	0.90	6.77	部分的に平坦細調整を施し、円形に仕上げている
132	17386	３３J	103		スクレーパー	灰色黒曜石	2.58	3.11	1.14	6.40	下端部に調整痕が認められ、残核利用のスクレーパー
133	3383	３９J	133	８層	スクレーパー	安山岩	3.73	4.80	1.03	15.64	ほぼ全周に細調整を施す　円形スクレーパーと思われる
134	3706	４０K	67	２層	スクレーパー	ハリ質安山岩	3.01	2.35	0.69	3.83	円形掻器と思われ、両面に調整を施している
135	3605	３０K	193	７層	スクレーパー	黒色黒曜石	1.94	2.42	0.44	2.11	上部が折断されているが、円形掻器と考えられる
136	3665	３８I	102	５層	スクレーパー	黒色黒曜石	2.26	2.05	0.49	2.77	四角形を呈するが、周辺に細調整を施している
137	3657	３８G	150	１０層	スクレーパー	黒色黒曜石	1.98	2.43	0.75	3.09	上部を除き、調整痕あり　円形掻器と思われる
138	3781	４６P	118		スクレーパー	腰岳黒曜石	2.35	2.18	0.97	3.31	両面に平坦細調整に近い加工を施し、円形に仕上げている
139	3376	３３G	1		スクレーパー	ハリ質安山岩	4.84	5.02	1.31	34.09	両面のほぼ全周に斜め細調整を施した典型的な円形掻器
140	3456	３９J	26	３層	スクレーパー	ハリ質安山岩	3.38	3.80	1.80	18.30	厚手剥片の端部に細調整を施している　円形掻器を意図か？
141	3474	４５M	8	３層	スクレーパー	松浦黒曜石	2.43	2.63	1.09	6.80	円形掻器を意図している　残核を利用した可能性が高い
142	3386	４１Q	2	８層	スクレーパー	ハリ質安山岩	3.65	4.00	1.10	14.44	下端部等に細調整を施している
143	3576	１５I	32	４層	スクレーパー	松浦黒曜石	3.42	1.20	0.84	3.12	両面に調整を施しているが、破損しているため全体像不明
144	3600	２９M	34	７層	スクレーパー	松浦黒曜石	4.25	2.54	0.83	9.25	不定形剥片の右側辺を中心に斜め細調整を施している
145	3609	３１J	45	５層	スクレーパー	メノウ	4.43	3.64	1.02	15.94	端部と側辺に細調整を施した大原Ｄ・元岡型スクレーパーか？
146	3790	４７P	33		スクレーパー	ハリ質安山岩	5.56	4.50	0.91	25.85	両側辺と先端に加工を施した大原Ｄ・元岡型スクレーパーか？
147	3591	１８J	37	４層	スクレーパー	ハリ質安山岩	3.57	2.86	0.78	8.68	先端部の調整は明確でないが、大原Ｄ・元岡型スクレーパー
148	3659	３８H	19	５層	スクレーパー	松浦黒曜石	2.78	2.96	1.24	7.72	端部に集中して調整を施している　背面の調整に失敗
149	3354	１４F	30	３層？	スクレーパー	黒色黒曜石	3.73	2.71	0.83	6.49	平坦細調整に近い加工をほぼ全周に施している
150	3674	３９H	70	５下層	スクレーパー	ハリ質安山岩	6.00	2.00	0.71	13.58	エンド・スクレーパーとすれば旧石器時代か？
151	3397	１５N	4	５層	スクレーパー	ハリ質安山岩	4.96	4.84	2.01	37.09	下端部に斜め細調整、左側辺の両面にも細調整を施す
152	3436	２９L	58	７層	スクレーパー	ハリ質安山岩	2.43	3.51	1.22	13.08	厚手折断剥片の端部と背面に細調整を施している
153	3774	４６O	102		スクレーパー	ハリ質安山岩	3.09	2.42	0.68	4.30	左側辺上部に細かな調整でノッチを入れている
154	3628	３４K	34	７層	スクレーパー	松浦黒曜石	2.89	2.70	0.86	5.92	右側辺背面に細かな調整痕あり
155	3020①	１２F		４層	スクレーパー	安山岩	4.05	3.10	0.76	9.55	両側辺に細かな剥離痕が認められる
156	3664	３８I	10	２層	スクレーパー	安山岩	3.77	2.73	0.82	7.81	右側辺に斜め細調整、左側辺に微調整を施す
157	3627	３４K	27		スクレーパー	黒曜石（不純物）	4.10	2.60	1.00	9.24	右側辺に斜め細調整を施す　ナイフ形石器の可能性もある
158	3398	１６N		3c層	スクレーパー	黒色黒曜石	3.26	2.90	0.84	6.63	右側辺に調整を施したサイド・スクレーパー
159	3606	３１G	6	４層	スクレーパー	ハリ質安山岩	4.24	2.39	0.98	8.59	両側辺の一部に斜め細調整を施している
160	3378	３６K	12	５層	スクレーパー	松浦黒曜石	4.07	2.78	1.04	8.72	縦長剥片の左側辺に連続する細かな剥離痕が見られる
161	3741	４４L	52	３層	スクレーパー	ハリ質安山岩	4.66	2.56	0.60	6.97	右側縁両面に鋸歯状の調整を施している
162	3350	１３F	16	４層	スクレーパー	安山岩	4.44	2.25	1.06	7.39	左側辺背面に連続する斜め細調整が施されている
163	3393	３７F			スクレーパー	ハリ質安山岩	5.96	3.41	0.74	10.32	薄い縦長剥片の両側辺に細かな調整痕が認められる
164	3367	１８J		１層	スクレーパー	灰色黒曜石	5.20	3.02	0.85	10.74	縦長剥片の右側縁に連続する細かな調整痕が認められる
165	3570	１３I	19	７層	スクレーパー	松浦黒曜石	5.26	2.65	0.60	8.89	縦長状剥片に細調整を施している　背面に顕著な線状痕あり
166	3275	４４N		３層	スクレーパー	黒色黒曜石	3.84	1.35	0.57	2.71	打面再生剥片を素材としている
167	3518	４０J	19	２層	スクレーパー	ハリ質安山岩	3.72	1.31	0.49	2.69	縦長剥片の両側辺に細かな調整痕あり
168	18618	３９J	56		スクレーパー	安山岩	3.95	3.75	1.26	20.51	左側縁に斜め細調整を施す　正面は自然面に覆われている
169	3564	１１I			スクレーパー	灰色黒曜石	3.65	1.95	0.54	2.94	縦長剥片の両側縁に細かな調整が認められる
170	3781	４７L	9		スクレーパー	淀姫系黒曜石	3.43	2.16	0.95	3.32	両側辺に調整を施している
171	3685	３９J	17	３層	スクレーパー	黒色黒曜石	2.71	1.57	1.05	3.35	両面に調整痕が認められる
172	3689	３９J	119	８層	スクレーパー	灰色黒曜石	3.98	2.09	0.85	5.24	右側辺などに調整痕が認められる
173	3638	３５J	60	４・５層	スクレーパー	黒色黒曜石	3.24	2.15	0.86	4.32	不定形剥片の左側辺に細調整を施している
174	3572	１４H	15	３層	スクレーパー	黒色黒曜石	3.67	3.05	0.71	4.74	左側辺両面に細かな調整痕が認められる
175	3618	３２L	16	７層	スクレーパー	針尾中町黒曜石	2.33	4.15	1.63	11.94	厚手剥片の一部に細調整を施している
176	3358	１５M	7	５層	スクレーパー	安山岩	6.51	4.41	1.10	34.84	大形剥片の左側辺両面に粗い調整を施している
177	3364	１７I	sp-01		スクレーパー	ハリ質安山岩	5.93	3.44	1.00	15.59	左側辺背面に粗い加工を施している
178	3355	１５G	12	３層	スクレーパー	ハリ質安山岩	6.10	1.66	0.78	8.31	左側辺に斜め細調整を施している
179	3717	４１P	6		スクレーパー	ハリ質安山岩	5.53	3.95	1.16	23.50	正面の両側辺下部に粗い調整痕が認められる
180	3624	３４I	1		スクレーパー	チャート	4.67	4.60	1.34	24.73	右側辺下端に大きな剥離、左側辺に細かな調整を施す
181	3400	２９L	41	７層	スクレーパー	腰岳黒曜石	3.38	2.15	0.80	5.52	正面はほぼ全周に細調整を施すが、背面は部分的である
182	3403	４０H	3	１層	スクレーパー	安山岩	3.93	3.70	1.06	19.92	端部と右側辺両面に調整痕が認められる
183	3377	３４L	5		スクレーパー	安山岩	2.83	2.81	0.75	6.97	両面に平坦細調整に近い加工を施している
184	3675	３９H	65	５下層	スクレーパー	松浦黒曜石	3.36	2.88	1.12	9.34	正面に斜め細調整、背面に平坦細調整を施す
185	3402	３６J	99	７層	スクレーパー	ハリ質安山岩	4.40	4.21	1.00	18.06	下端部背面と左側辺に斜め細調整を施す　大原Ｄ・元岡型？
186	3710	４１H	1	３層	スクレーパー	安山岩	5.65	5.24	1.00	28.12	両側辺に平坦細調整と細かな調整痕が認められる
187	3387	４４K		２層	スクレーパー	安山岩	4.75	4.14	0.88	17.21	右側辺背面は平坦細調整、左側縁は斜め細調整を施している
188	3663	３８I	5	２層	スクレーパー	黒色黒曜石	4.24	3.75	1.05	13.83	最初に剥離した剥片の端部に斜め細調整を施す
189	3601	３０I	58	６層	スクレーパー	ハリ質安山岩	4.54	2.93	1.13	13.21	背面端部に調整を施している
190	3374	３０I	89	７層	スクレーパー	安山岩	4.05	6.10	1.33	30.09	幅広剥片の下端部に斜め細調整を施している
191	3653	３６K	18	７層	スクレーパー	安山岩	3.76	5.11	1.58	23.70	幅広剥片の端部に細調整を施す　コンケイブ・スクレーパーか？
192	3370	２１H			スクレーパー	ハリ質安山岩	3.64	5.98	1.24	26.96	幅広剥片の表背両面に調整を施している

表９　石器観察表（第３次調査地点）　④

図番号	収蔵番	区	取上	層	器種	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	備　　考
193	3368	１８N	19	４層	スクレーパー	安山岩	4.10	5.32	1.10	25.98	幅広剥片の下端部両面に比較的細かな調整を施している
194	3599	２５M	7	１層	スクレーパー	ハリ質安山岩	3.72	4.25	1.15	15.71	端部正面に斜め細調整、背面に平坦細調整を施す
195	3594	１９L	9	５層	スクレーパー	腰岳黒曜石	4.04	5.12	1.85	25.80	幅広厚手剥片の端部に調整を施している
196	3670	３８L	9	８層	スクレーパー	腰岳黒曜石	3.10	1.58	0.60	2.41	下端部に調整痕、右側辺に刃こぼれが認められる
197	3768	４６N	47	４層	スクレーパー	灰色黒曜石	2.92	2.67	1.24	5.99	下端部に細かな調整痕あり
198	3728	４３K	17	３層	スクレーパー	ハリ質安山岩	4.03	5.53	1.47	20.48	分割剥片の端部に連続する調整痕が認められる
199	3644	３６I	4	２層	スクレーパー	松浦黒曜石	2.40	2.97	1.20	8.73	厚い不定形剥片の端部に斜め細調整を施す
200	3597	２３I	1	2’層	スクレーパー	ハリ質安山岩	3.35	3.84	0.89	9.73	貝殻状剥片の端部に細かな鋸歯状剥離痕あり
201	3588	１７M	3	３層？	スクレーパー	黒曜石（不純物）	2.92	4.25	0.68	7.08	左側辺や端部に細かな調整痕が観察される
202	17112	３１J	143		スクレーパー	松浦黒曜石	2.24	3.78	0.75	5.56	下端部に微細ではあるが、連続する調整痕がみられる
203	3641	３５N	1		スクレーパー	安山岩	3.11	4.45	0.72	9.28	背面上部に斜め細調整痕、下端に微細な調整痕が認められる
204	3635	３５I	30	２層	スクレーパー	松浦黒曜石	3.09	2.60	0.72	5.37	背面に調整を施している
205	3692	３９O	8		スクレーパー	松浦黒曜石	2.49	3.60	0.74	4.56	貝殻状剥片の下端部両面に細かな調整痕あり
206	3756	４５O	8		スクレーパー	黒色黒曜石	1.82	3.18	1.20	5.27	貝殻状剥片の端部に細かな調整を施している
207	3715	４１K	105	４層	スクレーパー	松浦黒曜石	2.24	2.03	0.60	2.23	小形剥片の端部両面に調整を施している
208	3389	４５O	1		スクレーパー	安山岩	3.24	4.87	0.94	12.32	幅広剥片の周囲に不規則な調整痕がみられる
209	3737	４３Q	15	３層	スクレーパー	ハリ質安山岩	3.95	2.70	1.31	8.29	下端部両面に比較的細かな調整痕がみられる
210	3672	３８O	2		スクレーパー	松浦黒曜石	4.08	3.43	0.86	9.42	右側辺の一部に調整痕が認められる
211	3794	４８Q	18		スクレーパー	腰岳黒曜石	4.14	2.88	1.12	9.89	両側辺に調整痕を施す　自然面の残る不定形剥片素材
212	3683	３９I	90		スクレーパー	松浦黒曜石	3.53	1.85	1.28	5.76	左側辺に顕著な斜め細調整を施している
213	3662	３８H	49	５層	スクレーパー	腰岳黒曜石	3.02	2.06	0.65	4.08	背面に調整痕あり　被熱によりヒビが入っている
214	3671	３８L	24	８層	スクレーパー	灰色黒曜石	3.30	3.50	1.32	11.32	背面の両側辺に斜め細調整を施している
215	16891	２９J	68		スクレーパー	安山岩	3.09	3.90	1.12	9.98	左側縁に調整痕あり　打面部は細かな剥離面調整を施す
216	3586	１７I	74	８層	スクレーパー	ハリ質安山岩	3.80	2.91	0.86	6.18	右側辺に斜め細調整痕が認められる
217	3666	３８J	130		スクレーパー	安山岩	3.61	1.95	1.16	6.90	背面右側辺に平坦細調整痕が認められる
218	3622	３３J	104	５層	スクレーパー	灰色黒曜石	3.51	4.70	0.87	14.16	両側辺に斜め細調整を施す　先端部は折断されている
219	3674	３９H	63	５下層	スクレーパー	ハリ質安山岩	4.08	2.80	1.30	13.58	両面に斜め細調整痕が認められる
220	3453	３８G	39	10層	スクレーパー	松浦黒曜石	2.51	4.27	1.57	12.81	両面に剥片剥離のある円盤状石核の左側辺に斜め細調整
221	3593	１８J	2	４層	スクレーパー	灰色黒曜石	2.06	3.54	0.91	5.77	右側辺背面を中心に調整痕あり　下部は折断されている
222	3598	２４K	2	１層	スクレーパー	安山岩	3.40	1.91	0.56	3.26	折断剥片の右側辺背面に調整を施している
223	17098	３１J	35		スクレーパー	腰岳黒曜石	2.69	2.07	0.73	4.41	輪切り状剥片の一部に調整痕あり
224	3650	３６J	66	５層	スクレーパー	松浦黒曜石	2.74	2.54	0.56	3.36	右側辺の下端部に調整痕が認められる
225	3391	47・8NQ			スクレーパー	黒色黒曜石	3.73	2.24	0.86	3.86	やや不規則ながら調整を施している
226	3610	３１J	59	５層	スクレーパー	黒色黒曜石	1.89	2.06	0.58	1.88	両側辺に斜め細調整を施すが、折断されている
227	3612	３１K	133	5’層	スクレーパー	黒色黒曜石	2.41	2.58	0.50	2.36	左側辺に細かな調整痕が認められる
228	3583	１６G	106	６層	スクレーパー	黒曜石（不純物）	2.60	2.61	0.73	4.25	右側辺に調整を施している
229	322②	４０J		３層	スクレーパー	ハリ質安山岩	2.90	4.11	1.08	9.06	左側辺に斜め細調整を施している
230	3584	１６H	45	３層	スクレーパー	ハリ質安山岩	2.42	2.94	0.48	3.75	両側辺に細かな加工痕が認められる
231	3615	３２G	16		スクレーパー	黒色黒曜石	2.21	3.40	0.57	3.04	左側辺に細かな連続する加工痕あり
232	3595	２０H	5	１層	スクレーパー	ハリ質安山岩	11.80	5.60	3.20	177.00	大形剥片素材の残核利用　右側辺に鋸歯状調整を施している
233	3375	３２G			スクレーパー	安山岩	4.82	5.92	1.09	26.61	幅広剥片の下端部両面に連続する剥離痕が認められる
234	3363	１６J	1	１層	スクレーパー	安山岩	5.44	5.73	1.54	40.75	右側辺の一部に斜め細調整を施している
235	3779	４６P	44		スクレーパー	ハリ質安山岩	4.80	7.82	0.93	30.74	大形幅広剥片の左側辺背面に連続する調整痕あり
236	3568	１２F	17	４層	スクレーパー	ハリ質安山岩	7.10	6.31	1.42	59.51	幅広不定形剥片の背面両側縁に調整を施している
237	3686	３９J	44	3’層	加工痕ある石器	ハリ質安山岩	4.78	4.63	1.44	21.65	両側辺に細かな調整痕が認められる
238	3694	４０I	48	７層	加工痕ある石器	ハリ質安山岩	4.84	1.95	0.63	5.36	左側縁上部に細かな調整痕が認められる
239	3760	４５O	36		加工痕ある石器	灰色黒曜石	4.48	1.87	0.66	4.53	左側辺に部分的調整痕あり　石刃素材
240	3767	４６N	38	４層	加工痕ある石器	腰岳黒曜石	3.37	1.62	0.70	3.24	縦長剥片の右側辺に部分的調整痕あり
241	3775	４６O	112		加工痕ある石器	松浦黒曜石	2.59	2.66	0.89	5.12	縦長剥片の下部折断品の右側辺に細かな調整痕あり
242	3769	４６O	19		加工痕ある石器	ハリ質安山岩	2.88	1.45	0.51	1.70	背面を中心に平坦細調整を施している
243	3745	４４N	64	３層	加工痕ある石器	ハリ質安山岩	2.85	3.45	0.77	7.24	下端に調整痕が認められる
244	3603	３０K	90	６層	加工痕ある石器	腰岳黒曜石	3.65	2.45	0.80	6.34	両極技法により剥離　下端等に部分的調整痕あり
245	3729	４３L	10	１層	加工痕ある石器	松浦黒曜石	1.63	1.48	0.40	1.01	背面左側に平坦細調整を施している
246	3713	４１K	50	４層	加工痕ある石器	黄色黒曜石	2.50	2.32	0.84	3.71	幅広剥片の左側辺に部分的調整痕あり
247	3751	４４P	55		加工痕ある石器	針尾中町黒曜石	2.40	1.94	0.76	2.73	小形やや厚手剥片に不規則な調整が認められる
248	3793	４８Q	5		加工痕ある石器	松浦黒曜石	2.00	1.98	0.53	1.92	幅広剥片の端部に部分的調整を施す
249	3667	３８K	21	３層	使用痕ある石器	ハリ質安山岩	7.93	4.60	1.06	29.59	縦長剥片に使用痕あり　剥片尖頭器の素材の可能性あり
250	3645	３６I	34	６層	使用痕ある石器	松浦黒曜石	4.10	2.97	0.78	7.39	右側辺に刃こぼれが形成されている
251	3696	４０I	52	７層	使用痕ある石器	黒色黒曜石	4.85	2.82	0.76	9.89	周辺加撃石核から剥離された大形剥片利用
252	3567	１２F	16	４層	使用痕ある石器	腰岳黒曜石	4.30	3.07	0.88	9.13	不定形剥片の右側辺に連続する刃こぼれあり
253	3709	４０L	17	４層	使用痕ある石器	ハリ質安山岩	3.89	4.00	0.62	8.39	左側辺に連続する刃こぼれあり
254	3632	３４O	3		使用痕ある石器	安山岩	5.87	2.27	0.57	5.52	不定形剥片の両側辺に細かな刃こぼれが認められる
255	3649	３６J	52	２層	使用痕ある石器	ハリ質安山岩	4.14	2.75	0.65	5.24	両側辺に細かな使用痕あり
256	3743	４４N	29	３層	使用痕ある石器	針尾中町黒曜石	4.34	2.16	0.81	6.71	縦長剥片の右側辺に刃こぼれあり

表 10　石器観察表（第３次調査地点）　⑤

図番号	収蔵番	区	取上	層	器種	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	備　　考
257	3727	４３K	1	３層	使用痕ある石器	黒色黒曜石	2.57	2.10	0.51	2.72	両側辺の一部に刃こぼれが形成されている
258	3656	３８G	62	１０層	使用痕ある石器	淀姫系黒曜石	4.24	2.14	0.81	4.65	右側辺に連続する刃こぼれが存在していたと考えられる
259	3714	４１K	86	１層	使用痕ある石器	腰岳黒曜石	3.84	2.52	0.82	6.32	両側辺に細かな刃こぼれが認められる
260	3764	４６M	48	２層	使用痕ある石器	黒色黒曜石	3.95	1.64	0.66	3.70	縦長の打面再生剥片の右側辺に刃こぼれあり
261	3738	４３Q	32	３層	使用痕ある石器	青灰色黒曜石	3.49	2.50	0.82	6.37	右側辺に刃こぼれあり　稜部等に磨滅痕あり
262	3574	１５H	60	５層	使用痕ある石器	黒色黒曜石	2.15	2.51	0.68	3.29	左側辺に連続する刃こぼれあり
263	3590	１８J	31	４層	使用痕ある石器	安山岩	2.65	3.61	0.60	5.57	端部に連続する刃こぼれが認められる
264	3642	３６G	12	９層	使用痕ある石器	灰色黒曜石	3.41	1.76	0.48	2.39	縦長剥片の右側辺に刃こぼれあり
265	3701	４０J	73	９層	使用痕ある石器	黒色黒曜石	2.72	2.34	0.78	4.01	幅広剥片の左側辺に連続する刃こぼれあり
266	3616	３２I	56	５層	使用痕ある石器	松浦黒曜石	2.73	3.18	0.95	7.38	幅広剥片の端部に連続する使用痕あり
267	3782	４６Q	13		使用痕ある石器	松浦黒曜石	2.01	2.14	0.74	1.60	右側辺に細かな連続する刃こぼれが認められる
268	3577	１５J	14	５層	使用痕ある石器	黒色黒曜石	2.36	1.36	0.56	1.51	右側辺背面に連続する刃こぼれあり
269	3711	４１K	7	２層	使用痕ある石器	ハリ質安山岩	2.09	3.33	0.75	5.43	右側辺に刃こぼれが認められる
270	3747	４４O	1		使用痕ある石器	腰岳黒曜石	2.46	3.23	0.33	1.87	全体的に磨滅している　下端部に刃こぼれあり
271	3614	３１L	40	５層	使用痕ある石器	青灰色黒曜石	2.52	3.66	0.61	6.53	左側辺や下端部に刃こぼれが認められる
272	3669	３８L	7	８層	使用痕ある石器	灰色黒曜石	3.12	4.17	1.02	9.93	左側辺・下端部に連続する刃こぼれが認められる
273	3759	４５O	35		使用痕ある石器	黒色黒曜石	1.98	2.98	0.44	1.92	幅広剥片の下端部に刃こぼれあり
274	3582	１６G	92	５層	使用痕ある石器	安山岩	2.62	2.44	0.45	3.00	右側辺に連続する刃こぼれあり
275	3678	３９H	77		使用痕ある石器	黒色黒曜石	2.86	2.75	0.53	3.34	両面に顕著な磨滅痕あり　刃こぼれは移動の過程で生じたか？
276	3752	４４P	66		使用痕ある石器	黒色黒曜石	2.04	2.00	0.52	1.60	小形剥片の右側辺に刃こぼれあり　周辺加撃石核より剥離
277	3646	３６I	52	８層	使用痕ある石器	灰色黒曜石	2.00	3.88	0.70	4.04	横長剥片素材　下端部に刃こぼれあり
278	3688	３９J	101	3’層	剥片	松浦黒曜石	2.96	3.87	0.69	6.79	周辺加撃石核より剥離された典型的な事例
279	3780	４６P	87		剥片	玄武岩	4.34	3.37	0.63	5.60	周辺加撃石核から剥離された剥片と思われる
280	17373	３３J	83		打面再生剥片	ハリ質安山岩	5.12	2.70	1.67	14.05	稜線をもつ剥片　打面を転移し新たな打面形成を目的に剥離
281	3561	１１F	5	３層	砕片	黒色黒曜石	2.21	1.48	0.24	0.86	自然面を打面とするが、石槍等の調整砕片と思われる
282	3025	１２H	63	４層	砕片	黒色黒曜石				1.19	槍等の製作時生じた砕片だが、小形石鏃の素材になりうる
283	3417	１６F	72	４層	石核	松浦黒曜石	2.56	2.96	1.47	8.81	小形円礫の半割品を素材とする周辺加撃石核
284	16252	１４E	15		石核	針尾中町黒曜石	3.01	3.72	1.50	13.47	小形円礫素材の周辺加撃石核
285	17327	３３I	50		石核	灰色黒曜石	2.95	4.06	1.56	14.23	分割礫素材の小形周辺加撃石核
286	3435	２９K	34	６層	石核	黒色黒曜石	3.86	2.25	1.44	9.76	半割礫素材　正面と背面の一部に調整痕あり　石器かも？
287	3421	１６K		3c層	石核	松浦黒曜石	2.90	4.85	1.28	16.18	円礫の分割剥片素材　周辺加撃石核の一種
288	3445	３４J	3	１層	石核	灰色黒曜石	3.40	3.90	1.68	17.79	典型的な周辺加撃石核で、一部打面を形成している
289	3440	３２I	186	５層	石核	松浦黒曜石	2.34	3.80	1.59	11.36	恐らく分割礫を素材とする周辺加撃石核と思われる
290	3431①	２８I			石核	松浦黒曜石	3.53	3.55	1.76	21.39	半割礫の周辺からの加撃で剥片剥離を行っている
291	3141	３５G	33・2	２層	石核	松浦黒曜石	2.76	2.73	1.52	11.97	正面に多方向からの剥片剥離を行っている
292	3239②	41・2HI			石核	松浦黒曜石	4.23	3.14	1.45	18.67	上下両端に打面を持つが、左右からの剥片剥離も認められる
293	3463	４２Q	18	8層？	石核	松浦黒曜石	4.08	2.39	1.60	12.31	半割（または分割）礫を素材とする周辺加撃石核か？
294	3438	３１K	4	１層	石核	松浦黒曜石	3.93	2.25	1.96	17.07	円礫の分割品を用いたもので、多打面を有する
295	3460	４１L	4	４層	石核	松浦黒曜石	3.73	2.27	1.26	12.48	分割礫の周囲から剥片剥離を行おうとしている
296	3416	１５I	14	３層	石核	ハリ質安山岩	4.31	2.92	1.74	23.19	自然面を打面とする剥片剥離痕が認められる
297	3432	２９H	2	３層	石核	松浦黒曜石	4.70	3.16	1.25	19.54	細石刃核を再利用　細石刃剥離面からの加撃も認められる
298	17480	３４J	74		石核	松浦黒曜石	4.09	3.43	1.51	16.31	分割礫の正面に自然面を打面とし、剥片剥離を行っている
299	3750	４４P	22		石核	針尾中町黒曜石	2.30	3.65	1.16	8.77	小形の分割礫を用いた周辺加撃石核
300	17669	３５K	25		石核	松浦黒曜石	3.80	1.94	1.07	4.35	小形の周辺加撃石核であるが、剥片剥離に失敗している
301	16895	２９K	37		石核	灰色黒曜石	1.89	2.50	0.84	4.06	小形円礫の分割剥片素材　極めて小形の剥片を剥離
302	3773	４６O	100		石核	ハリ質安山岩	3.11	4.07	1.43	14.81	両面から、底面をもつ横広剥片を剥離している
303	3418	１６F	72	４層	石核	松浦黒曜石	2.56	2.96	1.47	7.94	小形円礫の半割品を素材とする周辺加撃石核
304	3448	３５K	38	５層	石核	灰色黒曜石	3.00	4.60	1.24	13.68	円礫の分割剥片を素材とする周辺加撃石核
305		３２K	63		石核	松浦黒曜石	3.31	2.17	1.07		小形円礫の半割品を素材とする周辺加撃石核
306	3433	２９H	33・2	３層	石核	松浦黒曜石	2.81	3.13	1.04	9.21	二重パティナ　旧石器時代の石核を再利用か？
307	3428	２０K	6	1層？	石核	腰岳黒曜石	3.97	1.93	1.40	6.94	周辺加撃石核だが、背面にも打面があり、打面転移石核か？
308	17796	３６J	87		石核	松浦黒曜石				6.07	分割礫を素材とする小形の周辺加撃石核と思われる
309	3623	３３O	1		石核	腰岳黒曜石	2.03	3.61	1.46	9.17	打面転移を行っている
310	3408	１０F	27		石核	松浦黒曜石	2.86	2.12	1.05	5.69	分割礫を素材とする周辺加撃石核と思われる
311	17360	３３J	58		石核	灰色黒曜石	2.20	4.57	1.46	11.55	分割礫を素材とする周辺加撃石核
312	3447	３５I	39	７層	石核	松浦黒曜石	3.56	3.00	1.53	12.72	自然面を打面とする小形石核
313	3434	２９I	1	３層	石核	松浦黒曜石	3.20	3.60	1.16	12.18	二重パティナ　旧石器時代の分割剥片を再使用
314	3539	１６I	6	3層？	石核	針尾中町黒曜石	2.22	3.91	1.00	8.22	正面は剥片剥離に失敗　背面は貝殻状剥片を剥離
315	3372	２８J	16	４層	石核	松浦黒曜石	3.13	4.86	1.37	17.85	旧石器時代の厚手幅広剥片を用いている　二重パティナ
316	3471	４４N	25	３層	石核	松浦黒曜石	2.54	4.32	1.65	13.65	分割礫を素材とし、周辺加撃石核を意図している
317	3718	４１P	105	８層	石核	松浦黒曜石				3.68	上下両端から剥片剥離を行っている小形石核
318	3424	１８J	1	１層	石核	ハリ質安山岩	4.63	4.10	2.12	36.08	円礫の両面に剥片剥離を行う　円盤状に近い形態
319	3420	１６G	60	５層	石核	灰色黒曜石				23.93	分割礫を素材とする周辺加撃石核と思われる
320	3509	３８I	104	５層	石核	松浦黒曜石	4.26	3.60	2.02	28.61	打面を替えている様子が窺え、周辺加撃石核の初期段階か？

表 11　石器観察表（第３次調査地点）　⑥

図番号	収蔵番	区	取上	層	器種	石材	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	備　　考
321	3468	４３O	33・2	３層	石核	安山岩	6.12	4.33	3.04	86.58	正面は周辺部から剥片剥離、背面にも剥離が及んでいる
322	3617	３２K	38	５層	石核	灰色黒曜石	2.95	4.37	1.40	14.61	原石より最初に剥離した厚手剥片を素材とする
323	3693	４０I	5	３層	石核	松浦黒曜石	2.34	2.25	0.82	4.00	目的剥片は石鏃の素材より小さいと考えられる周辺加撃石核
324	3636	３５G	41	３層	石核	松浦黒曜石	3.54	2.74	1.23	7.99	剥片素材　両面に剥片剥離痕が認められる
325	3643	３６G	17	９層	石核	安山岩	3.50	5.74	1.76	30.33	背面に剥片剥離痕が認められる
326	3501	１４G	7		石核	ハリ質安山岩	5.44	4.70	2.96	84.41	円礫の周囲の自然面を打面に利用している
327	3429	２１N		表採	石核	安山岩	6.71	4.25	1.56	43.14	剥片素材の周辺加撃石核と思われる
328	3661	３８H	48	５層	石核	灰色黒曜石	3.38	3.96	1.56	18.87	小形円礫素材の剥片の両面に剥片剥離を行っている
329	3455	３９I	57	５層	石核	松浦黒曜石	4.21	3.30	1.17	13.25	剥片素材で、両面に剥片剥離面のある円盤状石核
欠番											
331	3425	１８K	11	４層	石核	腰岳黒曜石	6.16	3.06	1.78	28.98	剥片を素材とし、両面に剥片剥離を行っている
332	3444	３３J	31	3'層	石核	安山岩	4.53	4.11	1.50	27.27	剥片素材の周辺加撃石核と思われる
333	3573	１５H	15	３層	石核	松浦黒曜石	4.58	2.70	1.20	13.64	剥片を素材とする周辺加撃石核の一種と思われる
334	3540	１７N	14	３層？	石核	松浦黒曜石	3.28	4.34	1.00	15.67	正面は旧石器時代の剥離面と思われる
335	18491	３９H	76		石核	松浦黒曜石	2.90	3.40	1.30	10.96	小形の分割礫素材の周辺加撃石核　両面に剥片剥離痕
336	3224 ③	４０J		３層	石核	黒色黒曜石	2.56	2.68	1.26	8.43	周辺加撃石核の一種　両面に剥片剥離を行った円盤状石核
337	3459	４１K	19	４層	石核	黒色黒曜石	2.84	2.57	0.80	5.30	主に正面に周辺より加撃し、小剥片を生産している
338	16701	１７N	19		石核	松浦黒曜石	2.58	3.26	1.09	7.49	分割礫素材の小石核　周辺加撃石核を意図している
339	3461	４２K	75	８層	石核	腰岳黒曜石	3.24	4.81	1.50	16.36	厚手の折断剥片を素材とする　両面に剥離面がみられる
340	3785	４７L	30		石核	松浦黒曜石	2.13	2.65	1.11	4.75	小形の円礫素材で、両面に剥片剥離を行っている
341	3551	４２P	34	８層？	石核	松浦黒曜石	2.38	3.00	1.05	6.69	正面の一部と背面に剥片剥離痕　周辺加撃石核の一種
342	3439	３２I	175	５層	石核	松浦黒曜石	2.52	3.62	1.56	13.02	上端より両面に剥片剥離　背面は多方向からの加撃あり
343	3469	４３O	13	３層	石核	黒曜石（不純物）	4.18	2.10	1.40	9.46	剥片素材で、背面に剥片剥離を行った痕跡が認められる
344	3410	１２F		３層	石核	松浦黒曜石	2.42	3.15	1.07	7.45	分割礫素材の小形円盤状石核
345	3783	４６Q	34		石核	黒色黒曜石	3.14	2.21	1.04	6.74	小形円礫（半割品）を素材とする周辺加撃石核
346	3458	４０K	6		石核	灰色黒曜石	2.56	2.32	1.22	5.09	小形原石の両面に剥片剥離が及ぶ　周辺加撃石核の一種
347	3720	４２I	21	５層	石核	ハリ質安山岩	3.04	3.82	0.88	9.93	折断面を打面とする薄い石核
348	3470	４３Q	24	３層	石核	青灰色黒曜石	2.90	2.63	1.44	7.34	剥片素材の周辺加撃（求心状剥離）石核
349	3462	４２L	4	４層	石核	腰岳黒曜石	2.72	3.42	1.12	10.85	両面に剥片剥離を行っている円盤状石核
350	3414	１４I		１層	石核	安山岩	6.20	3.66	1.67	31.59	分割礫を素材とする周辺加撃石核　両面に剥片剥離痕あり
351	17795	３６J	86		石核	黒色黒曜石	1.81	3.11	1.10	6.11	剥片製の小形石核で、両面に剥片剥離痕が認められる
352	19580	４４P	26		石核	安山岩	2.18	3.69	1.22	6.86	小形剥片素材の小石核
353	3427	２０H	7	１層？	石核	松浦黒曜石	3.79	2.60	1.62	16.07	半割礫の主に背面に剥片剥離痕が認められる
354	3602	３０J	183	７層	石核	ハリ質安山岩	3.82	6.55	1.66	37.00	板状剥片の両面に剥片剥離を行う　下部は折断
355	3431 ②	２８I			石核	松浦黒曜石	3.11	4.13	1.13	14.35	二重パティナ（大きな剥離が古い）と思われる
356	18749	３９L	49		石核	灰色黒曜石	2.80	3.33	1.20	9.55	剥片素材の小形石核
357	3626	３４K	6	２層	石核	松浦黒曜石	5.05	2.46	1.23	10.39	剥片素材　両面より小形剥片が剥離されている
358	3452	３７G	13	１０層	石核	針尾中町黒曜石	5.23	2.94	2.18	25.79	小形円礫素材　打面形成せず、両面に剥片剥離を行う
359	3464	４２Q	60	８層？	石核	松浦黒曜石	2.71	4.05	1.31	9.73	分割礫を素材とする小形石核　自然面を打面に利用
360	3753	４５M	23	３層	石核	松浦黒曜石	2.54	3.29	1.14	7.23	剥片素材の小形石核
361	17682	３５K	42		石核	松浦黒曜石	5.35	2.22	1.61	11.43	分割礫を素材とする周辺加撃石核だが、剥片剥離に失敗
362	3629	３４L	6		石核	灰色黒曜石	4.85	3.15	1.38	15.85	やや大形の厚手剥片を素材とする
363	17687	３５K	47		石核	松浦黒曜石	4.51	2.35	1.68	8.91	周辺加撃石核であるが、最後の剥片剥離に失敗
364	3430	２６I	8	３層	石核	黒色黒曜石	3.32	2.23	1.05	7.76	旧石器時代の石核（剥片）使用し、小さな剥片を剥離している
365	3409	１１H	26	１層？	石核	松浦黒曜石	2.75	2.10	1.23	5.87	小形円礫の分割礫を素材としている
366	3579	１６F	69	４層	石核	松浦黒曜石	2.51	2.27	0.81	3.87	剥片素材の小形石核　折断面を打面に利用している
367	3699	４０I	90		石核	松浦黒曜石	2.54	2.92	1.02	6.80	剥片の折断面を打面とし、小形剥片を剥離している
368	3761	４６K	38	３層	石核	松浦黒曜石	1.45	2.72	1.33	5.27	小形の打面転移石核と思われる
369	3786	４７N	13		石核	松浦黒曜石	2.03	3.91	0.98	6.02	第一次剥離面が認められ、薄い分割剥片を素材としている
370	3437	３０K	215	７層	石核	松浦黒曜石	1.62	3.18	1.51	7.46	小形円礫素材　打面の転移がみられる
371	3442	３３J	4	２層	石核	腰岳黒曜石	1.87	3.12	1.65	7.77	やや厚手の小形石核で、打面転移が著しい
372	3500	１４F		２層	石核	松浦黒曜石	3.20	4.01	2.90	32.60	円礫を素材とする打面転移石核
373	3426	１８N	23	４層	石核	ハリ質安山岩	3.20	3.51	1.93	20.90	複数の打面が認められ、打面転移石核の一種と思われる
374	3450	３６J	30	２層	石核	松浦黒曜石	3.00	3.46	3.25	31.78	打面転移を繰り返し、サイコロ状を呈している
375	3466	４３K	13	３層	石核	松浦黒曜石	2.82	4.26	1.60	18.30	扁平ではあるが、多打面を有する石核である
376	3446	３４I	17	２層	石核	安山岩	3.40	5.85	3.01	70.66	打面を形成し、幅広剥片を剥離した石核と思われる
377	3467	４３N	19	３層	石核	松浦黒曜石	2.60	2.10	1.23	6.99	小形円礫を素材とする縦長剥片石核と思われる
378	3508	３８G	51	１０層	石核	松浦黒曜石	4.10	6.14	3.04	85.67	両面に一面ずつ剥片剥離。チョッピング・トール状を呈する
379	3457	４０J	32	２層	石核	松浦黒曜石	3.52	2.25	1.50	12.99	卵状礫の半割品を素材とし、両端からの加撃で縦長剥片剥離
380	3503	２８I	9	３層	石核	松浦黒曜石	3.91	3.78	2.11	30.78	自然面を打面とし、二面の剥片剥離面が認められる
381	3589	１８H	13	１層	石核素材	腰岳黒曜石	5.64	3.88	1.17	27.30	運搬時生じたと考えられるキズ痕多数あり　二重パティナ
382	3684	３９J		１０層	石核素材	松浦黒曜石	2.37	3.80	0.96	9.42	稜部等に磨滅痕が認められる
383	3557	１０E	1		石核素材	松浦黒曜石	3.72	3.10	1.26	8.38	周辺加撃石核より剥離されているが、剥離時に失敗している
384	3512	４７Q	17		石核素材	松浦黒曜石	3.14	2.42	2.25	15.77	小形円礫を分割したものと思われる
385	3504	２９I	35	６層	石核素材	ハリ質安山岩	6.12	4.93	2.65	12.65	円礫の自然面を打面として得られた厚手剥片

縄文時代

52 次調査　D-10・11 区発掘風景

石鏃 14 出土状況

図版２

石鏃 1 出土状況

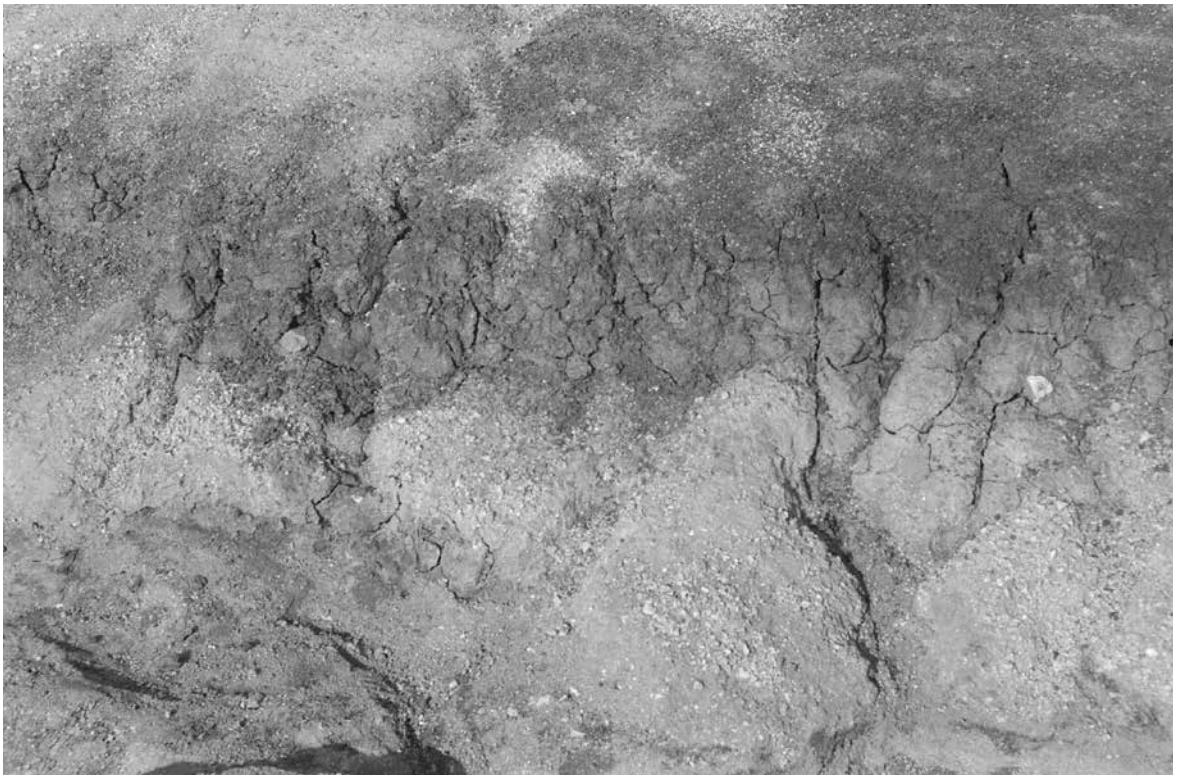
尖頭器 27 出土状況（接合資料）

第 52 次調査　D-10・11 区（北東から）

第 52 次調査　D-10・11 区（西から）

図版４

D-10 区　古土壌の分布（西から）

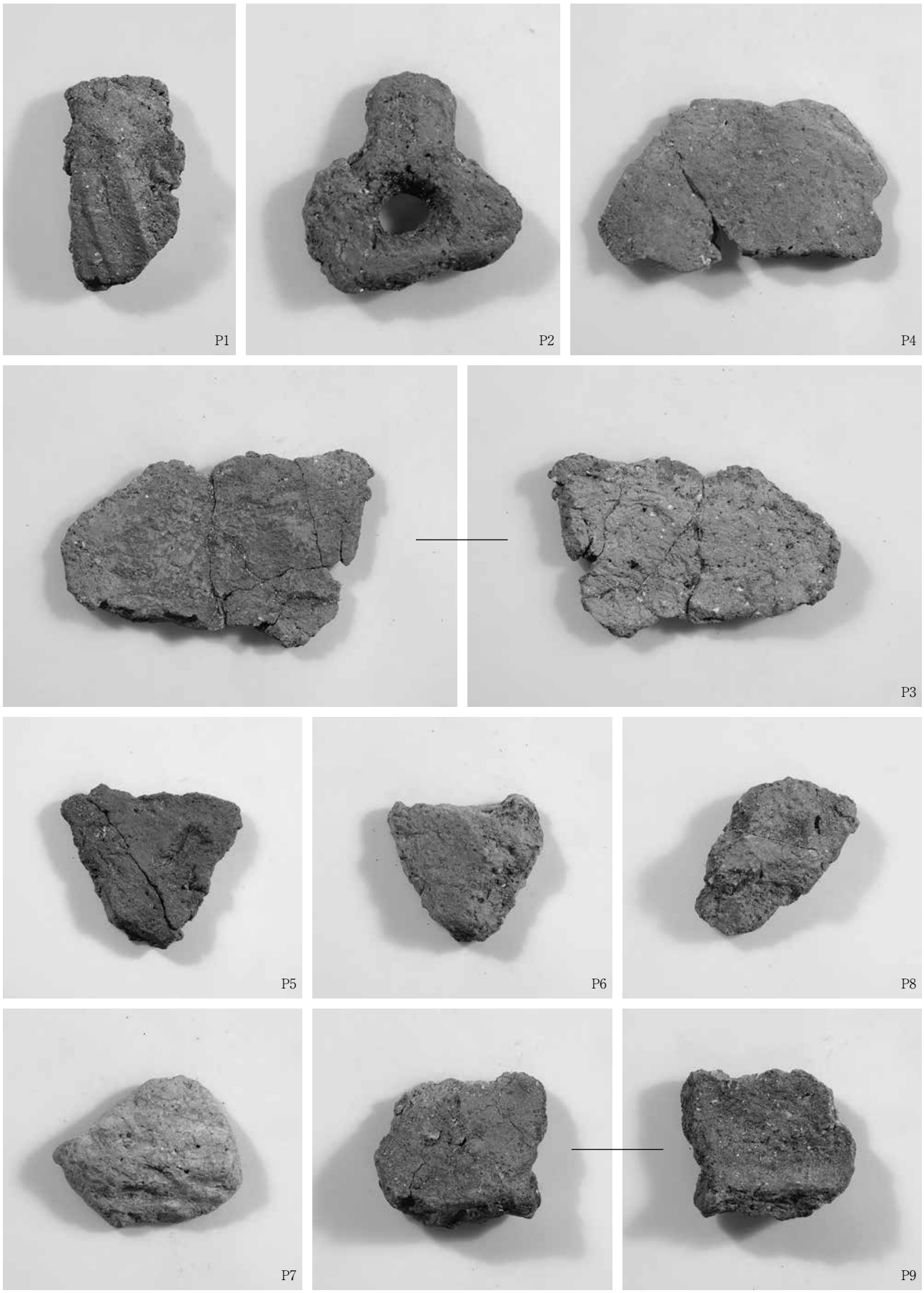


D-10 区　古土壌の堆積（石器出土状況）

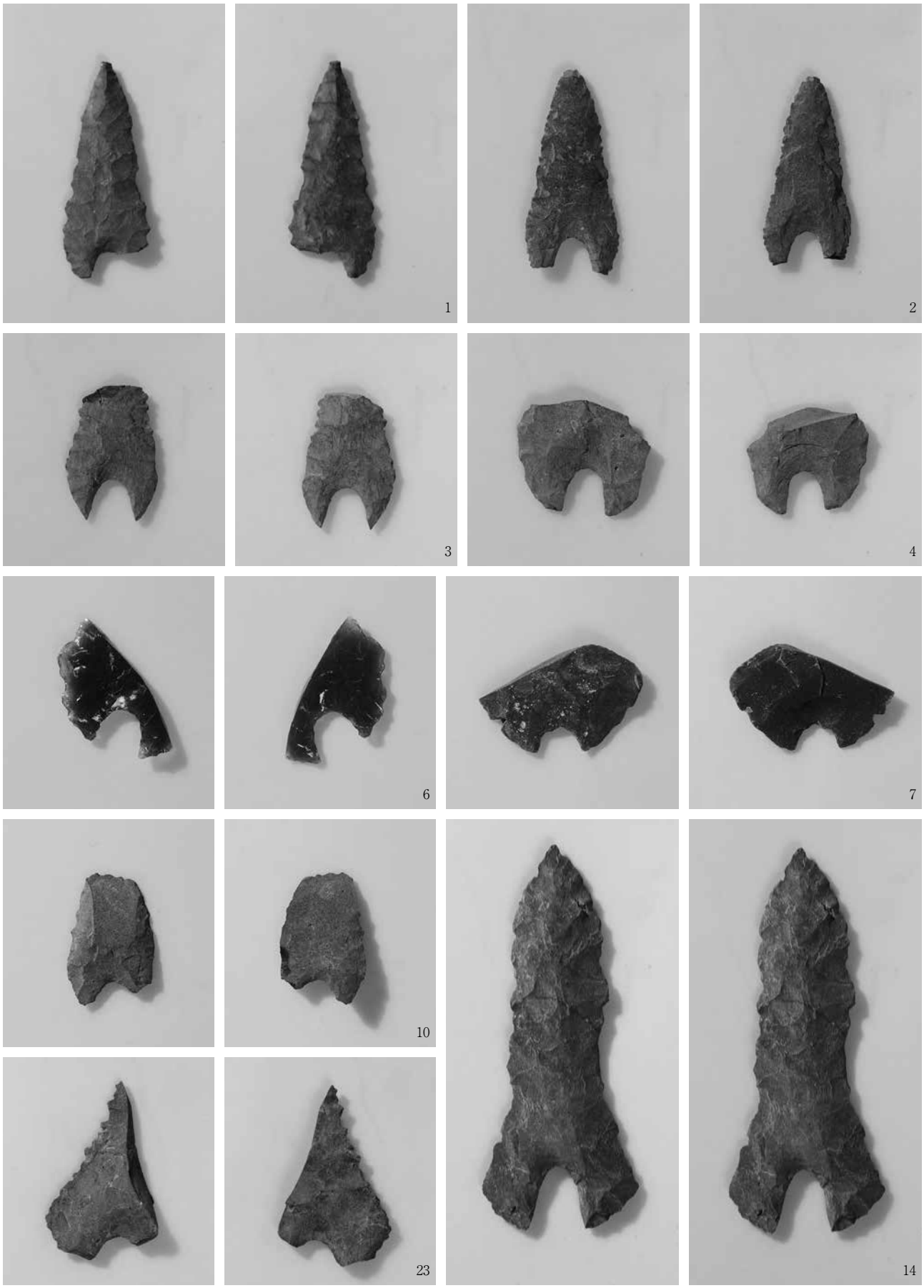
遺物出土状況

遺物出土状況

図版６

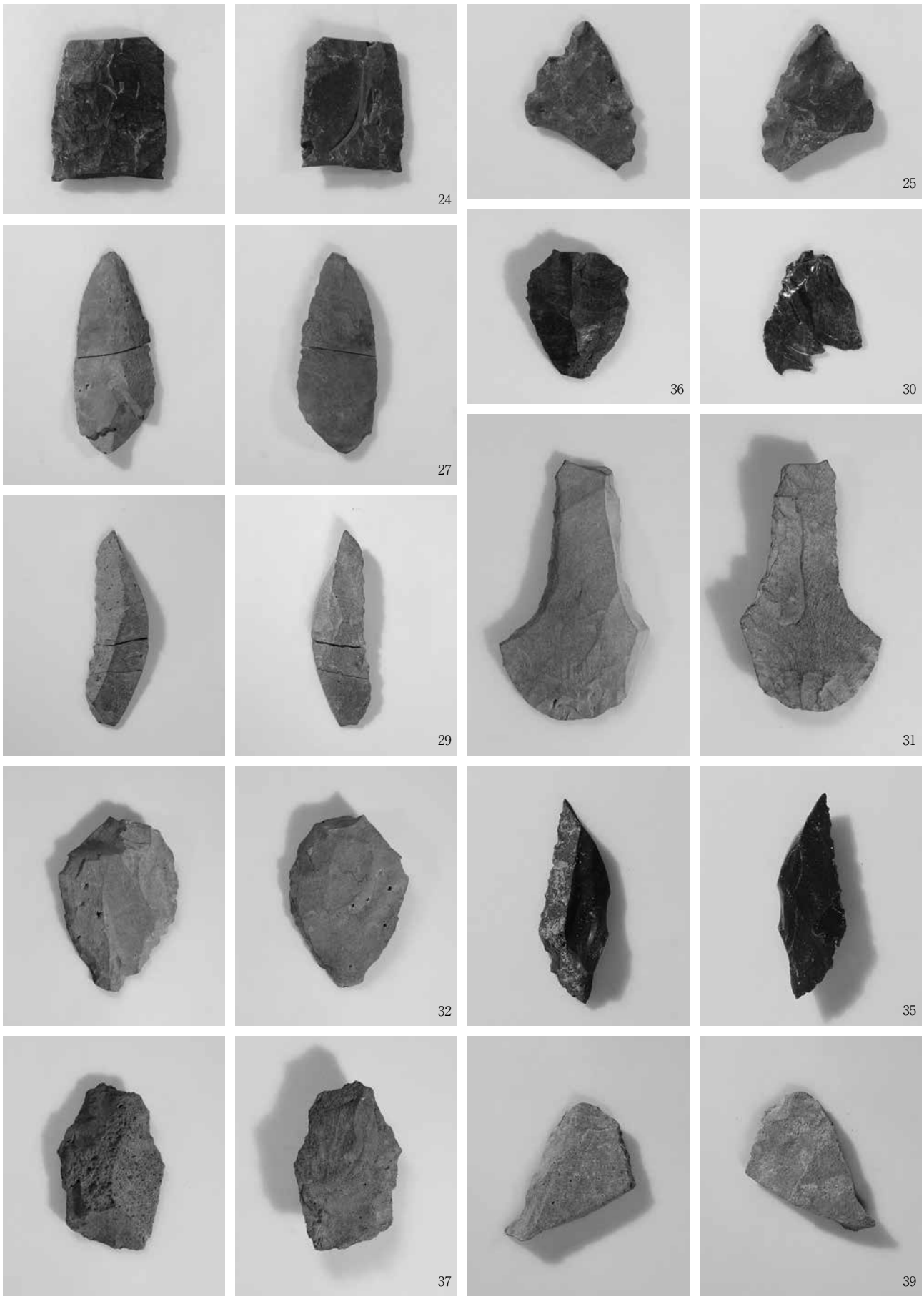


出土土器



出土石器（1）

図版８



出土石器（2）

Ⅲ　元岡・桑原遺跡群第 52 次調査の報告（１）

―52 次Ⅱ区出土の土器・土製品・石器・石製品―

―52 次Ⅰ・Ⅱ区出土の木製品―

Ⅳ　元岡・桑原遺跡群第 42 次調査の報告（５）

―42 次Ⅱ区出土の土器・土製品・石器・石製品―

１．調査区の概要（第１図）

本章で報告する第42次・52次調査区は、遺跡群の南西端にあたる北の丘陵部に杜をいだく標高８～10ｍの南斜面に立地する。この地は、東から湾入する今津湾の最奥部に南面し、入り海をはさんだ南には「イト」の拠点集落や中国鏡やガラス製品を厚葬墓が立地する三雲・井原遺跡群を望むことができる。調査区は、花崗岩を基盤としているが、縄文時代に浸食と堆積を繰り返した結果、粗砂とシルトが交互に堆積している。

約8、700㎡の調査区で検出された主な遺構は、調査区の東西の谷筋を流れる幅20～30ｍの２条の流路（ＳＤ－０１・０２）である。南北約80ｍにわたって蛇行する流路は、自然の開析によって形成されたと推定されるもので、護岸や井堰などの遺構は確認されていない。

またふたつの流路にはさまれた浸食を免れた緩斜面では掘立柱建物８棟と竪穴住居跡４軒が確認された。

流路内および流路の岸には土器群の集積が確認された。流路で検出された弥生中期後半から後期、さらに古墳時代前期にかけての土器や石器は、コンテナ総計10、000箱にのぼる。これらの膨大な遺物は、この斜面に紀元前後から3･4世紀代にかけての営為が継続したことを意味している。

調査では土器の集積を土器群と表記した。土器群という呼称には①土器の集積の範囲を括ったもの、②流路内で検出された土器の位置を把握する意図でグリッド単位に設けたものの両者が含まれている。糸島半島東岸で多量の土器が出土した調査としては小葎遺跡（大原Ｂ遺跡第１次調査）の調査がある。ここでは径約11ｍの円形住居跡で弥生中期後半から後期後葉にかけての土器や石錘が出土した。調査者は多量の土器は継続的に投棄されたと考えているが、出土状況から推測できるのはここまでである（福岡市1997）。

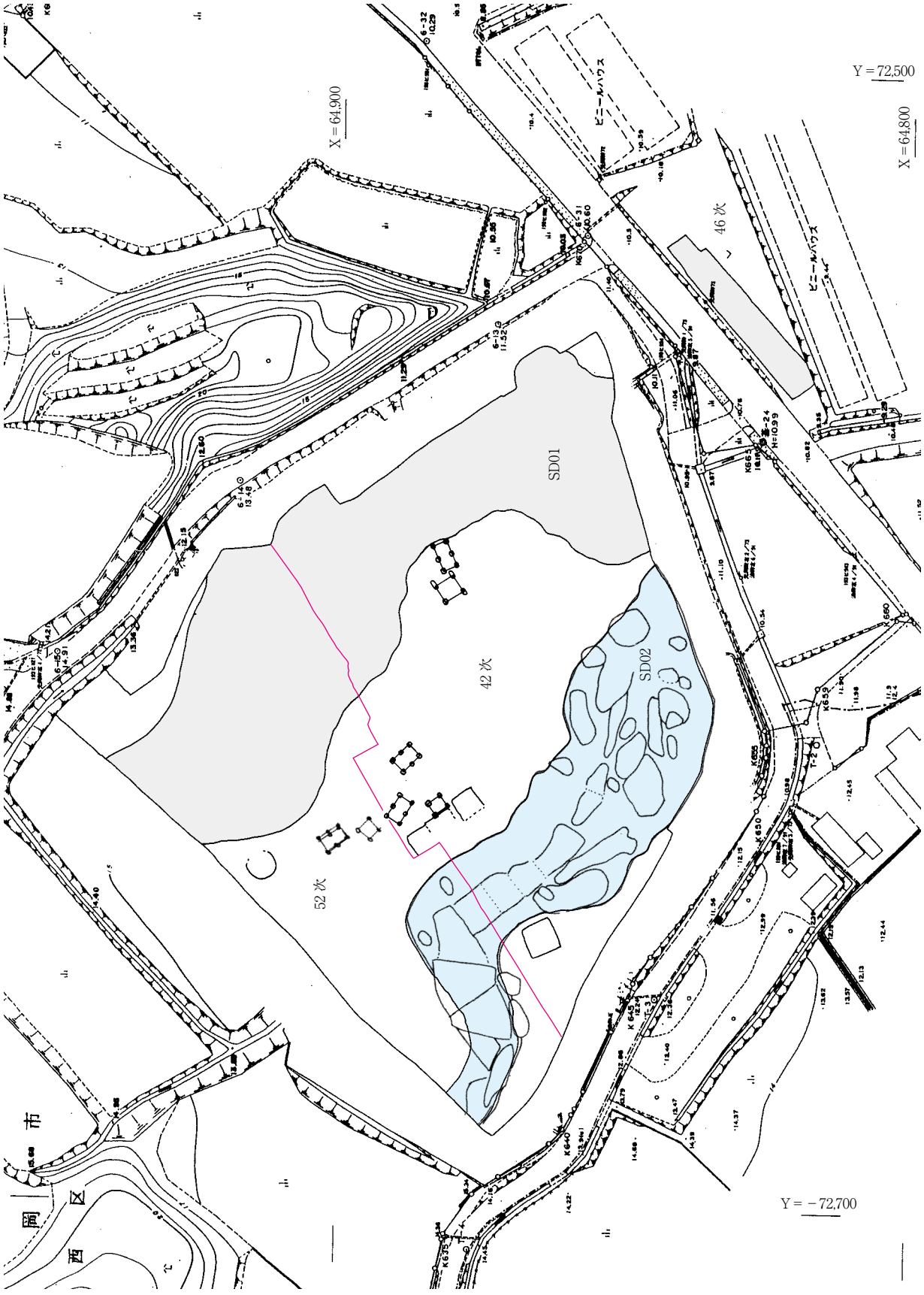
調査区西側に位置するＳＤ０２は、上流では幅10ｍに満たない規模で大きく東に彎曲し、南東にかけて最大幅30ｍまで流路を拡げている。

流路の中と落ち際に堆積した弥生中期後半から後期にかけての膨大な量の土器は、紀元前後から３世紀代にかけて、行われた営為を現在に伝えている。この夥しい土器の中からは木製品や石庖丁など水稲耕作にかかわる農耕具が多数出土した。またそのほか、祭祀的な性格を帯びた木製品や中国貨幣など交易を裏付ける資料、小銅鐸や小型仿製鏡など国産青銅器などが検出され、交易と木製品を用いた祭祀の様相が明らかになろうとしている。

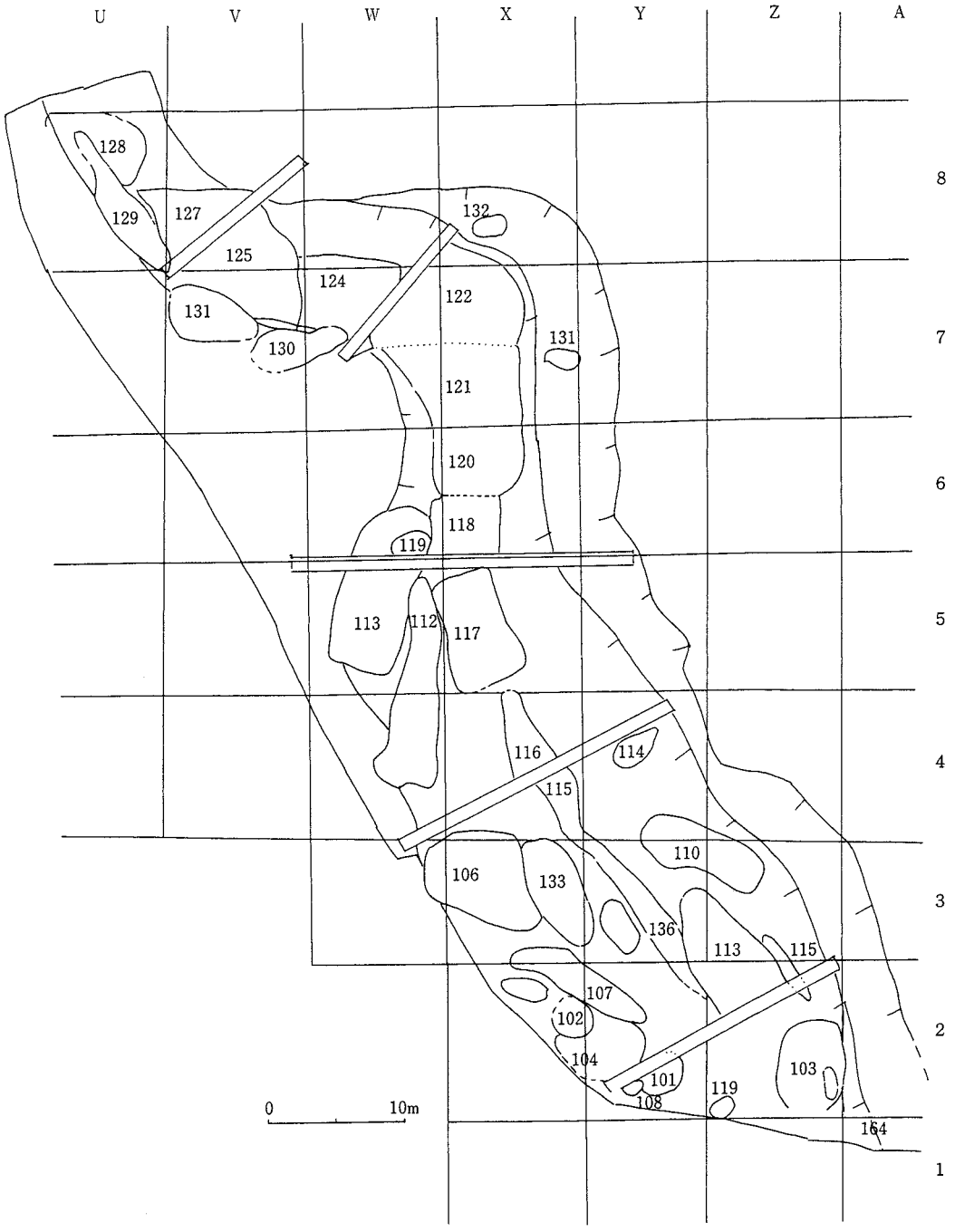
流路が埋没した時期の指標となるのは、土器群で検出された時期が最も降る資料である。これまでの調査で土器群の上面で検出されたのは、古墳時代前期の山陰系土器の段階が下限の目安となると推定される。３世紀代で流路は埋まり、調査区での土器を用いたまつりは終息したと考えられる。

調査区西端のＵ・Ｖ７・８・９区では、古墳時代のおよそ５世紀後葉段階の遺物包含層の存在が確認された。Ｉ型式新段階の須恵器に伴って300点を超す滑石製臼玉が検出されたのである。今わかるのは、滑石製臼玉に未成品は含まれていなかったことくらいにとどまる。この資料についてはガラス小玉の保存科学的調査に続いて報告を行なった。

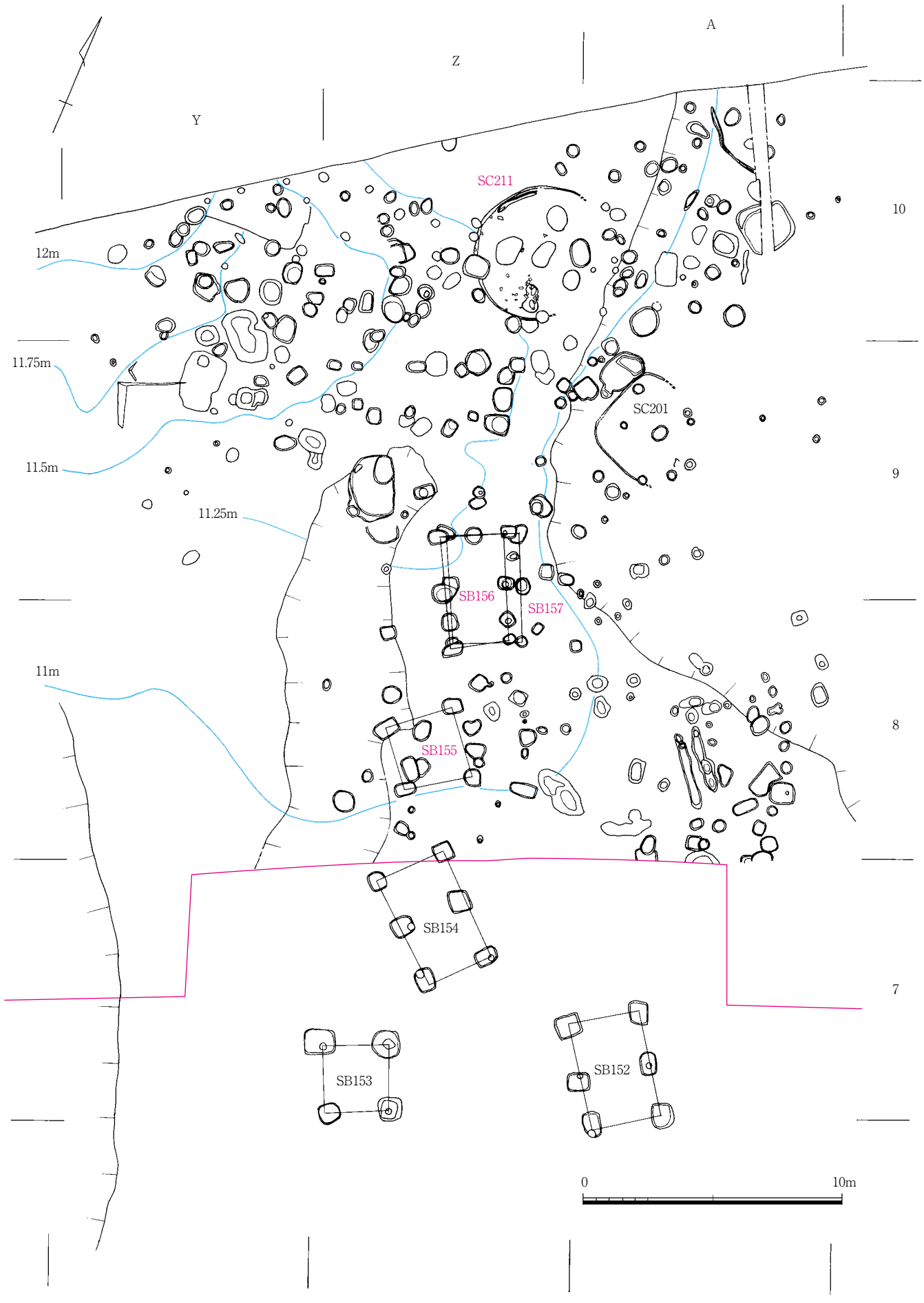
またこれまで報告した42次調査出土の木製品（福岡市1246集）中、60点について樹種鑑定など自然科学的分析の委託成果を掲載したので参考にされたい。



第 54 図　元岡・桑原遺跡群　第 42 次・52 次調査区主要遺構配置図［1/1,000］



第 55 図　元岡・桑原遺跡群　第 42 次・52 次Ⅱ区グリッド配置図［1/500］



第 56 図　元岡・桑原遺跡群　第 52 次 I 区遺構配置図［1/200］

掘立柱建物

東西の流路に挟まれた標高９～11ｍの緩斜面に位置する。これまでＣ４・５区で２棟、ＹＺＡ－７区で３棟の掘立柱建物の計５棟が確認された（市報告1275集）。Ｃ４・５区の１棟、ＳＢ０８は、隣接して検出された祭祀土器との位置関係から弥生中期後半に比定される。

ＳＢ１５５

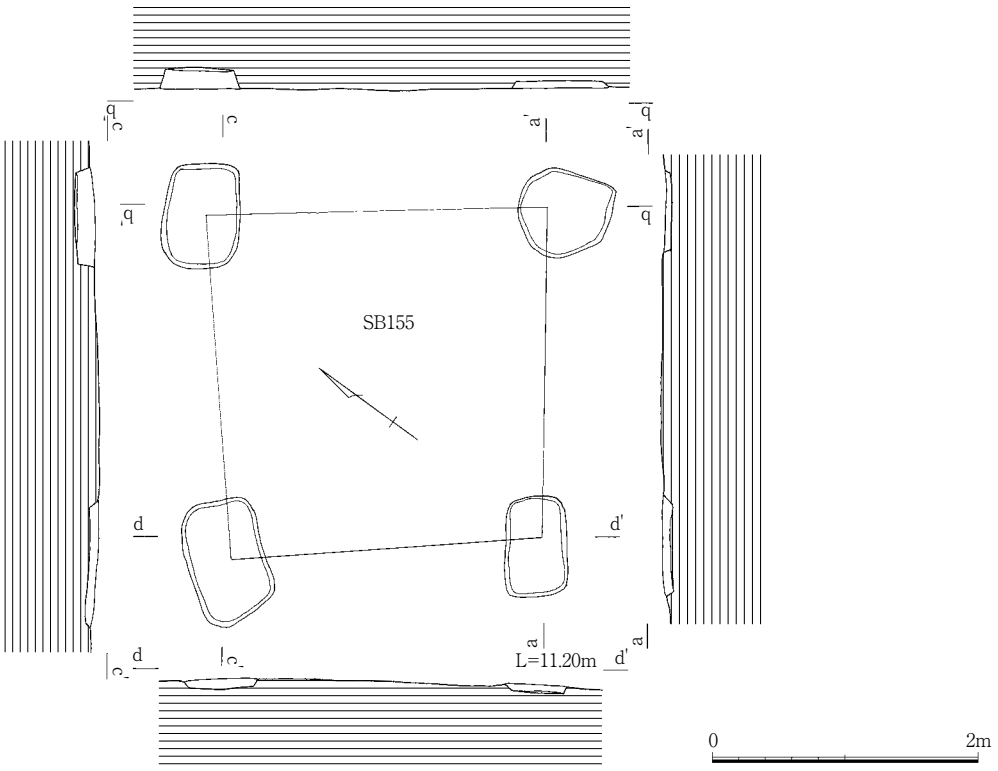
Ｚ８区に位置する梁行1間2.60ｍ、桁行1間2.64ｍの小型建物である。柱掘方のプランは確認できたが、柱痕跡は認められなかった。

ＳＢ１５６

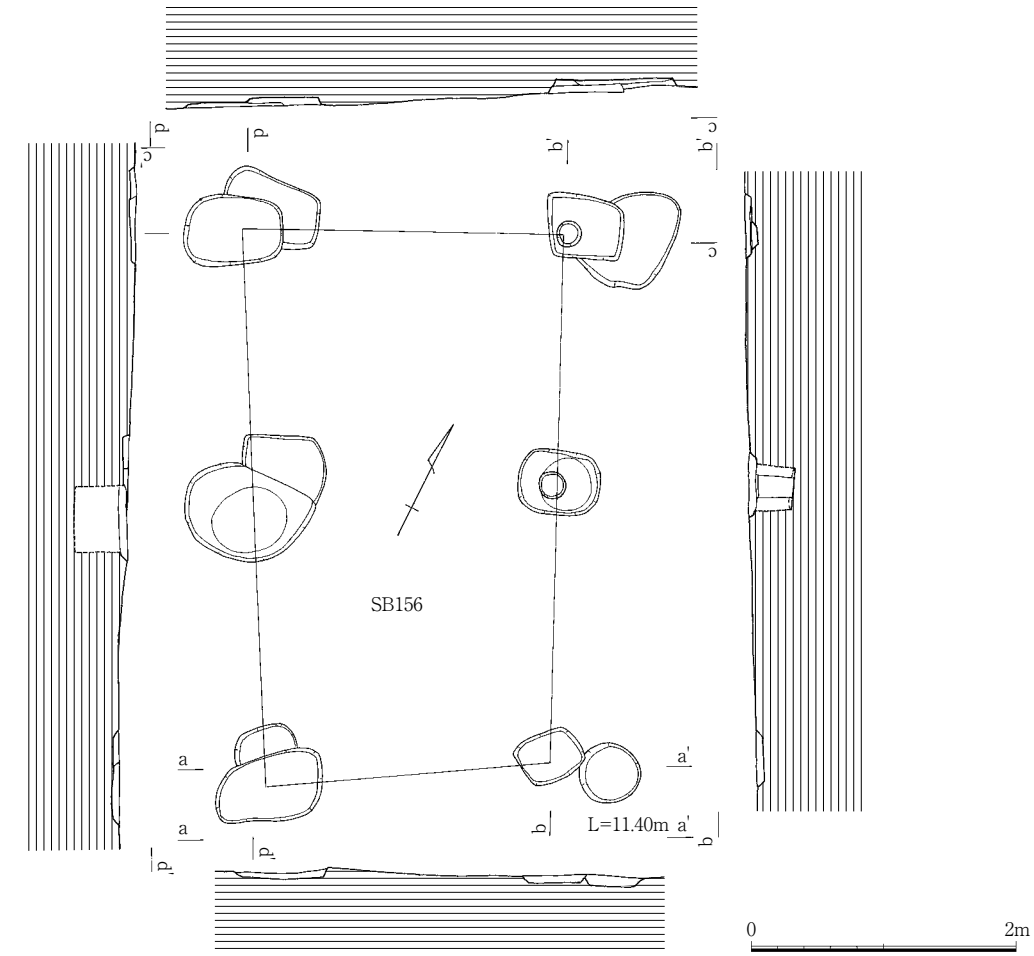
Ｚ９区に位置する梁行1間2.20ｍ～2.45ｍ、桁行２間4.0ｍ～4.20ｍの掘立柱建物である。北東部の２ヵ所で柱痕跡が認められた。ＳＢ１５７とほぼ重複したプランで検出された。切りあいからＳＢ１５７を建替えた可能性がある。

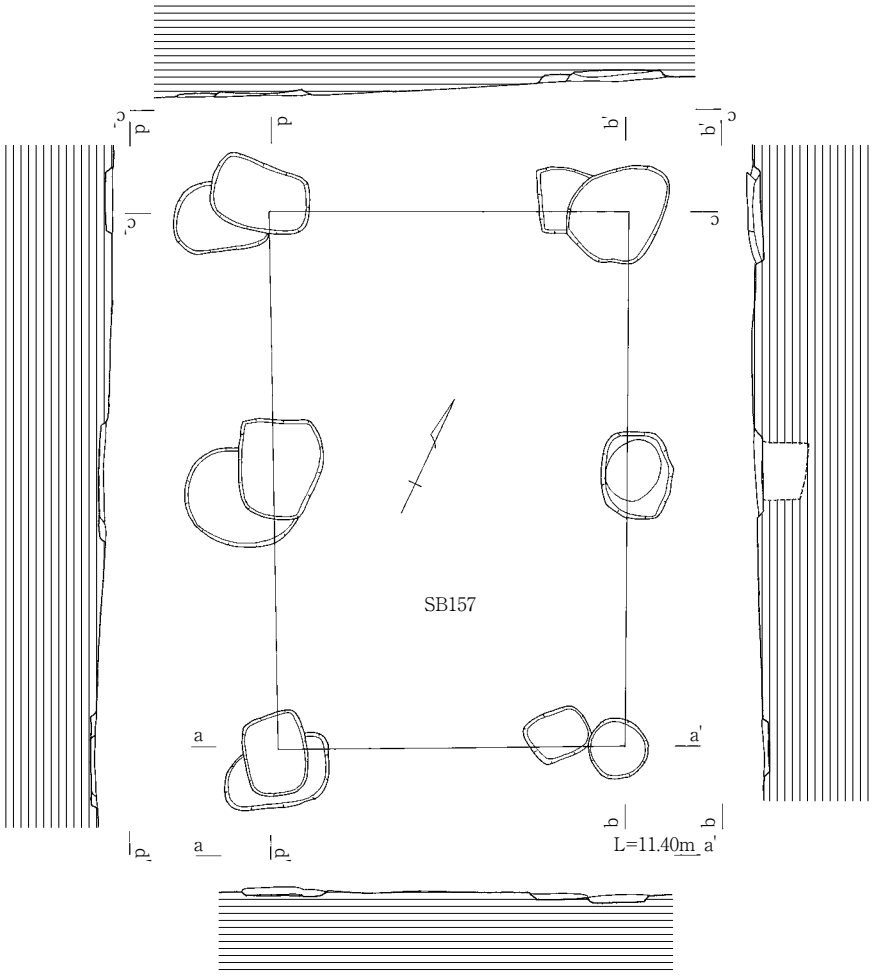
ＳＢ１５７

Ｚ９区に位置する梁行1間2.60ｍ～2.70ｍ、桁行２間4.18ｍ～4.20ｍの掘立柱建物である。ＳＢ１５６によって切られている。いずれも時期の決め手となる遺物を欠くが、弥生中期後半から後期と推定される。



第 57 図　155 号住居跡（SB155）遺構実測図［1/60］



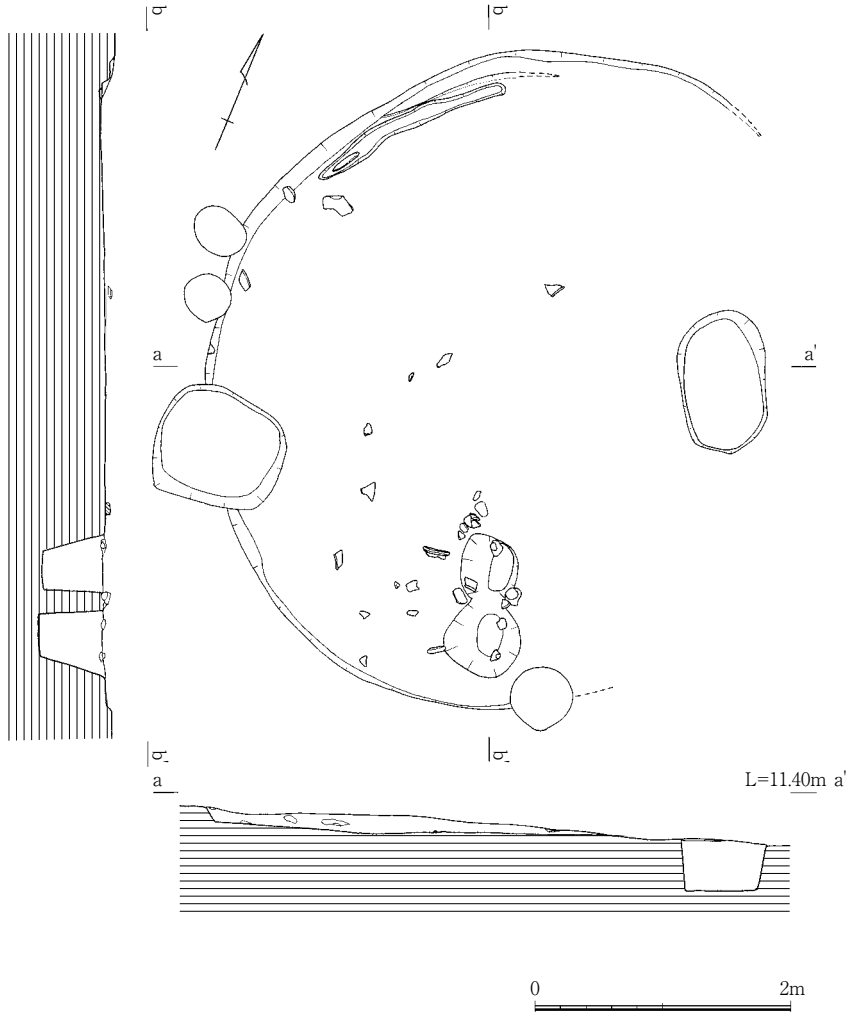


第 58 図　156 号・157 号住居跡（SB155・SB157）遺構実測図［1/60］

竪穴住居跡

ＳＣ２１１

直径約5.0ｍに復元される円形プランの竪穴住居跡である。北側に浅い弧状の溝がはしっている。主柱穴は明らかでないが、南側で深さ50㎝程度のピットが２つ確認された。東側は、削平のためプランを確認できなかった。時期の決め手となる遺物を欠くが、住居跡のプランから弥生中期と推定される。



第 59 図　211 号住居跡（SC211）遺構実測図［1/60］

２．遺物の出土状況（第61～63図）

流路内の遺物の出土量は地点によって粗密がみられるが、これは粗砂粒とともに流された結果である。とくに土器類は、数層にわたって堆積していたことから、上層、中層、下層というように分層的なとりあげをおこなった。このため同一地点で複数枚に及ぶ出土状況の実測図を作成した。流路内の層位は必ずしも時系列にそったものではなかった。これはローリングが繰り返されることで、層位の逆転が行われたことを反映している。

ここでは土器や木器、石錘などがまとまって出土した３区画について解説する。土器群の番号については第55図に示すとおりで、第61～63図（折込）に１区～３区として設定した範囲である。各地区の出土状況が特定できる遺物については青色のアミで示した。出土遺物の番号は挿図と合致する。

１区（第61図、挿図64～71）

１区は、ＳＤ－０２上流のＷ・Ｘ７区の流路内、土器群121･122、そして土器群132の部分にあたる。土器群121･122は、もともと流路内に流れ込んだ一連の土器の集塊を便宜的に南北で区切ったものである。

土器群121では、弥生時代中期後半と後期後半の土器が密集した状態で検出された。弥生時代中期後半の丹塗研磨のある多量の土器が出土した（第64～67図）。器種としては鋤先口縁壷が最も多く、広口壷、鋤先口縁甕、高杯、蓋形土器などがある。有窓の甕形土器の小片も出土した（第64･65図）。後期後半では複合口縁壷や大型の甕形土器、支脚、器台などが検出された。外来系土器としては朝鮮半島系の粘土帯土器や中国地方の擬凹線文のある甕形土器の口縁部が検出された。

土器群122では、弥生時代中期後半の丹塗研磨のある高杯が多数出土した。鋤先口縁の甕形土器と蓋形土器もまとまって出土した。外来系土器としては朝鮮半島系土器の把手部が出土した。胴部の内外に横方向のミガキがみられる。壷形土器の胴部の破片であろうか。

１区の南側では、絵画のある琴の部材や精巧なつくりの刳物箱、木偶や陽物など祭祀遺物が集中して出土して注目された（福岡市2014）。１区でも、木製農具、工具のほか、祭祀遺物の分布が確認された。絵画のある琴の部材、剣形木製品など特記すべき資料が確認された。

２区（第62図、挿図72～77）

２区は、ＳＤ－０２上流のＶ・Ｗ７・８区の流路内、土器群124･125、そして流路南斜面の土器群130･131の部分にあたる。土器群124･125は、もともと流路内に流れ込んだ一連の土器の集塊を便宜的に東西で区切ったものである。

土器群124では、弥生時代中期後半と後期終末から古墳前期の土器が検出された。弥生時代中期後半の丹塗研磨土器は、鋤先口縁壷、袋状口縁壷、鋤先口縁甕、鉢形土器、高杯、蓋形土器などがある。胎土に金雲母を多く混入する支脚には高床建物を描いた線刻がみられる。小型の蓋形土器は、焼成は軟質で、あまり見られない器種である。

後期終末から古墳前期とした土器は、在来系の直口縁壷や広口壷がある。底部は下膨れ気味で、弥生土器の系統をとどめた最終段階の様相を示している。

土器群125は、弥生時代中期後半から後期前半から後半にかけての土器が検出された。弥生時代中期後半の丹塗研磨土器は、鋤先口縁壷、広口壷、袋状口縁壷、高杯、蓋形土器のほか、有窓の甕形土器が複数確認された。

後期前半の袋状口縁壷や複合口縁壷、後期前半から中頃の高杯なども含まれている。小型の鉢形土

器の中には支脚と区別がつきづらい器種も多い。外来系土器としては中国地方の後期の甕形土器の口縁部２点が検出された。

土器群130･131は、弥生時代中期後半から後期前半にかけての土器が検出された。これらの土器は南側斜面から流入した状況である。丹塗土器には広口壷や高杯のほか筒形器台も複数含まれている。

ここで注目されるのは、大型石錘が一定の間隔で検出されたことである。これらの石錘は漁網や綱などがついた状態で埋まった可能性がある。

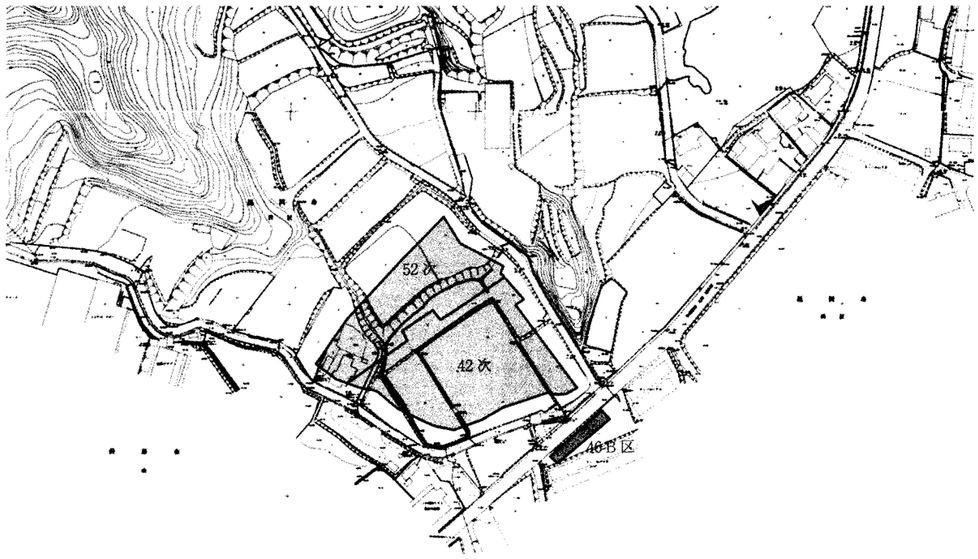
３区（第63図、挿図78～81）

３区は、ＳＤ－０２最上流のＵ・Ｖ８・９区の流路内、土器群127･128、そして流路西斜面の土器群129の部分にあたる。土器群127･128は、もともと流路内に流れ込んだ土器の集塊を便宜的に位置で区切ったものである。

土器群127は、弥生中期の土器を一部含むが、弥生終末期から古墳時代前期の土器が大半を占めている。外来系土器としては中国地方の後期の甕形土器の口縁部や山陰系の甕形土器がみられる。一方最上流の土器群128は、弥生中期後半の丹塗土器が主体を占めている。木製品には把手付の工作台とみられる製品がある。

土器群129は、南側斜面から流入した資料である。弥生中期後半の土器が多くを占めるが、終末期の直口壷や高杯も一部含まれている。

丹塗土器には、袋状口縁壷や広口壷、鋤先口縁壷など遺存状況がきわめて良好である。ここでも大型石錘が一定の間隔で検出されたことは注目される。２区同様、これらの大型石錘も漁網や綱などに括り付けられた状態で流路に流れ込んだ可能性がある。



元岡・桑原遺跡群　第42次調査区位置図　[1/4000]

第60図　元岡・桑原遺跡群　第42次・52次調査区遺構配置図［1/400］

W

X

〔132〕

90-361

90-362

〔124〕

73-129

73-136

72-125

126-76

65-22

〔121〕

102-65

100-55

100-53

1246集 42-195

101-61

68-70

70-103

70-103

〔122〕

108-106

71-116

108-109

126-76

64-3

68-63

99-28

101-62

97-2

106-88

101-63

122-37

64-11

94-16

106-95

100-52

99-38

113-22

100-52

98-13

0

3m

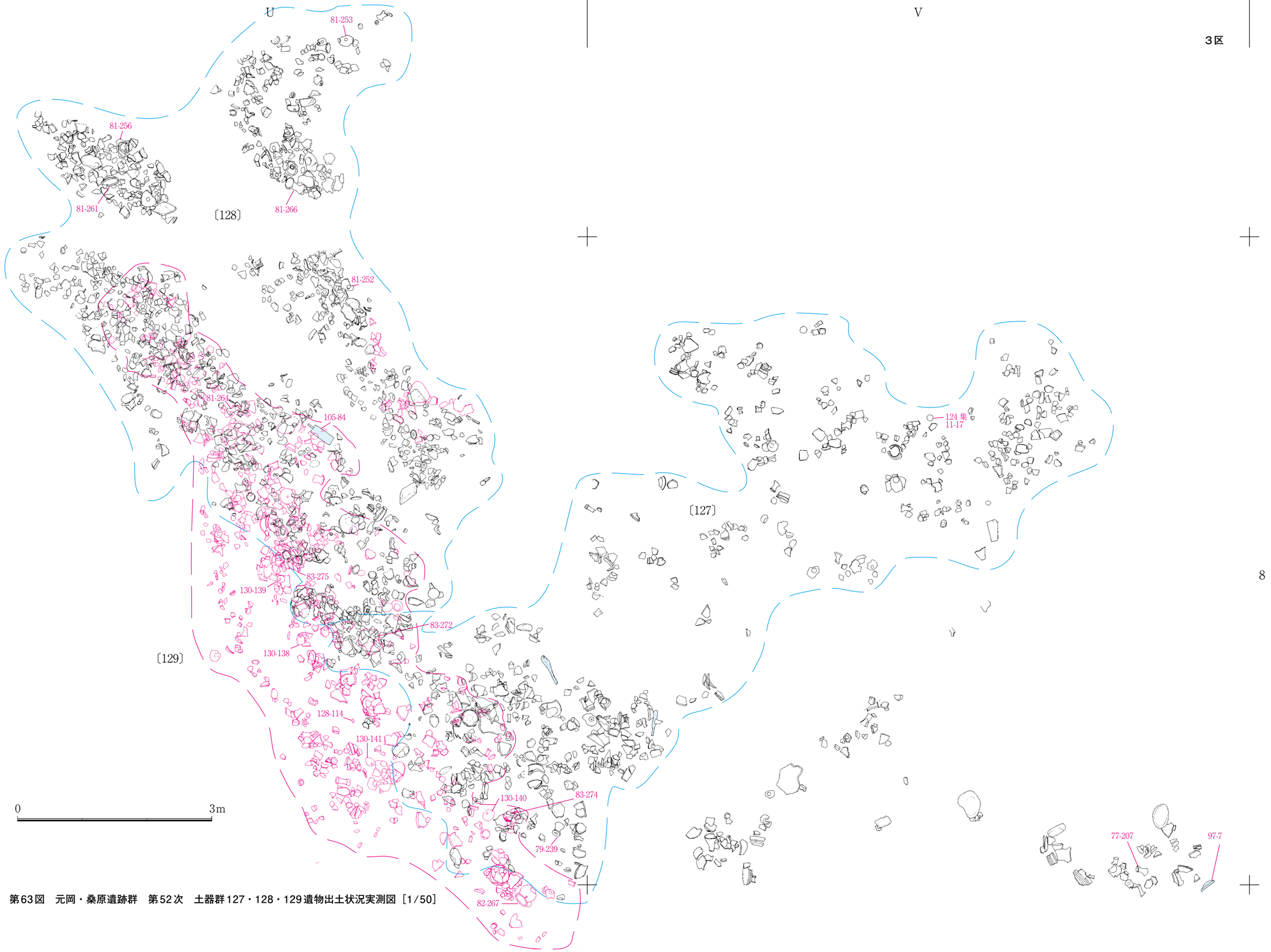
第61図　元岡・桑原遺跡群　第52次　土器群121・122・132遺物出土状況実測図［1/50］

〔125〕
〔124〕
〔131〕
〔130〕

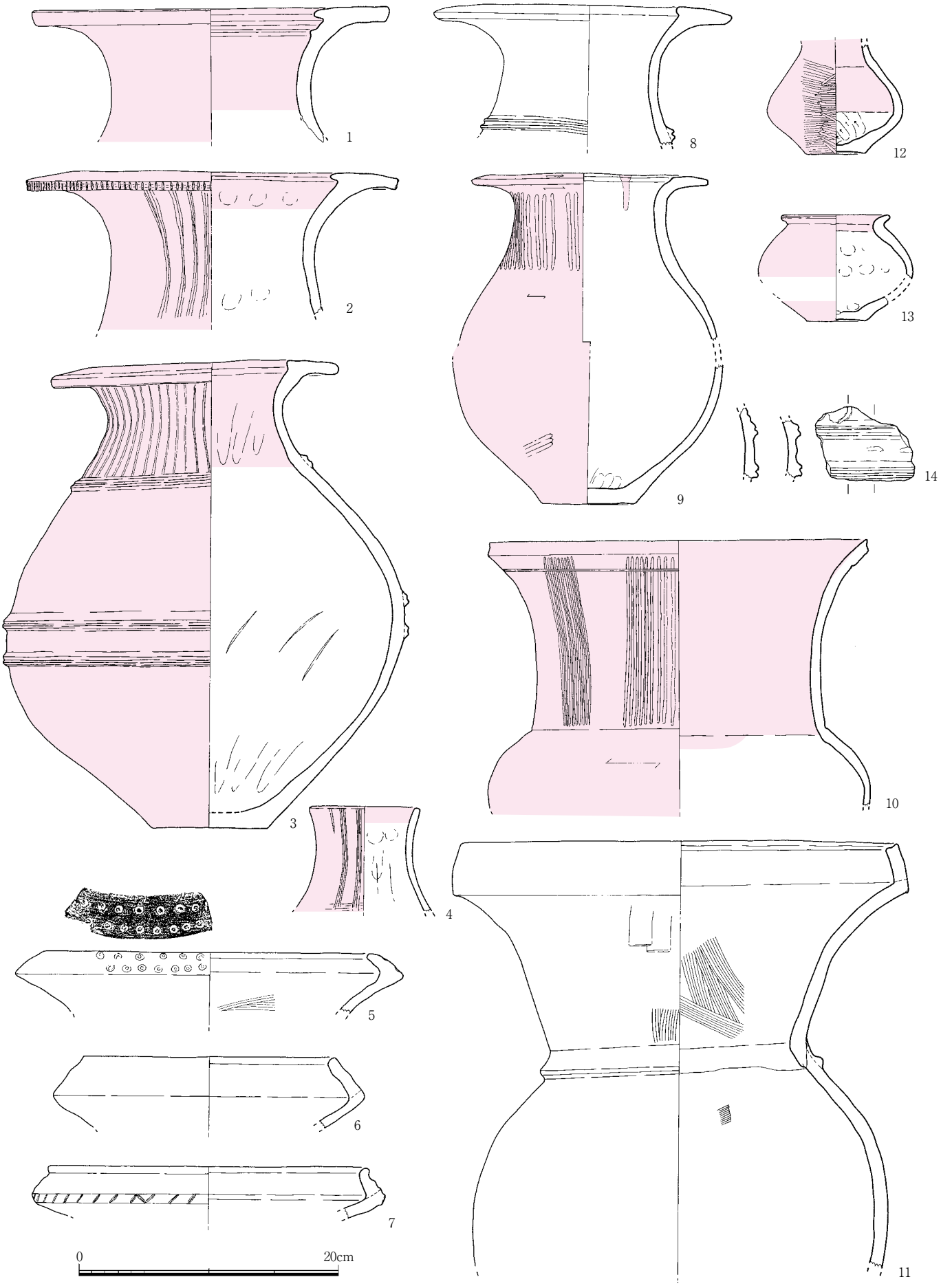
125-73
105-81
107-96
77-202
87-315
128-114
77-178
104-80
86-307
86-302
86-300
75-165
87-321

0 3m

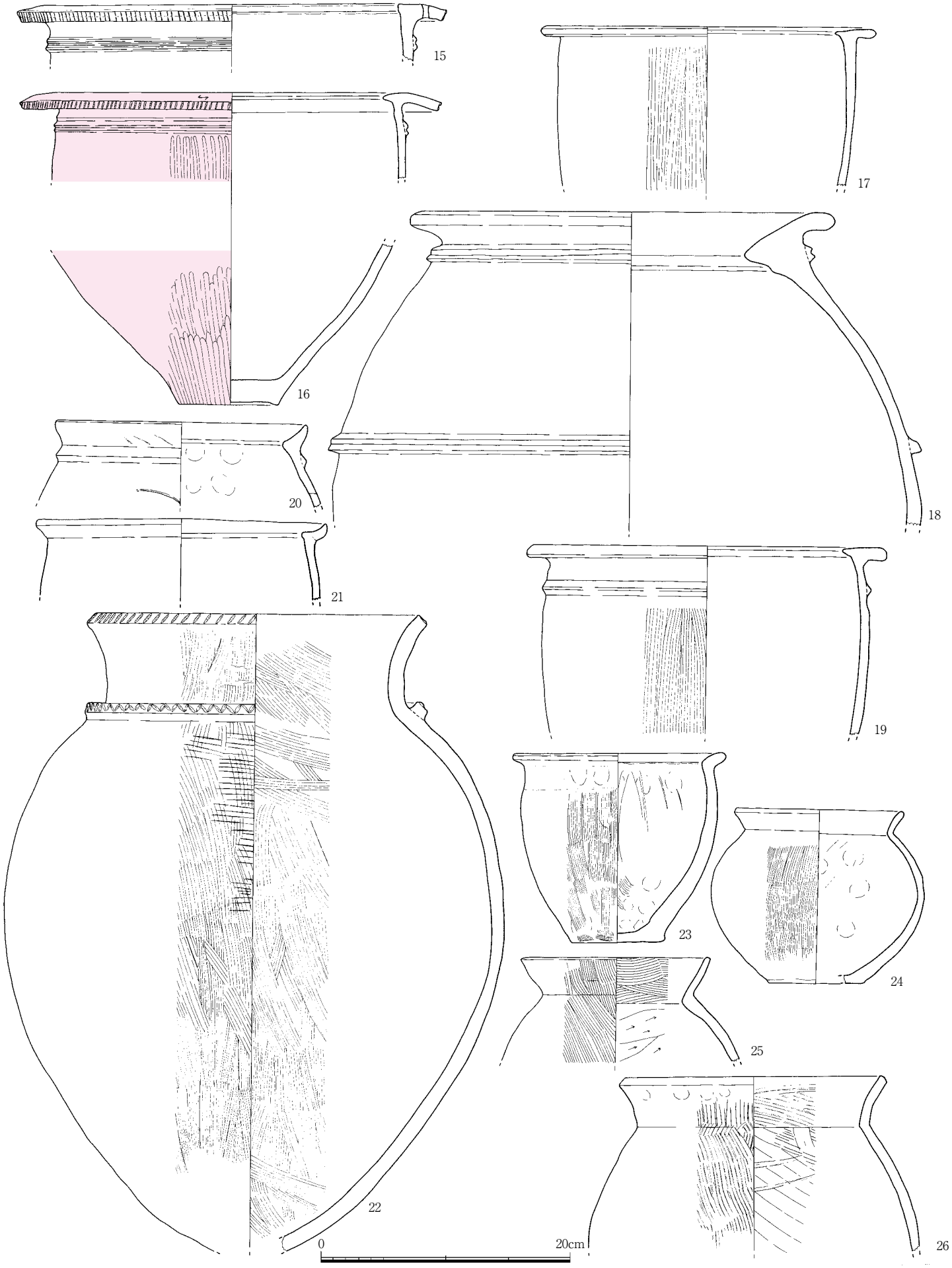
第62図　元岡・桑原遺跡群　第52次　土器群124・125・130・131遺物出土状況実測図［1/50］



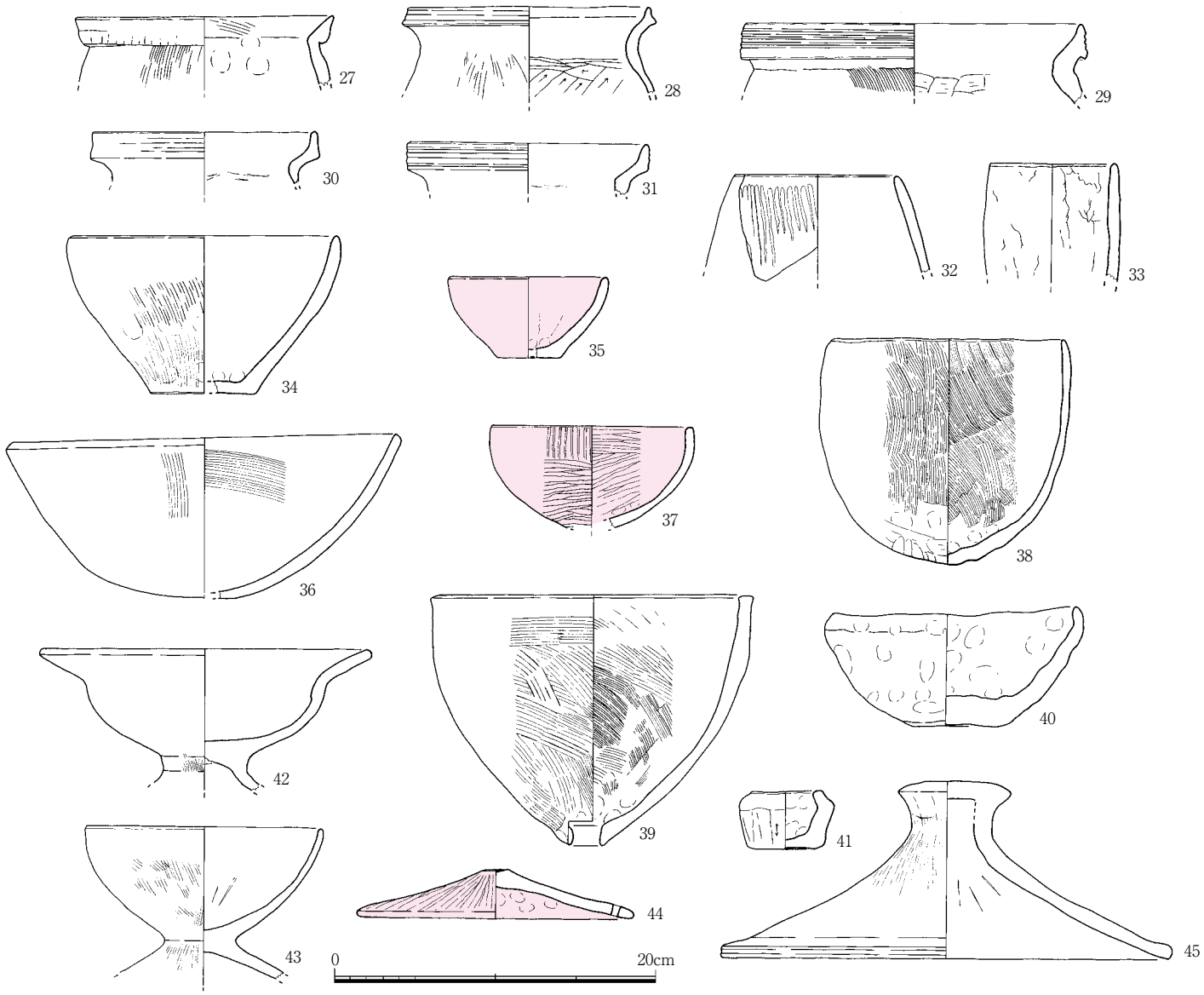
第63図　元岡・桑原遺跡群　第52次　土器群127・128・129遺物出土状況実測図［1/50］



第 64 図　52 次土器群 121 出土土器実測図（1）［1/4］



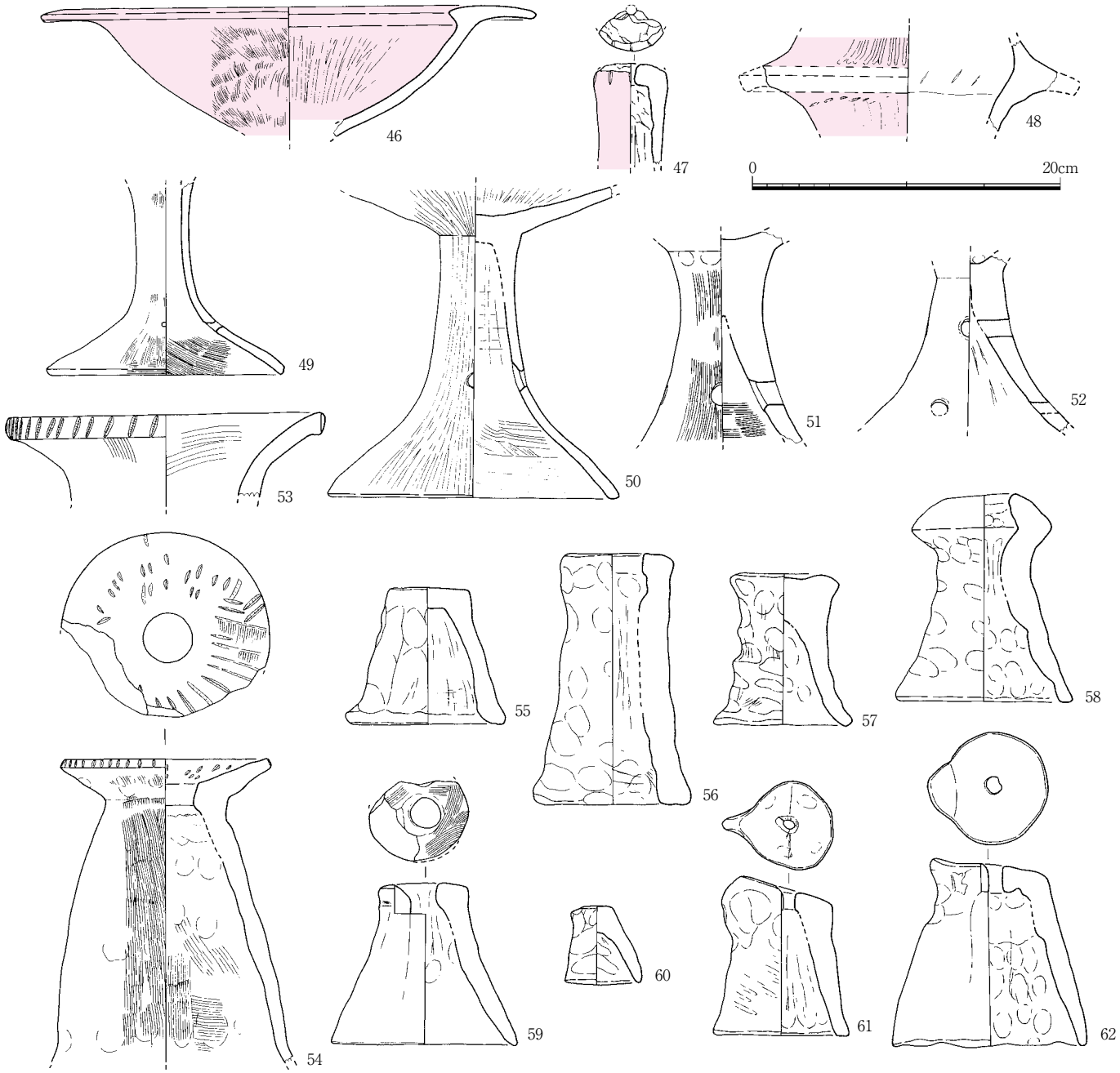
第 65 図　52 次土器群 121 出土土器実測図（2）［1/4］



第 66 図　52 次土器群 121 出土土器実測図（3）［1/4］

表 12　52 次土器群 121 出土土器観察表（1）

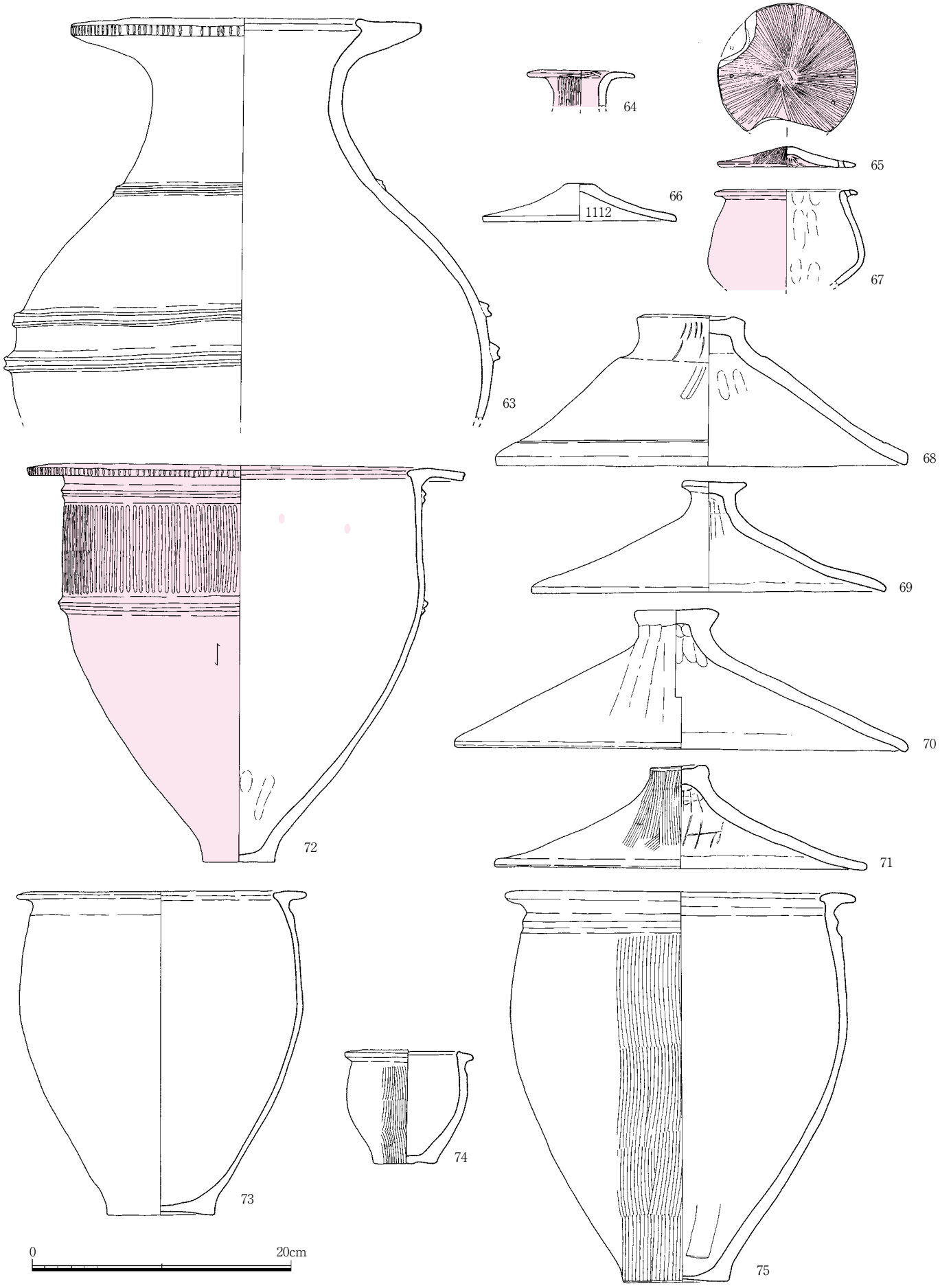
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
64	1	Ⅱ	121	X-7-S	壺	10.5	(27.6)	—	口縁部上面は横ナデ、他はナデ	横ナデ	鈍い黄橙色	4㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	口縁部残存：1/10　外来系内側に三角突帯めぐらす 全面丹塗り
64	2	Ⅱ	121	X-7-S	壺	12.3	28.6	—	口縁部上面は横ナデ、口縁端部は刻み目、頸部は縦ヘラ研磨が等間隔で全周巡る、磨滅	頸部は横ナデ指から押さえナデ	内：浅黄橙色 外：浅黄橙色～淡橙色	3㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を含む	良好	残存：口縁部若干欠 口縁端部に全周の刻み目　頸部に意識的に打ち抜かれている形跡か 内側口縁直下～外側全面丹塗り
64	3	Ⅱ	121	X-7-S	壺	36.0	22.0	9.0	頸部は縦の暗文が全周、肩部は横ナデ、体部はナデ・横ナデ	口縁部は横ナデ、他はナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・褐色粒を含む	良好	残存：7/8 4カ所ネズミの爪痕 内側頸部～外側底部を除き丹塗り 丹は剥げている部分多い
64	4	Ⅱ	121	X-7-S	壺	8.0	(8.6)	—	頸部は縦の暗文，肩部は横方向のヘラ磨き	口縁部は横ナデ，頸部は指押さえ・ナデ	内：灰白色～浅黄橙色 外：橙色	精緻、微粒の白色粒，3㎜以下の橙色粒を若干含む	普通	口縁部残存：1/2 内側口縁部～外面丹塗り
64	5	Ⅱ	121	X-7-S	壺	4.75	25.2	—	横ナデ、口縁部に竹管文	口縁部は横ナデ、頸部は横刷毛	内：淡灰褐色 外：褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的多く混じる	良好	残存：口縁部 1/8　口縁部外面に竹管文が2列に施される
64	6	Ⅱ	121	X-7-S	壺	6.5	(19.2)	—	ナデ	ナデ	赤褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	
64	7	Ⅱ	121	X-7-S	壺	3.9	(24.0)	—	ナデ・刻み目	ナデ	薄褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む　砂粒は少ない	良好	刻み目は一部でクロスしている箇所あり
64	8	Ⅱ	121	X-7-S	壺	10.7	(22.9)	—	ナデ	ナデ	薄褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む　砂粒はやや少ない	良好	口縁部欠損：3/4



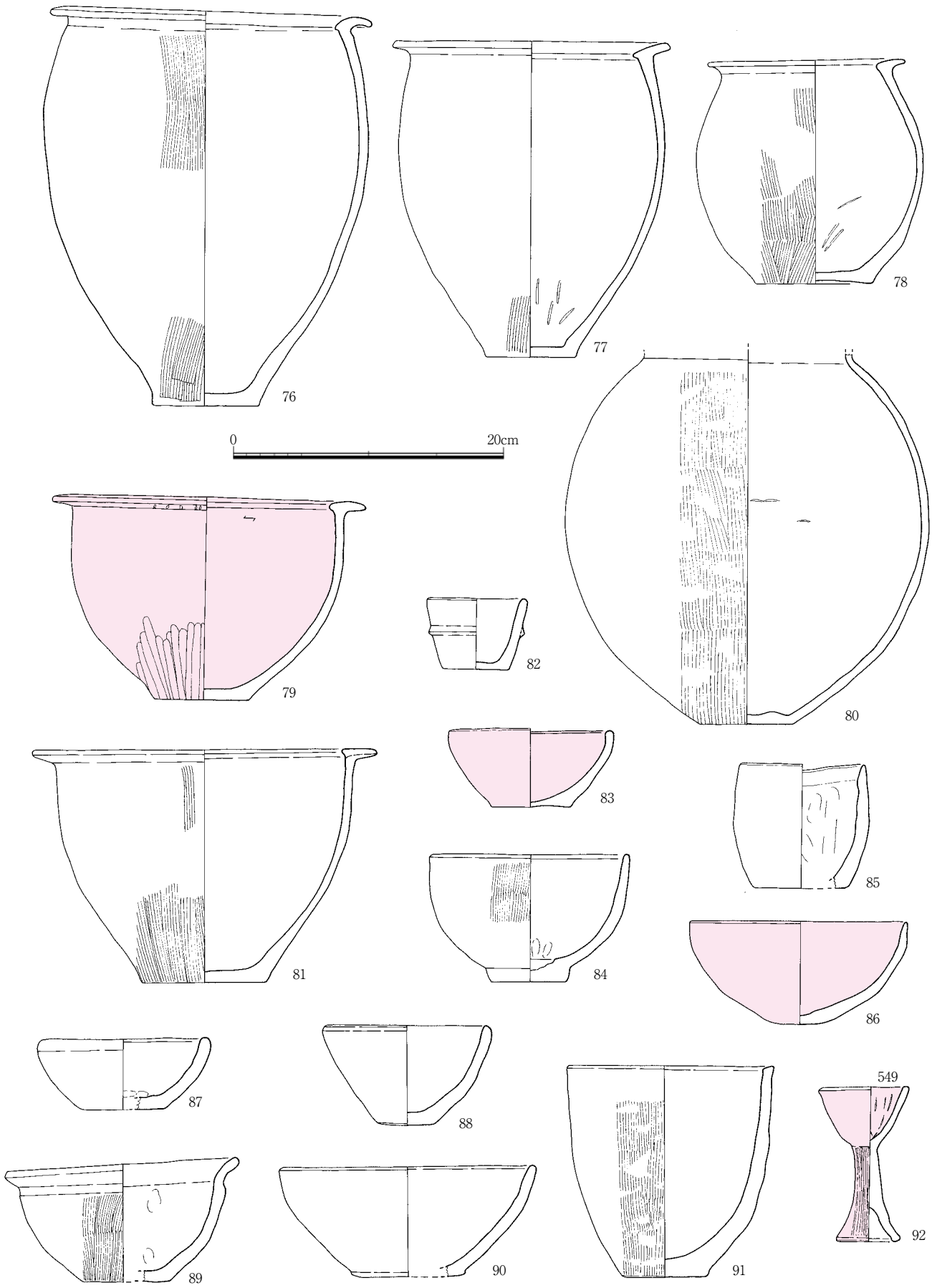
第 67 図　52 次土器群 121 出土土器実測図（4）［1/4］

表 13　52 次土器群 121 出土土器観察表（2）

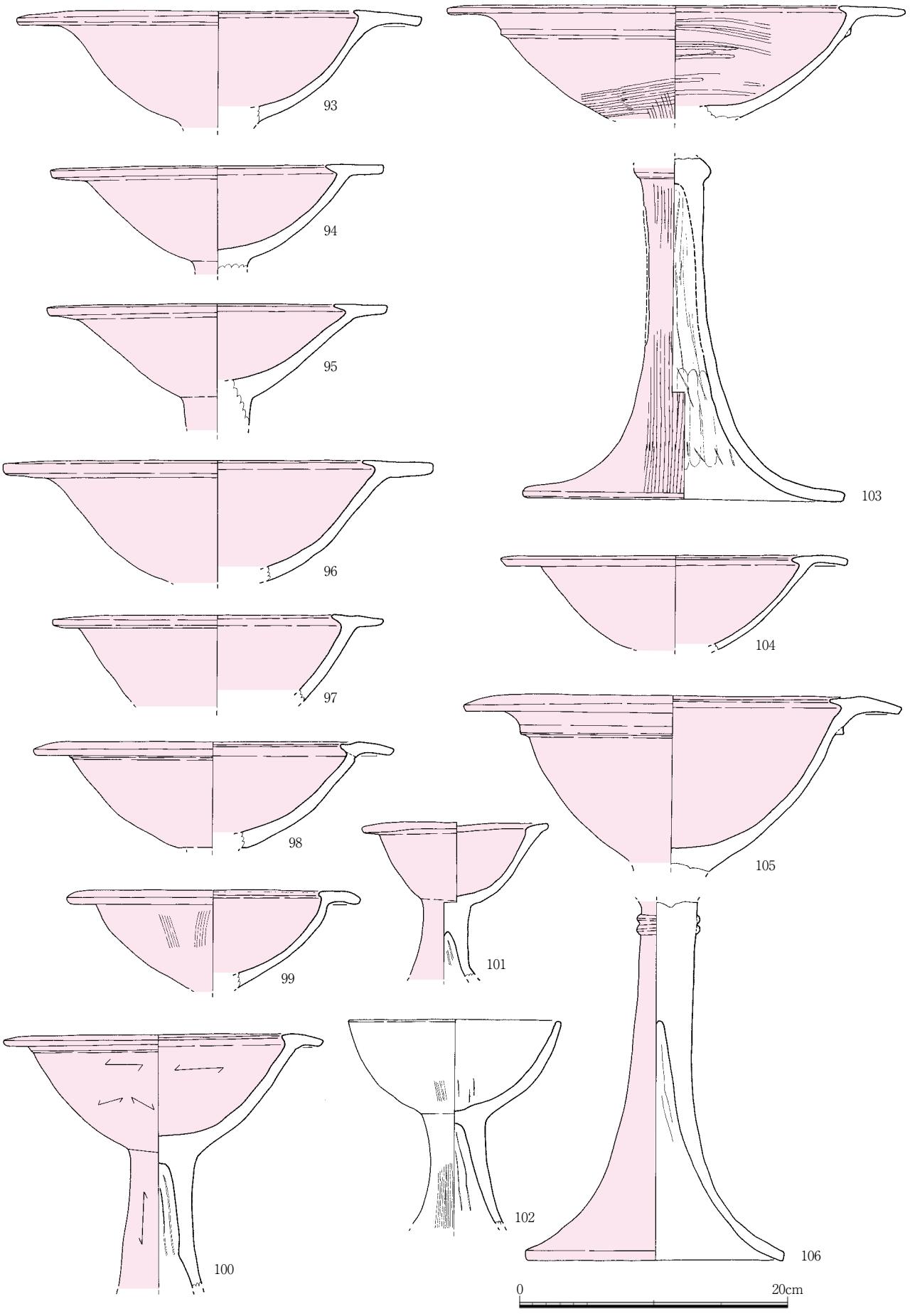
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
64	9	Ⅱ	121	X-7-S	壺	—	(18.2)	7.1	全体に磨き、頸部は暗文、底面は削り	ナデ、底部に指圧痕	内：淡褐色 外：丹塗り	精良、4㎜以下の石英・2㎜以下の長石粒を含み、金雲母を多く含む	良好	欠損：口縁部から底部 1/3 外側は丹塗り 頸部暗文
64	10	Ⅱ	121	X-7-S	壺	20.6	(29.0)	—	頸部に暗文、他は磨き	ナデ	明褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	内側頸部から外側全面に丹塗り 頸部に暗文めぐる
64	11	Ⅱ	121	W-7-S	壺	33.1	(33.5)	—	口縁部はナデ、頸部は縦刷毛、突帯部は横ナデ、他は磨滅	口縁部・突帯部はナデ、頸部は斜め刷毛、他は磨滅	赤褐色	5㎜以下の石英、3㎜以下の長石粒を含む	良好	残存：胴部 2/3 欠損・底部なし　突帯部分に接合痕
64	12	Ⅱ	121	X-7-S	壺	8.45	—	4.3	ヘラ磨き、底は横ナデ・ナデ	横ナデ，底部はヘラ状工具によるナデ上げ	褐色		良好	丹塗りは外面（底のぞく）と内面中位まで　外底はわずかに上げ底
64	13	Ⅱ	121	X-7-S	壺	8.2	(8.4)	4.4	口縁部から体中部は横ナデ、他はナデ・磨滅	口縁部は横ナデ，他は指押さえ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を含む	やや軟	残存：1/3　底部全周あり 内側頸部から外側は底部を除き丹塗り
64	14	Ⅱ	121	X-7-S	壺	5.5	—	—	横ナデ	ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	破片 鉤状文？を貼りつけ 上下突帯間の粘土帯がある
65	15	Ⅱ	121	X-7-S	甕	4.6	(34.4)	—	口縁部上面は横ナデ、口縁端部に刻み目が一周、頸部は横ナデ	ナデ	鈍い黄橙色	精緻　2㎜以下の石英・長石粒を若干含む	良	残存：1/5　口縁部上面に焼成後の穿孔あり 内側口縁部から外側丹塗り
65	16	Ⅱ	121	X-7-S	壺	—	33.7	8.6	口縁部上面はヘラ磨き、端部は刻み目、体上部は暗文、他はヘラ磨き、底は削り	ナデ	内：暗褐色 外：丹塗り	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：口縁部と胴部，体部欠損　暗文は不規則 外面は丹塗り
65	17	Ⅱ	121	X-7-S	甕	13.0	(24.7)	—	口縁部はナデ、他は縦刷毛	ナデ	淡褐色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：口縁部のみ



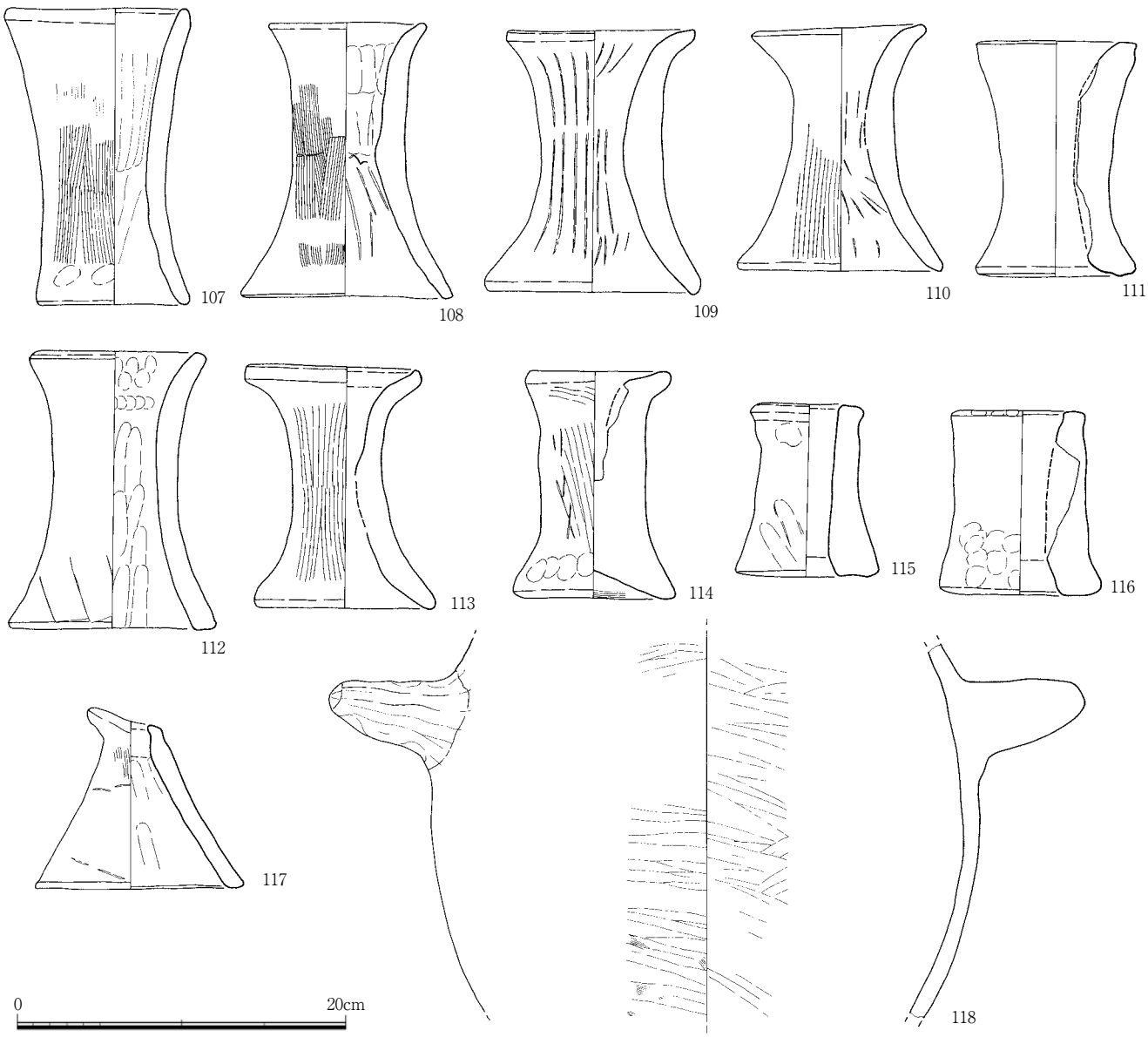
第 68 図　52 次土器群 122 出土土器実測図（1）［1/4］



第 69 図　52 次土器群 122 出土土器実測図（2）［1/4］



第 70 図　52 次土器群 122 出土土器実測図（3）［1/4］



第 71 図　52 次土器群 122 出土土器実測図（4）［1/4］

表 14　52 次土器群 121 出土土器観察表（3）

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
65	18	Ⅱ	121	X-7-S	甕	25.2	34.0	—	口縁部・突帯部は横ナ、他はナデ	口縁部は横ナデ、他はナデ	淡褐色	2㎜以下の長石粒、3㎜以下の石英を含む	良好	残存：1/4　内外面ともに磨滅著しい　体中部に突帯の痕跡あり
65	19	Ⅱ	121	X-7-S	甕	15.0	(28.6)	—	口縁部はナデ、他は縦刷毛	ナデ	暗褐色	4㎜以下の石英・3㎜以下の長石粒を含む	良好	口縁部残存：1/3
65	20	Ⅱ	121	X-7-S	甕	6.5	(20.2)	—	口縁部横ナデ、肩部はナデ	口縁部横ナデ、肩部はナデ	鈍い橙色	3㎜以下の石英・長石粒・褐色粒を含む	良	口縁部残存：1/6　体部に楕円形の窓か
65	21	Ⅱ	121	X-7-S	甕	6.5	(23.0)	—	口縁部はナデ、他は磨滅著しい	磨滅著しい	暗褐色	やや不精良　3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	
65	22	Ⅱ	121	W-7-S	甕	51.1	27.8	—	口縁端部と突帯に刻み目、頸部は縦刷、体上部～中部は叩き・縦刷毛、下部から底部は板ナデ、細かい刷毛か、ナデ	口縁部から頸部はナデ斜め刷毛、体上部は横刷毛からあて具痕のち刷毛目、下部は縦刷毛	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：口縁部全周あり 下半部1/2 口縁端部・突帯に刻み目が巡る
65	23	Ⅱ	121	X-7-S	鉢	15.2	(17.0)	7.5	口縁部は指押さえ・横ナデ、他は縦刷毛	指押さえ縦方向の板ナデ横ナデ、底部付近はナデ刷毛	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良好	残存：1/2　底部は凸凹している
65	24	Ⅱ	121	W-7-S	鉢	13.9	(13.6)	(7.6)	口縁部は横ナデ、体部は縦刷毛、底部はナデ	口縁部は横ナデ、他は板ナデナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良	残存：3/ 5
65	25	Ⅱ	121	W-7-S	甕	8.6	15.1	—	口縁端部はナデ、他は縦・斜め刷毛	口縁部は横刷毛、他は削り	暗褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む　砂粒は少ない	良好	土師器
65	26	Ⅱ	121	X-7-S	甕	14.1	20.2	—	口縁部は指押さえ・横ナデ、頸部は縦刷毛・横ナデ、体部は縦・斜め刷毛	口縁部は横ナデ・横刷毛、頸部は粗い斜め刷毛、他は斜め刷毛板ナデ	内：鈍い黄橙色 外：黒色～褐色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	上半部残存：1/5　二次焼成で外側に黒いスス付着　口縁部は内側にやや屈曲
66	27	Ⅱ	121	W-7-S	壺	4.2	(16.0)	—	口縁部は横ナデ、頸部は刷毛目	口縁部は斜め刷毛目、頸部は磨滅	内：鈍い黄橙色 外：灰黄褐色	3㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を含む	普通	口縁部残存：1/8　口縁部には凹線の痕跡なし　外来系（山陰系）
66	28	Ⅱ	121	W-7-S	壺	5.4	15.2	—	口縁部は横ナデ、頸部は横ナデ・ヘラ状工具？で調整	口縁部は横ナデ、肩部はヘラナデ・ヘラ削り	鈍い黄橙色	4㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	口縁部残存：1/3　外来系

表 15　52 次土器群 121 出土土器観察表（4）

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
66	29	Ⅱ	121	X-7-S	壺	5.0	(21.0)	—	口縁部は沈線がめぐり、頸部は横ナデ・縦刷毛	口縁部は横ナデ、頸部は削り	内：灰黄褐色 外：褐灰色～黒褐色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を多量に含む	やや軟	口縁部残存：1/6　口縁部の凹線３～４本　外来系（山陰系）土器
66	30	Ⅱ	121	W-7-S	壺	3.25	(14.0)	—	口縁部は沈線（磨滅）がめぐり、頸部は横ナデ	口縁部は横ナデ、頸部は削り	鈍い黄橙色～灰黄褐色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を多く含む	不良	口縁部残存：1/7　口縁部に凹線痕あり　外来系（山陰系）
66	31	Ⅱ	121	W-7-S	壺	3.1	(15.0)	—	口縁部は沈線がめぐり、頸部は横ナデ	横ナデ・削り	内：灰黄褐色 外：鈍い橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	普通	口縁部残存：1/9　口縁部の凹線５本　外来系（山陰系）
66	32	Ⅱ	121	X-7-S	壺	6.05	(10.2)	—	黒い暗文がめぐる	横ナデ・横板ナデ	灰黄褐色～黒褐色	精緻　白色微粒を若干含む	良	黒い黒色顔料か
66	33	Ⅱ	121	X-7-S	支脚	7.4	—	7.7	ナデ	横ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・黒色粒を含む	良好	裾部残存：1/4　器壁が薄いが支脚であろう
66	34	Ⅱ	121	X-7-S	鉢	9.8	(16.6)	(6.6)	口縁部付近は横ナデ、他は縦刷毛	ナデ磨滅	橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良	残存：1/5
66	35	Ⅱ	121	X-7-S	鉢	5.0	(10.0)	(4.0)	磨滅	ナデ	灰白色～浅黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	軟	残存：1/2 全面丹塗り
66	36	Ⅱ	121	W-7-S	鉢	10.2	24.5	—	縦刷毛・磨滅	横刷毛・磨滅著しい	淡褐色	4㎜以下の石英・長石粒を含む	やや不良	底部欠損　外面底部に黒斑
66	37	Ⅱ	121	X-7-S	鉢	6.2	12.6	—	口縁部は縦方向の暗文風文様，他はヘラ磨き	ヘラ磨き	橙色	精緻、1㎜以下の白色粒を若干含む	普通	残存：1/5 全面丹塗り
66	38	Ⅱ	121	W-7-S	鉢	14.0	14.4	丸底	口縁部～体部は縦刷毛、底部付近は指押さえ・ナデ削り	細かい縦・斜刷毛一部横刷毛、底部はナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	残存：7/8 土師器
66	39	Ⅱ	121	W-7-S	鉢	15.5	20.1	2.0	口縁上面明瞭な横刷毛、口縁部付近は横ナデ横刷毛、胴部は盾刷毛	口縁部は横ナデ、他は刷毛目	橙色，内は朱色を帯びる	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良	ほぼ完形 底部に方形状の穿孔（1.6cm）甑として使用
66	40	Ⅱ	121	X-7-S	鉢	7.5	16.0	7.0	ナデ指押さえ	ナデ指押さえ	鈍い黄橙色一部橙色	3㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を含む	良	残存：1/2
66	41	Ⅱ	121	X-7-S	ミニチュア土器	3.8	4.3	4.8	削り、底はナデ	指押さえ・ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を多く含む	良	口縁部全周を打ち欠く
66	42	Ⅱ	121	W-7-S	台付鉢	8.8	(20.0)	—	ナデ・磨滅著しい	ナデ・磨滅	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含む、1㎜以下の橙色粒を少量含む	普通やや軟	残存：2/3 土師器
66	43	Ⅱ	121	W-7-S	台付鉢	9.3	14.8	—	口縁部は横ナデ、体部は縦刷毛・磨滅，脚部は縦刷毛か縦ヘラ・磨滅	口縁部は横ナデ、他は磨滅	鈍い黄橙色	精緻、2㎜以下の石英・長石粒若干含む	やや軟	磨滅著しい　残存：4/5 土師器
66	44	Ⅱ	121	X-7-S	蓋	17.1	1.5 つまみ	3.0	縦ヘラ磨き	ナデ	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	普通	残存：4/5　焼成前の穿孔 残存部分に穿孔１カ所 全面丹塗り
66	45	Ⅱ	121	X-7-S	蓋	11.0	6.9 つまみ	(28.0)	頂部はナデ・磨滅，他は縦刷毛ナデ消し	ナデ調整痕ナデ横ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：4/5　裾の内側が褐色に変色しているため使用痕か
67	46	Ⅱ	121	W-7-S	高坏	8.5	—	—	坏部上面は縦ヘラ磨き、他は縦刷毛・磨滅	縦ヘラ磨き磨滅	鈍い黄橙色～鈍い橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	普通	坏部残存：1/2 弱
67	47	Ⅱ	121	X-7-S	壺	6.5	(4.6)	—	頂部端に刻み文様、他はナデ	指押さえ	鈍い黄橙色	精緻、白色微粒を若干含む	普通	瓢箪型土器の頭頂部か、粘土を被せた？頂部中央に孔　外側丹塗
67	48	Ⅱ	121	X-7-S	筒形器台	6.3	—	—	受上部は暗文風ヘラ、頸部はヘラ磨き・工具痕	ナデ	鈍い黄橙色	精緻　1㎜以下の石英・長石粒・黒色微粒を含む	良	破片 外側丹塗り
67	49	Ⅱ	121	W-7-S	脚台部	12.5	—	15.4	脚上部は縦刷毛，中部は磨滅，裾部は縦刷毛横刷毛	裾部は斜め刷毛 全面丹塗り	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を含む	普通かやや軟	焼成後の穿孔３カ所 土師器
67	50	Ⅱ	121	X -7-S	高坏	20.3	—	(18.8)	坏部は縦ヘラ磨き磨滅、他は縦ヘラ磨き	坏部はヘラ磨き、裾部は横ナデ	鈍い橙色～鈍い黄橙色	3㎜以下の石英･長石粒･赤色粒･黒石粒・雲母を含む	良	焼成前の穿孔が３カ所以上ある　残存：2/3
67	51	Ⅱ	121	W-7-S	脚部	134.6	—	—	縦刷毛	坏部は磨滅ナデ、裾部は横刷毛	鈍い黄橙色	4㎜以下の石英・長石粒多い、1㎜以下の黒石粒・橙色粒・微粒の雲母を少量含む	良	穿孔４カ所にあり　焼成前の穿孔
67	52	Ⅱ	121	W-7-S	脚部	11.4	—	—	磨滅	脚部は横方向に削り・ナデ、磨滅	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒多い、5㎜以下の橙色粒・黒色粒を次若干含む	良	上方２カ所 下方３カ所に穿孔あり 焼成前の穿孔
67	53	Ⅱ	121	X-7-S	器台	5.5	(20.2)	—	口縁端部に刻み目、他は縦刷毛・磨滅	横・斜めの刷毛目	明褐色	普通　3㎜以下の石英を含む	良好	残存：1/6
67	54	Ⅱ	121	W-7-S	器台	19.9	13.6	—	上面部は意識的な模様か、上面端部は刻み目が周り、他は刷毛・粗い縦刷毛	上部は指押さえ・ナデ、裾部は斜刷毛・縦・横刷毛	灰黄褐色～鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：2/3　受頂部意識的？な文様あり（2種類の調整工具）受部端部側面に刻み目全周巡る
67	55	Ⅱ	121	W-7-S	支脚	16.3	4.9	10.3	受部磨滅、他は指押さえナデ	横ナデ横方向に削り	灰白色～黄灰色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	普通	完形
67	56	Ⅱ	121	X-7-S	器台	16.3	7.3	10.2	指押さえナデ	上部はナデ、体部は削り・絞り、裾部は横ナデ・横方向に削り	鈍い褐色	3㎜以下の石英・長石粒・金雲母を大量に含む	良	残存：上半部が若干欠損
67	57	Ⅱ	121	X-7-S	支脚	9.8	約 7.0	9.0	ナデ・指押さえ	ナデ・磨滅	橙色～鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石・黒色粒・雲母を含む	良	残存：7/8
67	58	Ⅱ	121	X-7-S	支脚	13.5	4.4	11.4	上面部はナデ、他は指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	鈍い黄橙色～鈍い黄褐色	9㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：裾部が 1/5 欠損する
67	59	Ⅱ	121	W-7-S	支脚	10.5	(5.8)	(12.0)	受部は刷毛目、他はナデ	ナデ・磨滅	橙色～鈍い黄橙色	4㎜以下の石英・長石粒・雲母を多く含む	良	残存：4/5
67	60	Ⅱ	121	W-7-S	ミニチュア土器	5.0	4.6	2.0	口縁部は胴部は横ナデ、指圧痕、底面はナデか（磨滅）	ヘラ状工具によるナデ圧痕	淡灰褐色	砂粒（石英 4㎜以下・長石 4.5㎜以下）多く混じる	良好	ミニチュア土器の支脚　欠損：口縁端部 1/2 弱
67	61	Ⅱ	121	W-7-S	支脚	10.3	5.8	8.8	受部はナデ、他は叩きのちナデ消しか	剥離、体部から裾部にかけてナデ	鈍い黄橙色	4㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	内・外側裾部の表面は若干剥離　受部に線刻あり土師器
67	62	Ⅱ	121	W-7-S	支脚	12.2	7.5	14.0	頂部はナデ、上部は指押さえ、他はナデ	指押さえ	灰黄褐色～鈍い黄橙色	5㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	完形 土師器

表 16　52 次土器群 122 出土土器観察表（1）

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
68	63	Ⅱ	122	X-7-N	壺	31.0	26.7	—	口縁端部に刻み目、他はナデ	口縁部はナデ、他は削り、頸部はヘラ工具によるナデ、他はナデ・磨滅	内：赤褐色 外：灰黒色	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存:1/3　外面には黒色顔料?
68	64	Ⅱ	122	X-7-N	鉢	3.8	8.2	—	横ナデ・ヘラ磨き	ヘラ磨き、横ナデ	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 4㎜以下）比較的少なく混じる	良好	全面に丹塗り　口縁部上面のヘラ磨きは短いストロークで全体を５分割して施す
68	65	Ⅱ	122	X-7-N	蓋	1.6	—	8.8	ヘラ磨き	ヘラ磨き	褐色	砂粒（石英 0.5㎜以下・長石 1㎜以下）少量混じる　金雲母 0.3㎜以下少量混じる	良好	欠損：口縁部 1/4　裾部に穿孔あり　赤色顔料（外面全体と内面口縁端部）
68	66	Ⅱ	122	X-7-N 下層	蓋	2.9	(2.0) つまみ	(14.8)	磨き	ナデ	内：薄褐色 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/4　外面丹塗り　内面に黒斑あり
68	67	Ⅱ	122	X-7-N	壺	7.5	10.9	—	磨き	指ナデ	内：明褐色 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：2/3　口縁部の２カ所に穿孔 口縁部上面～外側全体に丹塗り
68	68	Ⅱ	122	X-7-N	蓋	11.7	8.3 つまみ	(31.5)	頂部はナデ、他は板状工具の圧痕のちナデ	ナデ	内：淡褐色 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/3　外面は丹塗り
68	69	Ⅱ	122	X-7-N	蓋	8.65	—	27.7	頂部は不明，他はヘラ状工具による縦ナデ（磨滅）、裾部は板状工具による横ナデ	頂部はナデ，他はヘラ状工具で横方向に絞るようにナデ、裾部は横ナデ	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 4㎜以下）多く混じる	良好	欠損：口縁部～頂部 1/2 弱つまみ端部わずかに　内面口縁部と外面口縁部一部に煤付着
68	70	Ⅱ	122	X-7-N	蓋	11.8	—	35.0	頂部は板状工具によるナデ、頂部側面と裾部は横ナデ、他は板状溝による縦ナデ・擦痕	頂部は指圧痕，他はナデ（摩擦）、裾部は横ナデ	内：淡褐色 外：褐色	砂粒（石英 3㎜以下・長石 4.5㎜以下）多く混じる	良好	残存：1/6　内面裾部に煤付着
68	71	Ⅱ	122	X-7-N	蓋	7.9	—	28.8	頂部はナデ、他は縦刷毛、裾部は横ナデ	指絞り・ヘラ状工具によるナデ痕、裾部は横ナデ	淡褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 5㎜以下）多く混じる	良好	欠損：口縁部 3/5　内面裾部に煤付着
68	72	Ⅱ	122	X-7-N	甕	30.8	33.6	5.6	口縁部上面はヘラ磨き、口縁端部は刻み目、体上部に暗文、突帯は横ナデ、他はヘラ磨き	口縁部は横ナデ、他はナデ、底部付近は指圧痕	薄褐色	精良　3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	欠損：1/3　内側口縁部～外側底部を除き丹塗り
68	73	Ⅱ	122	W-7-N	甕	25.0	(22.0)	(8.2)	口縁部はナデ・横ナデ、他は剥離のため不明、底はナデ	ナデ	薄褐色	3㎜以下の石英・長石粒を含む 砂粒は比較的多い	良好	残存：1/2　外面に煤の痕跡
68	74	Ⅱ	122	X-7-N 下層	鉢	8.8	9.8	4.9	縦刷毛	ナデ	暗褐色	やや精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	欠損：1/4
68	75	Ⅱ	122	W-7-N	甕	30.3	27.1	8.2	口縁部は横ナデ、他は縦刷毛・磨滅、底はナデ	口縁部は横ナデ、他はナデ、底部付近は板状工具によるナデ	淡褐色	2㎜以下の石英・長石粒を含む、砂粒は少ない	良好	欠損：口縁部 1/3 底部 1/2 外面全体に煤付着
69	76	Ⅱ	122	W-7-N	甕	38.6	23.6	7.7	口縁部は横ナデ、他は縦刷毛・磨滅、底はナデ	ナデ	内：淡褐色 外：赤褐色	5㎜以下の石英、2㎜以下の長石粒を含む、砂粒は比較的少ない	良好	ほぼ完形　外面上部に煤付着 内面は大部分に炭化物の痕跡
69	77	Ⅱ	122	X-7-N	甕	23.4	(19.8)	(6.6)	口縁部はナデ、他は縦刷毛（磨滅）	ナデ、底部付近に工具痕	薄褐色	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/3　外面に黒斑あり
69	78	Ⅱ	122	X-7-N	壺	16.6	(14.4)	8.6	口縁部はナデ、他は縦刷毛、底面は削り	ナデ、体下部にヘラの圧痕	赤褐色	3㎜以下の石英，2㎜以下の長石粒を含む	良好	欠損：胴部 1/2 口縁部 1/3 刷毛目幅 1.8cm
69	79	Ⅱ	122	W-7-N	鉢	15.0	(22.7)	6.9	口縁部・底面はナデ、口縁裏部にヘラ押し痕、他はヘラ磨き	口縁部はヘラ磨き、他はナデ	赤褐色	緻密、2㎜以下の石英，1㎜以下の長石粒を含む	良好	残存：1/3　内外面とも丹塗り
69	80	Ⅱ	122	W-7-N	甕	27.4	(15.4)	(6.6)	口縁部と底面はナデ、他は縦刷毛	刷毛調整か、底部はナデ	内：暗褐色 外：濃褐色	3㎜以下の石英、2㎜以下の長石粒を含む、砂粒は比較的多い	やや良好	
69	81	Ⅱ	122	X-7-N	鉢	17.2	(25.4)	(9.0)	口縁部は横ナデ、他は縦刷毛・磨滅、底はナデ	ナデ	淡褐色	2㎜以下の長石粒、3㎜以下の石英を含む	良好	残存：1/3
69	82	Ⅱ	122	X-7-N	小鉢	5.2	(7.4)	(4.8)	ナデ	ナデ	淡褐色	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/ 2
69	83	Ⅱ	122	X-7-N	小鉢	5.7	(12.0)	(5.8)	磨き、底部は削り	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/3 底部を含む内外面に丹塗り
69	84	Ⅱ	122	W-7-N	碗	9.4	(14.6)	5.5	体上半部は縦刷毛、他はナデ	ナデ・磨滅著しい、底部は指圧痕	淡褐色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	やや良好	残存：1/2　内底部にくぼみが生じるが調整痕なし
69	85	Ⅱ	122	W-7-N	鉢	8.2	(9.2)	(7.0)	ナデ	ナデ	茶褐色	精良、3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：口縁部 1/4 胴部 4/5 底部 1/5
69	86	Ⅱ	122	W-7-N	鉢	7.6	16.1	—	口縁端部はナデ、他は磨き、底面は磨滅	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	欠損：口縁部 1/3　内外面とも丹塗り
69	87	Ⅱ	122	X-7-N	鉢	5.2	12.2	6.0	口縁部は横ナデ、他は不明・磨滅	口縁部は横ナデ、他はナデ、底部は指圧痕	淡灰褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 7.5㎜以下）多く混じる	良好	残存：1/8　外面磨滅著しい 内外面全体に丹塗りの痕跡か
69	88	Ⅱ	122	W-7-N	鉢	7.4	12.4	4.3	磨滅	磨滅	淡褐色	やや不良、3㎜以下の石英・長石粒を含む	良	ほぼ完形
69	89	Ⅱ	122	W-7-N	鉢	9.1	(17.2)	(6.4)	口縁部と底面はナデ、他は縦刷毛・磨滅	ナデ	暗褐色	良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：口縁部 1/3 底部 1/3
69	90	Ⅱ	122	W-7-N	鉢	8.2	(19.0)	(8.4)	口縁部はナデ、他は磨滅著しく調整不明	ナデ	薄褐色	精良、2㎜以下の長石粒、4㎜以下の石英を含む	良好	残存：1/5　外面に黒斑あり
69	91	Ⅱ	122	X-7-N	鉢	15.7	15.2	6.35	口縁部は横ナデ、他は縦刷毛、底面はナデ	口縁部は横ナデ、他はナデ	内：褐色 外：淡明褐色～褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 4.5㎜以下）比較的多く混じる	良好	外面口縁部に煤付着　内面底部付近に炭化物付着
69	92	Ⅱ	122	X-7-N	高台付坏	11.5	6.6	4.6	上下の端部は横ナデ、坏部はヘラ状工具による斜めナデ、脚部はヘラ磨き	坏部は板状工具木口による横ナデ、裾上部はヘラ状工具ナデ、下部はヘラ状工具横ナデ	淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的多く混じる	良好	欠損：1/2　丹塗りは坏身の内外と高台外面
70	93	Ⅱ	122	X-7-N 下層	高坏	15.3	15.8	—	刷毛目、他はナデ	坏部はナデか（工具痕）、脚部は絞り	内：淡褐色 外：薄褐色	良、3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	欠損：坏部 2/3
70	94	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	7.7	24.7	—	磨き	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	坏部ほぼ完形　内外面に丹塗り
70	95	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	9.2	(25.2)	—	磨き	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：坏部 2/5　全面丹塗り
70	96	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	9.0	(31.8)	—	磨き	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：坏部 1/3　全面丹塗り
70	97	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	6.5	(24.4)	—	磨き（磨滅）	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	全面丹塗り
70	98	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	7.9	(26.8)	—	磨き	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：坏部 1/3　全面丹塗り
70	99	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	7.3	(15.8)	—	口縁部はナデ、他は縦刷毛のち磨き	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：坏部 1/3　全面丹塗り
70	100	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	18.8	23.7	—	磨き	坏部は磨き、脚部は絞り、口縁部と裾部はナデ	内：明褐色 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	欠損：1/3　坏部全面・外側脚部に丹塗り
70	101	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	11.5	13.7	—	磨き	磨き、脚部は絞り	内：淡褐色 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	脚部欠損　脚部内側を除き他全面丹塗り
70	102	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	8.6	(30.0)	—	磨き	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：坏部 1/3　全面丹塗り
70	103	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	32.0	34.0	24.0	坏部はヘラ磨き、裾部は横ヘラ磨き	坏部は横ヘラ磨き、裾部は指ナデ・板状工具ナデ（圧痕）・ナデか（磨滅）	内：淡明褐色 外：淡灰褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）少なく混じる	良好	欠損：1/2　脚部内面以外は全面丹塗り　脚部中位は磨滅・剝離著しい

表 17　52 次土器群 122 出土土器観察表（2）

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
70	104	Ⅱ	122	W-7-N	高坏	7.1	25.8	—	磨き・磨滅	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	欠損：口縁部 1/3 坏身 1/4
70	105	Ⅱ	122	X-7-N	高坏	13.0	(32.5)	—	磨き	磨き	内：丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：坏部 1/3　全面丹塗り
70	106	Ⅱ	122	X-7-N 下層	高坏 脚部	26.8	—	18.9	磨き	絞り、裾部はナデ	内：明褐色 外：丹塗り	やや精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	欠損：脚部 1/3 2 条の突帯 外側裾部端部まで丹塗り
71	107	Ⅱ	122	X-7-N	器台	18.0	10.6	9.0	上下端部は横ナデ、他は縦刷毛、裾部は指圧痕	上下端部は横ナデ、他は縦方向のナデ（圧痕）	明褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 6㎜以下）多く混じる	良好	欠損：口縁部 1/2　外面は磨滅
71	108	Ⅱ	122	X-7-N	器台	16.7	12.8	9.6	上下端部は横ナデ、他は細かい縦刷毛・磨滅	上下端部は横ナデ、他はヘラ絞り、裾部は指圧痕	淡褐色～淡灰褐色	砂粒（石英・長石ともに 2.5㎜以下）多く混じる	良好	欠損：口縁部 3/4 裾部端 1/3 外面全体の 1/2 は磨滅
71	109	Ⅱ	122	X-7-N	器台	15.85	10.4	—	上下端部は横ナデ，他は縦ナデ（圧痕）	ヘラ状工具による絞り	淡明褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的多く混じる	良好	ほぼ完形（裾部一部が欠損）全体に磨滅
71	110	Ⅱ	122	X-7-N	器台	14.8	10.5	—	上下端部は横ナデ、上部は刷毛目のちナデ消し、下部は縦刷毛	上下端部は横ナデ、上部はナデか、他はヘラ絞り	明褐色～淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 2.5㎜以下）多く混じる　金雲母わずかに混じる	良好	欠損：口縁部 1/5
71	111	Ⅱ	122	X-7-N	器台	14.3	9.7	9.8	上下端部は横ナデ、受部はヘラ状工具の横ナデ、他は強い縦ナデ	上下端部は横ナデ、他は不明	内：褐色～淡褐色， 外：暗褐色～淡灰褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 3㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：口縁部～裾部 1/2　内面は剥離著しい
71	112	Ⅱ	122	W-7-N	器台	16.8	(10.7)	12.6	上下の端部はナデ，他はヘラ削りのちナデ	受上部は指圧痕、他は指絞り	淡褐色	3㎜以下の石英，2㎜以下の長石粒を含む	良好	欠損：口縁部・胴部 1/2　裾部に接合痕
71	113	Ⅱ	122	X-7-N	器台	14.7	10.75	11.0	上下端部は横ナ、他は縦刷毛	上下端部は横ナデ、他は横ナデ	明褐色～淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 4.5㎜以下）多量に混じる	良好	欠損：口縁部 1/8
71	114	Ⅱ	122	X-7-N	器台	14.8	8.4	9.8	上下端部は横ナデ、上部は刷毛目のち横ナデ消し、下部は縦刷毛、裾部は指圧痕	上下端部は横ナデ、上部は剥離とナデ、裾部はナデ・横刷毛	褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 3㎜以下）多く混じる	良好	残存：口縁部 1/8
71	115	Ⅱ	122	W-7-N	器台	10.6	(6.9)	8.5	ナデ	剥離	内：白褐色 外：茶褐色	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含み，金雲母を多量に含む	良好	欠損：口縁部 3/5
71	116	Ⅱ	122	X-7-N	器台	11.15	9.1	9.7	受端部は指圧痕、上部と底面はナデ、裾部は指圧痕	横ナデ・剥離	淡褐色～褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）多く混じる	良好	欠損：口縁部 1/2　剥離：内面の口縁部～胴部全体　外面器表の 1/2 磨滅
71	117	Ⅱ	122	W-7-N	支脚	11.0	—	(12.6)	受部と裾部はナデ、他は縦刷毛	ナデ	内：暗褐色 外：明褐色	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/2
71	118	Ⅱ	122	X-7-N	把手付土器	19.2	—	—	把手部は指ナデ、他は磨き	ナデ	薄黒褐色	精良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/8　半島系軟質土器

表 18　52 次土器群 124 出土土器観察表

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
72	119	Ⅱ	124	W-7-N	壺	13.3	30.6	—	口縁部上面は横ヘラ磨き、頸部は縦ヘラ暗文状文様が等間隔で全周巡る	口縁部は横ナデ・ナデ、頸部は指ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を若干含む	普通	口縁部残存：7/8　内側口縁部直下から外側丹塗り　縦ヘラ暗文状の文様が等間隔で巡る
72	120	Ⅱ	124	W-7-N	壺	16.8	27.7	—	口縁端部は刻み目、口縁部上面は磨き、頸部は暗文	ナデ	内：口縁部丹塗り 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石を含む	良好	外面は磨滅が著しい　つまみ径 :7.2cm
72	121	Ⅱ	124	W-7-N	甕	29.6	(24.0)	—	ナデ	ナデ	内：淡褐色 外：淡褐色	良、2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	外面胴部に黒斑あり
72	122	Ⅱ	124	W-7-N	鉢	16.1	24.9	6.2	口縁部はナデ、他は磨滅	研き	内：丹塗り 外：丹塗りか	精良、4㎜以下の石英、3㎜以下の長石含む	良好	外面は磨滅が著しい 丹塗りの可能性あり
72	123	Ⅱ	124	W-7-N	壺	(9.0)	12.0	—	口縁部は磨き、頸部には暗文	ナデ	内：淡褐色 外：丹塗り	精良、2㎜以下の石英・長石含む	良好	—
72	124	Ⅱ	124	W-7-N	壺	10.5	13.0	—	口縁部はナデ、他は細かい刷毛目	ナデ（爪痕か）	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	口縁部残存：1/3　体部内側に人の爪痕か
72	125	Ⅱ	124	W-7-N	蓋	9.6	(22.6)	—	頂部は横ナデ、他は刷毛目	ナデ	内：淡褐色 外：淡褐色	精良、3㎜以下の石英・長石を含む	良好	外面に磨滅あり
72	126	Ⅱ	124	W-7-N	甕	14.5	(24.0)	—	口縁部上面はナデ・磨滅，口縁部は横ナデ、他は縦刷毛・磨滅	口縁部は横ナデ、他は器面の磨滅著しい	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含み，2㎜以下の橙色粒を若干含む	普通	口縁部残存：1/5　外面胴部の磨滅著しい
72	127	Ⅱ	124	W-7-N	鉢	16.1	(22.8)	7.0	口縁部上面は磨滅、他はヘラ磨きか	横ヘラ磨きか（磨滅あり）	橙色	精緻　2㎜以下の白色粒を若干含み，3㎜以下の橙色粒も多く含む	やや軟	外底部を除き全面丹塗り
72	128	Ⅱ	124	W-7-N	鉢	18.7	(26.4)	8.4	口縁部は横ナデ、体部は粗い刷毛目	口縁部は横ナデ、他はナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：2/3　底部に径 1.8cm の焼成後の穿孔
73	129	Ⅱ	124	W-7-N	甕	33.5	14.2	—	口縁部は磨滅（縦刷毛・横ナデか）、体部上面は縦刷毛、下部はナデ	口縁部は雑な横刷毛，他は斜め刷毛・縦方向の指ナデ	鈍い黄橙色～橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を多く含む	良	残存：5/6
73	130	Ⅱ	124	W-7-N	甕	34.5	23.0	—	口縁部は縦刷毛，他は縦刷毛、一部に平行叩き	口縁部は横刷毛・ナデけし、頸部は横刷毛，他は斜め刷毛	浅黄橙色～鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含み，2㎜以下の橙色粒を含み，2㎜以下の角閃石も混じる	良好	残存：5/6　丹塗りか
73	131	Ⅱ	124	W-7-N	甕	約 24.6	約 15.0	—	口縁部から体部下部は縦刷毛、底部付近はナデ	口縁部は横刷毛，体部は横・斜め刷毛、底部付近は削り	橙色～鈍い黄橙色	5㎜以下の石英・長石粒・褐色粒・橙色粒を含む	良	残存：7/8　土師器
73	132	Ⅱ	124	W-7-N	壺	18.0	11.2		口縁部は縦刷毛、頸部はナデ消し、体部は刷毛目、底部付近はナデ	口縁部は粗い斜め刷毛、体部は粗い横刷毛、底部付近はナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	口縁部が 1/4 欠損する
73	133	Ⅱ	124	W-8-S	高坏	7.7	(25.8)	—	口縁部はナデ、他は磨滅	研き	内：赤色顔料 外：赤色顔料	精良、2㎜以下の石英・長石を含む	良好	残存：2/5
73	134	Ⅱ	124	W-7-N	支脚	8.8	4.7	12.8	ナデ	裾部は横ナデ	内：黒褐色 外：鈍い褐色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：3/4
73	135	Ⅱ	124	W-7-N	ミニチュア土器	6.6	(9.0)	(4.0)	ナデ	ナデ	鈍い橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良	残存：1/4　底部を除き全面丹塗り
73	136	Ⅱ	124	W-7-N	器台	18.2	10.8	11.6	口縁部は横ナデ、胴部は刷毛目，底部は横ナデ	口縁部は横ナデ，胴部は指ナデ、裾部は指圧痕	内：淡褐色 外：淡褐色	良、2㎜以下の石英・長石を含む	良好	—
73	137	Ⅱ	124	W-7-N	甕	8.3	15.4	—	口縁部は縦刷毛、他は平行叩き	口縁部上面は凹み、口縁部は斜め刷毛，他は縦方向の板ナデ	内：鈍い黄褐色 外：黒色	4㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	外側口縁部から胴部にかけて煤付着
73	138	Ⅱ	124	W-7-N	鉢	10.0	(22.4)	5.0	口縁部はナデ、他は粗い刷毛目	口縁内部に縦の刻目、他は粗い刷毛目	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	外側口縁部～内側全体に丹塗り
73	139	Ⅱ	124	W-7-N	器台	9.6	8.1	9.1	口縁部・底部は横ナデ	口縁部・底部は横ナデ、胴部は絞り、指圧痕、ナデとなる	内：薄褐色 外：明褐色	普通、2㎜以下の石英・長石を含む	良好	残存：1/3
73	140	Ⅱ	124	W-7-N 下層	蓋	2.85	(8.3)	—	ヘラ状工具によるナデ	口縁部は横ナデ、天井部はナデ	内：灰黒色 外：灰色	1㎜以下の石英，1.5㎜以下の長石、比較的少なく含む	良好	口縁～天井部 3/4 欠損、朝鮮半島系土器？
73	141	Ⅱ	124	W-7-N	支脚	13.4	約 5.0	約 9.7	指押さえ・ナデ	指押さえ	内：橙色 外：灰白色	2㎜以下の石英・長石粒・金雲母多く，1㎜以下の黒色粒を少量，微粒の赤色粒子を若干含む	普通	残存：縦 1/2　シカの線刻 受部に焼成前の四角い孔

表 19　52 次土器群 125 出土土器観察表（1）

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
74	142	Ⅱ	125	V-7-N	壺	11.9	22.0	—	口縁端部は刻み目、頸部は全周に暗文風の縦ヘラ磨き、肩部は横ナデ・縦ヘラ磨きか	口縁部上面は磨滅、口縁部は横ナデ、頸部は横刷毛・ナデ消し、体部はナデ・指押さえ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を含む	普通	残存：1/5　口縁部上面から外側肩部にかけて丹塗り　内側の頸部まで丹塗りか
74	143	Ⅱ	125	V-8-S	壺	7.2	(20.6)	—	磨滅	磨滅	鈍い橙色～鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母・赤色粒を含む	やや軟	口縁部残存：1/2 弱
74	144	Ⅱ	125	V-7- N	壺	10.9	(30.6)	—	口縁端部は横ナデ、頸部は縦方向の暗文がめぐる	ナデ・磨滅	鈍い黄橙色	精緻　1㎜以下の白色粒を若干含む	普通	口縁部残存：1/5　内外面丹塗り
74	145	Ⅱ	125	V-7-N	壺	11.6	14.2	—	口縁部は横ナデ，他は磨滅	横ナデ・ナデ	鈍い黄橙色	精緻　1㎜以下の石英・長石粒を若干含む	やや軟	残存：1/3　頸部に焼成前の穿孔２カ所あり　外側から内側胴部上位まで丹塗り
74	146	Ⅱ	125	V-7-N	蓋	1.8	0.7 つまみ	8.9	不明	ナデ	鈍い黄橙色	精緻　白色微粒を若干含む	普通	残存：1/2　外面丹塗り　焼成前の穿孔が２カ所
74	147	Ⅱ	124	W-8-S	鉢	8.0	(9.1)	5.6	ナデ	口縁部から体中部は横ナデ、底部付近はナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：3/4
74	148	Ⅱ	124	W-7-N	ミニチュア土器	5.3	—	3.2	ナデ	ナデ	灰黄褐色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良	残存：1/2　外側体部に丹塗
74	149	Ⅱ	125	V-7-N	壺	24.5	9.4	(6.0)	口縁部は横ナデ、頸部は指押さえ・刷毛目、他は細かい刷毛目	口縁部は横ナデ、体上部はナデ、中部から下部は板ナデ、底部はナデ	鈍い黄橙色～灰黄褐色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良好	残存：5/6　内側口縁部～底部を除く外側に丹塗り
74	150	Ⅱ	125	V-7-N	壺	11.5	(10.8)	—	口縁部は横ナデ、他はナデ	口縁部は横ナデ、他はナデ・指押さえ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良	残存：上半部 1/3 外面および内側口縁部は丹塗り
74	151	Ⅱ	125	V-7-N	壺	8.4	21.0	—	袋状口縁部は磨滅、他は細かい縦刷毛	袋状口縁部は磨滅，他は横ナデ・横刷毛	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含み，微粒の黒色粒・赤色粒・雲母を少量含む	不良	口縁部残存：1/4　磨滅著しい　丹塗りの僅かな痕跡
74	152	Ⅱ	125	V-7-N	壺	33.4	(15.2)	8.5	口縁部はナデ、他は粗い縦刷毛、底面は削り	ナデ	淡褐色	5㎜以下の石英，2㎜以下の長石粒を含む　砂粒はやや多い	良好	残存：1/3　口縁部下に接合痕
74	153	Ⅱ	125	V-7-N	壺	20.0	34.5	—	口縁部は磨滅、頸部は縦刷毛・磨滅，突帯部は横ナデ	口縁部は磨滅、頸部は斜め刷毛・磨滅、他は磨滅	明褐色	3㎜以下の石英、5㎜以下の長石を含む	良好	欠損：胴部～底部
75	154	Ⅱ	125	V-7-N	甕	19.0	30.0	—	口縁部から体上部は横ナデ、他は縦ナデか	口縁部は横ナデ、他はナデ	内：灰黄褐色 外：鈍い黄褐色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/3　外側は二次焼成で黒い
75	155	Ⅱ	125	V-7-N	甕	7.6	31.4	—	磨滅	横ナデ	灰白色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	普通	口縁部残存：1/6
75	156	Ⅱ	125	V-8-S	甕	3.4	(23.2)	—	口縁端部は幅狭の横刷毛、他は横ナデ・磨滅	横ナデ・ナデ	鈍い黄橙色	1㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	口縁部残存：1/4　外来系土器か
75	157	Ⅱ	125	V-7-N	蓋	10.2	5.6 つまみ	(24.2)	頂部はナデ、他は縦刷毛	ナデ、裾部は横ナデ	鈍い橙色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含み，微粒の赤色粒を若干含む	良好	残存：1/3　内面に斑に二次焼成の痕跡あり 外面は丹塗りか
75	158	Ⅱ	125	V-7-N	蓋	8.0	6.0	26.4	頂部はナデ、縦刷毛・磨滅・ナデ、裾部は横ナデ	体部はナデ、裾部は指押さえ	内：鈍い黄橙色 外：橙色	2㎜以下の石英･長石粒･黒色粒･雲母を含む	良好	残存：2/3　外側は裾部端部まで丹塗り
75	159	Ⅱ	125	V-8-S	甕	15.3	27.0	—	口縁部は横ナデ、他はナデ・磨滅	口縁部は横ナデ、他はナデ・磨滅	黄橙色～鈍い褐色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	残存：1/4
75	160	Ⅱ	125	V-7-N	甕	7.9	(18.0)	—	口縁部は横ナデ、他は横ナデ？磨滅	横ナデ・ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	残存：1/4　外側は丹塗りか？磨滅著しい
75	161	Ⅱ	125	V-7-N	甕 （窓付き）	(29.0)	(21.6)	(9.1)	口縁部は横ナデ、他は縦･斜めの刷毛のちナデ消しか	口縁部は横ナデ・横刷毛、頸部は横ナデ、体上部はナデ・指押さえ、中部から下部は横ナデ・指押さえ、底部付近は横ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	焼成前に形成されたの楕円形の窓あり
75	162	Ⅱ	125	V-7-N	甕 （窓付き）	—	—	—	ナデ	横ナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・黒色粒を含む	普通	やや楕円形の窓か
75	163	Ⅱ	125	V-8-S	甕 （窓付き）	—	20.4	—	口縁部は横ナデ、他はナデ	口縁部から頸部は横ナデ、他はナデ・指押さえ	鈍い黄橙色	1㎜以下の石英･長石粒･赤色粒･雲母を含む	良好	焼成前に形成された楕円形の窓あり　窓下に工具痕あり（窓を造る時か）
75	164	Ⅱ	125	V-7-N	甕	19.5	(36.4)	—	口縁部は横ナデ、他は縦刷毛	口縁部は横ナデ、他はナデ	薄褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	刷毛幅 1.7㎝刷毛目幅 0.15㎝
75	165	Ⅱ	125	V-7-N	甕	21.0	(31.0)	—	ナデか	ナデ	内：淡褐色 外：濃褐色	良　3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	外面は剥離著しい　黒斑あり　煤付着
76	166	Ⅱ	125	W-7-N	鉢	5.6	(17.8)	—	口縁部はぶよぶよとした粘土紐状、他は粗い刷毛	ナデ	内：灰褐色 外：灰黄褐色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/8　後期無文土器系？　口縁部に粘土紐を貼り付ける半島系か
76	167	Ⅱ	125	V-7-N	壺	3.0	—	—	横ナデか	ナデ・削り	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	口縁部小片　外側口縁部は凹線ではなく横ナデ痕か・煤付着かやや黒い
76	168	Ⅱ	125	W-7-N	甕	5.4	19.4	—	口縁部は磨滅、肩部は縦刷毛・磨滅	口縁部は磨滅、肩部は削り	内：鈍い黄橙色 外：鈍い橙色	3㎜以下の石英・長石粒多く，1㎜以下の黒色粒・橙色粒を極少含む	軟	口縁部には凹線らしき浅い線痕あり 土師器
76	169	Ⅱ	125	V-7-N	甕	11.4	(34.4)	—	口縁部は横刷毛?、他は縦刷毛・横・斜め刷毛	口縁部は横ナデ、他はヘラ削り	鈍い黄橙色～橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含み，2㎜以下の黒色粒・橙色粒を少量含む	普通	口縁部残存：1/6　外側口縁部から胴部にかけて丹塗り 外来系土器か
76	170	Ⅱ	125	V-7-N	甕	27.6	(16.2)	(6.0)	口縁部は斜めの刷毛、体上部は縦刷毛、中部は叩き・ナデか、下部から底部はナデ	口縁部は横刷毛、他は斜めの細かい刷毛、底部はナデ	内：灰黄褐色 外：鈍い黄褐色	1㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	外面全体に煤付着
76	171	Ⅱ	125	V-8-S	甕	9.2	16.6	—	縦刷毛・磨滅	口縁部は横刷毛、他はナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良	口縁部残存：1/4　外側に煤付着
76	172	Ⅱ	124	W-7-N	甕	36.6	(34.4)	—	口縁端部に不規則な歪んだ刻み，口縁部から頸部は斜め刷毛・横ナデのち縦刷毛・横ナデ・ナデ消しや縦刷毛、突帯部は横ナデ、他は斜め刷毛	口縁部は横刷毛、他は斜め刷毛	鈍い黄橙色～灰黄褐色	6㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：上半部 1/2　外側体部に煤付着
76	173	Ⅱ	125	V-7-N	甕	18.5	(17.4)	—	口縁部は横刷毛、他は刷毛目・磨滅	口縁部は磨滅、他は斜め刷毛・磨滅	橙色～鈍い橙色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含み，2㎜以下の橙色粒を若干含む	普通	残存：1/3
76	174	Ⅱ	125	V-7-N	甕	4.2	—	—	ナデ	ナデ	灰色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 3.5㎜以下）比較的多く混じる　灰色～暗灰色を呈する	良好	残存：底部 1/4 弱　外底はやや丸みをもつ　底部と胴部の境は不明瞭　須恵質土器？
76	175	Ⅱ	125	V-7-N	鉢	18.5	(23.4)	9.5	口縁部はナデ、他は粗い刷毛目	口縁部は磨滅、体上部は指押さえ，他は指ナデ・指押さえ	鈍い黄橙色	5㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	普通	残存：3/4　底部に焼成前の歪みのある穿孔
76	176	Ⅱ	125	V-7-N	鉢	12.7	(21.6)	7.8	口縁部に凹線痕、胴部上位は磨滅、下位は縦ヘラ･ナデ消し・磨滅	口縁部から胴部にかけて磨滅、底部は指押さえ	鈍い黄橙色	6㎜以下の石英・長石粒を多く含む	普通	残存：1/4　外側は胴部下位に丹塗り、内側は不明

表 20　52 次土器群 125 出土土器観察表（2）

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
76	177	Ⅱ	125	V-7-N	鉢	13.7	(24.6)	9.0	刷毛目・磨滅	口縁部は乱雑な横刷毛・磨滅、体部は磨滅、部下部は指ナデ、底部は棒状のもので押し叩く	灰黄褐色	5㎜以下の石英・長石粒を多く含み，1㎜以下の橙色粒を少量，角閃石を極少含む	普通か やや軟	残存：4/5　底部に棒状のもので押し叩いた痕あり
77	178	Ⅱ	125	V-7-N	高坏	12.0	28.5	—	口縁部上面磨きか、口縁端部は横ナデ、他は磨き	口縁部は横ナデ、他は磨きか、脚部は絞り	内：丹塗り 外：丹塗り	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：坏部はほぼ完形
77	179	Ⅱ	125	V-7-N	高坏	7.0	32.0	—	ナデ・磨滅	磨滅	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含み，1㎜以下の黒石粒・赤色粒を極少含む	普通	口縁部残存：1/10
77	180	Ⅱ	125	V-7-N	高坏	8.3	(32.2)	—	ナデ	ナデ・磨滅	橙色～浅黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒多く含み，1㎜以下の赤色粒を少量含む	良	坏部残存：1/5 内外面丹塗り
77	181	Ⅱ	125	V-7-N	高坏	11.9	12.6	(4.8)	口縁部付近は刷毛目・磨滅、他は磨滅著しい	横ナデ、裾部はナデ	明黄褐色～鈍い黄橙色	1㎜以下の石英・長石粒を含む	軟	ほぼ完形（裾部やや欠損）
77	182	Ⅱ	125	V-7-N	高坏（脚台部）	8.1	—	12.6	坏部から頸中部は刷毛、頸部はナデ・ナデ消し、裾部は刷毛	ナデ	鈍い黄橙色	細かい　1㎜以下の白色粒を含む	やや軟	残存：2/3　裾部に穿孔3カ所あり
77	183	Ⅱ	125	V-7-N	壺	7.8	5.6	—	口縁部は指押さえ・ナデ、他はナデ・刷毛のちナデ消し	口縁部は指押さえ、他は指押さえ・ナデ	灰黄褐色	5㎜以下の石英・長石粒を多く含み，1㎜以下の赤色粒・黒色粒を若干含む	普通	上半部全周あり　手捏ね　全体的にぶよぶよ
77	184	Ⅱ	125	V-7-N	鉢	12.4	18.2	—	横・斜めの刷毛、底部付近はナデ・ナデスリ	口縁部は横ナデ、他は斜め刷毛	鈍い橙色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：7/8 底部には焼成前の穿孔
77	185	Ⅱ	125	V-7-N	鉢	9.4	(18.2)	—	粗い刷毛目	口縁部は横ナデ、他はナデ	鈍い黄橙色	精緻　3㎜以下の石英・長石粒を含む	良	残存：5/6　外側体部にかすかな丹の痕跡、底部には焼成前に丁寧に長方形の穿孔を施す
77	186	Ⅱ	125	V-7-N	鉢か支脚	6.0	13.2	6.0	口縁部は横ナデ，他はナデ	口縁部は横ナデ、他は指ナデ	鈍い黄橙色	7㎜以下の石英・長石粒を含む	良	完形、天地逆で支脚か
77	187	Ⅱ	125	V-8-S	台付鉢	10.2	(16.4)	7.8	口縁端部は横刷毛，体上部は縦・斜め刷毛のちナデ消し、中部から下部は縦刷毛、台部はナデ・指押さえ	色々な方向の細かい・粗い刷毛調整、底部付近はナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	普通	残存：2/3
77	188	Ⅱ	125	V-8-S	ミニチュア土器	3.5	—	2.0	刷毛目のちナデ消し	指押さえ・ナデ	橙色	1㎜以下の石英･長石粒･黒色粒･雲母を含む	良	残存：5/6　上げ底
77	189	Ⅱ	125	V-7-N	鉢（手捏ね）	7.6	—	1.7	口縁部は指押さえ、他は板ナデ	指ナデ	灰黄色	精緻　1㎜以下の白色粒を若干含む	良好	口縁部は全周欠損する
77	190	Ⅱ	124	W-7-N	ミニチュア土器	約 5.0	約 9.2	約 2.5	ナデ	ナデ	黒色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	残存：1/2 弱 口縁部には焼成前に施された穿孔が二カ所にある
77	191	Ⅱ	124	W-8-S	ミニチュア土器	4.2	(9.2)	(3.4)	ナデ	指押さえ・ナデ	鈍い黄橙色	1㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	残存：1/2 弱　外底は若干上げ底となる
77	192	Ⅱ	125	V-7-N	ミニチュア土器	4.0	9.6	6.6	横ナデ、底部付近はナデ	口縁部は横ナデ・指押さえ、体中部からナデか刷毛	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・微粒の黒色粒・雲母を含む	良好	残存：2/3　底部に意識的な穿孔か
77	193	Ⅱ	124	W-7-N	ミニチュア土器	6.0	7.6	2.5	ナデ・指押さえ	口縁部は指押さえ、他は板工具による横・斜めナデ、指押さえ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	ほぼ完形（口縁部が若干欠）
77	194	Ⅱ	125	V-7-N	ミニチュア土器	4.9	(10.1)	7.0	口縁部～底部ナデ	上部はナデ・指押さえ、下部から底部は削り	灰黄色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良	残存：1/2
77	195	Ⅱ	125	V-7-N	支脚	7.0	3.0	9.4	受部から上部はナデ、他は細かい横・斜め刷毛	ナデ	灰色～橙色	5㎜以下の石英・長石粒を多く，1㎜以下の褐色粒を若干含む	やや軟	残存：2/3
77	196	Ⅱ	125	V-7-N	支脚	6.8	4.2	9.2	受部はナデ（一部刷毛）、上部は指押さえ、他はナデ	ナデ	橙色～鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	ほぼ完形（裾部やや欠損）　受部は円形でなくぶよぶよした形
77	197	Ⅱ	125	V-7-N	支脚	8.3	5.5	10.6	縦刷毛、裾部は横刷毛	受部は棒状工具で強く押し、他はナデ、裾部は横ナデ・指押さえ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・黒色粒を含む	良好	ほぼ完形（裾部やや欠損）　頂部は器表が剥がれたようにざらざら
77	198	Ⅱ	125	V-7-N	支脚	6.4	4.8	10.1	ナデ、裾部は若干の刷毛目	縦方向の板ナデ、裾部は横ナデ	内：黒色 外：黒～灰黄褐色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	残存：2/3　粗雑な造り
77	199	Ⅱ	125	V-7-N	支脚か鉢	7.0	7.3	13.8	受部はナデ，上部は縦刷毛・ナデ消し、中部はナデ、裾部は横ナデ	ナデ、裾部は横ナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	良	完形　粗雑な造り　鉢か
77	200	Ⅱ	125	V-7-N	支脚か鉢	8.0	6.2	12.7	ナデ	指押さえ・ナデ	鈍い黄橙色～明黄褐色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良	完形品　粗雑な造り　鉢か
77	201	Ⅱ	125	V-7-N	支脚（器台）	(8.0)	(8.5)	(9.0)	指押さえ・ナデ	ナデ・剥離	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母・黒色粒を含む	良好	残存：1/2
77	202	Ⅱ	125	V-7-N	支脚	12.0	10.3	10.9	指押さえ・ナデ・刷毛	指ナデ	灰黄褐色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良	ほぼ完形（裾部やや欠損）
77	203	Ⅱ	125	V-7-N	支脚	7.0	—	7.1	指押さえ・ナデ		橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を多量に含む	良	上半部欠損
77	204	Ⅱ	124	W-7-N	支脚	8.3	3.6	7.4	ナデ	裾部付近は横板ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	ほぼ完形（裾部が若干欠）
77	205	Ⅱ	125	V-7-N	器台	21.0	13.6	15.4	口縁、底部の端部はナデ、他は縦刷毛	口縁部は刷毛目、胴部は絞り，胴部下位は刷毛目、裾部はナデ	明褐色	良　4㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	完形　器表の刷毛目幅 1.4cm 9本
77	206	Ⅱ	125	V-7-N	支脚	11.9	—	7.6	指押さえ・ナデ	剥離	橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を多く含む	普通	残存：1/2 弱
77	207	Ⅱ	125	V-8-S	支脚	10.7	6.3	7.7	指ナデ	ナデ	鈍い黄橙色	5㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：裾部 1/2 欠損
77	208	Ⅱ	125	V-7-N	支脚	10.5	5.8	(9.8)	頂部は刷毛目、他はナデ･磨滅	ナデ・磨滅	鈍い黄褐色～鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・黒色粒を含む	普通	残存：2/3
77	209	Ⅱ	125	V-8-S	支脚	13.7	—	9.0～10.7	ナデ、裾部は刷毛目、底の端部は横ナデ	受上部は調整なし、中部はナデ、裾部は斜め・横刷毛	薄赤褐色	細かい粘土　石英・長石粒を少量含む	良好	受頂部に孔

表 21　52 次土器群 127 出土土器観察表

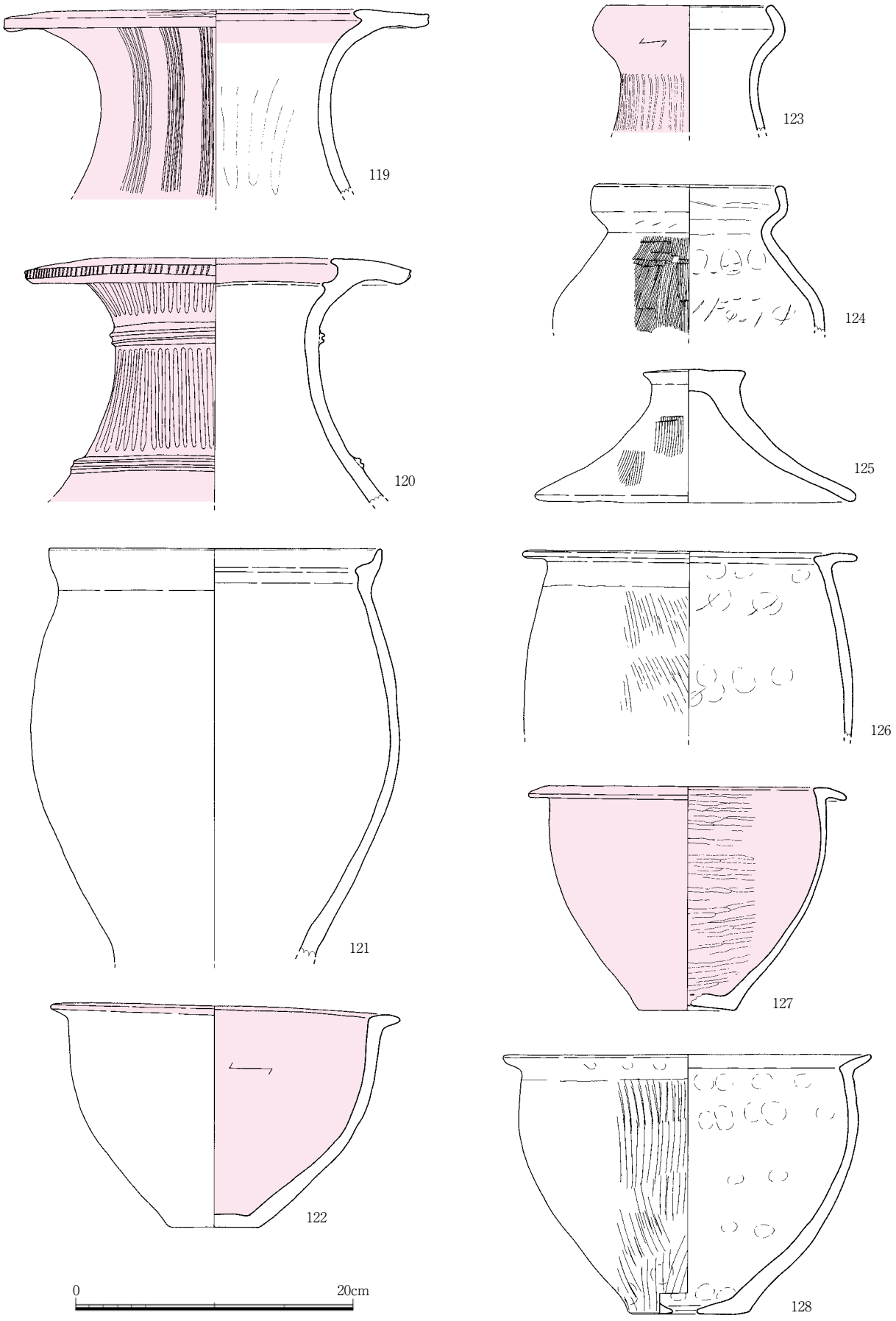
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
78	210	Ⅱ	127	V-8-N	壺	8.6	(19.2)	—	横ナデ	横ナデ・磨滅	鈍い黄橙色	4㎜以下の石英・長石粒を多量に含む	不良	口頸部残存
78	211	Ⅱ	127	V-8-S	壺	3.5	—	—	磨滅	ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良	小片 内側に三角突帯・丹塗り 外来系か
78	212	Ⅱ	127	V-8-N	壺	12.5	(20.0)	—	磨滅著しい	磨滅	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	軟	残存：上半部 1/3
78	213	Ⅱ	127	V-8-N	壺	8.7	(18.6)	—	口縁部は粗い横刷毛、頸部は粗い刷毛か磨滅	横ナデ（頸部はヘラ磨きか、磨滅著しく不明）	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良好	口縁部残存：2/3　丹塗り
78	214	Ⅱ	127	U-8-S	鉢	5.9	—	—	縦ヘラ磨き・横ヘラ磨き	指押さえ・ナデ	灰黄褐色	2㎜以下の石英・長石粒を若干含む	良好	外面と内面口縁部には丹塗り 穿孔あり
78	215	Ⅱ	127	V-8-S	壺	8.5	(39.2)	—	口縁部は横ナデ、頸部は細かい縦刷毛	口縁部は横刷毛・横ナデ・斜めの刷毛、頸部は横刷毛・斜めの刷毛	浅黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を若干含む	良好	口縁部残存：1/3
78	216	Ⅱ	127	U-8-S	蓋	1.9	(10.4)	0.3	縦ヘラ磨きか	ナデ	鈍い黄橙色	精緻　1㎜以下の石英・長石粒を若干含む	普通	残存：1/4　外側丹塗り 穿孔あり 頂部に凹み
78	217	Ⅱ	127	U-8-S	壺	5.7	9.2	—	横ヘラ磨きか	横ナデ	鈍い黄橙色	1㎜以下の石英・長石粒・雲母を若干含む	良	残存：1/3　口縁部上面と外面は丹塗り　口縁部上面に 2 カ所穿孔あり
78	218	Ⅱ	127	V-8-S	甕	7.3	(29.4)	—	口縁部上面は横ナデ、他は磨滅	口縁部は横ナデ，他は磨滅	橙色	2㎜以下の石英･長石粒･赤色粒･雲母を含む	軟	口縁部残存：1/5
78	219	Ⅱ	127	V-8-S	甕	19.7	(17.2)	8.0	磨滅	ナデ・磨滅	橙色	3㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を多く含む	普通	残存：3/4　磨滅著しい　底部はやや膨らむ
78	220	Ⅱ	127	U-8-S	甕	—	—	—	縦刷毛	指押さえ・ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	丹塗り痕跡あり 焼成前の穿孔あり
78	221	Ⅱ	127	U-8-S	甕	15.5	(22.6)	—	口縁部は縦刷毛のち横ナデ、他は平行叩き	口縁部は粗く粗雑な刷毛，他は横刷毛・指押さえ、体中部はナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒，1㎜以下の赤色粒を含む	普通	残存：上半部 1/3　外面全体に煤付着
78	222	Ⅱ	127	U-8-S	甕	31.7	21.1	2.0	口縁部は縦刷毛，他は叩き，底部は磨滅	口縁部は横刷毛、他は斜め刷毛	橙色～鈍い橙色	2㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を含む	良好	胴上半部 1/3 欠損　外面の口縁部から体下部に煤付着
78	223	Ⅱ	127	V-8-S	甕	7.6	18.0	—	口縁部は横刷毛・磨滅、頸部は横ナデ、他は刷毛目・ナデ	口縁部はナデ，他は削り	内：鈍い黄橙色， 外：黒褐色～灰黄褐色	3㎜以下の石英・長石粒を多く，2㎜以下の褐色粒を少量含む	やや軟	口縁部残存：1/9　煤付着 外来系土器
78	224	Ⅱ	127	U-8-S	甕	10.7	(18.8)	—	口縁部～肩部は横ナデ、体部は横刷毛、一部意図的な調整痕	口縁部は横ナデ、頸部はナデ、他は削り	浅黄橙色	微粒の白色粒を若干含み，5㎜以下の橙色粒子を若干混じる	良好	外面全体に煤付着　肩部は「＜」形に意図的に調整か
78	225	Ⅱ	127	U-8-S	甕	15.5	(14.0)	2.0	口縁部から体中部は縦刷毛、体下部は削り・板削り、底部は横刷毛	口縁部は刷毛、体部は斜めの刷毛、底部付近はナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	良	残存：口縁部はほぼ欠損，他は全周あり　外面の肩部から体下部に煤付着
78	226	Ⅱ	127	V-8-N	甕	4.2	—	6.0	平行叩きを全周めぐらす	指ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：底部全周あり　底部は外側に張り出す（円形粘土を貼り付けたか）
79	227	Ⅱ	127	U-8-S	高坏	6.4	17.0	—	口縁部上面は横ナデ、他は磨滅	磨滅	にぶい黄橙色～橙色	2㎜以下の石英･長石粒･黒色粒･雲母を含む	不良	残存：坏部 1/4
79	228	Ⅱ	127	U-8-S	高坏	11.5	22.6	—	口縁部は縦刷毛のち横ナデか、他は横ナデ・ナデ	口縁部は横ナデ・横ヘラ磨きか、他はナデ	淡黄色～浅黄色	精緻　3㎜以下の赤色粒を若干含む	やや軟	残存：坏部 7/8
79	229	Ⅱ	127	V-8-N	高坏	7.6	—	—	磨滅	ナデ	鈍い黄橙色	精緻　3㎜以下の石英・長石粒・雲母・黒色粒を含む。	普通～やや軟	外側丹塗り高坏の裾部か 縦に 2 カ所穿孔 祭祀用か
79	230	Ⅱ	127	V-8-S	高坏	21.2	29.0	15.6	坏部は斜めの刷毛のちナデ消し、脚部は縦刷毛かヘラナデ（磨滅）、裾部は刷毛・磨滅	坏部は横刷毛・磨滅、脚部は削り、裾部はナデ・磨滅・横刷毛	灰白色～浅黄色	2㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を多く含む	やや軟	残存：8/9　丹塗りの可能性 裾部に 3 カ所穿孔あり
79	231	Ⅱ	127	U-8-S	高坏	12.8	(11.0)	9.2	坏部はナデ、脚部はナデ・磨滅、裾部は縦刷毛・磨滅	坏部はナデ・磨滅、脚部は削り、裾部はナデ	浅黄色	精緻　1㎜以下の白色粒・赤色粒・褐色粒を若干含む	軟	残存：1/2 強　裾部に丹塗り 痕跡あり 歪み
79	232	Ⅱ	127	V-8-S	鉢	8.4	(14.3)	5.9	ナデ	口縁部～胴部中位は指押さえ、他は板ナデ、底はナデ	鈍い橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良	残存：1/2 強
79	233	Ⅱ	127	V-8-N	鉢	3.8	(16.0)	—	ヘラ磨きか磨滅	ヘラ磨きか	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良	内外面丹塗り
79	234	Ⅱ	127	V-8-S	鉢	5.9	(24.0)	—	口縁部は指押さえ，他はナデ	口縁部はナデ・指押さえ，他はナデ	橙色	4㎜以下の石英･長石粒･黒色粒･赤色粒を含み，7㎜大の大きな赤色粒もひとつ混じる	普通	口縁部残存：1/4
79	235	Ⅱ	127	V-8-S	支脚	8.7	3.3	9.6	ナデ・磨滅	ナデ・細かい刷毛	鈍い橙色	5㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を若干含む	普通	ほぼ完形（やや欠損）
79	236	Ⅱ	127	U-8-S	ミニチュア土器	4.0	8.8	1.0	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	にぶい黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を含む	良	ほぼ完形（口縁部やや欠損）
79	237	Ⅱ	127	V-8-N	鉢	5.3	10.6	3.0	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含む	普通	完形
79	238	Ⅱ	127	U-8-S	鉢	13.2	—	7.0	ナデ・指ナデか	指ナデ	内：橙色 外：浅黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・褐色粒を含む	良好	底部に焼成前の穿孔あり
79	239	Ⅱ	127	U-8-S	器台	17.5	13.3	15.0	受部は横刷毛、他は縦刷毛	受部はナデ、体中部は横ナデ、下部から裾部は横刷毛	灰黄褐色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良好	完形（上端部少々欠損）
79	240	Ⅱ	127	V-8-S	支脚	16.2	11.2	(11.0)		横ナデ・指ナデ	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を多く含む	良	残存：3/4
79	241	Ⅱ	127	V-8-S	支脚	9.1	5.6	9.9	受部から中部はナデ、裾部にかけ工具痕あり	ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	裾部 1/4 欠損

表 22　52 次土器群 128 出土土器観察表

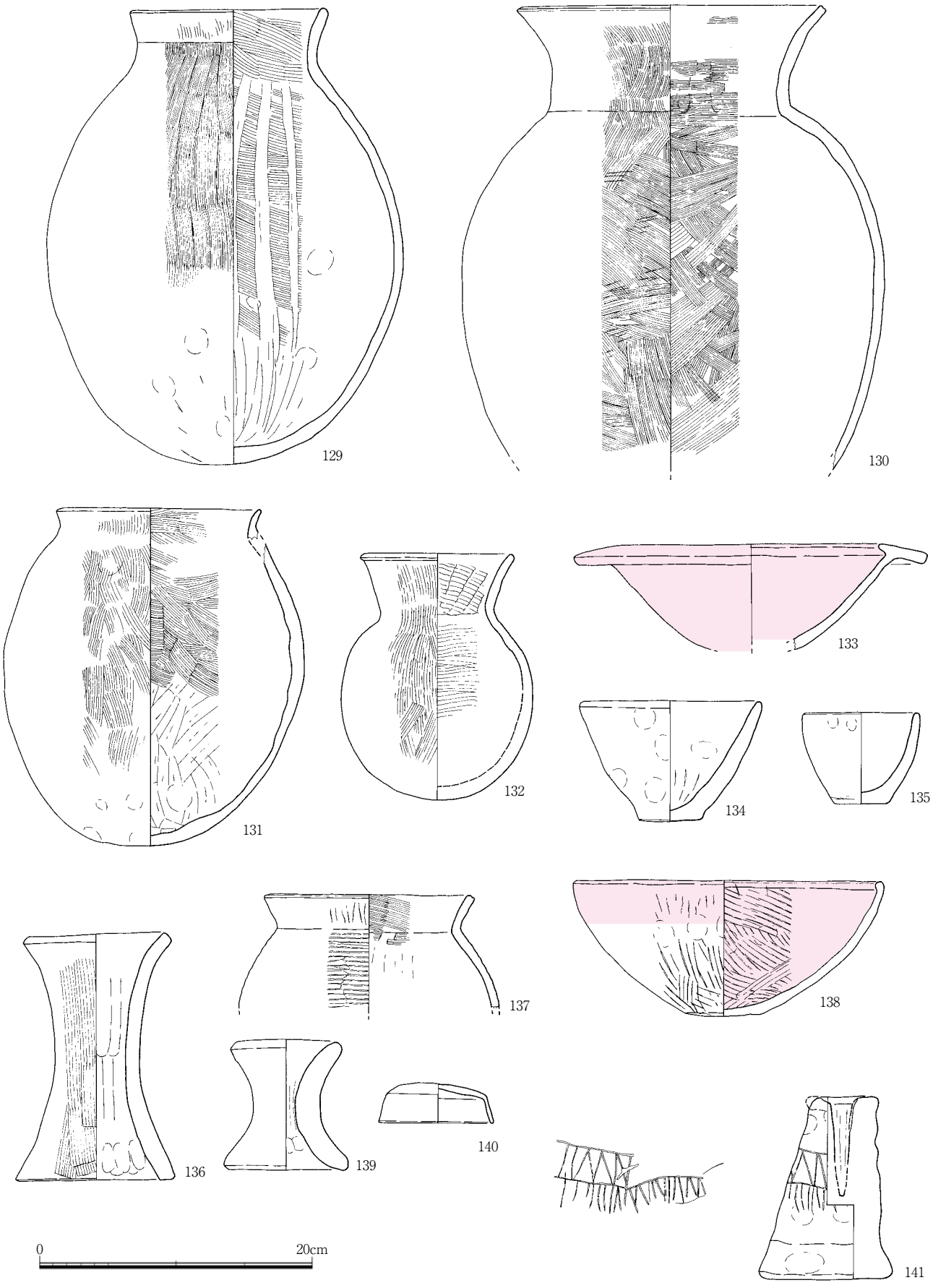
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
80	242	Ⅱ	128	U-8-N	壺	10.0	12.3	—	口縁部は磨き、突帯部はナデ、頸部は暗文	口縁部はナデ、頸部は絞り	内：丹塗り 外：丹塗り	精良　3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	内外面丹塗あり
80	243	Ⅱ	128	U-8-N	壺	6.3	(13.0)	—	口縁部は磨き、突帯は横ナデ，胴部は暗文	横ナデ	内：淡褐色 外：丹塗り	精良　2㎜以下の長石，4㎜以下の石英粒と雲母を含む	良好	外面は丹塗り　内面口縁部付近に丹塗り
80	244	Ⅱ	128	U-9-S	壺	—	(14.2)	—	磨きか	ナデ	内：丹塗り 外：丹塗り	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	内外面に丹塗あり
80	245	Ⅱ	128	U-8-S	高坏	6.5	(13.8)	—	口縁部は横ナデ，他は磨き	口縁部は横ナデ，他はナデ	淡褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	外側は黒斑の上に丹塗りを施す
80	246	Ⅱ	128	U-8-N	蓋	2.8	(16.7)	—	磨きか（磨滅）	磨きか（磨滅）	丹塗り	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：4/5　内外面に丹塗り　外面に黒斑　穿孔 4 カ所のうち 3 カ所残存
80	247	Ⅱ	128	U-9-S	壺	14.7	(13.8)	6.0	口縁部はナデ，他は磨きか、底は削り	ナデ	内：淡褐色 外：丹塗り	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	丹塗り　黒斑の上に丹塗りか
80	248	Ⅱ	128	U-8-N	壺	32.1	(21.7)	9.0	口縁部は横ナデ、他はナデ・磨滅，底部は縦刷毛	ナデ・磨滅、工具痕あり	鈍い黄橙色	4㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：8/9
80	249	Ⅱ	128	U-9-S	壺	—	—	—	口縁部はヘラ磨き、頸上部は暗文のち横ヘラ磨き，頸部は暗文、他は横ヘラ磨き、底面は板状工具によるナデか	口縁部はヘラ磨き，頸部はナデ・指押さえ、他はナデ、底部は指圧痕・ナデ	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 3㎜以下）少量混じる	良好	欠損：口縁部 1/4 胴部 4/5 丹塗りは外面全体（底面のぞく）と内面上半部　頸部暗文は縦 19 本と一群に 4 カ所
80	250	Ⅱ	128	U-8-N	壺	45.0	(24.7)	9.0	口縁部上面・突帯部は横ナデ、頸部・底はナデ、他は斜め刷毛・磨滅	ナデ、胴部下位は板状工具木口の圧痕	薄褐色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	欠損：口縁部胴部各 1/3　外面突帯下まで丹塗り　外面黒斑あり
80	251	Ⅱ	128	U-8-N	甕	21.7	(19.6)	—	口縁部は斜め刷毛のちナデ消し、頸部は横ナデ、体部は縦刷毛（磨滅）	口縁上部はナデ、頸部は斜め刷毛、体部は粗い刷毛と細かい刷毛	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良好	残存：上半部 1/4　樽型土器
81	252	Ⅱ	128	U-8-N	蓋	8.8	8.2 つまみ	(25.0)	頂部はナデ・横ナデ，体部は板状工具ナデ、裾部は横ナデ	天井部は絞り、他はナデ	淡褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	
81	253	Ⅱ	128	U-9-S	蓋	7.0	—	21.6	頂部上面はナデ、頂部側面と裾部は横ナデ、体上部は指圧痕、他は縦刷毛のちナデ消し（刷毛目痕残る）	ヘラ状工具による横方向のナデ（圧痕あり）、裾部は横ナデ	内：灰褐色 外：暗褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 3.5㎜以下）多く混じる	良好	欠損：口縁部 1/2　全体的に磨滅　内面の砂粒は左から右
81	254	Ⅱ	128	U-9-S	蓋	7.7	—	19.0	頂部上面はナデ、頂部側面と裾部は横ナデ、体上部は指圧痕、他はヘラ状工具による縦ナデを横方向に粗いナデが消す	頂部はナデ、他はヘラ状工具による横ナデ（圧痕あり）、裾部は横ナデ	褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 3.5㎜以下）比較的多く混じる。	良好	欠損：口縁部 3/4　全体に磨滅　内面の砂粒は右から左へ動く
81	255	Ⅱ	128	U-8-N	鉢	23.7	35.7	8.9	口縁部は磨き、他は縦刷毛のち磨き、底面は板状工具によるナデ	磨き	淡褐色	3㎜以下の石英，2㎜以下の長石粒を含む　砂粒は少ない	良好	ほぼ完形　丹塗り（内側全面と外面口縁部）　外面胴部下位まで丹塗り垂れる
81	256	Ⅱ	128	U-9-S	甑	20.55	24.8	—	口縁部は横ナデ，他は縦刷毛（磨滅）接合痕もあり、底面はナデ	口縁部は横ナデ、直下は強い指圧痕，他はナデ（斜めナデの痕跡）、底部は横ナデ（接合痕も）	淡灰褐色	砂粒（石英 4㎜以下・長石 6.5㎜以下）比較的多く混じる	良好	欠損：口縁部～胴部 2/3　底部の穿孔は丁寧に焼成前に内底部は三角形状で接合痕
81	257	Ⅱ	128	U-8-N	鉢	13.7	(22.8)	7.4	頸部は横ナデ・磨滅、体部中位は縦刷毛、体部下位（底部付近）は指押さえ	口縁部は横刷毛か横ナデ、他は指押さえ・ナデ（磨滅）	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を多く含む	良	残存：3/4　あまり丁寧なつくりでないが丹塗り（外面の口縁部から底部の底まで）
81	258	Ⅱ	128	U-8-N	鉢	13.9	14.7	7.3	口縁部は指ナデ、他は縦刷毛・磨滅、底部はナデ	口縁部は板状工具によるナデ、胴部は底部ナデ後の工具引き揚げ時の斜め刷毛か，底部付近は板状工具によるナデ	淡褐色	1㎜以下の石英・長石粒を少量含む	良好	ほぼ完形　外底部は内側にくぼむ
81	259	Ⅱ	128	U-8-N	甕	34.3	24.6	8.4	口縁部は横ナデ、他は粗い雑な刷毛目	横ナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を含む	良好	口縁部 1/2 欠損 丁寧なつくりではないが外面と内面 1/4 に丹塗り 外面頸部から底部にかけ煤付着？祭祀用か
81	260	Ⅱ	128	U-8-N	鉢	13.4	(17.9)	(5.4)	口縁部は横ナデ、他は磨滅、底部はナデ	口縁部はナデ，他は板状工具ナデ	淡褐色	良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	
81	261	Ⅱ	128	U-9-S	高坏	23.2	(28.0)	18.0	坏部口縁上面は横ナデか（磨滅）、他はヘラ磨きか（磨滅）、裾部は横ナデ	坏部はヘラ磨き・磨滅、裾部は横ナデ・磨滅	鈍い橙色	2㎜以下の石英・長石粒・褐色粒を含む	良好	口縁部 1/2 欠損　裾部内側上位部を除き全面丹塗り
81	262	Ⅱ	128	U-8-N	鉢	10.1	15.9	—	口縁端部は横ナデ、口縁部は斜め刷毛目・磨滅、胴部下位は削り、	板状工具木口によるナデ	内：濃褐色 外：暗褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	外側に煤，内側には炭化物付着
81	263	Ⅱ	128	U-9-S	鉢	10.5	(20.7)	—	口縁部は刷毛のちナデ、他は斜め刷毛・磨滅、下半部は磨滅	ナデ	内：暗褐色 外：明褐色	やや不良　4㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	
81	264	Ⅱ	128	U-8-N	器台	15.1	9.8	11.8	縦刷毛のちナデ消し	ナデ	鈍い橙色～鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良好	完形　外面丹塗り
81	265	Ⅱ	128	U-8-N	器台	9.5	7.7	9.2	上下の端部は横ナデ、他はナデ	上下の端部はナデ、他は絞り	淡褐色	普通　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	
81	266	Ⅱ	128	U-9-S	器台	19.3	13.6	(16.2)	横ナデ	横ナデ・指押さえ	橙色～鈍い黄橙色	4㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	裾部 1/2 欠損

表 23　52 次土器群 129 出土土器観察表

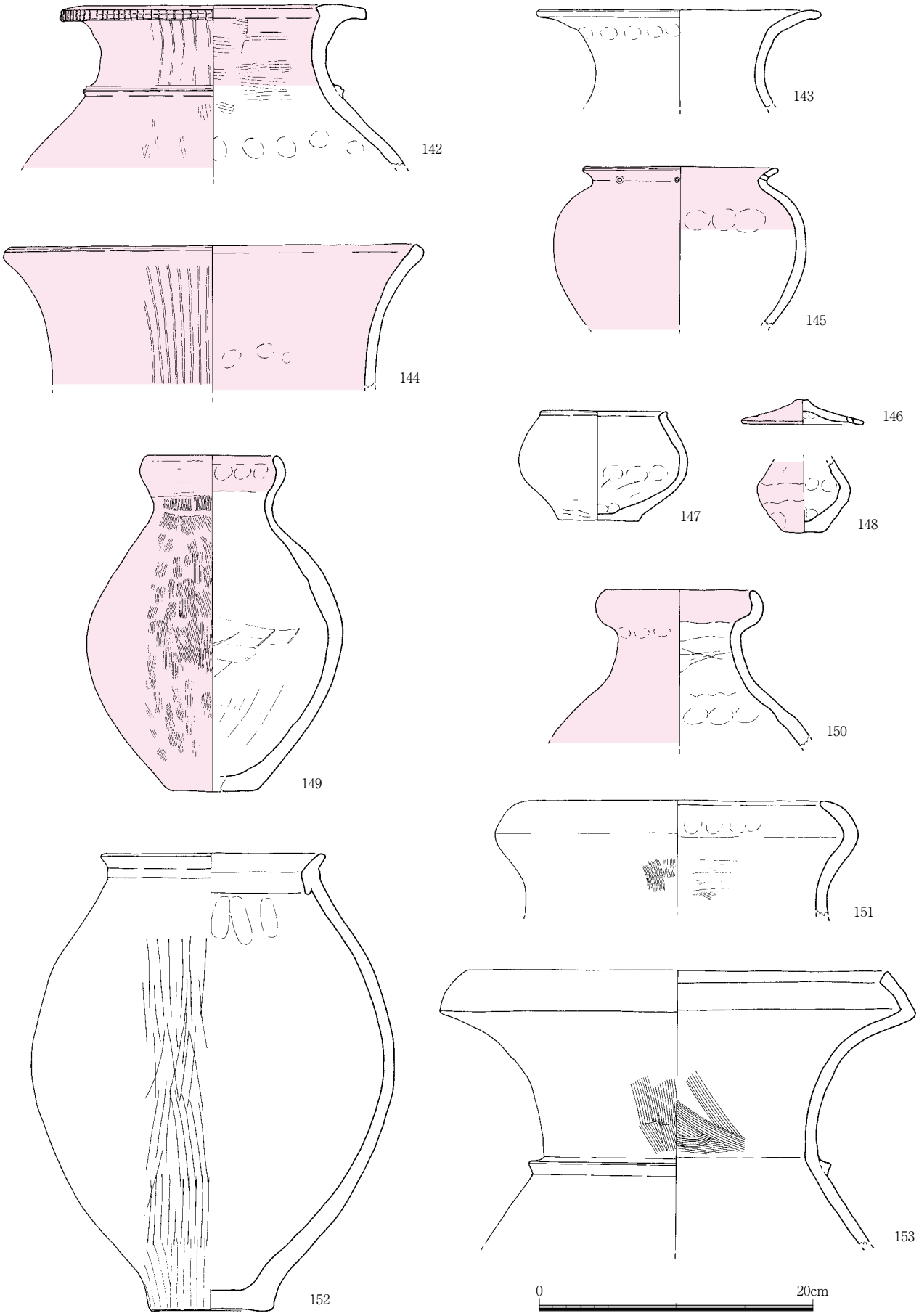
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
82	267	Ⅱ	129	U-8-S	壺	30.5	29.2	—	ナデ	ナデ	淡褐色	普通　4㎜以下の長石粒、5㎜以下の石英、砂粒はやや多い	良好	外面口縁部・胴部の一部、内面口縁部に丹塗り　外面胴部に黒斑
82	268	Ⅱ	129	U-8-N 下層	壺	35.0	24.5	8.0	口縁部上面はナデか、口縁端部には沈線が入り、頸部に縦方向の暗文、他はナデ・磨滅	口縁部は横ナデ、頸部はナデ､体部は板ナデか（工具痕あり）、底部付近は指押さえ	浅黄色～灰黄褐色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	やや軟	残存：2/3　丹塗りの痕跡が内側頸部～外側胴部全体にある　胴部下半部は黒っぽい（黒色顔料か二次焼成か）
82	269	Ⅱ	130	下層	壺	27.9	—	—	頸部には横ナデのち細い縦線を 10 ～ 13 本単位で施す、肩部には鉤状文､突帯付近は横ナデ、胴部下位はナデ	頸部はナデ、肩部～胴部中位は予備押さえ・ナデ､他はナデ	鈍い橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	普通	残存：5/6 肩部の残存部に粘土紐を貼り付けた鉤状文が 2 カ所にある
82	270	Ⅱ	129	U-8-S	壺	31.0	(24.2)	(10.8)	ナデ	口縁部直下～胴部下位は斜め刷毛目のちナデ、他はナデ	—	精良　4㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	欠損：胴部～底部 1/6 ～ 1/2 強
82	271	Ⅱ	129	U-8-S	壺	36.0	—	8.3	ナデ、底面は削り	ナデ	淡褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	
83	272	Ⅱ	129	U-8-S	壺	32.0	29.0	7.2	口縁端部に沈線，頸部は規則的な暗文、他は磨き、底は削り	ナデ	内：淡褐色 外：丹塗り	3㎜以下の長石粒、4㎜以下の石英、砂粒はやや少ない	良好	ほぼ完形　外側は底部を除き丹塗り
83	273	Ⅱ	130	V-7	壺	29.2	12.8	7.0	口縁部は横ナデ、頸部～肩部は暗文、他は横ヘラ磨き	口縁部は横ナデ、胴部中位は指押さえ、他はナデ	鈍い橙色～鈍い黄橙色	精緻　微粒の白色粒を若干含む	普通	残存 4/5　内側頸部～外側全体に丹塗りあり
83	274	Ⅱ	129	U-8-S	壺	34.9	13.2	7.9	口縁部は磨き、突帯部はナデ、頸部から肩部に暗文、下半部は磨き、底面は削り	全体にナデ、頸部は指ナデ	淡褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	外側は底部を除き丹塗り
83	275	Ⅱ	129	U-8-N 下層	二重口縁壺	35.9	17.4	—	口縁部・突帯部は横ナデ、平部から体中部は暗文､他はナデ	口縁部は横ナデ、頸部は横ナデ（工具圧痕）、体中部は爪・指圧痕とナデ、底部は指圧痕・ナデ上げ（圧痕あり）	淡灰褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 2㎜以下）少量混じる	良好	欠損：口縁部 2/3 胴部 1/2 内面胴部中位に指・爪の圧痕赤色顔料　外底はわずかに上げ底状
83	276	Ⅱ	129	U-8-N	蓋	2.1	2.1	(10.2)	ナデ	ナデ	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を含む	普通	残存：2/3　残存部に穿孔 1 カ所あり　頂部は凹む　外面丹塗り
83	277	Ⅱ	129	U-8-N	壺	9.5	(12.5)	5.0	横・斜めヘラ磨き	口縁部は横ヘラ磨き、体部上位は指ナデ後布状のもので縦方向にナデ、他は指押さえ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む，7㎜大の赤色粒・長石粒も見られる	普通	残存：3/4　内面頸部～外面胴部まで丹塗り　外底は凸凹あり（丹をはぎ取った痕跡か）
83	278	Ⅱ	129	U-8-N	鉢	13.6	(25.0)	6.4	口縁部は横ナデ、体上部にヘラ状工具痕、他はヘラ磨きか	横ヘラ磨き	鈍い黄橙色	精緻　微粒の白色粒・赤色粒を若干含む	普通	残存：3/4　内外面とも丹塗り（底部の底は丹を拭い取った痕跡あり）
84	279	Ⅱ	130	V-7-S	甕	31.0	(27.6)	7.8	口縁部上面～突帯は横ナデ、胴部は縦刷毛・剥離	口縁部は横ナデ、他はナデ・指ナデ	橙色	5㎜以下の石英・長石粒・赤色粒子を含む	普通	残存：3/4 底部には焼成後に穿孔（2.7 ～ 2.8cm）外側胴部下位に黒色を帯びた箇所あり
84	280	Ⅱ	129	U-8-S	甕	21.1	(16.6)	7.2	口縁部は横ナデ、他は横ヘラ磨き	口縁部は横ナデ、他はナデ	鈍い橙色～鈍い黄橙色	精緻　2㎜以下の石英・長石粒を若干含む	普通	残存：5/6　内側頸部～外側全体に丹塗り　外底の丹ははぎ取ったか
84	281	Ⅱ	129	U-8-S	壺	24.9	24.0	7.9	口縁部上面はナデ、頸部は縦刷毛のちナデ、他は刷毛目（磨滅）、底面は削り	ナデ	淡褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む　砂粒は少ない	良好	完形
84	282	Ⅱ	129	U-8-S	鉢	6.8	(13.4)	4.6	磨滅著しい	ヘラ磨きか	橙色	4㎜以下の石英･長石粒･赤色粒･雲母を含む	普通	残存：1/3　外底部を含めて内外全体に丹塗り
84	283	Ⅱ	129	U-8-S	鉢	7.9	(13.6)	5.7	口縁部は板状工具による横ナデ、体部下位は細かい縦刷毛・縦ナデ、底はナデ	横板ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：2/3
84	284	Ⅱ	129	U-8-N 下層	鉢	10.0	(18.6)	(4.2)	口縁部から体中部は横ナデ、他は斜めの板ナデか（磨滅）	ナデ・横ヘラか	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含み、2 ㎜以下の赤色粒・角閃石を少量含む	普通	残存：1/4　体中部に丹塗りの痕跡あり　口縁部内外は黒っぽい
84	285	Ⅱ	129	U-8-N	蓋	8.1	5.6	22.6	頂部はナデ、他は縦刷毛、裾部は横ナデ	不定方向の粗い刷毛、裾部は横ナデ	内：黒褐色～鈍い黄橙色 外：黒褐色～鈍い橙色～鈍いい赤褐色	1㎜以下の白色粒を多く、1㎜以下の黒色粒を若干含む	良好	ほぼ完形（裾部やや欠損）二次焼成の痕跡あり
84	286	Ⅱ	129	U-8-N 下層	高坏 坏部	12.2	22.0	—	口縁部上面は横ナデ，他は磨滅	口縁部は横ナデ，他はナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・褐色粒を多く含む	普通	残存：坏部のみ全周あり、口縁部上面～外面に丹塗り　内外面ともに黒っぽい痕跡あり
84	287	Ⅱ	129	U-8-S	甕	7.5	(24.8)	—	口縁部はナデ・磨滅、肩部はナデ・指押さえ	口縁部は横ナデ、肩部は指押さえ・ナデ	浅黄橙色	精緻　微粒の白色粒・赤色粒を少量含む	やや軟	焼成前に楕円形の穿孔窓を施す
84	288	Ⅱ	129	U-8-S	壺	17.8	16.2	5.9	口縁部と底部はナデ、他は縦刷毛	ナデ	淡褐色	3㎜以下の長石粒，2㎜以下の石英を含む　砂粒はやや多い	良好	
84	289	Ⅱ	129	U-8-S	甕	46.7	35.5	9.7	口縁部は横ナデ、他はナデ（磨滅）	口縁部は横ナデ、他はナデ（磨滅）、底部は指圧痕	淡褐色	5㎜以下の長石粒，6㎜以下の石英を含む　砂粒は多い	—	欠損：口縁部～胴部 1/3 ～ 1/4　外面に黒斑（15 × 9cm）あり　内外面とも磨滅著しい
85	290	Ⅱ	129	U-8-S 下層	鉢	5.8	8.8	4.6	口縁部は板横ナデ、他は指押さえ・ナデ	口縁部は粗い横ナデ、他は板横ナデ	灰黄褐色	7㎜以下の石英･長石粒･橙色流･雲母を含む	良好	ほぼ完形（口縁部が若干欠損）
85	291	Ⅱ	129	U-8-N	支脚	7.2	5.5	9.6	ナデ・磨滅	ナデ・磨滅	橙色	3㎜以下の石英･長石粒･赤色粒･褐色粒を多く含む	良	完形品
85	292	Ⅱ	129	U-8	ミニチュア土器	4.5	7.1	—	ナデ	ナデ	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母・赤色粒を多く含む	普通	残存：1/2
85	293	Ⅱ	129	U-8-S	ミニチュア土器	約 4.0	6.0	—	指押さえ・磨滅	指押さえ・磨滅	橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多量に含む	やや軟	残存：1/2
85	294	Ⅱ	130	V-7	甕	21.2	(13.5)	6.0	磨滅	磨滅	灰黄褐色	3㎜以下の石英・長石粒多く含む、1㎜以下の黒色粒を少量含む	やや軟	残存：5/6
85	295	Ⅱ	129	U-8-S 下層	壺	31.7	11.2	5.0	口縁部は縦刷毛のちナデ消し（磨滅）、体部は斜め方向の刷毛から縦刷毛・ナデ消し、底部付近はナデ	全体に横刷毛か、底部は指押さえ	鈍い黄橙色	4㎜以下の石英･長石粒･赤色粒･雲母を含む	普通	残存：3/4
85	296	Ⅱ	129	U-8-N	器台	18.5	9.6	(13.0)	受部は横ナデ、体部は縦刷毛のちナデ消し、裾部は粗い縦刷毛のちナデ消し	受部は横ナデ、裾部はナデ・指ナデ・指押さえ	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含み，4㎜以下の橙色粒子を含む	良	残存：3/4
85	297	Ⅱ	129	U-8-S	器台	16.6	10.5	12.5	縦刷毛・磨滅，裾部は磨滅著しい	磨滅	橙色～黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母・橙色粒子を含む	普通	残存：裾部 1/6
85	298	Ⅱ	129	U-8-S	器台	17.0	(10.2)	12.2	板ナデか	受部は横ナデ、裾部は板ナデ	橙色	1㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を含む	良	受部 1/3 欠損
85	299	Ⅱ	129	U-8-S	高坏	22.9	32.4	16.9	口縁端部は横ナデ、坏部は斜め刷毛のちナデ消し、脚部は縦刷毛、裾部は斜め刷毛	坏部は磨滅著しい、脚部はナデ、裾部は横・斜め刷毛目	淡褐色	2㎜以下の石英・長石粒を含む　砂粒は少ない	良好	ほぼ完形　裾部に 3 カ所穿孔あり



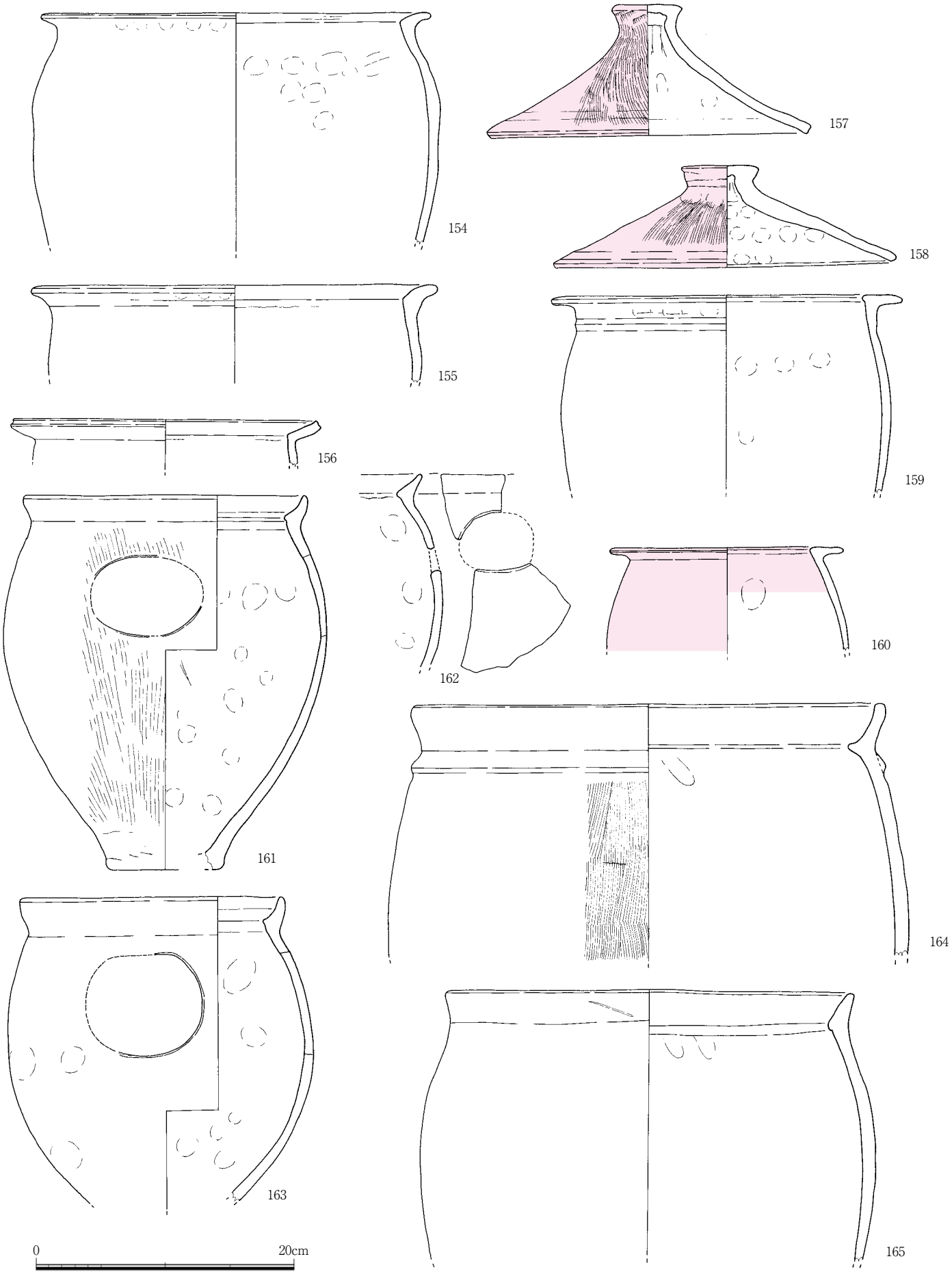
第 72 図　52 次土器群 124 出土土器実測図（1）［1/4］



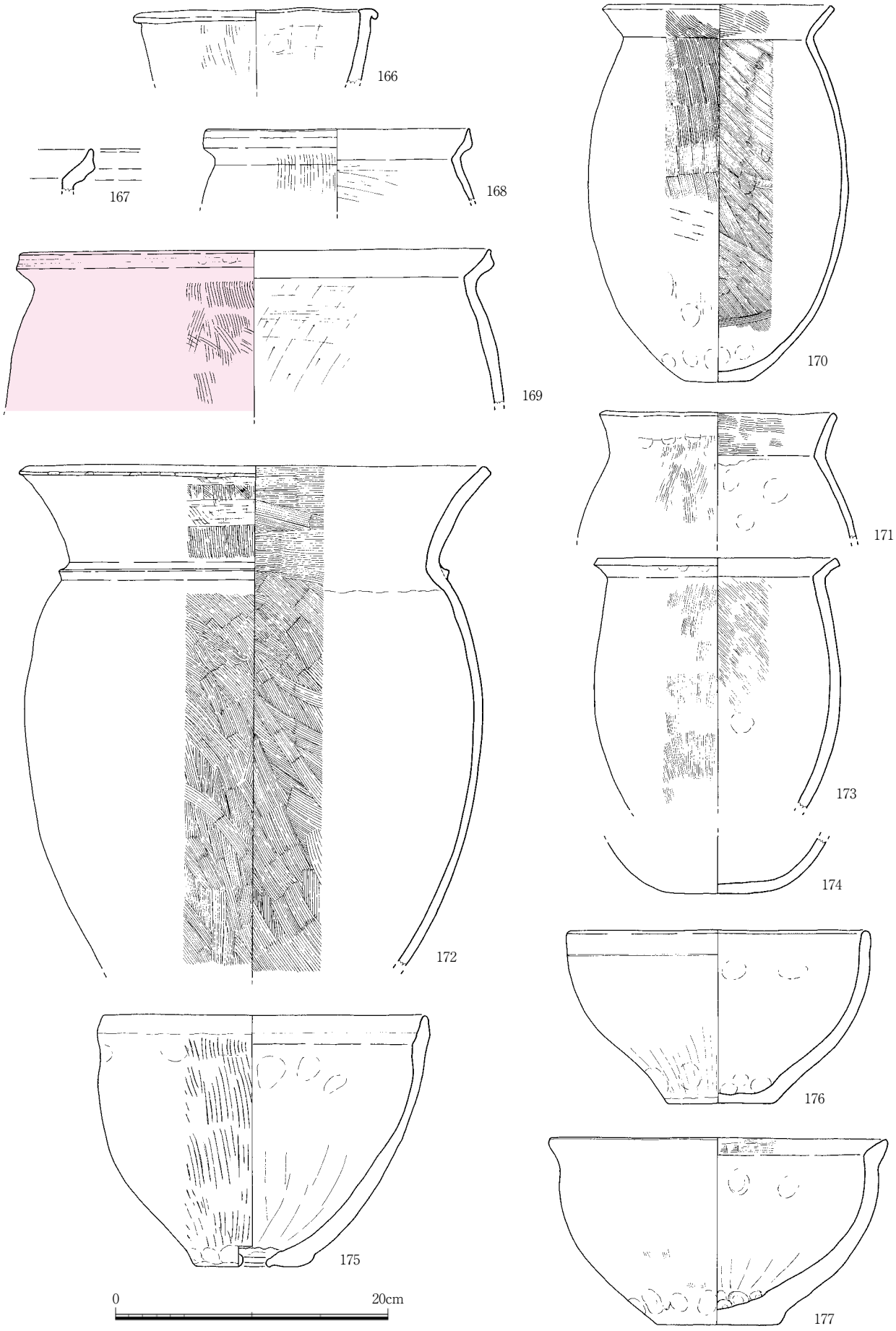
第 73 図　52 次土器群 124 出土土器実測図（2）［1/4］



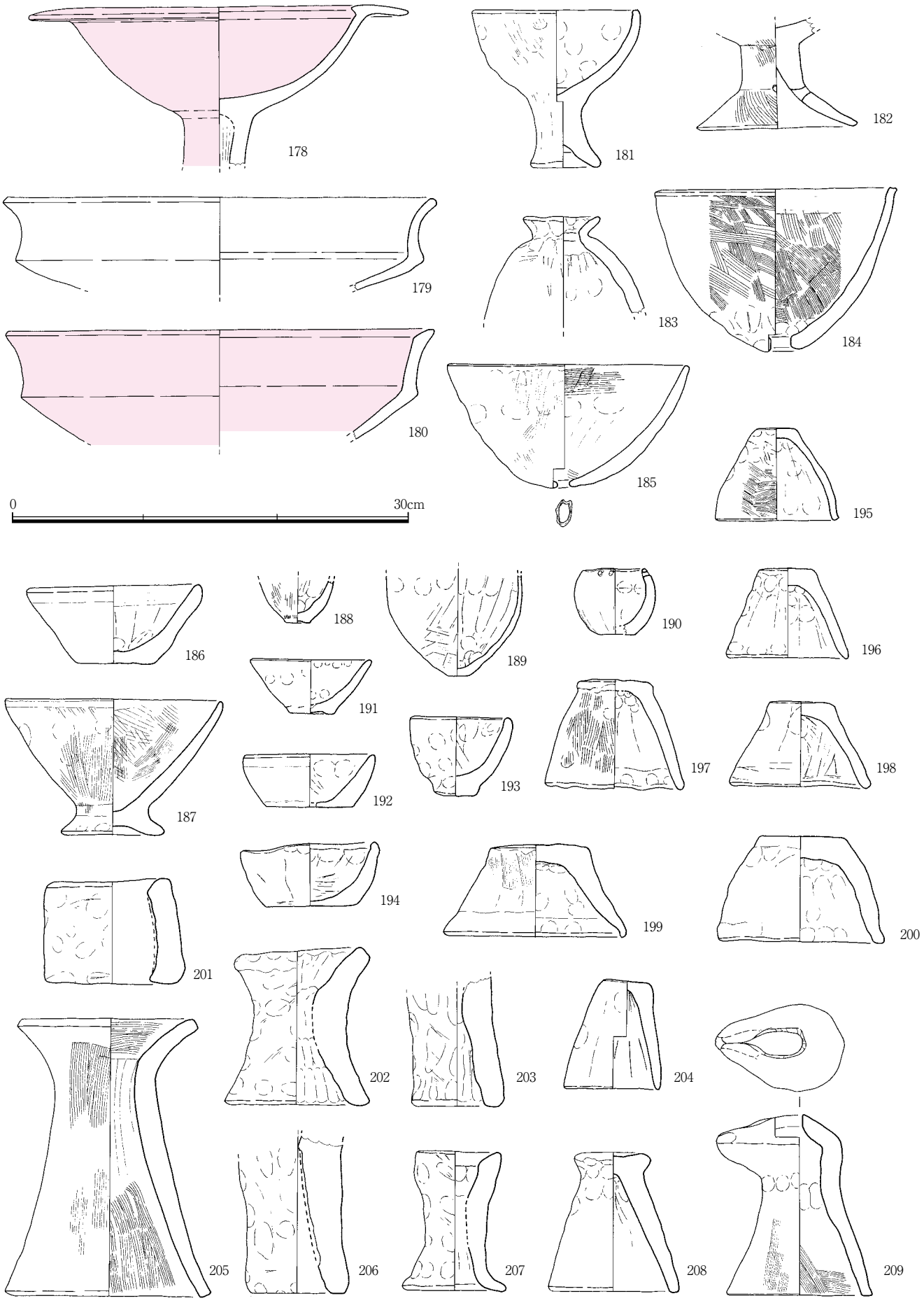
第 74 図　52 次土器群 125 出土土器実測図（1）［1/4］



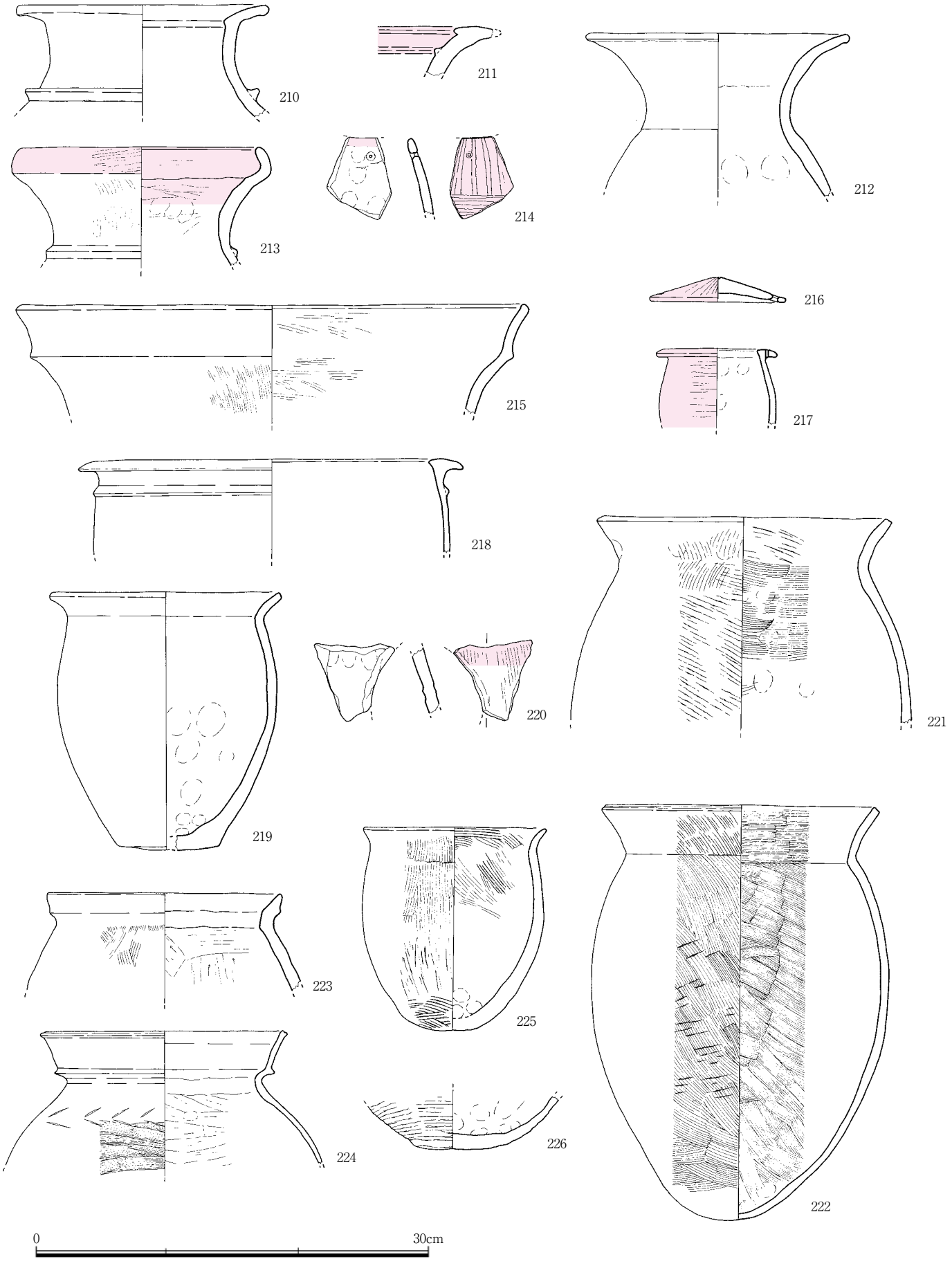
第 75 図　52 次土器群 125 出土土器実測図（2）［1/4］



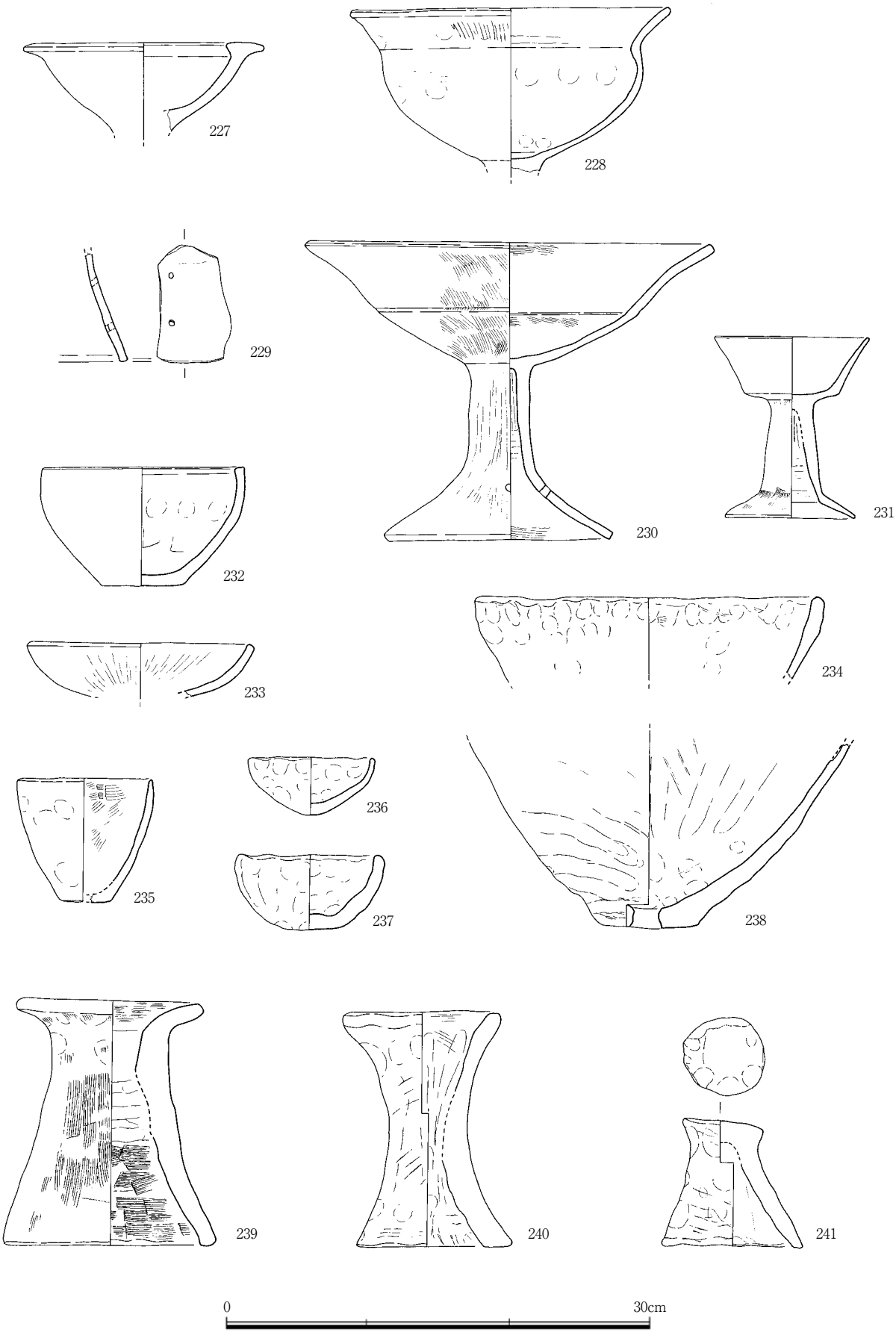
第 76 図　52 次土器群 125 出土土器実測図（3）［1/4］



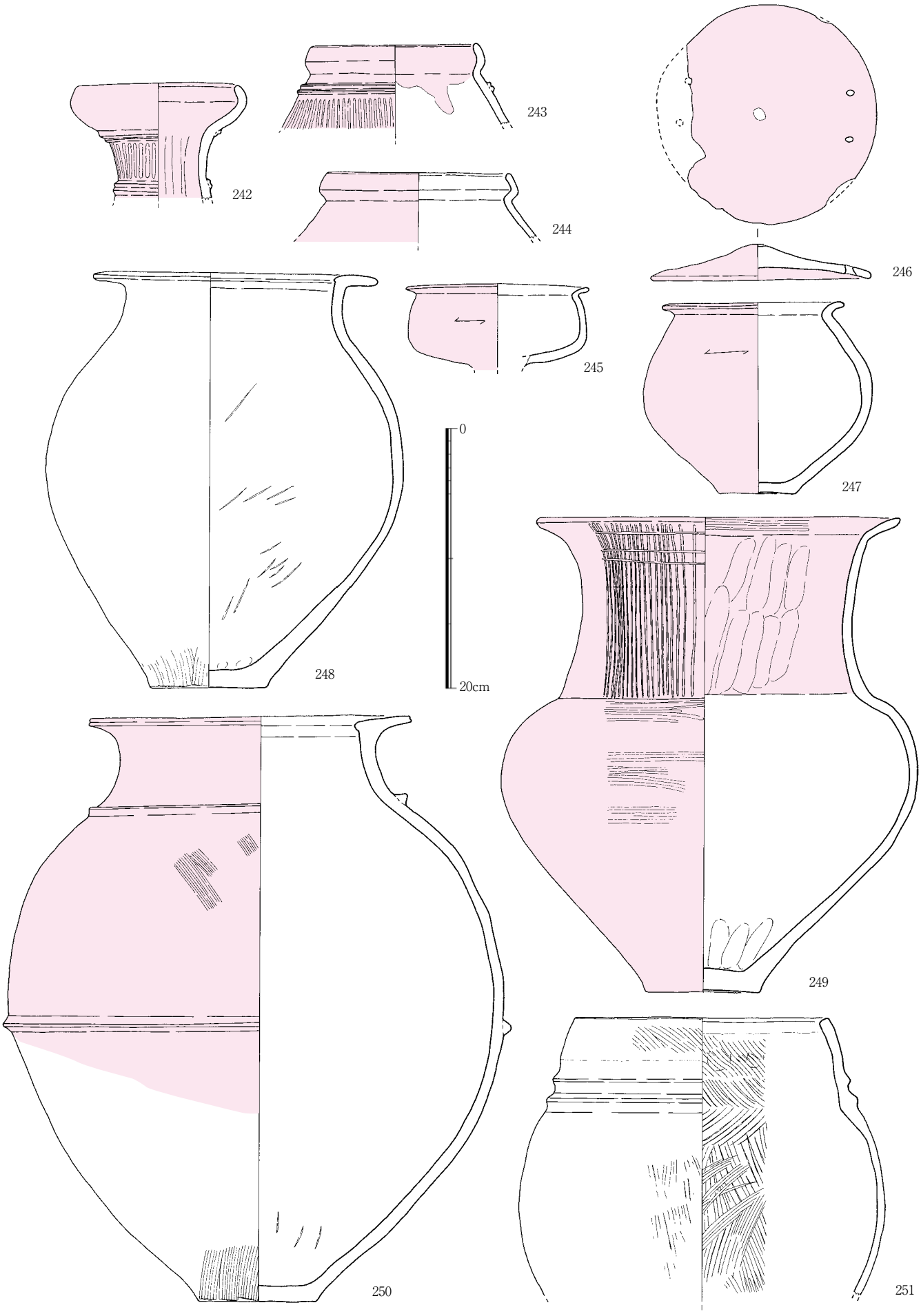
第 77 図　52 次土器群 125 出土土器実測図（4）［1/4］



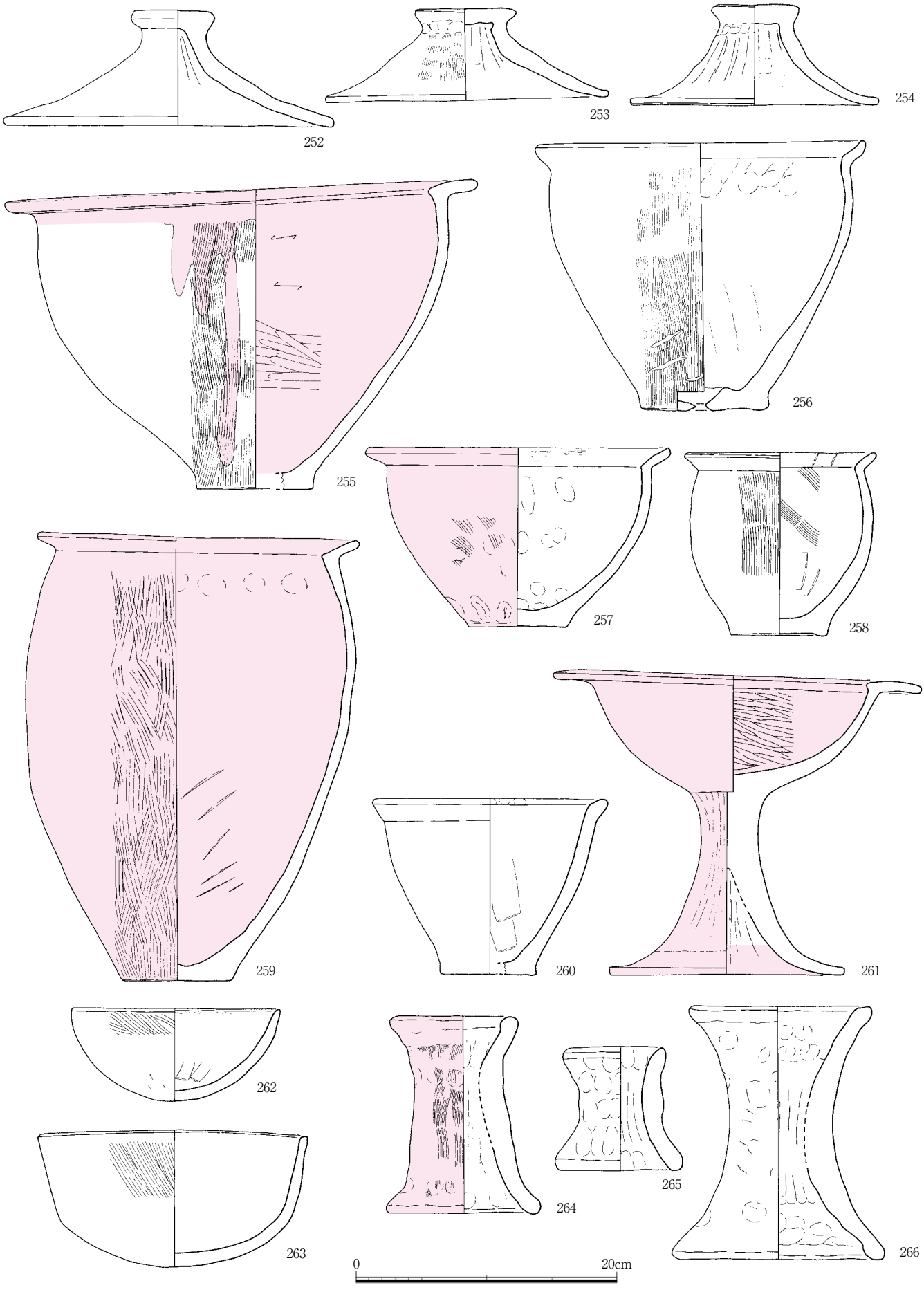
第 78 図　52 次土器群 127 出土土器実測図（1）［1/4］



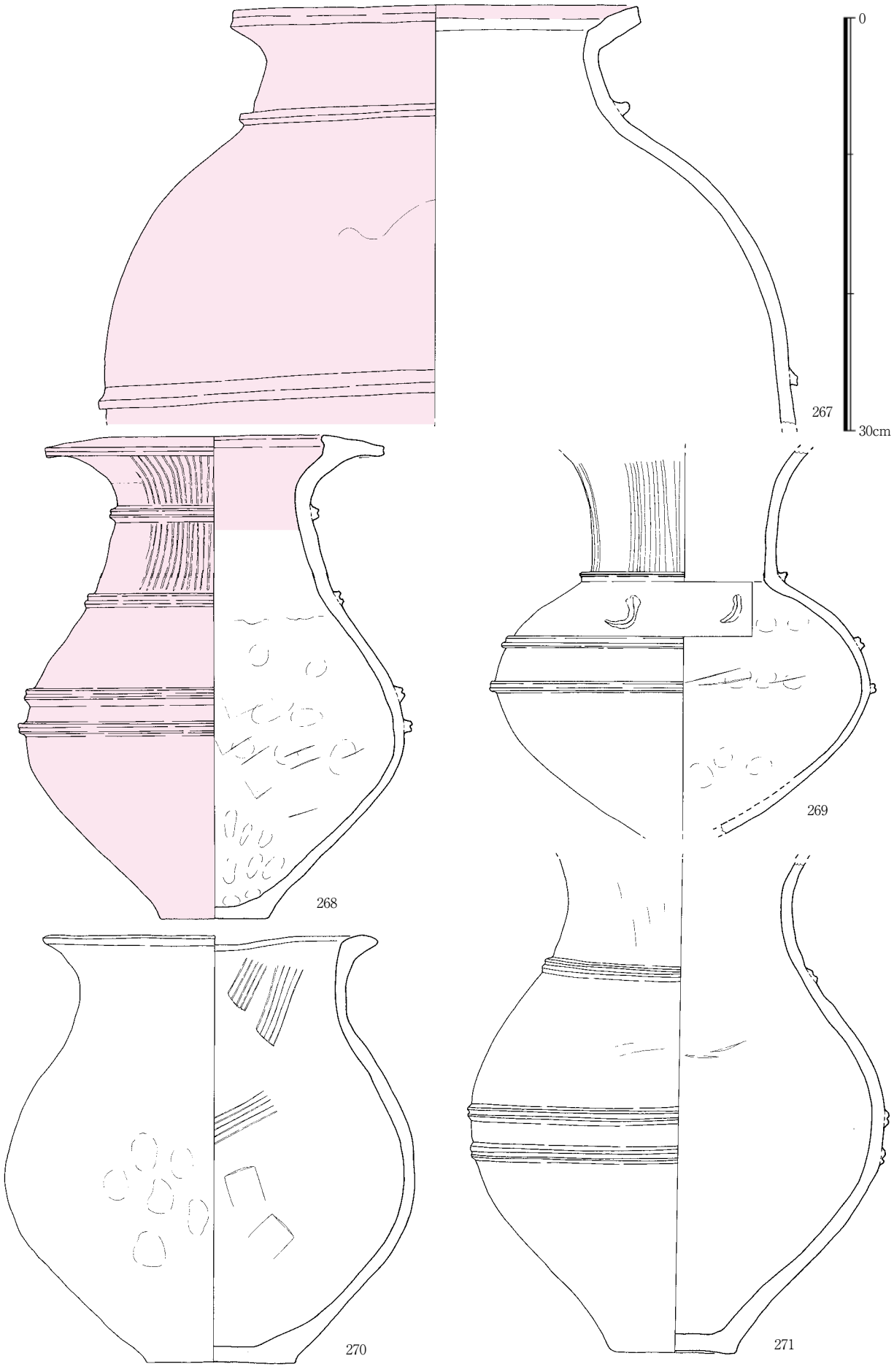
第 79 図　52 次土器群 127 出土土器実測図（2）［1/4］



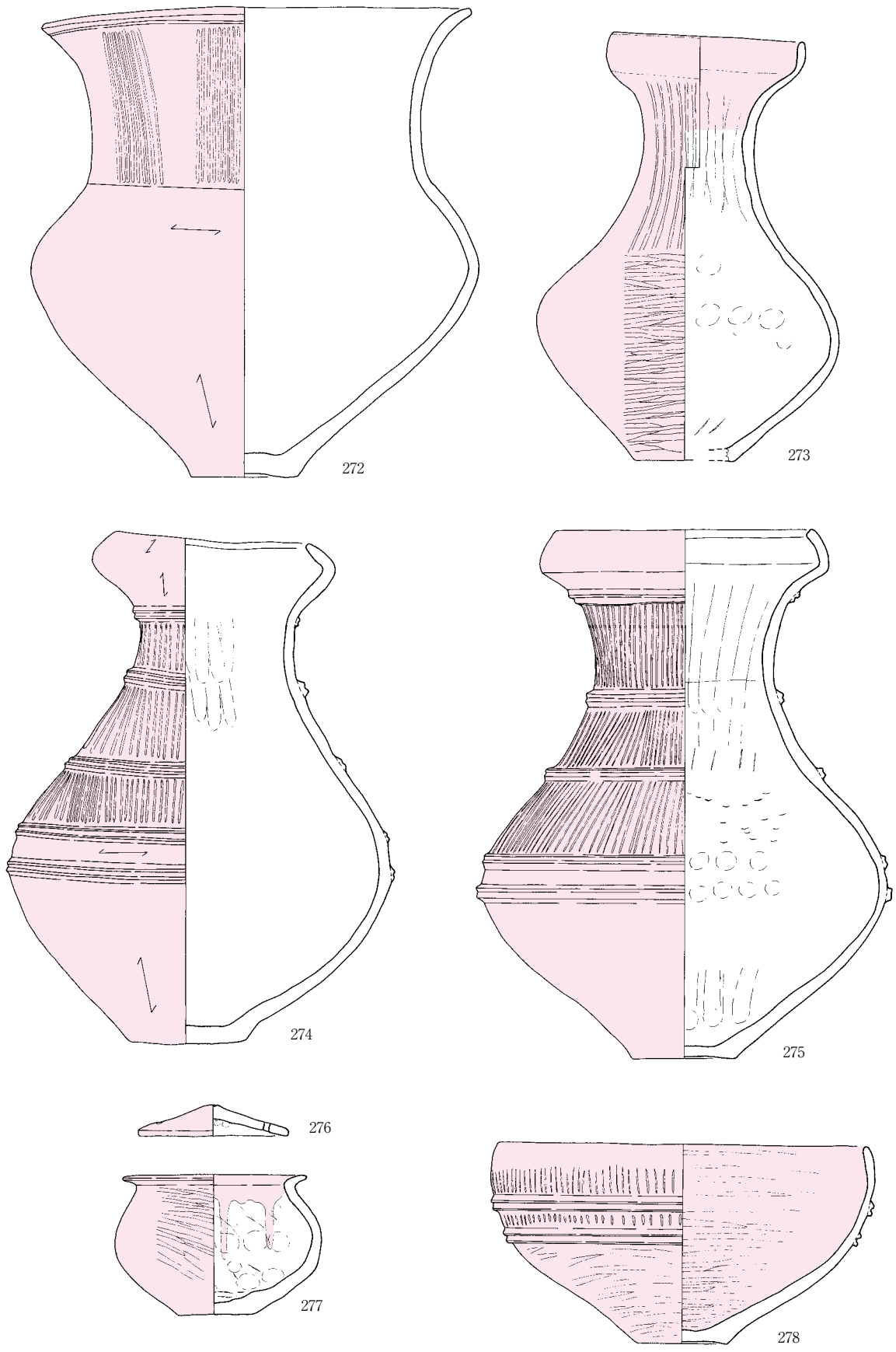
第 80 図　52 次土器群 128 出土土器実測図（1）［1/4］



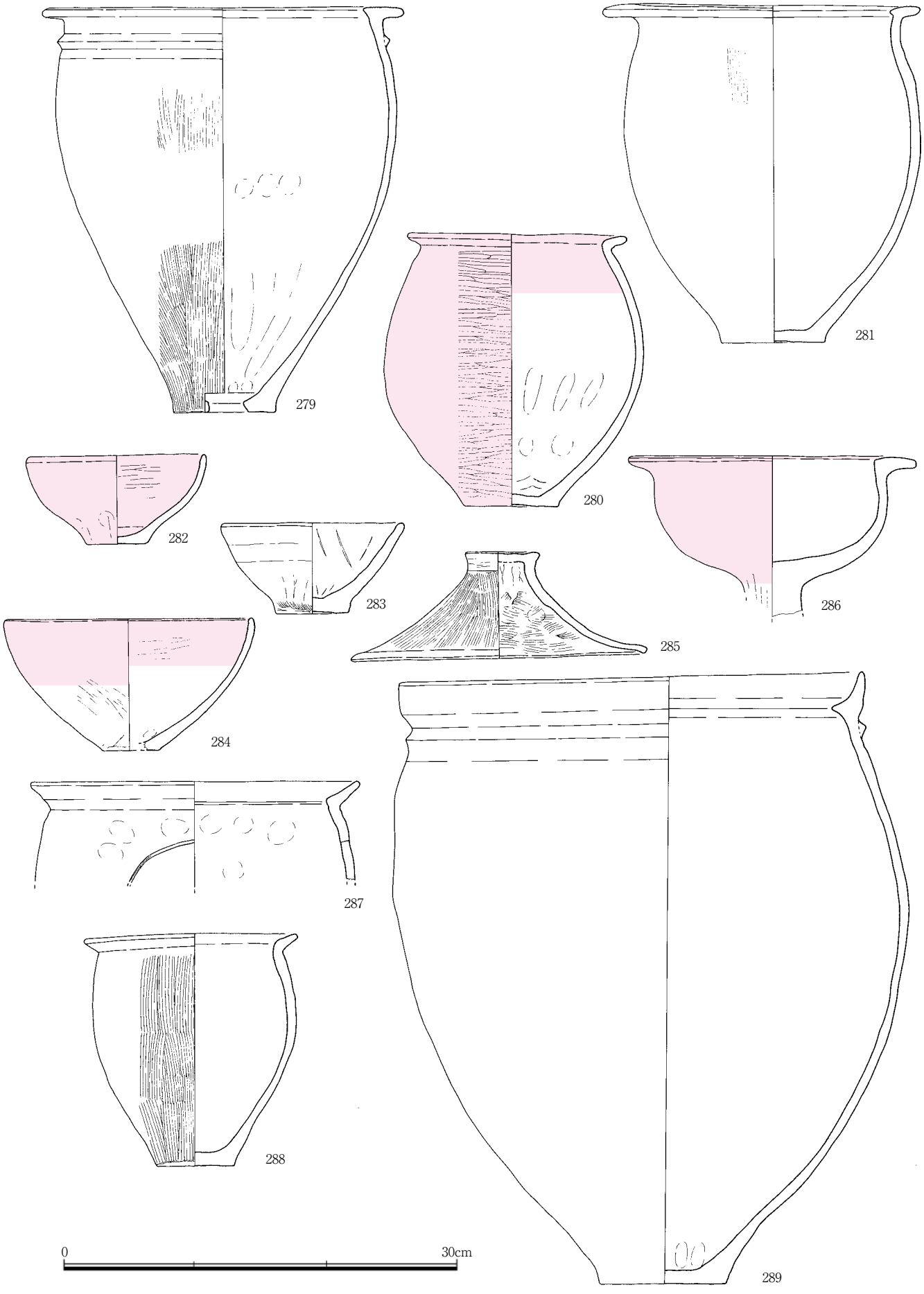
第 81 図　52 次土器群 128 出土土器実測図（2）［1/4］



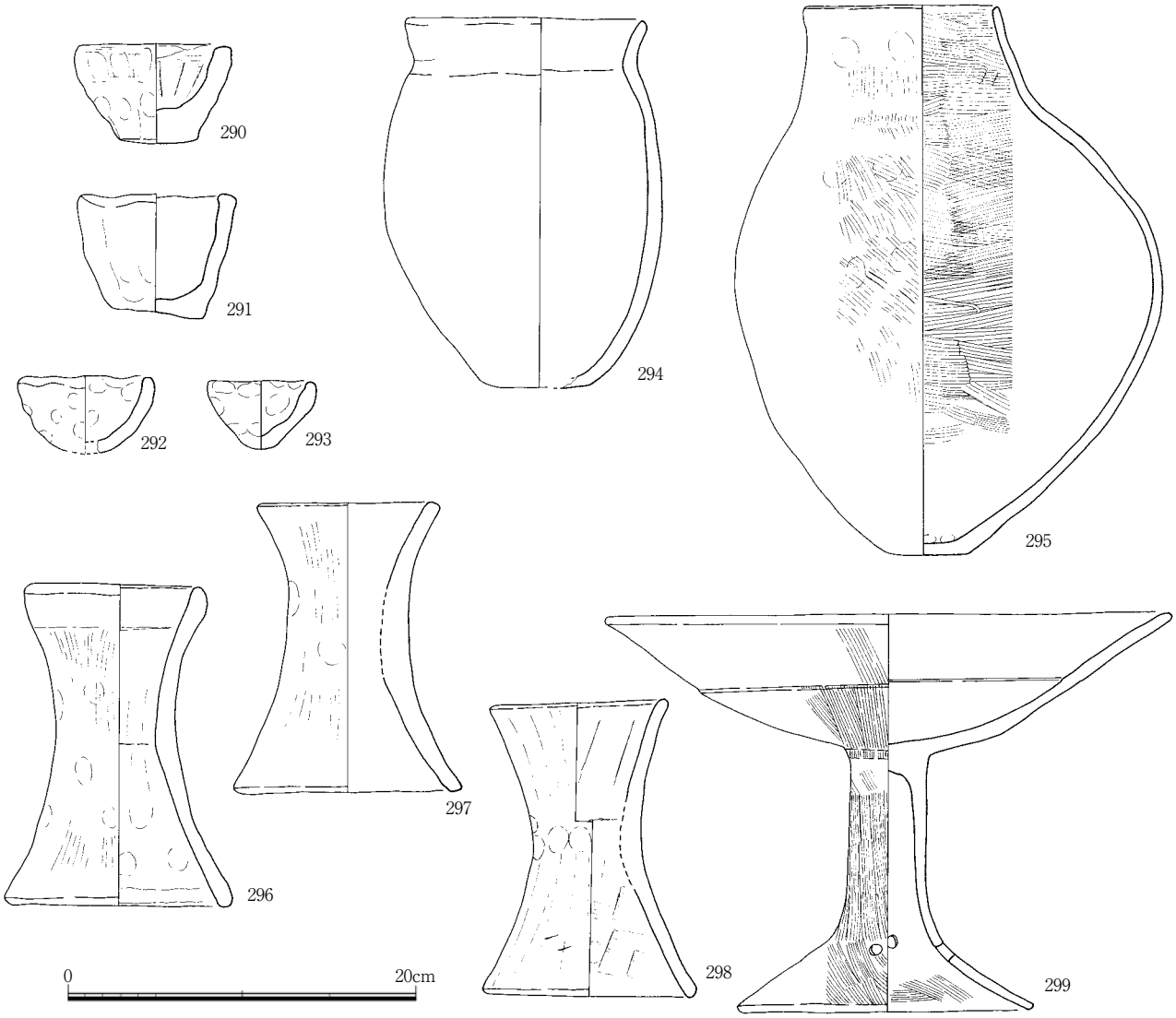
第 82 図　52 次土器群 129 出土土器実測図（1）［1/4］



第 83 図　52 次土器群 129 出土土器実測図（2）［1/4］



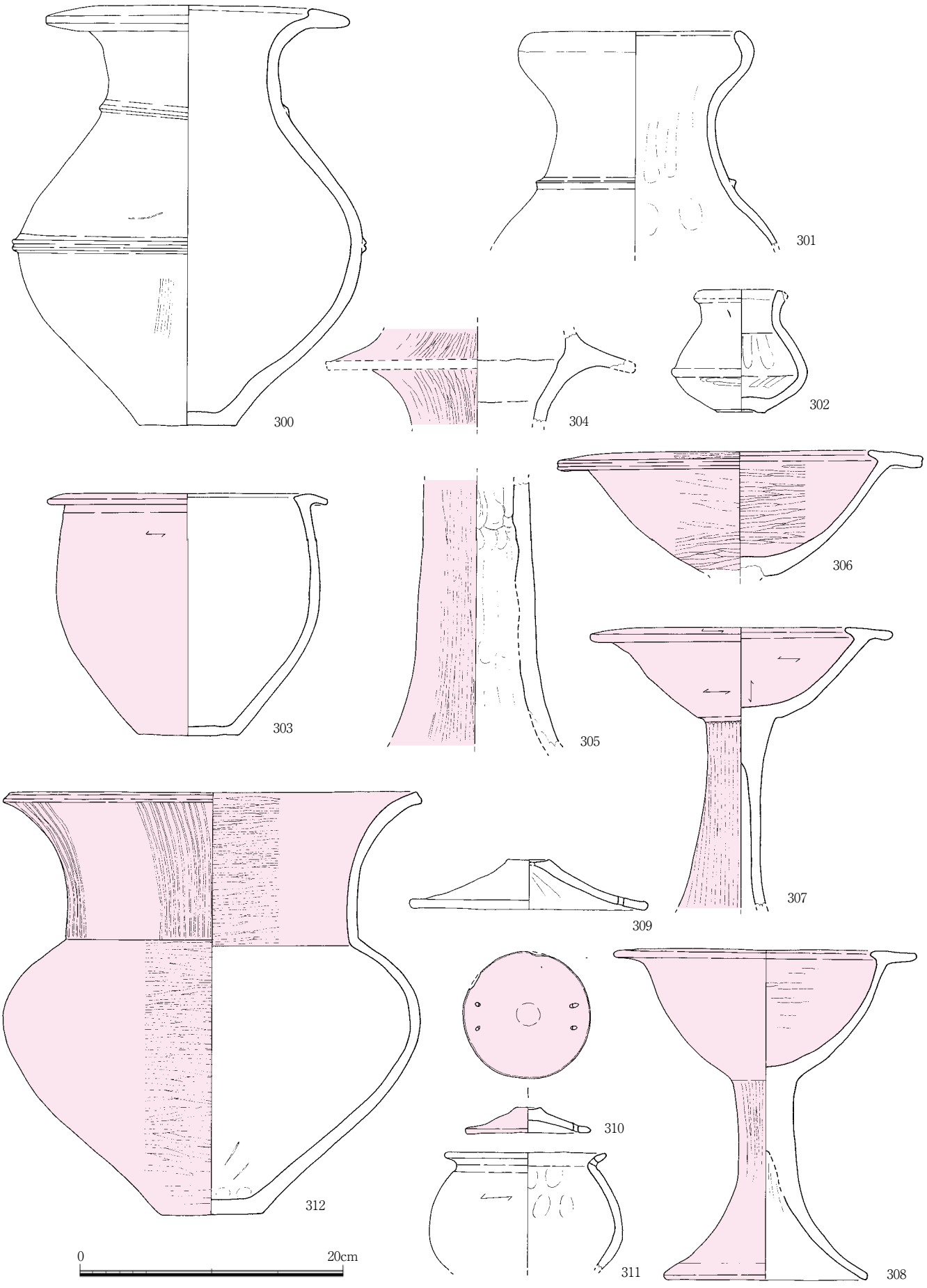
第 84 図　52 次土器群 129 出土土器実測図（3）［1/4］



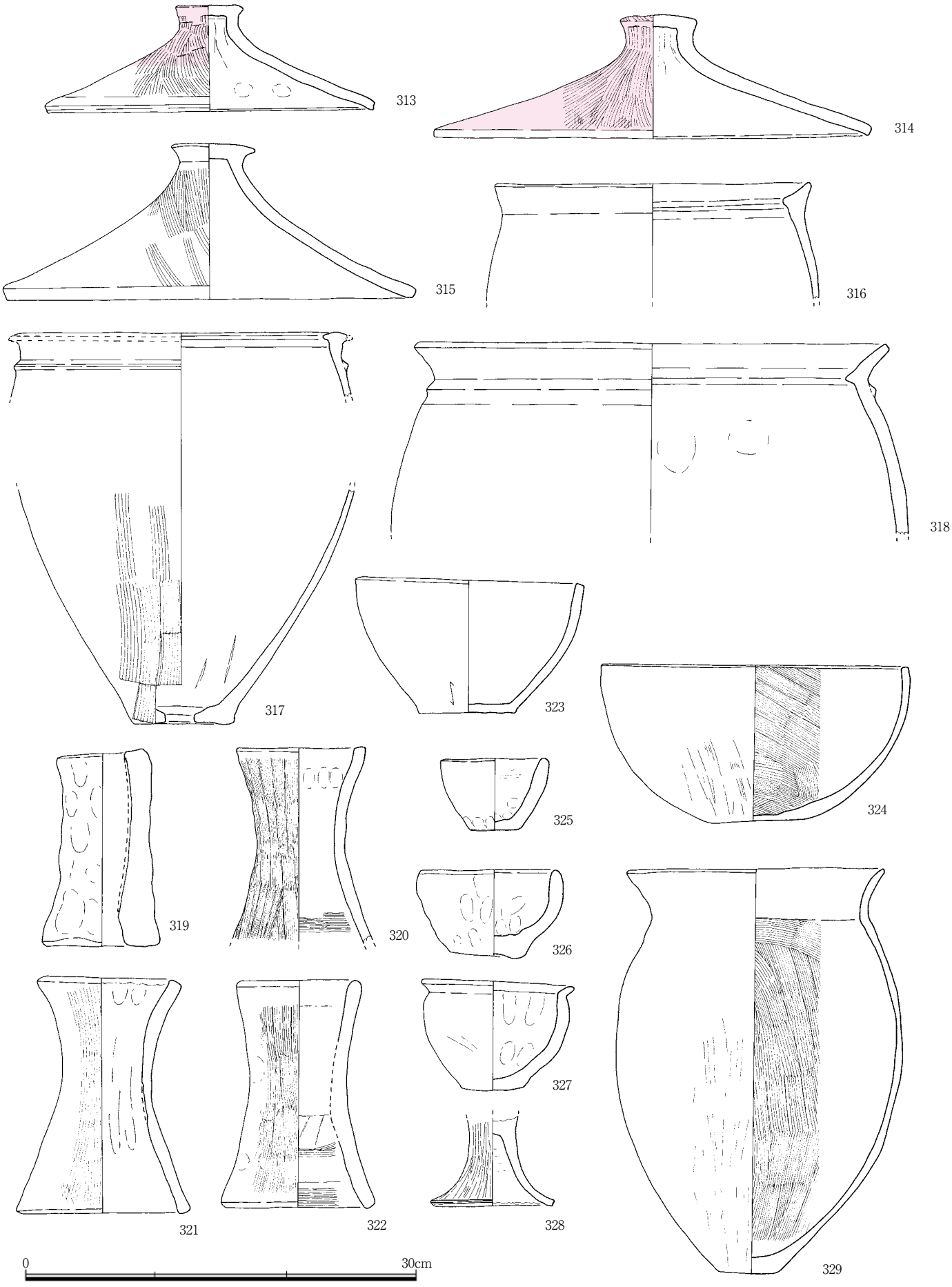
第 85 図　52 次土器群 129 出土土器実測図（4）［1/4］

表 24　52 次土器群 130 出土土器観察表（1）

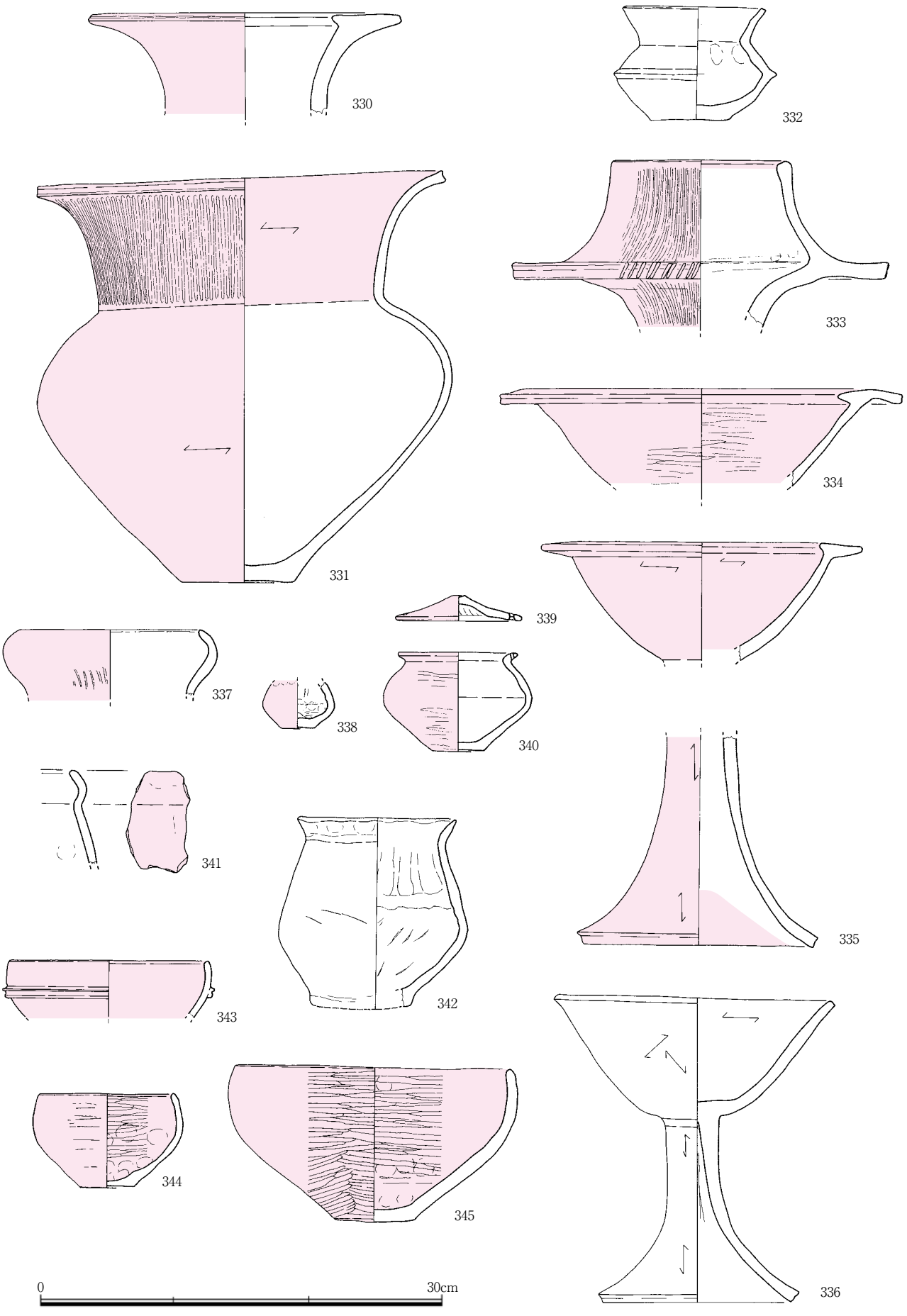
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
86	300	Ⅱ	130	V-7-N	壺	35.7	22.9	7.4	口縁部・突帯部・底はナデ、肩部は刷毛のち丁寧なナデ、他は縦刷毛のち丁寧なナデ	ナデ	やや濃褐色	精良　3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	黒斑あり
86	301	Ⅱ	130	V-7-N	壺	16.4	（15.4）	—	ナデ・磨滅、突帯部は横ナデ	横ナデ・磨滅	浅黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を含む	やや軟	残存：上半部 1/3
86	302	Ⅱ	130	V-7-S	壺	9.3	（5.6）	（3.8）	上半部は横ナデ、突帯部はヘラ磨き、他はナデ、底は未調整	ナデ、底部は刷毛状にヘラ調整とナデ	淡褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/2　外面に黒斑あり
86	303	Ⅱ	130	V-7-S	壺	18.4	（21.2）	（9.8）	磨き、底は削りか	ナデか	内：淡褐色 外：丹塗りか	3㎜以下の長石、2㎜以下の石英を含む	良好	外面に丹塗り可能性あり　全体に磨滅著しい
86	304	Ⅱ	130	下層	筒形器台	7.0	—	—	縦ヘラ磨き（粗く幅広）	横ナデ	橙色	精緻　白色粒を若干含む	普通	残存：受部は全周あり　丹塗り
86	305	Ⅱ	130	V-7-N	脚	20.2	—	—	縦ヘラ磨き	指ナデ・ナデ	橙色	精緻　1㎜以下の白色粒を若干含む	普通	丹塗り　大きな高坏か筒形器台の脚部か
86	306	Ⅱ	130	下層	高坏	9.5	27.4	—	口縁部上面は横ヘラ磨き、他は斜めの横ヘラ磨き	横ヘラ磨き	浅黄橙色～橙色	4㎜以下の石英･長石粒･赤色粒･雲母を含む	普通	残存：坏部全周あり　丹塗り 坏部の内外が黒っぽいため二次焼成を受けたか
86	307	Ⅱ	130	V-7-S	高坏	19.0	23.0	—	口縁部上面は磨き、口縁端部はナデ、他は磨きか（磨滅）	口縁部はナデ，坏上位は横磨き、下位は縦磨き、脚部は絞り、裾部はナデ	淡褐色	3㎜以下の石英・長石を多く含む	良好	脚部の内側以外はすべて丹塗り
86	308	Ⅱ	130	V-7-N 下層	高坏	25.2	22.8	15.0	坏部・裾部は磨滅、脚部は縦ヘラ磨き	坏部は横ヘラ磨きか，裾部はナデ・磨滅	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を多く含む	不良	残存：3/4　坏部内外面・脚部外面は丹塗り
86	309	Ⅱ	130	V-7-N	蓋	3.8	（3.2）	（18.2）	磨滅	上部は絞り、他は磨滅	淡褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存:1/3　裾部に穿孔あり（頂部にも穿孔の可能性あり）
86	310	Ⅱ	130	下層	蓋	2.0	1.8	9.5	磨き、裾部はナデ	磨滅	内：黒褐色 外：丹塗り	精良　3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	完形　外面丹塗り　裾部に 4 カ所穿孔あり
86	311	Ⅱ	130	V-7-N	壺	—	12.1	—	磨き	上半部は指圧、他はナデ	内：明褐色 外：丹塗り	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/3　口縁部に穿孔　内側口縁部～外側全体は丹塗り
86	312	Ⅱ	130	下層	壺	32.0	（30.8）	7.8	口縁部は横ナデ、頸部は縦のヘラで暗文風文様が等間隔でめぐり、体部は横ヘラ磨き、底部はナデ	口縁部は横ナデ、頸部は横ヘラ磨き，他はナデ	橙色～鈍い黄橙色	精緻　3㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を少量含む	普通	残存：1/2　内面頸部～外面全体（底部を除き）丹塗り　頸部に等間隔で 12～13 本の縦ヘラの暗文風文様が全周巡る
87	313	Ⅱ	130	V-7-S	蓋	8.2	5.2 つまみ	25.3	頂部はナデ、他は縦刷毛、裾部は横ナデ	ナデ	橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：1/2 裾部内外面が黒～黒褐色を帯びる　煮沸用の蓋として使用の痕跡か　丹塗りと思われる箇所あり



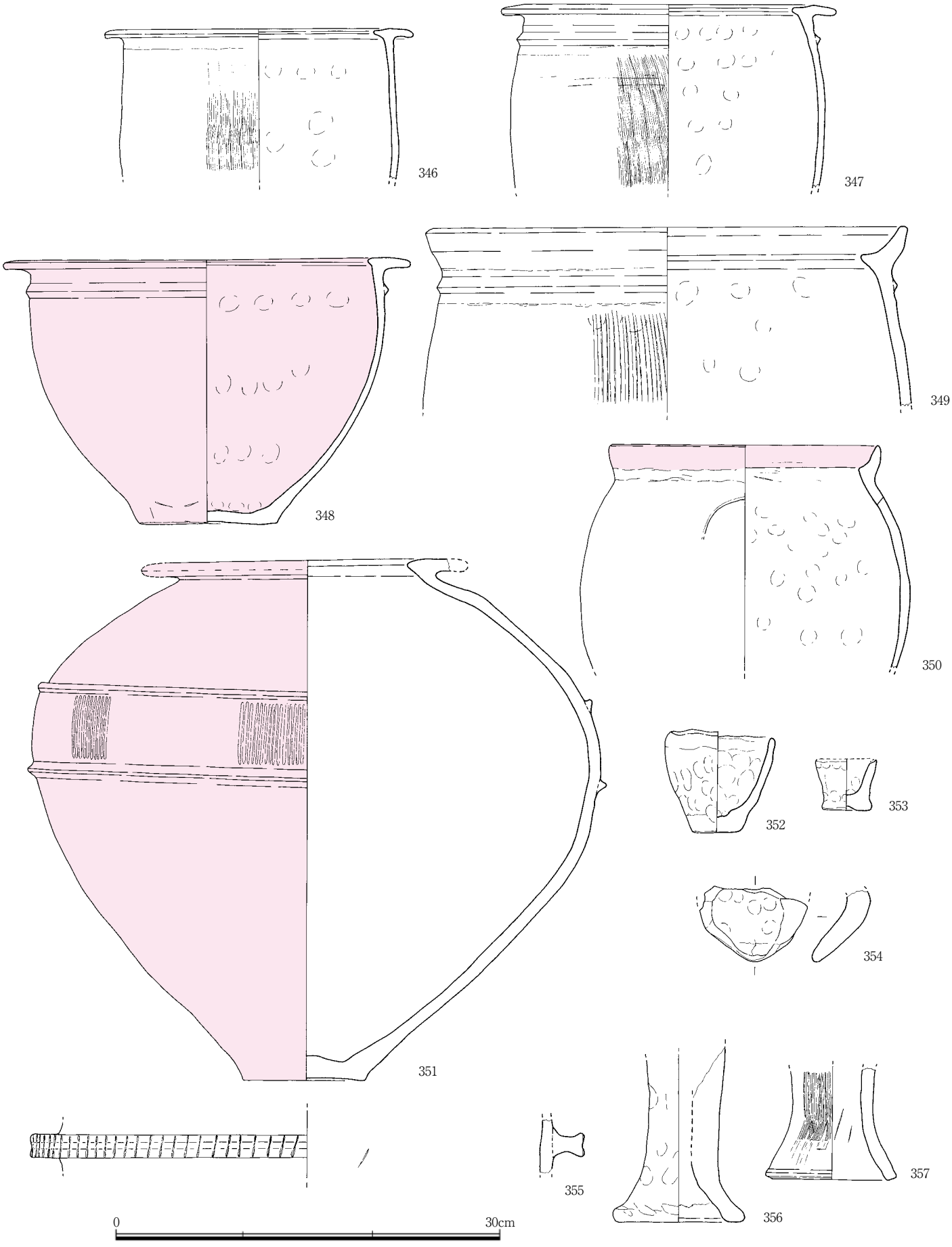
第 86 図　52 次土器群 130 出土土器実測図（1）［1/4］



第 87 図　52 次土器群 130 出土土器実測図（2）［1/4］



第 88 図　52 次土器群 131 出土土器実測図（1）［1/4］



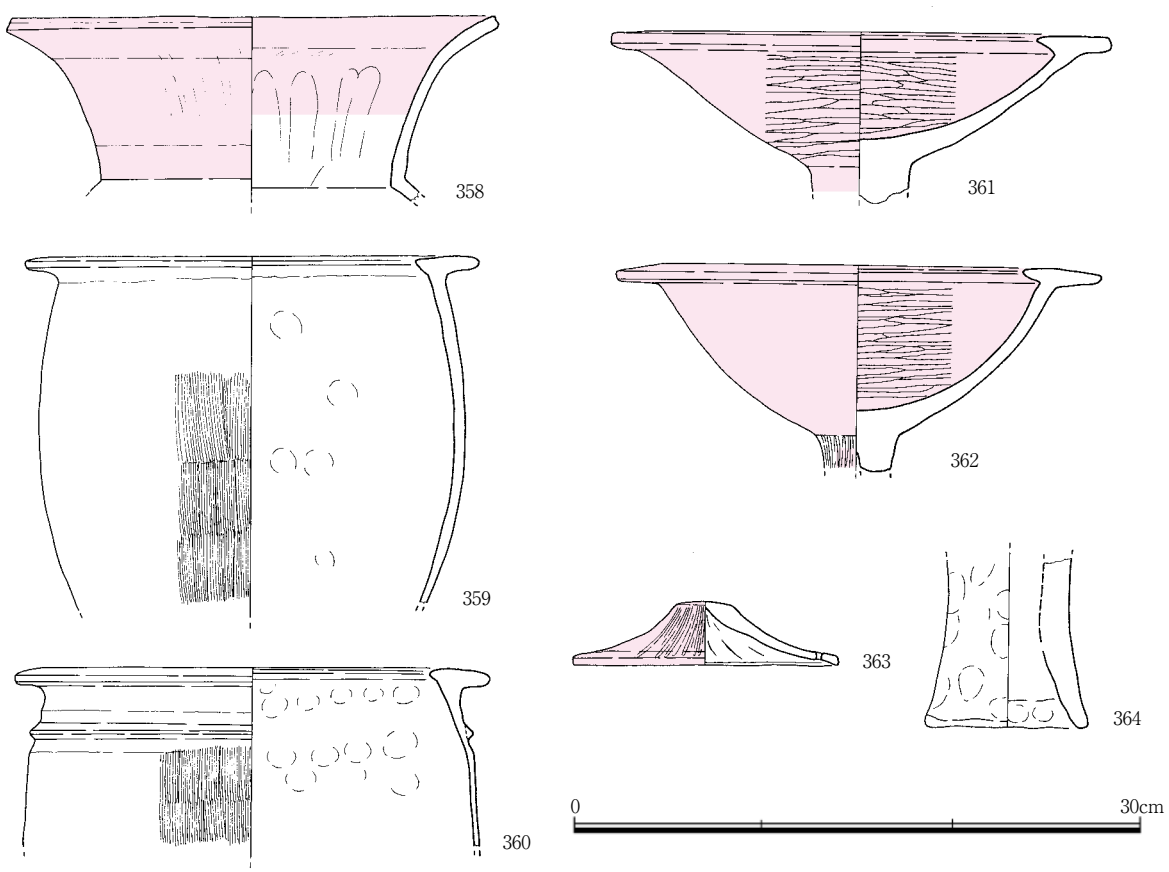
第 89 図　52 次土器群 131 出土土器実測図（2）［1/4］

表 25　52 次土器群 130 出土土器観察表（2）

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
87	314	Ⅱ	130	V-7-N	蓋	9.5	6.2 つまみ	(33.6)	頂部は刷毛・磨滅、他は縦刷毛	ナデ	橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良	残存：3/4 外面は裾部端部を除き丹塗り
87	315	Ⅱ	130	V-7-N	蓋	12.0	—	31.6	頂部と裾部はナデ、他は縦・斜め刷毛	ナデ	淡褐色	良　4㎜以下の長石粒、3㎜以下の石英を比較的多く含む	良好	
87	316	Ⅱ	130	V-7-N	甕	9.0	(24.4)	—	磨滅	ナデ	淡褐色	精良　4㎜以下の石英、5㎜以下の長石粒を含む	良好	
87	317	Ⅱ	130	下層	甕	—	(25.6)	7.3	口縁部は磨滅、他は縦刷毛（磨滅）、底は削り	ナデ	淡褐色	4㎜以下の石英・長石粒を比較的多く含む	良好	口縁端部欠損　底部に穿孔あり
87	318	Ⅱ	130	V-7	甕	14.6	(35.8)		口縁部は横ナデ、他は剥離	口縁部～胴部まで剥離	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	普通	残存：1/2 以下
87	319	Ⅱ	130	V-7-N	器台	15.2	7.5	8.8	口縁部は指押さえ、他は指ナデ	剥離	橙色～鈍い橙色	7㎜大の白色粒，石英・長石粒と多量の雲母を含む	普通	完形 金雲母を多く含んでいる
87	320	Ⅱ	130	—	器台	14.8	9.8	—	受上部は横ナデ、他は縦刷毛	横ナデ、裾部は横刷毛	暗褐色	細かい粘土　石英・長石粒を少量含む	良好	
87	321	Ⅱ	130	V-7-S	器台	11.2	11.0	13.4	縦刷毛・磨滅	ナデ・磨滅	橙色	4㎜以下の石英・長石粒・赤色粒子を含む	普通	完形 口縁部上端は丹塗りの痕跡　全体に丹塗りを施した可能性あり
87	322	Ⅱ	130	下層	器台	17.5	8.8	10.6	受部と裾部は横ナデ、他は縦刷毛	受部は横ナデ、体部はナデ（一部横刷毛）、裾部は横刷毛	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	ほぼ完形（若干欠損）
87	323	Ⅱ	130	V-7-N	鉢	10.4	17.6	7.4	ヘラ磨き（磨滅）、底は削りか	ナデ	濃褐色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	外面胴部上位に黒斑あり　全体的に磨滅著しい
87	324	Ⅱ	130	V-7 トレンチ	鉢	11.9	23.4	—	口縁部は横ナデ、体上部と底部は板状工具木口による横ナデ、他は板状工具木口による縦ナデ（刷毛目痕もごくわずかに）	口縁部は横ナデ、斜め・縦刷毛	褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 3㎜以下）比較的多く混じる	良好	ほぼ完形（口縁部わずかに欠損）　外面全体に煤付着（二次焼成による器表の剥離目立つ）
87	325	Ⅱ	130	V-7-N	ミニチュア土器	5.5	7.4	4.0	ナデ、底部近辺は指押さえ	口縁部は横ナデ、他は指押さえ	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を含む	良	残存：1/4
87	326	Ⅱ	130	V-7	鉢	6.65	10.7	5.2	指押さえ	指押さえ	内：明褐色 外：黒褐色	普通　3㎜以下の長石粒，4㎜以下の石英を含む	良	
87	327	Ⅱ	130	V-7-N	壺	8.6	11.7	5.0	ナデ、底面は摩耗	ナデ	濃赤褐色	普通　3㎜以下の石英・長石粒を含む	良	
87	328	Ⅱ	130	下層	脚台部	7.9	—	9.2	縦ヘラ磨き	横ナデ・ナデ	鈍い赤褐色	精緻　1㎜以下の白色粒を含む	普通	残存：脚部 1/5　内外とも黒く黒色顔料塗布か
87	329	Ⅱ	130	V-7	甕	31.3	19.5	—	口縁部は横ナデ、他はヘラ状工具による縦ナデ	口縁部は刷毛目のち横ナデ消し、他は刷毛目	暗褐色～褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 3㎜以下）多く混じる	良好	ほぼ完形（口縁部わずかに欠損）、外面口縁部から胴部下位に煤付着　内面底部付近は炭化物付着

表 26　52 次土器群 131 出土土器観察表（1）

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
88	330	Ⅱ	131	V-7-N	壺	7.5	(23.2)	—	口縁部上面は横ヘラ磨き、口縁端部は沈線がめぐる、他は横ナデ	横ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	普通	口縁部残存：1/4 口縁部上面から外側頸部まで丹塗り
88	331	Ⅱ	131	X・Y-7	壺	30.8	(30.1)	(8.4)	口縁端部はナデ、他は磨き、頸部は暗文、底は削り	口縁部～頸部は磨き、他はナデ	明褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	外側は底部を除き丹塗り　内側は口縁から頸部まで丹塗り
88	332	Ⅱ	131	X・Y-7	壺	8.4	10.0	6.0	口縁部～突帯部まで横ナデ、他はなで	頸部は横ナデ、他はナデ	茶色	石英・長石粒少量含む	良好	胴部と底部の境の接合部が明瞭に認められる
88	333	Ⅱ	131	V-7-N	筒形器台	14.3	(12.6)	—	細かい縦ヘラ磨き、突帯端部に縦の細かい刻み目あり	ナデ・磨滅	橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	普通	口縁端部から外側全体に丹塗り
88	334	Ⅱ	131	V-7-N	高坏	7.3	30	—	口縁部付近は磨滅，他はヘラ磨きか	横ヘラ磨き	橙色～鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・橙色粒を含む	普通	残存：坏部 1/5 内外面全体に丹塗り
88	335	Ⅱ	137?	X・Y-7	高坏	—	(23.8)	17.2	坏部は口縁端部のナデを除き磨き、脚部は端部のナデ以外は磨き	口縁部はナデ、坏部は磨き、脚部は絞り、裾部はナデ	明褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を少し含む	良好	坏部内外面、筒部外面は丹塗り
88	336	Ⅱ	131	V-7-N	高坏	23.0	(20.2)	14.0	上下の端部と接続部はナデ、他は磨き	坏部は磨き，脚部は絞り、裾部はナデ	褐色	精良　2㎜以下の石英・長石粒を少し含む	良好	
88	337	Ⅱ	131	U-7	壺	5.0	(13.4)	—	磨滅、頸部に縦ヘラによる暗文	磨滅	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を若干含む	やや軟	外面は黒っぽい（黒色顔料を塗布後丹塗りか）
88	338	Ⅱ	131	V-7-N	ミニチュア土器	3.5	—	2.8	ナデ・磨滅	ナデ、底部付近に細く鋭い工具痕	内：黒色 外：鈍い黄橙色	1㎜以下の白色粒を含む	普通	残存：口縁部全周欠け　外面全体底部も含め丹塗り
88	339	Ⅱ	131	V-7-N	蓋	1.9	0.8	(8.4)	磨滅・剥離	ナデ	鈍い黄橙色	精緻　1㎜以下の白色粒を若干含む	良好	丹塗り　裾部に焼成前の穿孔 2カ所あり
88	340	Ⅱ	131	V-7-N	壺	7.3	(9.0)	3.9	横ヘラ磨き	口縁部は磨滅、他は不明	内：黒色 外：鈍い黄橙色（丹）	精緻　白色微粒子を若干含む	やや軟	残存：1/2 強 口縁部に焼成前の穿孔あり 底部を含め外側は丹塗り 内面は黒色を呈する
88	341	Ⅱ	131	U-7	壺 口縁部片	7.1	—	—	横ナデ・ナデ	磨滅	鈍い黄橙色～黒褐色	2㎜以下の石英・長石粒を若干含む	普通	外面丹塗り　全体的に黒っぽい
88	342	Ⅱ	131	V-7-N	壺	14.0	11.2	(7.2)	口縁部は横ナデ、他はナデ	口縁部は横ナデ、体中部から底部にかけ工具痕	灰黄色	5㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	やや軟	残存：3/4 全体に締まりが悪い　底部は外側に膨らむ
88	343	Ⅱ	131	V-7-N	口縁部	4.3	14.8		磨滅著しい	磨滅	鈍い黄橙色	精緻　1㎜以下の石英・長石粒・雲母を若干含む	良	口縁部残存：1/4 内外面に丹塗り
88	344	Ⅱ	131	V-7	鉢	7.0	(8.0)	4.0	横ヘラ磨きか（磨滅著しい）	横ヘラ磨き・指押さえ	鈍い黄橙色	1㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	残存：1/3　丹塗り（外底を除き全体）
88	345	Ⅱ	131	V-7-N	鉢	11.8	20.5	5.8	横ヘラ磨き	横ヘラ磨き	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良	残存：4/5 丹塗り（外底部の丹ははぎ取った痕跡）
89	346	Ⅱ	131	V-7-N	甕	11.9	(24.0)	—	口縁部は横ナデ、体上部は縦刷毛のち横ナデ・ナデ消し、他は縦刷毛	口縁部は横ナデ、他はナデ・指押さえ	内：鈍い褐色 外：鈍い橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	口縁部残存：1/6
89	347	Ⅱ	131	V-7-N	甕	14.5	(26.2)	—	口縁部上面～突帯まで横ナデ、他は縦刷毛	口縁部直下は横ナデ、他はナデ・指押さえ	橙色～灰黄褐色～鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	口縁部残存：1/4
89	348	Ⅱ	131	V-7-N	鉢	20.7	31.8	11.0	口縁部は横ナデ、他はナデ	指押さえ・ナデ	橙色	4㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良好	残存：3/4 丹塗り（外底部を含め内外全体）
89	349	Ⅱ	131	V-7-N	甕	14.2	(39.6)	—	口縁部～突帯まで横ナデ，他は粗い縦刷毛	口縁部付近は横ナデ，他はナデ	鈍い黄橙色	4㎜以下の石英・長石粒を多量に含む	良好	残存：上半部 1/3 弱
89	350	Ⅱ	131	V-7-N	甕	17.7	(21.2)	—	口縁部は横ナデ、他はナデ	口縁部は横ナデ、他は指押さえ・ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：1/3　体上部に焼成前に形成された円形の窓あり 口縁部内外面丹塗り
89	351	Ⅱ	131	V-7-N	壺	41.0	—	9.7	全体に横ヘラ磨き、肩部は横ヘラ磨きと暗文、突帯部は横ナデ、底は削り	口縁部は横ナデ、他はナデ	内：黒灰色（黒塗りか） 外：丹塗り	精良　2㎜以下の石英，3㎜以下の長石粒を含む	良好	欠損：胴部 1/3　底部を除く口縁部上面～胴部下位まで丹塗り　内面は黒塗りか
89	352	Ⅱ	131	V-7-N	支脚	8.0	3.8	8.1	頂部はナデ、体部は指押さえ、裾部は横ナデ	体部は指押さえ、裾部は横ナデ	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	良	ほぼ完形（受部若干欠損）



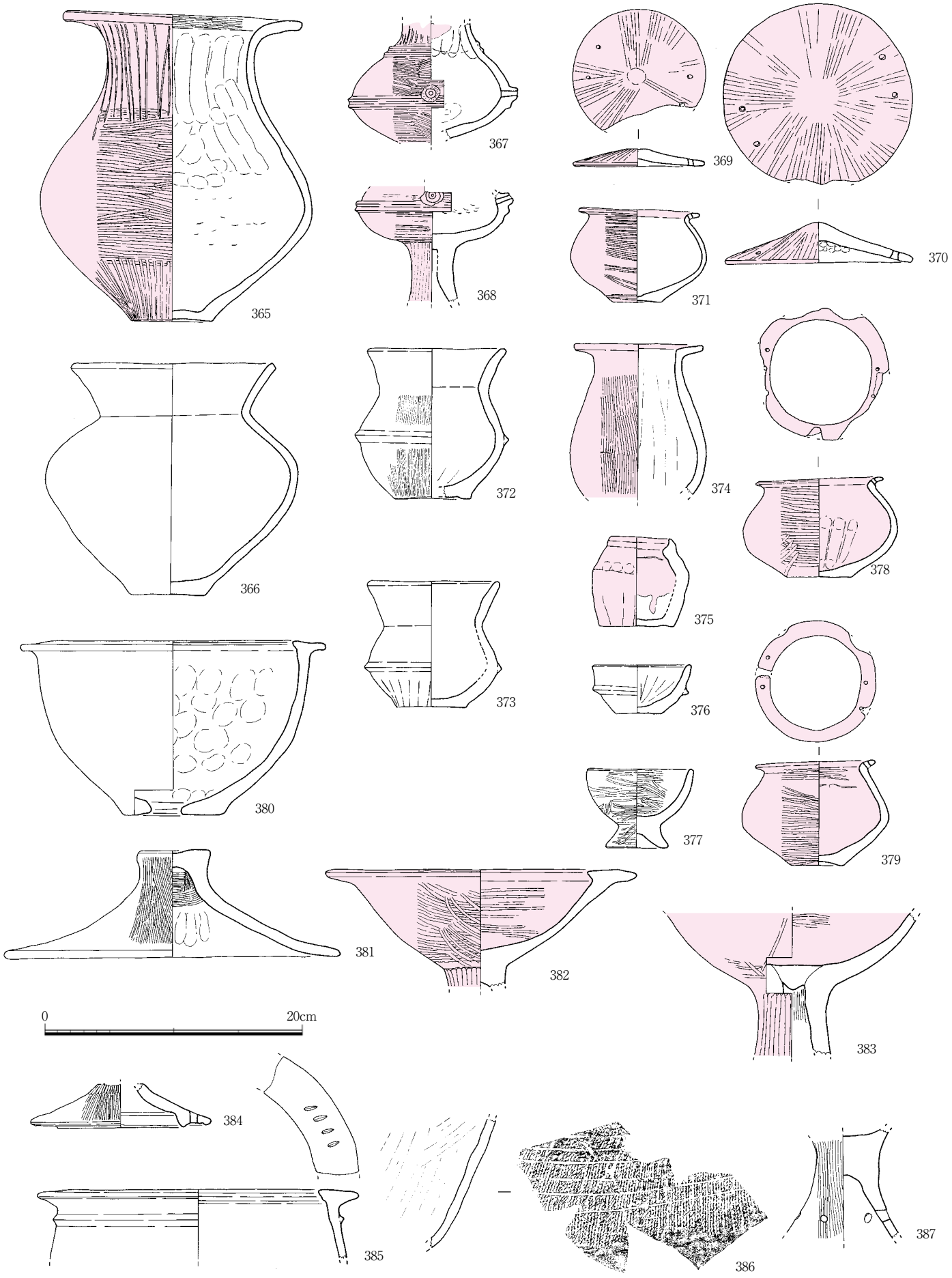
第 90 図　52 次土器群 132 出土土器実測図［1/4］

表 27　52 次土器群 131 出土土器観察表（2）

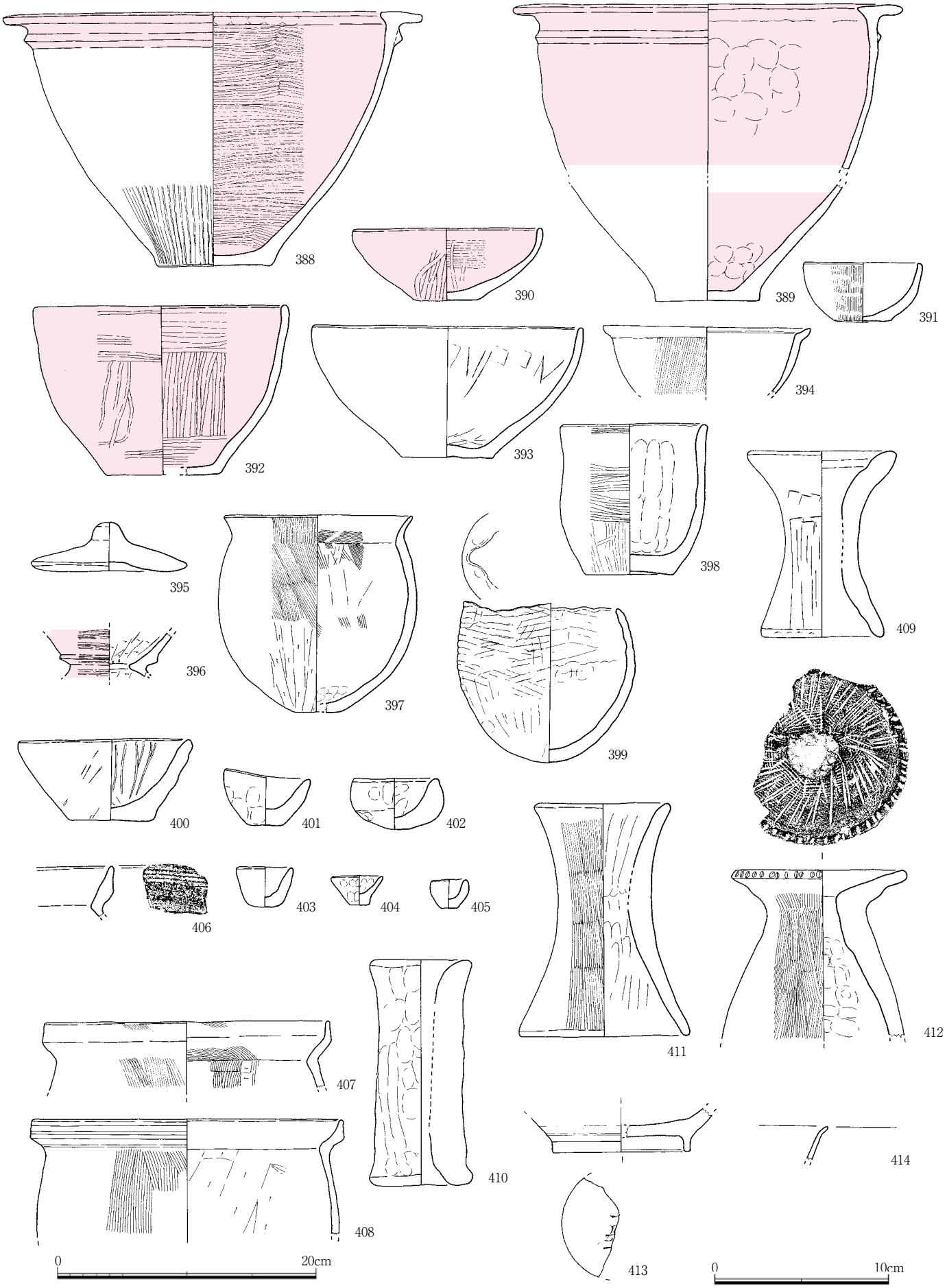
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
89	353	Ⅱ	131	V-7-N	ミニチュア土器	約 4.0	約 4.6	3.8	指押さえ・ナデ	指押さえ・ナデ	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒を含む	良	残存：口縁部全周欠け　臼のような形　外底に凹み
89	354	Ⅱ	131	U-7	手捏ね土器か	4.5	—	—	ナデ	指押さえ	内：鈍い黄橙色～褐灰色. 外：鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母・赤色粒を含む	普通	片口付きの手捏ね土器か
89	355	Ⅱ	131	V-7-N	壺突帯	4.2	—	—	横ナデ（全周に刻み目めぐる）	ナデ・横ナデ	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母・黒色粒・赤色粒を含む	良好	壺あるいは甕の突帯と思われる
89	356	Ⅱ	131	V-7-N	器台	14.0	—	10.2	ナデ・指押さえ	ナデ	明赤褐色	3㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を含み多量の金雲母を含む	普通	残存：3/4
89	357	Ⅱ	131	V-7-N	器台	8.8	—	10.2	縦刷毛、裾部は縦刷毛のち横ナデ消し	体部はナデ・工具痕、裾部は横ナデ	鈍い黄橙色	1㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：裾部全周あり

表 28　52 次土器群 132 出土土器観察表

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
90	358	Ⅱ	132	X-8- S	壺	9.8	(26.0)	—	口縁端部は横ナデ、他は縦刷毛・磨滅	口縁部は横ナデ、他は指ナデ	鈍い橙色	2㎜以下の石英・長石粒・褐色粒を含む	良好	口縁部残存：1/7 内外面丹塗り
90	359	Ⅱ	132	X-8-S	甕	18.5	24.0	—	口縁部上面は横ナデ、他は縦刷毛	ナデ	口縁部上端：橙色 他：灰黄褐色～黒褐色	2㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良	残存：1/4　外側口縁部から胴部にかけて煤付着
90	360	Ⅱ	132	X-8-S	甕	9.6	(25.0)	—	口縁部上面～突帯下まで横ナデ、他は縦刷毛	口縁部は横ナデ、他は指押さえ・ナデ	鈍い黄橙色	1㎜以下の石英・長石粒を少量含む	良好	口縁部残存：1/4　外面口縁部から胴部にかけて煤付着
90	361	Ⅱ	132	X-8- S	高坏	9.0	(26.4)	—	口縁部上面はヘラ磨き，他は横ヘラ磨き、脚部はナデ	横ヘラ磨き	鈍い黄橙色	2㎜以下の石英・長石粒・黒色粒を含む	普通	残存：坏部 1/2 強 内外面丹塗り
90	362	Ⅱ	132	X-8-S	高坏	10.8	25.6	—	口縁部上面は横ナデ、他は横ナデか（磨滅）	横ヘラ磨き	鈍い黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	普通	残存：坏部 4/5 内外面丹塗り　口縁部や内面が黒い（黒色顔料か）
90	363	Ⅱ	132	X-8- S	蓋	3.4	3.1	(14.0)	頂部はナデ、他は縦ヘラ磨き	ナデ・工具痕、裾部は横ナデ	橙色	2㎜以下の石英・長石粒・赤色粒を含む	良	残存：3/4 外面に丹塗り　裾部に穿孔（一カ所のみ確認）
90	364	Ⅱ	132	X-8-S	器台	9.0	—	(8.2)	ナデ・指押さえ	ナデ・指押さえ	橙色～黒褐色	1㎜以下の石英・長石粒を少量含む	良好	残存：1/4



第 91 図　52 次包含層出土土器実測図（1）［1/4］



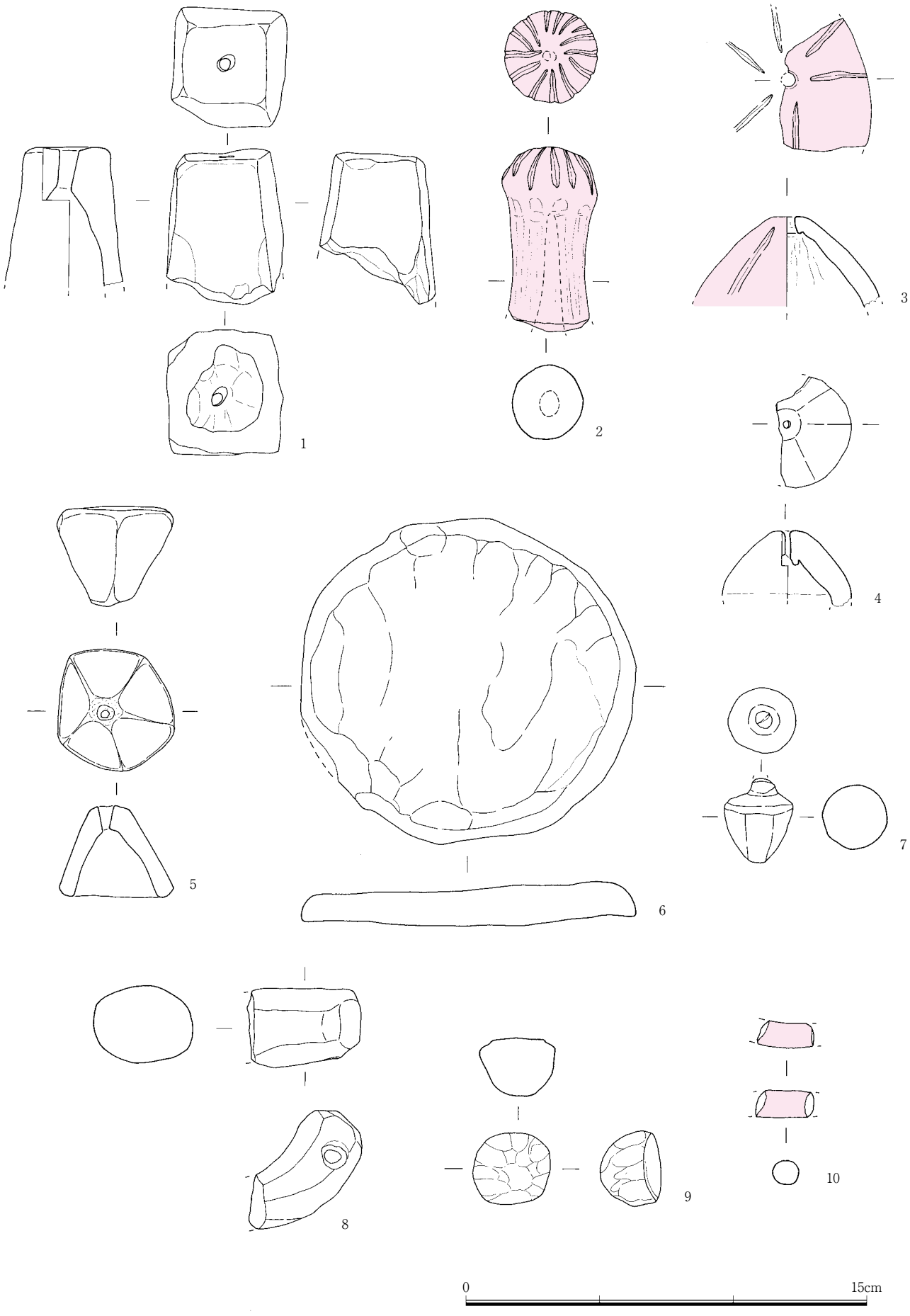
第 92 図　52 次包含層出土土器実測図（2）［1/4］

表 29　52 次包含層出土土器観察表（1）

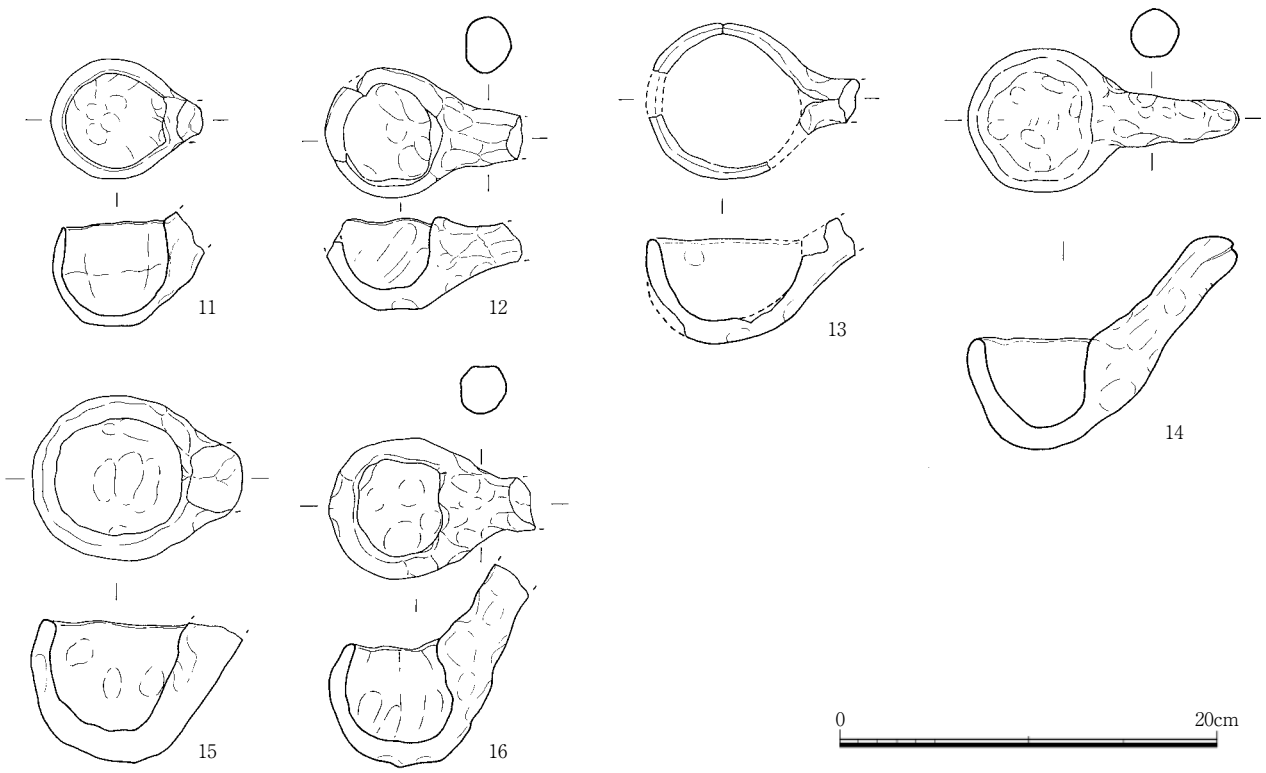
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
91	365	Ⅱ	—	U-9	壺	23.8	18.8	6.2	口縁部はヘラ磨き、頸部は暗文、肩部は横ヘラ磨き（磨滅）、底部付近は縦ヘラ磨き、底はヘラ状工具によるナデか	口縁部はヘラ磨き、頸部は指押さえ、胴中部に指圧痕と指爪の圧痕，底部はナデ	褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：口縁部 1/9 胴部 1/4 内面口縁部から外面全体（外底も）丹塗り　外底は上げ底気味
91	366	Ⅱ	—	X-7	壺	18.0	15.2	5.2	口縁部は磨滅著しい、他はナデか	口縁部は磨滅著しい、他はナデか	褐色	3㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	ほぼ完形　表面は磨滅
91	367	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	脚台付注口壺	9.2	—	—	頸部は暗文、他はヘラ磨き	全体にナデ、頸部と底部に指圧痕	茶褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）少量混じる	良好	欠損：口縁部～脚部　外面～内面肩部に丹塗り　坏部と脚部はソケット状に接合　胴部中央に注口
91	368	Ⅱ	—	V-8	注口付高坏	8.3	12.0	—	坏部は横ヘラ磨き、脚部は縦ヘラ磨き	坏部はナデ・爪の圧痕	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的多く混じる	良好	欠損：身 1/2　外面全体に丹塗り　坏中部に注口（外から中へ穿つ）
91	369	Ⅱ	—	U・V-7	蓋	1.4	10.2	—	ヘラ磨き	ナデか、裾端部は横ナデ	褐色	砂粒(石英･長石ともに 2㎜以下）少量混じる	良好	欠損：裾部 1/3　外面丹塗り　裾部に穿孔 4 カ所
91	370	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	蓋	3.2	—	14.5	ヘラ磨き（磨滅）、裾端部は横ナデか	頂部は指圧痕、他はナデ、裾端部は横ナデか	褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）少量混じる	良好	欠損：裾端部 1/6　外面全体に丹塗り　裾部 4 カ所に穿孔　外面全体に磨滅
91	371	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	無頸壺	7.2	(9.2)	3.8	上半部は横ヘラ磨き（磨滅）、下部は斜め・横ヘラ磨き（磨滅）、底は不明	ナデか	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 3㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：口縁部 2/3　外面全体と内面口縁部に丹塗り　口縁部に 4 カ所穿孔（完形でない）　全体に剥離
91	372	Ⅱ	—	X-8	壺	11.6	10.3	6.0	口縁部・突帯部は横ナデ、他は縦刷毛，底面はナデ	口縁部と体中部は横ナデ、肩部はナデ、下部から底部はヘラ状工具によるナデ・指ナデ（底面の強い指ナデは溝状に一周）	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的多く混じる	良好	残存：口縁部 1/4 胴部 2/3 底部 1/2　　外面胴部下位に黒斑
91	373	Ⅱ	—	X-7	壺	9.7	10.3	5.5	横ナデ、下半部は板状工具木口の圧痕，底面はナデ	口縁部は横ナデ、他はナデ、底部は指圧痕	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的多く混じる	良好	完形
91	374	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	壺	11.7	(10.0)	—	口縁部は横ナデ、他は縦刷毛	口縁部は横ナデ、他は指押さえ	淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 1㎜以下）少量混じる	良好	残存：1/3　外面全体と内面口縁部に丹塗りを施す
91	375	Ⅱ	—	W-8	小壺	6.4	4.5	5.8	口縁部は横ナデ、肩部は指圧痕、他は板状工具によるナデ、底はナデ	口縁部は横ナデ、他はナデ	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少なく混じる	良好	完形　丹塗りは外面全面と内面下位まで
91	376	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	小鉢	3.8	(7.2)	3.6	横ナデ、底部はナデ	口縁部は横ナデ、他はヘラ削り	淡褐色	砂粒（石英 4㎜以下・長石 3㎜以下）比較的多く混じる	良好	欠損：口縁部 1/3　外面胴部から底部に煤付着　内面口縁部から胴部に灰黒を帯びる箇所あり
91	377	Ⅱ	—	X-7	台付坏	6.1	(8.05)	4.8	ヘラ磨き、裾端部は横ナデ	ヘラ磨き、台部は反時計回りにヘラ削り	灰黒色	—	—	残存：1/4　内外面は灰黒色
91	378	Ⅱ	—	U-9	無頸壺	7.6	(9.9)	5.0	ヘラ磨き（剥離・磨滅著しい）、底はナデか	ナデ・指圧痕	褐色	砂粒(石英･長石ともに 1㎜以下）わずかに混じる	良好	欠損：口縁部 1/2　外底部を除き全面に丹塗り　穿孔は 4 カ所（2 個セット）　内外面剥離著しい
91	379	Ⅱ	—	U・V-7	無頸壺	8.0	9.3	3.8	ヘラ磨き、底面はナデ	口縁部はヘラ磨き，他はナデ	淡褐色～褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）少し混じる	良好	欠損：口縁端部と胴部中位わずか　全面（外底除く）に丹塗り　口縁部に 4 カ所穿孔　外底はやや上げ底
91	380	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	鉢	13.5	(23.4)	7.7	口縁部は横ナデ、他はナデか、底はナデ	口縁部はナデ、他は指圧痕	内：褐色 外：灰褐色～淡褐色	砂粒（石英 4㎜以下・長石 2㎜以下）多く混じる	良好	欠損：2/3　甕として使用（外側からの穿孔）　外面下半部に煤付着あり
91	381	Ⅱ	—	X-8	蓋	8.4	—	26.0	頂部は刷毛目、頂端部と裾部は横ナデ、他は縦刷毛	頂部はナデ～横刷毛，中部はナデ・指圧痕、裾部は指ナデ	褐色～灰褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：1/12　煤付着（外面裾部にリング状に，内面は全体に）　頂部はやや凹む
91	382	Ⅱ	—	U・V-7	高坏	9.05	24.1	—	口縁部上面はヘラ磨き、端部横ナデ、坏部は斜めヘラ磨き、脚部は縦ヘラ磨き	口縁部は横ナデ、他は横ヘラ磨き	褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：坏部口縁部 1/4　内外面とも丹塗り　器面は磨滅
91	383	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	高坏	11.2	—	—	ヘラ磨き（磨滅著しい）	坏部は横ヘラ磨き（磨滅）、坏底部はナデ（接合痕あり）、脚部は縦ヘラ磨きか、裾部はナデ	淡明褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少なく混じる	良好	坏身と筒部を接合する円錘形状の粘土塊（ナデ形成・表はヘラ磨き）あり
91	384	Ⅱ	—	W-7	蓋	3.4	—	14.0	頂端部は磨滅，他は縦ヘラ磨き	横ナデ	淡褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）少量混じる	良好	外面に丹塗り　裾部に穿孔あり
91	385	Ⅱ	—	X-7	甕	5.4	25.0	—	口縁部上面（刻み目あり）は刷毛目，他は横ナデ	横ナデ	褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少量混じる	良好	口縁部残存：1/8　口縁部上面に刻み目が 4 点まとまって施される　口縁部に接合痕あり
91	386	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	甕	—	—	—	縦方向の叩き・横方向の線	縦方向のナデであて具痕を消しているか	灰色	白色粒・黒色微粒子を含む	堅致	須恵器　甕の胴部
91	387	Ⅱ	—	W-7	高坏		8.8	—	縦刷毛	坏部はヘラ磨き、縦方向のナデ・指圧痕	明褐色～褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 2㎜以下）多く混じる	良好	残存：裾部　外側から内側に穿れた孔は 6 カ所
92	388	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	甕	19.7	(32.4)	8.4	口縁部上面はヘラ磨き、突帯部は横ナデ、他は磨滅、底部付近は縦ヘラ磨き、底はナデ	口縁部は指圧痕，他は横ヘラ磨き、底部はナデ	内：褐色 外：淡灰褐色	砂粒（石英 4㎜以下・長石 1㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：1/2 弱　外面突帯下から内面全体に丹塗り　内面には炭化物らしきもの付着
92	389	Ⅱ	—	U・V-7	甕	23.0	(30.0)	8.0	口縁部は横ナデ、他はナデ，底部は板状工具木口によるナデか	口縁部から上部は横方向のヘラ磨き？と指圧痕	褐色	砂粒（石英 3.5㎜以下・長石 0.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：1/2　内外全面に丹塗り　外面口縁端部～胴部と底部に煤付着　内面には赤色顔料，外面は認められない
92	390	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	坏	5.6	(14.2)	4.5	口縁部は横ナデ、他はヘラ磨き（磨滅），底はナデ	横ヘラ磨き（磨滅）	褐色	砂粒（石英 3㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：口縁部 1/3　外底含め全面に丹塗りを施す

表 30　52 次包含層出土土器観察表（2）

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
92	391	Ⅱ	—	U-7・8	小鉢	4.6	8.9	4.5	縦刷毛（磨滅），底はナデか	口縁部は横ナデ、他はナデか	灰褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	残存：1/2　器面全体に磨滅
92	392	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	鉢	13.0	(19.5)	8.7	口縁部は横ヘラ磨き、他は縦ヘラ磨き（磨滅）、底部近くは横ヘラ磨き、底はナデか	口縁部は横ヘラ磨き，他は縦ヘラ磨き，底部は横ヘラ磨きと横・縦のヘラ磨き	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1㎜以下）比較的少なく混じる	良好	残存:1/2　内外面に丹塗り（外底除く）外面胴部に黒斑　全体に磨滅
92	393	Ⅱ	—	U・V-7	鉢	10.1	(20.4)	(7.0)	口縁部は横ナデ、他は板状工具によるナデか、底部付近に木口の圧痕，底はナデ	板状工具木口によるナデ（木口の圧痕）	内：褐色 外：淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：1/2 弱　外底の器表の凸凹著しい
92	394	Ⅱ	—	U-7	鉢	5.2	(16.0)	—	口縁部は横ナデ、他は縦刷毛、口縁部直下に接合痕	横ナデ	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的多く混じる	良好	残存：1/5　全面に明褐色のスリップ（丹塗りと異なる）
92	395	Ⅱ	—	V-7	蓋	3.8	—	12.0	ナデ（磨滅）ヘラ状工具の圧痕も	ナデ（磨滅）ヘラ状工具の圧痕も	淡灰褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的多く混じる　雲母少量混じる	良好	ほぼ完形（端部わずかに欠損）木面全体に磨滅　内面中央部凹む
92	396	Ⅱ	—	U-8	器台	3.5	—	—	横方向のヘラ磨き（磨滅）	ヘラ削り～ナデ～ヘラナデ	内：褐色 外：淡灰褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少なく混じる	良好	鼓形器台～外面に赤色顔料
92	397	Ⅱ	—	T-7	壺	15.15	(14.4)	3.2	口縁端部は横ナデ、上部は縦・斜め刷毛目、下部はヘラ削り、底はナデ	口縁部は横刷毛、上部は刷毛目と板状工具によるナデ、下部はナデ、部は指圧痕	内：淡灰褐色 外：黒褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1㎜以下）比較的少なく混じる	良好	残存：1/3　外面は二次焼成を受け煤付着　小さな底部
92	398	Ⅱ	—	X-8	鉢	11.65	10.85	6.6	口縁端部は横ナデ、体上部から中部は横ヘラ磨き（磨滅）、下部は縦・横ヘラ磨き（磨滅）、底面は指圧痕・ナデ	指押さえ、底部はナデ	内：淡赤褐色 外：淡灰褐色	砂粒（石英 .51㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少ない	良好	残存：1/2 弱　内底は表面に円形上の剥離多い　外底は上げ底
92	399	Ⅱ	—	U-8	鉢	12.4	11.5	—	口縁部～体中部は平行叩き・粗い縦刷毛，他はナデか削り・指押さえ	口縁部付近は横方向の板ナデ、他はナデ	鈍い黄橙色～灰黄褐色	3㎜以下の石英・長石粒・雲母を多く含む	良好	ほぼ完形（口縁部が若干欠損）口縁部の先を押さえ注口を形成
92	400	Ⅱ	—	V-7	鉢	6.3	13.4	6.4	口縁端部は横ナデ、口縁部直下はヘラ状工具の横ナデ、他は強い指の横ナデ（凸凹著しい）とヘラ状工具による圧痕，底面はナデ	ヘラ状工具による縦ナデ（圧痕）	淡灰褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 3.5㎜以下）比較的多く混じる	良好	ほぼ完形（口縁部わずかに欠損）
92	401	Ⅱ	—	V-7	鉢	3.8	6.4	2.4	口縁部は横ナデ、他はナデ・指圧痕	横ナデ、底部はナデ	内：灰色 外：淡褐色	砂粒（石英・長石ともに 1.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	口縁部僅かに欠損　ほぼ完形　外面に丹塗り（外底は極わずかみられる
92	402	Ⅱ	—	U・V-7	甕	9.1	—	(8.0)	不明，底部は板状工具木口によるナデか	横方向のヘラ磨き（底部は指圧痕も）	褐色	砂粒（石英 3㎜以下・長石 1㎜以下）比較的少なく混じる	良好	残存：1/4　内面全体に丹塗り　外面胴部～底部にわずかに煤付着
92	403	Ⅱ	—	V-7・8 土層ベルト	ミニチュア土器	3.1	4.4	2.0	口縁部は横ナデ、他はナデ	横ナデ	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 4㎜以下）比較的多く混じる	良好	口縁部わずかに欠損　ほぼ完形　外底は少し丸みをもつ
92	404	Ⅱ	—	X-7	ミニチュア土器	2.2	4.05	1.6	口縁部は横ナデ、他は指圧痕	指圧痕	暗褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 3㎜以下）比較的少なく混じる	良好	完形（鉢）外底は平ら
92	405	Ⅱ	—	X-7	ミニチュア土器	2.2	2.9	1.3	口縁部は横ナデ、他はナデ	横ナデ	暗褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	完形（鉢）外底はほぼ平ら
92	406	Ⅱ	—	V-8	口縁部片	4.1	—	—	横刷毛・横ナデ（磨滅）	横ナデ・削り（磨滅）	淡灰褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 3㎜以下）比較的多く混じる　金雲母わずかに混じる	良好	壺口縁部片
92	407	Ⅱ	—	V-8	甕	5.2	21.9	—	口縁部は斜め刷毛のちナデ消、頭部は縦刷毛	口縁部は斜め刷毛のち横ナデ消し、頭部は縦・斜め刷毛のち削り	淡灰褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少なく混じる　金雲母・白雲母 1㎜以下少量見られる	良好	口縁部残存：1/6　外面全体に煤付着
92	408	Ⅱ	—	V-8	甕	14.0	23.6	—	口縁部側面は擬凹線文，直下に沈線・横ナデ、他は縦刷毛	口縁部は横ナデ、他は削り	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 3㎜以下）多く混じる　金雲母わずかに見られる	良好	口縁部残存：1/4
92	409	Ⅱ	—	W-7・8 土層ベルト	器台	14.3	10.8	9.2	上下端部は横ナデ、他は板状工具木口による縦方向のナデ（磨滅）	上下端部は横ナデ、他は縦方向のナデ、裾部に爪による一連の圧痕が 3/4 周巡る	褐色	砂粒（石英 4㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：口縁部 4/5　外面胴部に煤（7 × 3cm）付着
92	410	Ⅱ	—	U-7	支脚	17.35	7.4	7.2	ナデ・指圧痕	受部は横ナデ、裾部はナデ	淡赤褐色～褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的多く混じる	良好	ほぼ完形
92	411	Ⅱ	—	U-9	器台	18.0	(9.8)	(13.0)	上下端部は横ナデ、他は縦刷毛（磨滅）	ヘラ状工具による絞り、裾部はナデか	明褐色～褐色	砂粒（石英 3㎜以下・長石 1.5㎜以下）多く混じる　金雲母 0.5㎜以下少量含む	良好	欠損：裾部 1/2 弱
92	412	Ⅱ	117	X-5	器台	13.0	13.5	—	受端部に刻み目，頭部は横ナデ、刷毛目	受部は刷毛目（圧痕）、頭部はナデ、裾部は指圧痕	内：明褐色～淡灰褐色 外：明褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：口縁部 1/3，裾部　口縁部内面に板状工具による木口の圧痕とそれに伴う刷毛目が放射状に施される
92	413	Ⅱ	—	V-7 検出面	高台付坏	2.45	—	(8.0)	回転ヘラ削り（時計回り）、底部は横ナデ	横ナデ・ナデ	灰色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）少量混じる　灰色を呈する	良好	須恵器，残存：底部 1/3　外面底部に墨書あり
92	414	Ⅱ	—	遺構出土	口縁部	—	—	—	オリーブ色の釉	オリーブ色の釉	—	白色粒（1㎜以下）わずかに見られる	良好	同安窯系青磁碗　口縁部破片　釉は薄く全体に



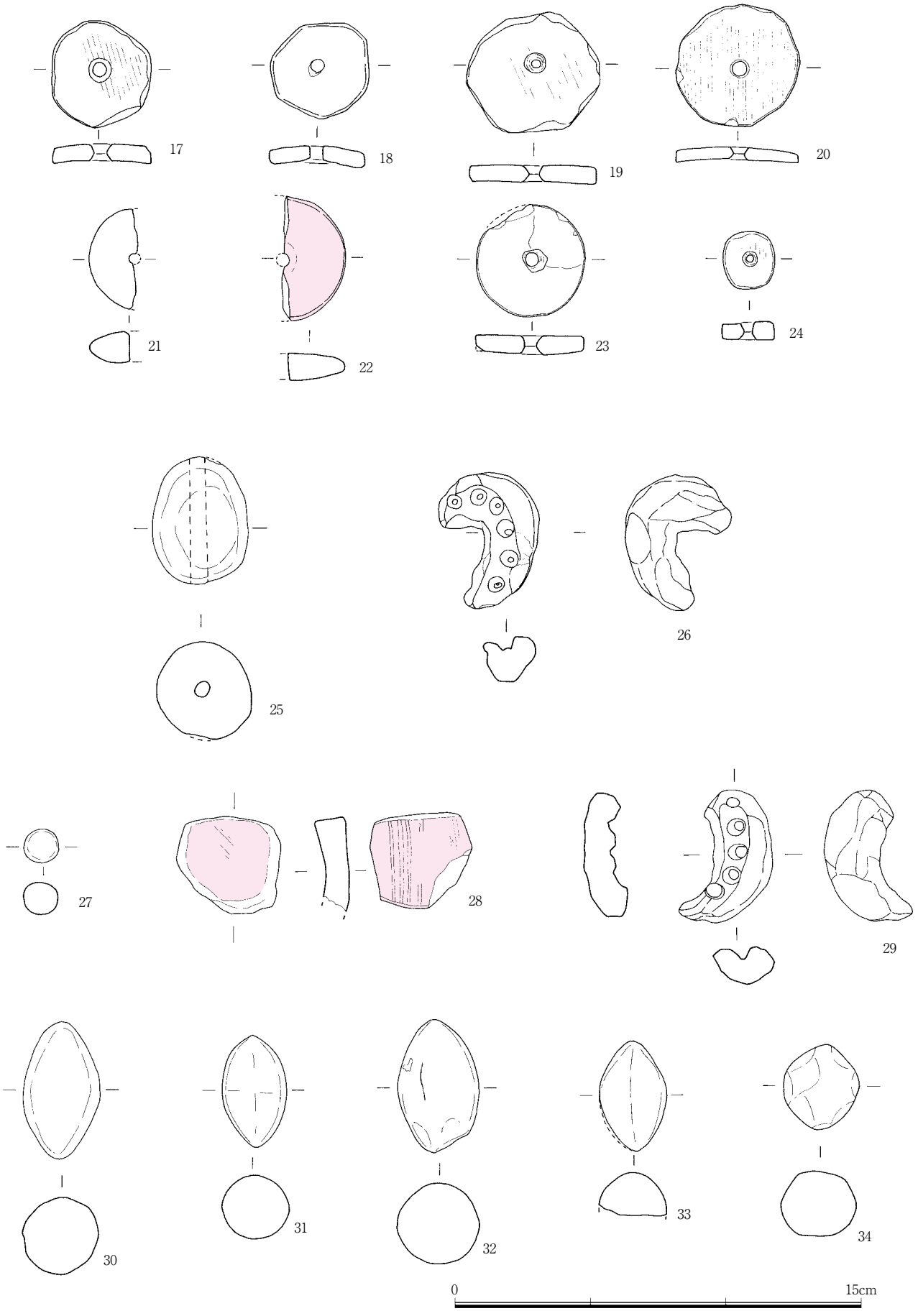
第 93 図　52 次遺構出土土製品実測図（1）［1/2］



第 94 図　52 次遺構出土土製品実測図（2）[1/4]

表 31　52 次遺構出土土製品観察表（1）

図	No.				器種	法量（cm, g）				調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	高さ	重さ	外面	内面				
93	1	Ⅱ	130	—	鐸型土製品	5.3	—	—	—	板状工具ナデ	ナデ	褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：裾部　内外面に赤色顔料 穿孔が頭部に 1 カ所
93	2	Ⅱ	—	V-8	甕篳型頭部	3.48 ～ 3.5	—	—	—	縦ヘラ磨き	—	—	3㎜以下の石英・長石粒を若干含む	良好	甕篳型土器の頭部か　頂部に 13-14 本の沈線が放射状に　縦方向に黒斑
93	3	Ⅱ	121	W-7-S	鐸型土製品	—	—	—	—	—	—	にぶい黄橙色	1㎜以下の白色粒・橙色粒・褐色粒を若干含む	良好	鐸型土製品か　頂部に約 5㎜の焼成前の穿孔　全体に 6 本の凹線
93	4	Ⅱ	125	V-8-S	鐸型土製品	—	—	—	—	—	—	にぶい黄橙色	精緻　非常に細かな砂粒を含む	良好	鐸型土製品か　頂部に約 2.5㎜の焼成前の穿孔
93	5	Ⅱ	—	V-7	土錘	3.5	4.15	—	28.4	丁寧な板状工具ナデ	横方向の指ナデ	明褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的少量混じる	良好	五角錐　頂部に穿孔
93	6	Ⅱ	130	V-7	円盤状土製品	径 12.5	0.9 ～ 1.5	—	—	ナデ（磨滅）	ナデ（磨滅）	表：淡褐色 裏：淡灰褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）多く混じる　雲母 1㎜以下比較的多く見られる	良好	完形 表面全体の 1/2 に黒斑
93	7	Ⅱ	—	W-8	軸か	3.1	2.45	—	—	—	—	暗褐色	砂粒（石英 0.5㎜以下）少量混じる　金雲母 0.3㎜以下少量混じる	良好	欠損：先端部　軸の先端部か把手なら天地逆　全体に丹塗り
93	9	Ⅱ	121	W-7-S	把手片	4.2	2.8	—	—	ナデ	—	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 0.5㎜以下）比較的多く混じる	良好	穿孔がある
93	10	Ⅱ	—	X-8	—	—	—	—	—	指圧痕	—	—	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	坏と筒部の接合部（ソカット）貼りつけた痕跡あり　丹塗り
94	11	Ⅱ	130	V-7	匙の柄か	2.1	0.9 ～ 1.0	—	2.2	ナデ	—	褐色	長石 1.5㎜以下わずかに混じる 金雲母わずかに混じる	良好	欠損：柄部両端　全体に赤色顔料　全体にやや反り気味
94	12	Ⅱ	121	X-7-S	柄杓・匙	8.0	6.4	5.5	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 ～橙色	4㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	欠損：柄部分
94	13	Ⅱ	121	X-7-S	柄杓・匙	10.3	6.9	4.9	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色 ～褐灰色	2㎜以下の石英・長石粒を多く含む	普通	欠損：柄部分
94	14	Ⅱ	121	X-7-S	柄杓・匙	11.0	8.2	5.5	—	ナデ	ナデ・剥離	にぶい黄橙色	1㎜以下の石英・長石粒を多く含む	良好	欠損：柄部分　内面の大部分が剥離
94	15	Ⅱ	125	V-7-N	柄杓・匙	14.2	7.5	6.0	—	—	—	橙色	3㎜以下の石英・長石粒を多く含む	普通	ほぼ完形　（口縁部若干欠損）
94	16	Ⅱ	125	V-7-N	柄杓・匙	11.1	8.7	7.5	—	—	—	にぶい黄橙色	3㎜以下の石英・長石粒・橙色粒子を含む	良好	欠損：柄部分
95	17	Ⅱ	—	W-7-S	柄杓・匙	10.5	7.4	6.5	—	ナデ・指押さえ	—	灰白色	4㎜以下の石英・長石粒・雲母を多く含む　2㎜以下の橙色粒子を若干含む	良好	欠損：柄部分　側面に 3 本の鋭い工具痕



第 95 図　52 次遺構出土土製品実測図（3）［1/2］

第52次Ⅰ・Ⅱ区出土の木製品

自然流路ＳＤ０１・０２下層の湧水点に堆積した粘質土は、木葉や種子など有機質のものを多く含んでいた。湧水は木製品の遺存状況にも功を奏したようで、鍬・鋤・さらえなどの農具、杓子・アカトリなどの掬い具、火鑽臼・鉄斧柄、漆塗り容器や刳物容器などさまざまな木製品が出土した（福岡市1246･1275）。

42次調査のＳＤ０２では、原始絵画を刻んだ琴の部材、有文木製品（翳）、トリ形木製品、人面や男性シンボルを象った木製品、精巧な刳物箱などの祭祀に関する資料がまとまって出土して注目された。これらの木製品には弥生中期後葉～後期の土器を伴っており、北部九州において初例となるものや稀少な資料が主体を占めている。

本報告ではＳＤ０２と東側のＳＤ０１の上流の52次調査で出土した158点の木製品について種別・器種別に分類し、表で紹介する。種別では農具　工具　槌類　杵・臼　容器　掬い具　発火具　机（案）　椅子　漁労具　建築部材　儀器　楽器　に分類した。

剣形木製品、原始絵画を刻んだ琴の部材、精巧な刳物箱は、流路ＳＤ０２に埋没した木製品が42次調査区から連続していることを示している。

剣形木製品

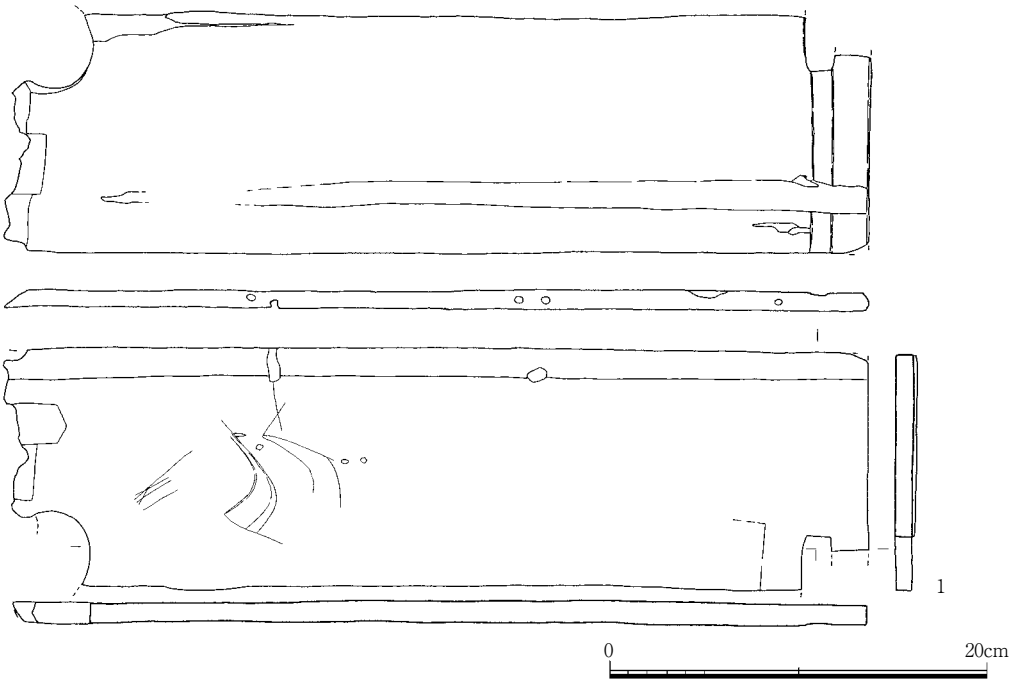
剣形木製品は、硬質の木材を加工した製品で、刃部の両端には鋸歯状の刻みが加えられている。刃部中央とその両側に鎬が通る精緻なつくりである。把頭の見通しは楕円形を呈し、柄は把頭にむかって撥を二つ合わせたように広がる。銅剣の把頭に通じる特徴がうかがえる。現存長60㎝、柄は20．3㎝をはかり、接合しない刃部の破片（約20ｃｍ）も出土していることから、本来の全長は１ｍ近い長さであったと推定される。

琴の部材

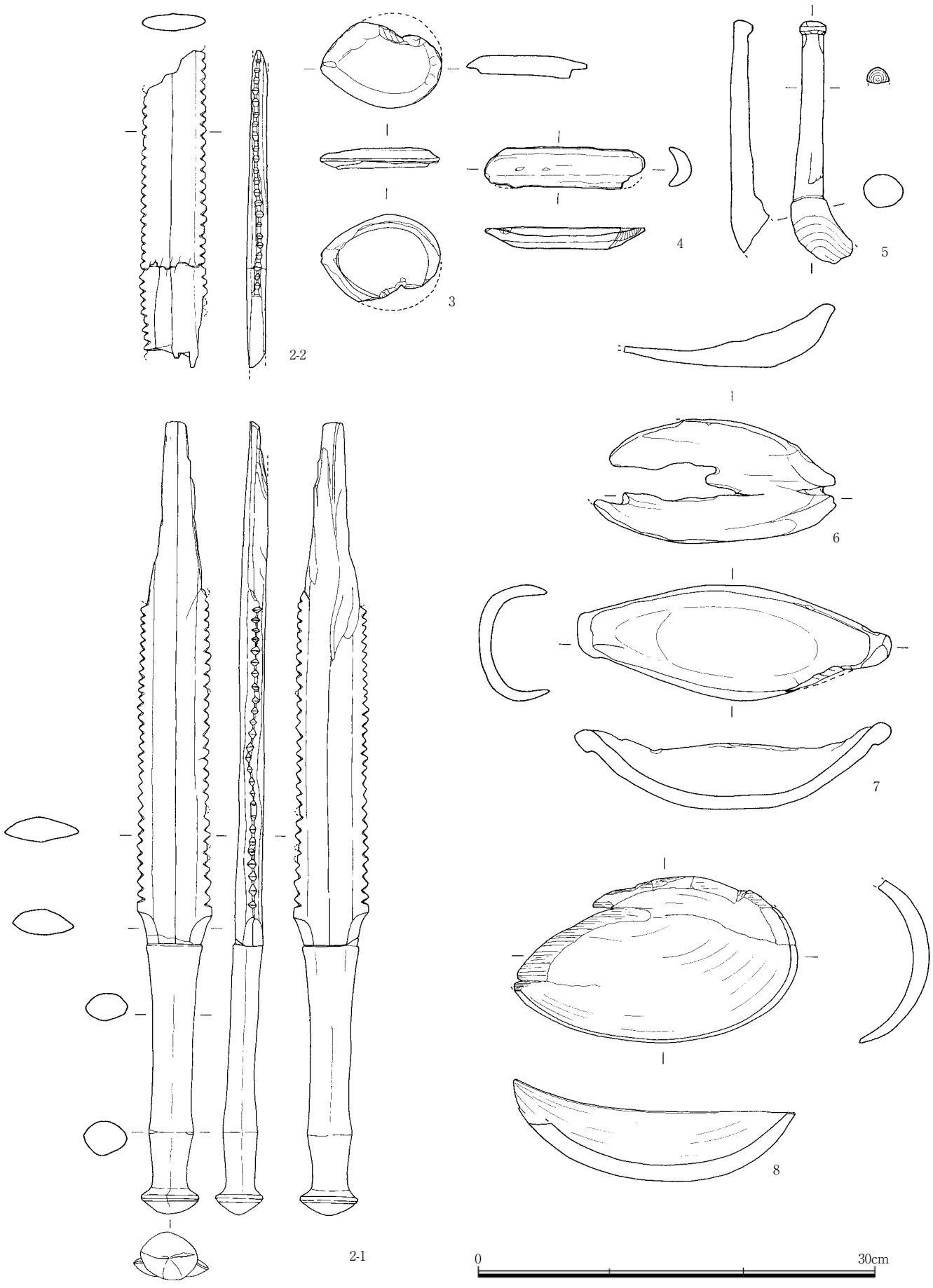
琴の部材のひとつに「トリ」が線刻技法で描かれていた。中央の透かし孔をはさんで右にトリの頭から胴にかけての線刻がある。今回出土した琴の部材は、槽作りの琴の側板と考えられる。スギの柾目板を加工したもので天板と底板が側板を挟み込む構造である。

弥生時代の琴には意図的に割られたものや、焼かれた痕跡のあるものがあるが、本遺跡の琴にも、人為的に割られた痕跡が認められた。

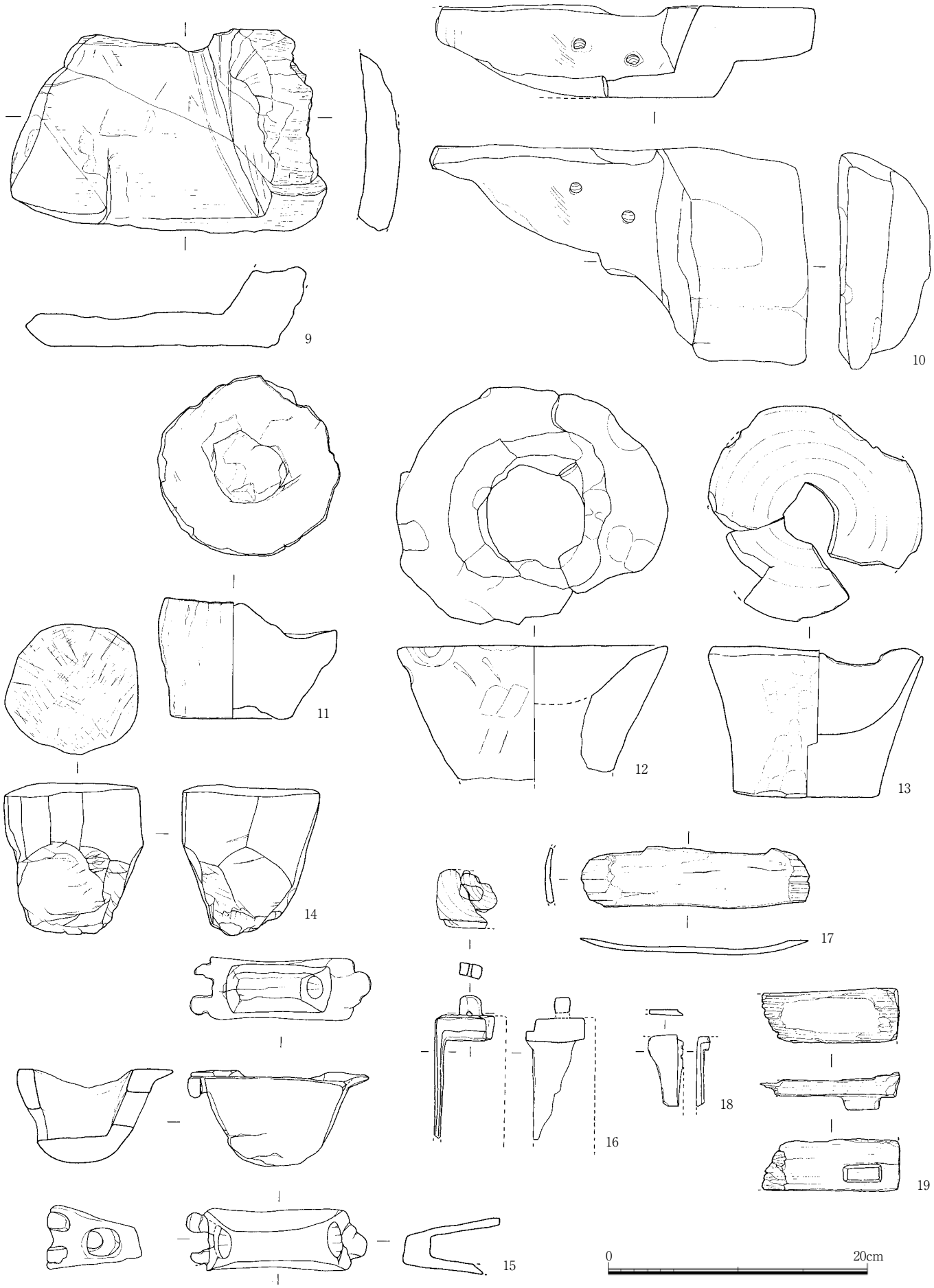
出土量が最も多いのは農具で次いで掬い具、容器、建築部材の順となる。農具の主体は起耕具で、なかでも鍬が多い。Ⅰ区では接合すると完形に近い柄杓の未製品も含まれている。



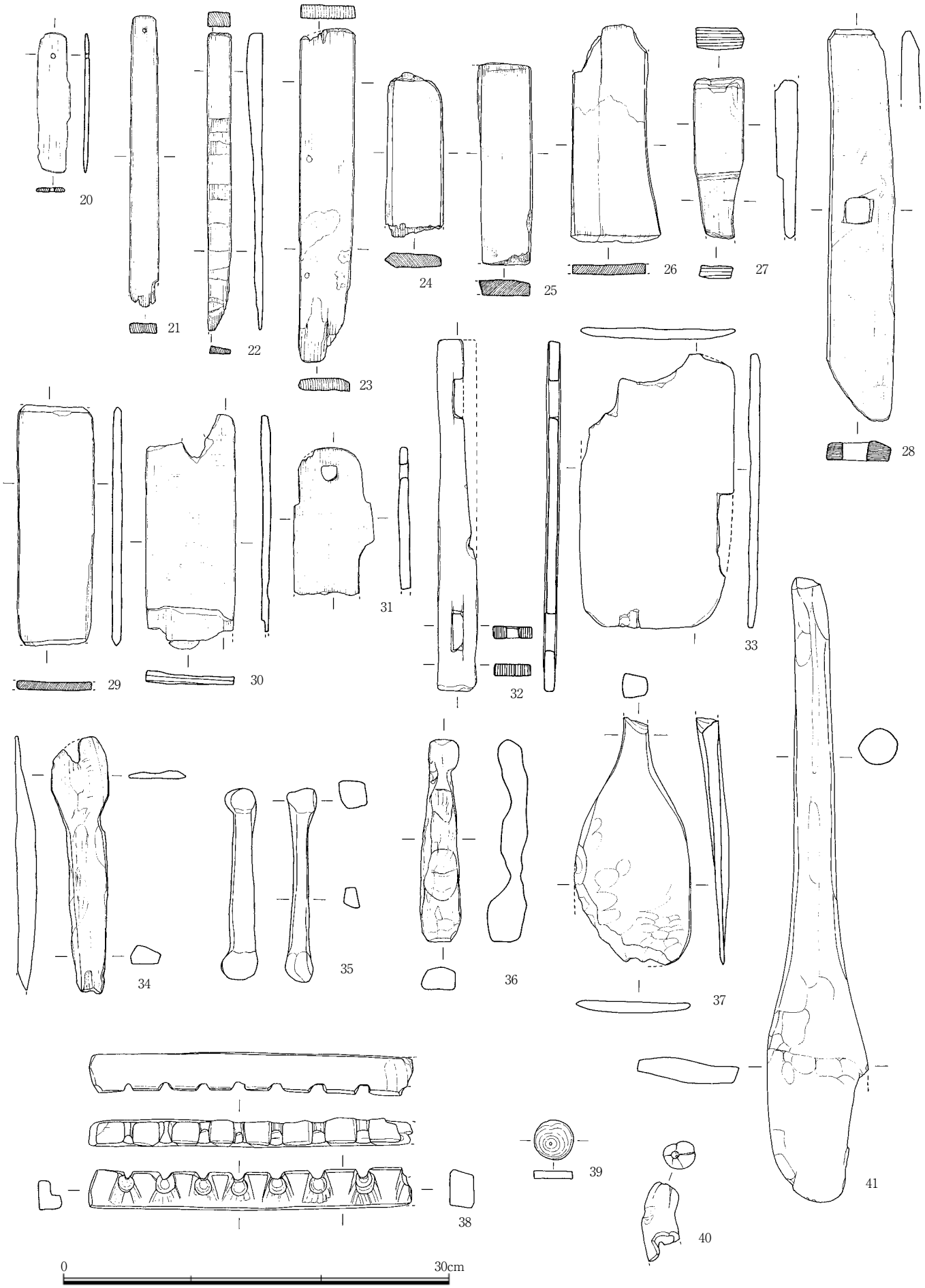
第 96 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（1）［1/4］



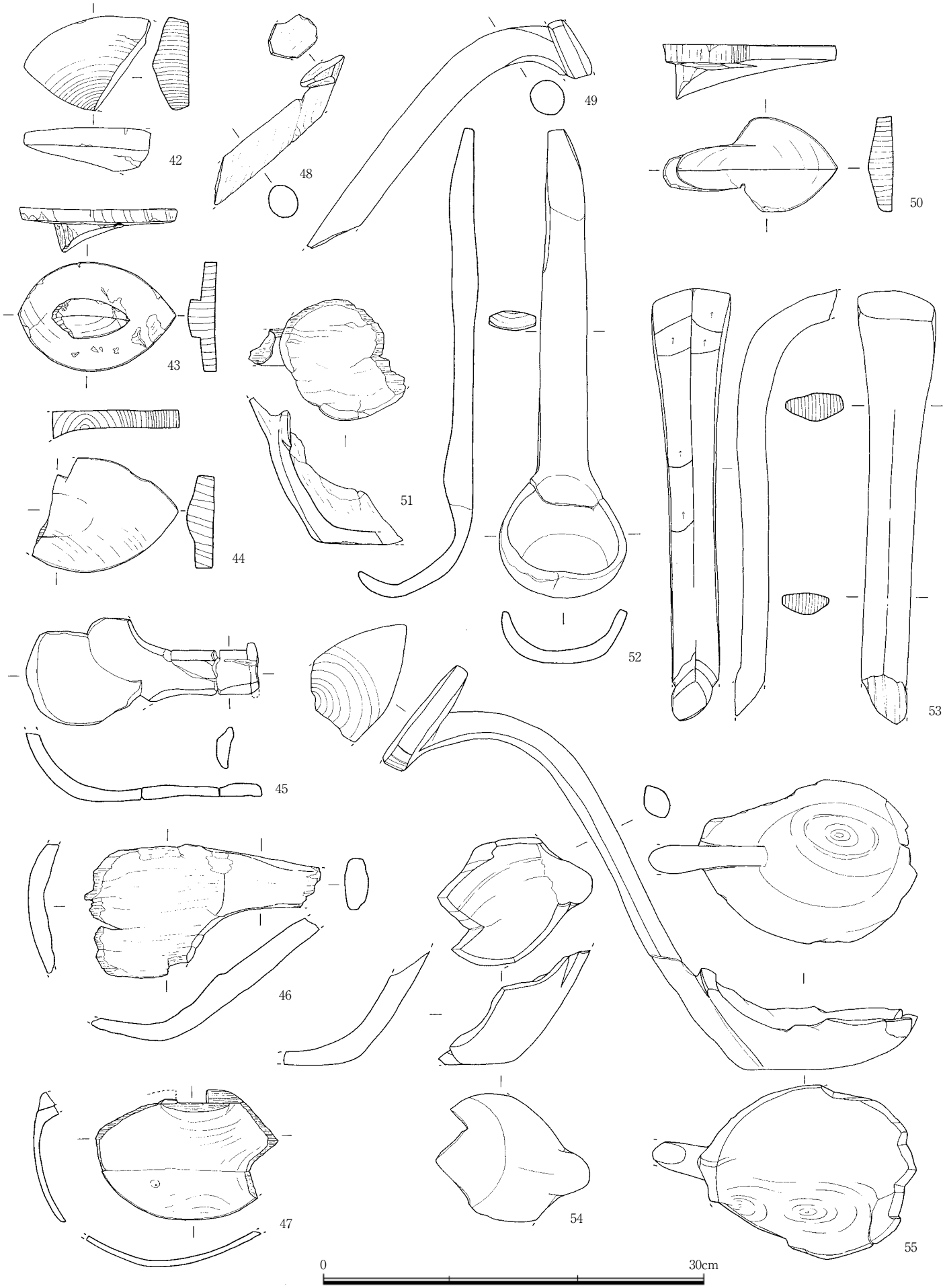
第 97 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（2）［1/2］



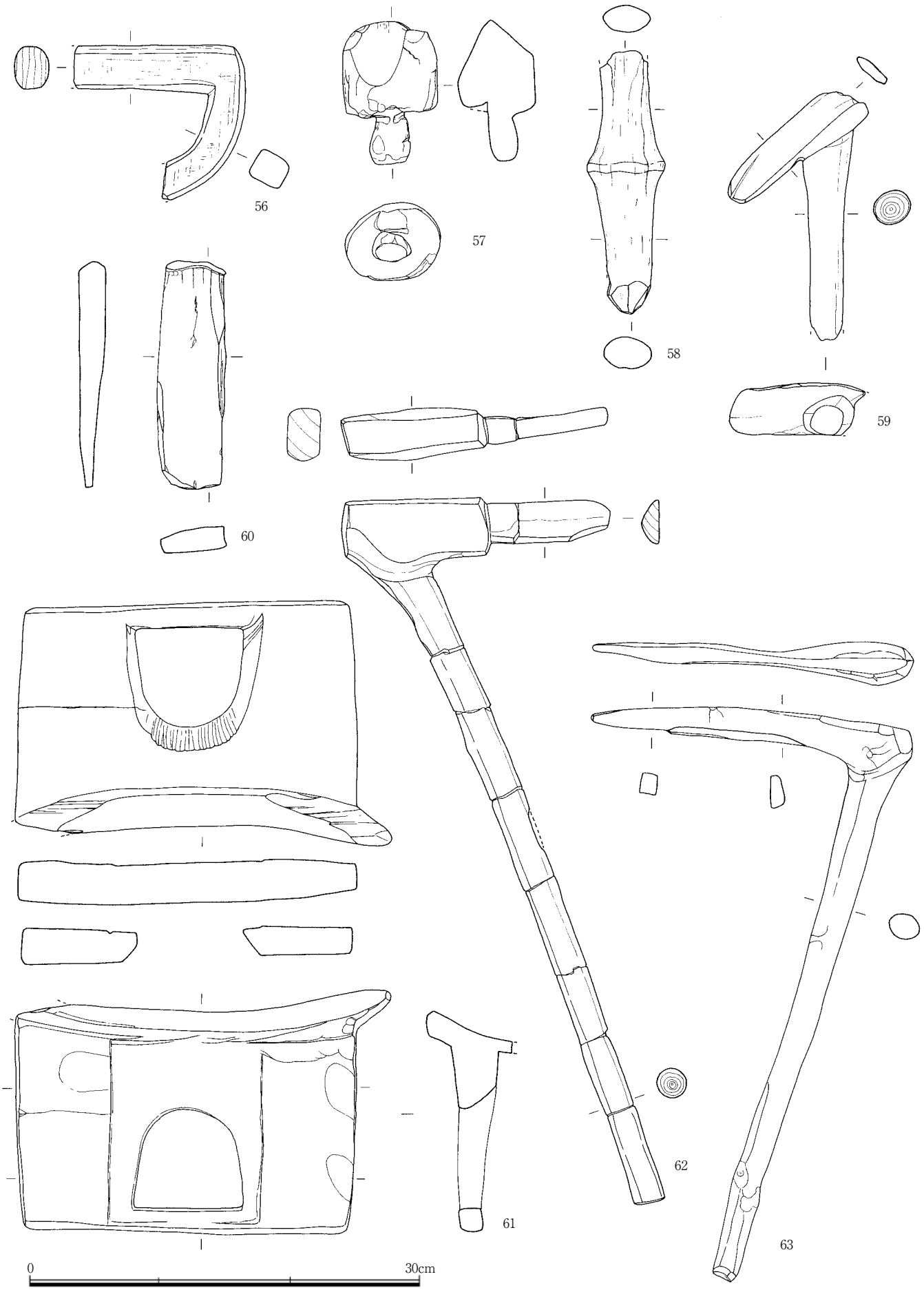
第 98 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（3）［1/4］



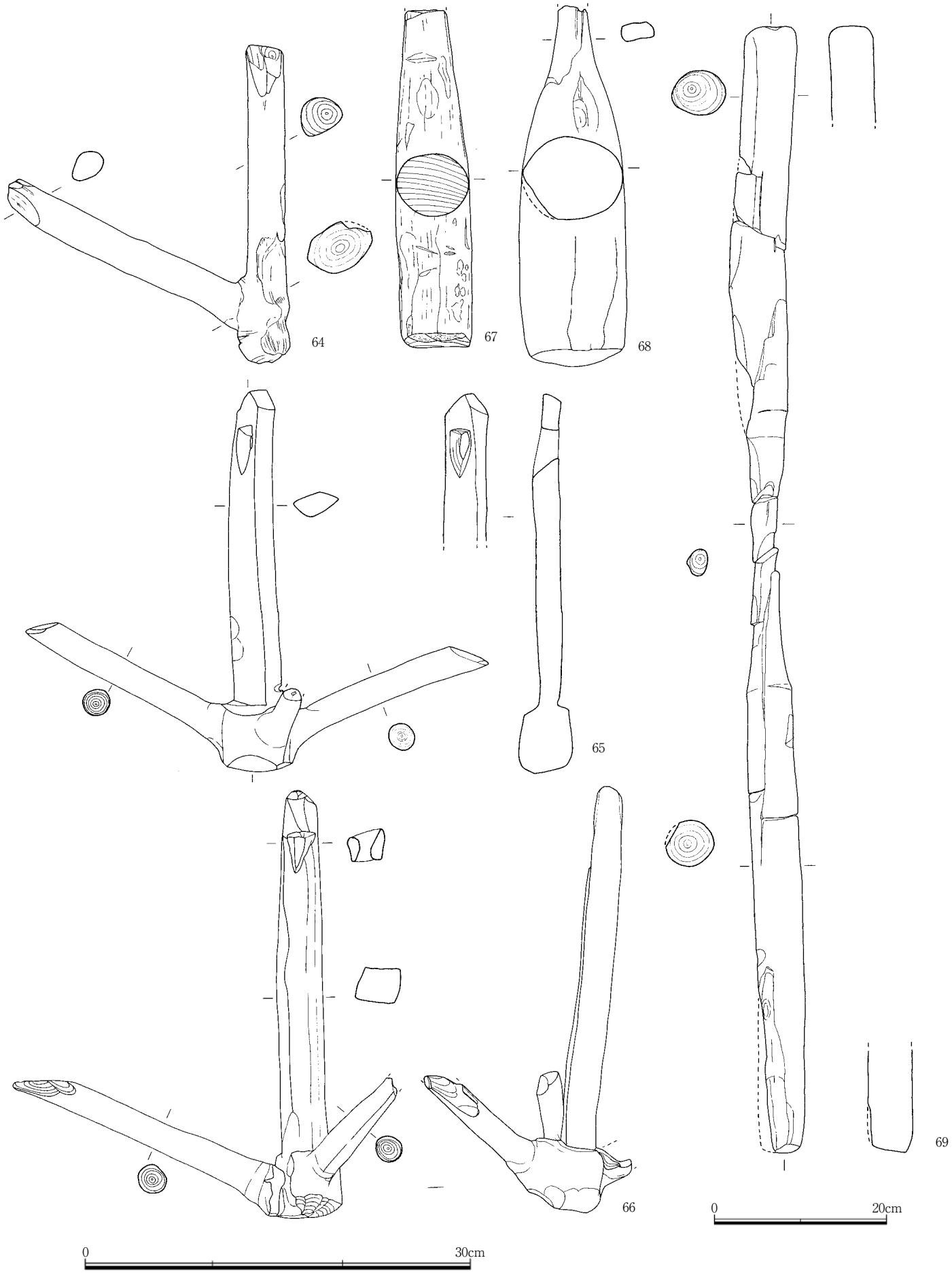
第 99 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（4）［1/4］



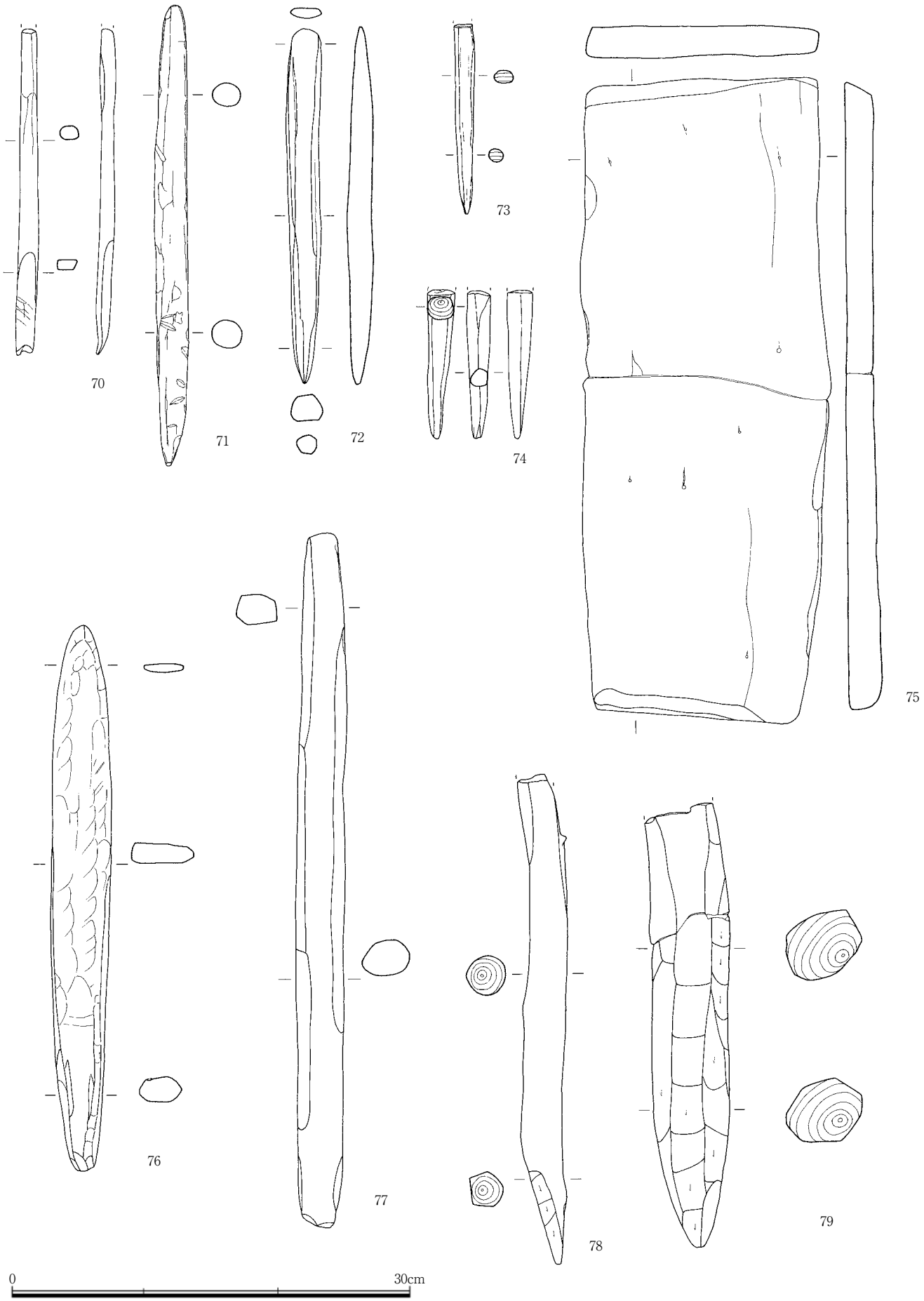
第 100 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（5）［1/4］



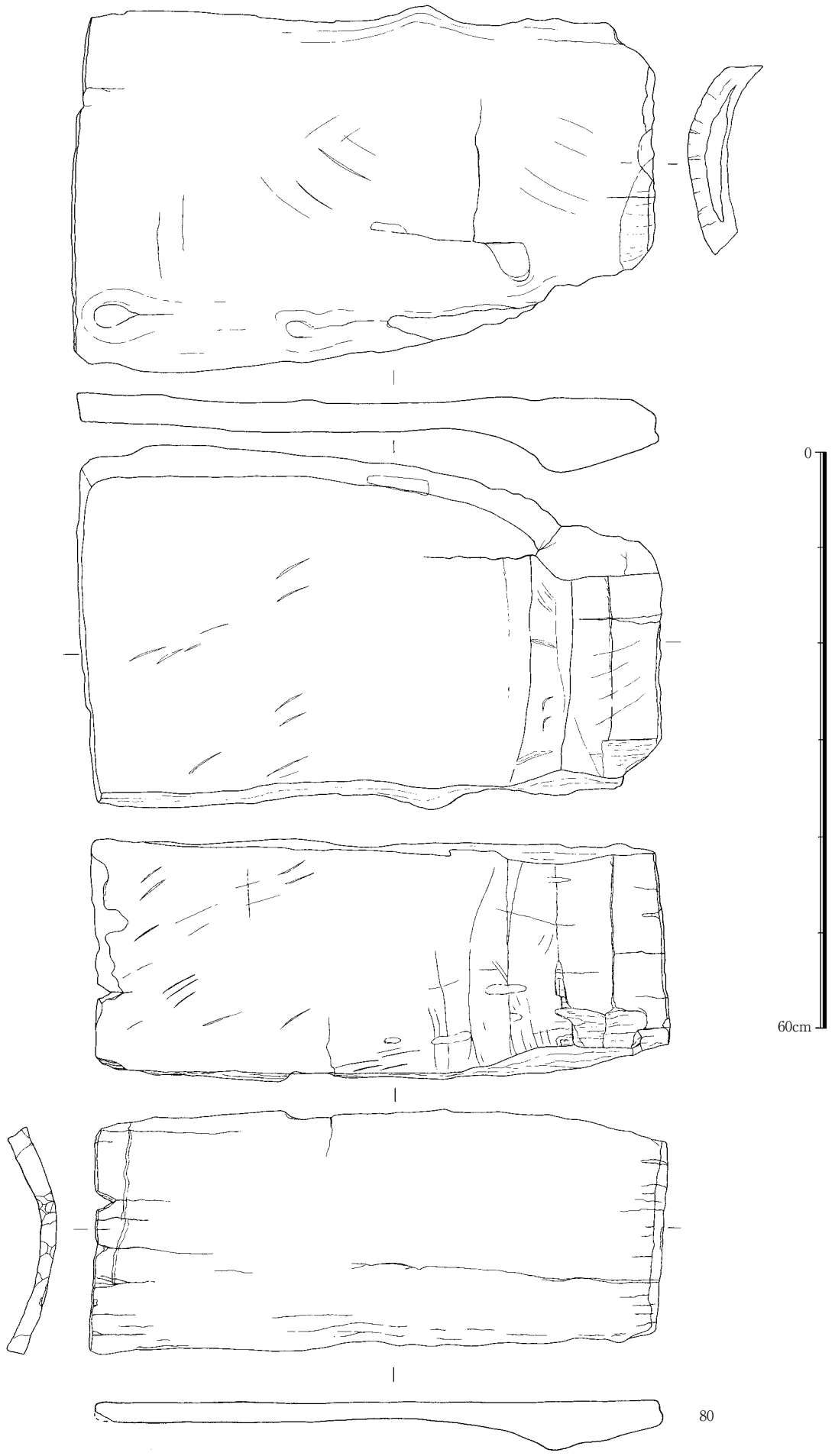
第 101 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（6）［1/4］



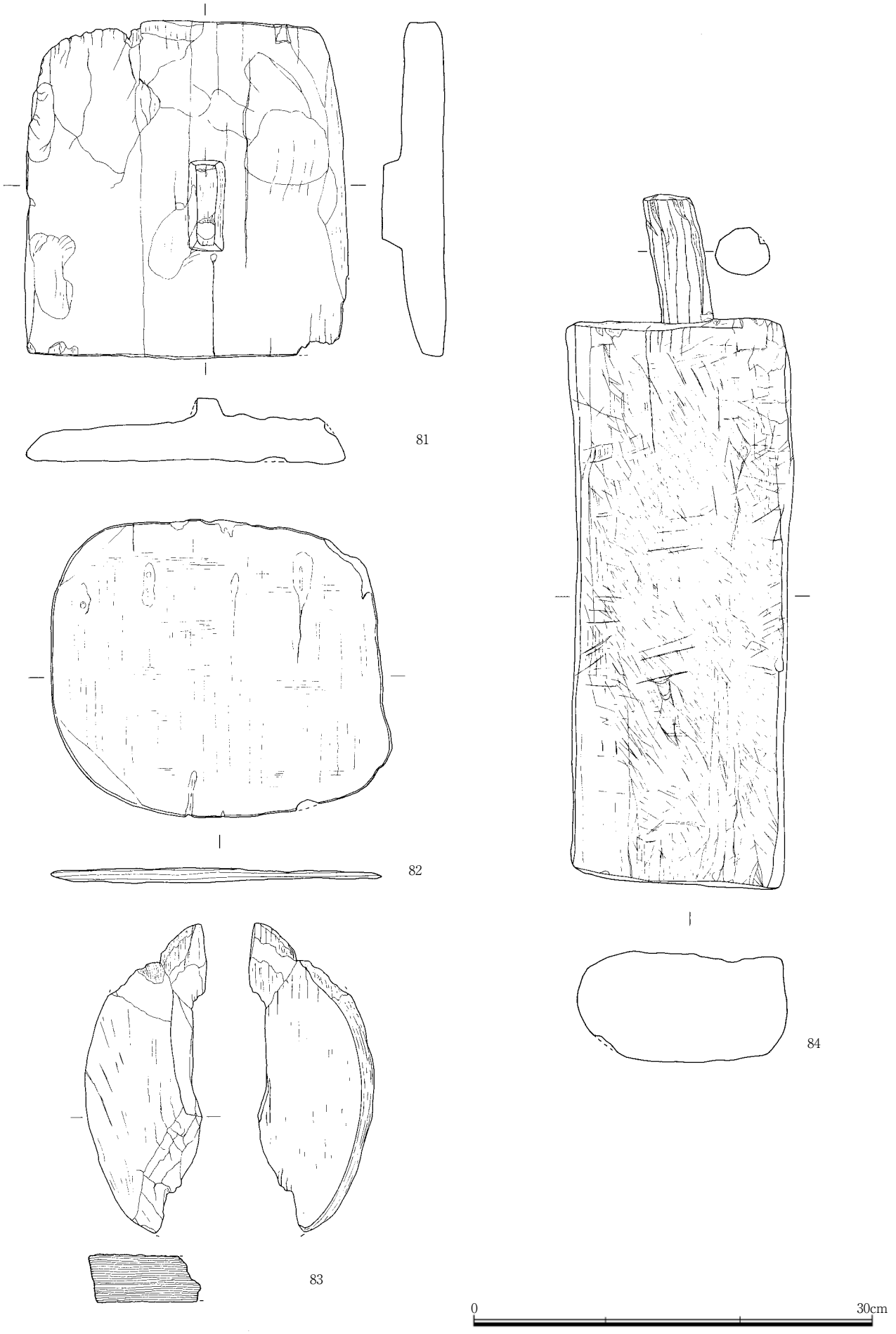
第 102 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（7）［1/4・1/6］



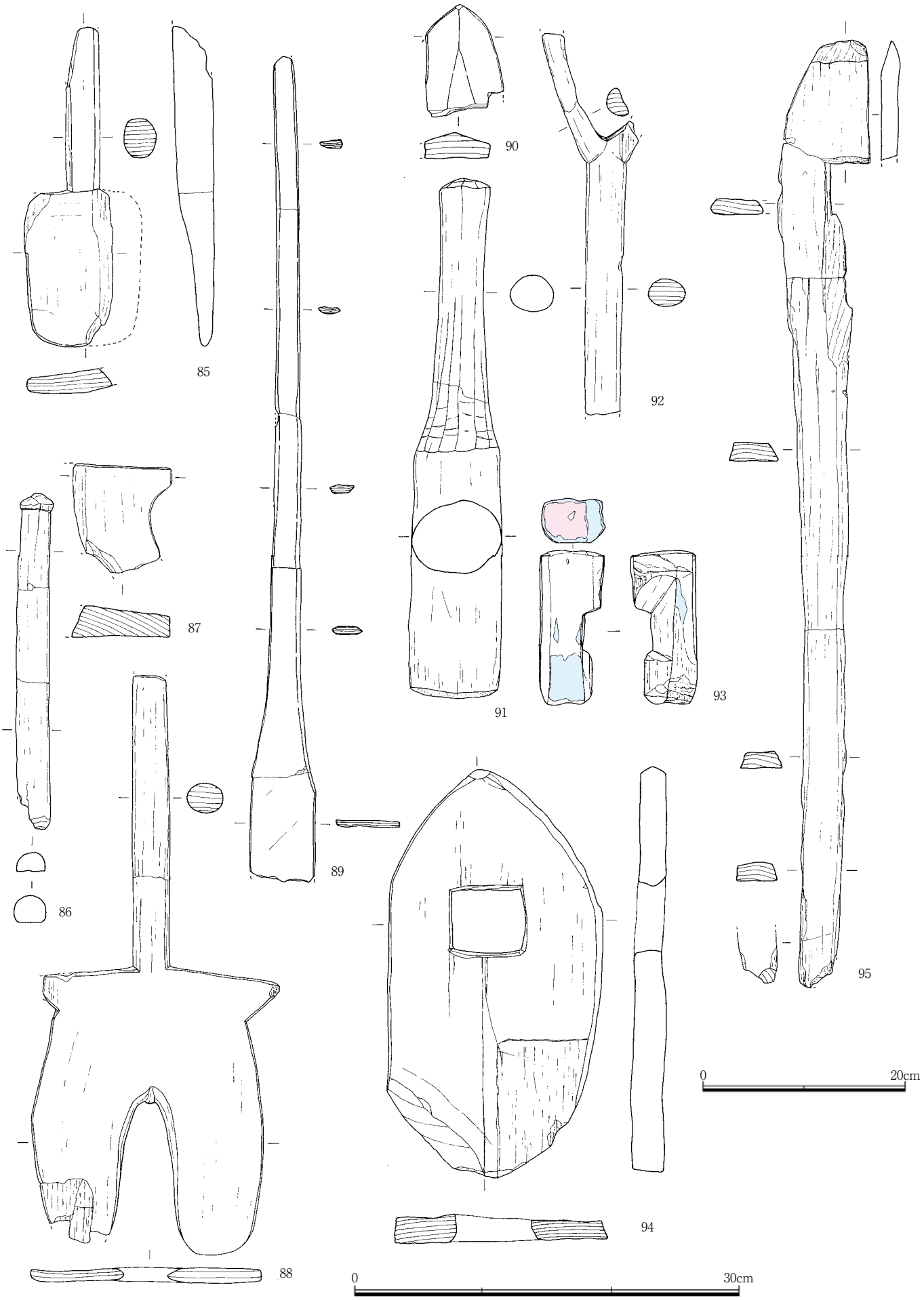
第 103 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（8）［1/4］



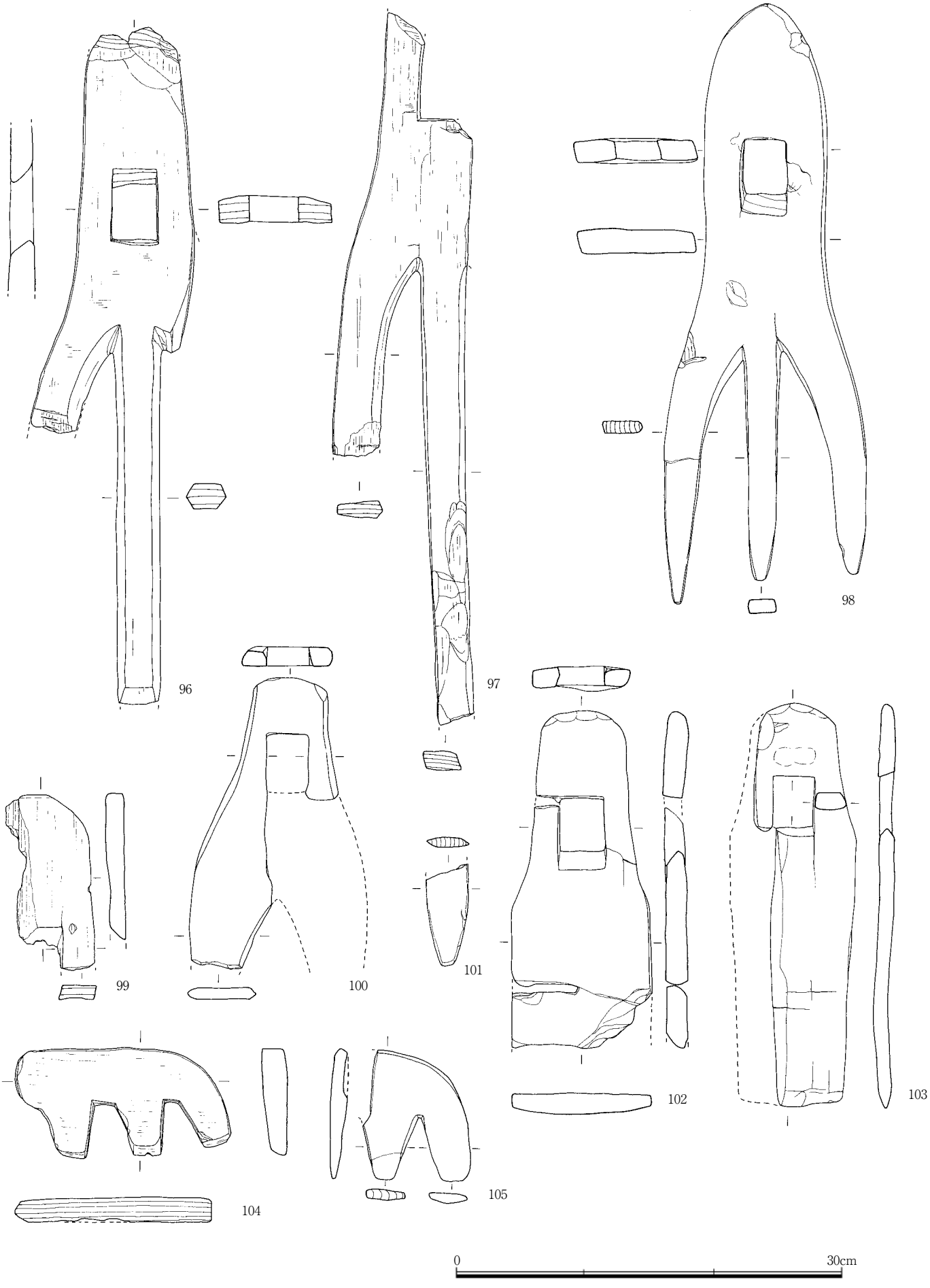
第 104 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（9）［1/6］



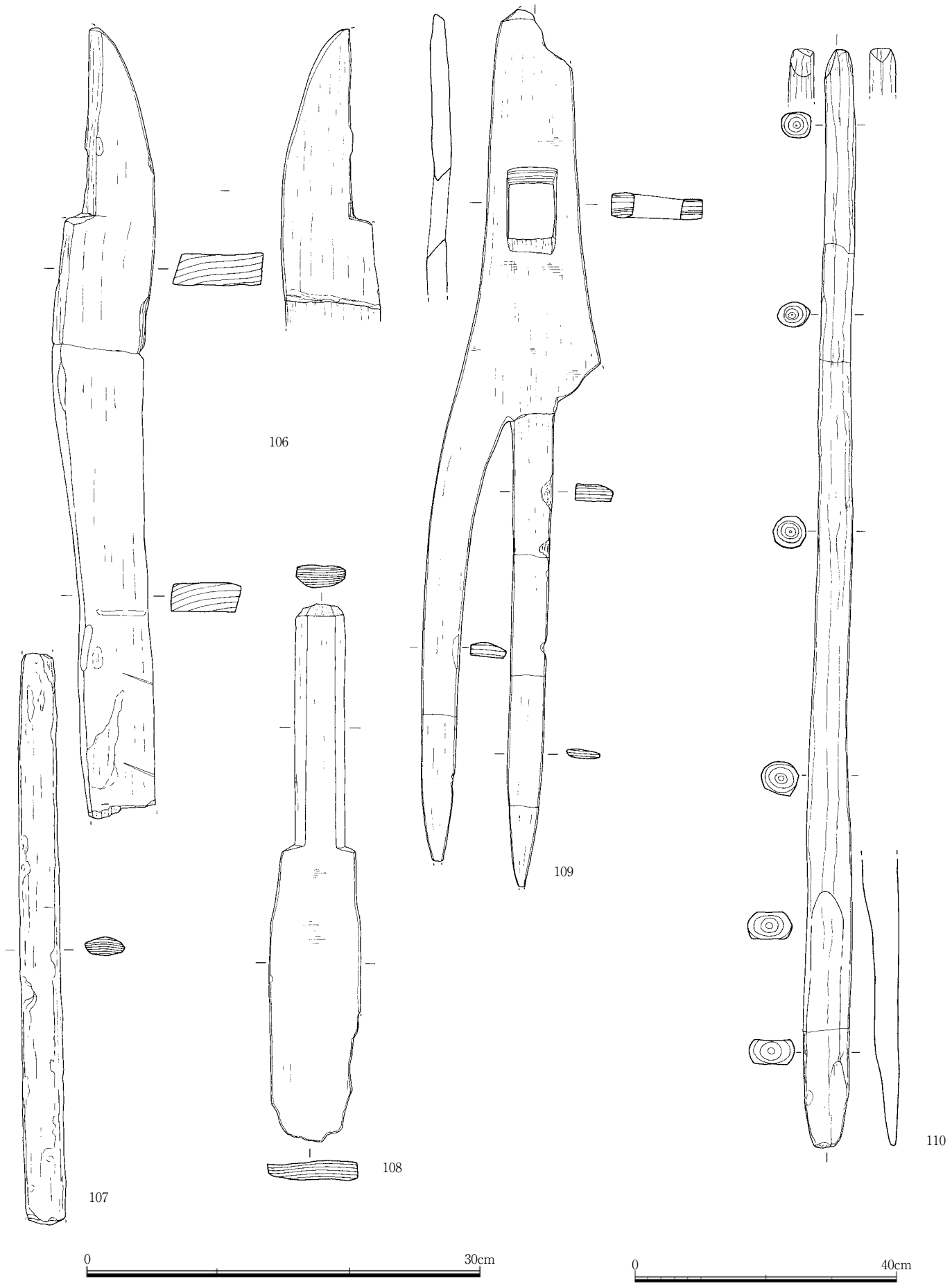
第 105 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（10）［1/4］



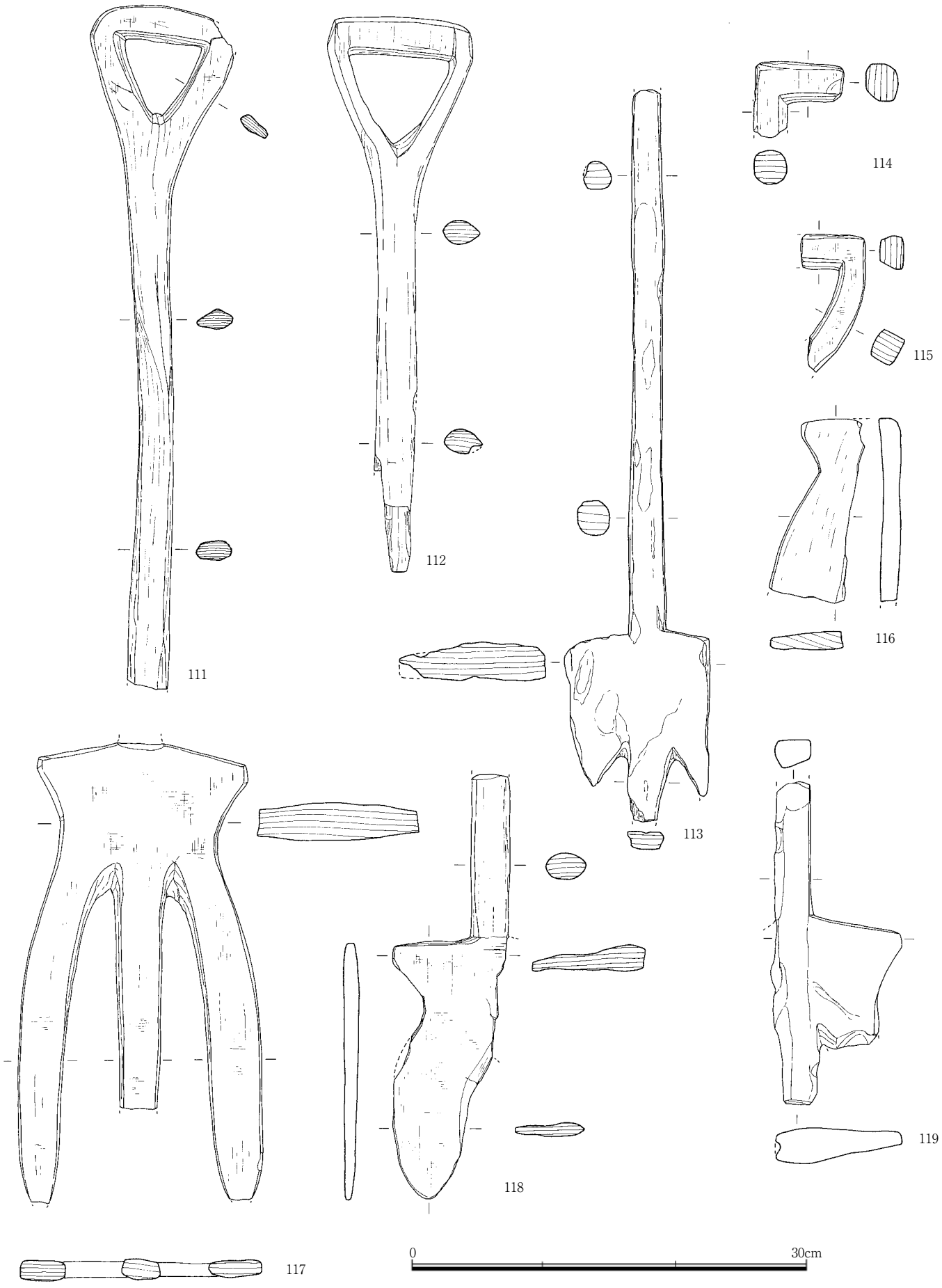
第 106 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（11）［1/4・1/5］



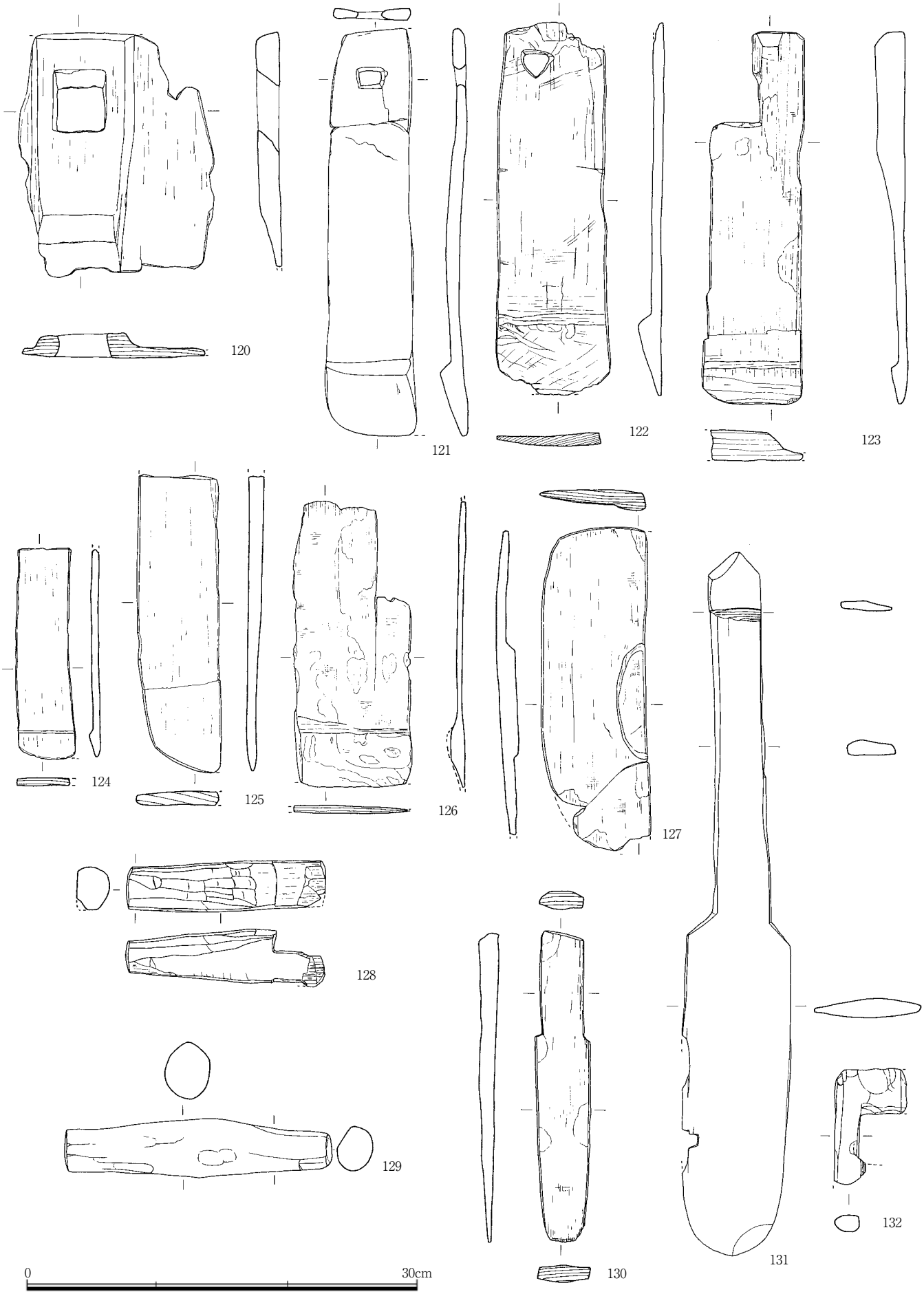
第 107 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（12）［1/4］



第 108 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（13）［1/4・1/8］



第 109 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（14）［1/4］



第 110 図　52 次調査Ⅱ区出土木製品実測図（15）［1/4］

表 32　52 次遺構出土土製品観察表（2）

図	No.				器種	法量（cm，g）				調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	高さ	重さ	外面	内面				
95	18	Ⅱ	121	X-7	紡錘車	—	3.9	0.6	11.2	縦刷毛目	ナデ	表：褐灰色 裏：灰黄褐色	1㎜以下の石英，長石粒，雲母を含む	良好	土器破片を再利用
95	19	Ⅱ	—	X-7	紡錘車	3.6	—	0.6	9.4	刷毛目痕	ナデ	灰褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 0.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	完形　穿孔径：5㎜　土器片を再利用
95	20	Ⅱ	—	X-7	紡錘車	—	4.6	0.6	17.4	縦刷毛目か	ナデ	表：黒褐色 裏：灰黄褐色	2㎜以下の白色粒と黒色微粒子を含む	良好	土器破片を再利用
95	21	Ⅱ	—	X-7	紡錘車	—	4.6	0.4	11.1	縦刷毛目か	ナデ	灰黄褐色	微粒の白色粒を若干含む	良好	弥生の甕の胴部片を再利用
95	22	Ⅱ	131	V-7	紡錘車	—	3.6	1.2	6.7	—	—	灰白色	1㎜以下の白色粒，黒色粒，雲母含む	良好	残存：1/2
95	23	Ⅱ	129	V-8	紡錘車	4.6	2.1	1.0	—	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	1㎜以下の石英・長石粒・雲母を含む	良好	土製紡錘車
95	24	Ⅱ	131	V-7	紡錘車	—	4.1	0.7	14.9	研磨か	—	にぶい黄橙色	白色微粒子，雲母を含む	良好	土器片の転用，表面の一部が赤色を帯びる　祭器用土器か
95	25	Ⅱ	—	X-7	紡錘車	—	2.1	0.7	3.6	縦刷毛目か	ナデ	表：赤い丹塗り 裏：にぶい黄橙	微粒の白色粒を含む	良好	土器破片を再利用，表には赤い丹塗り
95	26	Ⅱ	—	U-8	土錘	4.6	3.5	—	51.3	ナデ	—	淡灰褐色一部灰褐色	砂粒（石英・長石ともに 1㎜以下）比較的少なく混じる　雲母少量混じる	良好	土錘　先端部わずかに欠損　中心に穿孔あり
95	27	Ⅱ	—	U-8	不明土製品	5.0	2.0	1.65	21.8	—	—	褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1㎜以下）多く混じる	良好	用途不明　片面に 6 ヶ所に竹管で文様　勾玉に似た形状
95	28	Ⅱ	127	U-8-S	土玉	—	1.2	—	1.8	—	—	にぶい黄橙	精緻，白色微粒子，雲母若干含む	良好	—
95	29	Ⅱ	128	U-8-N	匙か	3.5	—	—	—	ヘラ磨き	ヘラ磨き	淡褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	全体に赤色顔料　内面はわずかに凹む
95	30	Ⅱ	—	V-7	不明土製品	4.8	2.15	1.3	19.0	—	—	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）多く混じる	良好	用途不明　片面に 4 ヶ所に竹管で文様　勾玉に似た形状
95	31	Ⅱ	—	U-8	土弾	5.0	2.8	—	30.7	ナデ	—	暗褐色	砂粒（石英・長石ともに 1㎜以下）少量混じる　金雲母 0.5㎜以下比較的多く見られる	良好	土弾　完形
95	32	Ⅱ	124	W-7-N	土弾	4.1	2.3	—	17.6	—	—	灰黄色	白色微粒子，雲母を含む	良好	投弾ともいう
95	33	Ⅱ	—	X-7	投弾	4.9	3.1	3.0	33.5	—	—	橙色（部分的に黒い）	1㎜以下の石英・長石粒・金雲母を多く含む	良好	完形品（やや歪）　丹塗りか
95	34	Ⅱ	—	X-7	投弾	4.0	2.5	1.6	13.2	—	—	橙色	金雲母多く，1㎜以下の石英・長石粒を含む	良好	残存：縦半分
95	35	Ⅱ	—	W-7・8	土弾	3.1	2.3	—	15.2	—	—	橙色	1㎜以下の石英・長石粒・褐色粒・黒色粒子を含む	やや軟	面あり　土球か

表 33　52 次調査Ⅱ区出土木製品観察表（1）

図	No.	出土地点			種類	法量（cm）			加工分類	備考
		区	土器群	位置		全長	身幅	身厚		
96	1	Ⅱ	121	X-7	楽器	45.6	12.8	1.2	柾目	側面の木釘の残る孔（径 0.4 ～ 0.46cm）は 4 箇所、左下に不整形の響孔があり、その右側に 2 羽のトリの線刻がある。頭頂部と直行する線刻は嘴を表現したように見える。トリの左には刻線が複数見られる。裏側端には木口を組み合わせるための溝が彫られている。
97	2-1	Ⅱ	121	X-7-S	—	59.8	5.6	3.6	—	剣形木製品　両端に刻み目を入れ刃をつくる　剣把の先端に円形の把　下から 6.2cm の箇所は膨らむ
97	2-2	Ⅱ	121	X-7-S	—	24.0	5.0	1.6	—	剣形木製品の先端部　両側に刻みを造る　堅く黒っぽい材
97	3	Ⅱ	—	X-7	容器	外 :9.0 内 :7.0	6.5	1.7	—	新昌洞と同じ筒形容器の蓋　蓋外面に黒漆（内面の縁にも一周し若干残る　内蓋厚み :0.3 ～ 0.7cm
97	4	Ⅱ	122	X-7-N	容器	12.1	3.0	1.0	刳物	刳物 小さい舟形
97	5	Ⅱ	—	X-7	道具	18.4	1.6 ～ 3.0	1.1 ～ 2.8	—	堅材 枝を利用したつくり
97	6	Ⅱ	—	X-7	容器	18.3	9.2	0.9 ～ 2.4	—	粗いが成品 身の締まった堅材 底部は平らに加工
97	7	Ⅱ	—	V-8-S	容器	23.7	8.7	0.8 ～ 1.0	—	ほぼ完形 木目の見えにくい堅めの黒茶色の材 肌目は緻密（ヒノキか）
97	8	—	—	—	容器か	21.2	12.5	1.3	刳物	容器か
98	9	Ⅱ	—	X-7	—	24.3	15.6	6.3	刳物	未成品の刳物 工具痕多い斜めに二つに割れ
98	10	Ⅱ	—	X-6-S	容器	29.2	21.4	7.1	—	ホゾ孔 2 カ所（紐等の通し孔か）機能的目的（持ち運び等）で段差を造る　裏面ホゾ孔の未貫通 1 カ所
98	11	Ⅱ	122	X-7-N	杵・臼	13.5-14.0	6.8-9.2	9.4	—	小型臼の未成品か 芯を刳り貫こうとしている 中央部が飛び出し
98	12	Ⅱ	121	X-7-S	杵・臼	径 20.8	10.1	0.8 ～ 3.8	—	臼の土台部分 材は暗めの赤褐色（広葉樹か）
98	13	Ⅱ	—	X-7	杵・臼	11.4	16.2	11.1	—	手持の臼または大型臼の補修用か 身のしまった堅材 表面胴部～底部に細かい調整痕（内面も比較的なめらか）
98	14	Ⅱ	122	X-7-N	建築材	11.8	10.5	10.0	心去り材	平らな面あり使用痕か
98	15	Ⅱ	—	X-7	継ぎ手状木製品	13.8	1.4 ～ 1.9	0.5 ～ 0.7	—	儀礼用 身のつまった堅材 両側面に各 1 孔あり 下部には突起物 丁寧なつくり
98	16	Ⅱ	121	X-7-S	容器	11.2	4.5	4.5	横木取り	刳物箱の身 蓋のはめ込みのため作り出しを短片に 孔付の把手を持つ
98	17	Ⅱ	130	V-7	容器か	17.6	4.5	0.5	—	容器か　薄く遺存状態よくない
98	18	Ⅱ	121	—	容器	5.5	1.0	2.7	横木取り	刳物箱の身（破片）
98	19	Ⅱ	121	X-7-S	容器	10.5	4.2	2.0	刳物	刳り物箱の底の部分か
99	20	—	130	—	—	10.9	2.6	0.35	柾目	孔も空いた板状木製品
99	21	Ⅱ	—	X-7	—	22.7	2.1	0.85	柾目	上方に貫通した孔
99	22	Ⅱ	—	X-7	—	23.2	1.7	1.1	柾目	表面 2/3 程度金属工具等で削り
99	23	Ⅱ	—	X-7	—	26.1	4.2	1.1	柾目	貫通した孔が 2 カ所 片端は切断している
99	24	Ⅱ	—	X-7	—	12.8	4.5	1.1	柾目	上部一方の角はきれいに削り
99	25	Ⅱ	—	X-7	—	15.6	4.2	1.2	柾目	
99	26	Ⅱ	—	X-7	—	16.9	7.0	0.75	柾目	片面の上方のみ焦げ
99	27	Ⅱ	125	V-7-N	施設器具材	12.6	3.8	1.7	板目	下半部に段差あり
99	28	Ⅱ	121	X-7-S	建築材	30.4	5.1	1.8	板目	中央近くに 2.2 × 2.1cm の方孔あり 下部端には工具痕
99	29	Ⅱ	122	X-7-N	—	18.7	5.8	0.7	柾目	両端部を両方から切断
99	30	Ⅱ	125	V-7-N	建築材か	18.2	6.8	0.8	板目	片方の端部は意識的に孔を開けているか
99	31	Ⅱ	—	Y-1	机	11.4	6.0	8.0	柾目	机の部材か ホゾ孔：10. × 1.3cm

表 34　52 次調査Ⅱ区出土木製品観察表（2）

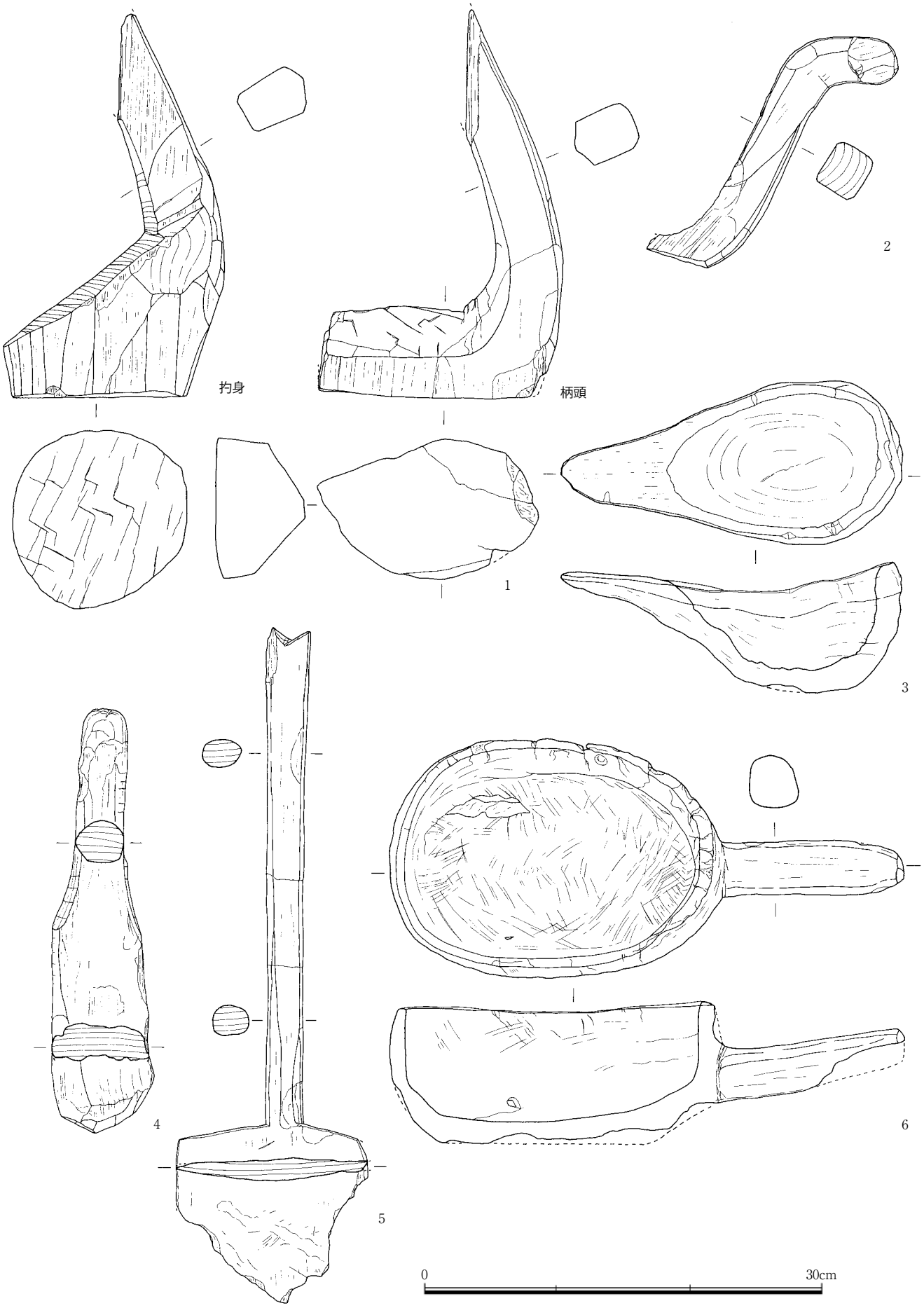
図	No.	出土地点			種類	法量（cm）			加工分類	備考
		区	土器群	位置		全長	身幅	身厚		
99	32	Ⅱ	125	V-8-S	机	27.2	3.1	0.9	柾目	机の部材 狭板 方形のホゾ孔を 2 つ持つ
99	33	Ⅱ	109	Z-1	農具	22.5	11.9	0.8	—	身厚は薄く造られる
99	34	Ⅱ	—	X-7	—	20.0	4.4	1.6	—	羽子板状にすぼまる　ノミ痕あり
99	35	Ⅱ	—	Y-4	—	15.0	2.2 × 2.1	—	—	不明品 部材か
99	36	Ⅱ	—	X-7	施設器具材	15.7	3.2	3.0	—	2 カ所にくびれ（意識的にえぐるか）
99	37	—	—	—	農具	19.3	9.1	0.3 ～ 1.7	板目	平鍬
99	38	Ⅱ	121	X-7-S	発火具	25.1	3.0	1.9	—	片面に 8 カ所の臼（すべて使用痕）　臼の内面は炭化 径は 1.1 ～ 1.3cm 臼と臼の間に▽形の浮彫 年輪の目が詰まった材
99	39	Ⅱ	—	U-8	紡織具	3.1	3.1	0.6	心持ち材	木製紡錘車の未成品 周りをきれいに切断
99	40	Ⅱ	—	X-7	瓢箪	6.2	2.9	2.8	—	中心部に約 5㎜の孔が貫通
99	41	Ⅱ	127	V-8-S	農具	48.7	7.8	1.7	—	鋤か 堅い材 表面に何か薄く付着
100	42	Ⅱ	—	X-7	掬い具	10.0	7.5	2.8	—	葉状の杓子 堅材 柄へつながる加工痕あり 表面はきれいに調整
100	43	Ⅱ	—	W-7・8	掬い具	12.4	8.6	3.3	—	杓子の柄
100	44	Ⅱ	122	X-7-N	掬い具	11.4	9.0	2.3	—	
100	45	Ⅱ	—	X-7	掬い具	18.3	8.4	0.7 ～ 1.2	—	スプーン状木製品 全面に黒漆 先端につくり出し 木目見えにくい
100	46	Ⅱ	122	X-7-N	掬い具	19.4	10.4	2.2	—	横杓子　柄の部分の上面は黒い（焼痕か）遺存状態は悪い
100	47	—	—	—	掬い具	14.3	10.2	0.9	刳物	刳物横杓子 把手のようなものがつく杓子か　容器か
100	48	Ⅱ	—	X-7	掬い具	15.2	3.1	2.3	—	杓子の把手
100	49	Ⅱ	—	X-7	掬い具	26.6	2.9	2.6	—	杓子の柄　年輪が見えづらく密のある材
100	50	Ⅱ	—	X-7	掬い具	13.6	7.4	4.3	—	杓子の柄か 工具痕あり（ノミ痕か）
100	51	Ⅱ	130	V-7	掬い具	12.3	9.7	2.5	刳物	杓子の身部分
100	52	Ⅱ	—	X-7	掬い具	37.0	10.0	1.7 ～ 2.3	—	完形 材は身の詰まった黒茶色の広葉樹
100	53	Ⅱ	122	X-7-N	掬い具	33.9	6.0	3.7	—	先端には引掛けの造りだしがあったようだ 材は堅く木目が明瞭
100	54	Ⅱ	—	X-7	掬い具	12.0	10.0	0.4 ～ 1.7	—	杓子の身部分 木目の細かい木材（それほど堅くない）
100	55	Ⅱ	—	X-7	掬い具	31.6	41.6	0.8 ～ 1.5	—	色濃い堅材 加工は丁寧　柄は夜須町参照〇型
101	56	Ⅱ	—	X-7	農具	13.1	3.7	2.7	板目	
101	57	Ⅱ	—	X-7	槌類	11.0	7.3	5.9	—	横槌
101	58	Ⅱ	—	X-7	—	20.3	5.8	4.2	心持ち材か	縦杵の転用品か 片方の端部は面取りしてある
101	59	Ⅱ	—	X-7	工具	19.0	2.5 ～ 3.7	2.0 ～ 3.0	—	横斧の柄　板状に薄く加工
101	60	Ⅱ	—	X-7	道具	17.5	5.2	2.1	—	木を割ための道具　頭部に凹みが一周 縦断面は V 字状に先端部を細く作る
101	61	Ⅱ	—	X-7	用具	28.8	18.8	2.2 ～ 3.1	—	椅子 脚部にアーチ状の飾り孔 片面は孔を囲み下から上へ縦線の加工　　片方のアーチ上面は刃物の加工痕
101	62	Ⅱ	121	X-7	工具	54.3	20.5	4.0	—	完形 材はクリかカシ
101	63	Ⅱ	—	X-7	工具	24.7	0.7 ～ 2.7	0.9 ～ 3.3	—	縦斧膝柄 枝の分枝を利用 完形
102	64	Ⅱ	—	Z-1	儀器	22.5	24.3	3.4 × 2.8	—	用途不明だが加工痕
102	65	Ⅱ	—	X-8	用船具	24.5			心持ち材	頭部に▽形状の孔 木の特性・枝を利用した一木造り 支柱部分の断面は方形（他は丸形の芯持ち）
102	66	Ⅱ	—	X-7	用船具	28.0	21.3	3.6	—	支柱の頭部に▽形状の孔 木の特性・枝を利用した一木造り 支柱の断面は方形
102	67	Ⅱ	125	V-8-S	槌類	26.5	5.0	4.0	心去り材	片面に使用痕・擦痕・傷が多い（反対側は何もない）
102	68	Ⅱ	—	X-7	槌類	28.2	槌幅 :8.2 柄幅 :2.4	槌厚 :6.4 柄厚 :1.4	—	やわらかい目の粗い木材 両面ひとつずつ浸食された孔（貫通せず）
102	69	Ⅱ	—	V-7-N	杵・臼	131.6	6.2	5.3	—	両端部ともに平形 握部は算盤玉を持たない後期以降のタイプ
103	70	Ⅱ	—	X-7	漁具	24.7	1.4	0.8 ～ 1.0	—	イスノキのような堅材 先端部を薄く削る 端面は長方形
103	71	Ⅱ	—	X-7	漁具	34.7	2.4	2.4	—	端部は鈍い尖りと鋭利な尖りに分かれる
103	72	Ⅱ	121	X-7-S	漁具	26.9	2.5	1.9	—	固い木 方端に縦方向の工具痕（先は尖る）
103	73	Ⅱ	121	W-7-S	漁具	14.4	1.4	0.95	板目	
103	74	Ⅱ	—	Z-1	漁具	11.3	1.8 × 2.0	—	芯持ち材	用途不明（ヤスか）
103	75	Ⅱ	—	Y-2，Y-3	容器	48.8	18.9	2.6	—	用途不明 ホゾ孔のような小孔が多く残るが　貫通していないものも多く人工的なものか判断しづらい
103	76		—		漁具	41.3	4.5	0.6 ～ 1.9	—	表面細かい加工 特に先端部は丹念　裏面も 2 カ所に刃痕
103	77	Ⅱ	—	X-5	建築材	52.4	2.4 ～ 3.7	2.2 ～ 2.6	—	飾柄か 棒状木製品
103	78	Ⅱ	—	Z-2	—	37.1	2.9	2.9	芯持ち材	
103	79	Ⅱ	—	Y-2	—	33.5	6.0	5.3	芯持ち材	先端加工がよくわかる
104	80	Ⅱ	—	W-7-N	容器	A:60.2 B:59.7	A:38.3 B:25.3	A:7.8 B:5.1	板目	底部内面は肥厚し底板が止められていた箇所は圧力のためか痕跡あり　内面は斑に黒彩を残す　83 と同一個体で底板になる
105	81	Ⅱ	125	V-7-N	建築材	25.3	24.1	4.6	—	扉の把手を切り出して作る（まわりは金属工具等できれいに切断）　片方上部は焦げ
105	82	Ⅱ	121	X-7-S	容器	22.5	25.6	1.1	板目	蓋か底板か
105	83	Ⅱ	—	W-7-N	容器	23.3	8.6	3.6	板目	79 と同一個体 桶の底板は裏表面とも黒彩
105	84	Ⅱ	—	U-8	工具	52.2	16.7	8.5	—	無数の使用痕 金属または黒曜石での切断痕か（鋭く細かい傷跡）裏側はほとんど使用痕無
106	85	Ⅱ	121	X-7-S	—	25.1	6.9	3.0	板目	櫂状木製品か小さい鋤か杓か
106	86	Ⅱ	121	X-7-S	—	26.2	2.5	2.1	—	
106	87	Ⅱ	121	X-7-S	農具	8.6	7.7	2.4	板目	鋤の身上方部分　端部に細かい金属工具痕　工具での切断痕
106	88	Ⅱ	121	X-7-S	農具	45.2	18.0	2.5	板目	
106	89	Ⅱ	121	X-7-S	—	64.2	5.0	0.6	板目	櫂状木製品か
106	90	Ⅱ	121	X-7-S	農具	8.8	6.0	2.3	板目	鍬の身先端部分
106	91	Ⅱ	121	X-7-S	槌類	40.7	7.2	6.0	心去り材か	槌部と柄部の境は縦方向に削るノミ痕
106	92	Ⅱ	121	X-7-S	建築材	29.8	3.0	2.2	板目か	二又に分かれている部分は丁寧に削ってある
106	93	Ⅱ	121	X-7-S	漆塗製品	12.1	5.0	3.4	—	取手か　前面に黒漆が塗られ片端面に赤漆も塗布
106	94	Ⅱ	121	X-7-N	建築材	31.9	16.5	2.5	板目	
106	95	Ⅱ	121	X-7-S	建築材	92.2	8.6	2.0	板目	柄孔（四角）があり建築材か 方端は鋭利な刃物の切断痕
107	96	Ⅱ	—	V-7-N	農具	52.8	8.9	2.3	板目	
107	97	Ⅱ	—	V-8	農具	55.5	9.0	1.5	板目	三又の鋤か
107	98	Ⅱ	—	X-7	農具	46.8	基部 :9.7 三又 :2.2 ～ 2.8	基部 :2.0 三又 :1.1	—	直柄三又鍬　ほぼ完形 刃の長さは其々異なる
107	99	Ⅱ	121	X-7-S	農具	13.7	5.9	1.5	板目	鍬の身上方部分 きれいに切断
107	100	Ⅱ	109	—	農具	22.6	12.8	1.5	—	直柄又鍬 柄孔：4.6 × 3.3cm
107	101	Ⅱ	—	X-7	—	7.9	3.2	—	—	何かの先端（木剣または農具）カシ材なら農具か
107	102	Ⅱ	109	—	農具	26.4	10.9	1.7 ～ 1.8	—	直柄平鍬　柄孔：4.2 × 3.5cm
107	103	Ⅱ	109	Z-2	農具	31.4	9.7	1.3	—	直柄平鍬　柄孔：4.0 × 3.2cm 削痕時の傷か側面に線が残る
107	104	Ⅱ	121	W-7-S	農具	8.5	16.8	1.85	板目	さらえか転用品　丁寧に丸く仕上げている さらえを何かに転用したか　裏側は傷が多い

表 35　52 次調査Ⅱ区出土木製品観察表（3）

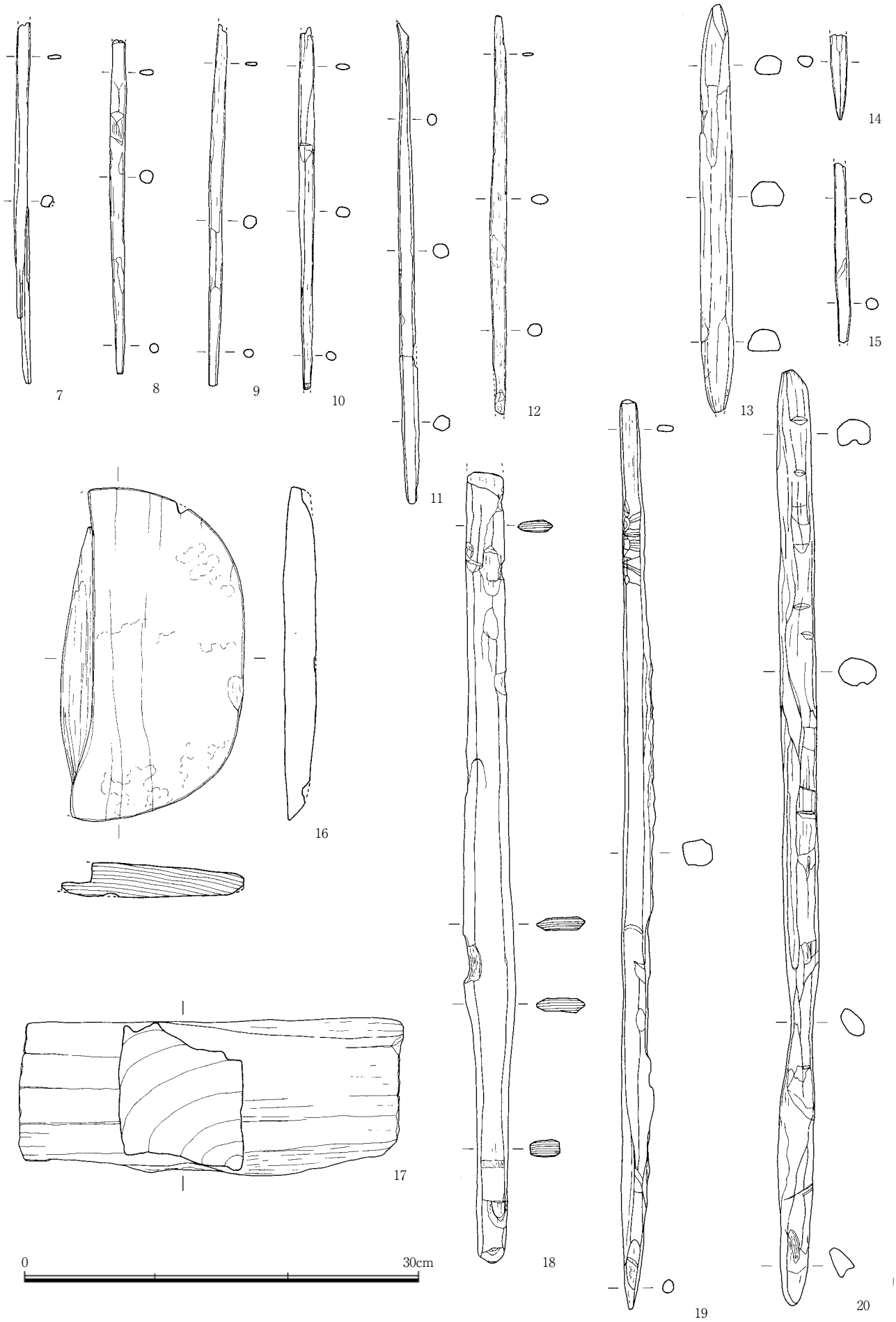
図	No.	出土地点			種類	法量（cm）			加工分類	備考
		区	土器群	位置		全長	身幅	身厚		
107	105	Ⅱ	—	Y-2	農具	10.1	8.1	1.3	—	えぶりの破片、堅い材
108	106	Ⅱ	122	X-7-N	農具	60.2	7.0	2.35	板目	一木造りの二又の鍬とも見られるが分厚すぎか
108	107	Ⅱ	122	W-7-N	—	43.5	3.1	1.35	心去り材	
108	108	Ⅱ	122	X-7-N	農具	41.1	6.9	1.8	板目	一木の狭鋤か
108	109	Ⅱ	122	W-7-N	農具	66.9	10.4	1.45	板目	裏面に貫通していない孔あり
108	110	Ⅱ	122	X-7-S	建築材	166.6	7.0	5.0	心持ち材	片側のみ平たく削ってある　両端部を切断　全体を切削
109	111	Ⅱ	—	V-8	農具	52.0	7.0	1.5	板目	鋤の柄
109	112	Ⅱ	—	V-8	農具	42.3	11.1	1.7	—	鋤の柄
109	113	Ⅱ	127	V-8-S	農具	55.5	11.0	2.85	板目	
109	114	Ⅱ	—	X-4	工具	6.9	3.2	2.5	板目	何かの把手か 作業台の柄か
109	115	Ⅱ	—	V-7-N	農具	10.5	4.9	2.3	板目	鋤の握り部
109	116	Ⅱ	122	W-7-N	農具	14.0	5.7	1.7	板目	鋤の一部分
109	117	Ⅱ	—	V-8	農具	34.9	16.0	3.35	板目	三又の鋤身部
109	118	Ⅱ	—	V-8	農具	32.3	8.6	1.9	板目	
109	119	Ⅱ	—	X-8	—	24.6	柄 :2.7 最大 10.0	2.6	—	儀柄のようなものか
110	120	Ⅱ	122	X-7-N	農具	18.2	14.7	2.0	板目	中央部が隆起している
110	121	Ⅱ	—	X-7	農具	31.3	6.8	1.0 ～ 1.8	—	糸島型平鍬　柄孔：1.2 × 1.8cm（中央の柄孔の痕跡は確認できず）下部に突起状のものがつく
110	122	Ⅱ	—	V-8	農具	28.7	8.7	1.75	準板目	糸島形鍬の身 柾目と板目の中間くらい
110	123	Ⅱ	—	X-7	農具	28.7	7.7	2.3	板目	糸島型鍬 一枚板
110	124	Ⅱ	122	W-7-N	農具	16.3	4.3	0.75	板目	鍬（糸島形か）の先端の一部
110	125	Ⅱ	122	W-7-N	農具	22.9	6.3	1.3	板目	鋤の先端か
110	126	Ⅱ	121	X-7-S	農具	22.0	8.9	1.3	板目	磨滅・剥離著しい
110	127	Ⅱ	—	X-7	—	24.8	8.0	1.4	板目	中央部が隆起
110	128	Ⅱ	—	X-7	農具	15.3	3.7	4.0	—	組合せ式鍬の柄に装着する　ノミ痕あり
110	129	Ⅱ	122	X-7-N	施設器具材	20.5	3.3 ～ 4.5	3.4	—	完形 材は堅く黒い 密で年輪・木目見えにくい
110	130	Ⅱ	—	X-8	—	24.0	4.2	1.5	板目	剣状木製品か小型の鍬か 大部分が剥離
110	131	Ⅱ	—	W-7・8	農具	54.1	8.1	1.4	—	アカガシのような堅く強い材 かなり薄く作る
110	132	Ⅱ	—	X-7	農具	8.9	5.4	1.2	—	頭部が角状の鍬の一部 締まった堅材表面は削られ状態は良くない

表 36　52 次調査Ⅰ区出土木製品観察表

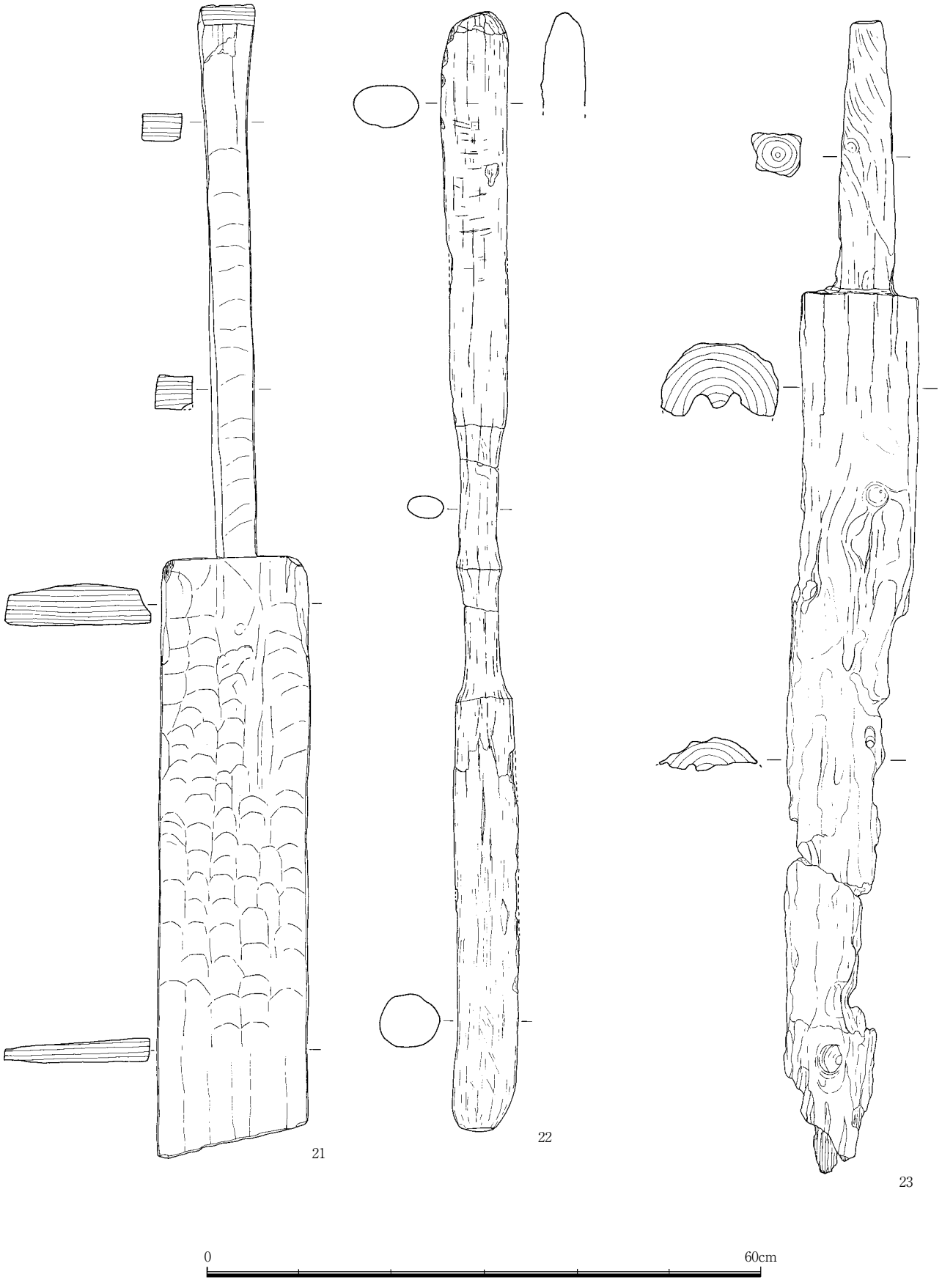
図	No.	種類	器種	出土地点			法量 (cm)			加工分類	備考
				区	土器群	位置	全長	身幅	身厚		
111	1	掏い具	杓子	Ⅰ	—	D・E-8	A:28.0 B:29.5	A:13.2 B:16.7	—	—	杓子の未成品　ノミによる工具痕（緻密と粗雑）　途中で折れ未成品になったか
111	2	掏い具	杓子	Ⅰ	—	B-10	22.6	3.8	3.8	—	杓子の柄の未成品か（机の脚か）
111	3	掏い具	杓子	Ⅰ	—	B-10	25.8	12.3	3.0	刳物	刳物 小さい舟形
111	4	槌類	横槌	Ⅰ	—	C-9	32.0	7.6	3.2	—	握り手以外は半分欠損　黒く焦げた部分多い
111	5	農具	鋤	Ⅰ	—	B-9	50.6	14.5	2.2	—	持ち手端部は切れ込み
111	6	掏い具	杓子	Ⅰ	—	B-9	38.9	17.8	2.3	—	刳物の横杓子　内側に加工痕（工具痕）多い　身の器高は約 10cm　底部は半分欠け
112	7	漁具	刺突具	Ⅰ	—	—	27.6	1.1	0.9	—	片方の端部付近を平らにする
112	8	漁具	刺突具	Ⅰ	—	—	25.5	1.1	0.9	—	片方の端部付近を平らにする
112	9	漁具	刺突具	Ⅰ	—	—	27.6	1.0	1.0	—	片方の端部付近を平らにする
112	10	漁具	刺突具	Ⅰ	—	—	27.9	1.2	1.0	—	1/3 位置に段を造る
112	11	漁具	刺突具	Ⅰ	—	C-9	36.5	1.3	1.3	—	一方の先端部はやや欠損
112	12	漁具	刺突具	Ⅰ	—	—	33.0	1.2	1.0	—	片方の端部付近を平らにする
112	13	漁具	刺突具	Ⅰ	—	B-10	31.1	1.85	1.8	—	両端部を尖らせている
112	14	漁具	刺突具	Ⅰ	—	—	6.5	1.3	0.75	—	何かの先端
112	15	漁具	刺突具	Ⅰ	—	—	13.7	1.0	0.9	—	
112	16	容器	底板	Ⅰ	—	B-10	25.2	13.8	2.4	—	容器の底板
112	17	建築材か	柱材	Ⅰ	—	B-10	29.4	11.9	9.3	心持ち材	
112	18		剣型木製品	Ⅰ	—	B-10	59.2	3.9	1.3	板目	
112	19	漁具	刺突具	Ⅰ	—	B-10	68.8	2.5	2.0	—	端部は薄く平らに加工，反端部は尖る
112	20		棒状木製品	Ⅰ	—	B-10	72.9	2.8	2.2	—	ノミ痕跡あり　片方の端部は丸く削り　上部から下部に向かい身幅が丸から平らになる（上から 2/3 位置にくびれ）
113	21	船の道具	櫂	Ⅰ	—	C-7	124.3	16.0	4.4	板目	櫂（オール）　鋤か　表面に大きなノミ痕　柄部長（59.6cm・6.2cm・4.5cm）
113	22	杵・臼	堅杵	Ⅱ	—	X-7	121.0	7.3	4.7	芯去り材	先端は片方は丸く，もう片方は平たく収める
113	23	建築材	建築材	Ⅰ	—	C-11	124.3	13.0	8.5	心持ち材	
114	24	建築材	建築材	Ⅰ	—	C-7	102.2	17.5	4.2	柾目	柄孔（7 × 7cm）あり
114	25	建築材	壁材	—	—	—	61.6	15.9	1.1	板目	8.5 × 2.0 の楕円のほぞ孔あり　本来四角い穴があいており，別の木と綴じて壁をつなげていく形か
114	26	建築材	建築材	Ⅰ	—	B-10	86.3	15.3	11.2	心持ち材	



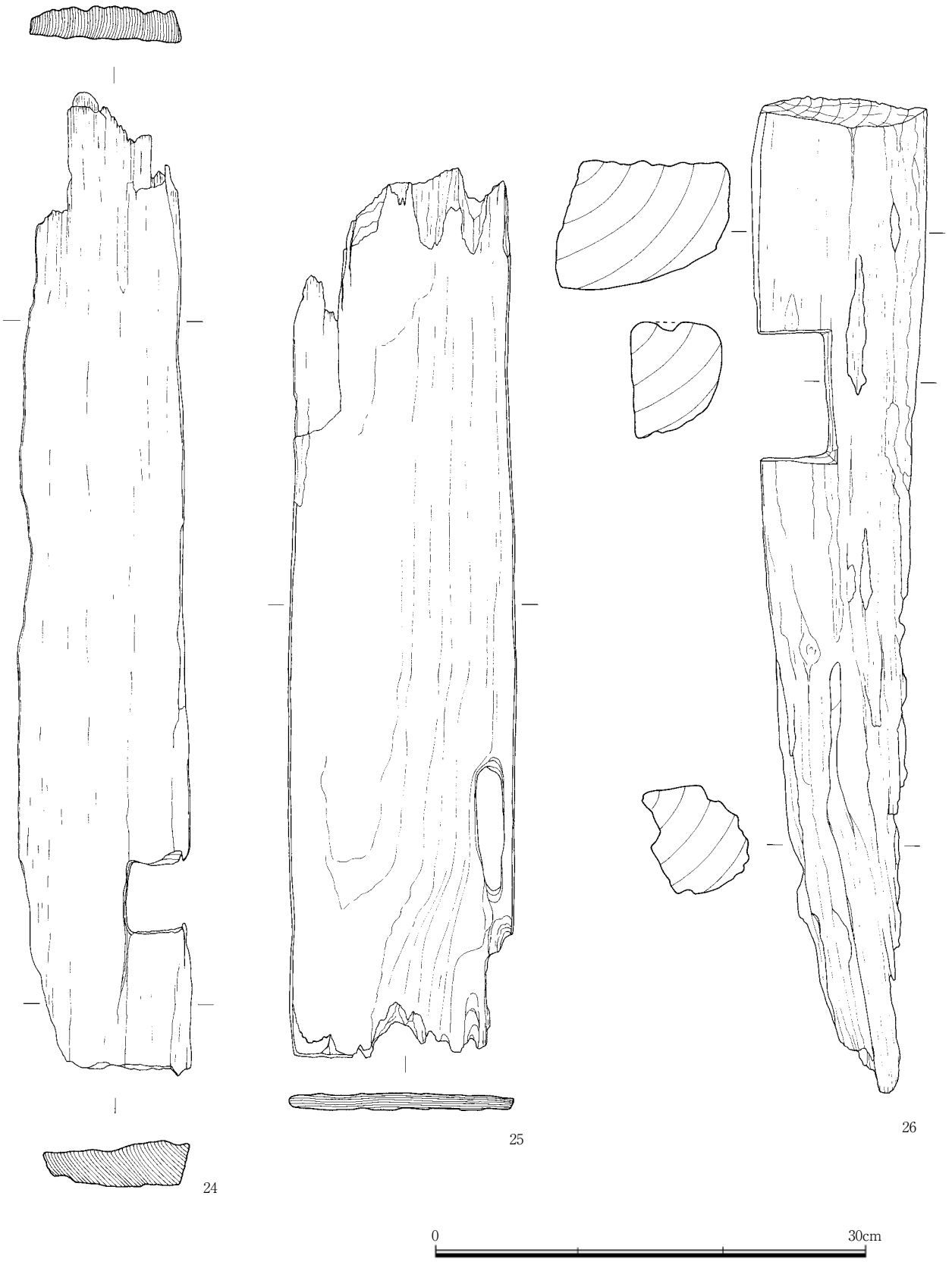
第 111 図　52 次調査 I 区出土木製品実測図（1）［1/4］



第 112 図　52 次調査 I 区出土木製品実測図（2）［1/4］



第 113 図　52 次調査 I 区出土木製品実測図（3）［1/6］



第 114 図　52 次調査 I 区出土木製品実測図（4）［1/4］

表 37　42 次土器群 112 出土土器観察表

図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
115	1	Ⅱ	112	—	壺	35.4	22.1	7.8	口縁部上面はヘラ磨き、口縁部は横ナデ、頸部から体上部に突帯（横ナデ）をはさみ暗文、他はは板状工具木口によるナデか、底面はナデ	口縁部は横ナデ、頸部は指圧痕、他はナデ（体中部に指圧痕）、底部付近に指ナデの圧痕も	淡灰褐色	砂粒（石英 4.5㎜以下・長石 4㎜以下）比較的多く混じる　金雲母 1㎜以下比較的多く見られる	良好	欠損：胴部 1/3　外面口縁部から中部と内面口縁部下まで赤色顔料
115	2	Ⅱ	112	—	高坏	20.15	—	—	縦ヘラ磨き	脚上部は指圧痕、他はナデ（裾部にはヘラ状工具による縦ナデ痕）	淡灰褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的多く混じる　金雲母 1㎜以下比較的多い	良好	残存：筒部～裾部　器表は磨滅（ヘラ磨き痕もやや不明瞭）
115	3	Ⅱ	112	—	甕	27.2	33.3	7.0	口縁部上面は横ヘラ磨き（磨滅）、突帯部は横ナデ、体上部は暗文が突帯をはさむ、下部は横ヘラ磨き、底部は縦ヘラ磨き（磨滅）、底面はヘラナデ	口縁部は横ナデ、他は指圧痕、底部はナデ	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：口縁部 1/2，胴部 1/3　外面全体と内面口縁部付近に丹塗り　外面全体に磨滅
115	4	Ⅱ	112	—	甕	5.2	24.0	—	横ナデ	横ナデ、板状工具木口によるナデ	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）少量混じる	良好	口縁部残存：1/4　口縁部上面に刻み目（平行に 2 本，もう一本は離れて施される）
115	5	Ⅱ	112	X-5	甕	32.3	26.0	8.6	口縁部は横ナデ、他は縦刷毛（部分的に磨滅），底面はナデ	—	灰褐色（外底は明褐色）	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）多く混じる	良好	欠損：口縁部 1/4，胴部 1/5　外面全体（底面除く）に煤付着（口縁部から胴部中位は著しい）　内面は中位から底部に炭化物付着
115	6	Ⅱ	112	W-4	甕	46.9	32.2	—	口縁端部・突帯部は横ナデ、口縁部は縦刷毛，他は斜め刷毛（磨滅）、底部付近はナデか（磨滅）	口縁部は横刷毛，他は横刷毛（剥離・磨滅著しい）	灰淡色～淡灰褐色	砂粒（石英 3.5㎜以下・長石 5㎜以下）多く混じる	やや軟質	欠損：胴部 1/4 弱　内外面ともに磨滅　内面胴部は剥離目立つ　外面胴部突帯付近に 15cm 程度の黒斑
115	7	Ⅱ	112	—	甕	29.9	25.8	8.8	口縁部は横ナデ、体中部まで縦刷毛（磨滅）、他はナデ（磨滅）、底面はナデか	顧炎武は横ナデ、他はナデ	淡灰褐色～淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：1/2 弱　底部に穿孔があり甑として使用　外面全体に煤付着　外面下半部は刷毛目痕無　内面下半部は器壁が灰黒色で脆い

表 38　42 次土器群 117 出土土器観察表

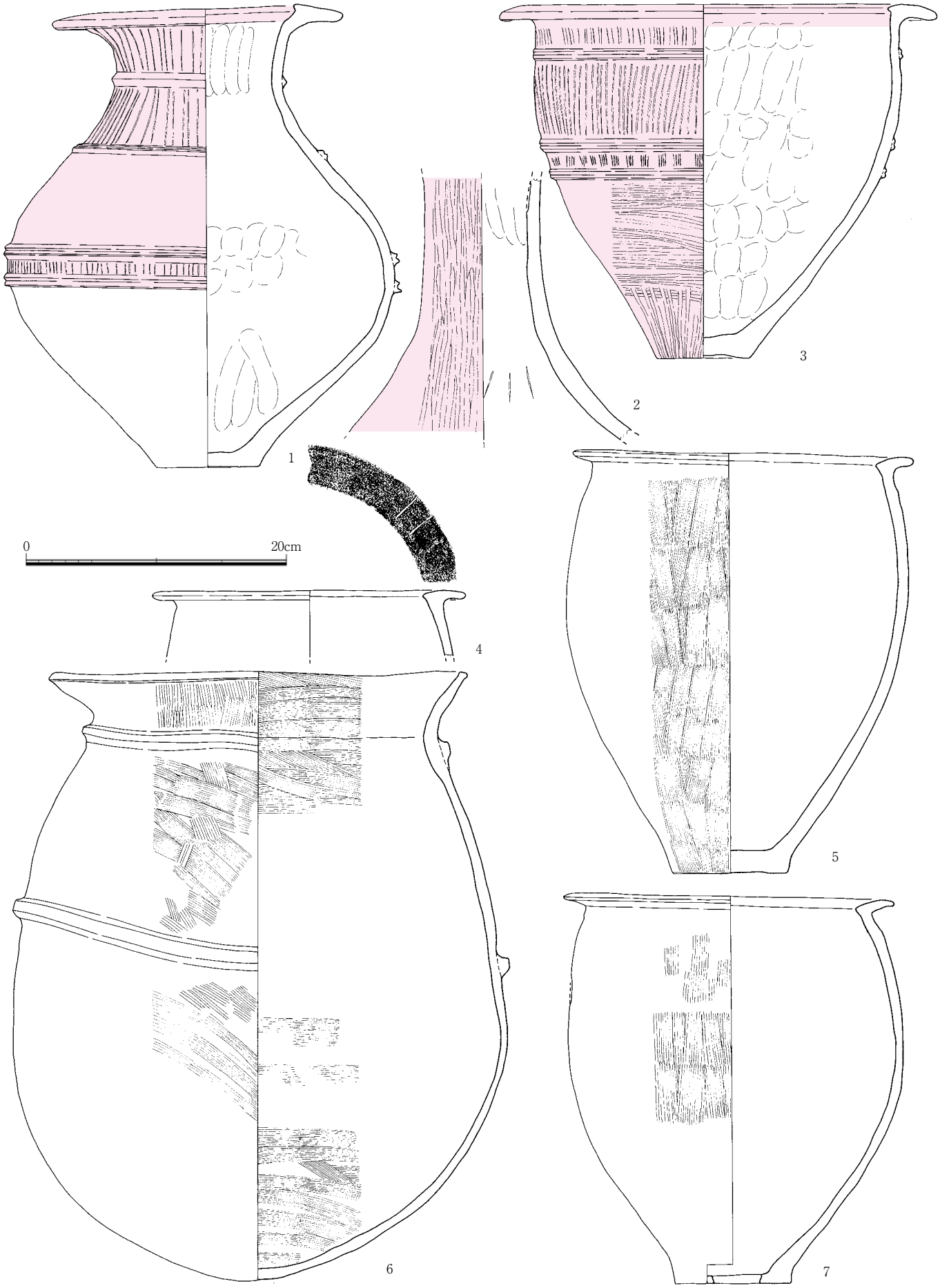
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
116	8	Ⅱ	117	X-5	甕	10.1	26.0	—	口縁部は横ナデ、他はナデ	板状工具木口によるナデ	淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	残存：口縁部～胴部上位 1/4 弱　煤付着（胴部全体と帯状に口縁部裏）　内面は炭化物付着
116	9	Ⅱ	117	X-5	甕	25.1	20.5	8.5	口縁部は横ナデ、他は縦刷毛、底面はナデ	口縁部は横ナデ、他は板状工具木口によるナデ、底面はナデ	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 4㎜以下）比較的多く混じる　金雲母少量混じる	良好	欠損：口縁部～胴部中位 1/2　胴部には黒斑あり，煤付着も
116	10	Ⅱ	117	X-5	壺	21.0	25.0	—	口縁部はヘラ磨きか（磨滅）、突帯部は横ナデ，他はヘラ状工具によるナデか（磨滅）	口縁部はヘラ磨きか，頸部は横刷毛のちナデ消し，他は板状工具木口によるナデ（肩部は指押さえも）	褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 3㎜以下）多く混じる	良好	残存：1/3（底部なし）　外面と内面口縁部付近まで赤色顔料　全体に磨滅が見られ調整痕が不明瞭　内面中部に接合痕
116	11	Ⅱ	117	X-5	高坏	7.6	12.0	—	ヘラ磨き	ヘラ磨き、脚上部はナデ	褐色	精緻に近い　砂粒（石英・長石は 1.5㎜以下）非常に少なく混じる	良好	欠損：口縁部，裾部 2/3　内外面に赤色顔料の痕跡
116	12	Ⅱ	117	X-5	高坏	16.15	20.0	—	脚上部はナデ、他は縦刷毛、裾端部は横ナデ	指押さえ，裾部は横刷毛	淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 4㎜以下）多く混じる	良好	欠損：裾部 3/4　外面には比較的磨滅
116	13	Ⅱ	117	X-5	高坏	17.4	18.3	—	非常に細かい縦刷毛、裾端部は横ナデ	ヘラ絞り、裾部は横ナデ	淡褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 3㎜以下）比較的多く混じる	良好	欠損：坏部，裾部 1/5　穿孔は裾部に等間隔で 4 カ所　外面はやや磨滅
116	14	Ⅱ	117	X-5	二重口縁壺	9.5	5.6	—	口縁部は横ナデ，頸部はヘラ状工具による強い横ナデ（圧痕）～ナデ	口縁部は横ナデ、頸部は指押さえ	明褐色	砂粒（石英 3㎜以下・長石 4㎜以下）多く混じる	良好	残存：口縁部～頸部　外面一部に赤色顔料痕か
116	15	Ⅱ	117	X-5	器台	6.4	—	—	縦刷毛・横ナデ・刷毛目のち横ナデ消し、指圧痕・横ナデ	横刷毛・指圧痕・横刷毛	内：灰黒色 外：淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 3㎜以下）比較的多く混じる	良好	残存：頸部 1/4
116	16	Ⅱ	117	X-5	器台	17.1	9.6	11.75	上下は横ナデ，他は縦方向のナデ（圧痕）	端部上下は横ナデ、上部は指圧痕、その下は縦ナデ、他は指押さえ、裾部は指圧痕	明褐色～淡褐色	砂粒（石英 4㎜以下・長石 5.5㎜以下）多く混じる	良好	欠損：口縁端部 1/2 裾部 1/4　胴部に灰黒色を帯びる（3.5 × 6cm）
116	17	Ⅱ	117	X-5	器台	15.0	13.9	12.0	上下は横ナデ，他は縦刷毛、裾部はナデ・指圧痕	受部は横刷毛、体部はヘラナデ、裾部は横・斜め刷毛	淡灰褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 5㎜以下）比較的多く混じる　金雲母 1㎜以下比較的多く含む	良好	欠損：口縁部 3/4　内外面とも磨滅
116	18	Ⅱ	117	X-5	支脚	8.45	—	—	ナデ・縦刷毛目痕	斜め刷毛	褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：裾部 1/2　頭部に穿孔
116	19	Ⅱ	117	X-5	器台	18.4	13.2	16.5	上下端部はヘラ状工具の横ナデ、他は粗い・細かい縦刷毛，頸部は指圧痕	受部は横刷毛，頸部は縦指押さえ，中部は横指押さえ，裾部は刷毛目（接合痕）	淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 3㎜以下）比較的多く混じる　金雲母 1㎜以下少量混じる	良好	欠損：口縁部と裾部各 1/2
116	20	Ⅱ	117	X-5	器台	9.9	9.2	10.0	上下付近は横ナデ、他はヘラ状工具によるナデ（圧痕）	上下端部付近は横ナデ、他はナデ	明褐色～淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 3.5㎜以下）多く混じる	良好	ほぼ完形
116	21	Ⅱ	117	X-5	器台	13.7	13.3	15.0	上下付近は横ナデ、上部は指圧痕，他はナデ	上下付近は横ナデ、他は指押さえ、裾部は板状工具木口による横ナデ	淡褐色	砂粒（石英 3㎜以下・長石 4.5㎜以下）多く混じる	良好	欠損：裾部 1/2 弱　器面全体やや磨滅
116	22	Ⅱ	117	X-5	壺	47.8	28.8	8.7	口縁部と突帯部は横ナデ、他はナデ、下部は縦刷毛痕，底面はナデ	口縁部は横ナデ、他はナデ、下部は縦刷毛痕、他は板状工具木口によるナデ（木口の圧痕）、底部は板状工具木口による強いナデ（砂粒の動き著しい）	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 3.5㎜以下）多く混じる	良好	欠損：1/2　外面底付近に無造作で短い刷毛目痕
116	23	Ⅱ	117	X-5	甕	24.1	20.0	—	口縁部は横ナデ、肩部は刷毛目のち横ナデ消し、4 条の沈線、他は細かい横・縦刷毛	口縁部は横ナデ，他は縦ヘラ削り	褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 7㎜以下）多く混じる	良好	欠損：1/2　外面中位から底部は煤付着　内面底部付近は炭化物付着

表 39　42 次土器群 120 出土土器観察表

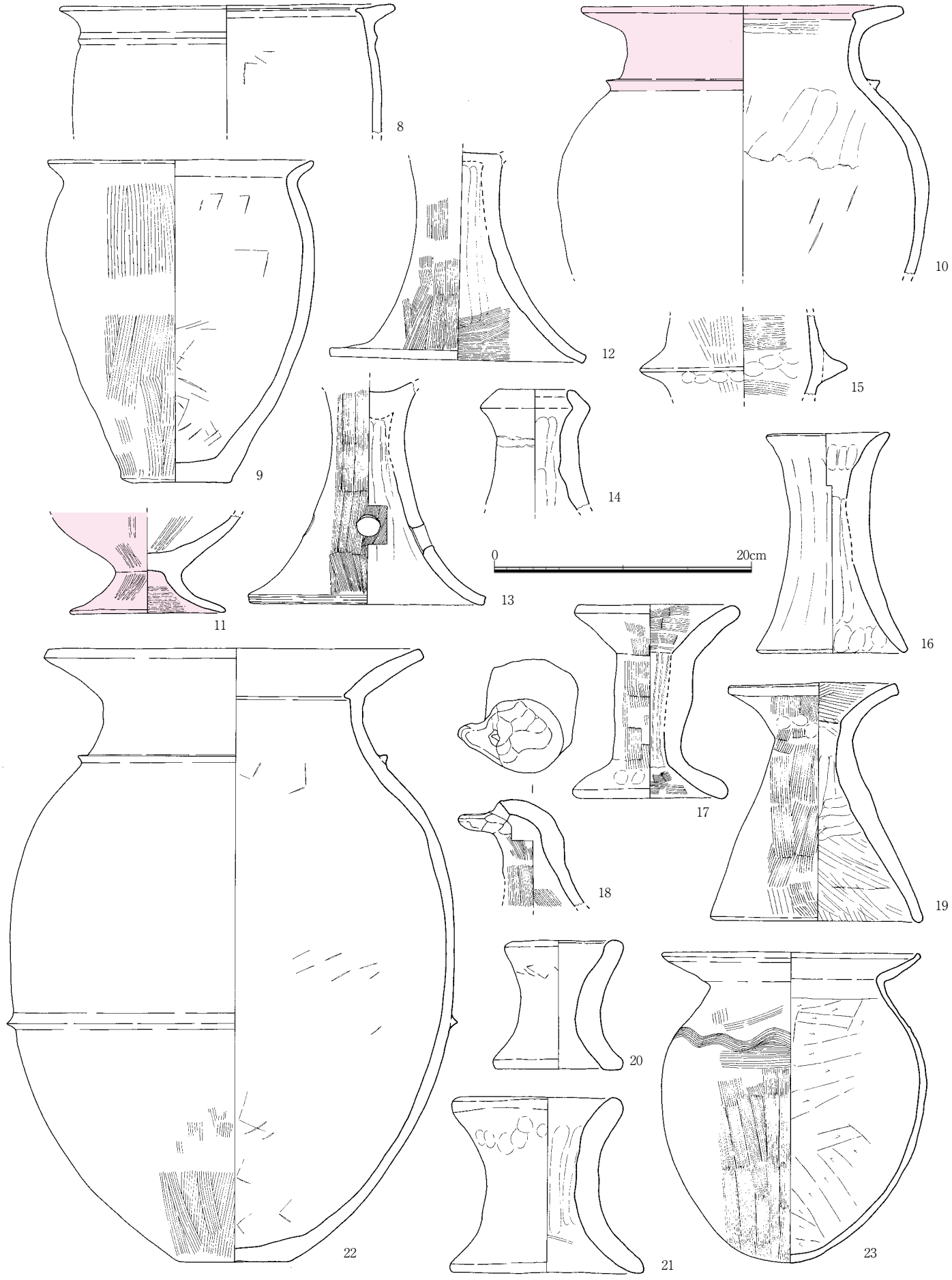
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
117	24	Ⅱ	120	X-6-N	壺	22.1	25.0	—	口縁部上面はヘラ磨き、頸部は突帯部（横ナデ）はさみ暗文，他は板状工具木口による横ナデ	口縁部は横ナデ，頸部はナデ・指押さえ，他はナデ	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：胴中部～底部　外面全体と内面頸部下まで赤色顔料　器面は全体に磨滅
117	25	Ⅱ	120	X-6-N	壺	14.1	14.3	7.5	ヘラ磨き，底面はヘラ状工具によるナデ	口縁部はナデ，中部は指押さえ，他はナデ	淡褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 4.5㎜以下）比較的少なく混じる	やや軟質	残存：1/2 弱　外面全体（底面除く）と内面口縁部下に赤色顔料　口縁上面部に 2 カ所の穿孔（反対側にもあったと思われる）
117	26	Ⅱ	120	X-6-N	甕	—	—	—	口縁部上面はヘラ磨き，口縁端部はナデ（刻み目），体上部に突帯（ヘラナデ）をはさみ暗文，他はヘラ磨き	口縁部はヘラ磨き，他はナデ	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 4㎜以下）比較的少なく混じる	良好	残存：口縁部～胴部中位 1/2　外面全体と内面口縁部付近に赤色顔料
117	27	Ⅱ	120	X-6-N	甕	20.6	6.0	27.1	体上部に暗文，突帯部はヘラナデ，他はヘラ磨き，底面はナデ	ナデ（底部は指圧痕も）	明褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 3.5㎜以下）多く混じる　金雲母 1㎜以下わずかに含む	良好	欠損：口縁部～上半部　外面全体に（底面除く）赤色顔料
117	28	Ⅱ	120	X-6-N	蓋	10.4	32.0	—	ヘラ磨きか（磨滅）	頂部はナデ・指圧痕・縦ヘラ磨き，他は横ヘラ磨き	褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 3㎜以下）比較的多く混じる　金雲母 0.5㎜以下少量混じる	良好	残存：1/4 弱　内外面ともに赤色顔料外面は磨滅（調整痕も不明瞭）
117	29	Ⅱ	120	X-6-N	蓋	10.7	16.4	—	頂部はナデ，他は縦・斜め刷毛，裾端部は横ナデ	指圧痕，裾部はナデ・横刷毛	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 4㎜以下）比較的多く混じる	良好	欠損：1/3
117	30	Ⅱ	120	X-6-N	甕	30.1	29.0	8.4	口縁部や横ナデ，他は縦刷毛	ナデと指圧痕	内：淡褐色 外：灰褐色～暗褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	外面胴部に煤付着　外底面には煤付着と強い二次焼成痕（赤褐色）
117	31	Ⅱ	120	X-6-N	高坏	8.4	35.0	—	磨滅著しく調整不明，坏下部はヘラ磨き	横ヘラ磨き	淡褐色	砂粒（石英 3㎜以下・長石 4㎜以下）比較的多く混じる	良好	欠損：坏部口縁端部　赤色顔料は内面は明瞭に，外面は磨滅のため不明瞭だが一部に痕跡あり
117	32	Ⅱ	120	X-6-N	高坏	11.1	27.0	—	ヘラ磨き（磨滅）、脚部は縦ヘラ磨き	横ヘラ磨き	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少なく混じる	やや軟質	欠損：坏部 1/2　内外面ともに丹塗り（外面は磨滅著しく顔料の残り悪い）
117	33	Ⅱ	120	X-6-N	高坏	7.4	31.2	—	上面はヘラ磨き，他は指ナデとヘラ状工具によるナデ	口縁部は横ナデ，他は横ヘラ磨き	淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少なく混じる	良好	欠損：坏部 1/6　内外面ともに赤色顔料　磨滅
117	34	Ⅱ	120	X-6-N	甕	32.9	11.0	—	口縁端部は横ナデ，口縁部は縦刷毛のち横ナデ，体上部は斜め・縦刷毛，他は板状工具によるナデ	横・斜め刷毛，底部はナデ	褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 4㎜以下）多く混じる	良好	欠損：1/2　底部側面に黒斑
117	35	Ⅱ	120	X-6-N	壺	34.4	20.0	—	口縁端部・突帯部は横ナデ，頸部は縦刷毛，他は縦刷毛，底部付近はナデ（磨滅）	頸部は横刷毛，肩部は板状工具木口によるナデ，他は縦・斜め刷毛	内：褐色 外：暗褐色	砂粒（石英 3㎜以下・長石 5㎜以下）多く混じる	良好	外面口縁部から胴部下位まで煤付着　外面下部は二次焼成のため剥離著しい　内面中部から底部に炭化物付着
117	36	Ⅱ	120	X-6-N	鉢	5.4	11.2	—	横ナデ，底面は板状工具木口によるナデ	横ナデ	赤褐色（外底のみ）～淡灰黒色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 3㎜以下）少量混じる	良好	ほぼ完形品（口縁部わずかに欠損）　内面は強い横ナデのため表面に凸凹　外底には輪状の高台
117	37	Ⅱ	120	X-6	紡錘車	3.3	0.8	9.5g	ナデか	ナデか	灰黒色	砂粒（石英 0.5㎜以下・長石 15㎜以下）少量混じる	良好	黒色土器の再利用か

表 40　42 次遺構出土土器観察表（1）

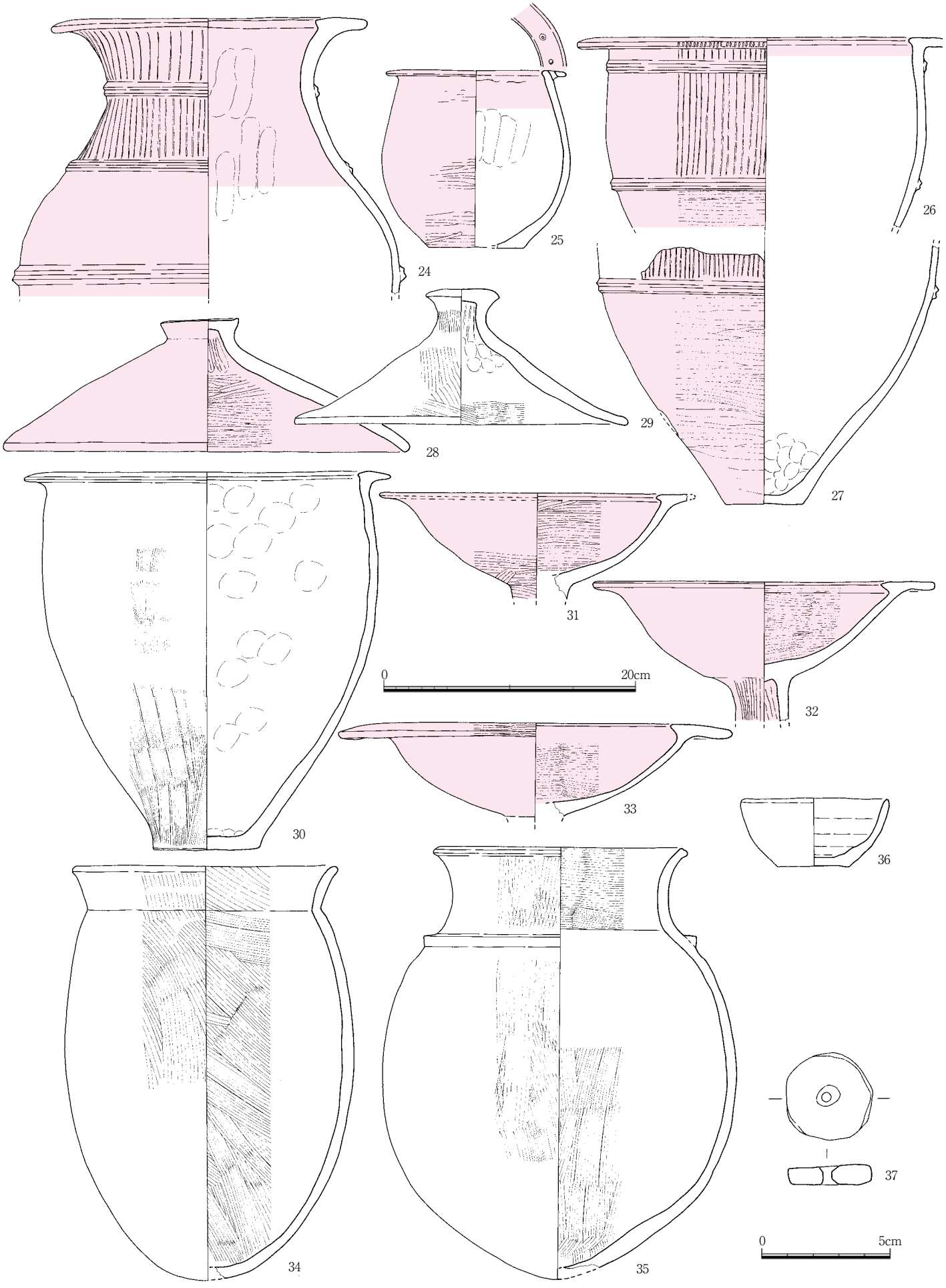
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
118	38	Ⅱ	106	X-4	甕	36.5	30.6	9.9	口縁部は横ナデ，他は粗い縦刷毛，下部は刷毛目が磨滅	ナデ	内：にぶい橙色 外：上半部は鈍い褐色・下半部は橙色～赤色	2㎜以下の石英・長石粒と赤色粒を含む	良好	残存：5/6 に次焼成で表面が磨滅したか
118	39	Ⅱ	106	W-3・4 ベルト下	壺	12.25	7.0	—	口縁部は縦方向のヘラ磨き、突帯部は横ナデ、突帯部上下は横ヘラ磨き，他は縦ヘラ磨き	縦方向のナデ，頸部に爪の圧痕	明褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）少量混じる	良好	残存：口縁部～胴部 1/3　外面全体・内面口縁部下に赤色顔料　内外の頸部に爪の圧痕
118	40	Ⅱ	114	Y-4	壺	6.8	13.8	—	刷毛目	刷毛目のちナデ消し	淡灰褐色	砂粒（石英 2.5㎜以下・長石 4㎜以下）比較的多く混じる	良好	欠損：口縁部 1/4
118	41	Ⅱ	119	W-6	蓋	8.3	—	—	頂部はヘラ状工具による強いナデ（側面はのち横ナデ），他は縦刷毛（磨滅）	頂部はナデ・横ナデ、他はヘラ絞り・指圧痕，裾部はナデか（剥離も）	内：褐色 外：暗褐色～明褐色（つまみは黒色）	砂粒（石英・長石ともに 1.5㎜以下）少なく混じる	良好	欠損：口縁端部
118	42	Ⅱ	119	W-6-S	高坏	4.85	19.6	—	口縁部上面はヘラ磨き、口縁端部は横ナデ、他は横ヘラ磨き	口縁部は横ナデ、他は横ヘラ磨き	褐色	砂粒（石英 0.5㎜以下・長石 1.0㎜以下）少量混じる	良好	残存：坏部 1/3　全体に赤色顔料
118	43	Ⅱ	119	W-6-S	高坏	7.65	30.0	—	口縁部上面はヘラ磨き、口縁端部は横ナデ、他は横ヘラ磨き（坏上部に指圧痕）	口縁部は横ナデ、他は横ヘラ磨き	褐色	砂粒（石英 1.0㎜以下・長石 1.5㎜以下）少なく混じる	良好	残存：坏部 1/2 弱　全体に丹塗り
118	44	Ⅱ	119	W-6-S	高坏	8.4	27.8	—	口縁部上面は横ヘラ磨き・暗文，口縁部は横ナデ，他は横ヘラ磨き（幅広い）	口縁部は横ナデ、他は横ヘラ磨き	褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 2.5㎜以下）少量混じる	良好	残存：坏部 1/4　全体に丹塗り　口縁部上面は横ヘラ磨きののち暗文
118	45	Ⅱ	119	X-6-S 下層	蓋	1.7	—	13.0	不明、裾部は横ナデか	指圧痕、裾部は横ナデか	暗褐色	砂粒（石英・長石ともに 1.5㎜以下）比較的少なく混じる　金雲母 1㎜以下少量含む	良好	残存：1/3 弱　全体に丹塗り　穿孔は裾部に 1 カ所（他はなし）
118	46	Ⅱ	119	X-6-S	無頸壺	4.3	10.6	—	ヘラ磨き	ヘラ磨き・磨滅不明	褐色	砂粒（石英 0.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少なく混じる	良好	残存：1/5　口縁部に穿孔　内外面とも全体に密集して煤付着
118	47	Ⅱ	119	W-6	鉢	5.85	11.2	4.0	口縁端部は横ナデか、他は縦ヘラ磨き、底面はナデか	口縁部は板状工具による横ナデ他は縦ヘラ磨き	淡褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 3㎜以下）比較的多く混じる	良好	残存：1/3
118	48	Ⅱ	119	X-6-S 下層	甕	6.65	17.9	—	横ナデ（磨滅）	横ナデ（磨滅）	淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的多く混じる	良好	—



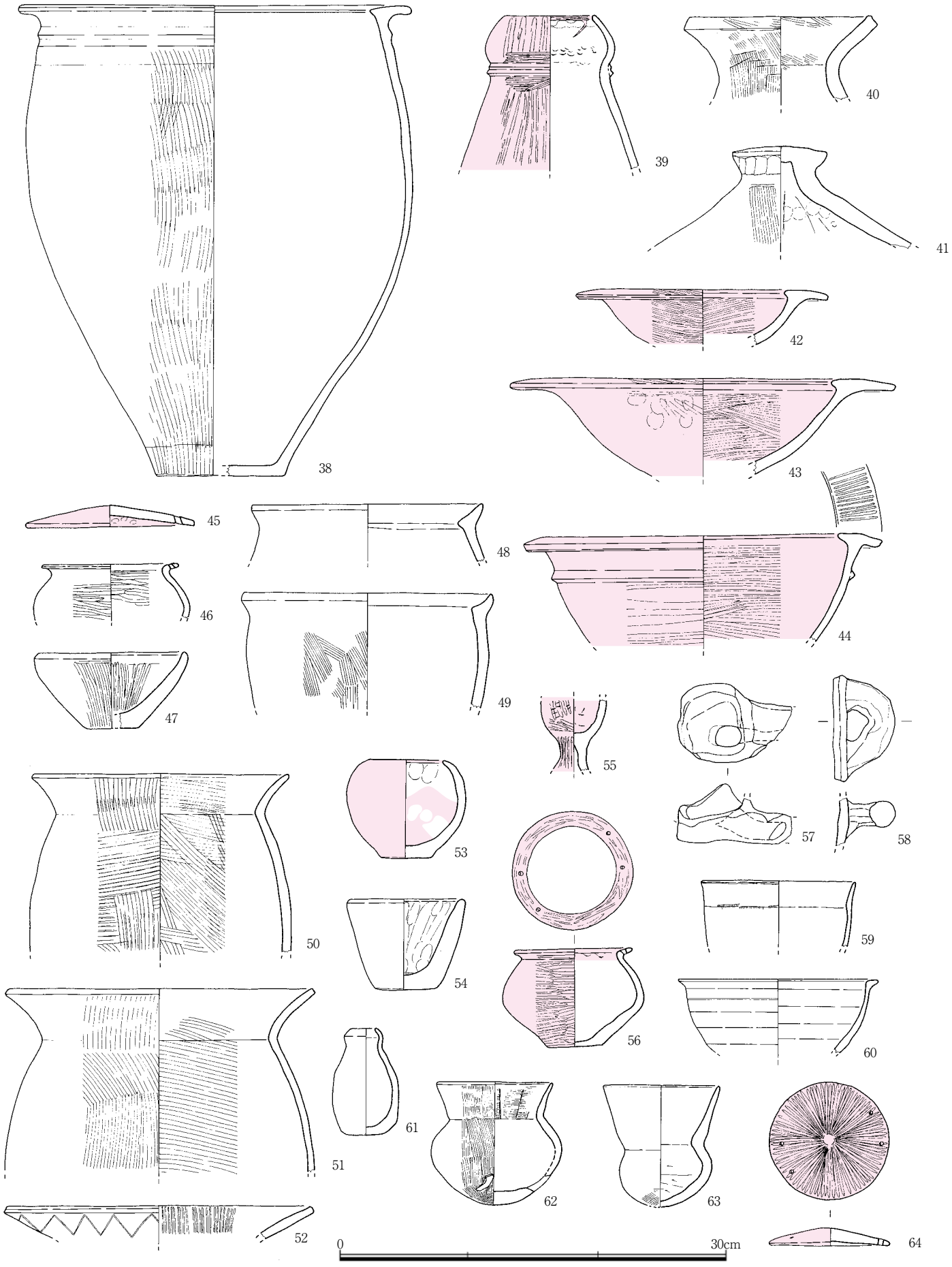
第 115 図　42 次土器群 112 出土土器実測図　［1/4］



第 116 図　42 次土器群 117 出土土器実測図　［1/4］



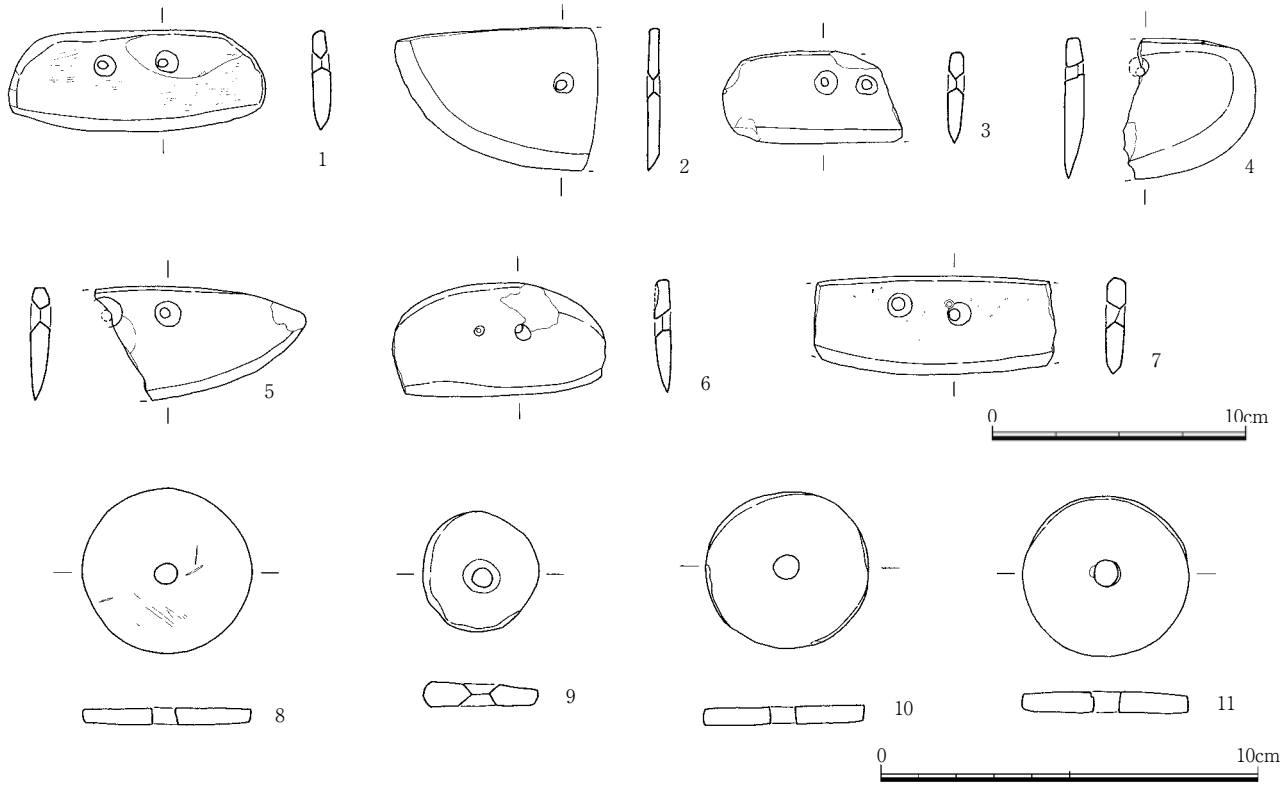
第 117 図　42 次土器群 120 出土土器実測図　［1/2・1/4］



第 118 図　42 次遺構出土土器実測図　［1/4］

表 41　42 次遺構出土土器観察表（2）

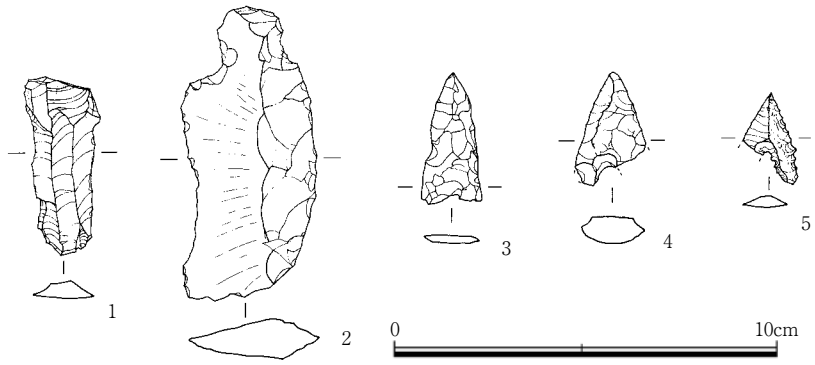
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
118	49	Ⅱ	119	X-6-S 下層	甕	8.9	19.1	—	口縁部は横ナデ、他は斜め刷毛	ナデ	淡褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少ない、金雲母 0.5㎜以下わずかに混じる	良好	残存：1/4　外面口縁部～胴部全体に煤付着
118	50	Ⅱ	119	W-6	甕	14.0	19.8	—	肩部は平行叩き，下部は刷毛目	横・斜め刷毛	茶褐色～暗褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1.5㎜以下）比較的多く混じる	良好	残存：1/4 弱　外面には煤付着，内面は炭化物付着
118	51	Ⅱ	119	W-6	甕	14.35	23.6	—	口縁端部は横ナデ、他は縦・斜め刷毛，頸部は横ナデ消し	横刷毛	褐色	砂粒(石英･長石ともに 2㎜以下）比較的多く混じる	良好	残存：1/4　口縁部内外面に二次焼成痕　内面は炭化物付着　内外面とも磨滅
118	52	Ⅱ	119	W-6-S	壺	2.6	23.6		口縁端部は横ナデ、他は板状工具木口による横ナデ・ヘラ描きジグザグ文	板状工具木口による横ナデ・ヘラによる研き	暗褐色	砂粒(石英･長石ともに 1㎜以下）少量混じる	良好	口縁部残存：1/4
118	53	Ⅱ	119	X-6-S 下層	鉢	7.65	5.8	4.0	口縁端部は横ナデ，他はヘラ磨きか，底面は不明	口縁部付近は指圧痕，他はナデ	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 1㎜以下）多く混じる	良好	欠損：1/2 弱　外面全体と内面中部～底部に赤色顔料　外面全体に磨滅
118	54	Ⅱ	119	W-6-S	鉢	7.1	8.7	—	ナデ	指圧痕	淡褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的多く混じる。	良好	欠損：1/2 弱　外面中部から底部に黒斑　外底は平たく安定
118	55	Ⅱ	123	W-5	ミニチュア土器	5.6	—	—	全体にヘラ磨き（口縁部はヘラ？圧痕）	ナデと指押さえ、脚部はヘラ状工具によるナデか	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）少なく混じる	良好	ミニチュア高坏　欠損：口縁部･裾部　丹塗りが全面に（脚部内側以外）　坏部外面はヘラ磨きの後にヘラ？圧痕　坏部内側は爪圧痕
118	56	Ⅱ	123	—	無頸壺	7.65	9.3	4.2	横ヘラ磨き	口縁部は爪圧痕、他はナデ	淡灰褐色～褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 1.5㎜以下）少量混じる　金雲母 1㎜以下比較的多く混じる	良好	完形　丹塗りは外面全面と内面下位まで（外底除く）　口縁部上面に対をなした 4 カ所の穿孔
118	57	Ⅱ	—	X-5	壺か	—	—	—	ナデ	ナデ	褐色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 3.5㎜以下）比較的少ない	良好	連結した壺か　穿孔あり
118	58	Ⅱ	—	Y-3	把手	—	—	—	ナデ	板状工具によるナデ	褐色	砂粒（石英 2㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的多く混じる	良好	—
118	59	Ⅱ	—	Y-3	鉢	5.2	11.8	—	口縁端部は横ナデ、口縁部側面は板状工具木口による横ナデ､他はナデ（刷毛目痕）	口縁部は刷毛目のちナデ消し、他はナデ	淡灰褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 2㎜以下）少量混じる	非常に良い	残存：1/7
118	60	Ⅱ	—	X-6	小鉢	6.0	14.0	—	口縁部は横ナデ、その下に沈線、他は板状工具による横ナデ	横ナデ	灰黒色	精緻　砂粒はほとんど混じらず，淡灰色を呈する	非常に良好	残存：1/8　楽浪系土器　叩くと金属のような音
118	61	Ⅱ	—	Y-4	ミニチュア土器	8.3	1.9	2.8	口縁部は横ナデ、他はナデ	ナデ	灰色～暗灰色	砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的多く混じる	良好	ミニチュア壺　欠損：口縁部 2/3　外底は平底気味で境目は不明瞭（自立はできる）
118	62	Ⅱ	—	W-5	壺	9.5	9.0	—	口縁端部は横ナデ，口縁部側面は縦刷毛のちナデ消し，他は縦刷毛	口縁部は横刷毛のち横ナデ消し，他は板状工具木口によるナデ	褐色～茶褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 2㎜以下）比較的少なく混じる	良好	完形品　口縁部内外面 1/2 と外面胴部に煤付着　外面下部に外から穿孔
118	63	Ⅱ	—	Z-2	壺	9.5	9.0	—	口縁部は横ナデ、他は刷毛目のちナデ消し	口縁部は横ナデ、他はヘラ削り	内：淡褐色～淡灰褐色 外：淡褐色～明褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 2㎜以下）多く混じる	良好	欠損：1/2
118	64	Ⅱ	—	Z-2	蓋	1.4	—	9.35	頂部はヘラによるナデか、他はヘラ磨き、裾端部は横ナデ	ナデ	灰褐色	砂粒（石英 1㎜以下・長石 2.5㎜以下）比較的少なく混じる　金雲母 1.5㎜以下少量含む	良好	完形、無頸壺の蓋　外面全体に赤色顔料



第 119 図　42 次遺構出土石器実測図　［1/2］

表 42　42 次遺構出土石器観察表

図	No.	出土地点			種類	法量（cm）				調整		色調	材質	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	重量 (g)	外面	裏面			
119	1	Ⅱ	104	Y-2	石包丁	10.1	4.0	0.75	45.4	研磨	研磨	灰色	玄武岩	完形品　穿孔径：4.0㎜　表面は粗い研磨・削り痕あり
119	2	Ⅱ	106	X-4	石包丁	8.0	5.65	0.45	39.5	研磨，刃部は丁寧	粗い研磨	灰色	頁岩	欠損：1/2　穿孔径：4.0㎜　刃部は片面のみに施す
119	3	—	106	—	石包丁	7.1	3.63	0.6	26.8	研磨	研磨	暗赤褐色	輝緑凝灰岩	欠損：1/2 弱　穿孔径：3.0 ～ 4.5㎜
119	4	Ⅱ	110	Y-3	石包丁	5.2	5.6	0.7	30.0	研磨	研磨	暗赤褐色	輝緑凝灰岩	欠損：1/2 弱　穿孔径：3.0㎜（1 カ所）　表は凸状，裏は平坦　刃部との境は不明瞭
119	5	Ⅱ	112	W-5	石包丁	8.3	4.5	0.75	34.6	研磨（一部粗い）	研磨	灰色	玄武岩	欠損：1/2　穿孔径：4.0㎜　表は凸状，裏は平坦　裏面の刃部は表面より幅狭
119	6	Ⅱ	—	X-5	石包丁	8.4	4.5	0.6	40.7	研磨	研磨	暗赤褐色	輝緑凝灰岩	未成品　穿孔径：5.0㎜　穿孔は 2 カ所（1 つは未完成）深さ 2-3㎜
119	7	Ⅱ	—	X-5・6	石包丁	9.4	3.9	0.75	44.3	研磨	研磨	淡灰褐色	粘板岩	欠損：両端部　穿孔径：5.0㎜　穿孔の 1 つにの孔（径 3㎜深さ 1.5㎜）が施されるが未完
119	8	Ⅱ	—	X-3	紡錘車	4.5	—	0.4	16.8	研磨	研磨	淡褐色気味の灰色	滑石	ほぼ完形品（端部やや欠損）　穿孔径：5.0㎜
119	9	Ⅱ	—	Y-2	紡錘車	0.65 穴径 0.5	—	6.4		ナデ	ナデか	表：灰黒色 裏：淡褐色	—	土製紡錘車　砂粒（石英 1.5㎜以下・長石 2㎜以下）比較的多く混じる
119	10	Ⅱ	—	X-3	紡錘車	4.2	—	0.42	14.9	研磨	研磨	灰色	滑石	ほぼ完形品（頂端部にわずかな欠損）穿孔径：6.0㎜
119	11	Ⅱ	—	Z-3	紡錘車	4.5	—	0.5	20.9	研磨	研磨	灰色	滑石	完形品　穿孔径：6.5㎜　孔は少しずれて再穿孔



第 120 図　52 次遺構出土石器実測図（1）［1/2］

表 43　52 次遺構出土石器観察表（1）

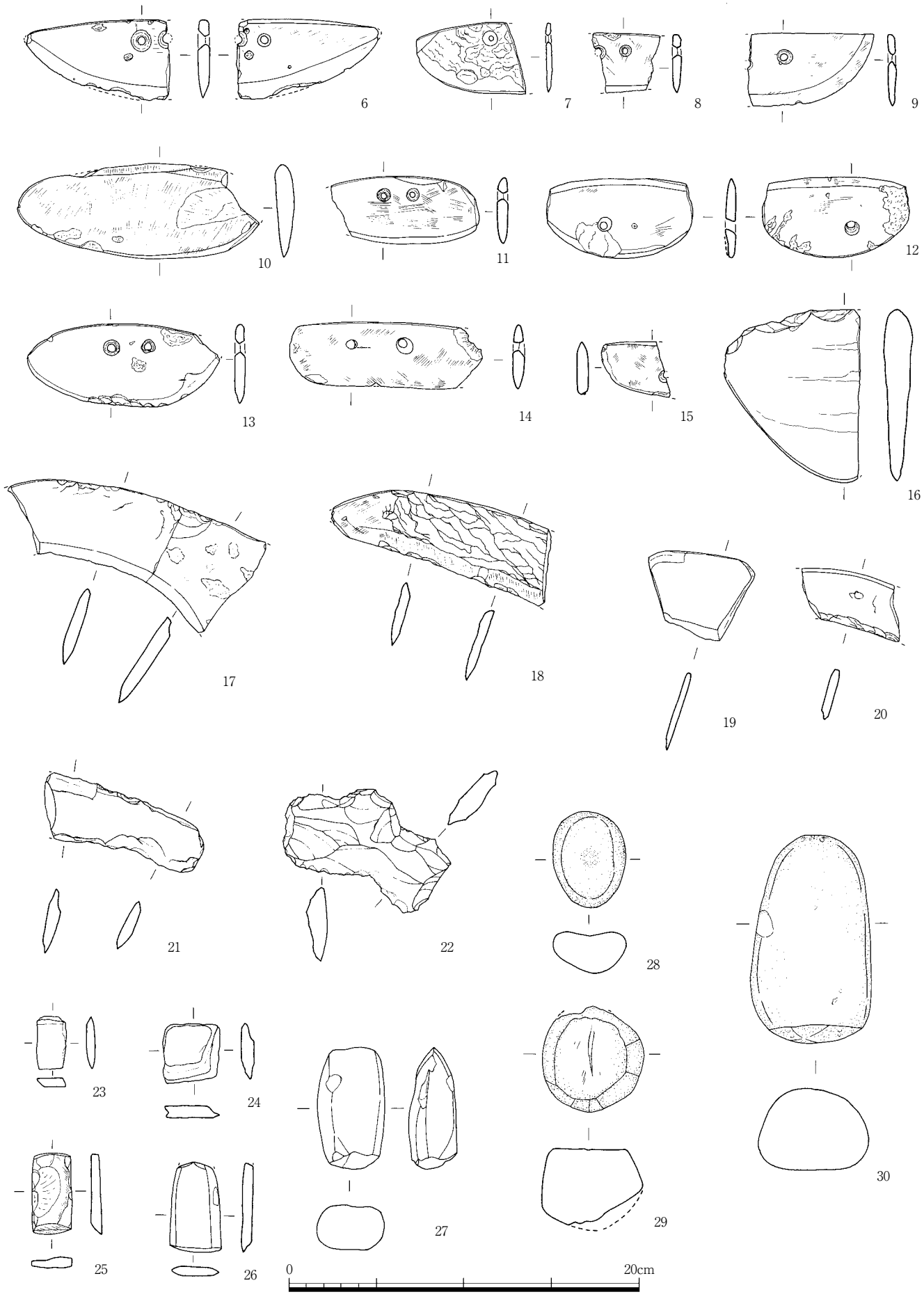
図	No.	出土地点			種類	法量（cm）				調整		色調	材質	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	重量 (g)	外面	裏面			
120	1	Ⅱ	—	W-7-N	スクレイパー	4.7	2.0	0.45	4.4	—	—	若干の白色部分あり半透明	黒曜石	透明の部分みられる
120	2	Ⅱ	—	SC-212	石匙	7.8	3.6	1.0	27.3	—	—	灰白色	—	
120	3	Ⅱ	—	U・V-7	打製石鏃	3.5	1.5	0.2	1.7	—	—	灰白色～灰黄色	—	
120	4	Ⅱ	—	X-8	石鏃	3.0	1.7	0.7	3.0	—	—	黒色	黒曜石	二等辺三角形を呈し，片脚を欠損する，抉入部は浅い
120	5	Ⅱ	—	X-7	石鏃	2.4	1.3	0.3	0.7	—	—	黒色	黒曜石	二等辺三角形を呈し，片脚を欠損する，脚はあまり広がらず抉入部は深くない
121	6	Ⅱ	—	W-7	石包丁	8.2	4.6	0.5	40.1	—	—	灰色	空隙の多い石	穿孔径：5㎜　穿孔間：1.4cm（非常に狭い）　孔近くに黒色顔料のようなものをつけ，穿いた痕跡
121	7	Ⅱ	121	W-7-S	石包丁	6.2	4.1	0.3	16.6	—	—	灰色	—	1/2 程欠損，穿孔は一箇所，刃部は研磨して成形する
121	8	Ⅱ	—	U-8	石包丁	3.9	3.4	0.5	10.3	—	—	褐色	輝緑凝灰岩	穿孔は二箇所，一つは半分欠損する
121	9	Ⅱ	125	V-7-N	石包丁	7.2	4.1	0.45	23.9	研磨	—	灰色	—	刃部の両面は研磨を施す　穿孔は二箇所，一つは 1/3 程度残存，孔間は 1.4cm を測る
121	10	Ⅱ	—	W-7	石包丁か	13.7	5.4	0.9	90.8	—	—	赤灰色	輝緑凝灰岩	使用した痕跡（擦痕）あり　先端は刃部として整えている　石包丁と思われる　穿孔は無い
121	11	Ⅱ	125	V-7-N	石包丁	8.5	3.8	0.6	34.6	研磨	—	灰褐色	輝緑凝灰岩	刃部の両面は研磨を施す　穿孔は二箇所，穿孔間は 1.7cm を測る

表 44　52 次遺構出土石器観察表（2）

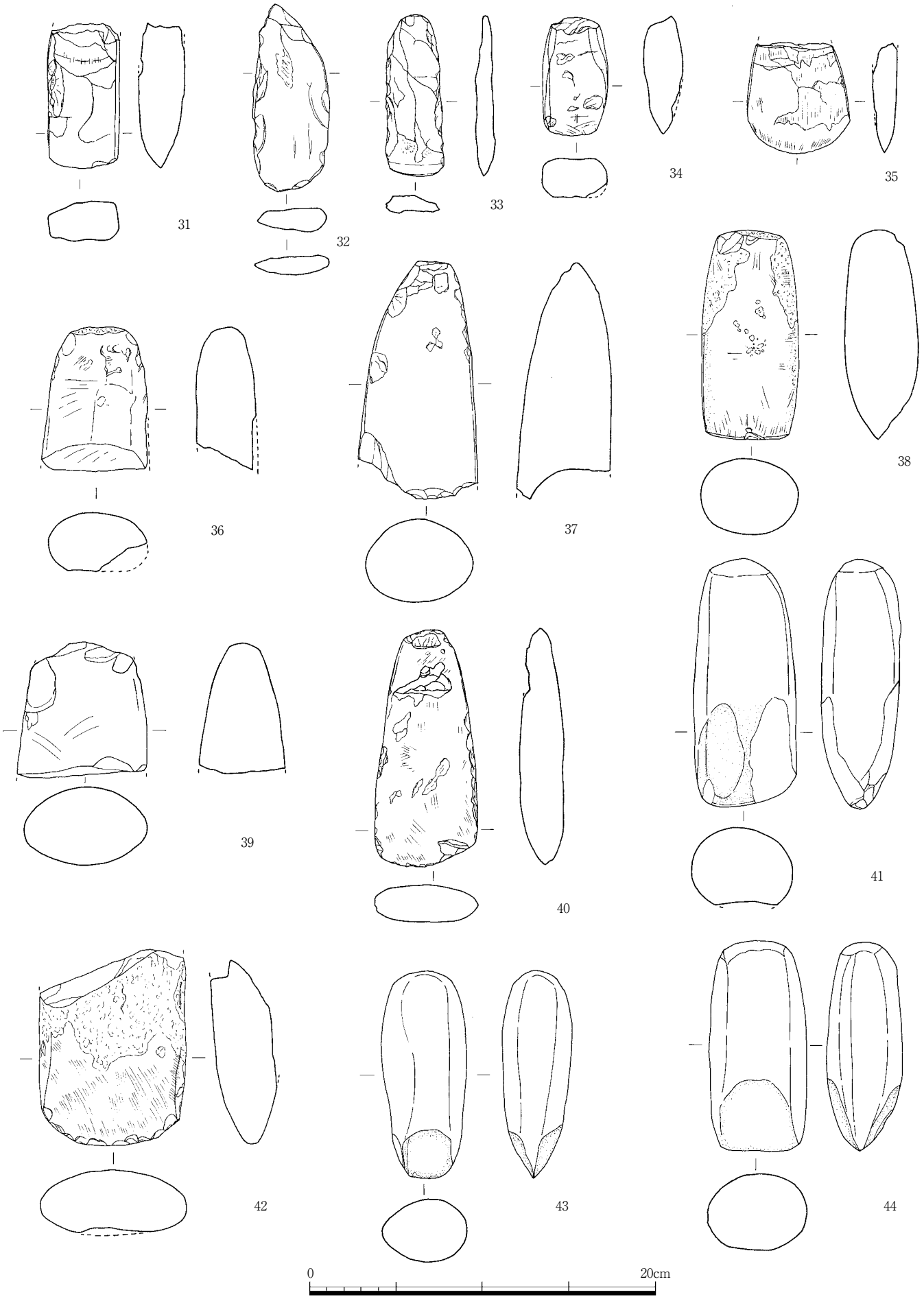
図	No.	出土地点			種類	法量（cm）				調整		色調	材質	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	重量（g）	外面	裏面			
121	12	Ⅱ	121	X-7-S	石包丁	8.3	4.5	0.6	40.6	研磨	—	褐灰色	輝緑凝灰岩	穿孔は一箇所，貫通しない小さな孔がある　刃部は両側から研磨して先端部を尖らせる
121	13	Ⅱ	121	W-7-S	石包丁	10.9	4.7	0.6	41.9	—	—	灰色	—	刃部は両側から先端向かって研磨して尖らせる　穿孔は二箇所、孔間は 1.3cm を測る
121	14	Ⅱ	—	V-8	石包丁	11.0	3.7	0.7	43.1	研磨	—	赤灰色	輝緑凝灰岩	刃部は丁寧に研磨を施す　穿孔は二箇所，孔間は 2.25cm を測る
121	15	Ⅱ	121	W-7-S	石包丁	3.9	3.1	0.65	11.5	—	—	灰褐色	輝緑凝灰岩	穿孔が一箇所 1/2 程度で残存する　刃部は両側から研磨し尖らせる
121	16	Ⅱ	—	V-7	石包丁	7.7	9.8	1.55	143.7	研磨	—	灰黄色	—	刃部の両面は研磨を施している
121	17	Ⅱ	—	V-7	石鎌	14.6	6.2	0.7	108.0	—	—	灰色	—	刃部はこぼれている
121	18	Ⅱ	121	W-7-N	石鎌	12.9	4.2	0.6	59.6	—	—	灰色	—	刃部以外の上半部の両面は工具のようなもので調整を行う
121	19	Ⅱ	—	W-7	石鎌	6.1	4.7	0.35	20.6	—	—	灰色	—	石鎌の再利用品か　周りを丁寧に研磨して成形している
121	20	Ⅱ	130	V-7	石鎌	8.6	3.0	2.5	21.4	—	—	灰色	—	刃部はこぼれている
121	21	Ⅱ	—	V-7	石鎌	9.0	3.6	0.7	40.9	—	—	灰色	—	
121	22	Ⅱ	—	V-7	打製石器	9.8	4.9	1.3	72.5	—	—	黒色	—	用途は不明
121	23	Ⅱ	—	SC212	ノミか	3.0	1.6	0.5	4.3	—	—	灰色	—	石剣の再利用品か　上下の端部は両面を研磨して尖らせている　側面の端は研磨して片刃をつくる
121	24	Ⅱ	—	V-8	用途不明石製品	3.3	3.4	0.7	13.5	—	—	灰色	—	石剣の転用かか上下端部は両側から刃部を成形したと思われる
121	25	Ⅱ	122	X-7-N	ノミか	4.6	2.3	0.6	14.4	研磨	—	灰色	—	片刃を持つ石製品，使用痕（擦痕）が刃部，表裏面の一部，基部の先端面にもみられる
121	26	Ⅱ	—	V-7-N	石剣（再加工品）	5.1	2.9	0.55	16.2	—	—	灰色	—	刃部が先端部と両側端に施されている
121	27	Ⅱ	—	X-7	磨製石斧	6.9	3.8	2.5	112.2	研磨，下部に推打痕	—	—	玄武岩	小型の磨製石斧　先端部は表裏ともに丁寧な研磨　先端～胴部付近表面は剥離
121	28	Ⅱ	—	X-7	用途不明石製品	5.5	4.1	2.4	75.2	—	—	灰色	—	表面は赤色を呈し，裏面は黒色を呈す
121	29	Ⅱ	129	U-8	台石か	6（径）		4.3	172.3	—	—	灰白色～浅黄橙色	—	裏面は若干の欠損はあるも野の，使用を示擦痕が表面や側面でみられる
121	30	Ⅱ	—	V-7-N	敲石	11.8	6.8	5.3	640.0	敲打痕	—	ややピンクがかった灰白色	—	両端部に敲打痕ある
122	31	Ⅱ	130	V-7	石斧	8.3	4.1	2.6	160.8	—	—	灰色	—	刃部の片側には剥離がみられる
122	32	Ⅱ	—	V-7	石包丁	10.8	4.4	1.4	97.3	—	—	灰白色	—	未成品か　先端部は刃部として粗く加工している
122	33	Ⅱ	—	U-8	石斧	9.3	3.3	1.0	48.3	—	—	灰色	—	刃部の両面は研磨，小型の土堀用にに使用か
122	34	Ⅱ	—	X-7	石斧	6.8	3.7	2.6	112.0	研磨	—	灰色	—	小型の蛤刃石斧，基部を除いて全面に研磨を施す
122	35	Ⅱ	122	X-8-S	石斧	6.4	5.8	1.2	83.7	—	—	明緑灰色	—	刃部は両側から研磨，使用を示す条痕が表裏面にみられる　断面は扁平に近い
122	36	Ⅱ	—	V-7	石斧	8.3	6.1	3.9	282.0	—	—	灰色～明黄褐色	—	基部のみ残存する
122	37	Ⅱ	121	W-7-N	石斧	13.8	6.8	5.2	663.0	—	—	灰白色	—	刃部は欠損しているが大型の蛤刃石斧であろう
122	38	Ⅱ	—	W-7・8	石斧	12.0	5.5	4.4	534.0	—	—	灰色	—	刃部は片側は欠損するものの，先端に向かって尖らせる　擦痕がみられる
122	39	Ⅱ	—	W-7	石斧か	7.8	7.4	4.9	415.0	—	—	灰色～浅黄色	—	基部のみ残存する　大型の蛤刃石斧か
122	40	Ⅱ	—	U・V-7	石斧	13.6	6.0	2.55	353.0	擦痕	—	明オリーブ灰色	—	刃部の両面には使用をしめす擦痕がみられる
122	41	Ⅱ	—	X-7	磨製石斧	14.3	5.85	4.3	650.0	—	—	—	玄武岩	磨製石斧　先端に欠損
122	42	Ⅱ	—	X-8	石斧	11.8	8.4	3.4	506.5	—	—	灰色	—	表面の中央部付近のみ敲打痕がある　裏面の中央部は欠損するものの，それ以外の箇所には使用をを示す擦痕がみられる
122	43	Ⅱ	121	X-7-S	磨製石斧	11.95	4.85	3.6	337.0	研磨，下部に推打痕	—	—	玄武岩	磨製石斧　刃先にわずかな刃こぼれ　先端部は丁寧な研磨
122	44	Ⅱ	—	W-7・8	磨製石斧	12.15	5.7	4.4	536.0	研磨，下部に推打痕	—	—	玄武岩	磨製石斧　先端部片面に剥離　刃先は磨滅し丸みを呈す（使用痕）
123	45	Ⅱ	—	X-7	砥石か	4.4	4.4	3.8	97.9	—	—	にぶい黄橙色	—	全面に研磨を施す　石弾の可能性もある
123	46	Ⅱ	—	U・V-7	砥石か	3.3	3.9	3.0	38.8	研磨	—	灰黄色～にぶい黄色	—	多面体で一面をのぞき全て研磨する
123	47	Ⅱ	129	U-8	砥石	6.1	7.1	3.3	298.5	—	—	灰白色～灰黄色	—	表裏面に使用を示す条痕（溝）が 2 本づつある
123	48	Ⅱ	121	X-7-S	砥石	8.3	5.3	4.2	318.0	—	—	にぶい黄橙色	—	全側面に使用を示す擦痕あるいは条痕がみられる　先端部の一部に敲打痕がある
123	49	Ⅱ	—	X-7	磨石	10.2	6.0	4.8	516.5	—	—	灰色～黄褐色	—	上下端部には敲打の痕跡ある
123	50	Ⅱ	—	X-7	砥石	10.2	5.6	5.6	429.0	—	—	にぶい黄橙色	—	側面全てに使用痕ある
123	51	Ⅱ	—	W-7	砥石	2.3	2.3	2.2	17.9	—	—	灰黄色	—	全面に使用を示す研磨がある
123	52	Ⅱ	—	V-8	砥石か	3.4	2.45	2.0	26.4	研磨	—	灰色	—	全面に丁寧な研磨が施されている
123	53	Ⅱ	—	U・V-8	砥石	4.4	3.0	2.6	49.9	—	—	灰色～灰黄色	—	五角形状を呈した石材面を使用
123	54	Ⅱ	—	W-8	砥石	5.1	2.4	2.3	47.5	—	—	灰色	—	5 角形の側面を砥石として利用している
123	55	Ⅱ	—	W-8	砥石	5.7	2.5	1.2	24.5	—	—	黒オリーブ色	—	5 角形の側面を砥石として利用を示す擦痕がみられる
123	56	Ⅱ	—	W-7	砥石か	5.0	4.5	1.9	74.4	—	—	灰色	—	表裏面と片方の側面に研磨痕がみられる
123	57	Ⅱ	—	X-8	砥石	9.1	3.4	1.6	71.4	—	—	灰色	—	先端部面を除き他のすべての面には使用を示す擦痕や条痕がみられる
123	58	Ⅱ	—	W-7	磨石	6.2	5.0	2.8	143.2	—	—	灰色～明黄褐色	—	表裏面が若干凹む　全面に擦痕や研磨痕がみられる

表 45　52 次遺構出土石器観察表（3）

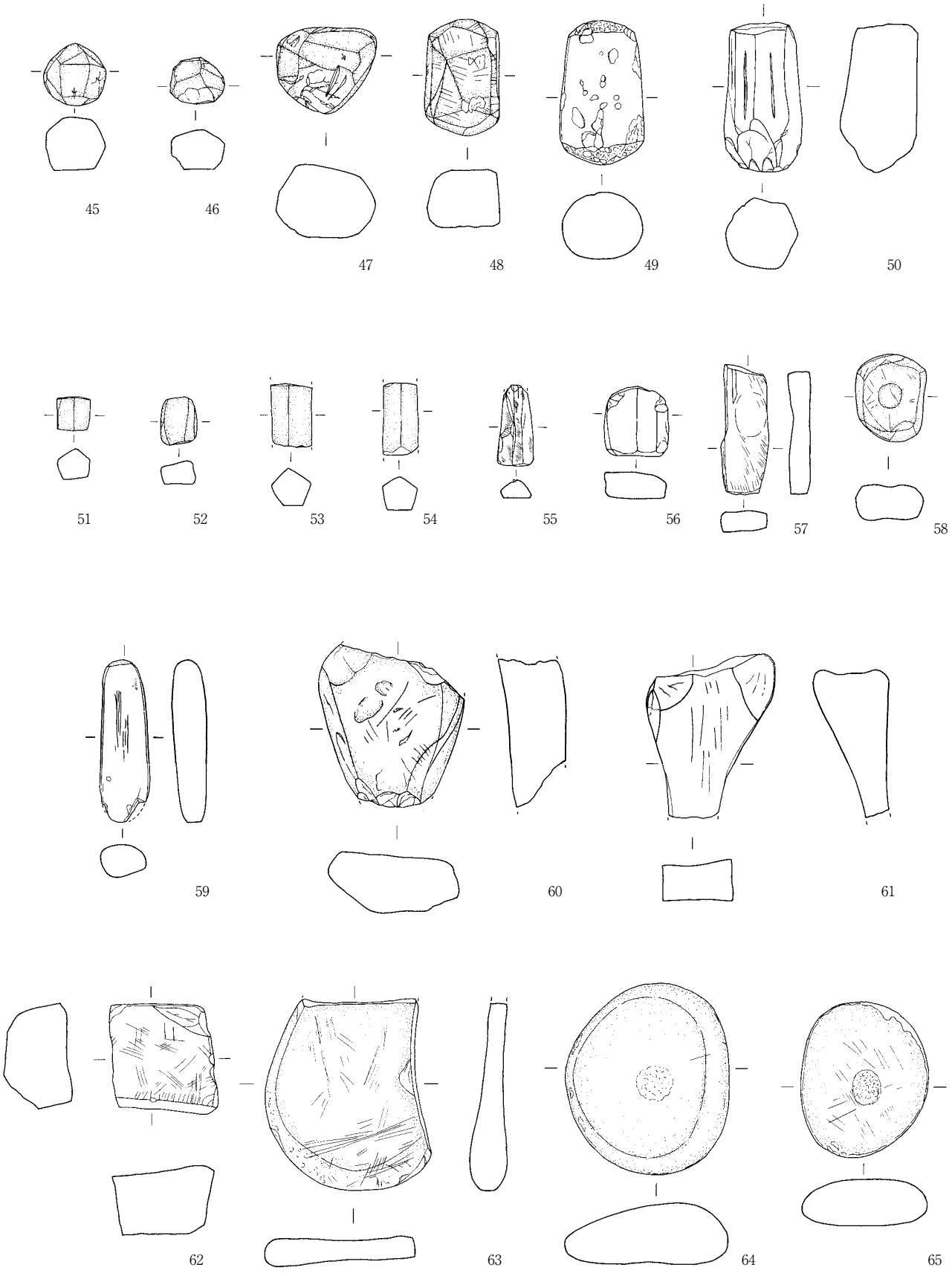
図	No.	出土地点			種類	法量（cm）				調整		色調	材質	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	重量（g）	外面	裏面			
123	59	Ⅱ	—	X-7	砥石	11.5	3.6	2.3	156.1	—	—	灰色～灰オリーブ色	—	表面のみ使用を示す条痕がみられる
123	60	Ⅱ	—	X-7	砥石	11.5	10.4	4.0	738.0	—	—	灰色～黄褐色	—	側面の全面に使用を示す擦痕や条痕がみられる
123	61	Ⅱ	—	V-7	砥石	11.6	9.1	5.4	578.0	研磨	—	灰色	—	上下を除き他の四面に研磨痕ある
123	62	Ⅱ	121	W-7-S	砥石	7.7	8.0	4.9	466.0	—	—	灰色～明黄褐色	—	側面の欠損していⅠ面を除き，全面に使用を示す擦痕や条痕がみられる
123	63	Ⅱ	—	W-7	砥石	13.7	11.0	2.7	528.5	—	—	灰色	—	表面には擦痕・条痕といった支使用痕，裏面には擦痕が若干あり，側面には擦痕や研磨痕，もう一方の側面には敲打痕がある
123	64	Ⅱ	—	X-7	磨石	13.6	11.6	4.4	108.2	—	—	灰色	—	表面には使用を示す擦痕，両側面と裏面には敲打痕がある
123	65	Ⅱ	—	W-7	磨石	11.0	9.0	3.3	538.5	擦痕	—	灰色～灰黄色	—	表面中央部には使用を示す敲打痕があり，両側端部にも敲打した使用痕がある　裏には擦痕がみられる
124	66	Ⅱ	—	V-7	砥石	19.4	6.0	4.0	660.5	研磨	—	灰色	—	上下を除き他の三面に研磨痕ある
124	67	Ⅱ	—	U-8	砥石	12.6	11.7	2.8	700.0	擦痕	—	黄灰色	—	表面に使用をしめす擦痕がある
124	68	Ⅱ	—	W-7	砥石	12.6	6.9	4.0	445.5	—	—	灰色～灰黄色	—	表と片方の側面にのみ使用を示す研磨痕がある
124	69	Ⅱ	—	V-7	台石か	24.4	11.3	8.0	4250	—	—	明緑灰色	—	表面は加工してないがつるっとしている
124	70	Ⅱ	—	W-8	砥石	19.4	7.7	5.9	1136	—	—	灰色	—	表と片方の側面の２面を使用する　使用を示す擦痕や条痕がみられる
124	71	Ⅱ	—	U・V-8	砥石か	32.5	5.0	5.5	1699.0	—	—	灰色	—	使用を示す擦痕や条痕が表面にみられる　1.9 × 1.5cm 径の貫通しない穿孔がある
124	72	Ⅱ	—	W-7・8	台石か	36.4	14.9	7.0	5760	—	—	灰白色～灰色	—	表も裏面も目立った敲打痕や擦痕などみられない　上下の側面も丁寧に成形する
125	73	Ⅱ	125	V-7-N	砥石	32.4	9.7	4.6	3400	使用痕	—	—	砂岩	側面と表面・裏面一部に使用痕あり
125	74	Ⅱ	125	V-7-N	石皿	26.5	14.3	7.25	3900	使用痕	—	淡灰色～褐色	玄武岩	縦方向に細かい擦痕
125	75	Ⅱ	—	W-7	砥石	43.4	25.05	10.3	21.8kg	使用痕	—	—	砂岩	使用痕は表・裏・側面の三ヶ所にあり
126	76	Ⅱ	121 124	W-7-S W-7-N	砥石	A33.1 B37.9	A9.1 B17.6	A7.8 B8.5	10.0kg 12.0kg	使用痕（擦痕） 線刻の擦痕	—	—	粘板岩	AB が縦方向で接合する 半折して使用
126	77	Ⅱ	—	—	砥石	29.4	13.7	6.3	4600	使用痕	—	暗褐色～黄褐色	砂岩	砥石　使用痕
126	78	Ⅱ	—	—	砥石	25.25	24.6	6.9	6500	わずかな使用痕	—	灰淡褐色	砂岩	砥石　前面にわずかな使用痕
127	79	Ⅱ	—	X-7	紡錘車	4.2	4.2	0.9	21.1	つるつるすべすべ	—	灰白色～淡黄色	滑石	穿孔径：6㎜
127	80	Ⅱ	—	W-7	紡錘車	4.8		0.65	23.5	研磨	—	—	頁岩	穿孔あり　両面とも丁寧に研磨
127	81	Ⅱ	—	V-7	紡錘車	4.9 （直径）	0.6 （孔径）	0.55	23.8	—	—	灰色	—	裏面は欠損箇所が多い
127	82	Ⅱ	121	W-7-S	紡錘車	4.9 （直径）	0.4 （孔径）	0.5	23.8	—	—	明緑灰色	—	使用を示す擦痕や条痕が表裏面にみられる
127	83	Ⅱ	130	V-7	紡錘車	4.6 （直径）	0.7 （孔径）	0.7	29.0	擦痕	—	明オリーブ灰色	—	表裏面に擦痕が多く見られる
127	84	Ⅱ	124	W-7	紡錘車	4.4	0.5	0.6	21.4	—	—	灰オリーブ色	—	使用を示す擦痕が表裏面に若干みられる
127	85	Ⅱ	121	W-7-S	紡錘車	4.5 （直径）	0.5 （孔径）	0.5	19.7	—	—	灰オリーブ色	—	使用を示す擦痕や条痕が表裏面にみられる
127	86	Ⅱ	—	V-8	紡錘車	4.6 （直径）	0.55 （孔径）	0.6	22.7	—	—	灰オリーブ色	滑石	
127	87	Ⅱ	125	V-7-N	紡錘車	4.5 （直径）	0.5 （孔径）	0.55	21.2	条痕	—	灰色	—	表裏面に条痕あり
127	88	Ⅱ	—	V-7	紡錘車	6.1 （直径）	0.9 （復元孔径）	0.7	25.1	擦痕	—	灰オリーブ色	—	半欠，表面に擦痕がみれる
127	89	Ⅱ	—	U-8	紡錘車	4.5 （復元直径）	0.5 （復元孔径）	0.5	9.1	—	—	浅黄色	—	半折している
127	90	Ⅱ	—	V-8	紡錘車	3.7 （直径）	0.5 （孔径）	0.6	16.5	—	—	灰白色	滑石	
127	91	Ⅱ	121	X-7-S	紡錘車	4.1 （径）	0.5 （孔径）	0.4	10.1	—	—	灰オリーブ色	—	両面に使用を示す擦痕あり　裏面は赤い色を呈する
127	92	Ⅱ	—	V-7	紡錘車	4.4 （直径）	0.5 （復元孔径）	0.4	8.2	—	—	灰オリーブ色	—	
127	93	Ⅱ	—	V-7	紡錘車	3.6 （直径）	0.6 （孔径）	0.5	12.0	—	—	灰白色	—	
127	94	Ⅱ	—	V-7	紡錘車	4.0 （直径）	0.5 （復元孔径）	0.6	10.5	擦痕	—	明緑灰色	—	表面に擦痕ある
127	95	Ⅱ	—	V-7	紡錘車	3.5 （直径）	0.6 （孔径）	0.4	6.3	擦痕	—	灰色～明黄褐色	—	表面の擦痕多い　裏面は大きく剥離する
127	96	Ⅱ	130	V-7	紡錘車	3.4 （直径）	0.4 （復元孔径）	0.5	4.8	—	—	灰色	—	
127	97	Ⅱ	—	W-7	紡錘車	4.0 （復元直径）	0.55 （復元孔径）	0.6	9.7	—	—	灰オリーブ色	—	1/2 残存，使用を示す擦痕が表裏面にみられる
127	98	Ⅱ	—	V-8	紡錘車	4.2	2.1	0.6	10.3	—	—	灰色	—	穿孔復元径は 0.5cm
127	99	Ⅱ	—	U-8	紡錘車	4.4 （直径）	0.75 （孔径）	1.5	50.4	—	—	灰色～灰白色	滑石	断面は台形状となり，両側面と裏面には擦痕や条痕がみられる
127	100	Ⅱ	—	U-8	紡錘車	4.5 （直径）	0.2 （孔径）	0.5	23.3	—	—	オリーブ黄色～にぶい黄色	—	未完成品，穿孔は貫通せず，表面に小さな円形状の抉りを持つ，側面には条痕がみられる
127	101	Ⅱ	121	W-7-S	石製円盤	5.0	5.1	1.0	46.3	研磨	—	灰色～明黄褐色	—	紡錘車未成品か　円辺を打ち欠く，研磨調整が部分的に見られる
127	102	Ⅱ	—	V-8	石製円盤	6.2	5.9	0.8	50.4	—	—	灰色	滑石	両面には硬い工具で削った痕跡あり
127	103	Ⅱ	—	V-7	石製円盤	4.1	3.3	1.1	24.0	研磨	—	灰白色	—	全面に研磨を施す
127	104	Ⅱ	—	U-8	有孔円盤	3.2	2.7	0.45	7.5	擦痕・条痕多い	擦痕・条痕多い	やや青みを帯びた灰白色	滑石	穿孔径：2㎜
127	105	Ⅱ	—	U-8	有孔円盤	1.4	1.35	0.3	1.1	擦痕・条痕若干あり	擦痕・条痕若干あり	青味の強い灰白色	滑石	有孔円盤の破片
127	106	Ⅱ	—	U-8	有孔円盤	1.8	0.6	0.2	0.4	—	—	濃い青の青緑色	滑石	穿孔径：約 2㎜　有孔円盤の破片



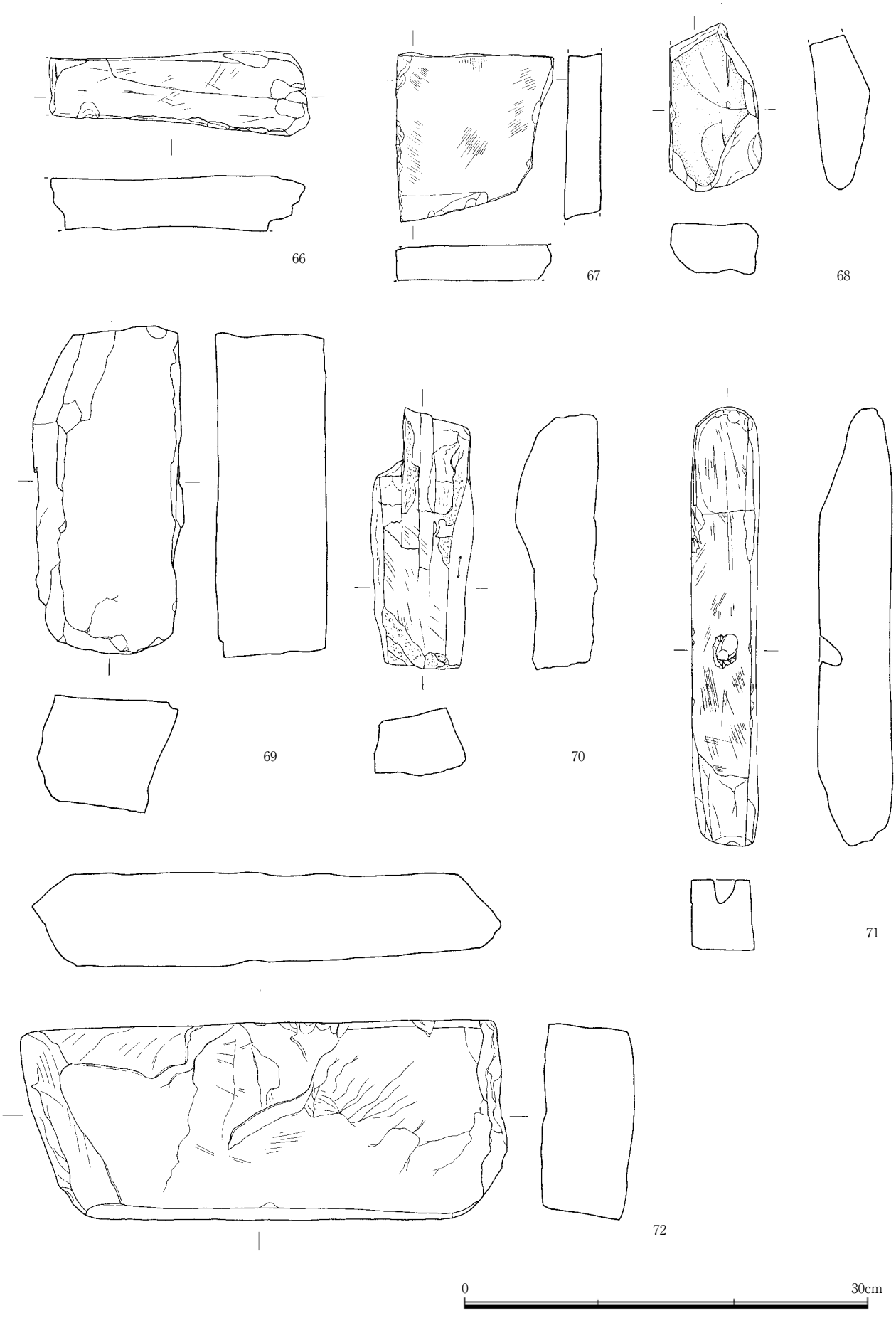
第 121 図　52 次遺構出土石器実測図（2）［1/3］



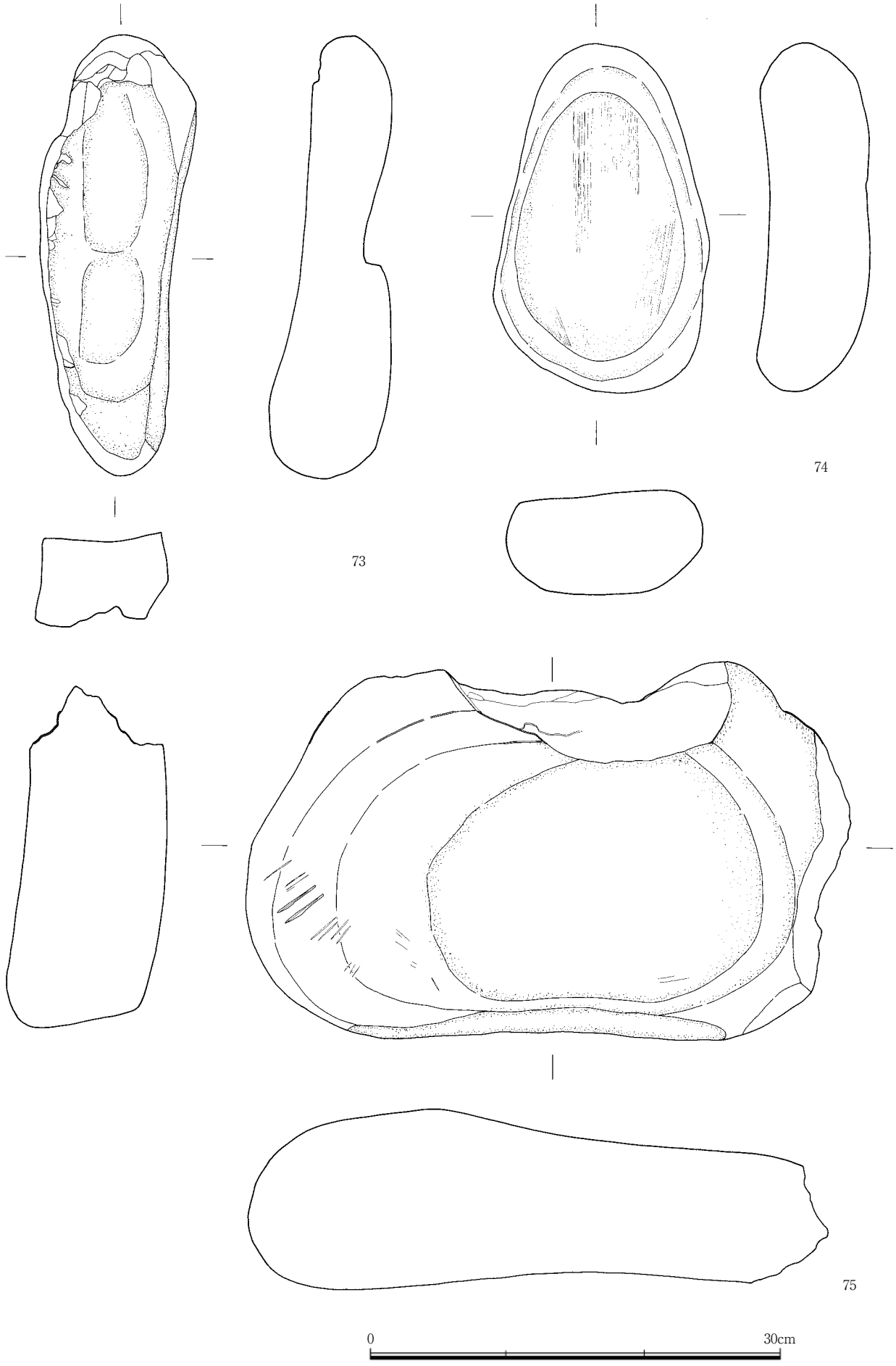
第 122 図　52 次遺構出土石器実測図（3）［1/3］



第 123 図　52 次遺構出土石器実測図（4）［1/4］

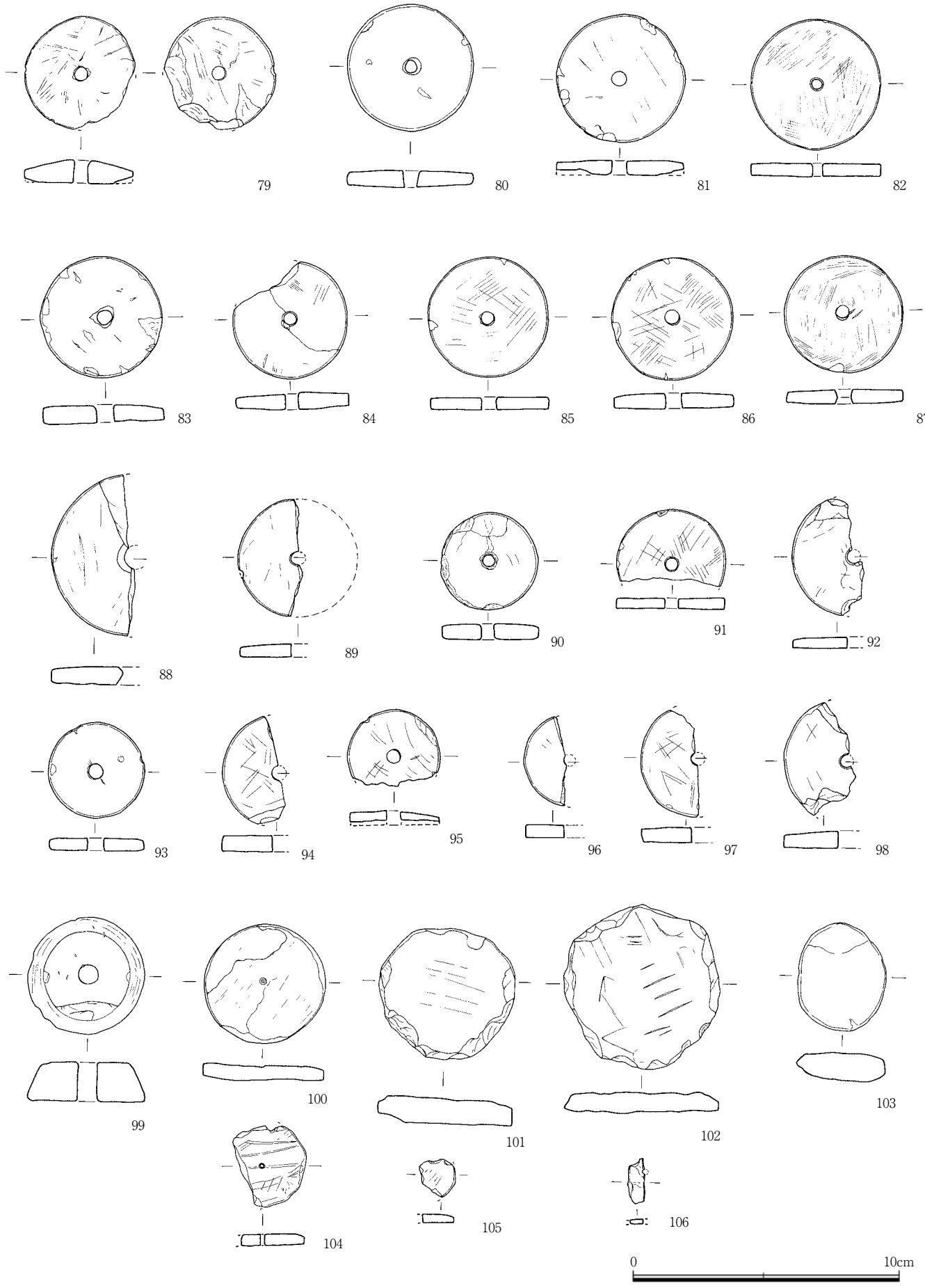


第 124 図　52 次遺構出土石器実測図（5）［1/4］

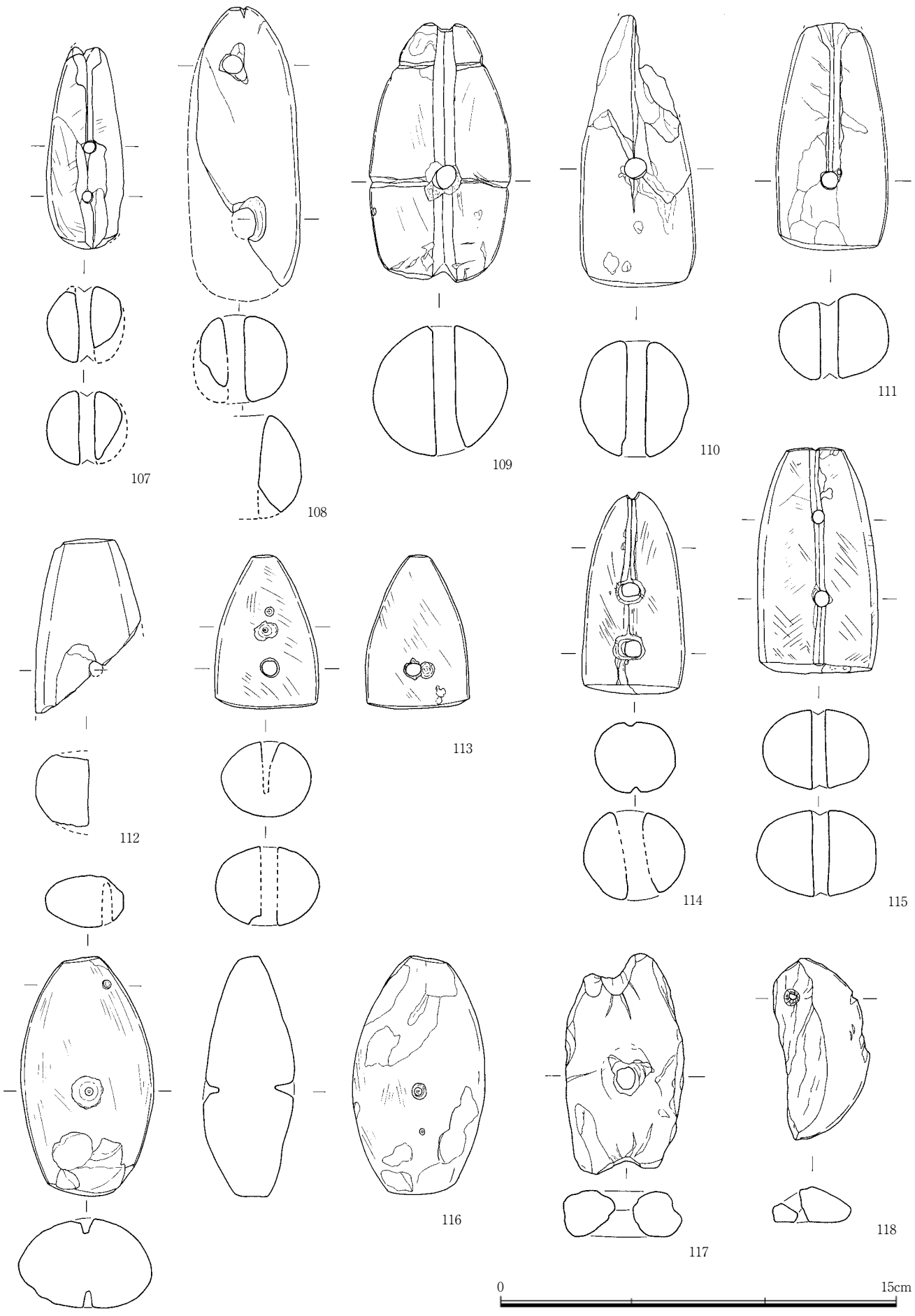


第 125 図　52 次遺構出土石器実測図（6）［1/4］

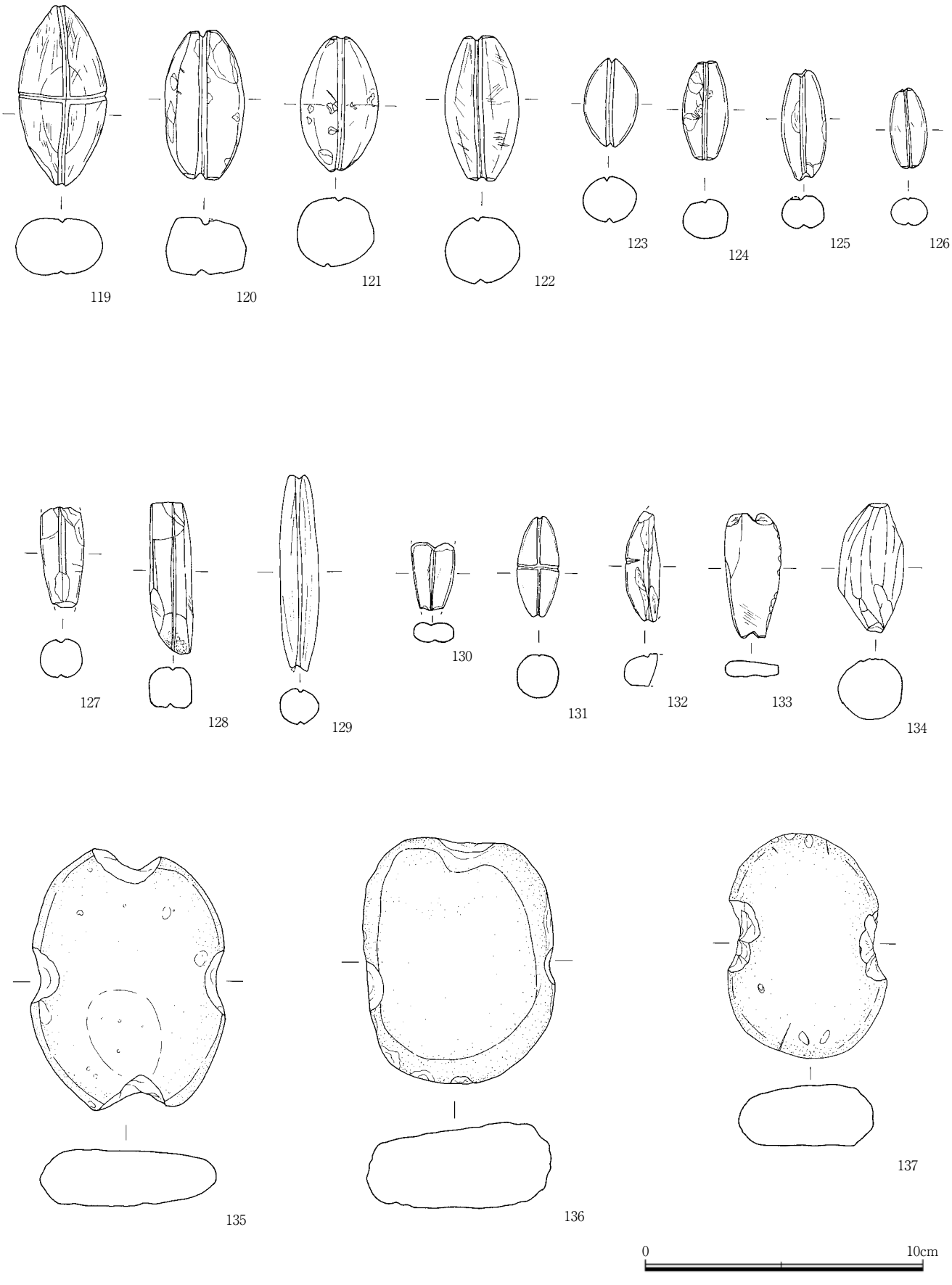
第 126 図　52 次遺構出土石器実測図（7）［1/4］



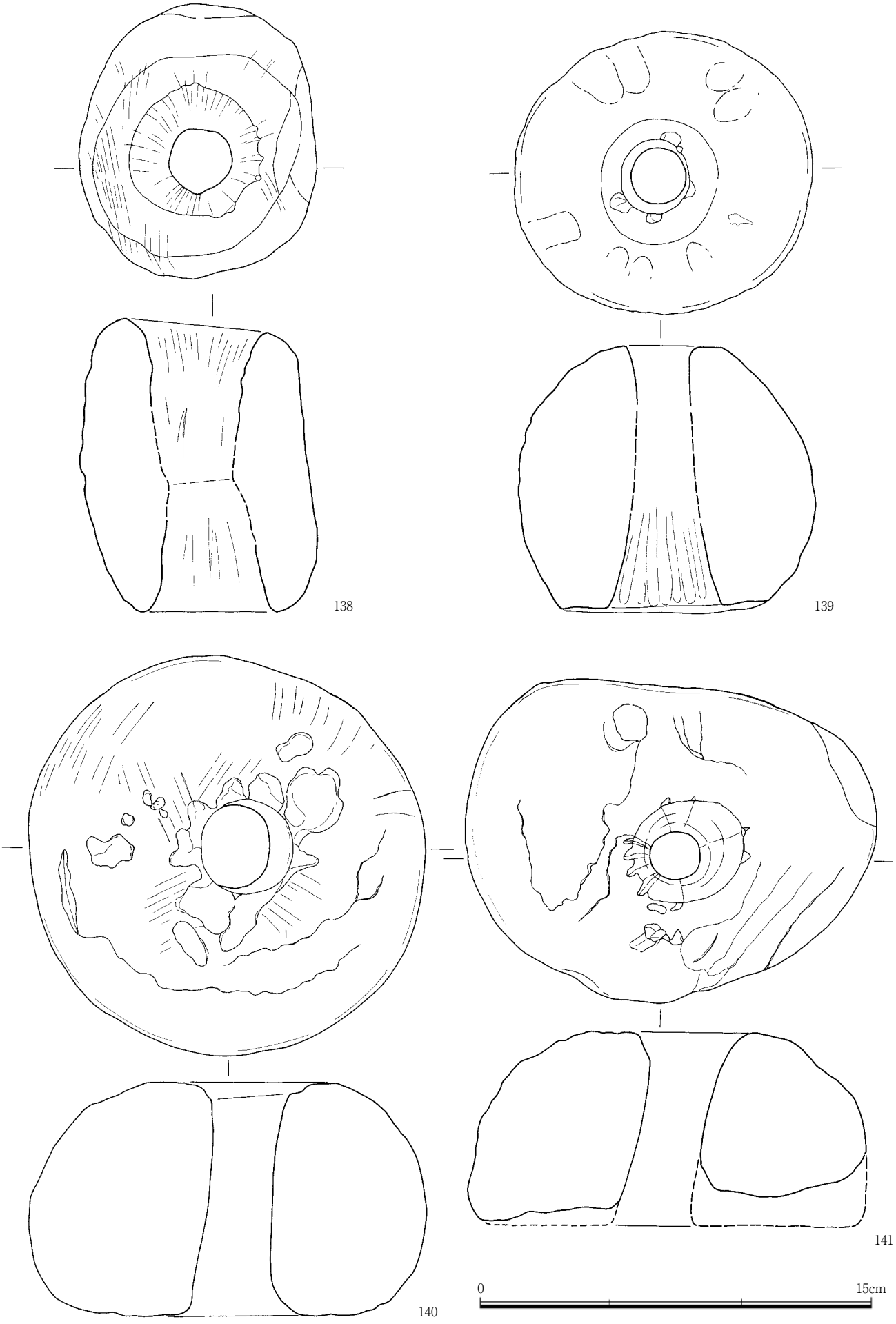
第 127 図　52 次遺構出土石器実測図　［1/2］



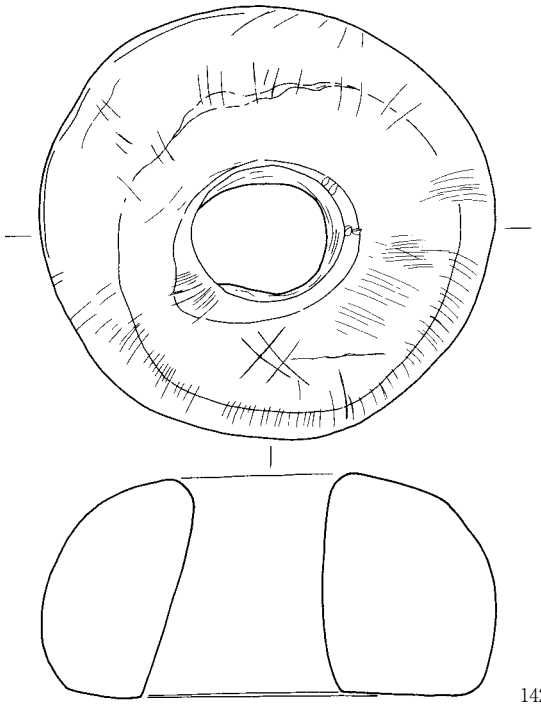
第 128 図　52 次遺構出土石錘実測図（1）［1/2］

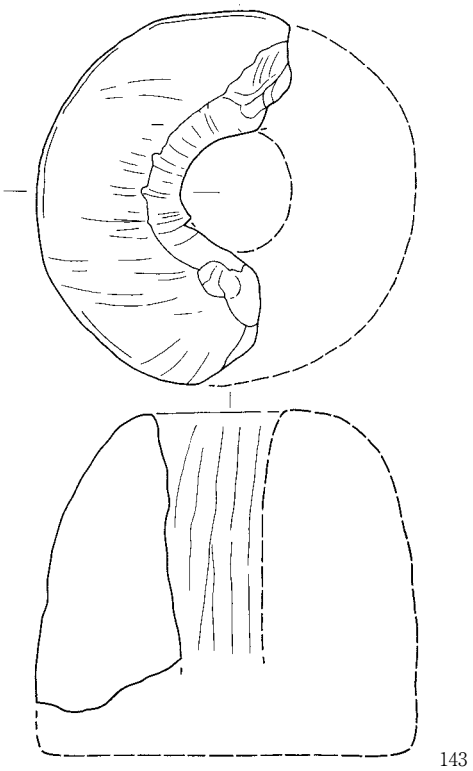


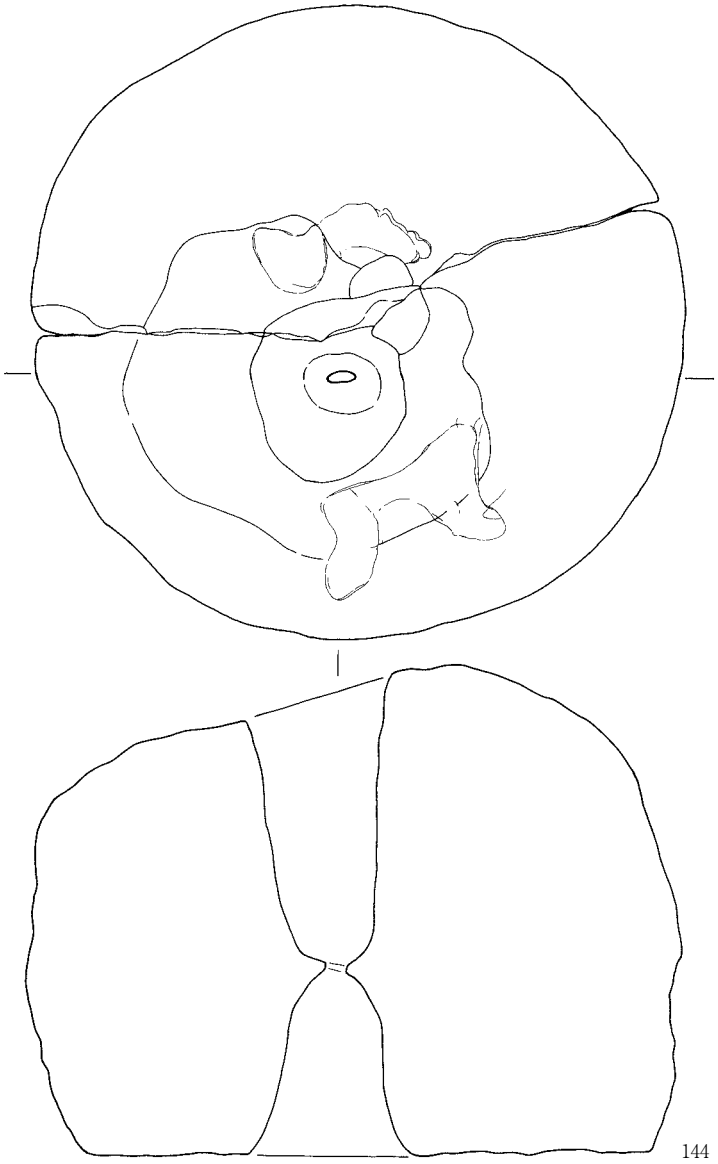
第 129 図　52 次遺構出土石錘実測図（2）［1/2］



第 130 図　52 次遺構出土石錘実測図（3）［1/2］







第 131 図　52 次遺構出土石錘実測図（4）［1/2］

表 46　52 次調査Ⅱ区出土石錘観察表

図	No.	出土地点			種類	法量（cm）				調整		色調	材質	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	重量 (g)	外面	裏面			
128	107	Ⅱ	—	W-7	石錘	7.7	2.9	2.8	71.7	—	—	灰色	—	縦方向に二箇所に穿孔あり，一条の溝が二つの穿孔を通り全周する
128	108	Ⅱ	—	V-7	石錘	10.1	3.8	3.6	144.7	—	—	灰白色	滑石	縦方向に沿って，二箇所に穿孔あり。一つは半欠で，復元孔径は 1.2cm、もう一つは孔径 0.7cm
128	109	Ⅱ	121	W-7-S	石錘	9.8	5.3	4.8	385.0	—	—	灰色～灰黄色	—	中央部付近に穿孔があり，縦方向に一条の太い溝が穿孔を通り全周する。また，細い溝が先端部と穿孔のある中央部で横方向に全周する
128	110	Ⅱ	—	Z-10	石錘	10.3	4.3	4.3	242.5	—	—	灰白色	滑石	先端部付近は欠損や剥離がみられる。穿孔は中央部に位置し，ここから縦方向に一条の溝が先端部を通り裏面の穿孔まで施されている
128	111	Ⅱ	—	W-7	石錘	8.6	4.2	3.1	188.3	—	—	灰白色	滑石	中央部付近に穿孔があり，一条の溝が穿孔から先端部を通り裏面の穿孔に達する。穿孔の傍には小さな孔があるが貫通せず
128	112	Ⅱ	121	W-7-S	石錘	6.6	3.8	3.1	109.8	—	—	灰色～明黄褐色	—	1/2 程欠損，中央部付近で穿孔の一部が残存する。復元孔径は 0.5cm を測る。溝は存在しない
128	113	Ⅱ	129	U-8-S	石錘	5.8	2.9	3.0	100.5	擦痕	—	灰白色～灰オリーブ色	—	表裏面に大小の 5 カ所に穿孔を施しているが，貫通しているのは一箇所のみ。擦痕がみられる
128	114	Ⅱ	125	V-7-N	石錘	7.6	3.9	3.45	142.9	—	—	灰色～にぶい黄橙色	滑石	完形品　有溝石錘（2 カ所四角い孔）
128	115	Ⅱ	—	W-7	石錘	8.6	4.5	3.1	184.8	—	—	灰色	—	縦方向二箇所に穿孔がある。一条の溝が底部面を除き穿孔を通って裏面に達する
128	116	Ⅱ	—	W-7	石錘？	9.1	5.0	3.4	202.5	—	—	灰白色～灰色	滑石	未成品か，表裏面の中央部には貫通しない孔がある。さらに二箇所に小さな貫通しない孔がある
128	117	Ⅱ	—	W-7・8	石錘	8.3	4.4	2.2	107.2	—	—	灰色～黄褐色	滑石	中央部に穿孔がある。上下の端部には凹みがある
128	118	Ⅱ	—	U-8	石錘	6.9	3.6	1.3	47.3	—	—	灰色	滑石	先端部付近に斜め方向に穿たれた孔がある。再加工品か
129	119	Ⅱ	122	X-7-N	石錘	6.6	3.1	2.1	54.1	削り（条痕）	—	灰色	—	縦と横方向に一条のそれぞれの溝が中央部で合うように施され，全周する
129	120	Ⅱ	—	X-7	石錘	5.4	2.4	2.1	54.5	—	—	灰色～にぶい黄橙色	—	縦方向に一条の溝が全周する
129	121	Ⅱ	—	U-8	石錘	4.9	2.8	2.5	48.8	—	—	灰白色～灰色	滑石	一条の溝が縦方向に全周する。中央部に横筋状に細い線があり，使用の痕跡か
129	122	Ⅱ	—	U-8	石錘	5.3	2.7	2.4	38.6	—	—	灰白色～浅黄橙色	—	一条の溝が縦方向に全周する
129	123	Ⅱ	122	X-7-N	石錘	3.1	1.8	1.6	11.0	—	—	—	粘板岩	
129	124	Ⅱ	129	U-8	石錘	3.6	1.55	1.4	11.8	—	—	灰褐色	—	表面のみ一条の溝が認められる
129	125	Ⅱ	—	W-7	石錘	4.0	1.6	1.2	10.1	—	—	灰色～灰黄色	—	縦方向に一条の溝が全周する
129	126	Ⅱ	—	U-8	石錘	2.9	1.3	1.0	5.1	—	—	灰色	—	一条の溝が縦方向に全周する
129	127	Ⅱ	125	V-8-S	石錘	3.7	1.5	1.4	10.8	—	—	灰白色～灰黄色	—	縦方向に一条の溝を両面に施す
129	128	Ⅱ	—	U-8	石錘	5.5	1.45	1.5	17.8	擦痕	—	灰オリ - ブ色	—	表裏面に一条の溝あり，四面には擦痕，砥石に転用か
129	129	Ⅱ	—	W-7	石錘	7.1	1.4		18.4	削り	—	淡灰色	滑石	一条の溝が縦方向に一周　縦方向に細かい削り痕
129	130	Ⅱ	—	V-8	石錘	2.4	1.6	0.7	4.0	—	—	灰色	—	縦方向に一条の溝を両面に施す
129	131	Ⅱ	—	Y-2	土錘	3.1	0.65		6.4			表　灰黒色 裏　淡褐色		土製品　紡錘束　焼成：良好　穿孔径：0.5cm
129	132	Ⅱ	130	V-7	有溝石錘	4.1	1.3	1.25	6.3	—	—	青黒い	滑石	欠損：1/2　縦方向に溝（横方向にも少し）
129	133	Ⅱ	130	V-7-N	石錘	4.5	2.0	0.6	9.5	—	—	灰色	滑石	
129	134	Ⅱ	121	W-7-S	石錘	4.6	1.2 ～ 1.3		27.4	削り	—	—	滑石	石錘未成品　全体に削り施す　穿孔を施そうとした痕跡（1 カ所）
129	135	Ⅱ	—	V-8	石錘	9.5	7.2	2.0	181.0	—	—	灰白色～灰黄色	—	
129	136	Ⅱ	—	W-7	石錘	9.0	6.9	3.1	312.0	—	—	白色・黒色	—	三方向の側端部には僅かに凹みがみられる
129	137	Ⅱ	131	U-7	石錘	8.2	5.7	2.2	177.9	—	—	黒色～灰色	—	
130	138	Ⅱ	129	U-8-S	石錘	10.5	9.1	11.3	1269	—	—	灰色～にぶい黄橙色	—	金属状工具で内外面を削いると思われる
130	139	Ⅱ	129	U-8-N	石錘	11.4	—	10.3	1475	—	—	灰色～浅黄橙色	—	穿孔の内側の削りの加工痕がある
130	140	Ⅱ	129	U-8-S	石錘	15.5 （径）	25（孔径）	9.0	2700	—	—	黄褐色	滑石	
130	141	Ⅱ	129	U-8-S	石錘	15.8	24（孔径）	8.2	1944	—	—	灰色～明黄褐色	—	やや扁平の楕円形を呈す
131	142	Ⅱ	—	X-7	石錘	11.9 （直径）	35（孔径）	6.1	1112	—	—	灰白色～浅黄橙色	滑石	全面に擦痕や条痕がみられる
131	143	Ⅱ	—	W-7-N	石錘	10.0 （復元径）		8.5	507.5	—	—	灰色～浅黄橙色	—	1/2 欠損，穿孔の内側に明瞭な縦方向の削りがみられる
131	144	Ⅱ	—	X-7	石錘	16.75	17.3	18.0	4500	粗く削る、表面の凸凹著しい	—	灰白色	石灰岩	石錘・碇の未成品　穿孔は上下方向から穴をあけ，中央付近で小さく貫通（十分な大きさではない）　のちに半分に割れたか
131	145	Ⅱ	130	SD02	石錘	9.8 （復元径）	—	11.8	1017	—	—	灰色～浅黄橙色	滑石	1/2 残存，穿孔の内側には削り痕みられる。

第 42 次・52 次出土の石器

第 132 図 1 は小形薄手の石刃製ナイフ形石器で、右側辺に細かな調整（ブランティング）を施している。先端部は折れている。黒色黒曜石製。W-7-N 土器群 121 下層出土。2 も先端部の欠損した石刃製ナイフ形石器で、右側辺下部にブランティングを施している。顕著な磨滅痕や擦痕がみられる。風雨等の影響で動いたことにより生じたと思われる。黒色黒曜石製。包含層上部出土。

3 は両面に細調整を施しており、典型的な枝去木型台形石器である。稜部の一部に磨滅痕が認められる。やや大形のハリ質安山岩の剥片を素材としている。D-8 区 SX205 砂礫層出土。4 は淀姫系黒曜石の厚手幅広剥片を素材とする台形石器である。両側辺への細調整のほか、背面にも平坦細調整を施している。全面に磨滅痕が認められる。C-8 区 SD 01 東斜面青灰色土出土。

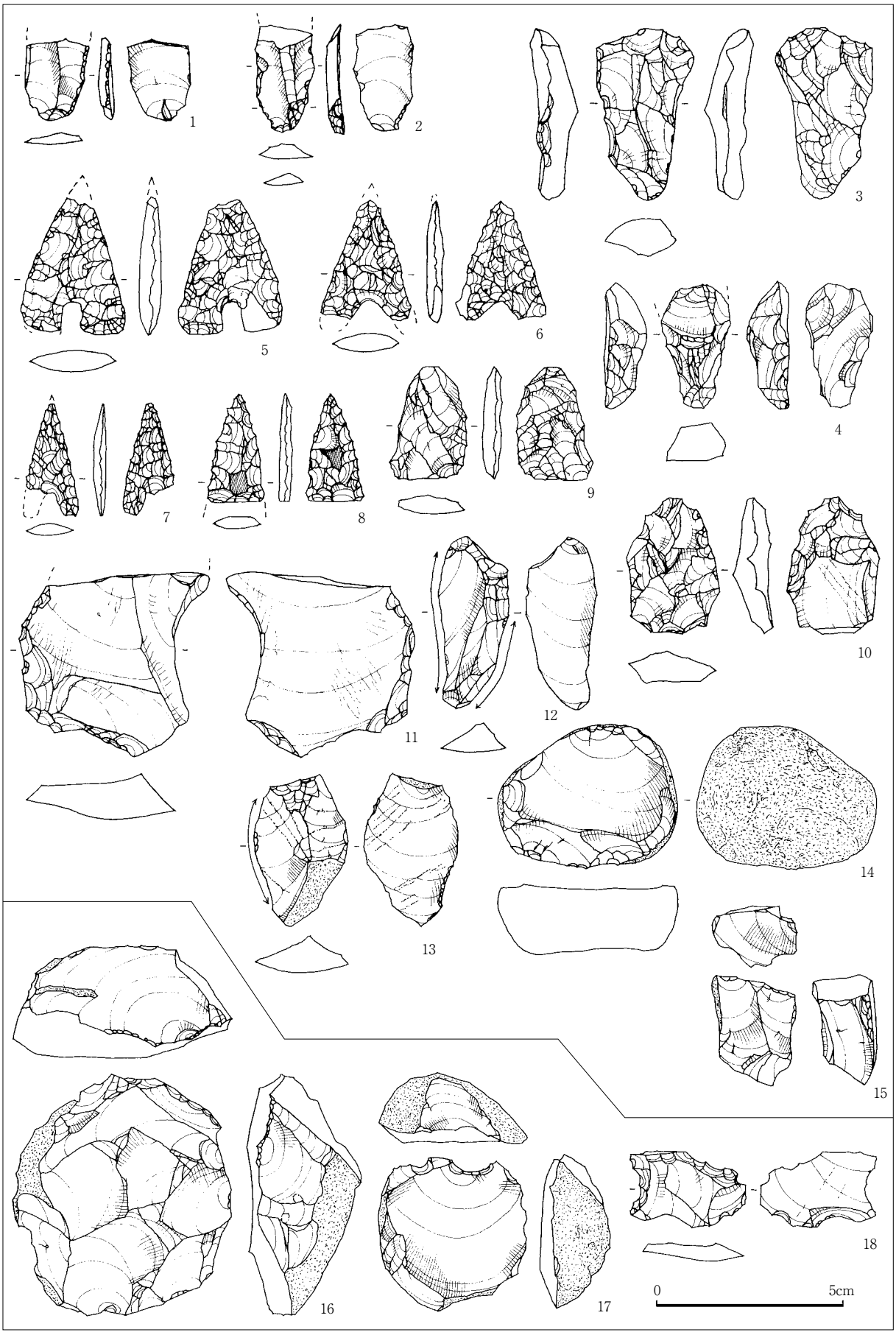
5 は黒色黒曜石製大形の鍬形鏃である。U 字状に深い抉りを入れている。全面に磨滅痕が認められる。C-10 区黒褐色土出土。6 も同様の石鏃と思われるが、細長で脚部は開いている。ハリ質安山岩製。SC-211 出土。7 はさらに細身の石鏃で、両面に入念な細調整を施している。淀姫系黒曜石製。U-8-N 土器群 128 出土。8 は両面の中央部に研磨を施した部分磨製石鏃である。基部は欠損している。黒色黒曜石製。V-8 区 SD02 東側埋没樹痕下部出土。9 は不定形ではあるが、両面に粗い調整を施した石鏃と思われる。先端は丸味を帯びている。腰岳黒曜石製。B-8 区包含層上部出土。10 は背面に第一次剥離面を残す尖頭状石器と思われる。楕円形状に粗い調整を施している。黒色黒曜石製。D-8 区 SX205 砂礫層出土。

11 は大形の安山岩製幅広剥片を素材とし、左側辺の両面に調整痕のあるサイド・スクレーパーである。バルブ部は折断されている。U-7 区黒褐色土上部出土。

12 は黒色黒曜石製の使用痕ある石器で、縦長剥片の両側辺に微細剥離痕が認められる。C-10 区、古墳時代水田直下の黒色土～灰色砂層出土。13 も腰岳黒曜石製の使用痕ある石器。自然面を打面とする縦長剥片の左側辺に微細剥離痕が認められる。X-7 区、土器群 122 下層出土。

14 は松浦黒曜石の円礫半割品を素材とする石核。周辺加撃（求心状剥離）石核で、貝殻状の剥片を剥離している。Ⅰ区、B-10、SD01、西側斜面暗灰色砂質土層出土。15 は腰岳黒曜石製の石核で、打面転移を行っている。不定形の剥片が剥離されている。SC212 出土。

16 ～ 18 は隣接する第 42 次調査地点出土資料である。16 は松浦黒曜石円礫製の周辺加撃（求心状剥離）石核で、側面も剥片剥離を行っている。原の辻型台形石器の素材剥片を剥離していた可能性が高い。Ⅱ区、Z-2、下層出土。17 も松浦黒曜石円礫を用いたもので、周辺加撃石核を意図している可能性がある。Ⅱ区、Z-2、下層出土。18 は灰色黒曜石製のコンケイブ・スクレーパーである。左側辺に細調整を施している。Ⅱ区、Y-2 第 1 層暗紫灰土層出土。



第 132 図　42 次・52 次調査出土石器（2/3）

元岡・桑原42次・52次調査出土ガラス小玉の保存科学的調査

比佐陽一郎・松園菜穂（埋蔵文化財センター）

1．はじめに

元岡・桑原52次調査で出土したガラス小玉について、デジタルマイクロスコープによる製作技法の観察と、蛍光X線分析による材質調査を行った。合わせて隣接した調査区である同42次調査で出土したガラス小玉についても、既に市報1276集にて事実報告と顕微鏡画像掲載は行われているが、材質分析は未実施であったため、この機会に調査を行い併せて結果を報告する。

近代以前のガラスは珪素を主成分とする珪酸塩ガラスであるが、近年の理化学機器を用いた調査の広まりによって、融剤や着色剤等から幾つかに分類され、それぞれの系譜や変遷が明らかにされてきている（奈良文化財研究所2006･肥塚2010）。また、ガラス製品の中でも数多く出土する小玉の類には、製作技法も複数存在することが知られている（大賀2002）。今回の調査はこれらの先行研究を踏まえ、新たなデータの蓄積を目的として行ったものである。

2．調査の方法

調査対象とした資料は元岡・桑原遺跡群42次調査で出土したガラス小玉27点と、同52次調査出土のガラス小玉12点の計39点である。いずれも調査区の東西を流れる旧河川の出土資料で、弥生時代中期後半～後期後半の土器と共伴する資料である。調査は、福岡市埋蔵文化財センターの装置を使用して、これら小玉の製作技法と、基礎ガラス、着色剤の推定を行った。

デジタルマイクロスコープは、試料に光を照射して、反射した光をCCDカメラで検知し、デジタル処理によって拡大しモニターに映し出すものである。画面上での計測や画像の合成、三次元化などの機能が付加されている。使用したのはHIROX社製KH-8700で、観察倍率は20～160倍が使用できる。観察は、表面の凹凸は落射光、内部の気泡や粒子の観察には透過光を用い、ガラス玉に残る気泡や不純物などの流れ、蝕像などを見て、製作技法を判別している。

蛍光X線分析は、試料にX線を照射し、試料に含まれる元素から生じる各元素ごとに特有のエネルギー値を持つ二次X線＝蛍光X線を検出器で捉え、その元素の種類や量を調べる分析法である。ガラス資料の場合、局部的に強いX線を照射するとその部分が変色を来す現象が起きるため、X線強度が小さくても検出感度の優れたエネルギー分散型蛍光X線分析法が有効である。またガラスは風化の影響によって組成が変化する場合があり、本来であれば風化層を除去した上で分析を行い、更に標準資料を用いた校正によって含有元素の定量値を算出し、データの比較検討を行うところであるが、遺物を損傷させずに実施したため定性分析のみに止めている。装置はAMETEK社製のエネルギー分散型微少部蛍光X線分析装置Orbisで、分析条件は次のとおり。

対陰極：ロジウム（Rh）／検出器：シリコンドリフト検出器／印加電圧：20kV・電流値：1000 μ A／測定雰囲気：真空／測定範囲0.3mm ϕ／測定時間120秒

なお分析は、資料を顕微鏡下においてアルコールを用いて洗浄した上で行っている。

3．結果

調査の結果は一覧表に示すとおりである。材質分析については、今回の調査では完全非破壊分析に

よる定性分析であり、得られた元素の種類と相対強度から判定している。なお、材質的な分類は肥塚氏らによる研究（肥塚ほか 2010）に従う。

52 次調査の 12 点は、色調では淡青系３点、青紺系９点に分類されるが、製作技法は色調に関係なく、一様な結果となった。気泡などの流れが不明瞭なものも含まれるが、いずれも引伸ばした管ガラスを短く折り、再加熱して角を丸くしたものと見られる。

材質はいずれも主成分である珪素（Si）とともにカリウム（K）が強く表れており、全てアルカリ珪酸塩ガラスのカリガラス（K_2O-SiO_2 系）であった。その他の検出元素から、淡青系は銅（Cu）、青紺系はコバルト（Co）による着色と判断される結果となった。後者では９点全てでマンガン（Mn）が強く検出されているが、これはコバルトに伴う不純物と考えられる。

42 次調査の 27 点は、淡青系 19 点、青紺系７点、緑系１点に分類される。

まず緑色の１（資料番号 30）点であるが、風化により表面は白色化するなど、他の 26 点とは見た目も異なっていた。分析では珪素とともに鉛（Pb）が非常に強く検出されており、鉛珪酸塩ガラスと考えられる。またバリウム（Ba）は認められず、鉛バリウムガラス（PbO-BaO-SiO_2）ではなく鉛ガラス（PbO-SiO_2）に区分される。風化のため製作技法の観察はできなかったが、これまでの事例では、鉛ガラスの場合巻き付けによる成形が一般的である。

残りは 52 次と同じく、全てカリガラスで、淡青色は銅、青紺色はコバルトによる着色である点も共通する。製作技法は、数点、気泡などの流れが見えず不明なものも数点あったが、残りは引伸ばし→切断→再加熱と見られる。細かく見ると、資料番号５（通し番号１）は、他の淡青色では見られないマンガンが非常に強く検出されている。その影響か、色調も微妙に他と異なるようにも見え、異なる出自である可能性が考えられる。また定性分析のため厳密な比較はできないが、アルミニウムの検出でも違いが認められそうである。資料番号６（通し番号２）もわずかにマンガンが認められるが、資料番号５ほどでは無い。

４．まとめ

元岡・桑原遺跡群 42 次・52 次調査で出土したガラス玉の材質分析の結果、39 点の内、38 点がカリガラス、1 点が鉛ガラスであった。いずれも弥生時代に通有の種類であり、結果に違和感はない。ただし、鉛ガラスは弥生時代に出現し、古墳前半期には一度見られなくなるが、後半期以降に再び丸玉を中心に事例が増加する種類で、今回の事例は鉛ガラスの中でも古い段階の資料ということになる。本市では、これまでに古墳時代後期以降の資料について、群集墳の出土品で数多く分析を行っているが、弥生時代の事例はおそらく市内で初見と思われる。周辺では糸島市の井原鑓溝遺跡で鉛ガラスの連玉を確認している（比佐 2006）。元岡・桑原とは同じ伊都国域の遺跡であり、関連が注目される。

その他の資料については、色調や、同一色調内でも細部に差異が認められるものもあるが、大きな分類では全てカリガラスであった。弥生時代でも後期後葉～古墳前期の南八幡遺跡９次調査では、ソーダ石灰ガラスが混じる例があるが（比佐ほか 2000）、元岡・桑原の本調査区においては画一的な結果であった。淡青色と青紺色のカリガラスがまとまって出土している近隣の事例としては、やはり糸島市の井原遺跡 D 地点の事例が挙げられる（比佐 2003）。

今後、調査の結果を元に、他の遺跡との詳細な比較検討をすることで、当時のガラス製品の流通や入手経路などの解明が期待される。

（参考文献）
大賀克彦 2002「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　福井県清水町教育委員会
肥塚隆保 2010「古代ガラスの科学」『月刊文化財』566 号　第一法規
肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその変遷」『月刊文化財』566 号　第一法規
独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2006『埋蔵文化財ニュース』124　古代のガラス－考古科学的な調査・研究から－
比佐陽一郎 2006「前原市三雲・井原遺跡井原ヤリミゾ 2582、2583 番地出土ガラス玉の調査について」『三雲・井原遺跡－県道瑞梅寺池田線拡幅工事に伴う文化財調査報告書－』前原市文化財調査報告書第 92 集　前原市教育委員会
比佐陽一郎・片多雅樹・北村幸子・肥塚隆保 2000「南八幡遺跡第 9 次調査出土ガラス及び暗赤色小塊物質の保存科学的調査について」『南八幡遺跡 5 －南八幡遺跡第 9 次調査の概要－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 641 集　福岡市教育委員会
比佐陽一郎・片多雅樹 2003「前原市井原遺跡出土ガラス資料の材質調査」『三雲・井原遺跡 III －八龍・三雲堺・宮ノ下・井原堺地区の調査－』前原市文化財調査報告書第 82 集　前原市教育委員会

表 47　元岡・桑原 52 次出土ガラス玉の調査結果

通番	資料番号	ラベル	種別	色調	観察所見	分析所見	重量(g)	備考
1	ガ 1	Ⅱ区、U-8 整地面	小玉	淡青	微細な粒子の凝集が観察できる。気泡はその中に少量散在。不明瞭ながらも不純物や蝕像が孔の長軸に平行して並ぶ様子が観察できる。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Fe、Cu／△ Ca、Pb K が明瞭（K ＞ Ca）＝カリガラス。着色は Cu（、Pb）	0.06	
2	ガ 2	Ⅱ区、U-8 整地面	小玉	淡青	整った管状を呈する。気泡が孔の長軸に平行して並ぶ様子が観察できる。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Fe、Cu／△ Ca、Pb K が明瞭（K ＞ Ca）＝カリガラス。着色は Cu（、Pb）	0.03	
3	ガ 3	Ⅱ区、U-8 整地面	小玉	青紺	浮き輪形を呈する。孔の長軸に平行して不純物や気泡が並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Mn、Fe／△ Ca、Ti／× Co、Cu K が明瞭(K ＞ Ca)＝カリガラス。着色は Co､Mn も顕著。	0.04	
4	ガ 4	Ⅱ区、U・V 検出面	小玉	青紺	整った浮き輪形を呈するが、片側の小口にガラスが柔らかい状態で何かが刺さり、孔の内壁が内側に大きく突出している。孔の長軸に平行して不純物や気泡が並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Mn、Fe／△ Ca、Ti／× Co、Cu K が明瞭(K ＞ Ca)＝カリガラス。着色は Co､Mn も顕著。	0.03	
5	ガ 5	Ⅱ区、U-8 整地面	小玉	青紺	全体に丸みを帯びるが、所々ゆがみも見られる。孔の長軸に平行して不純物や気泡が並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Mn、Fe／△ Ca、Ti／× Co、Cu K が明瞭(K ＞ Ca)＝カリガラス。着色は Co､Mn も顕著。	0.01	
6	ガ 6	Ⅱ区、U-8 整地面	小玉	青紺	浮き輪形を呈するが、一カ所極端に細くなっている。気泡や不純物の流れは不明瞭ながら、孔の長軸に平行する様である。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Mn、Fe／△ Ca、Ti／× Co、Cu K が明瞭(K ＞ Ca)＝カリガラス。着色は Co､Mn も顕著。	0.01	
7	ガ 7	Ⅱ区、U-8 整地面	小玉	青紺	全体に丸みを帯びる。孔の長軸に平行して不純物や気泡が並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Mn、Fe／△ Ca、Ti／× Co、Cu K が明瞭(K ＞ Ca)＝カリガラス。着色は Co､Mn も顕著。	0.01	
8	ガ 8	Ⅱ区、U-8 整地面	小玉	青紺	浮き輪形を呈する。孔の長軸に平行して不純物や気泡が並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Mn、Fe／△ Ca、Ti／× Co、Cu K が明瞭(K ＞ Ca)＝カリガラス。着色は Co､Mn も顕著。	0.01	
9	ガ 9	Ⅱ区、U-8 整地面	小玉	青紺	浮き輪形を呈するが、孔は楕円形を呈する。孔の長軸に平行して不純物や気泡が並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Mn、Fe／△ Ca、Ti／× Co、Cu K が明瞭(K ＞ Ca)＝カリガラス。着色は Co､Mn も顕著。	0.01	
10	ガ 10	Ⅱ区、U-8 整地面	小玉	青紺	全体に丸みを帯びる。気泡は少なく不明瞭ではあるが、孔の長軸に平行して並ぶ様である。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Mn、Fe／△ Ca、Ti／× Co、Cu K が明瞭(K ＞ Ca)＝カリガラス。着色は Co､Mn も顕著。	0.01	半欠損
11	ガ 17	Ⅱ区、U・V-7 検出面	小玉	淡青	管状を呈する。風化のためが表面の凸凹が著しい。微細な粒子の凝集は見られるが、気泡はほとんど観察できない。表面に残る蝕像が孔の長軸に平行しており、引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Fe、Cu／△ Ca、Pb K が明瞭（K ＞ Ca）＝カリガラス。着色は Cu（、Pb）	0.12	
12	ガ 27	Y-7 拡張区検出面	小玉	青紺	全体に丸みを帯びる。孔の長軸に平行して不純物や気泡が並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ Al、K、Mn、Fe／△ Ca、Ti／× Co、Cu K が明瞭(K ＞ Ca)＝カリガラス。着色は Co､Mn も顕著。	0.03	

表 48　元岡・桑原 42 次出土ガラス玉の調査結果

通番	資料番号	ラベル	種別	色調	観察所見	分析所見	重量(g)	備考
1	5	土器群 112　W-5	小玉	淡青	微細な粒子や気泡が孔の長軸に平行して並ぶ様子が観察できる。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○ K、Mn、Cu／△ Ca、Fe／× Al、Ti K が明瞭（K ＞ Ca）＝カリガラス。着色は Cu。Mn が強い特徴がある。	0.25	
2	6	Ⅱ区 SD02 下部 土器群 136 下部礫層中	小玉	淡青	丸みを帯びた浮き輪状を呈する。微粒子や気泡が見られるが、規則性は見出せない。	◎Si／○ Al、K、Fe、Cu／△ Ca、Ti、Mn／× Pb K が明瞭（K ＞ Ca）＝カリガラス。着色は Cu（、Pb）。	0.12	
3	7	Ⅱ区土器群 106 022	小玉	淡青	全体に丸みを帯びる。風化のためか表面がザラザラしている。一部に黒変が見られる。気泡は極めて少なく、微粒子も含めて流れは見えない。	◎Si／○ Al、K、Fe、Cu／△ Ca、Ti／× Pb K が明瞭（K ＞ Ca）＝カリガラス。着色は Cu（、Pb）。	0.05	

通番	資料番号	ラベル	種別	色調	観察所見	分析所見	重量(g)	備考
4	8	Ⅱ区 SD02 下部 土器群 136 下部礫層中	小玉	淡青	全体に丸みを帯びる。気泡は大小多数見られる。一部は孔の長軸方向に平行して並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.08	
5	9	Ⅱ区 X-3 土器群 106　043	小玉	淡青	全体に丸みを帯びるが、所々ゆがみも見られる。気泡は独立したものが孔の長軸に平行して並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.06	
6	10	Ⅱ区 SD02 内 土器群 136 下部	小玉	淡青	全体に丸みを帯びる。気泡は大小多数見られるがそれぞれ独立している。一部は孔の長軸方向に平行して並ぶように見える。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.08	
7	11	Ⅱ区 Y-Z 土器群 136	小玉	淡青	全体に丸みを帯びる。微細な気泡が多数見られるが、明瞭な流れや規則性は見出しえない。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.02	
8	12	Ⅱ区 SD02 内 土器群 136 下部	小玉	青紺	丸みを帯びた筒型。微細な気泡が多数、孔の長軸に平行して並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.05	
9	13	Ⅱ区 X-4	小玉	淡青	全体に丸みを帯びるが、所々ゆがみも見られる。気泡は多くが独立しているが、孔の長軸に平行して並ぶように見える部分もある。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.03	
10	14	Ⅱ区 X-4　河川	小玉	青紺	丸みを帯びた浮き輪状を呈する。独立した気泡の一部は孔の長軸方向に平行して並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.04	
11	15	Ⅱ区 X-5　河川	小玉	淡青	風化のためが表面の微細な凸凹が著しい。気泡は極めて少なく、流れなどは見出せない。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.02	
12	16	Ⅱ区 X-5　河川	小玉	青紺	全体に丸みを帯びるが、所々ゆがみも見られる。気泡は多くが独立しているが、孔の長軸に平行して並ぶように見える部分もある。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.01	
13	17	Ⅱ区 X-6 西砂層	小玉	淡青	全体に丸みを帯びる。気泡は独立し規則性は見えないが、蝕像などから引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.06	
14	18	Ⅱ区 X-6 西砂層	小玉	淡青	薄い（高さのない）円筒形。気泡は独立し流れや規則性はほとんど見えないが、僅かに孔の長軸に平行して並ぶように見える部分がある。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.03	
15	19	Ⅱ区 X-6 西砂層	小玉	淡青	丸みを帯びた円筒形、片側小口面が斜めになる。気泡は独立し流れは見出しえないが、不純物が孔の長軸に平行して伸びる。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.05	
16	20	Ⅱ区 Y-3	小玉	淡青	全体に丸みを帯びる。気泡は多くが独立しているが、孔の長軸に平行して並ぶように見える部分や、やや伸びた形状のものもある。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.06	
17	21	Ⅱ区 Y-3	小玉	淡青	全体に丸みを帯びる。孔がつぶれたように三角形を呈する。気泡は多くが独立しているが、孔の長軸に平行して並ぶように見える部分もある。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.05	
18	22	Ⅱ区 Y-3　河川	小玉	青紺	丸みを帯びた浮き輪状を呈する。気泡は独立しているが、孔の長軸に平行に並ぶ部分も見られる。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.02	
19	23	Ⅱ区 Y-3　下層	小玉	青紺	全体に丸みを帯びるが、ゆがみも見られる。気泡は多くが独立しているが、孔の長軸に平行して並ぶように見える部分もある。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.03	
20	24	Ⅱ区 Y-4　河川	小玉	淡青	丸みを帯びた筒状。気泡は多数見られるが、独立し流れは見えない。不純物が孔の長軸に平行して伸びる。引伸ばしによる成形か。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.04	
21	25	Ⅱ区 Z-1　下層	小玉	青紺	全体に丸みを帯びるが、ゆがみも見られる。気泡は少ないが、不純物やマーブリング状の濃淡も含め、孔の長軸に平行して並ぶように見える部分もある。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○K、Mn、Fe／△Al、Ca、Ti／×Co、Cu Kが明瞭(K＞Ca)＝カリガラス。着色はCo､Mnも顕著。	0.07	
22	26	Ⅱ区 Z-1　右上第２層	小玉	淡青	全体に丸みを帯びる。気泡は多くが独立しているが、孔の長軸に平行して並ぶように見える部分や、やや伸びた形状のものもある。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.03	
23	27	Ⅱ区 Z-2　北	小玉	淡青	全体に丸みを帯びる。気泡は独立し流れは見出しえないが、不純物が孔の長軸に平行して伸びる。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.09	
24	28	Ⅱ区 Z-2　右下第５層灰色砂混粘土	小玉	淡青	片側小口が大きくえぐれたようにゆがむ。気泡は多くが独立しているが、孔の長軸に平行して並ぶように見える部分もある。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.10	
25	30	Ⅱ区 X-4	小玉	緑？	全体に丸みを帯び、浮き輪状を呈するが一部がやせたように細くなる。風化により表面がザラザラし､白色に変質。製作技法に関する情報は得られない。	◎Si、Pb／△Al、Fe、Cu Pbが非常に強く、Baは見られない＝鉛ガラス。着色はFe、Cu。	0.06	
26	31	Ⅱ区 Y-3　左上２層黒①	小玉	淡青	半欠損。多数の気泡が見られ、一部は孔の長軸方向に平行して並ぶ。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.02	半欠損
27	32	Ⅱ区 Y-3　河川	小玉	淡青	全体に丸みを帯び、浮き輪状を呈するが一部がゆがむ。気泡は多く、一部は孔の長軸に平行に並び、伸びた形状のものも見られる。引伸ばしによる成形と考えられる。	◎Si／○Al、K、Fe、Cu／△Ca、Ti、Pb Kが明瞭（K＞Ca）＝カリガラス。着色はCu（、Pb)。	0.03	

◎特に強いピーク
○明瞭に存在が確認できるピーク
△微弱なピーク（Kα〔Lα〕線のピークのみでKβ〔Lβ〕線ピークが見えない）
×極微弱ながら存在が想定されるピーク

第 133 図　52 次調査Ⅱ区出土玉類実測図（1）［実大・1/2］

表 49　52 次調査Ⅱ区出土玉類観察表（1）

図	No.	出土地点			種類	法量（cm）					材質	色調	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	孔径	重量 (g)			
133	1	Ⅱ	—	U-8 整地面	ガラス玉	0.32	—	0.33	0.15	0.1	ガラス	ライトブルー	
133	2	Ⅱ	—	U-8 整地面	ガラス玉	0.24	—	0.27	0.2	0.1	ガラス	ライトブルー	
133	3	Ⅱ	—	U-8 整地面	ガラス玉	0.39	—	0.26	0.25	0.1	ガラス	濃いブルー	
133	4	Ⅱ	—	U・V 検出面	ガラス玉	0.37	—	0.19	0.15	—	ガラス	濃いブルー	
133	5	Ⅱ	—	U-8 整地面	ガラス玉	0.23	—	0.17	0.1	—	ガラス	濃いブルー	
133	6	Ⅱ	—	U-8 整地面	ガラス玉	0.27	—	0.11	0.25	—	ガラス	濃いブルー	
133	7	Ⅱ	—	U-8 整地面	ガラス玉	0.26	—	0.15	0.15	—	ガラス	濃いブルー	
133	8	Ⅱ	—	U-8 整地面	ガラス玉	0.25	—	0.12	0.15	—	ガラス	濃いブルー	
133	9	Ⅱ	—	U-8 整地面	ガラス玉	0.20	—	0.14	0.15	—	ガラス	濃いブルー	
133	10	Ⅱ	—	U・V-7 検出面	ガラス玉	0.23	—	0.13	—	—	ガラス	濃いブルー	半分欠損
133	11	Ⅱ	—	Y-7 拡張区検出面	ガラス玉	0.45	—	0.45	0.15	0.1	ガラス	青緑色	
133	12	Ⅱ	—	U・V 検出面	ガラス玉	0.32	0.32	0.23	0.15	—	ガラス	明るい紺色	
133	13	Ⅱ	129	U-8-S	鉄製品	4.05	1.0	0.5	—	4.1	鉄製品		のみ形の鏃か
133	14	Ⅱ	124	W-8-S	火玉（湯玉）	0.4	0.4	—	—	0.1	鉄製品		
135	1	Ⅱ	—	V-7-N 整地面	滑石製の臼玉	0.57	—	0.16	0.20	0.1	滑石製	薄い茶色味帯びた灰色	
135	2	Ⅱ	129	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.23	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	3	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.23	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	4	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.57	—	0.20	0.20	0.1	滑石製	黒味帯びた灰色	
135	5	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.28	0.15	0.2	滑石製	黒味帯びた灰色	
135	6	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.36	0.20	0.2	滑石製	灰白色	
135	7	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.60	—	0.14	0.20	—	滑石製	黒味帯びた灰色	
135	8	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.22	0.15	—	滑石製	灰白色	
135	9	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.27	0.20	0.1	滑石製	灰白色	
135	10	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.20	0.15	—	滑石製	灰色	
135	11	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.14	0.20	—	滑石製	灰色	
135	12	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰色～灰黄色	
135	13	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.35	0.20	0.1	滑石製	灰色で若干黒点混じる	
135	14	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.24	0.15	0.1	滑石製	青灰色	
135	15	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.25	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	16	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.51	—	0.25	0.15	—	滑石製	黒味の強い灰色	欠損あり
135	17	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.30	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	18	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.17	0.15	—	滑石製	黒味の強い灰色	
135	19	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	20	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.29	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
135	21	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.57	—	0.25	0.20	0.1	滑石製	灰色	

表 50　52 次調査Ⅱ区出土玉類観察表（2）

図	No.	出土地点			種類	法量（cm）					材質	色調	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	孔径	重量 (g)			
135	22	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.30	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	23	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.59	—	0.40	0.20	0.2	滑石製	灰白色	側面細かい削り痕認められる
135	24	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.26	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	25	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.26	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	26	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.39	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	27	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.28	0.20	0.1	滑石製	褐灰色	
135	28	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.48	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
135	29	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.14 ～ 0.29	0.20	0.1	滑石製	暗オリーブ灰色	
135	30	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.33	0.20	0.2	滑石製	オリーブ灰色～暗オリーブ灰色	丁寧に研磨仕上げ
135	31	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.34	0.15	0.1	滑石製	灰色	欠損あり
135	32	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	青灰色	
135	33	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.28	0.19	0.1	滑石製	灰色	
135	34	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.19	0.12	—	滑石製	青灰色	欠損あり
135	35	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.19	0.19	—	滑石製	灰色	
135	36	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.19	0.1	滑石製	灰黄色	
135	37	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.30	0.19	0.1	滑石製	やや青みを帯びた灰色	
135	38	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.17	0.10	—	滑石製	灰色	
135	39	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.56	—	0.16	0.25	0.1	滑石製	青味を帯びた灰色	
135	40	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	41	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.13	0.15	—	滑石製	青味を帯びた灰色	
135	42	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.22	0.25	0.1	滑石製	灰白色	
135	43	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.16	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	44	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.22	0.25	0.1	滑石製	黒味を帯びた灰色	
135	45	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.20	0.20	0.1	滑石製	灰白色	
135	46	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.17	0.15	—	滑石製	若干黒味を帯びた灰色	
135	47	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.45	0.15	0.1	滑石製	黒味を帯びた灰色	
135	48	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	49	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.20	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	50	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	やや明るい灰色	
135	51	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.20	0.15	—	滑石製	灰色	
135	52	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.51	—	0.17	0.15	—	滑石製	灰白色	
135	53	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.28	0.15	0.1	滑石製	褐色がかった灰色	
135	54	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.11	0.15	—	滑石製	黒味を帯びた灰色	
135	55	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	56	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.18	0.16	0.1	滑石製	灰色	
135	57	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	58	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.57	—	0.26	0.15	0.1	滑石製	やや褐色気味の灰色	
135	59	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.49	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	やや薄い灰色	
135	60	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.20	0.14	0.1	滑石製	やや薄い灰色	
135	61	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.20	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	62	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.30	0.20	0.1	滑石製	灰白色	
135	63	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.49	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	64	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
135	65	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.20	0.15	—	滑石製	明るい灰色	
135	66	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	00.9	0.20	—	滑石製	灰白色	
135	67	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.18	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	68	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
135	69	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.60	—	0.20	0.20	0.1	滑石製	灰色	
135	70	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	71	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.51	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	明緑灰色	
135	72	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.57	—	0.27	0.16	0.1	滑石製	明オリーブ色	
135	73	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
135	74	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
135	75	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.21	0.13	—	滑石製	オリーブ灰色	
135	76	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
135	77	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.15	0.15	—	滑石製	灰白色	
135	78	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.28	0.15	0.2	滑石製	黄灰色	
135	79	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.15	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
135	80	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.21	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
135	81	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.51	—	0.27	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
135	82	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.15	0.15	—	滑石製	明オリーブ灰色	
135	83	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.48	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
135	84	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	85	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.49	—	0.12	0.15	—	滑石製	灰白色	
136	86	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	87	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.15	0.15	—	滑石製	オリーブ灰色	
136	88	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.30	0.15	—	滑石製	オリーブ灰色	
136	89	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.15	0.15	—	滑石製	灰黄色	
136	90	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.48	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	91	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	92	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	黄灰色	
136	93	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	94	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	95	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	96	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	97	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	98	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.58	—	0.20	0.20	0.1	滑石製	灰白色	
136	99	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.27	0.15	0.1	滑石製	浅黄色	
136	100	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	101	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.30	0.20	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	102	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.20	0.15	—	滑石製	オリーブ灰色	
136	103	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	緑灰色	
136	104	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	

表 51　52 次調査Ⅱ区出土玉類観察表（3）

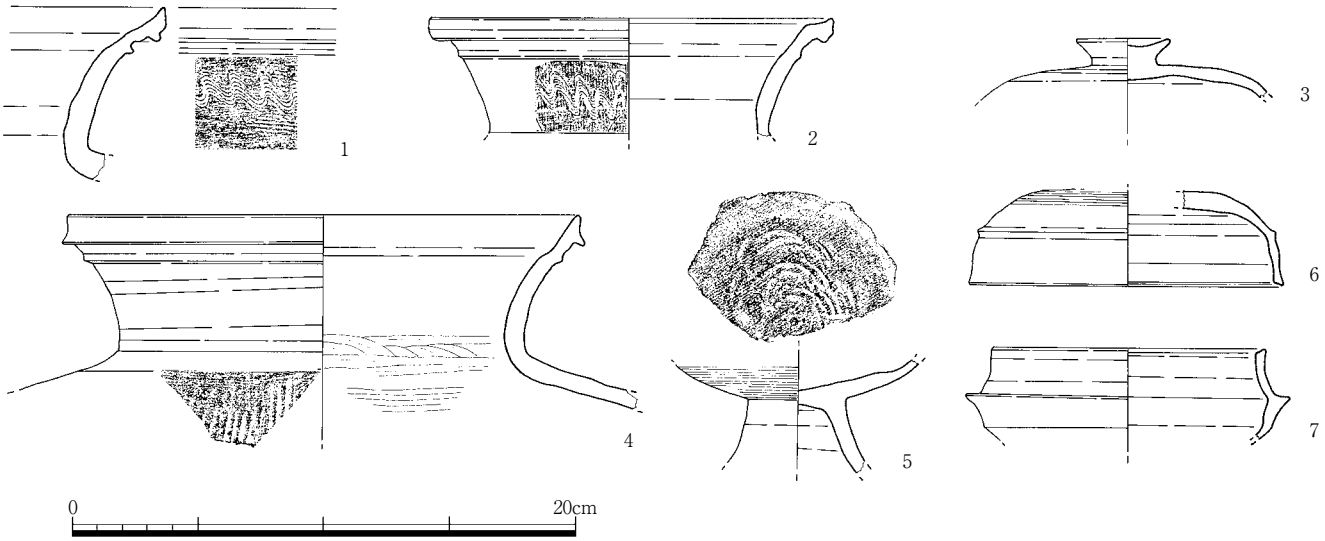
図	No.	出土地点			種類	法量（cm）					材質	色調	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	孔径	重量 (g)			
136	105	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
136	106	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	107	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.12	0.15	—	滑石製	灰色	
136	108	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰黄色	
136	109	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.22	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	110	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.25	0.15	—	滑石製	灰白色	
136	111	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.15	0.15	—	滑石製	明オリーブ灰色	
136	112	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	113	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.33	0.15	0.2	滑石製	オリーブ灰色	
136	114	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.31	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
136	115	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.51	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
136	116	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.51	—	0.15	0.15	—	滑石製	明オリーブ灰色	
136	117	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.24	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
136	118	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.13	0.15	—	滑石製	灰色	
136	119	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.20	0.15	—	滑石製	オリーブ灰色	
136	120	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	121	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.17	0.15	—	滑石製	灰白色	
136	122	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.44	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	123	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	124	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	125	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.21	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	126	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	127	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.32	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	128	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.27	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	129	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.16	0.15	—	滑石製	明オリーブ灰色	
136	130	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.44	—	0.20	0.15	—	滑石製	明オリーブ灰色	
136	131	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.18	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	132	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	133	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.26	0.15	—	滑石製	灰オリーブ色	
136	134	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.44	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	135	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	136	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.28	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	137	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	138	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	139	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰黄色	
136	140	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.14	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	141	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰黄色	
136	142	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.60	—	0.21	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	143	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰黄色	
136	144	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.48	—	0.50	0.15	0.2	滑石製	灰白色～黄灰色	2 色
136	145	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.66	—	0.40	0.15	0.3	滑石製	灰色	
136	146	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.36	0.15	0.2	滑石製	灰白色	
136	147	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.64	—	0.28	0.15	0.2	滑石製	灰色	
136	148	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.34	0.15	0.2	滑石製	明オリーブ灰色	
136	149	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.26	0.13	0.1	滑石製	灰白色	
136	150	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.33	0.13	0.1	滑石製	淡黄色	
136	151	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.58	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	152	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.5	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	黄灰色	
136	153	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰黄色	
136	154	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰色	白い斑点・黒い斑点が見られる
136	155	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.19	0.15	0.1	滑石製	灰黄色～灰色	
136	156	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	157	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.24	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	158	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.13	0.15	—	滑石製	灰白色	
136	159	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.14	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
136	160	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.14	0.15	—	滑石製	オリーブ灰色	
136	161	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.23	0.15	—	滑石製	明オリーブ灰色	
136	162	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.15	0.15	—	滑石製	オリーブ灰色（白い点が入る）	
136	163	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
136	164	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.20	0.15	—	滑石製	オリーブ灰色	
136	165	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	166	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.58	—	0.22	0.15	0.1	滑石製	灰色	
136	167	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.28	0.2	0.1	滑石製	灰色	
136	168	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
137	169	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.37	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	170	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.28	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	171	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.25	0.15	—	滑石製	灰色	
137	172	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.16	0.15	—	滑石製	明オリーブ灰色・黒色粒	
137	173	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.48	—	0.32	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
137	174	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.15	0.15	—	滑石製	灰色	
137	175	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.15	0.15	—	滑石製	灰白色	
137	176	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.48	—	0.22	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	177	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.57	—	0.22	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	178	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	179	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.51	—	0.29	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	180	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.32	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	181	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	182	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.56	—	0.28	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	183	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	184	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.51	—	0.37	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	185	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.13	0.15	—	滑石製	灰色	
137	186	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.35	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	187	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.30	0.15	0.2	滑石製	灰白色	

表 52　52 次調査Ⅱ区出土玉類観察表（4）

図	No.	出土地点			種類	法量（cm）					材質	色調	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	孔径	重量 (g)			
137	188	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.13	0.15	—	滑石製	灰色	
137	189	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.18	0.15	—	滑石製	オリーブ灰色	
137	190	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	191	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.24	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	192	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.21	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	193	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.20	0.15	—	滑石製	灰黄色	
137	194	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.60	—	0.20	0.10	0.1	滑石製	灰白色	
137	195	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.16	0.12	—	滑石製	灰白色	
137	196	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	197	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰黄色	
137	198	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.22	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	199	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.21	0.15	0.1	滑石製	灰色（黒色微粒子を含む）	
137	200	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.09	0.15	—	滑石製	灰色	
137	201	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.14	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	202	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	203	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.19	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
137	204	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	205	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.23	0.15	—	滑石製	灰黄褐色	
137	206	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.12	0.15	—	滑石製	黄灰色（黒色微粒子を含む）	
137	207	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.17	0.15	0.1	滑石製	黄灰色	
137	208	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.58	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	暗オリーブ灰色	
137	209	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
137	210	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.49	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
137	211	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.24	0.15	0.1	滑石製	灰色（黒色微粒子を含む）	
137	212	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.48	—	0.10	0.15	—	滑石製	オリーブ灰色	
137	213	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰オリーブ色	
137	214	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.16	0.15	—	滑石製	灰色	
137	215	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	216	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.28	0.20	0.1	滑石製	オリーブ黒色	
137	217	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.28	0.15	0.1	滑石製	灰白色（部分的に黒い）	
137	218	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	219	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	220	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.14	0.15	—	滑石製	灰色	
137	221	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.48	—	0.24	015	0.1	滑石製	灰色	
137	222	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.51	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	223	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.22	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	224	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	2.21	0.20	—	滑石製	灰色	
137	225	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.22	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	226	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.18	0.15	—	滑石製	灰オリーブ色	
137	227	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.20	0.15	—	滑石製	灰色	
137	228	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.27	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	229	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.56	—	0.16	0.15	—	滑石製	灰色	
137	230	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.49	—	0.26	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
137	231	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	232	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.20	0.20	—	滑石製	灰黄色	
137	233	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.49	—	0.20	0.14	0.1	滑石製	灰白色	
137	234	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	235	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	236	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.44	—	0.32	0.15	0.1	滑石製	灰白色～浅黄色	
137	237	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.22	0.15	0.1	滑石製	灰白色～浅黄色	
137	238	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.15	1.15	0.1	滑石製	灰色	
137	239	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.35	—	0.14	0.15	—	滑石製	灰黄色	
137	240	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	241	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	暗オリーブ灰色	
137	242	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.19	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	243	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.20	0.14	—	滑石製	灰白色	
137	244	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.22	0.16	0.1	滑石製	灰色	
137	245	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.80	0.16	—	滑石製	灰白色～灰色（まだら）	
137	246	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.40	—	0.25	0.14	—	滑石製	灰白色～灰色（まだら）	
137	247	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.13	0.14	—	滑石製	灰オリーブ色	
137	248	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.49	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
137	249	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.27	0.15	0.1	滑石製	オリーブ黒色	
137	250	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.26	0.14	0.1	滑石製	灰白色～灰色	
137	251	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.57	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
137	252	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.17	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
138	253	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	254	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
138	255	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.54	—	0.21	0.15	0.1	滑石製	灰色	
138	256	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.41	—	0.29	0.14	0.1	滑石製	灰色	
138	257	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.22	0.14	0.1	滑石製	灰色	
138	258	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.30	0.16	0.2	滑石製	灰色	
138	259	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.18	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	260	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.30	0.16	0.1	滑石製	灰色	
138	261	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色（白色粒子を含む）	
138	262	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.60	—	0.30	0.15	0.2	滑石製	灰黄色	
138	263	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.18	0.15	0.1	滑石製	灰色	
138	264	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.17	1.05	—	滑石製	灰色	
138	265	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.28	0.20	0.1	滑石製	暗オリーブ灰色	
138	266	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	明オリーブ灰色	
138	267	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.43	—	0.20	0.15	—	滑石製	灰色	
138	268	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.42	—	0.23	0.20	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
138	269	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	

表 53　52 次調査Ⅱ区出土玉類観察表（5）

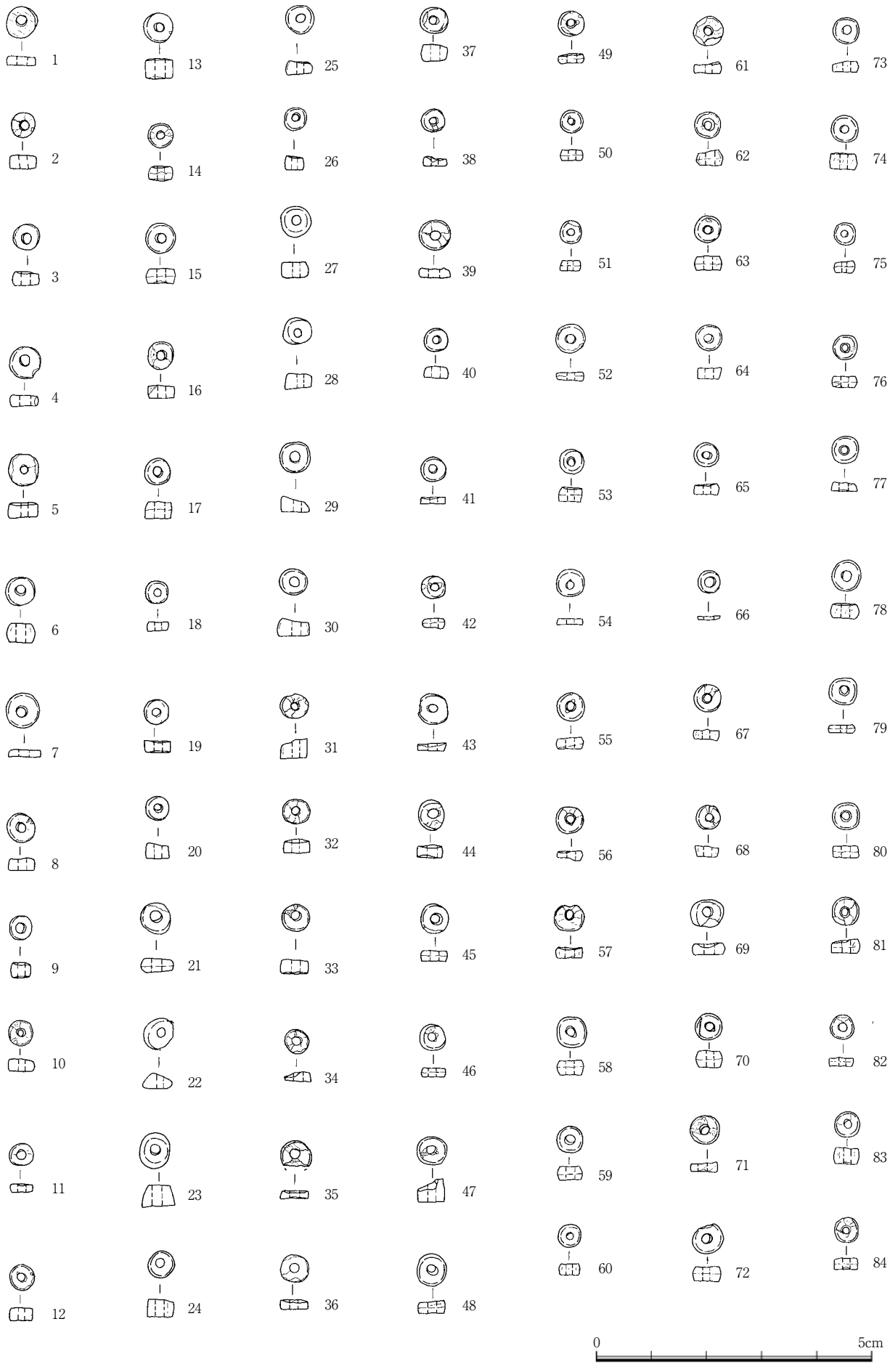
図	No.	出土地点			種類	法量（cm）					材質	色調	備考
		区	土器群	位置		全長	幅	厚み	孔径	重量 (g)			
138	270	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.28	0.15	0.1	滑石製	オリーブ灰色	
138	271	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.20	0.15	0.2	滑石製	灰色	
138	272	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	273	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.44	—	0.20	0.18	0.1	滑石製	灰白色	
138	274	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.52	—	0.32	0.14	0.1	滑石製	灰白色	
138	275	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.45	—	0.17	0.13	—	滑石製	灰色	
138	276	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.48	—	0.13	0.13	—	滑石製	灰色	
138	277	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	278	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.23	0.18	—	滑石製	灰白色	
138	279	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.47	—	0.27	0.15	0.1	滑石製	灰色	
138	280	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.28	0.15	0.1	滑石製	灰色（黒色・白色粒子が見られる）	
138	281	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.55	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	282	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.33	0.14	0.2	滑石製	暗オリーブ灰色	
138	283	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.59	—	0.30	0.15	0.2	滑石製	灰オリーブ色	
138	284	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.53	—	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰色	
138	285	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.50	—	0.17	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	286	Ⅱ	—	U-8 整地面	滑石製の臼玉	0.46	—	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰色	
138	287	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.41	0.41	0.15	0.15	—	滑石製	灰白色	
138	288	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.50	0.48	0.15	0.15	0.1	滑石製	やや暗い灰白色	
138	289	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.55	0.50	0.27	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	290	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.48	0.50	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	291	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.47	0.50	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	292	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.49	0.47	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	293	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.50	0.50	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	294	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.50	0.52	0.24	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	295	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.49	0.47	0.30	0.2	0.1	滑石製	灰白色	
138	296	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.49	0.49	0.26	0.15	0.1	滑石製	灰白色	1 カ所 1mm大の黒色粒子が見られる
138	297	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.46	0.45	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	298	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.52	0.53	0.33	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	299	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.39	0.36	0.20	0.25	—	滑石製	灰白色	
138	300	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.43	0.43	0.18	0.15	—	滑石製	灰白色	
138	301	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.48	0.43	0.14	0.15	—	滑石製	青味を帯びた灰色	
138	302	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.54	0.49	0.20	0.2	0.1	滑石製	灰白色	
138	303	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.53	0.47	0.28	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	304	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.49	0.40	0.16	0.15	—	滑石製	やや白味の強い灰色	
138	305	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.56	0.56	0.35	0.15	0.2	滑石製	灰白色	
138	306	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.49	0.50	0.29	0.2	0.1	滑石製	灰白色	
138	307	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.47	0.50	0.26	0.25	—	滑石製	灰白色	
138	308	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.46	0.49	0.36	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	309	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.47	0.48	0.24	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	310	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.60	0.60	0.30	0.25	0.2	滑石製	灰白色	
138	311	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.60	0.60	0.34	0.15	0.2	滑石製	灰白色	
138	312	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.50	0.46	0.20	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	313	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.46	0.48	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	314	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.50	0.44	0.17	0.15	—	滑石製	灰白色	
138	315	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.55	0.58	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	316	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.55	0.55	0.32	0.15	0.2	滑石製	灰白色	
138	317	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.49	0.5	0.30	0.2	0.1	滑石製	灰白色	
138	318	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.60	0.60	0.15	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	319	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.40	0.42	0.25	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	320	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.40	0.40	0.10	0.15	—	滑石製	灰白色	
138	321	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.53	0.54	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	322	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.48	0.48	0.24	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	323	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.50	0.50	0.30	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	324	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.59	0.58	0.28	0.15	0.2	滑石製	灰白色	
138	325	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.46	0.46	0.27	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	326	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.47	0.48	0.16	0.2	—	滑石製	灰白色	
138	327	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.52	0.54	0.26	0.2	0.1	滑石製	灰白色	
138	328	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.43	0.47	0.20	0.1	—	滑石製	灰白色	
138	329	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.43	0.52	0.18	0.15	0.1	滑石製	灰白色	
138	330	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.38	0.40	0.17	0.15	—	滑石製	灰白色	
138	331	Ⅱ	—	U・V 検出面	滑石製の臼玉	0.40	0.48	0.23	0.15	0.1	滑石製	灰白色	



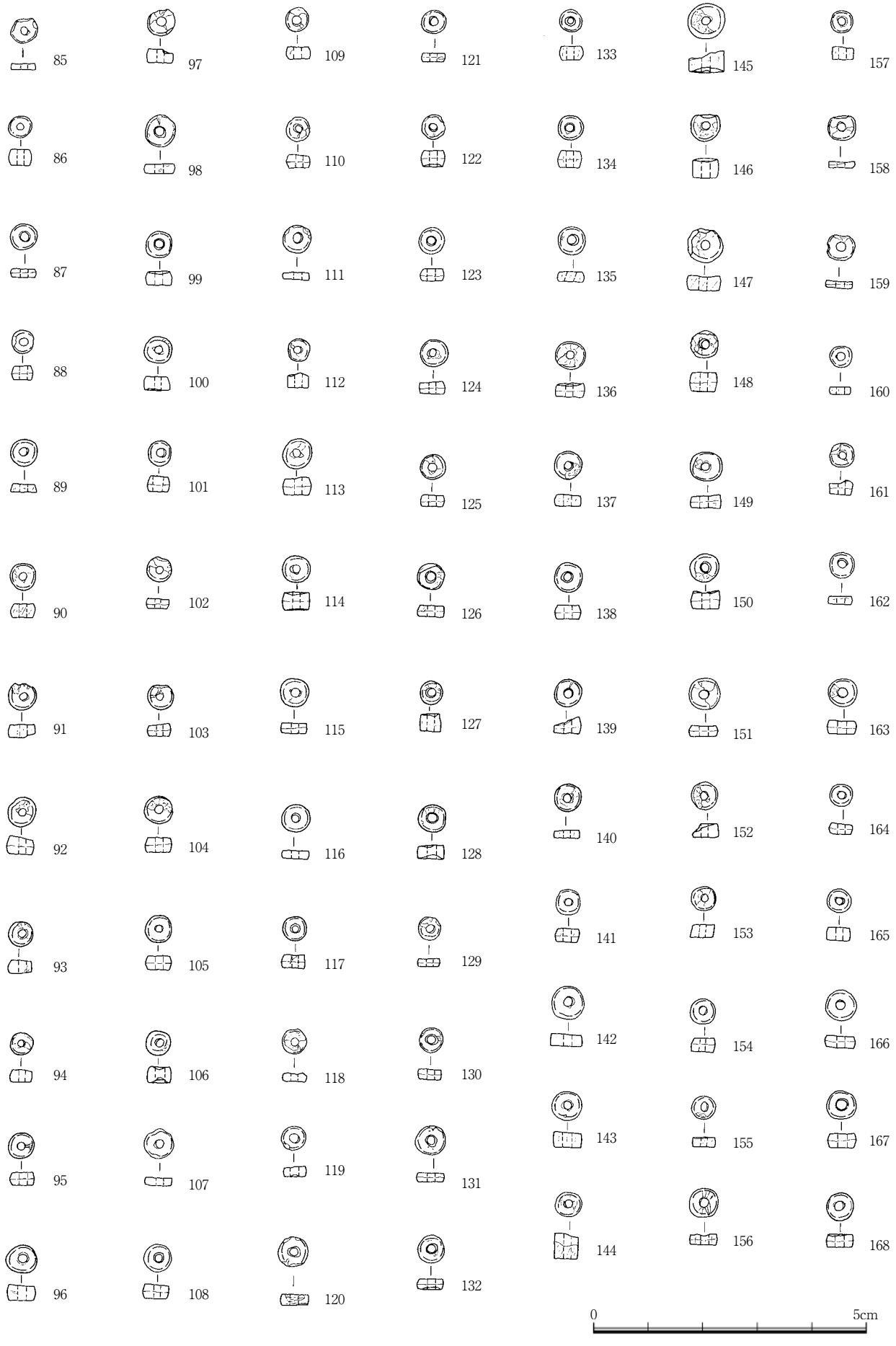
第 134 図　52 次調査 U-8 区出土須恵器実測図［1/3］

表 54　52 次調査 U-8 区出土須恵器観察表

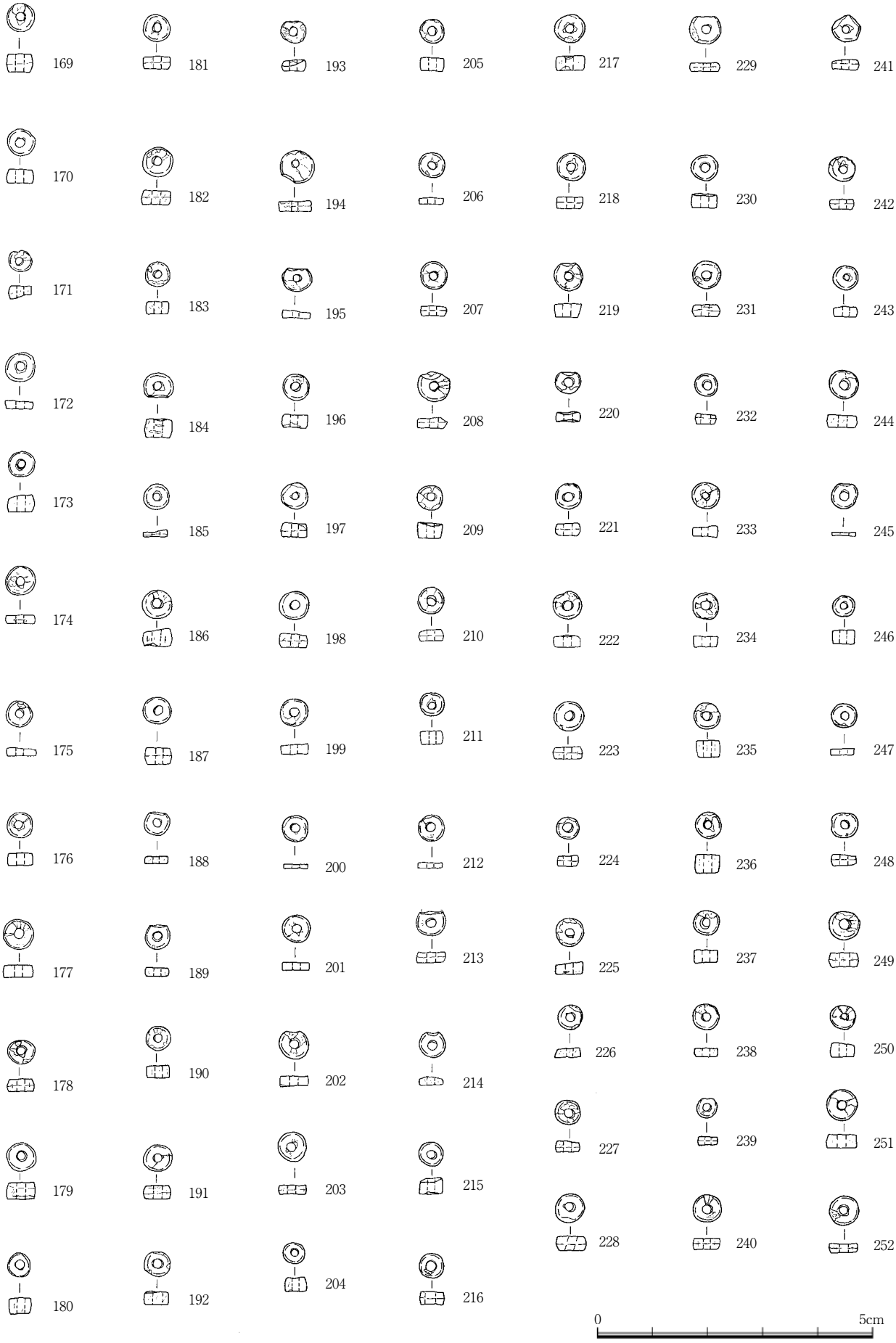
図	No.	出土地点			器形	法量（cm）			調整		色調	胎土	焼成	備考
		区	土器群	位置		器高	口径	底径	外面	内面				
134	1	Ⅱ	—	U-8 整地面	壺	—	—	—	口縁部は回転ナデ，他はカキ目櫛描羽状文あり	回転ナデ	灰色	3㎜以下の白色粒・微粒の黒色粒を含む	堅致	須恵器壺の口頸部の小片 内外ともに自然釉がかかる
134	2	Ⅱ	—	U-8	壺	(15.8)	—	—	回転ナデ，櫛目波状文あり	回転ナデ	灰色	2㎜以下の白色粒を多く含む	堅致	須恵器壺の口頸部
134	3	Ⅱ	—	U-8	蓋	つまみ径 3.7	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰色	白色粒微粒子を含む	堅致	つまみ付き蓋
134	4	Ⅱ	—	U-8 整地面	壺	(20.2)	—	—	回転ナデ，肩部は平行叩き	回転ナデ，頸部はナデ・狭幅工具で斜・横にナデ，肩部は刷毛状工具で横方向のナデ・あて具痕のナデ消し	灰色	3㎜以下の白色粒を若干含む	堅致	須恵器壺の上半部 残存：1/5
134	5	Ⅱ	—	U-8 整地面	高坏	—	—	—	回転カキ目調整，脚部は回転ナデ	坏部はあて具痕あり，脚部は回転ナデ	灰色	5㎜以下の白色粒を若干含む	普通	須恵器の高坏
134	6	Ⅱ	—	U-8 整地面	蓋	12.4	—	—	上面は回転カキ目，他は回転ナデ	回転ナデ	灰色	2㎜以下の白色粒を含む	堅致	須恵器の蓋
134	7	Ⅱ	—	U-8	坏身	(10.8)	—	—	回転ナデ・回転ヘラ削り	回転ナデ	灰色	3㎜以下の白色粒，3㎜以下の褐色粒を含む	堅致	須恵器の坏身



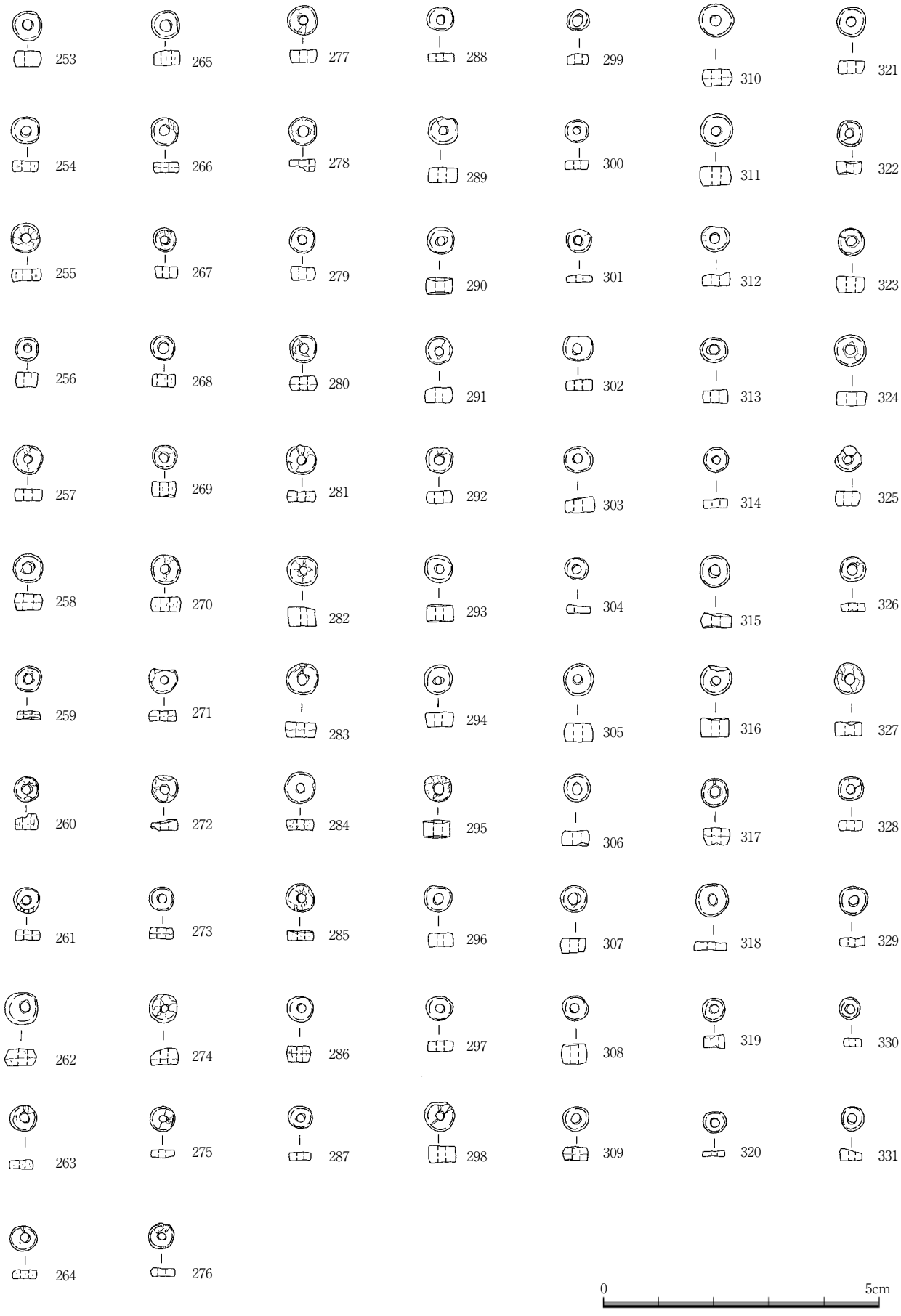
第 135 図　52 次調査Ⅱ区出土玉類実測図（2）［実大］



第 136 図　52 次調査Ⅱ区出土玉類実測図（3）［実大］



第 137 図　52 次調査Ⅱ区出土玉類実測図（4）［実大］



第 138 図　52 次調査Ⅱ区出土玉類実測図（5）［実大］

元岡・桑原遺跡群42次調査出土木製品の自然科学的分析

株式会社　古環境研究所

１．はじめに

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、元岡・桑原遺跡群 42 次調査より出土した木製品について、木材組織の特徴から樹種同定を行う。

２．試料と方法

試料は、元岡・桑原遺跡群 42 次調査より出土した斧柄、鍬、杵、臼、机、椅子、杓子などの木製品計 60 点である。試料の詳細は、結果とともに表１に記す。なお、№42 机は本体と木釘の２点に細分される。また、№16 槽に付着していた種実について所見に記載した。

樹種同定の方法は、次のとおりである。まず、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製した。同定は、生物顕微鏡によって 40 ～ 1000 倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

３．結果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

１）カヤ　*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.　イチイ科　　№53

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では、早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く年輪界は比較的不明瞭である。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔がヒノキ型で１分野に１～４個存在する。仮道管の内壁には、らせん肥厚が２本対で存在するが、腐朽のため不鮮明になっている。接線断面では、放射組織が列の同性放射組織型で、仮道管の内壁には同様になる傾向を示すらせん肥厚が存在するが、腐朽により極めて不鮮明である。

以上の特徴よりカヤに同定される。カヤは宮城県以南の本州、四国、九州と韓国の済州島に分布する。常緑の高木で通常高さ 25m、径 90cm に達する。材は、均質緻密で堅硬であり、弾性が強く水湿にも耐え、保存性が高い。弓などに用いられる。

２）イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch　イヌガヤ科　　№56、57

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材の幅は非常に狭く、樹脂細胞が散在する。放射柔細胞の分野壁孔はトウヒ型で、１分野に１～２個存在する。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～ 10 細胞高ぐらいである。仮道管の内壁にらせん肥厚が存在する。樹脂細胞が多く見られる。

以上の特徴よりイヌガヤに同定される。イヌガヤは、岩手県以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の低木または小高木で、高さ 10 ～ 15m、径 20 ～ 30cm である。材は、やや堅硬で木理は緻密であるが不整でしばしば波状を呈する。建築、器具、土木、ろくろ細工、薪炭などに用いられる。

３）マキ属　*Podocarpus*　マキ科　　№7、25、30、31、32、35、36、42-1、47、49、55

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。 早材から晩材への移行はゆるやかで、樹脂細胞が散在し多くみられる。放射柔細胞の分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１～２個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属には、イヌマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は、耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

４）モミ属　*Abies*　マツ科　　№20、38

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。横断面では、早材から晩材への移行は比較的緩やかである。放射断面では、放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で、１分野に１～４個存在する。放射柔細胞の壁が厚く、じゅず状末端壁を有する。接線断面では、放射組織は単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴よりモミ属に同定される。モミ属は日本に５種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの４種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

５）スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　　№27、45、46

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、１分野に２個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、１～14細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径２mに達する。材は、軽軟であるが強靭で、広く用いられる。

６）スダジイ　*Castanopsis sieboldii* Hatusima　ブナ科　　№5、6、14、16、40

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴からスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は、耐朽性・保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

７）コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　№3、4、23、37、41

横断面では、中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

８）ヤマグワ　*Morus australis* Poiret　クワ科　　№12、17、24、29、58、59

年輪のはじめに中型から大型の丸い道管が、単独あるいは２～３個複合して配列する環孔材である。孔圏部外の小道管は複合して円形の小塊をなす。道管の径は徐々に減少する。道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部の１～３細胞ぐらいは直立細胞である。放射組織は異性放射組織型で、１～６細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の特徴よりヤマグワに同定される。ヤマグワは北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、通常高さ 10 ～ 15m、径 30 ～ 40cm である。材は堅硬で靭性に富み、建築などに用いられる。

9）クスノキ　*Cinnamomum camphora* Presl　クスノキ科　　№10、11、15、18、19、21、28、33、34、39、43、44、54

中型から大型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。放射組織は異性放射組織型で１～２細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の特徴よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ 25m、径 80cm ぐらいであるが、高さ 50m、径５m に達するものもある。材は、堅硬で耐朽性が強く保存性が高い。また芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

10）クスノキ科 *Lauraceae*　　№22、60

中型から小型の道管が、単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。道管の穿孔は単穿孔のものが存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなり、異性放射組織型で１～３細胞幅である。上下の縁辺部のみ直立細胞である。

以上の特徴よりクスノキ科に同定される。クスノキ科には、クスノキ、ヤブニッケイ、タブノキ、カゴノキ、シロダモ属などがあり、道管径の大きさ、多孔穿孔および道管内壁のらせん肥厚の有無などで細分できるが、本試料は道管径以外の点が不明瞭な為、クスノキ科の同定にとどまる。なお、本試料は道管径の大きさから、クスノキ以外のクスノキ科の樹種のいずれかである。

11）イスノキ　*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.　マンサク科　　№8、50、51、52

小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく 15 前後のものが多い。放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが１～２細胞幅であるが、まれに３細胞幅のものも存在する。

以上の特徴よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ 20m、径１m に達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

12）サクラ属　*Prunus*　バラ科　　№26

丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

13）アワブキ属　*Meliosma*　アワブキ科　　№13、42-2

小型の道管が、単独ないし２～４個放射方向にむかって複合して散在する散孔材であるが、その複合部に１～２個の柔細胞をはさんでいるものが見られる。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく 10 本前後である。放射組織は、異性放射組織型で１～４細胞幅である。

以上の特徴よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。アワブキ、ヤマビワ、ミヤマホウソなどがあり、落葉または常緑の低木から高木である。

14）サカキ　*Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科　　№1、48

横断面では小型の道管が、単独ないし２個複合して密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔が階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く 60 を越えるものも観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で単列を示す。

以上の特徴よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ８～ 10m、径 20 ～ 30cm である。材は、強靭かつ堅硬で、建築、器具などに用いられる。

15）ヒサカキ属　*Eurya*　ツバキ科　　№2、9

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材を示す。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く 60 を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性放射組織型で１～３細胞幅で多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ 10m、径 30cm である。材は、強さ中庸で、器具などに用いられる。

４．所見

同定の結果、元岡・桑原遺跡 42 次調査で出土した木製品は、クスノキ 13 点、マキ属 11 点、ヤマグワ６点、スダジイ５点、コナラ属アカガシ亜属５点、イスノキ４点、スギ３点、イヌガヤ２点、モミ属２点、クスノキ科２点、アワブキ属２点、サカキ２点、ヒサカキ属２点、カヤ１点、サクラ属１点であった。

最も多く同定されたクスノキは、臼、脚付鉢、杓子、短甲の未製品？、椅子の受部などに利用されている。

クスノキは堅硬で耐朽性が高い材である。西南日本の沿岸平野に多く、九州や瀬戸内の沿岸の遺跡に特有に多い選材であるため、本遺跡でも特有に選定されたと考えられる。マキ属は、横槌、把手付き容器、杓子、組合式木製案（本体）、柱材、網枠、トリ形木製品に利用されている。マキ属は耐朽性と保存性は高く、水湿に強く、やや重硬で強靱な材である。柱材などの建築部材によく利用され、また机や紡織具などにも広く利用される。マキ属は暖地の山林内や緩傾斜の適潤な場所を好み、温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布し、極めて温暖な気候下の常緑針葉樹で、温暖な九州ないし東海に多い樹木と言える。ヤマグワは、脚付容器、脚付盤、五脚の高坏、小型臼未製品、刳物箱、把手付容器に利用されている。材質はやや堅硬で靱性に富むが、あまり長い材が採ることはできず建築材の利用は少なく、刳物によく用いられる。本遺跡では容器に利用される傾向にあると考えられ、ほとんどが刳物であった。ヤマグワは、温帯に広く分布する落葉高木で、流路沿いや谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好む。スダジイは、鍬、アカトリ（部分）、脚付容器、槽、栓に利用されている。スダジイはやや重硬で、耐朽性と保存性は低い材で、細工物などにはあまり利用されない。利用例としては杭が多く、次いで建築部材が見られるが、他の樹木と比べると利用率は低い。しかし、九州では古くからスダジイを含むシイ属を多く利用する傾向にあり、シイ属が身近に生育していたため頻繁に利用してきたと考えられる。スダジイは温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。なお、№66 槽にはカキノキ属 *Diospyros* の種子が付着していた。このことからカキノキ属を利用していたことが示唆される。コナラ属アカガシ亜属は、平鍬、作業台、杓子の柄、組合式

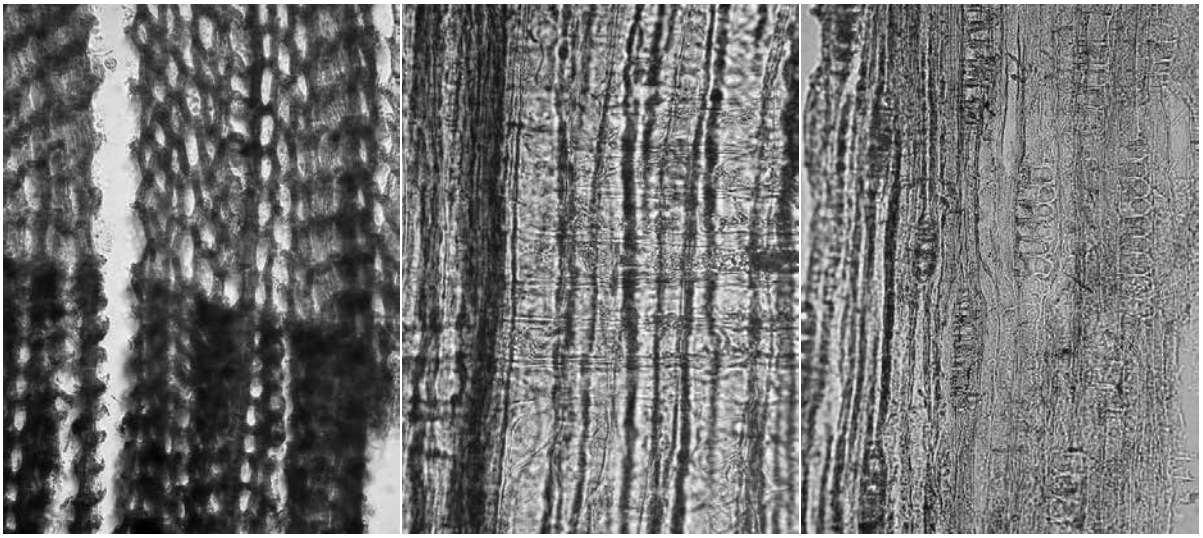
木製案（天板）に利用されている。コナラ属アカガシ亜属は堅硬な材であり、広く用いられるが、弥生時代以降、特に農耕具を中心に用いられる傾向にあり、器具などにも広く利用される。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯、西南日本に分布する照葉樹林を形成する主要高木である。イスノキは、竪杵、刺突具、棒状木製品に利用されている。材質は耐朽性と保存性に優れるが、重硬で切削・加工が困難である。しかし表面上の仕上げは良好であるため、細かい細工や器具類にもよく利用される。また、重硬さから竪杵などの利用も見られ、九州では漁労具にイスノキが利用される傾向がある。イスノキは、暖地の山中に自生する常緑広葉樹で西南日本に分布する照葉樹林の構成要素である。スギは、桶、板状木製品、椅子の受部に利用されている。スギは加工工作が容易なうえ、大きな材がとれる良材で、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。温帯に広く分布し、特に積雪地帯や多雨地帯で純林を形成する針葉樹で、肥沃で湿潤な土壌を好む。イヌガヤは、刳物箱に利用されている。イヌガヤは、大材がないが、やや堅硬で緻密な材である。現在では碁盤、細工物などの主に小器具に用いられるが、建築、土木、ろくろ細工などに用いられる。イヌガヤはカヤには劣るが堅硬な木材であるため、弓の利用例が有名であるが、少ないながら容器の利用例も見ることができる。温帯に分布する針葉樹で、森林下の谷側などに生育し、適潤性の土壌を好む。モミ属は、槽（部分）、楯に利用されている。材は、耐朽性と保存性は低いが、軽軟なため加工が容易な木材である。なお、九州地方におけるモミ属の利用は弥生時代以降から見られるようになる。モミ属は温帯性のモミと考えられ、谷間や緩傾斜地の適潤な深層の肥沃地を好む。クスノキ科は、槽、木製容器の破片に利用されている。クスノキ科は概して強さ中庸で、古くから九州における報告例が見られる。クスノキ科は温帯下部の温暖な暖温帯に分布し、照葉樹林の主要構成要素を含む常緑高木である。アワブキ属は、脚付方形体、組合式木製案（木釘）に利用されている。材は、強さ中庸で比較的大きな材がとれるので、杭や建築部材に利用されることが多いが、他の樹木と比べると利用例は少ない。アワブキ属は落葉ないし常緑の小高木から高木で比較的大きな材がとれる。サカキは、斧柄、柱材に利用されている。強靱、堅硬な材である。靱性に富むことから、縄文時代から斧柄などの工具や農具の柄に重宝された材の１つである。建築材としても有用で、現代でも利用されている。サカキは常緑高木で照葉樹林の構成要素である。ヒサカキ属は、斧柄、円形木製品（蓋）に利用されている。概して強さ中庸の材で杭や農具柄などに利用されることがある。ヒサカキ属は林内、尾根筋、海岸等に自生する常緑の低木～小高木である。カヤは、有文木製品に利用されている。カヤは堅硬で弾性が強く、耐朽性や保存性が高く水湿に耐える材である。加工が容易で割裂し易く、表面の仕上がりが良好で光沢が出る。カヤは、主に温帯下部の暖温帯に分布する常緑針葉樹であり、谷沿いなどやや湿潤なところに生育する。サクラ属は、木製容器の破片に利用されている。耐朽性や保存性の高い材で、切削・加工の難度は中庸で、概して堅硬な材と言える。温帯に分布し、やや乾燥した斜面等に生育する。

同定された樹種はいずれも温帯から暖温帯に分布する樹木ばかりであった。選材には器種に適した樹木もあるが、スダジイ、アワブキ属などの比較的多く利用されない樹木も利用されていた。これらは古くから九州地方に多く生育し、利用されてきた樹木であろう。これらの樹木は遺跡周辺の植生を反映しており、地域的な用材または流通によってもたらされたと考えられる。

№16 槽付着　カキノキ属　Diospyros　種子

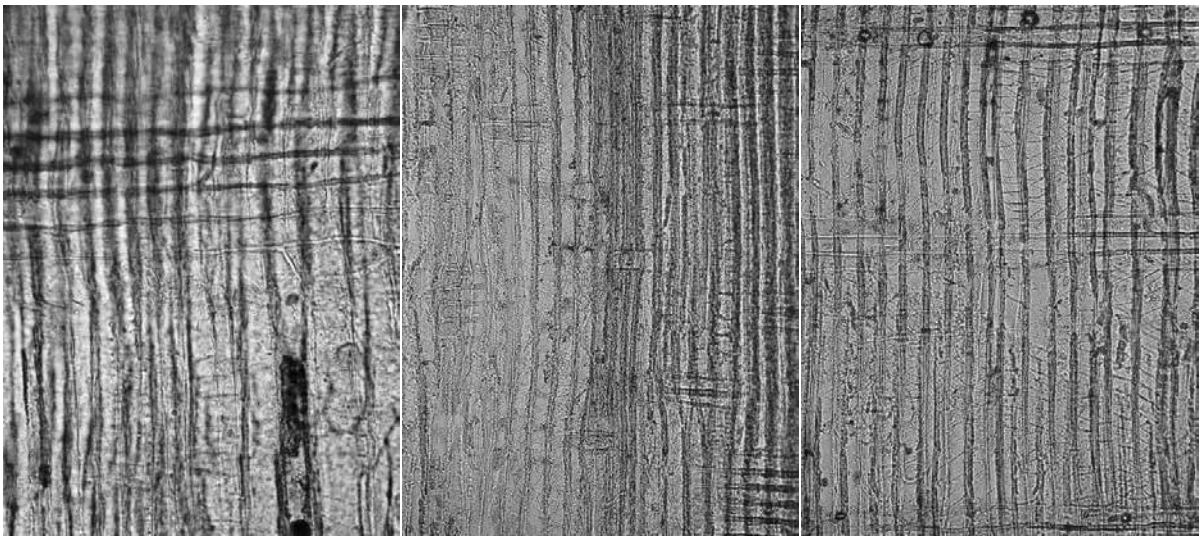
表 55　元岡・桑原遺跡群 42 次調査出土木製品の樹種同定結果

No.	報告書	挿図	種別	器種	結果（学名／和名）	
1	1246 集	15- 1	工具	斧柄	*Cleyera japonica* Thunb.	サカキ
2	1246 集	15- 4	工具	斧柄	*Eurya*	ヒサカキ属
3	1246 集	20- 46	農具	平鍬（糸島型）	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
4	1246 集	20- 48	農具	平鍬（糸島型）	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
5	1246 集	21- 55	農具	鍬	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
6	1246 集	23- 80	農具	アカトリ（部分）	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
7	1246 集	27-105	槌類	横槌	*Podocarpus*	マキ属
8	1246 集	28-112	杵・臼	竪杵	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
9	1246 集	39-181	容器	円形木製品（蓋）	*Eurya*	ヒサカキ属
10	1246 集	29-118	杵・臼	臼	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
11	1246 集	30-123	杵・臼	臼（部分）	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
12	1246 集	31-125	容器	脚付容器	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
13	1246 集	31-126	容器	脚付方形鉢	*Meliosma*	アワブキ属
14	1246 集	31-127	容器	脚付容器	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
15	1246 集	32-129	容器	脚付鉢	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
16	1246 集	32-130	容器	槽	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
17	1246 集	32-128	容器	脚付盤	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
18	1246 集	33-133	容器	把手付容器（部分）	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
19	1246 集	33-134	容器	舟形木製品	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
20	1246 集	33-138	容器	槽（部分）	*Abies*	モミ属
21	1246 集	34-139	容器	槽	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
22	1246 集	34-140	容器	槽	Lauraceae	クスノキ科
23	1246 集	35-141	工具	作業台	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
24	1246 集	36-145	漆塗容器	五脚の高坏	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
25	1246 集	36-147	漆塗容器	把手付き容器	*Podocarpus*	マキ属
26	1246 集	36-154A	漆塗製品	短甲か	*Prunus*	サクラ属
27	1246 集	37-157	容器	桶	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
28	1246 集	37-159	容器	高坏の受部	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
29	1246 集	37-165	杵・臼	小型臼の未製品	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
30	1246 集	40-187	掬い具	杓子	*Podocarpus*	マキ属
31	1246 集	41-189	掬い具	杓子（未製品）	*Podocarpus*	マキ属
32	1246 集	41-194	掬い具	杓子	*Podocarpus*	マキ属
33	1246 集	42-195	掬い具	杓子	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
34	1246 集	42-196	掬い具	杓子	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
35	1246 集	42-200	掬い具	杓子の柄	*Podocarpus*	マキ属
36	1246 集	43-205	掬い具	杓子の柄	*Podocarpus*	マキ属
37	1246 集	43-216	掬い具	杓子の柄	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
38	1246 集	44-232	武具	楯	*Abies*	モミ属
39	1246 集	44-235	武具	短甲の未製品？	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
40	1246 集	44-240	建築部材	栓	*Castanopsis sieboldii* Hatusima	スダジイ
41	1246 集	45-242	机	組合式木製案（天板）	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属
42-1	1246 集	45-245	机	組合式木製案（脚＋桟）	*Podocarpus*	マキ属
42-2	1246 集	45-245	机	組合式木製案（木釘）	*Meliosma*	アワブキ属
43	1246 集	46-252	—	不明木製品	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
44	1246 集	46-253	椅子	椅子の受部	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
45	1246 集	47-258	建築材？	板状木製品	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
46	1246 集	47-259	椅子	椅子の受部	*Cryptomeria japonica* D.Don	スギ
47	1246 集	51-270	建築材	柱材	*Podocarpus*	マキ属
48	1246 集	51-272	建築材	柱材	*Cleyera japonica* Thunb.	サカキ
49	1246 集	57-299	漁労具	網枠	*Podocarpus*	マキ属
50	1246 集	59-312	漁具	刺突具	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
51	1246 集	59-316	漁具	刺突具	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
52	1246 集	60-334	漁具	棒状木製品	*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.	イスノキ
53	1246 集	66-371	儀器	有文木製品	*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.	カヤ
54	1246 集	67-374	儀器	木偶	*Cinnamomum camphora* Presl	クスノキ
55	1246 集	67-377	儀器	トリ形木製品	*Podocarpus*	マキ属
56	1246 集	68-379	容器	刳物箱（蓋）	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch	イヌガヤ
57	1246 集	68-380	容器	刳物箱（身）	*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch	イヌガヤ
58	1246 集	68-381	容器	刳物箱	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
59	1246 集	68-382	容器	取手付容器	*Morus australis* Poiret	ヤマグワ
60	1246 集	36-151	漆塗容器	木製容器の破片	Lauraceae	クスノキ科



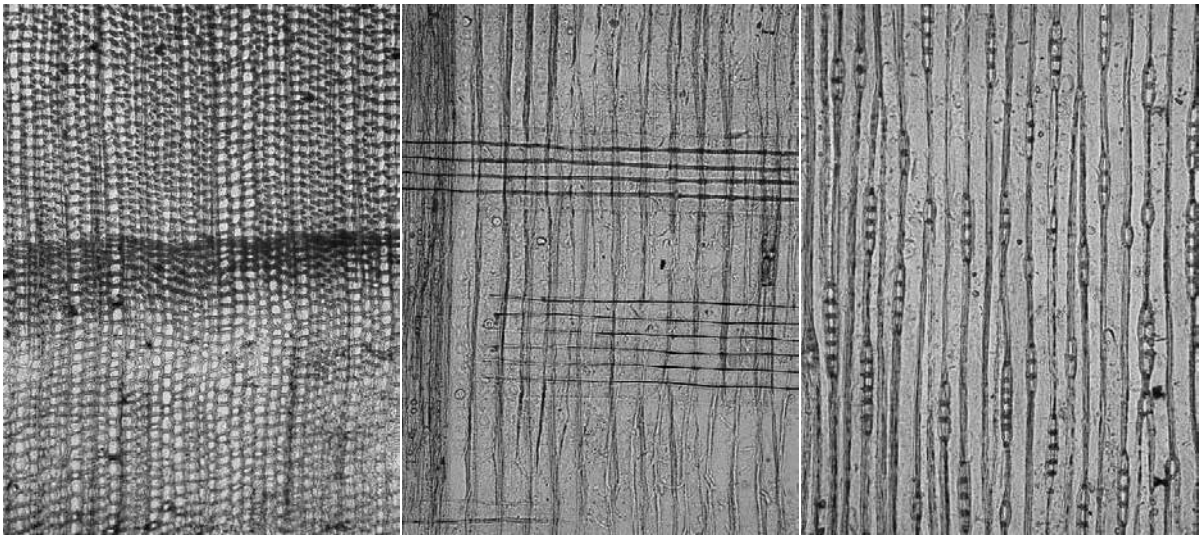
横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

カヤ　№53　1246集　図版66-371



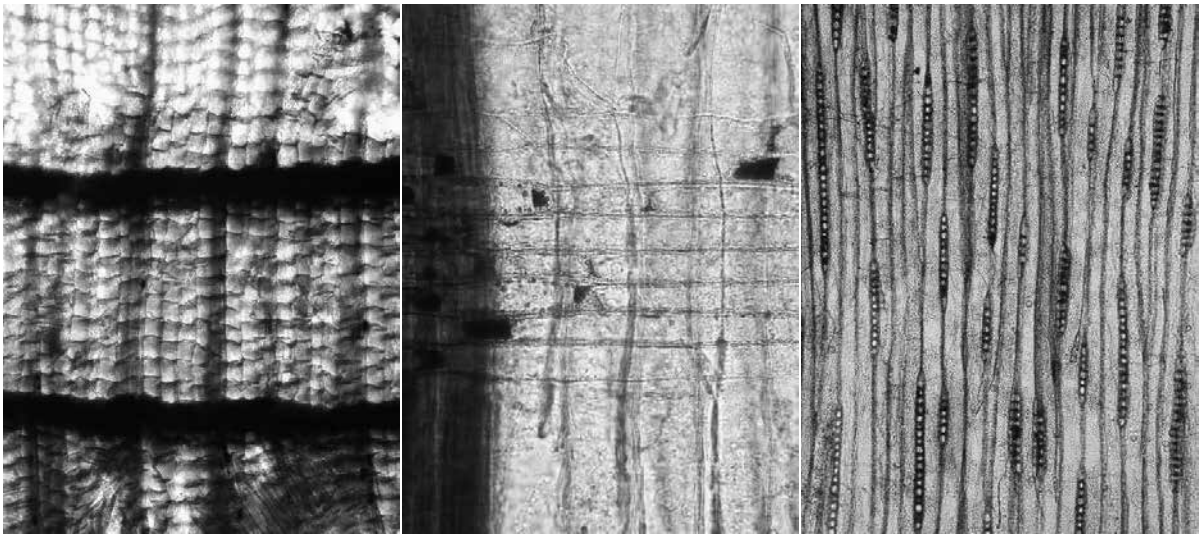
放射断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　放射断面　0.1mm

イヌガヤ　№56　1246集　図版68-379



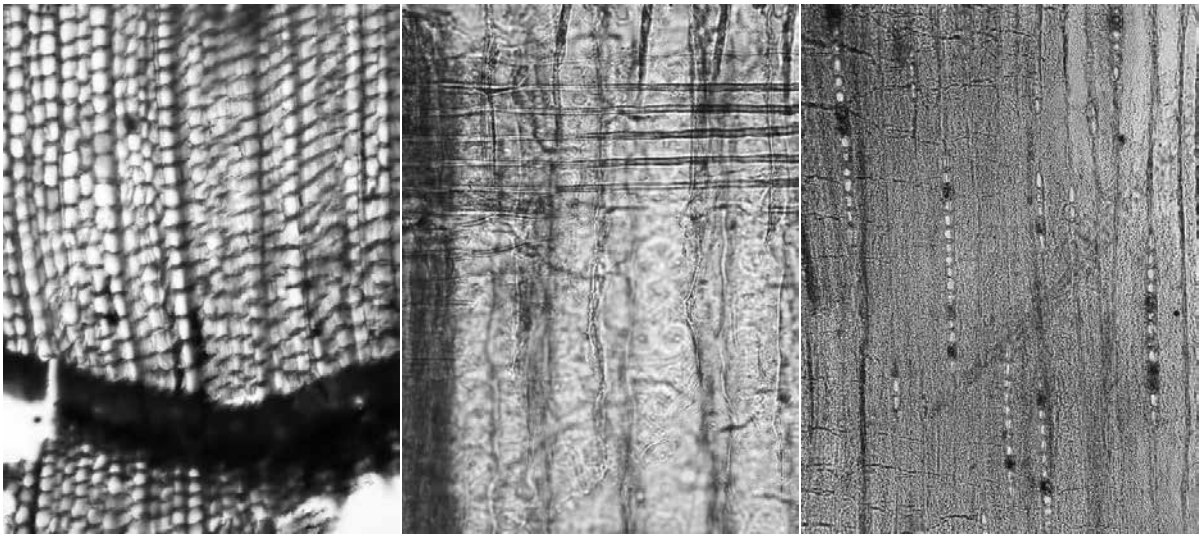
横断面　0.1mm　放射断面　0.1mm　接線断面　0.1mm

マキ属　№25　1246集　図版36-147



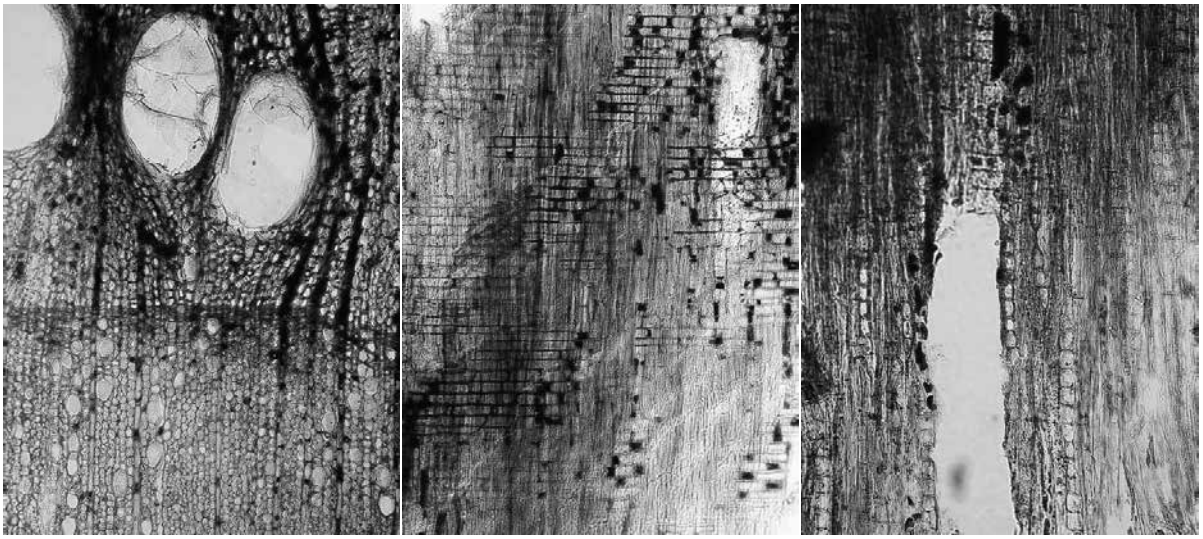
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

モミ属 №38 1246集 図版



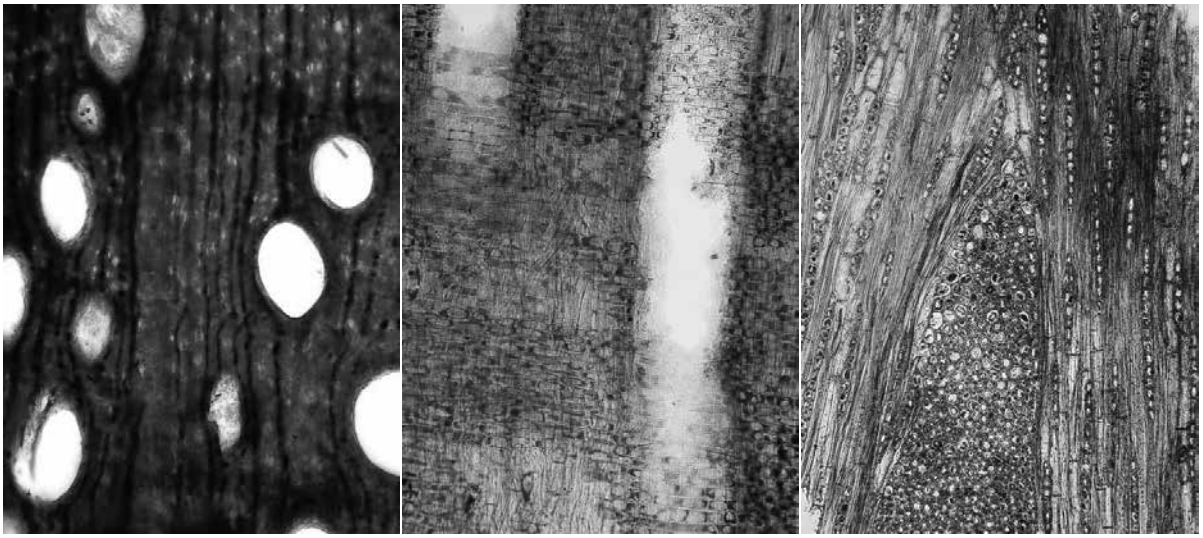
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

スギ №27 1246集 図版37-157



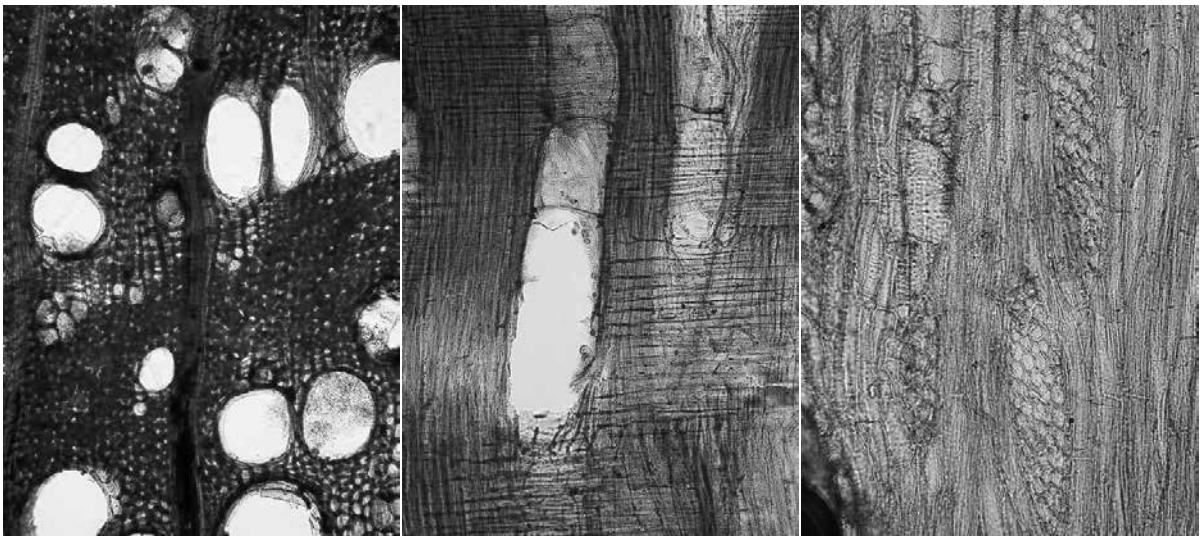
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

スダジイ №5 1246集 図版21-55



横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

コナラ属アカガシ亜属 №4 1246集 図版20-48

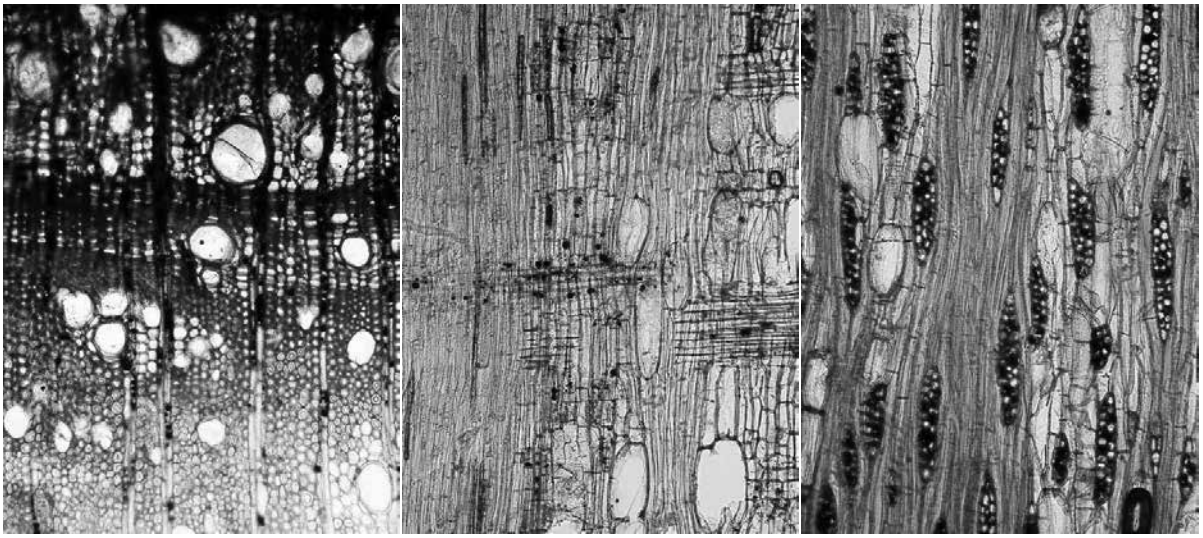


横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

ヤマグワ №12 1246集 図版31-125

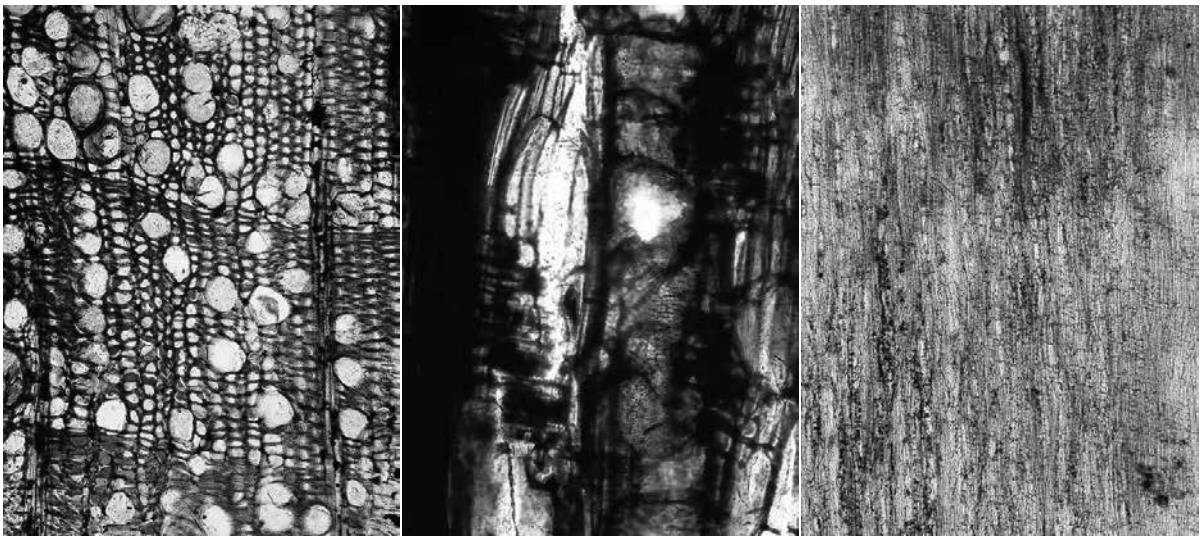
横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

クスノキ №10 1246集 図版29-118



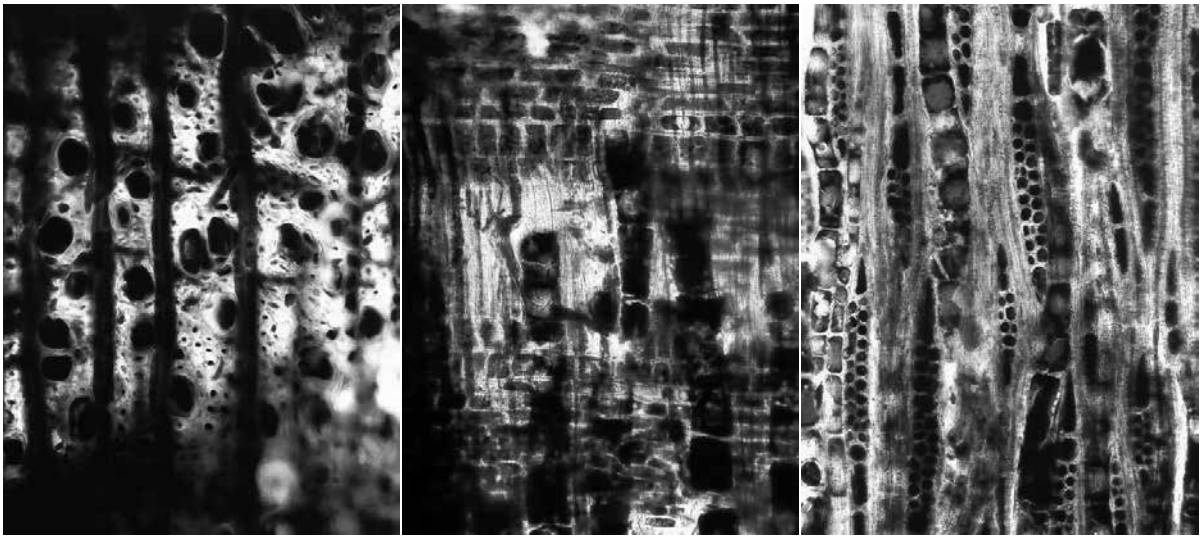
横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

クスノキ No.11 1246集 図版30-123



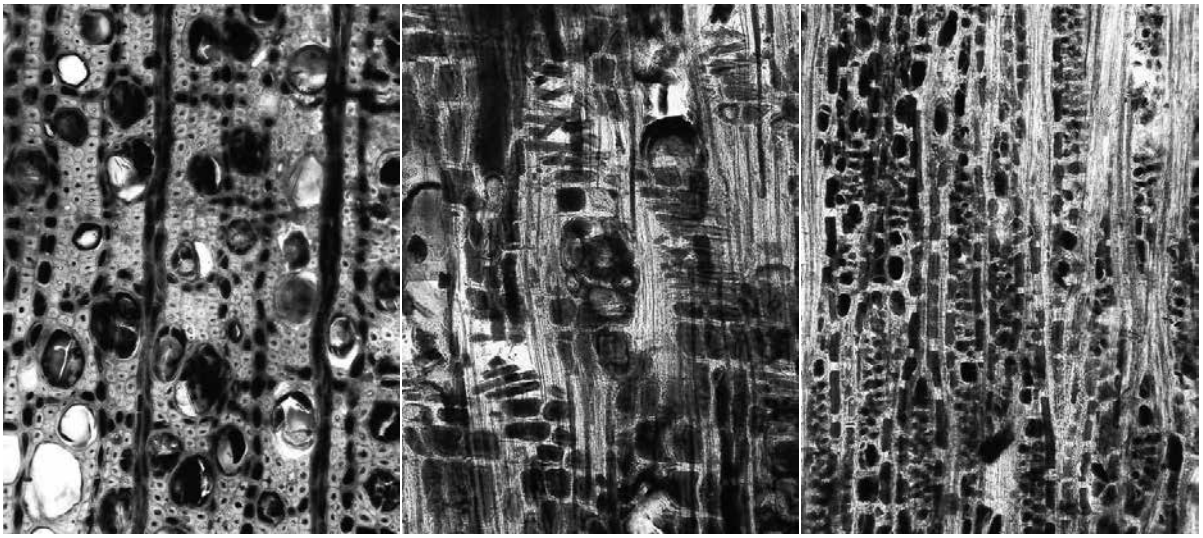
横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

クスノキ科 No.22 1246集 図版34-140



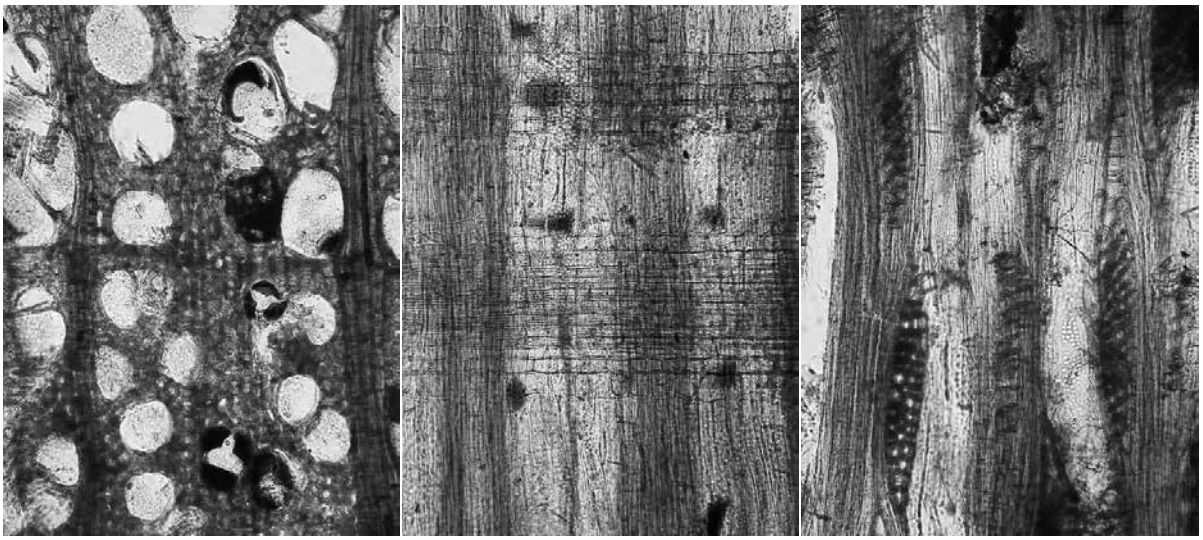
横断面 ― 0.1mm 放射断面 ― 0.1mm 接線断面 ― 0.1mm

イスノキ No.50 1246集 図版59-312



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

イスノキ No.52 1246集 図版60-334

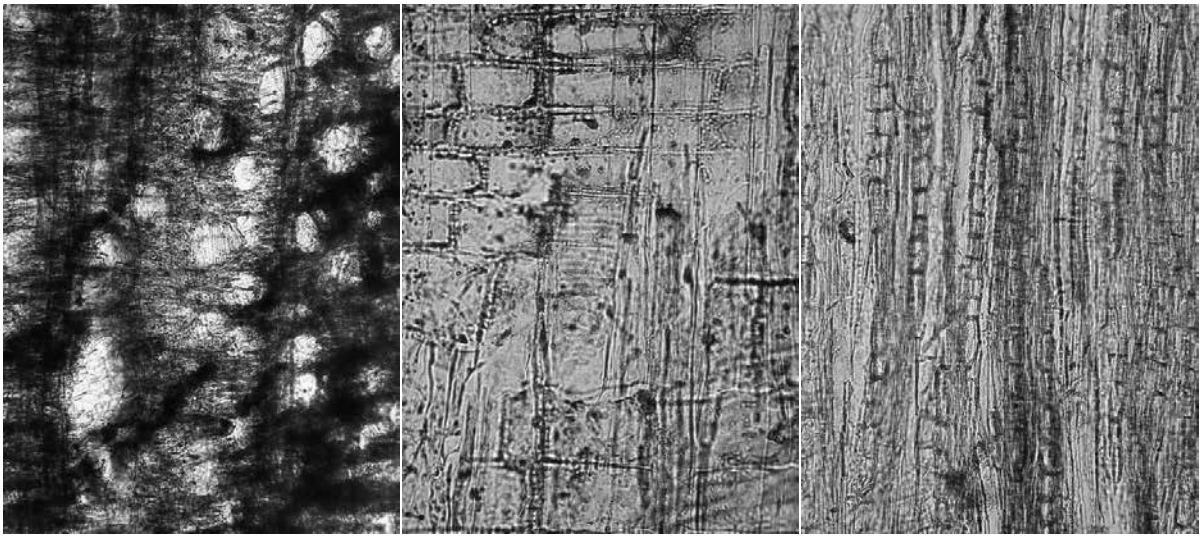


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

サクラ属 No.26 1246集 図版36-154A

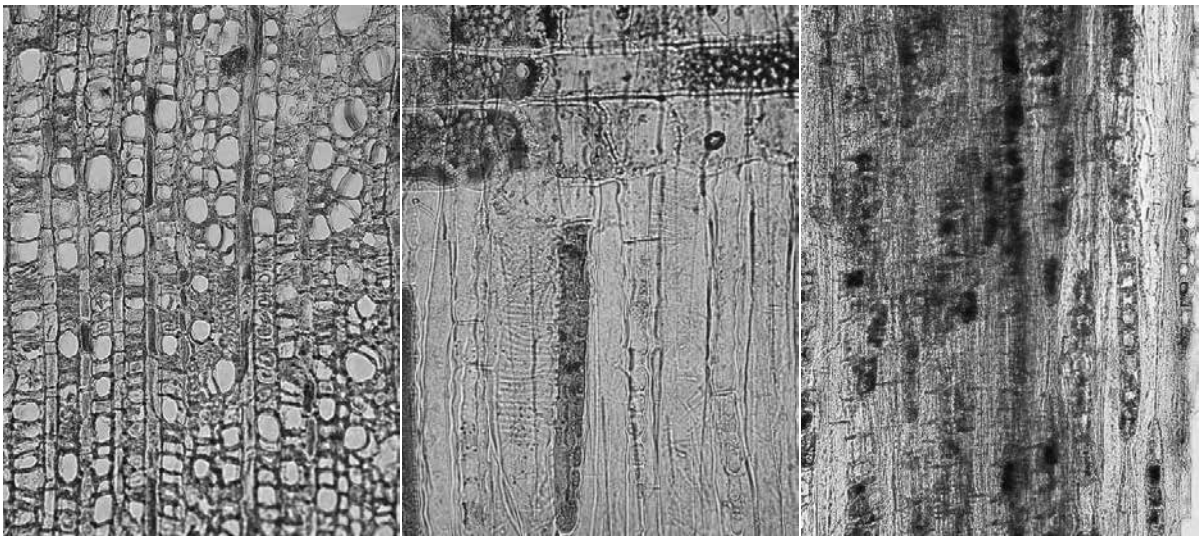
横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

アワブキ属 No.13 1246集 図版31-126



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

サカキ No.1 1246集 図版15-1



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm

ヒサカキ属 No.2 1246集 図版15-4

参考文献

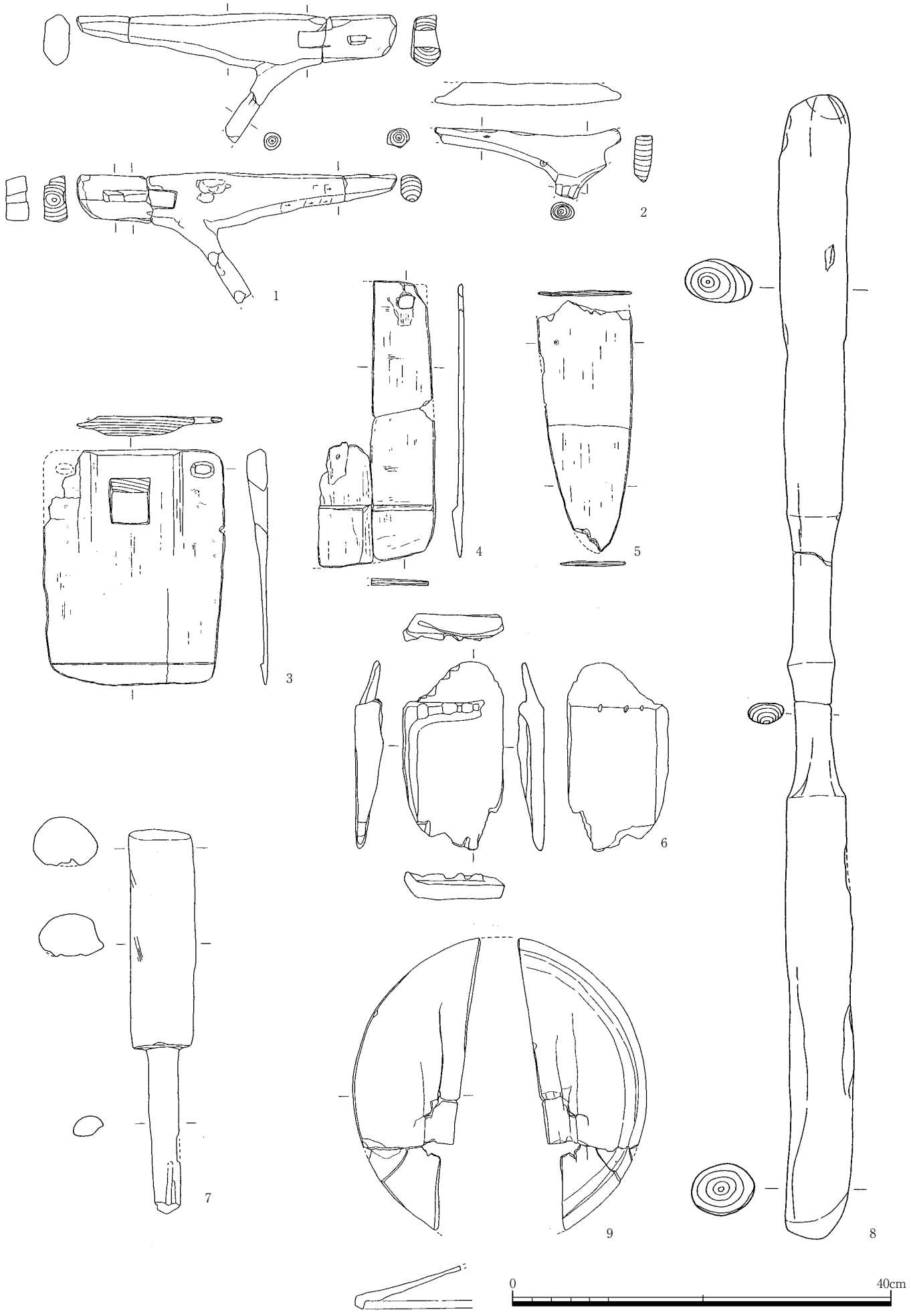
伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p.449.

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

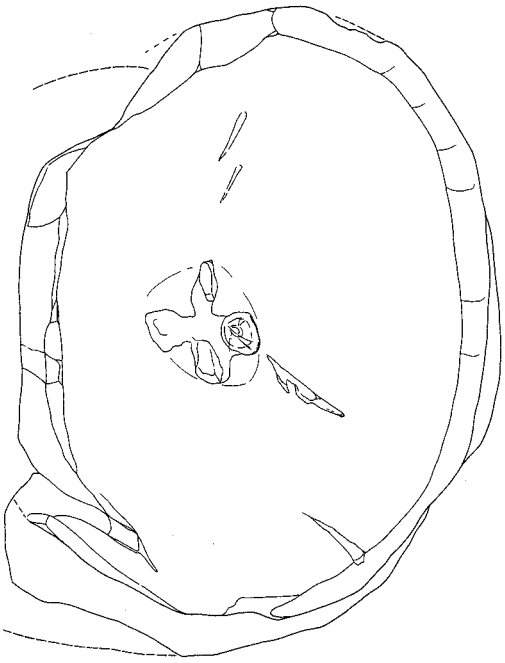
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

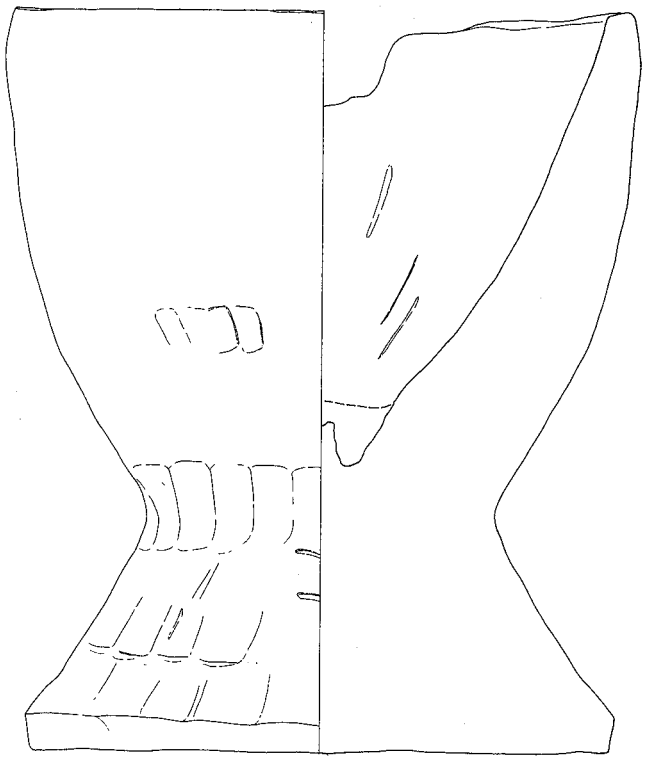
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p.242.

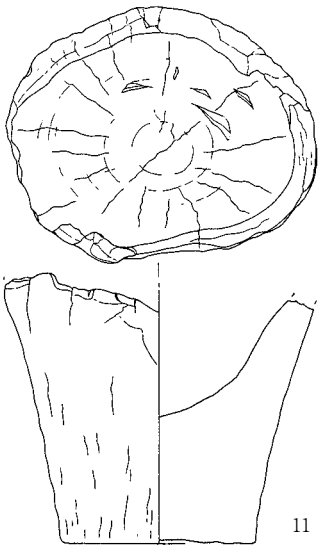


［元岡・桑原遺跡群 42 次調査樹種同定資料 1］

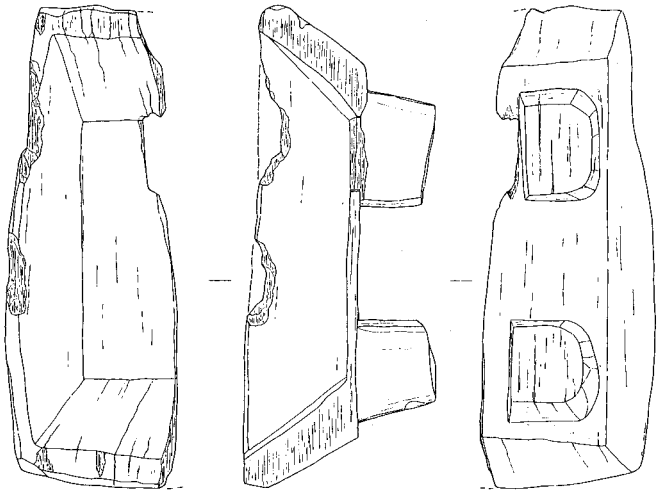




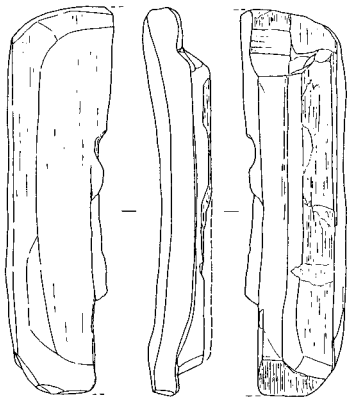
10



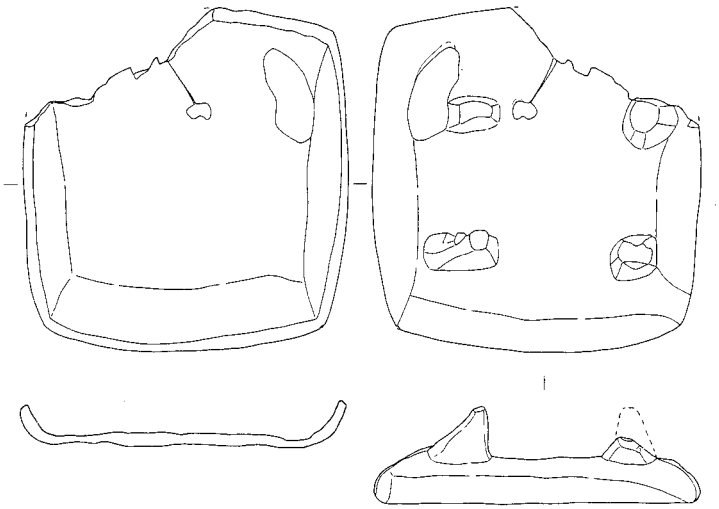
11



12



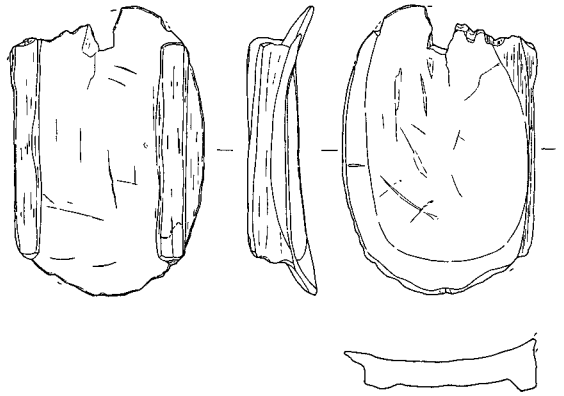
13

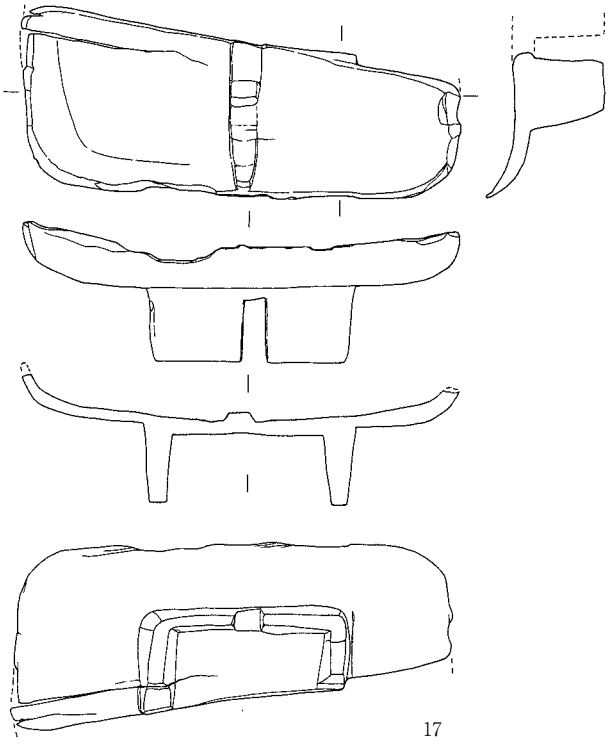


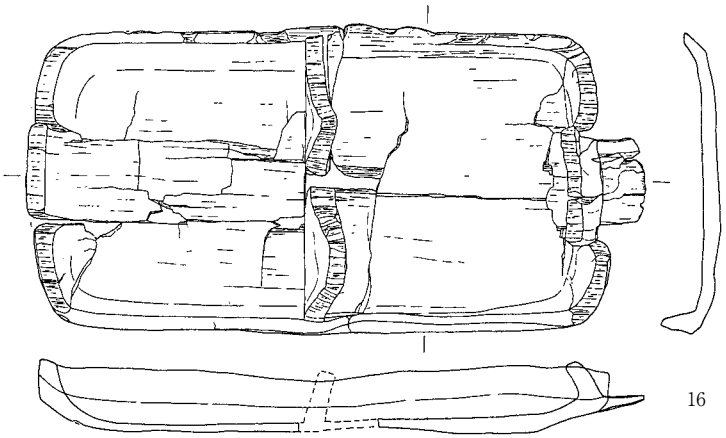
14

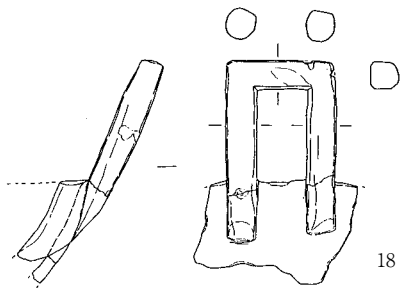
0 40cm

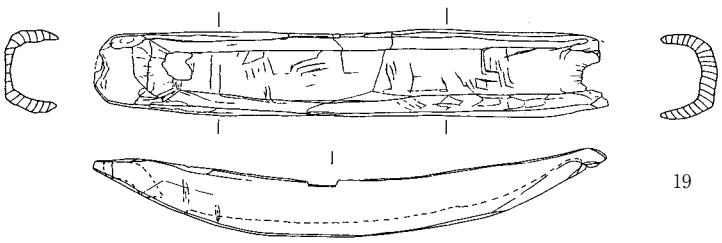
［元岡・桑原遺跡群 42 次調査樹種同定資料２］

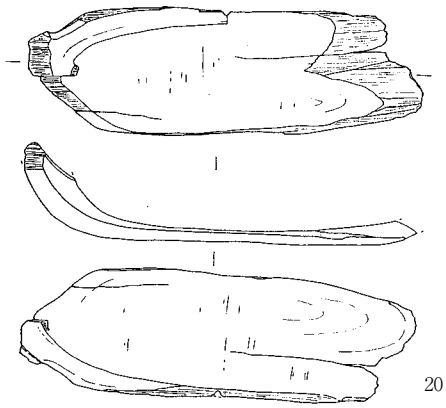


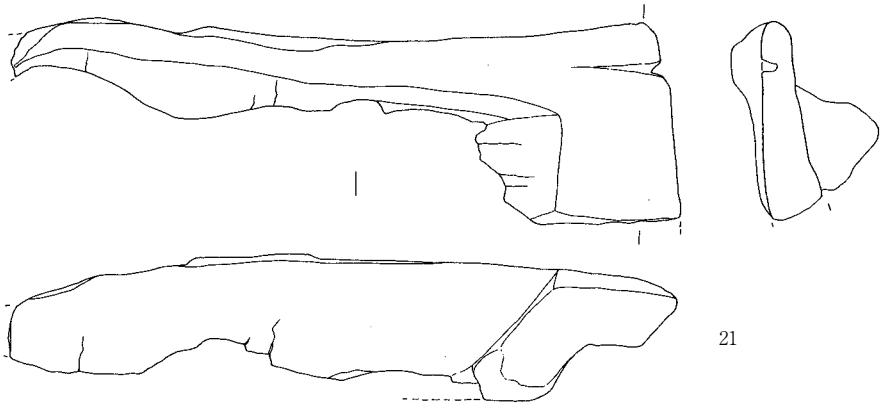






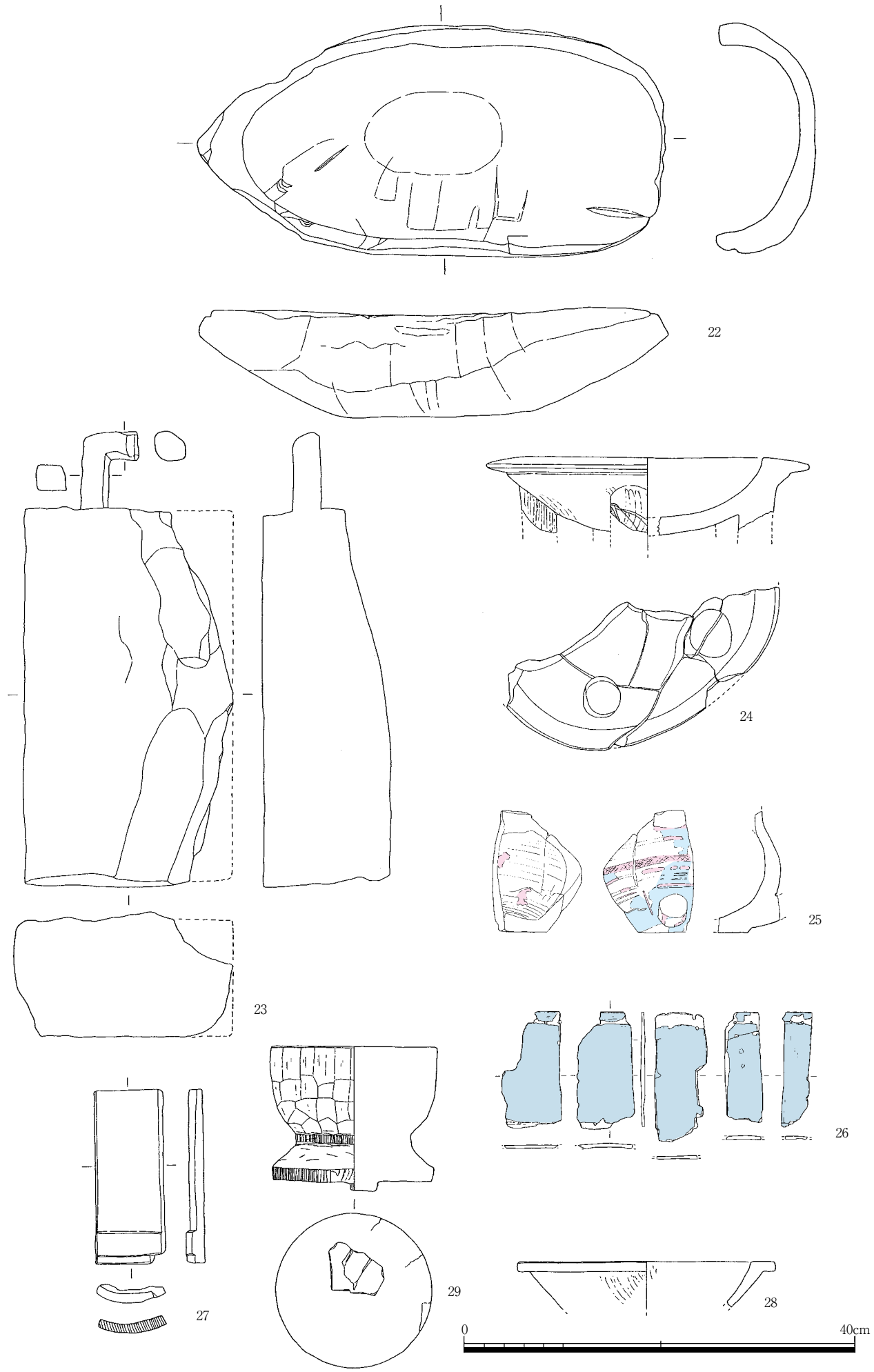




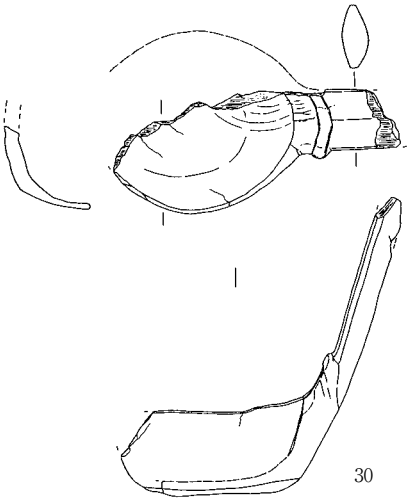


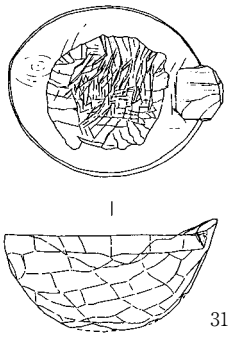
［元岡・桑原遺跡群 42 次調査樹種同定資料３］

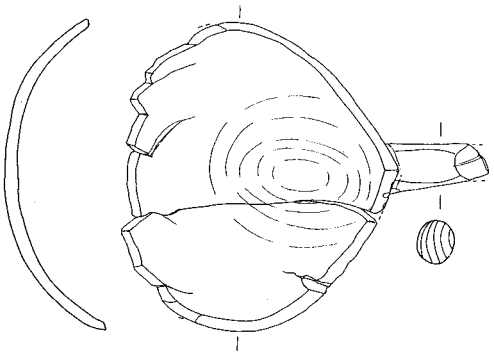
0 40cm

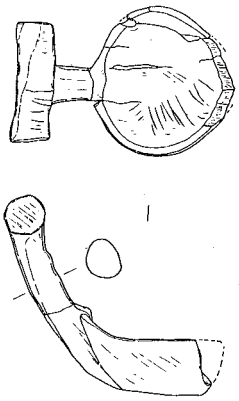


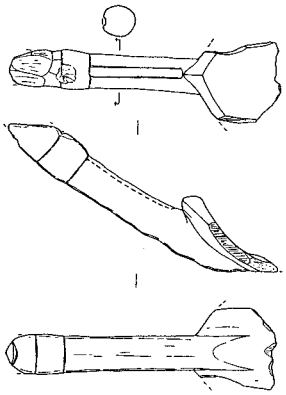
［元岡・桑原遺跡群 42 次調査樹種同定資料 4］

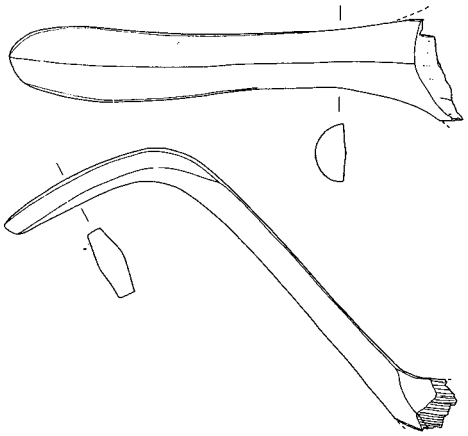

30

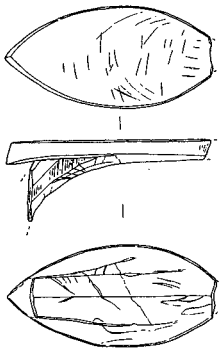

31

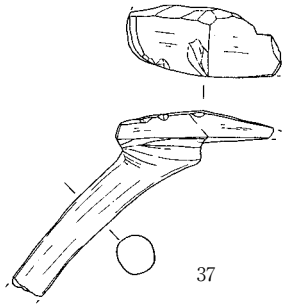

32

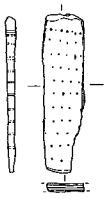

33

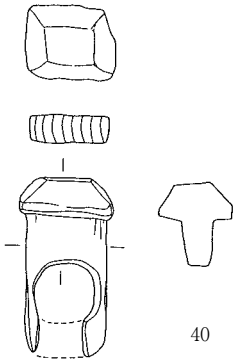

34

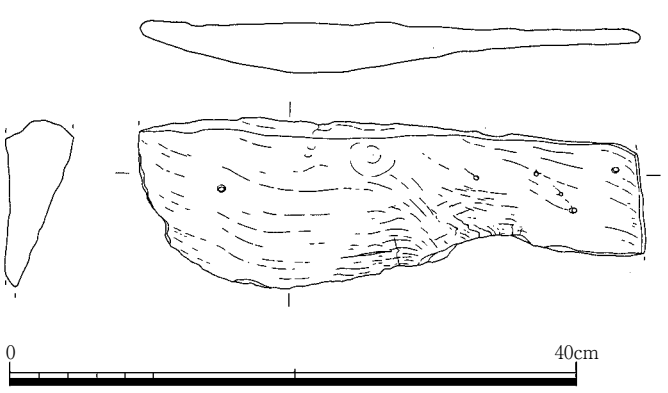

35

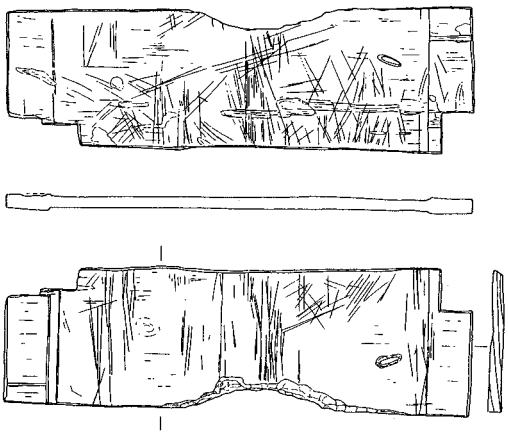

36


37

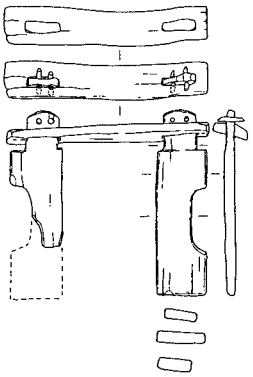

38


40

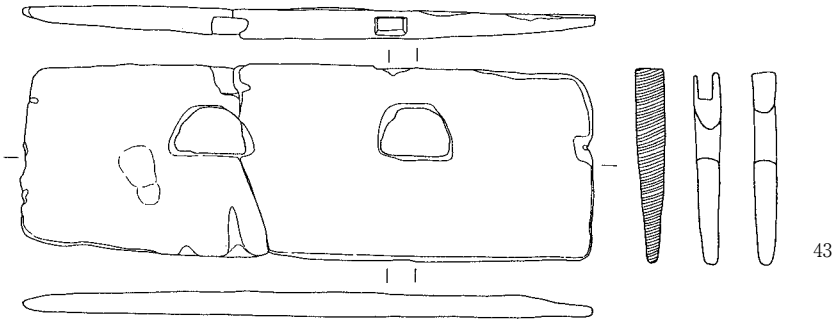

39


41

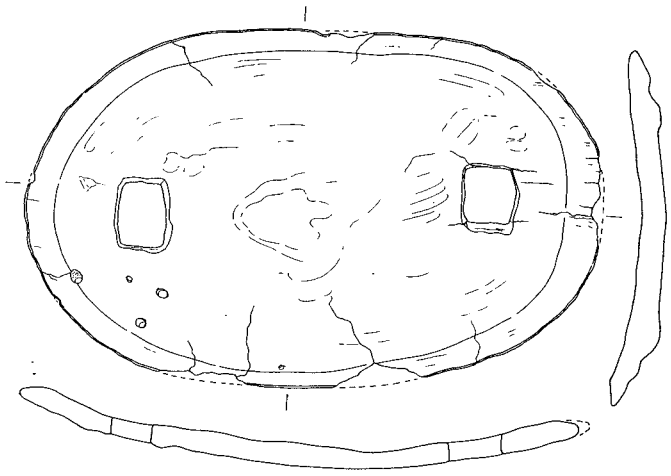
［元岡・桑原遺跡群 42 次調査樹種同定資料５］

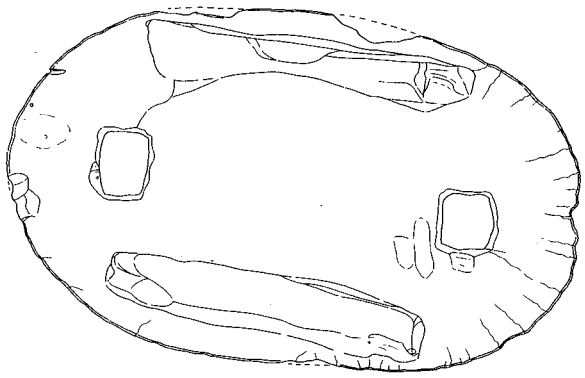


42-1 本体
42-2 釘

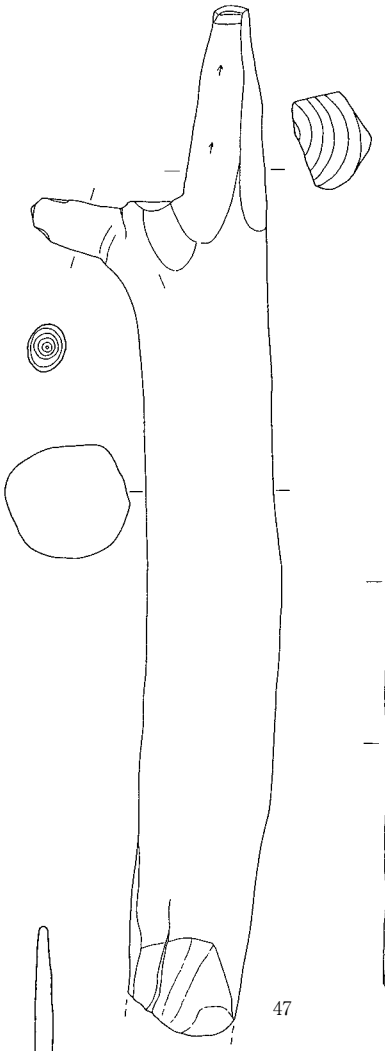


43

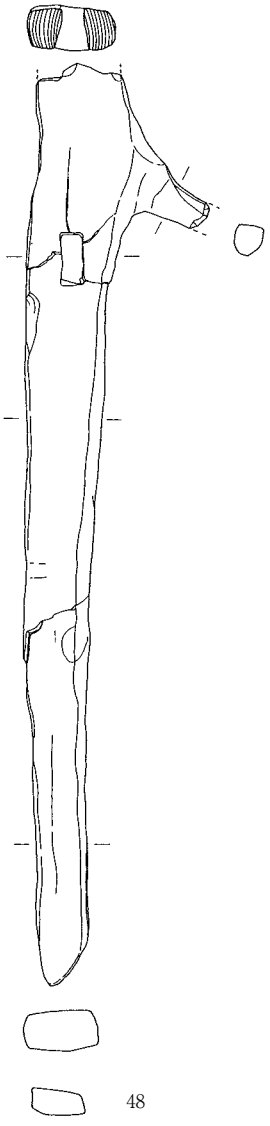




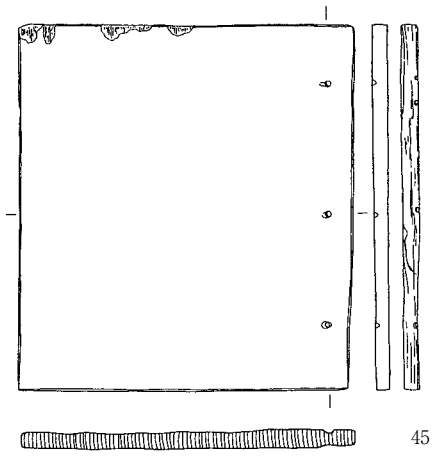
44



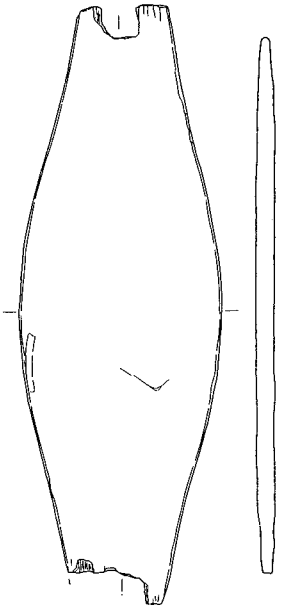
47



48

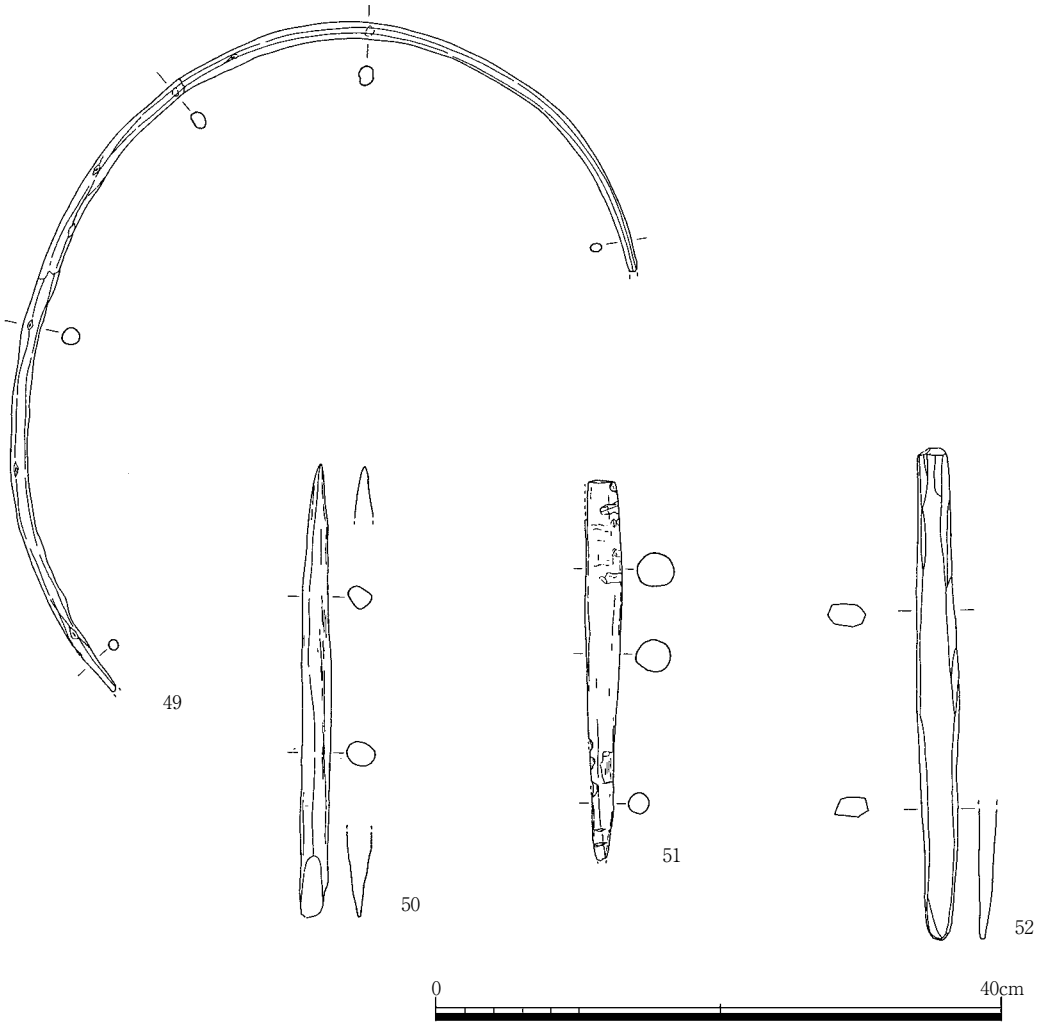


45

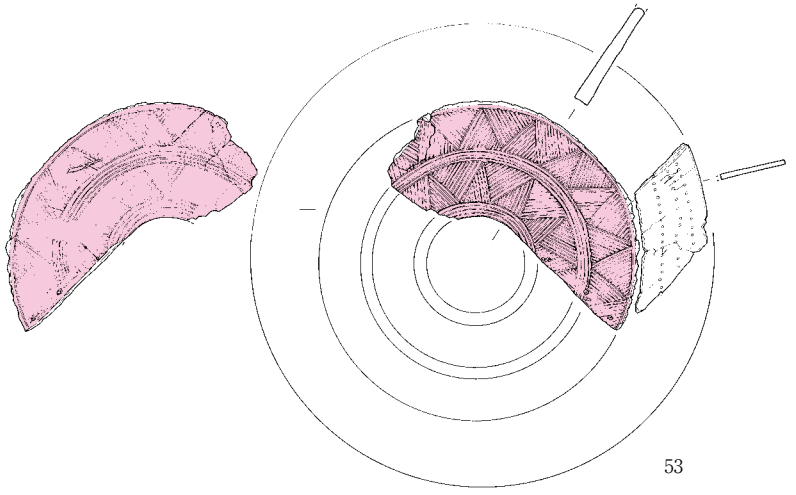


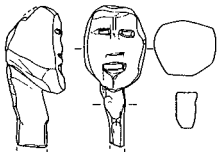
46

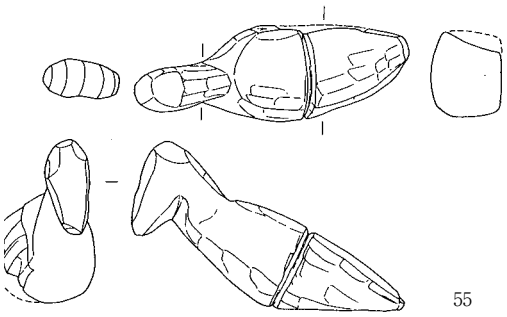
［元岡・桑原遺跡群 42 次調査樹種同定資料 6］

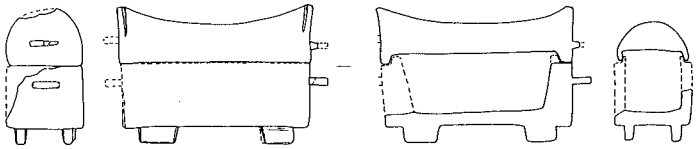


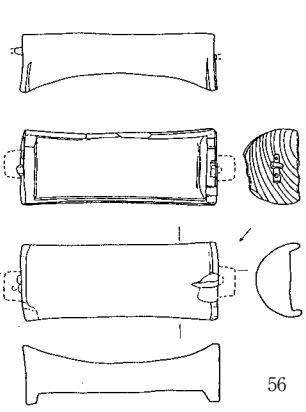
［元岡・桑原遺跡群 42 次調査樹種同定資料７］

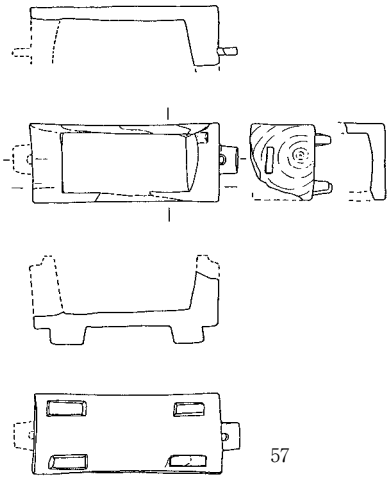

53

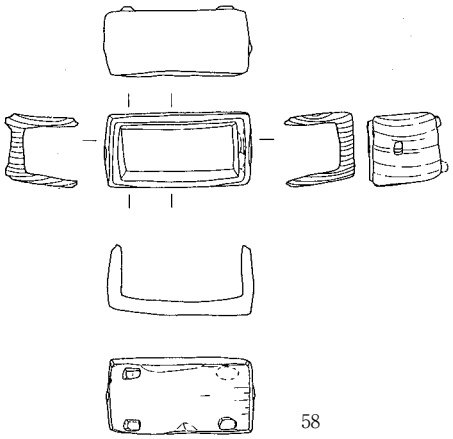

54

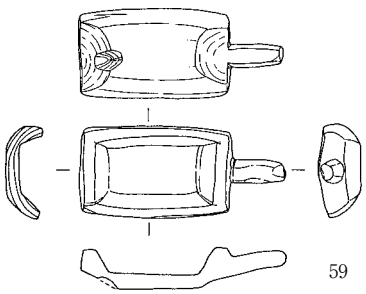

55

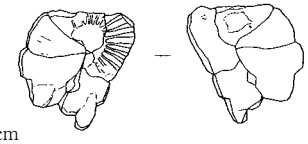


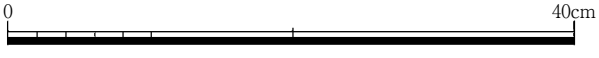

56


57


58


59


60



［元岡・桑原遺跡群 42 次調査樹種同定資料８］

結　語

縄文時代

調査区東北部の小丘陵西側に形成された河岸段丘面（Ｄ－10･11区）より、約100㎡の範囲から617点の石器や土器が検出された。土器は33点と少数だが、薄い無文土器または隆線文土器の一種と思われ、底部は平底と考えられる。石器は石鏃をはじめ、尖頭器、楔形石器、スクレーパー類が検出されている。石鏃や尖頭器は薄く仕上げており、九州には例のない特徴的な形態である。

４ヶ所の遺物集中部が認められ、石鏃など定形石器製作を行っている場（ユニットＡ・Ｂ・Ｃ）と日常生活の空間（ユニットＡ・Ｄ、ユニット外）に分けられる。これらの中心をなすのがユニットＡで、少数の土器と共に、脚部がＵ次状を呈する石鏃など多様な形態の石器が認められた。ユニットＤはスクレーパー類や使用痕ある石器などが出土している。ユニットＢ・Ｃは、石鏃片やその製作時に生じた砕片などが検出されている。

石器の使用時に形成された使用痕について、実体顕微鏡により線状痕の観察を行った。主に、ユニットＡ・Ｄで顕著な線状痕が認められた。スクレーパーや加工痕・使用痕ある石器をはじめ、剥片や砕片にも認められた。小さな砕片に顕著な線状痕が形成されているのは意外であったが、食事などにおいて使用したと考えられる。第3･58次調査地点を含め、スクレーパー類の使用痕を分析した。温暖期（サイド・スクレ―パー）と寒冷期（円形掻器、大原Ｄ・元岡型スクレーパー）の違いが認められた。大原Ｄ・元岡型スクレーパーと同じような線状痕がユニットＤの使用痕ある石器・剥片に認められ、動物の毛皮に対する衣服加工を、細調整を省略した石器で行っていた可能性が考えられる。

本石器群の編年的位置付けは困難を極めたが、サイド・スクレーパーを主体とすることから温暖期の所産である可能性が高い。寒の戻りの顕著なヤンガー・ドリヤス期（13000～11300calBP）の前か後と考えられるのである。完新世とすると、押型文土器出現期に脚部がＵ字状の石鏃が認められるが、他の遺物は共通点が殆どない。北部九州では、それより古い時代の遺跡は発見されておらず、その前後においてもこのような遺物群は稀であった。

ところが、抉りの殆どない石鏃は宮崎県の縄文時代草創期末のものと類似し、土器は厚みや底部形態などから、大原Ｄ14区Ⅲ下層より古いと考えられる。他の石器も、本州の比較的古い段階との類似点が認められるのである。よって、後氷期の温暖期であるアレレード期（14000～13000calBP）の所産である可能性が指摘できるのである。

弥生～古墳時代

第42次･52次調査区で検出された遺構は、調査区の東西の谷筋を流れる幅20～30ｍの２条の流路（ＳＤ－０１・０２）と、両者にはさまれた中州部分に分布する掘立柱建物および竪穴住居跡である。南北約80ｍにわたって蛇行する流路は、自然の開析によって形成されたと推定され、護岸や井堰など人為的な遺構は確認されなかった。流路内および流路の岸には土器群の集積が確認された。流路で検出された弥生中期後半から後期、さらに古墳時代前期にかけての膨大な土器は、この斜面に紀元前1世紀から3･4世紀代にかけて継続して消費が行われたことを示している。

本書で土器群と呼ぶのは、①集積となった土器の分布範囲を括ったものと②流路内で検出された土器の混在を防ぐ意図でグリッド単位に設けた両者が含まれている。①については該当する土器群がどのような過程を経て集積が形成されたか、今回大型石錘が一定の間隔で検出されたことは注目される。

これらの石錘は漁網や綱を装着した状態で埋まった可能性があると考えている。

出土遺物

42次・52次調査区の遺物として注目されるのは、土器、木製品、金属器、石器などの出土品に地域間交流を示す資料が少なからず含まれていたことである。特徴的なものでは「元岡桑原遺跡群23」で報告した線刻絵画のある琴板や祭祀儀礼に用いられた木製品、五銖銭や貨泉など漢代の貨幣９点、青銅製鞘尻金具、辰砂の粒子、小銅鐸２点、小形仿製鏡４点がある。

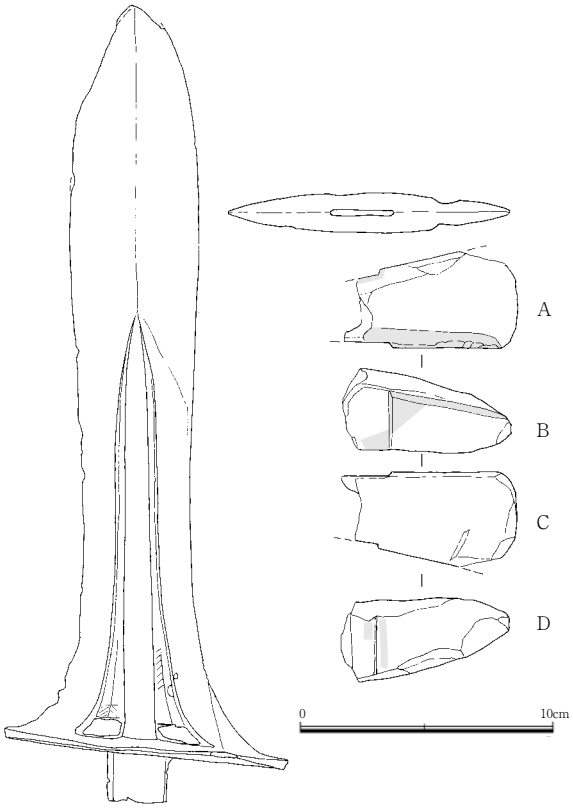
木製品

自然流路下層の粘質土では、木製品の遺存状況が良好で、鋤・鍬・エブリなどの農具、杓子・匙などの掬い具、火鑽臼・鉄斧柄などのほか容器類が出土した。剣形木製品、原始絵画を刻んだ琴の部材、刳りもの箱などが注目される。これらの木製品は、すべて弥生中期後葉の土器を伴っており、北部九州において稀少な資料が含まれている。

銅戈鋳型（巻頭図版３）

中細形銅戈の両面笵の石製鋳型は、Ｂ10区の洪水砂層中から出土した（巻頭図版３）。銅戈の内から欄にかけての破片で、砥石として再利用した痕跡はない。Ａ面は被熱による黒変が顕著で、内の端から欄の焼けた端まで約4.4㎝だが、もともとは5.0㎝ほどだったと思料される。Ｃ面は、鋳型本来の面が遺存していることから内はＢ・Ｄ面とも長さ2.4㎝、幅はＢ面が1.7㎝以上である。笵は、Ａの見通しに示すよう欠損部のほうが著しく薄くなるため、当初から両面笵を意図したとは思えない。Ｂ面のほうが被熱の痕跡が顕著であることから、はじめＤ面を使用して、何らかの欠損が生じた結果、Ｂ面を笵とした、と推定される。

鋳造された製品は、全長31～33㎝で、欄の幅が11～12㎝の中細形銅戈である。明治大学博物館所蔵銅戈を図示するので参考にされたい。



第 139 図　B-10 区出土の中細形銅戈鋳型［1/3］

まとめ

調査区は、南は今津湾の奥部に面し、北の丘陵部に杜をいだく立地から弥生時代には「豊穣を祈念する祭祀の場」としての性格を備えていた。さまざまな遺物の集中は、この地が祭祀遂行の場であると同時に対外交流や生業の拠点としても長期にわたって機能していたことを示唆するものである。今回その前史となる縄文時代草創期の所見とあわせて報告することができた。これらの資料が学術研究に活用されることを願って結びとする。

第 42・52 次調査区 SD02 全景（東より）

第 42 次調査区（北東より）

図版 10

第 52 次調査区（東より）

第 52 次調査区西半（東より）

第 52 次調査区　SD02（北より）

図版 12

第 52 次調査区　SD02（南より）

第 52 次調査区　SD02（南より）

第 52 次調査区　SD02（V-7・８区）（北西より）

第 52 次調査区（北西より）

図版 14

第 52 次調査区　SD02（V-7・８区）（南西より）

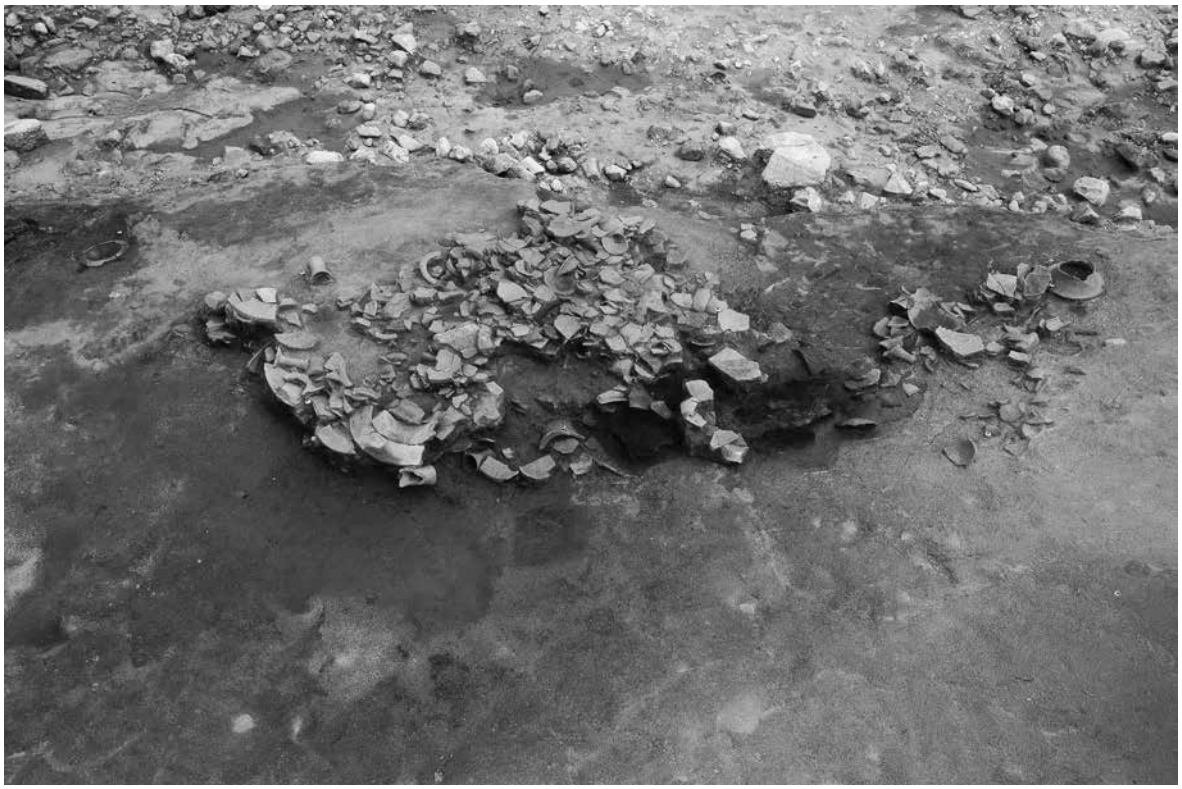
第 52 次調査区　211 号住居跡（SC211）（北より）

第 52 次調査区　211 号住居跡（SC211）（北より）

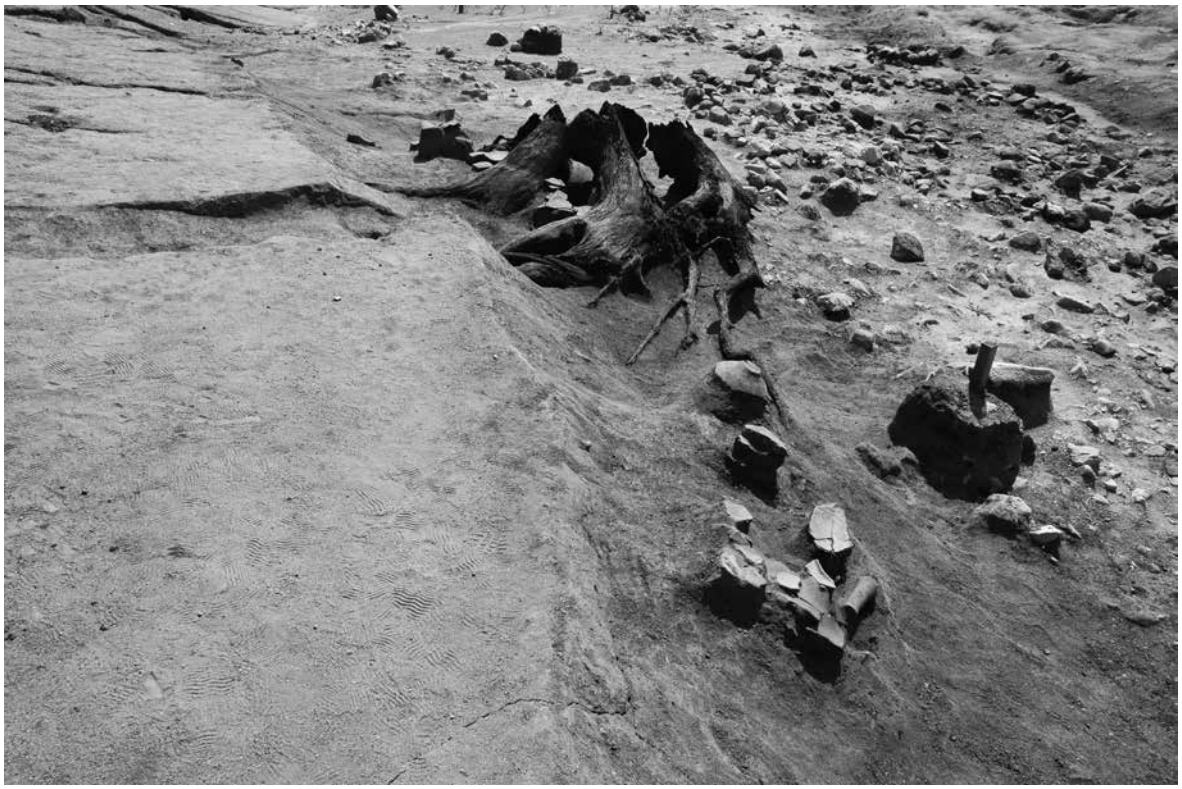
第 52 次調査区　211 号住居跡（SC211）作業風景

図版 16

土器群 131 下部出土状況（南より）



土器群 131 下部出土状況（南より）

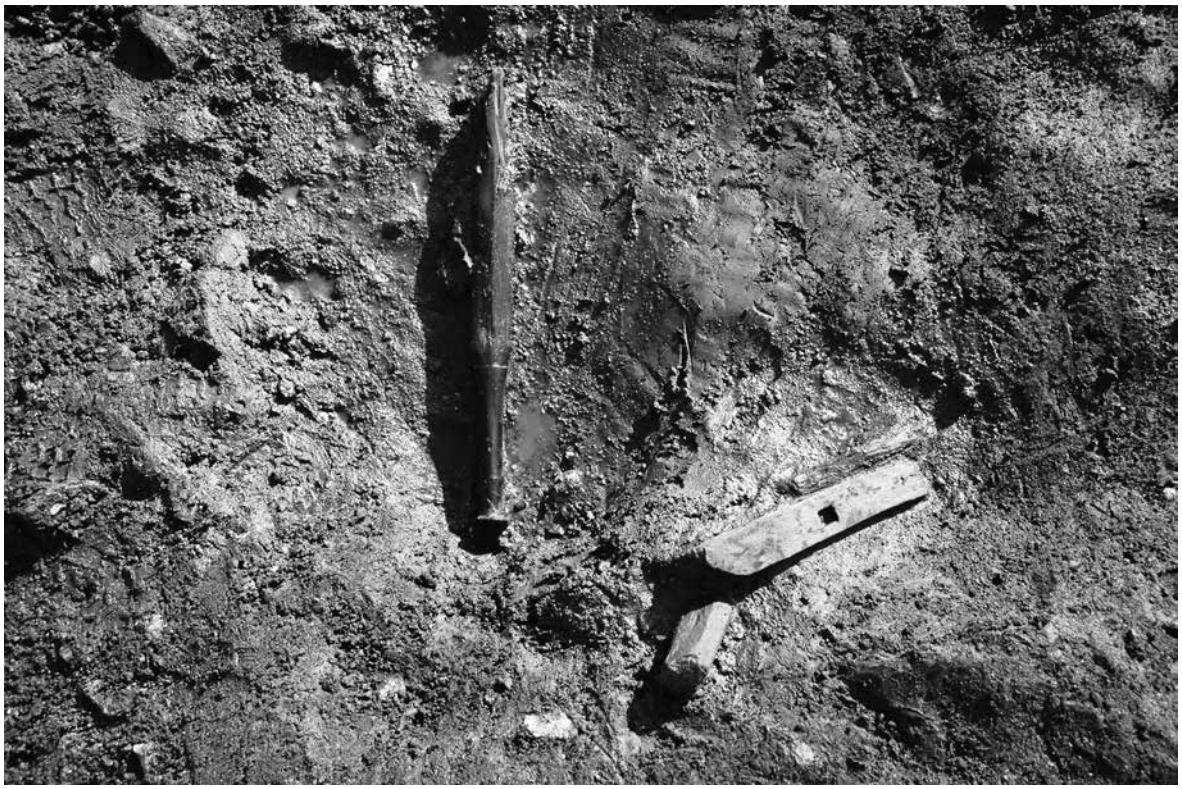


樹痕検出状況（W-8 区）（西より）

樹痕検出状況（W-8 区）（東より）

図版 18

剣形木製品（97-2）出土状況　土器群 121（東より）



剣形木製品（97-2）出土状況　土器群 121（北より）

桶（104-80・105-83）出土状況（東より）

桶（104-80・105-83）出土状況（西より）

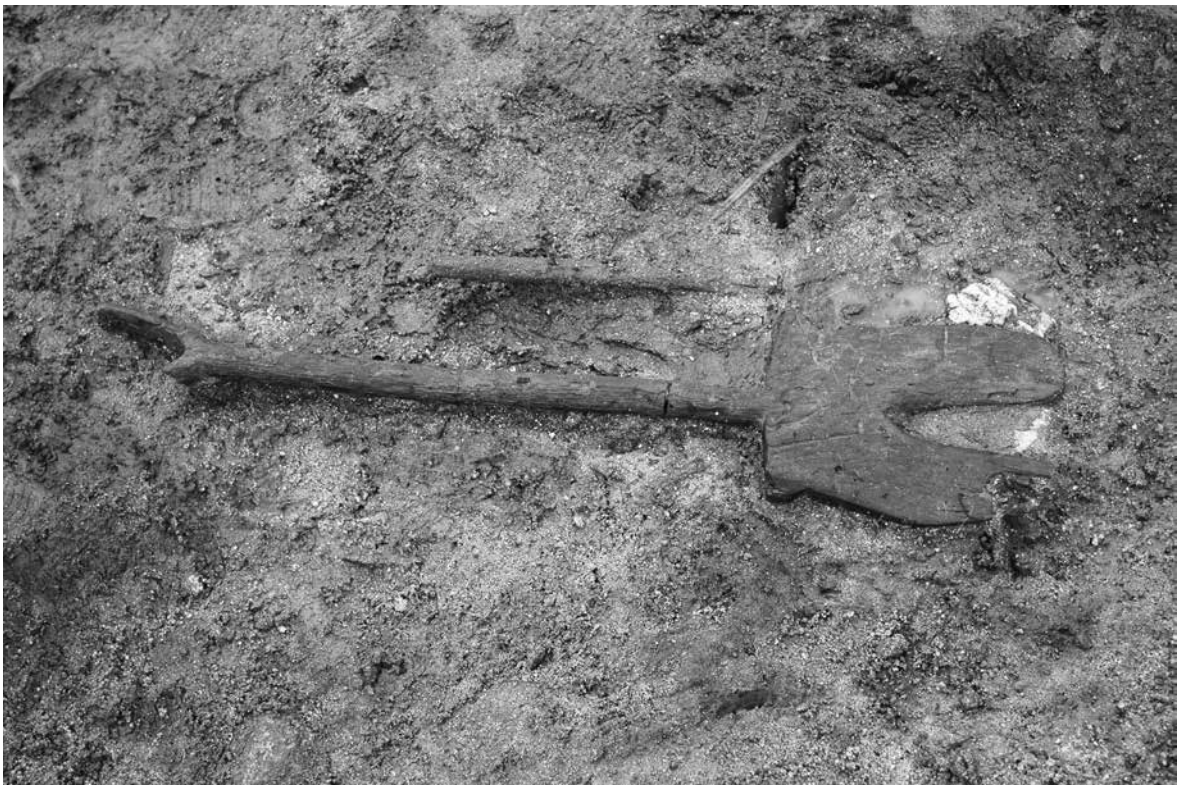
図版 20

竪杵（113-22）出土状況（西より）

竪杵（113-22）出土状況（南より）

椅子（101-61）・鍬出土状況（南東より）

椅子（101-61）・鍬出土状況（北より）



二又鋤（106-88）出土状況　土器群 121（東より）

三又鍬（107-98）出土状況

縦斧膝柄（101-63）出土状況（西より）

縦斧膝柄（101-62）出土状況　土器群 121（東より）

図版 24

T 字柄の剝物杓子（第 1246 集 42-195）　出土状況（南より）

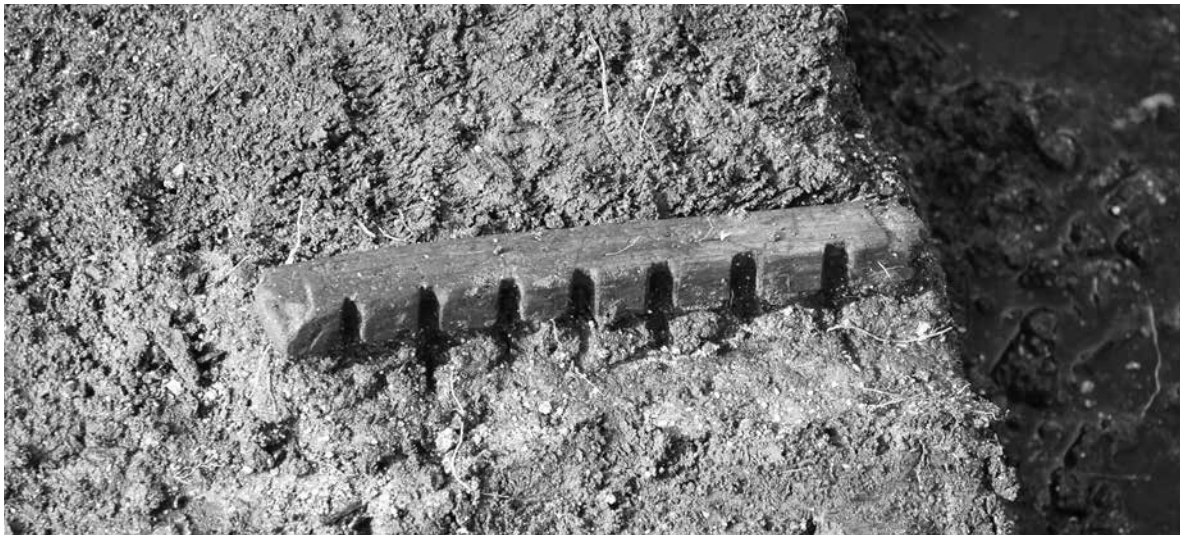
杓子（100-55）出土状況（南より）

作業台（105-84）出土状況（北より）

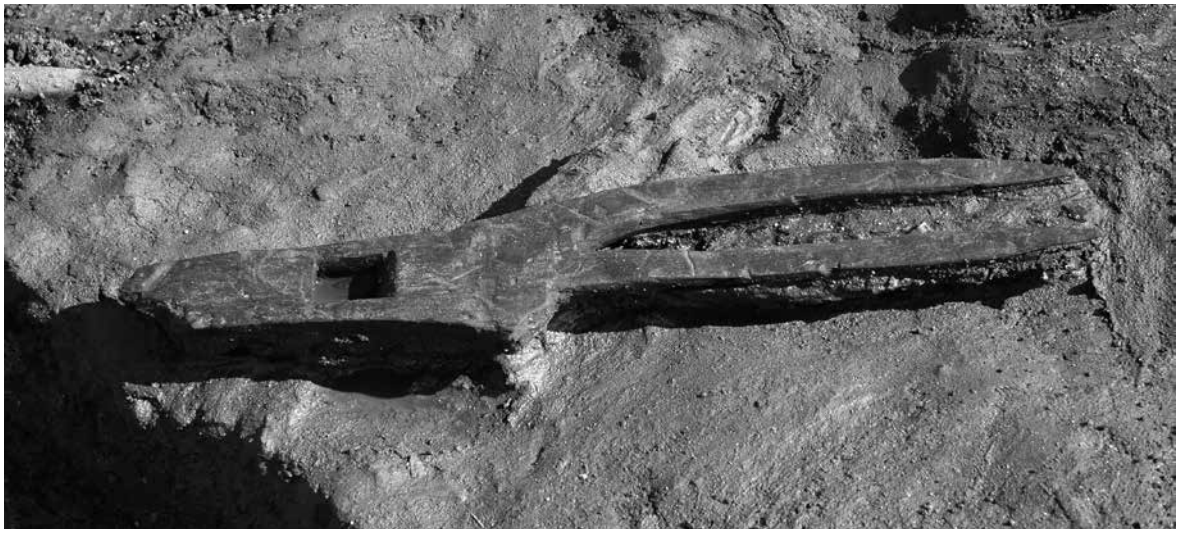
碇（102-64）出土状況（西より）

図版 26

杓子の柄（100-53）出土状況　土器群 122（西より）



火鑽臼（99-38）出土状況　土器群 121（南東より）

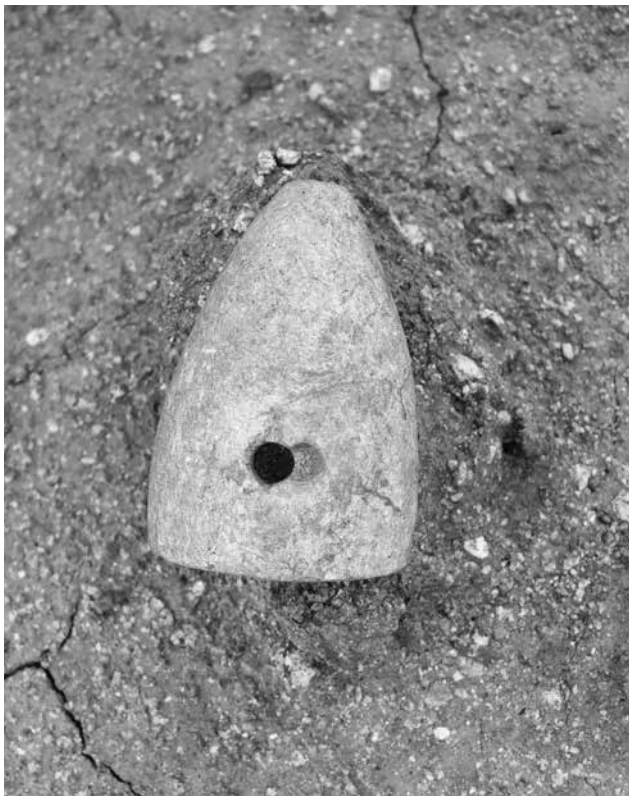


三又鍬（108-109）出土状況　土器群 122（西より）

杓子（100-52）出土状況（西より）

舟形木製品（97-7）出土状況（北東より）

杓子（100-55）出土状況

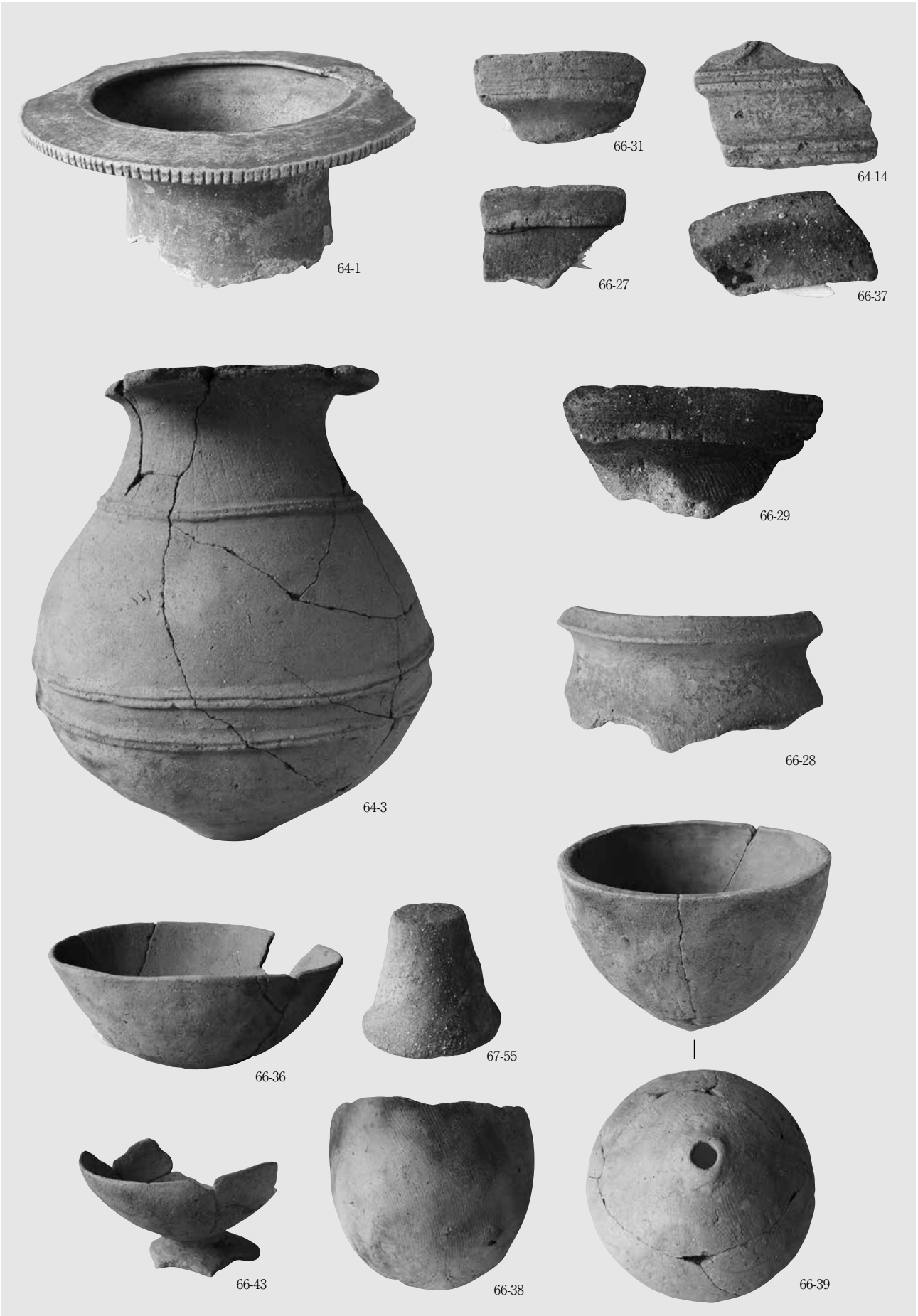


石錘（128-113）出土状況　土器群 129　東より

石錘（130-141）出土状況　土器群 129

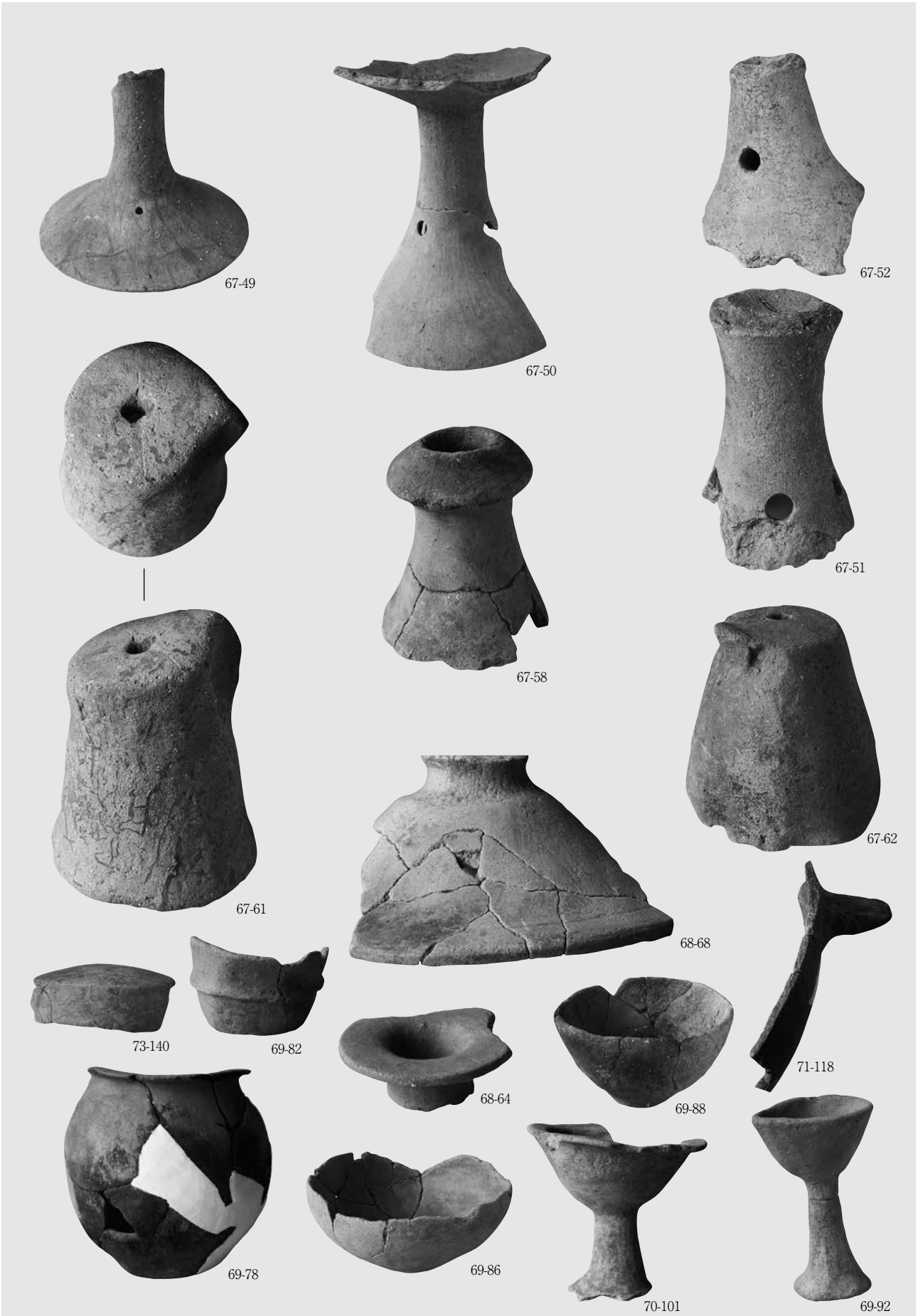
石錘（130-139）出土状況　土器群 129

石錘（130-138）出土状況　土器群 129



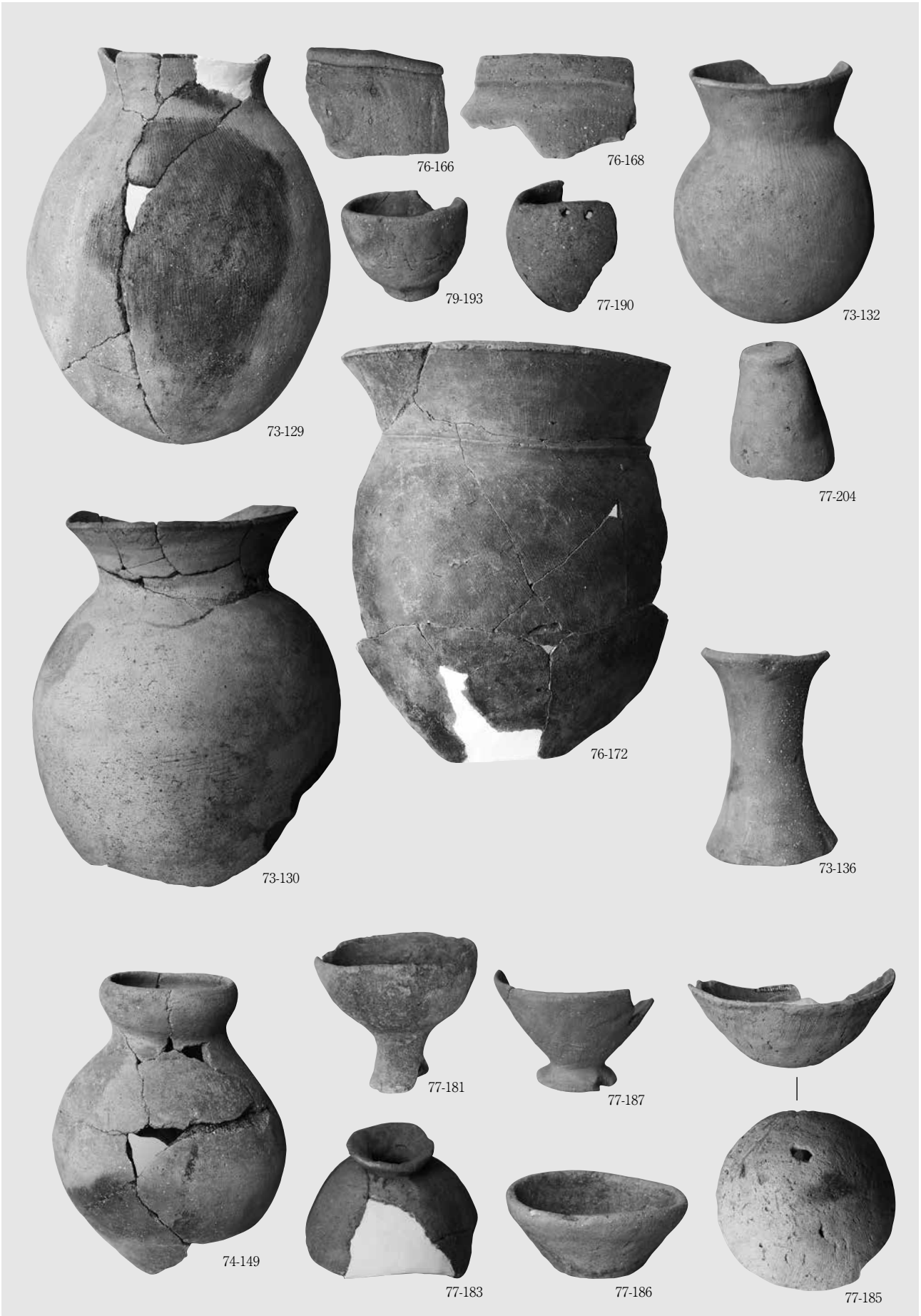
第 52 次調査区土器群 121 出土土器

図版 30

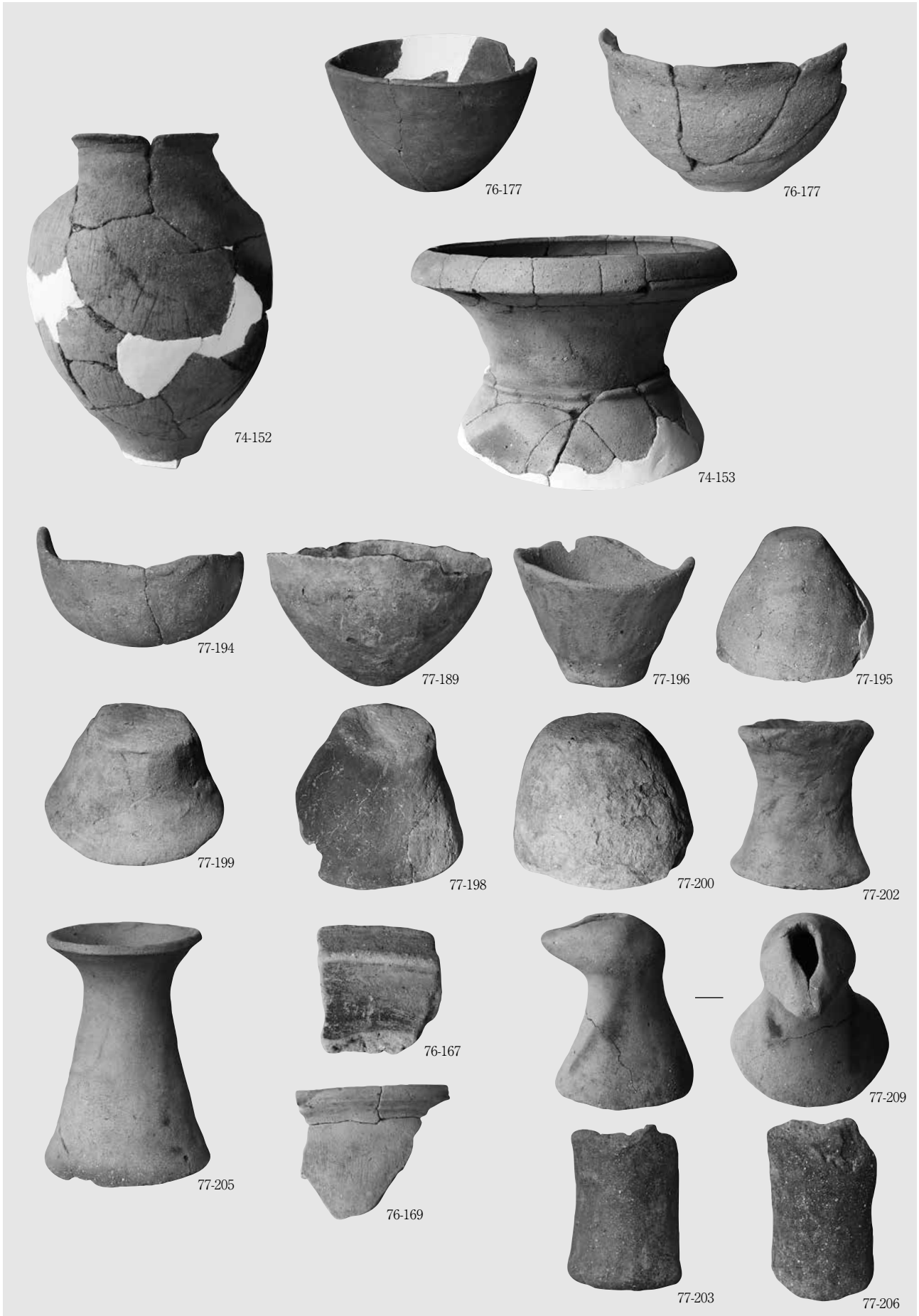


第 52 次調査区土器群 121・122 出土土器

第 52 次調査区土器群 122 出土土器

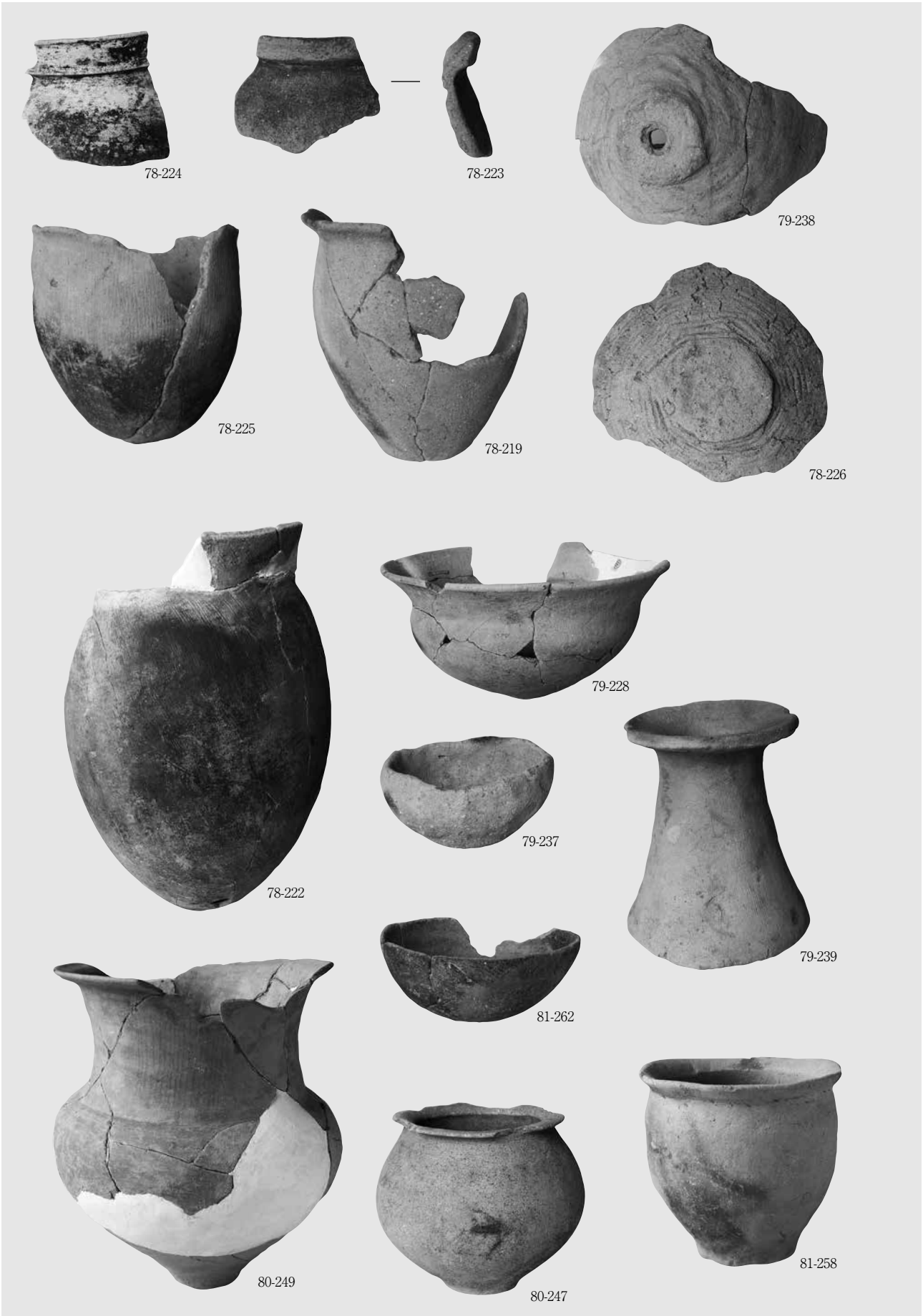


第 52 次調査区土器群 124・125 出土土器

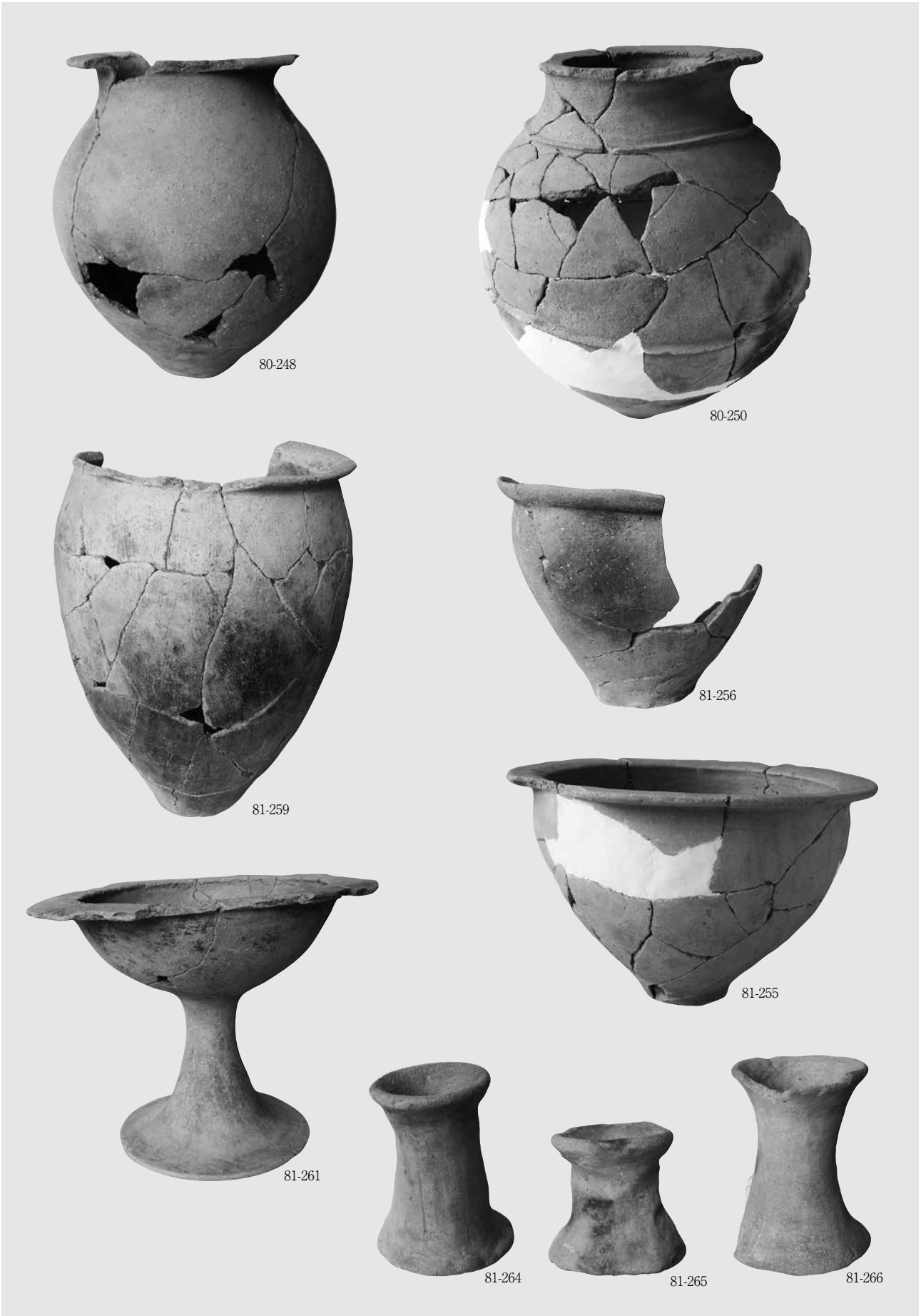


第 52 次調査区土器群 125 出土土器

図版 34

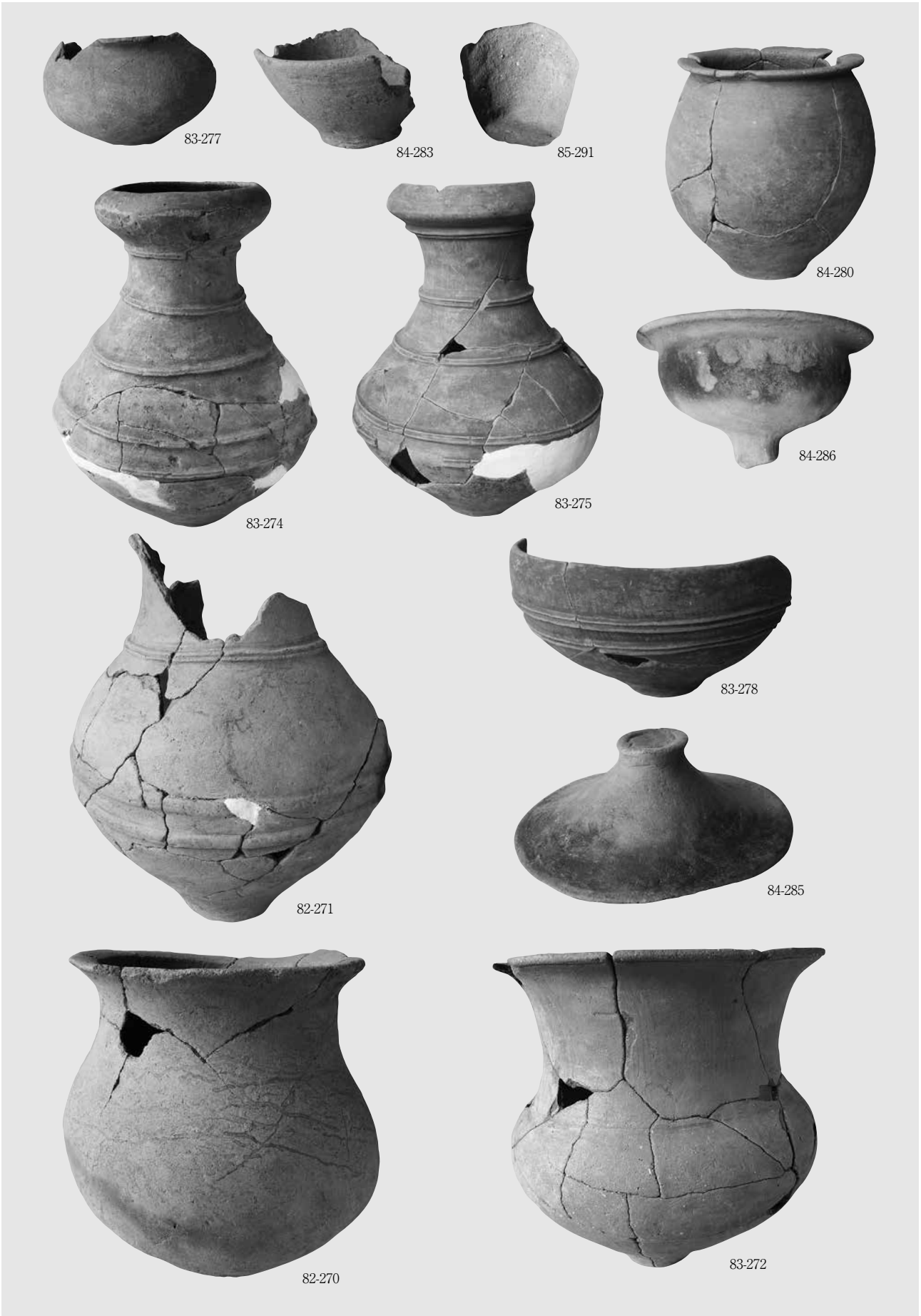


第 52 次調査区土器群 127・128 出土土器



第 52 次調査区土器群 128 出土土器

図版 36



第 52 次調査区土器群 129 出土土器

85-299

85-298

84-288

84-281

87-326

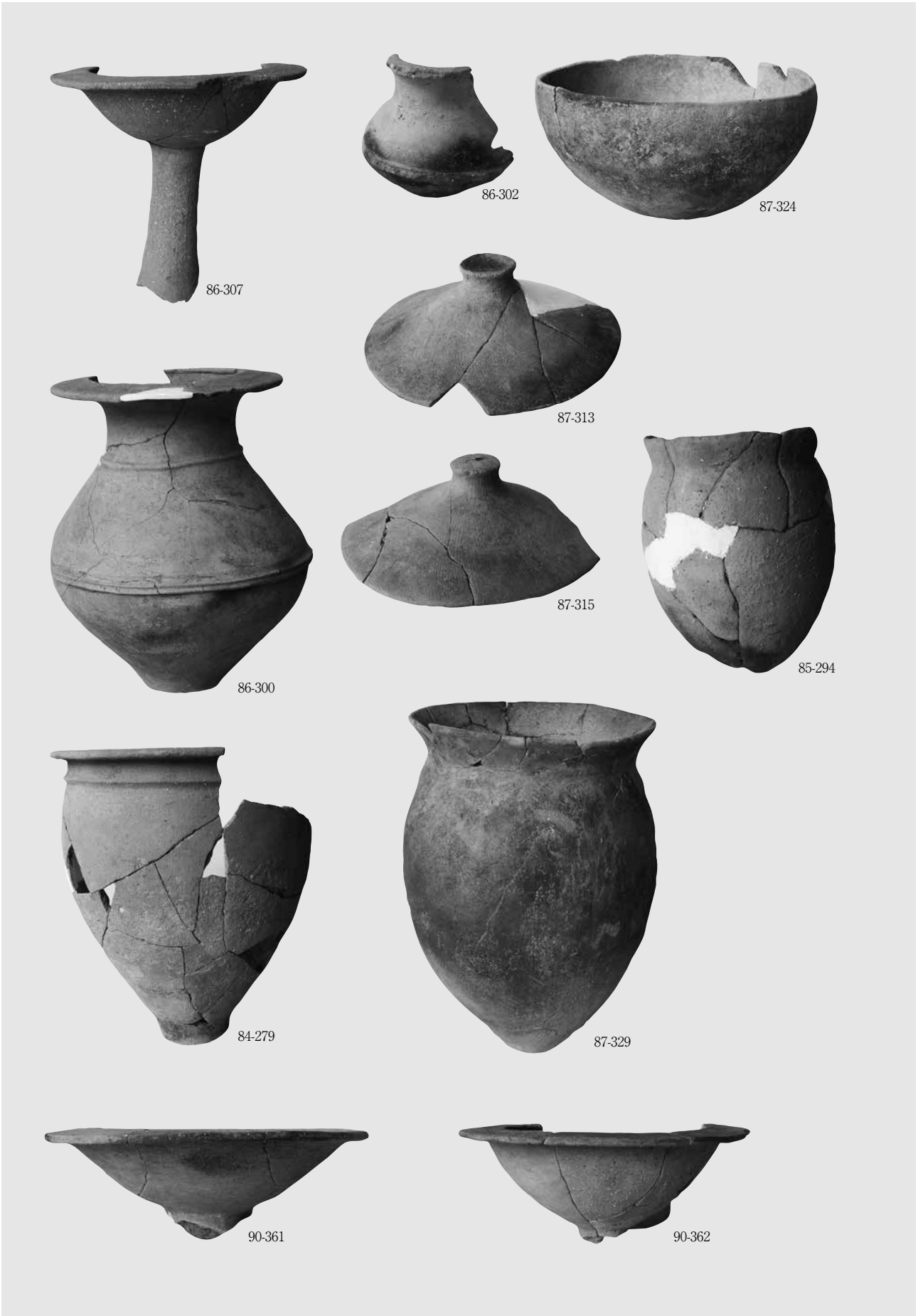
87-327

83-273

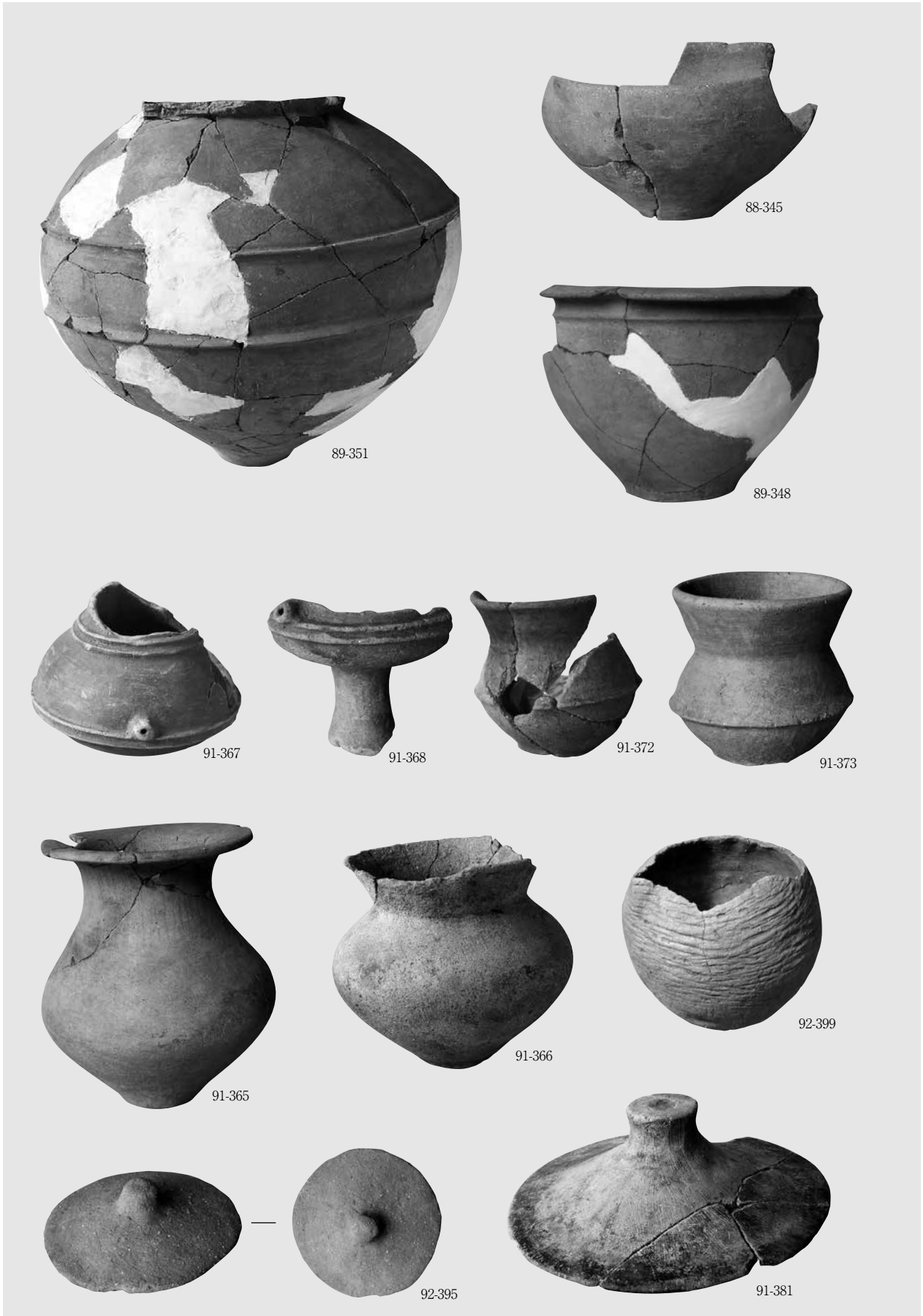
82-269

第 52 次調査区土器群 129・130 出土土器

図版 38

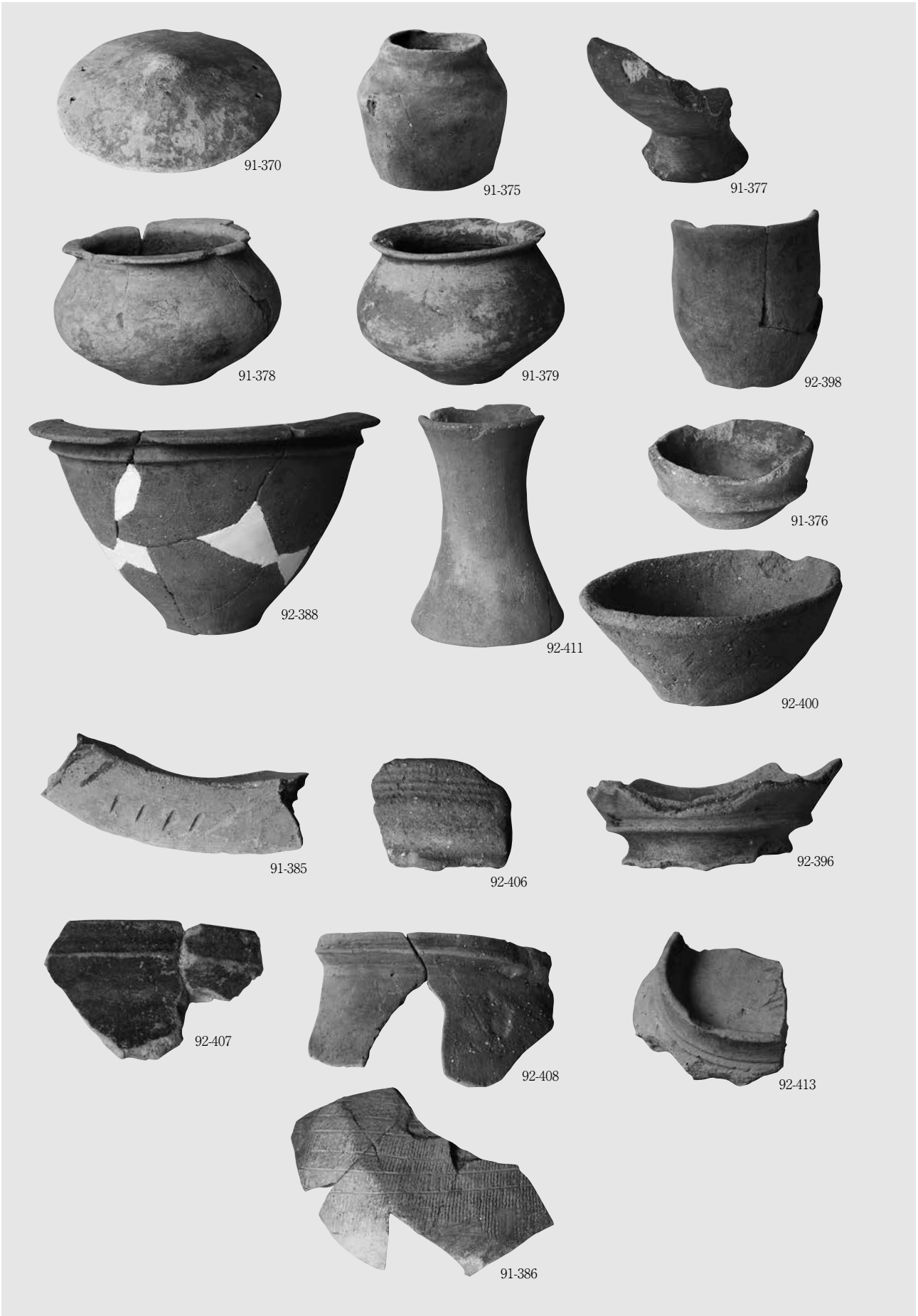


第 52 次調査区土器群 130・132 出土土器



第 52 次調査区土器群 131・包含層出土土器

図版 40



第 52 次調査区包含層出土土器

115-1

115-3

115-4

115-5

115-6

115-7

第 42 次調査区土器群 112 出土土器

図版 42

116-14

116-18

116-19

92-412

117-24

117-36

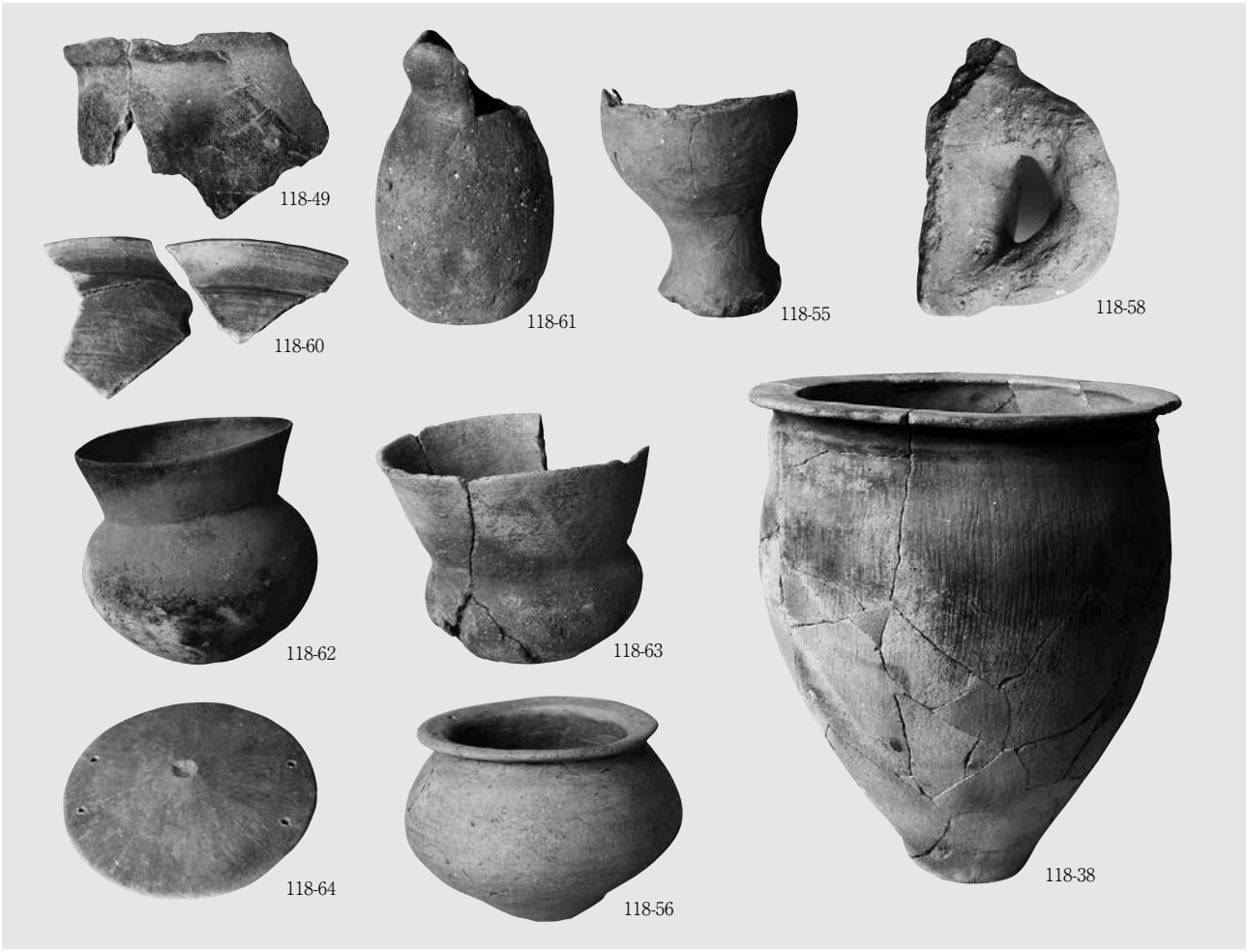
117-27

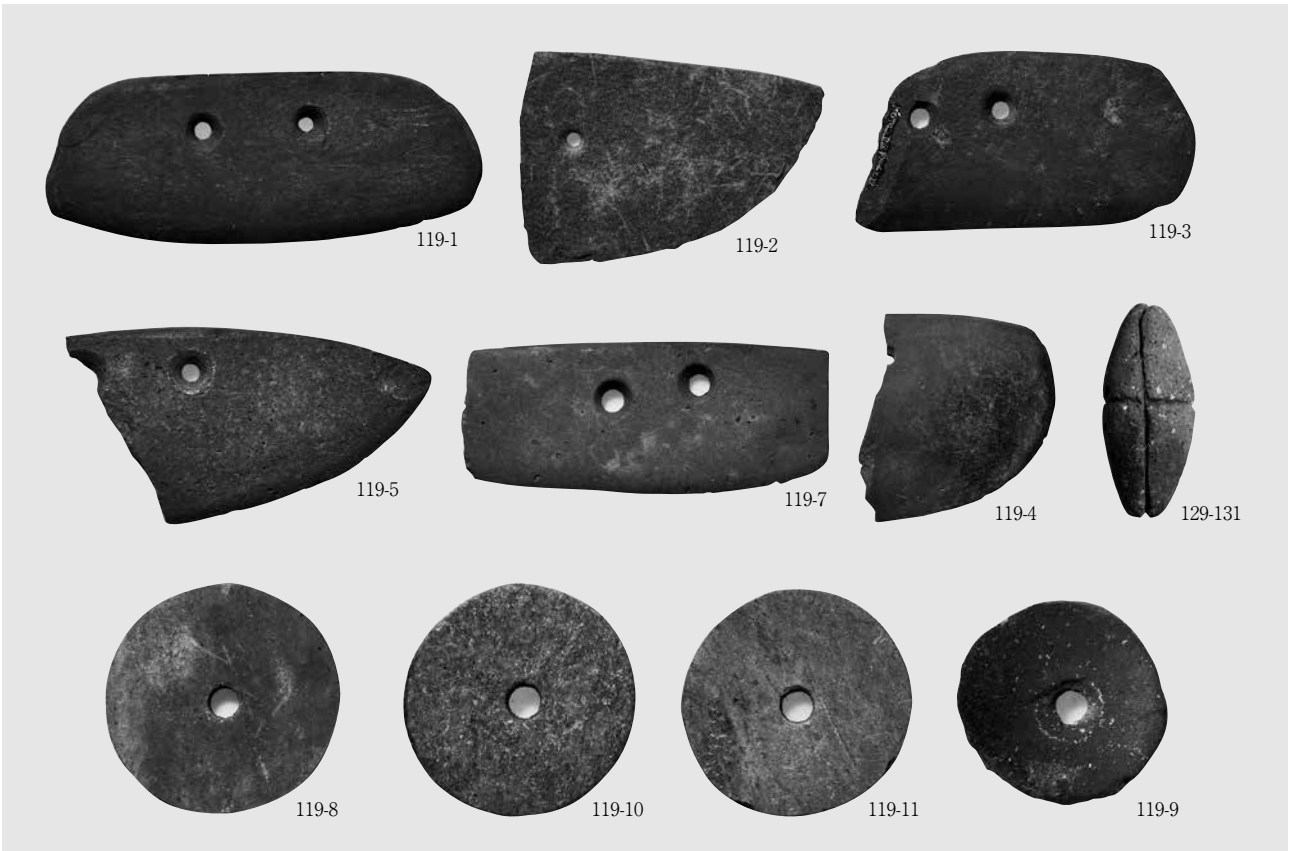
117-31

117-35

117-30

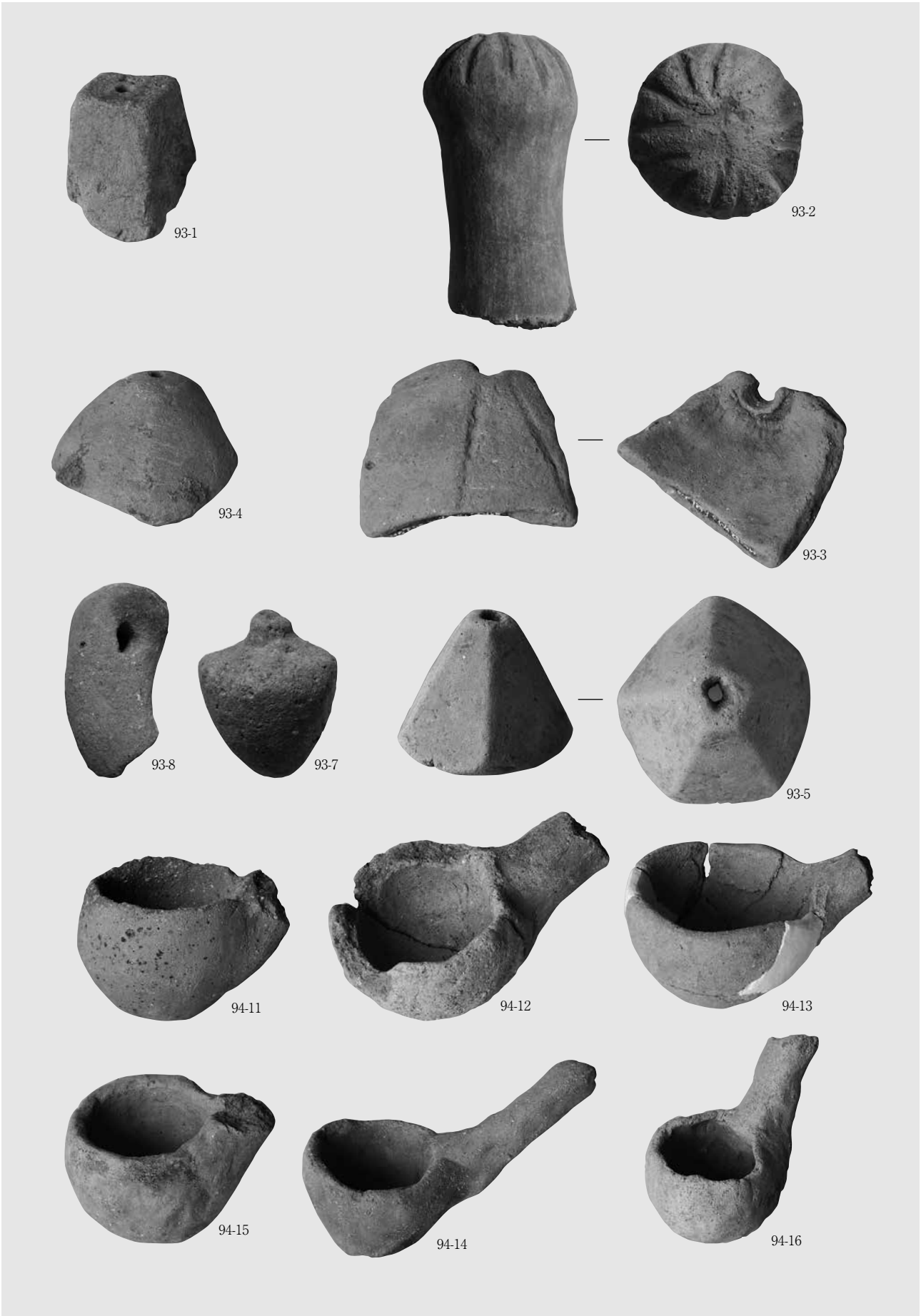
第 42 次調査区土器群 117・120 出土土器



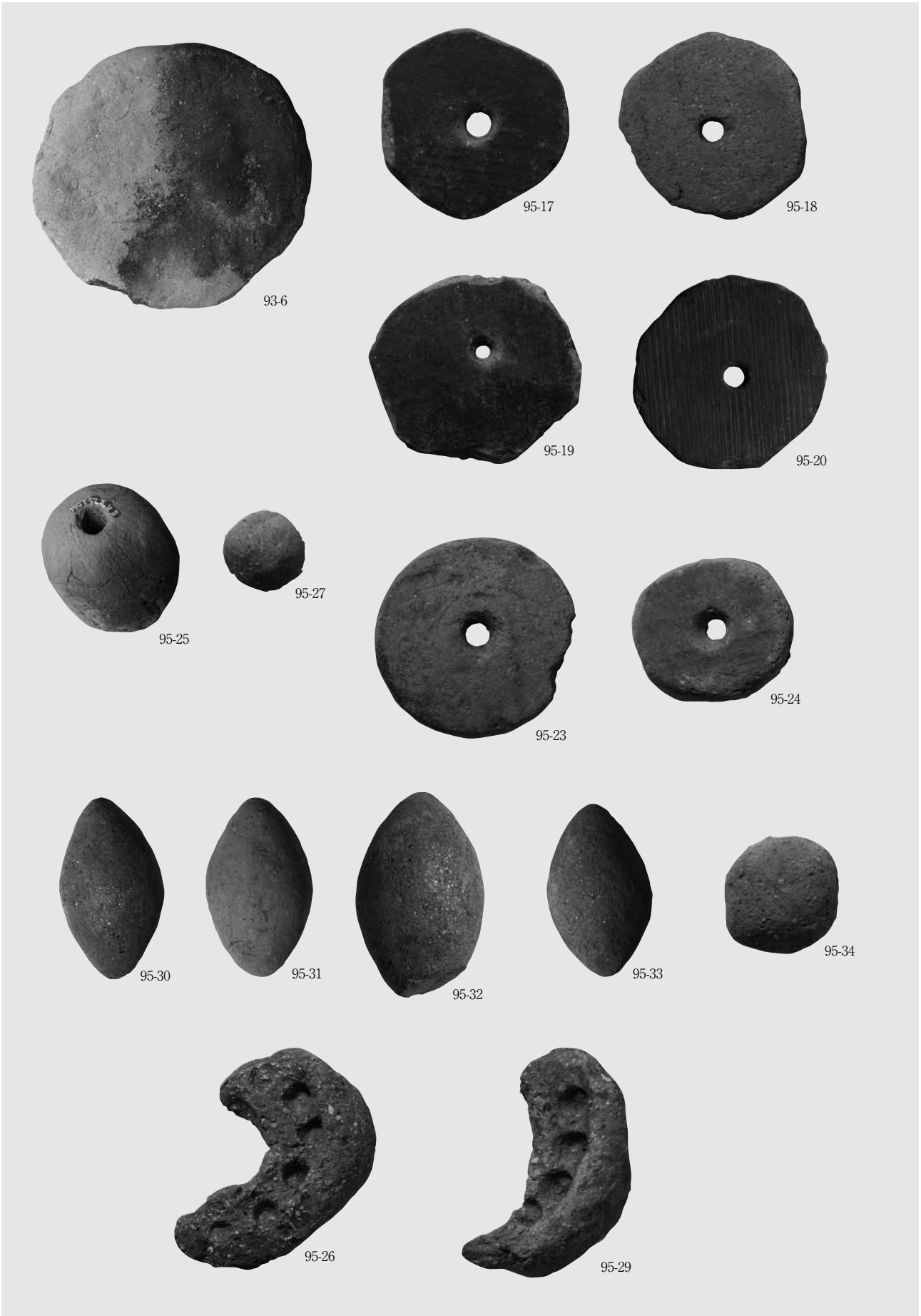


第 42 次調査区包含層出土土器・石器

図版 44

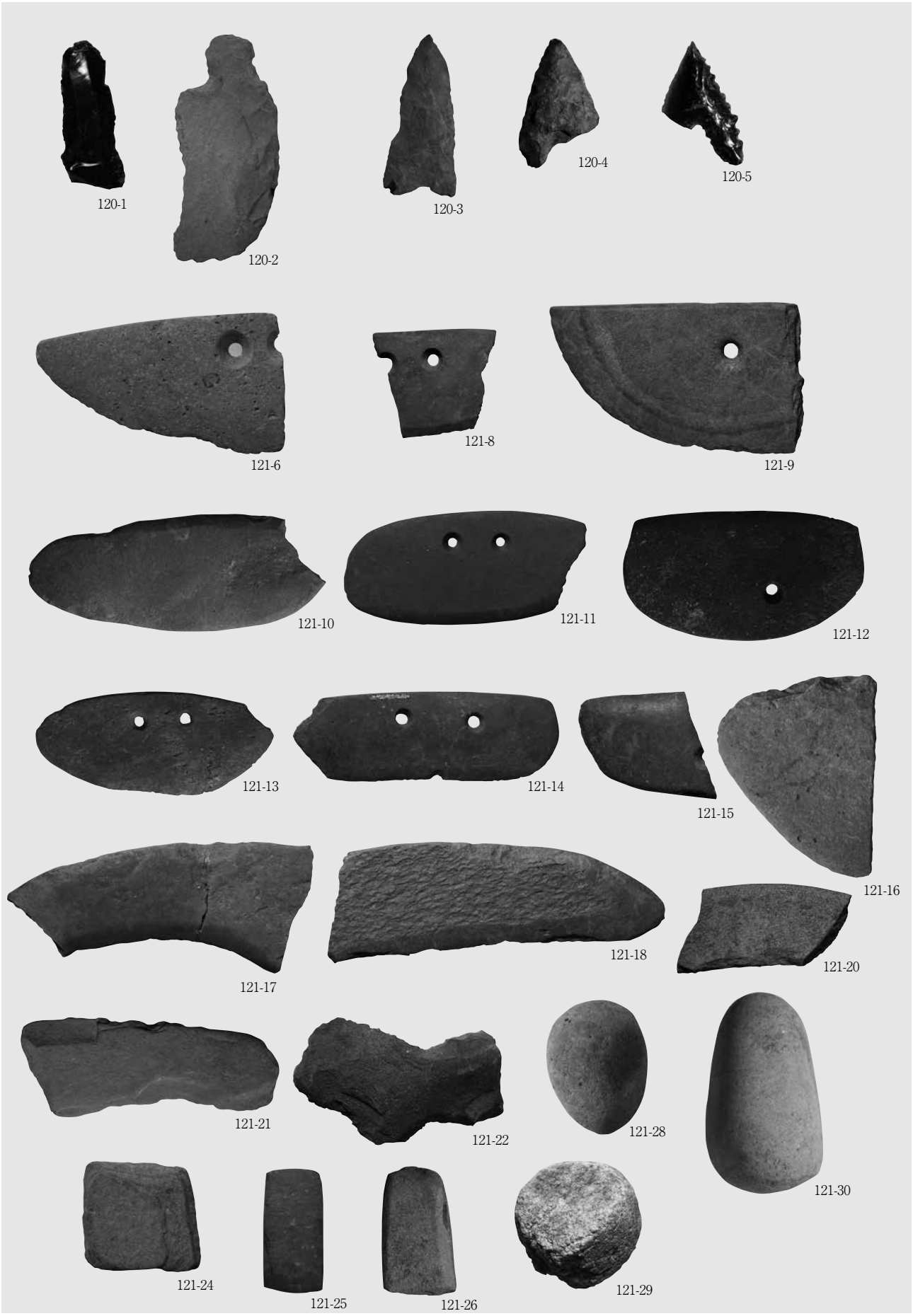


第 52 次調査区遺構出土土製品（1）

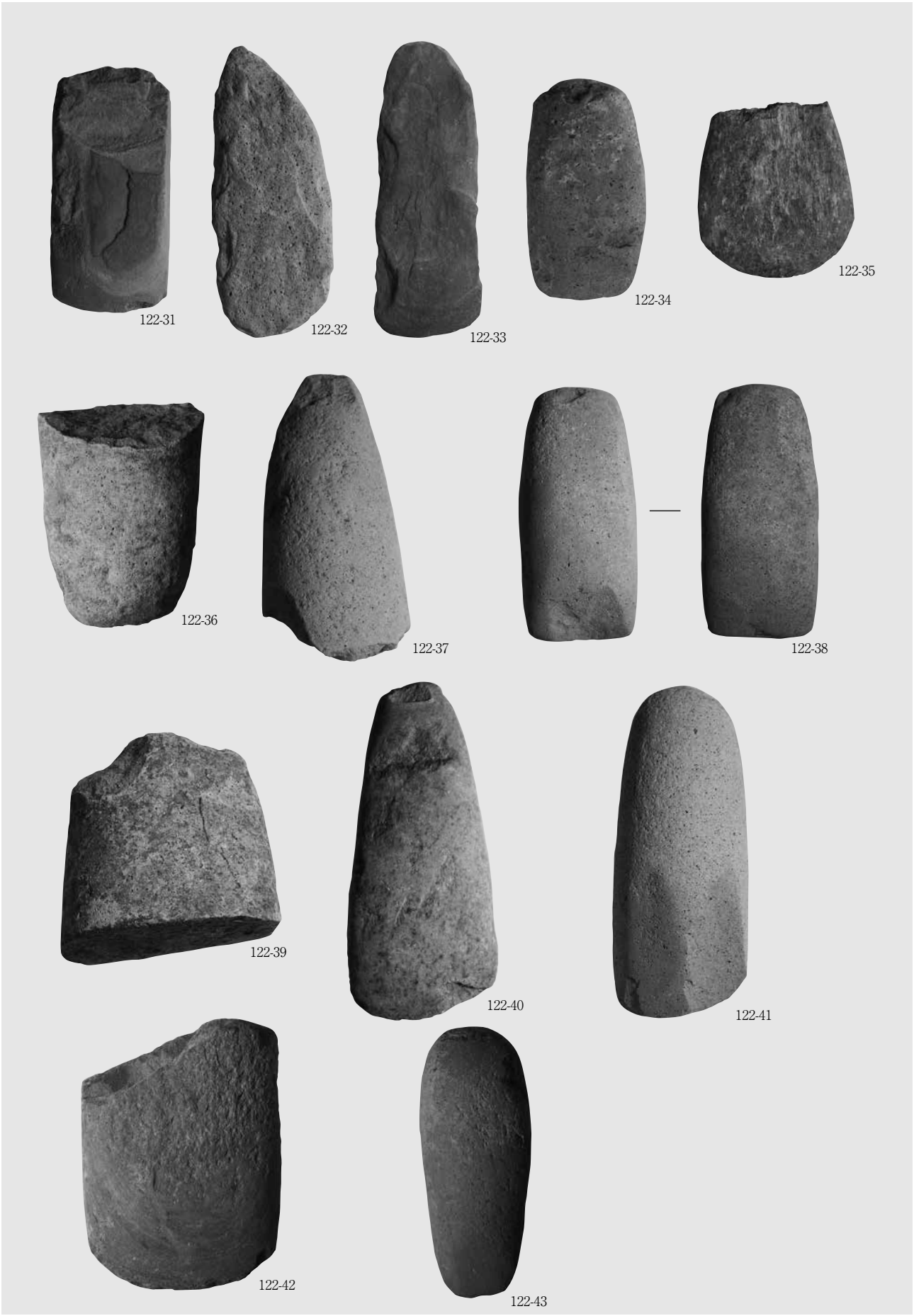


第 52 次調査区遺構出土土製品（2）

図版 46

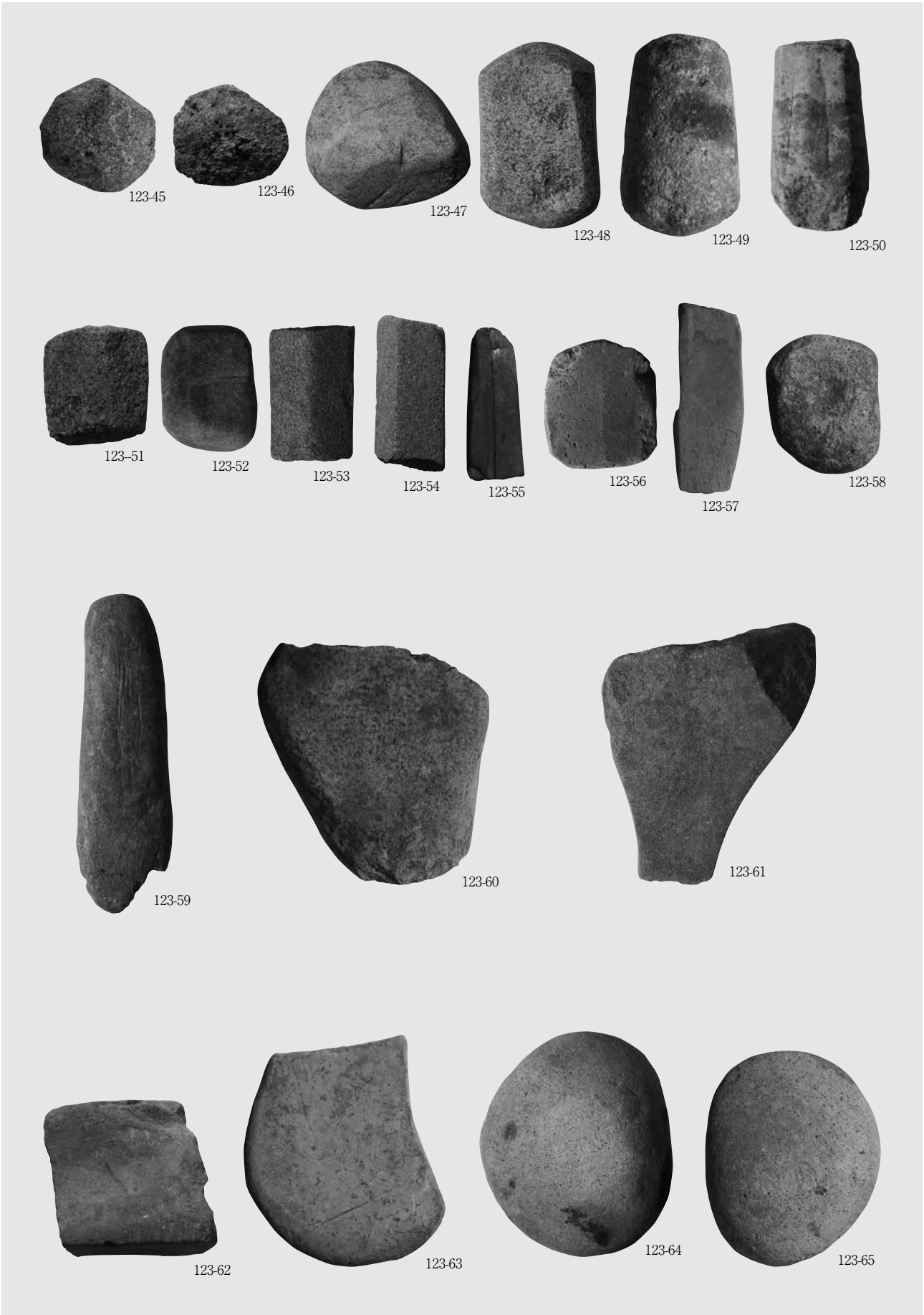


第 52 次調査区遺構出土石器（1）

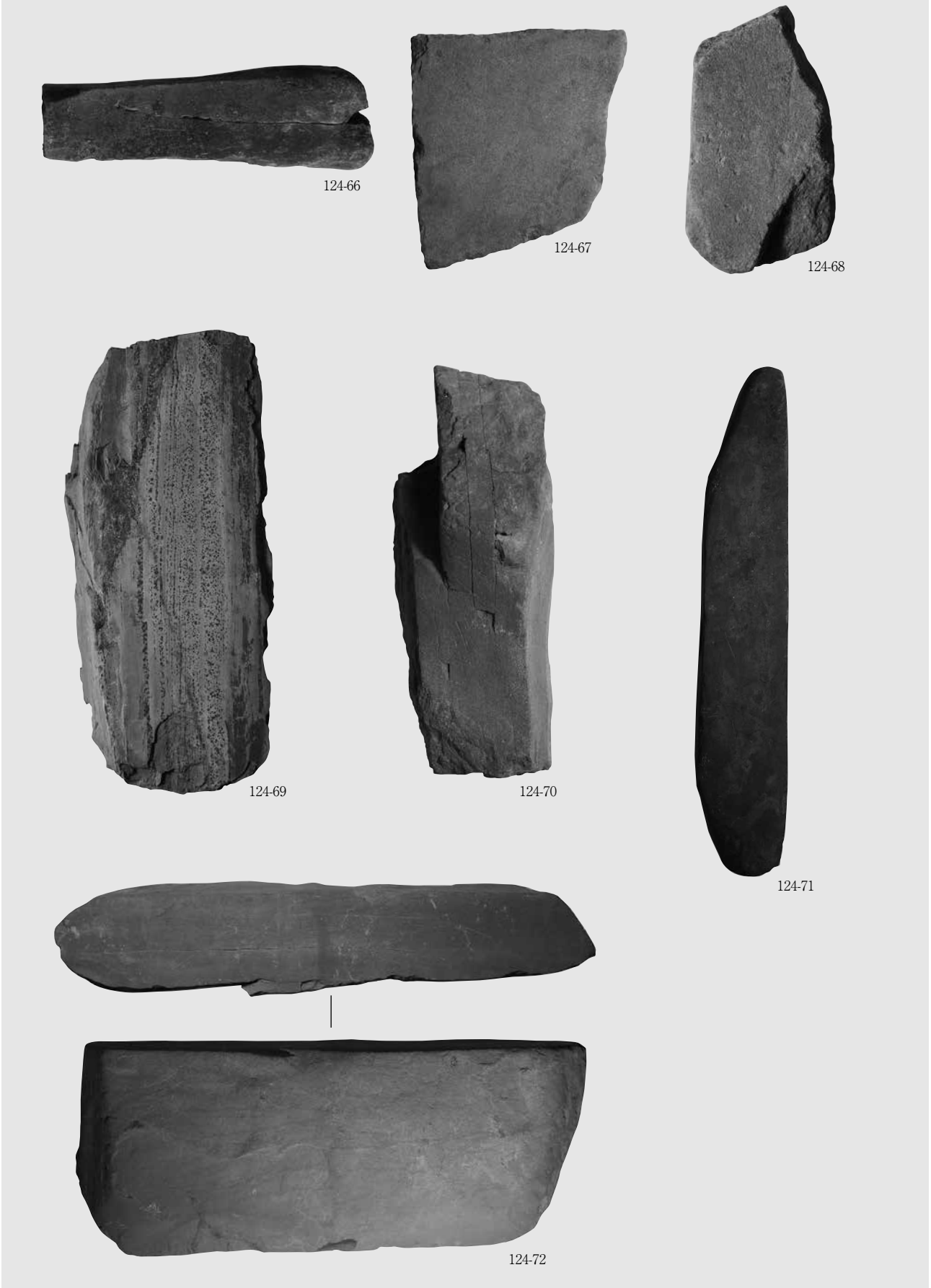


第 52 次調査区遺構出土石器（2）

図版 48

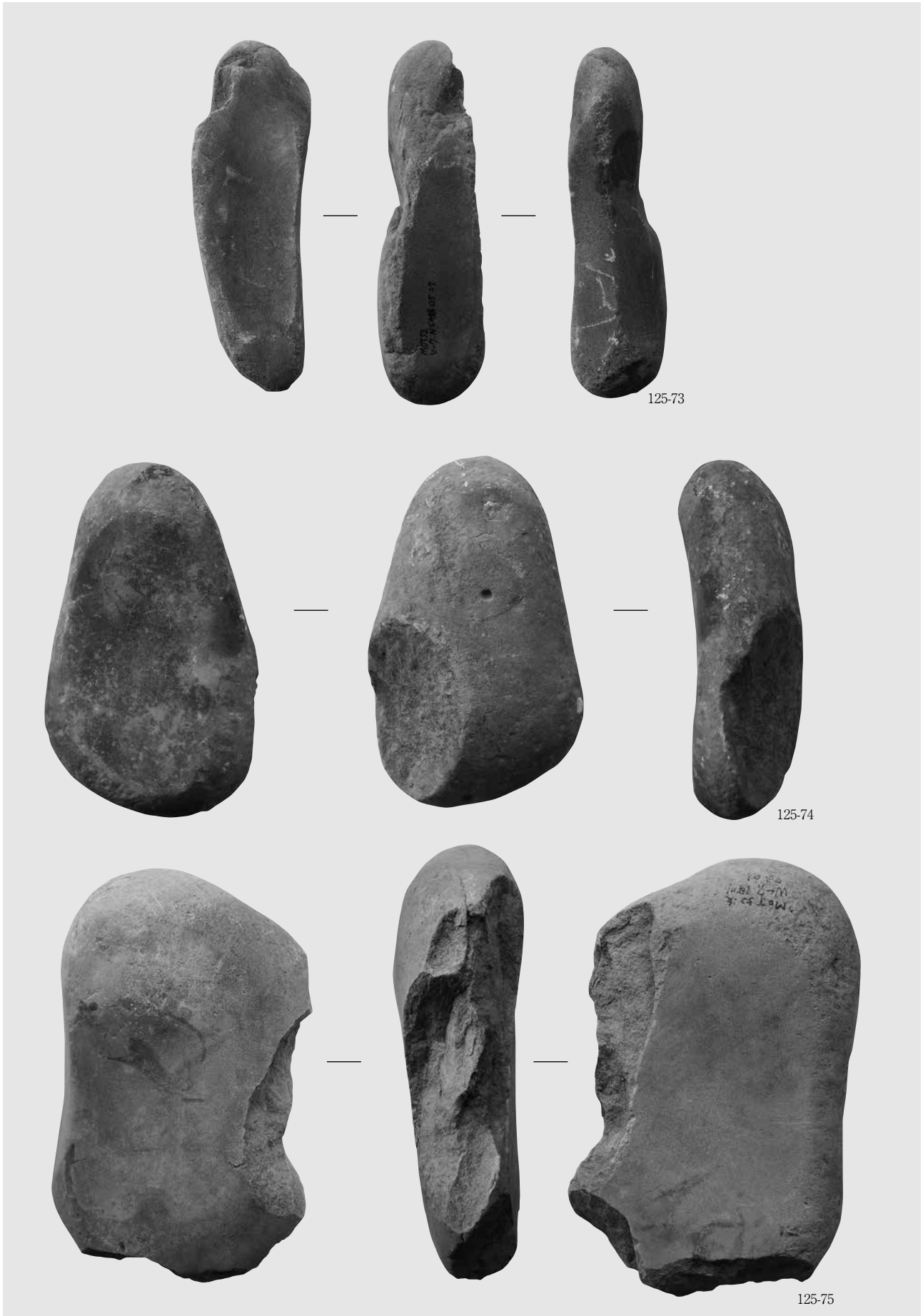


第 52 次調査区遺構出土石器（3）

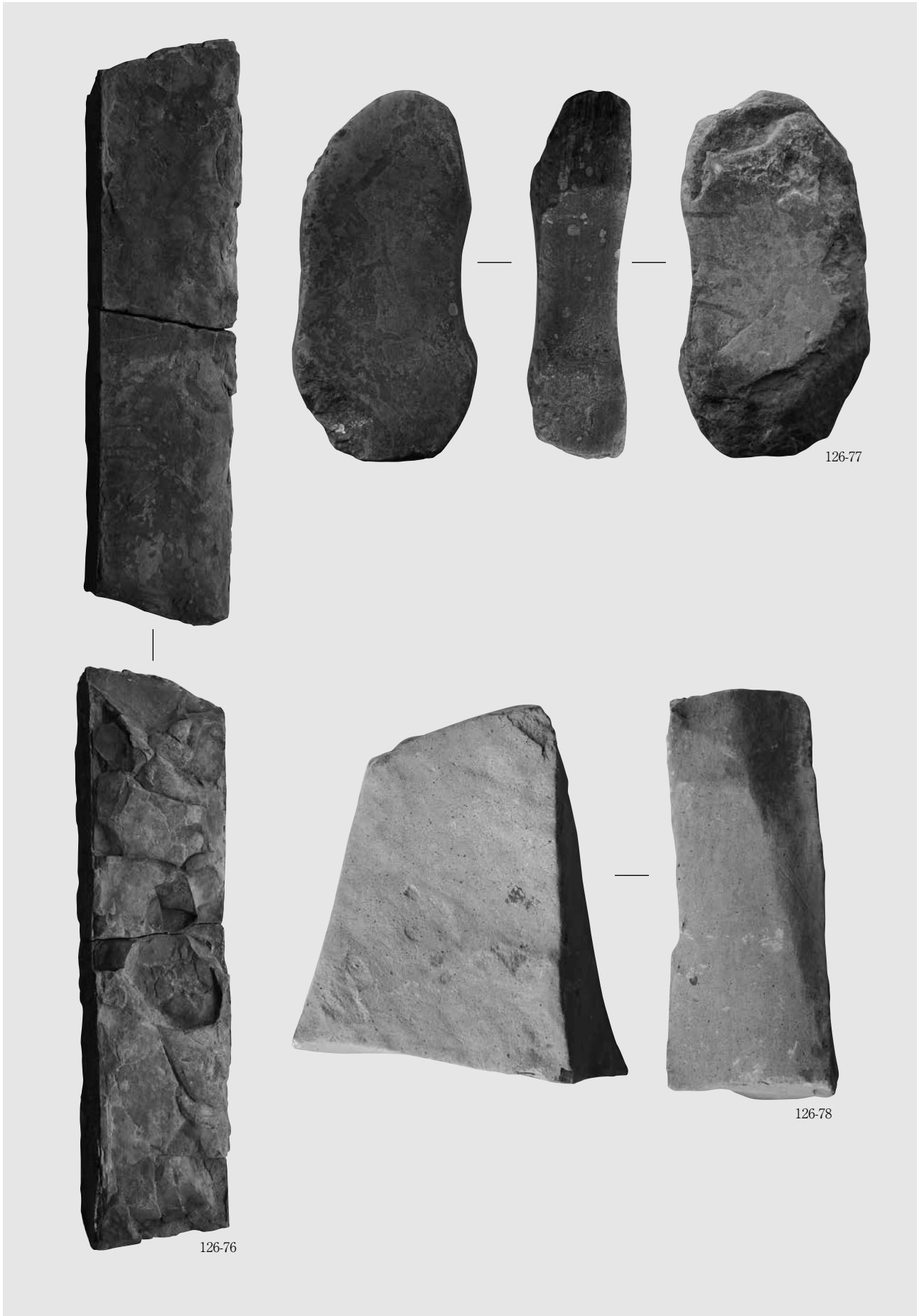


第 52 次調査区遺構出土石器（4）

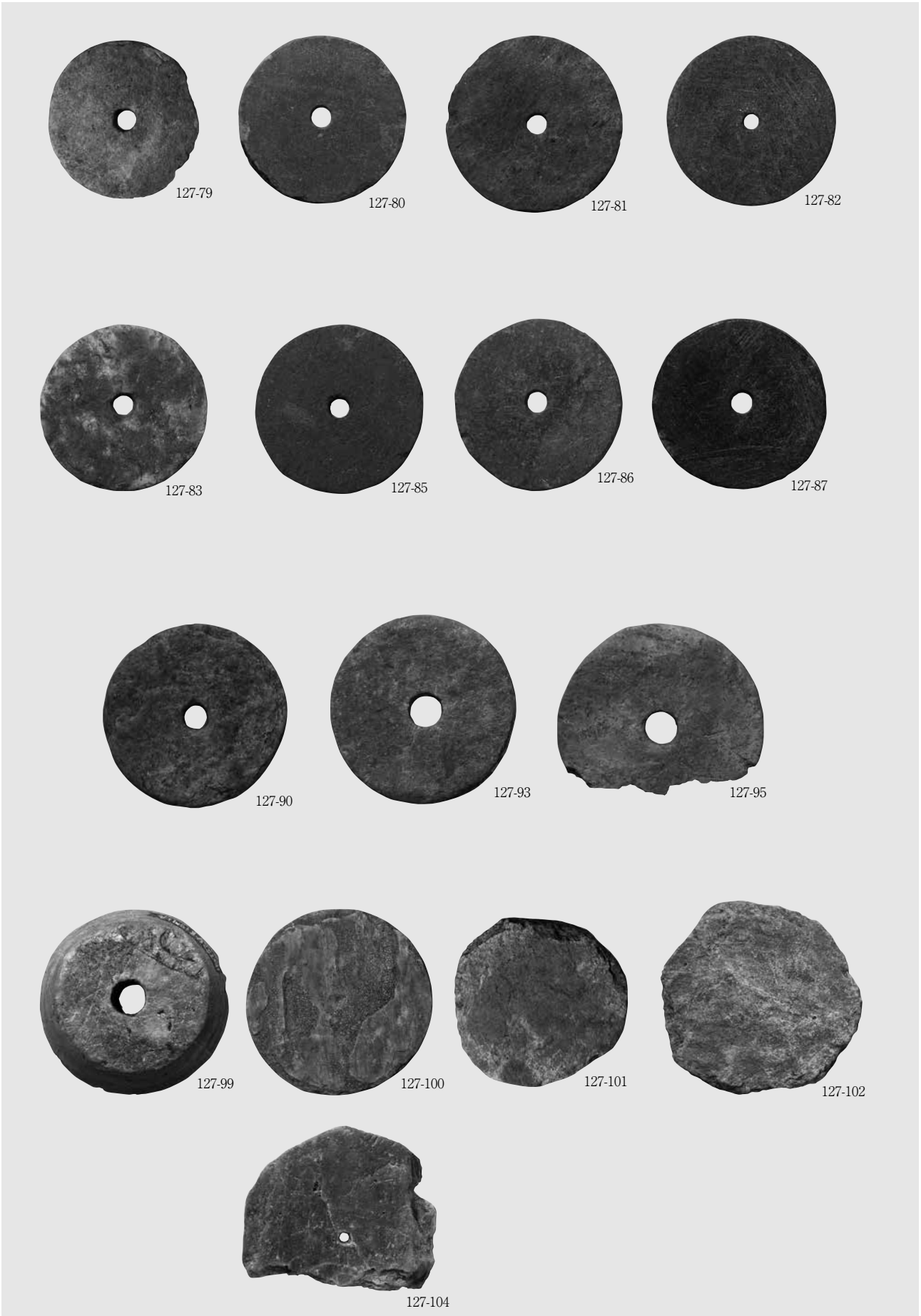
図版 50



第 52 次調査区遺構出土石器（5）



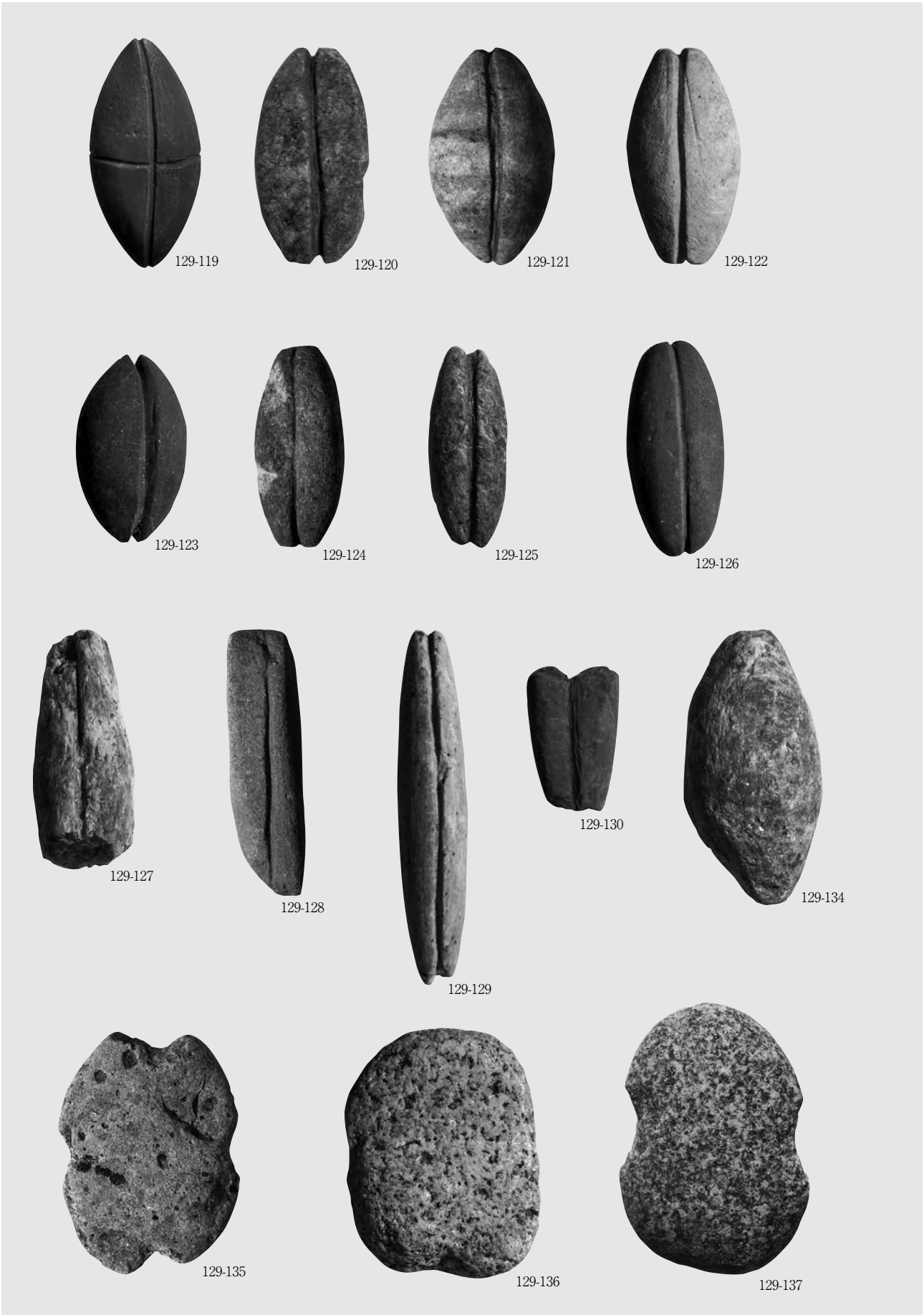
第 52 次調査区遺構出土石器（6）



第 52 次調査区遺構出土石器（7）

第 52 次調査区遺構出土石錘（1）

図版 54



第 52 次調査区遺構出土石錘（2）

130-138

130-139

130-140

130-141

131-142

第 52 次調査区遺構出土石錘（3）

第 52 次調査区遺構出土石錘（4）

97-6

97-4

97-8

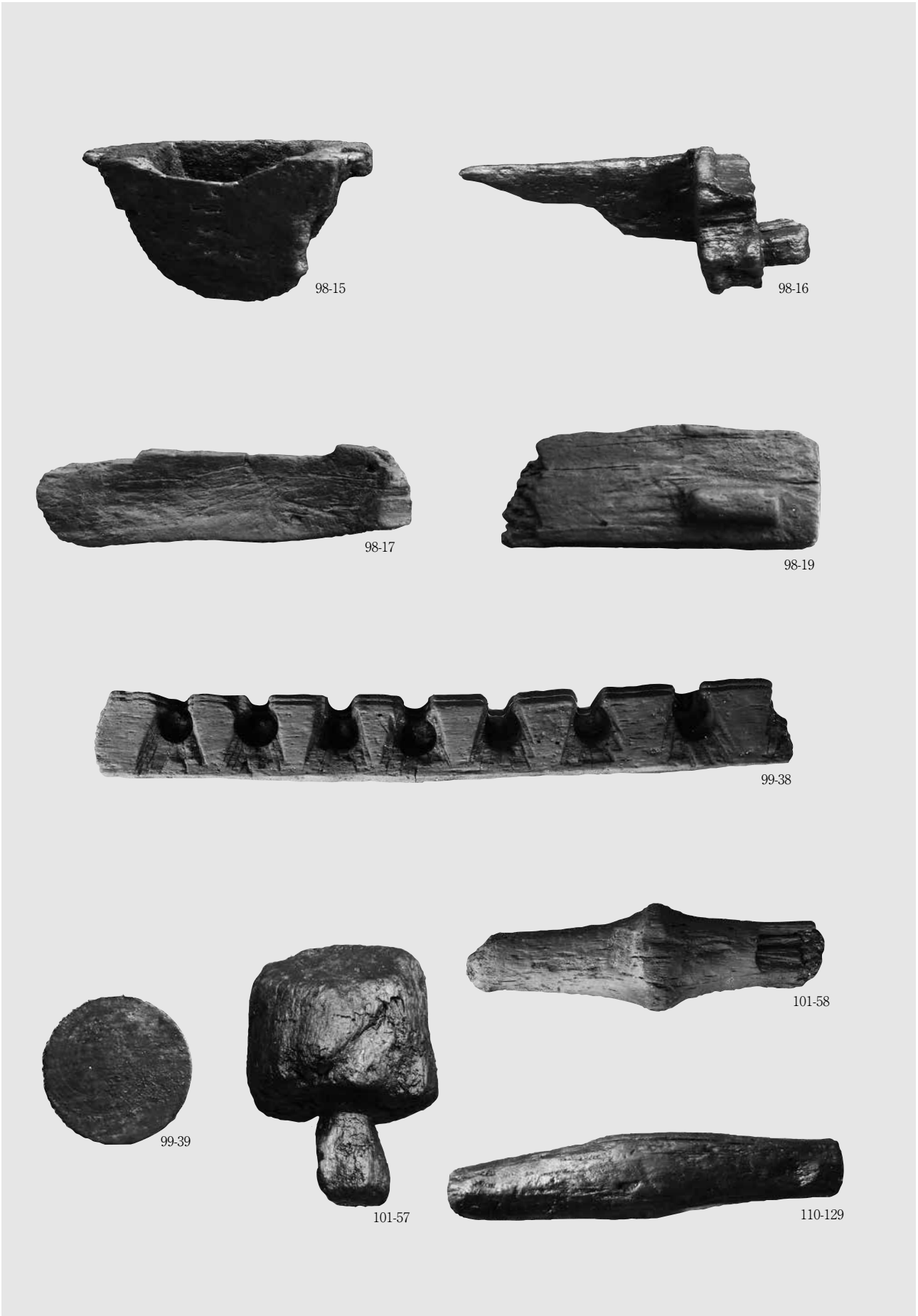
97-7

98-9

98-11

第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（1）

図版 58



第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（2）

97-5

99-36

99-20

99-25

99-26

99-28

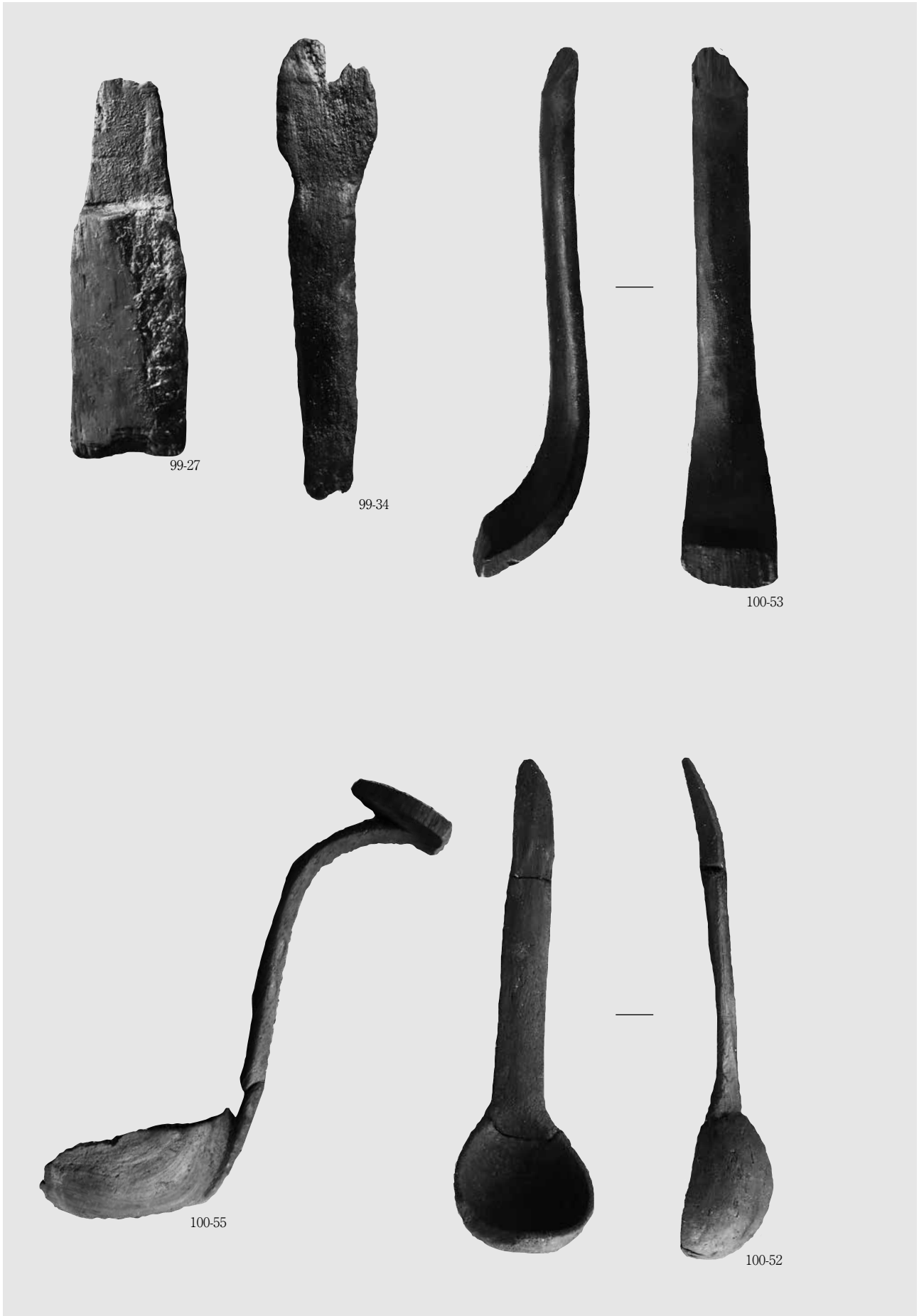
99-29

99-30

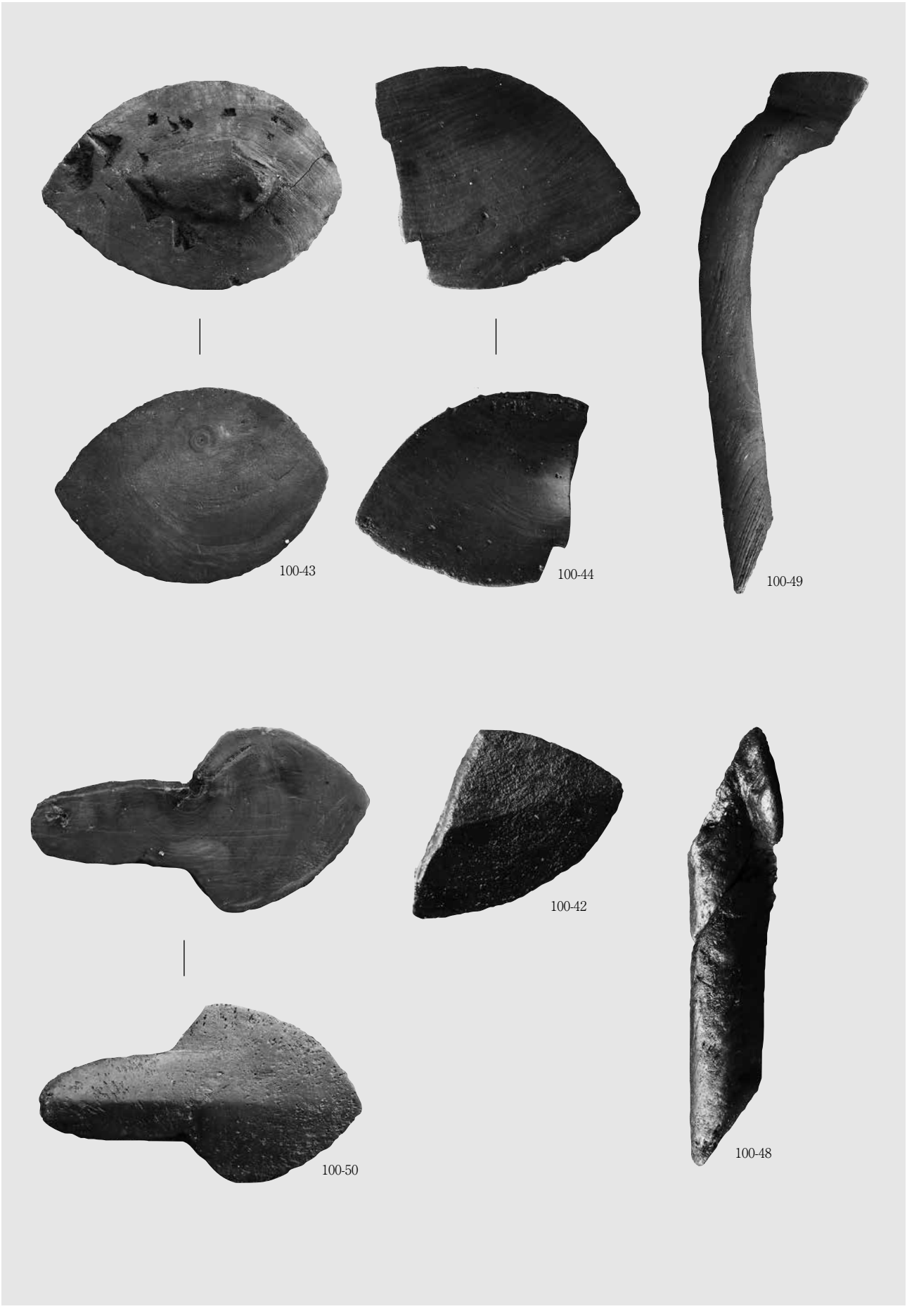
99-32

第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（3）

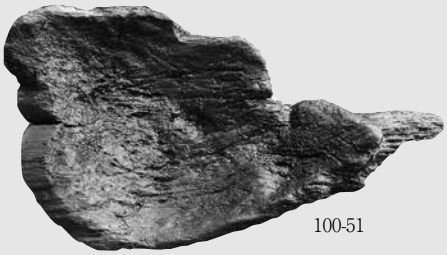
図版 60



第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（4）

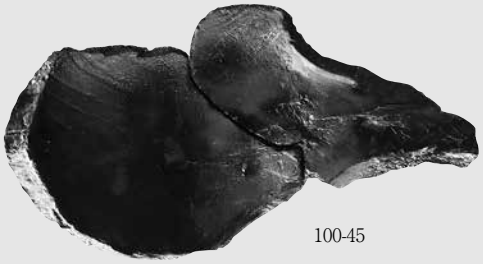


第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（5）



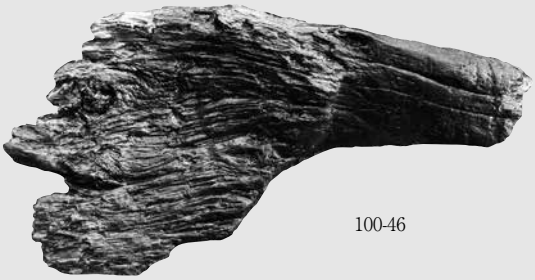
100-51

100-47



100-45

100-54

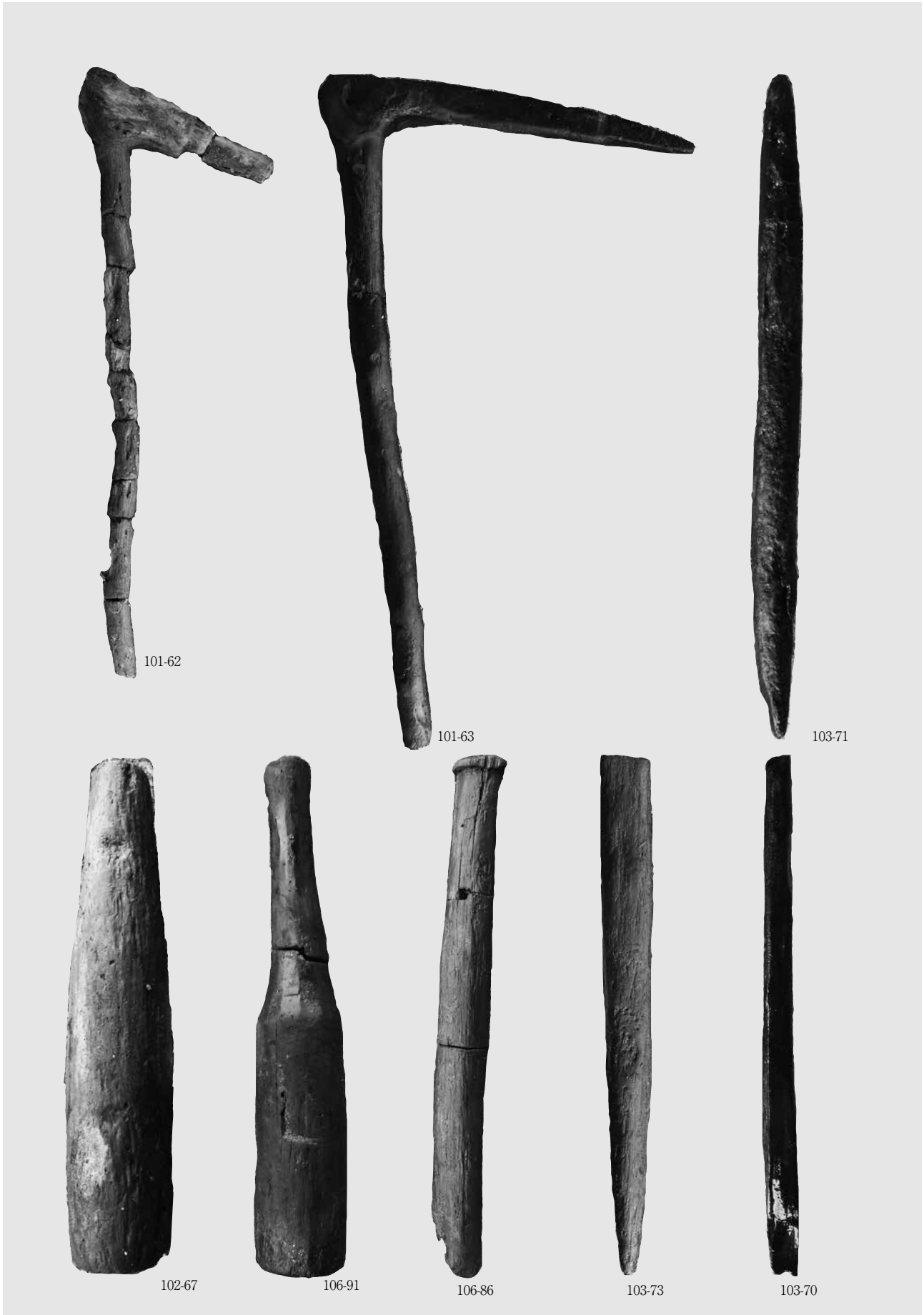


100-46

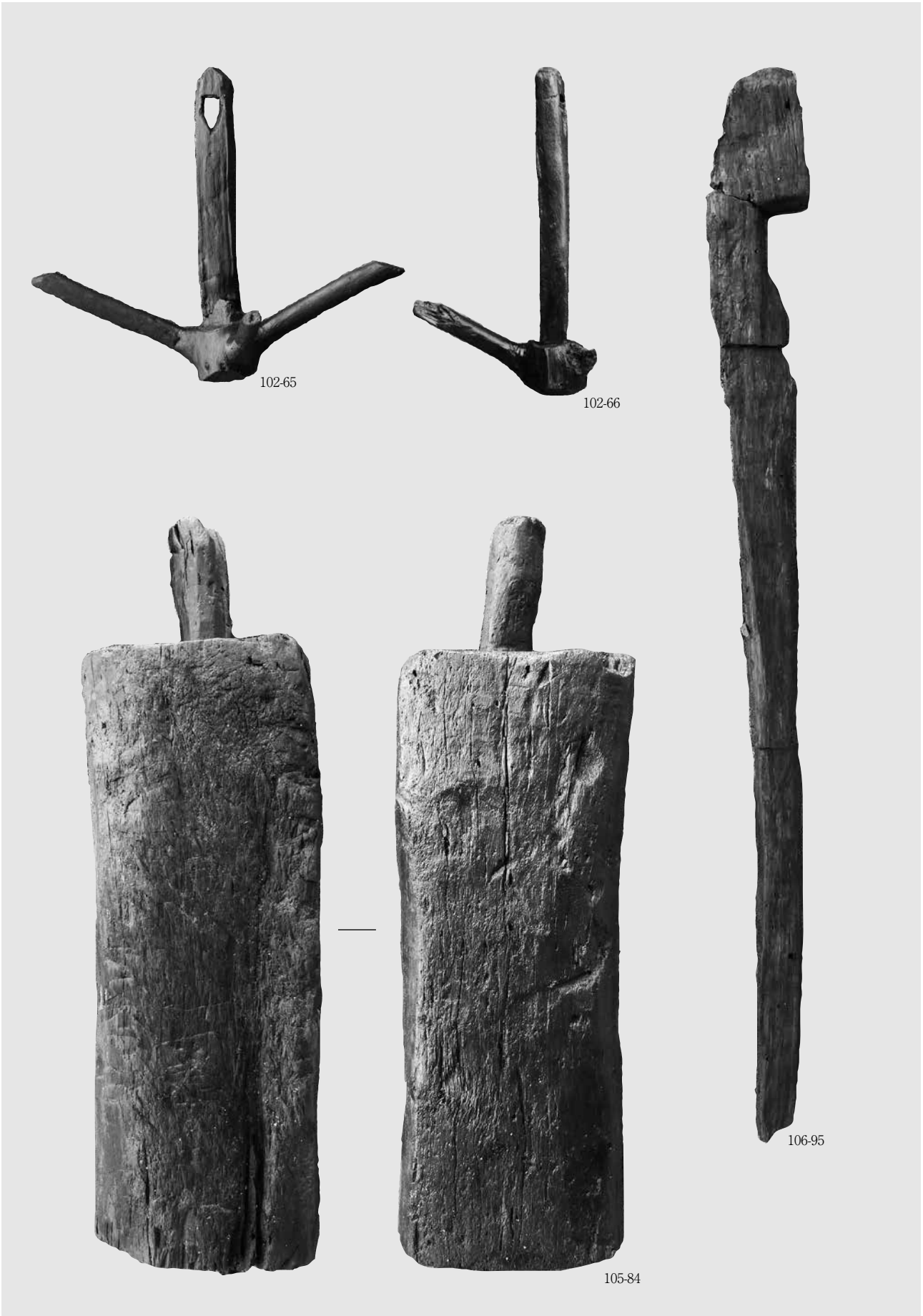
101-59

101-60

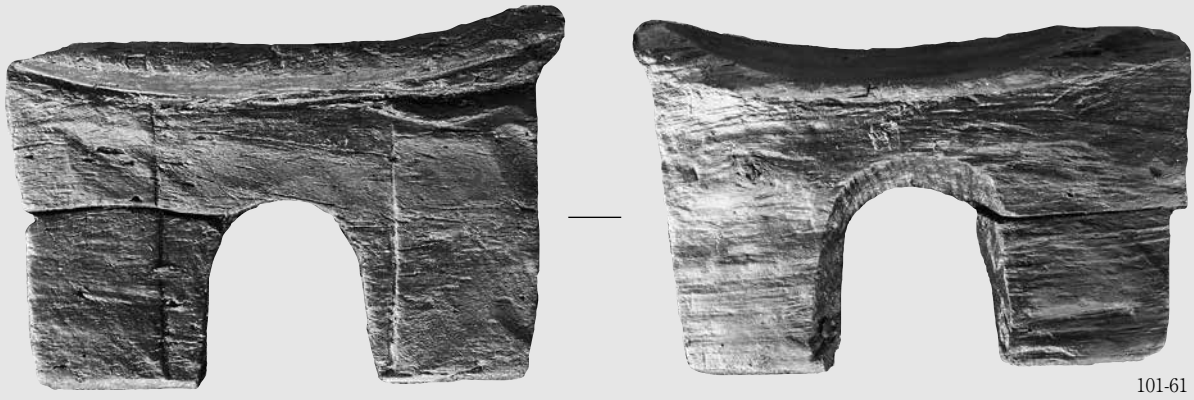
第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（6）



第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（7）



第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（8）



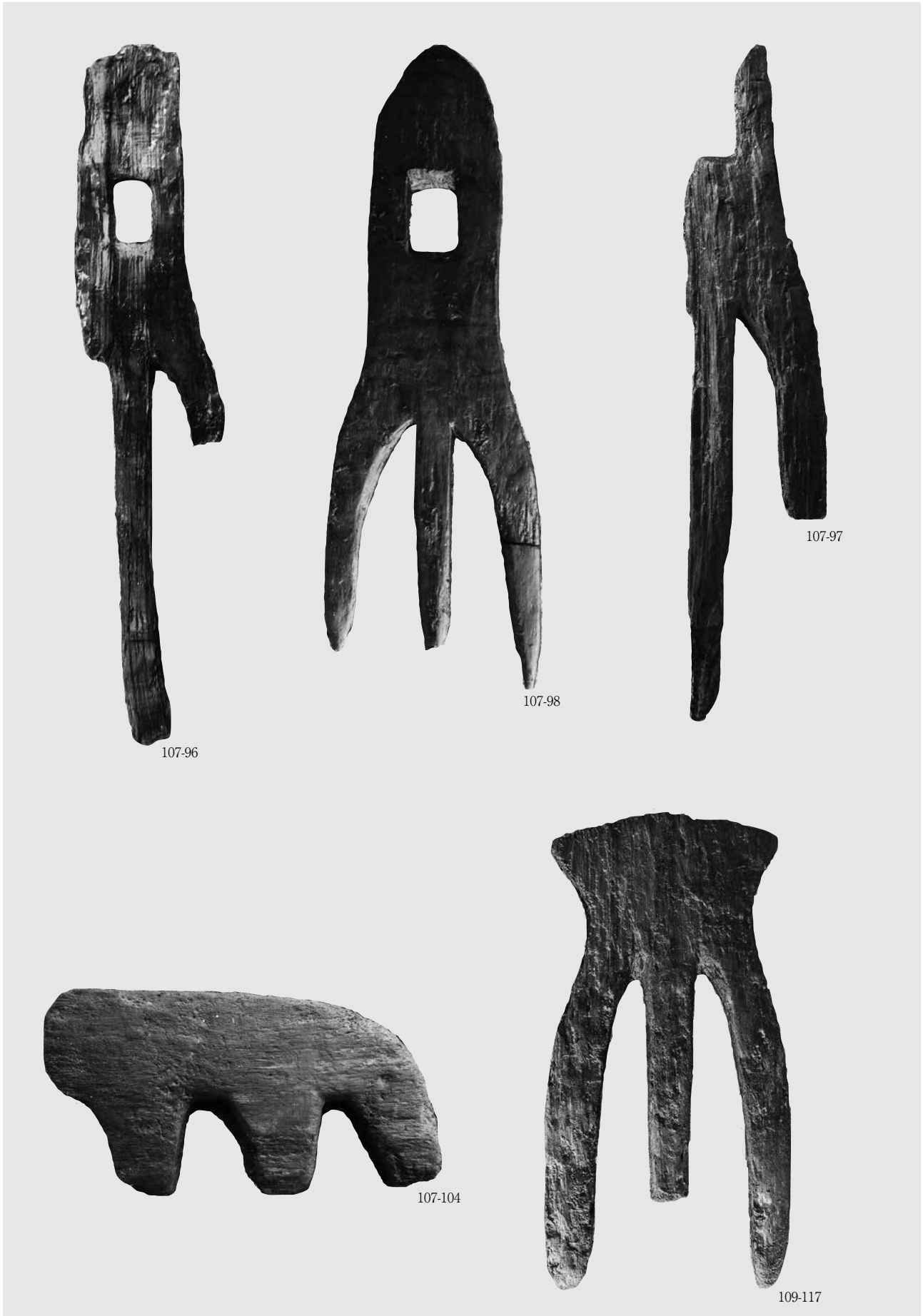
101-61

105-82

105-81

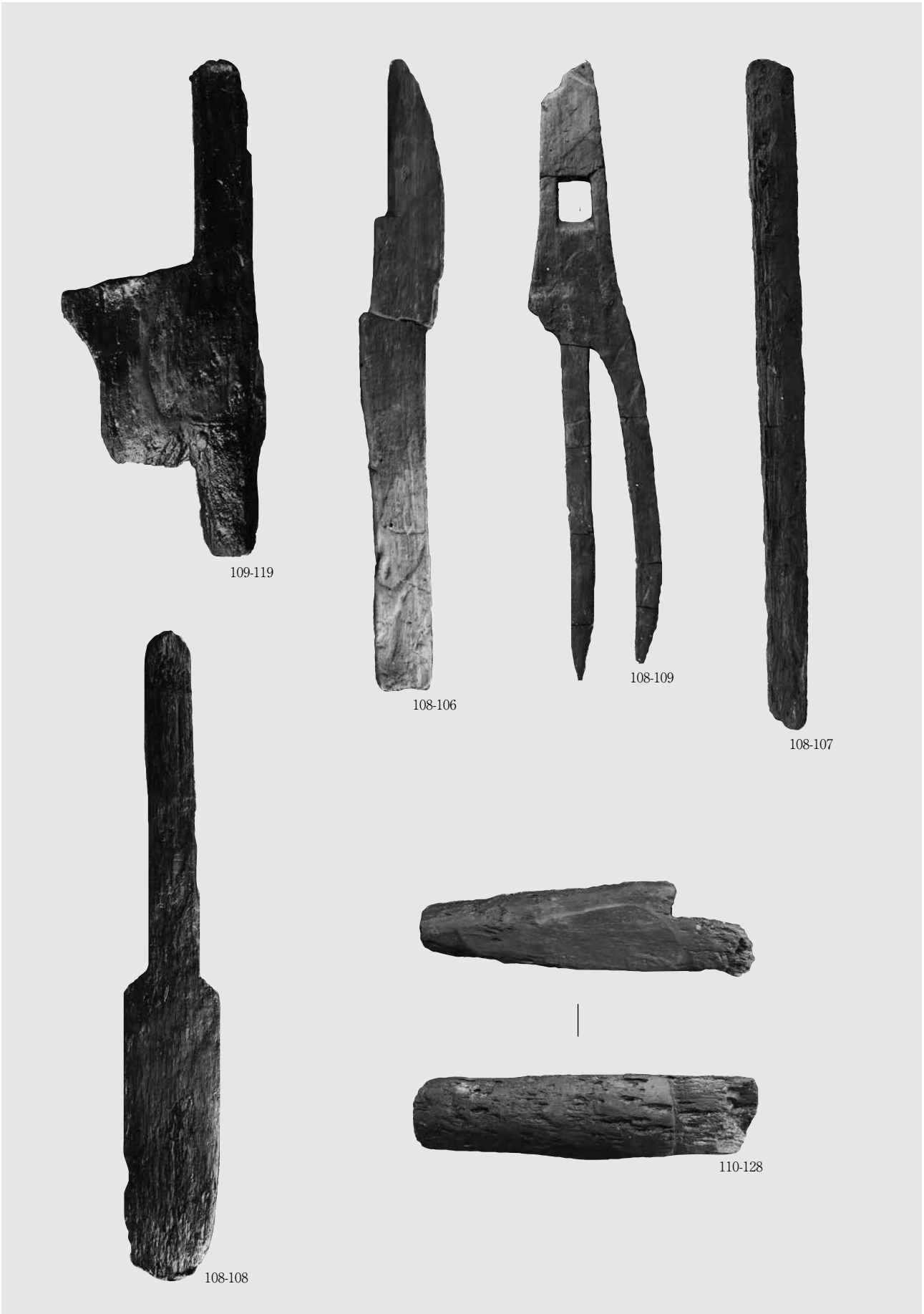
第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（9）

第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（10）

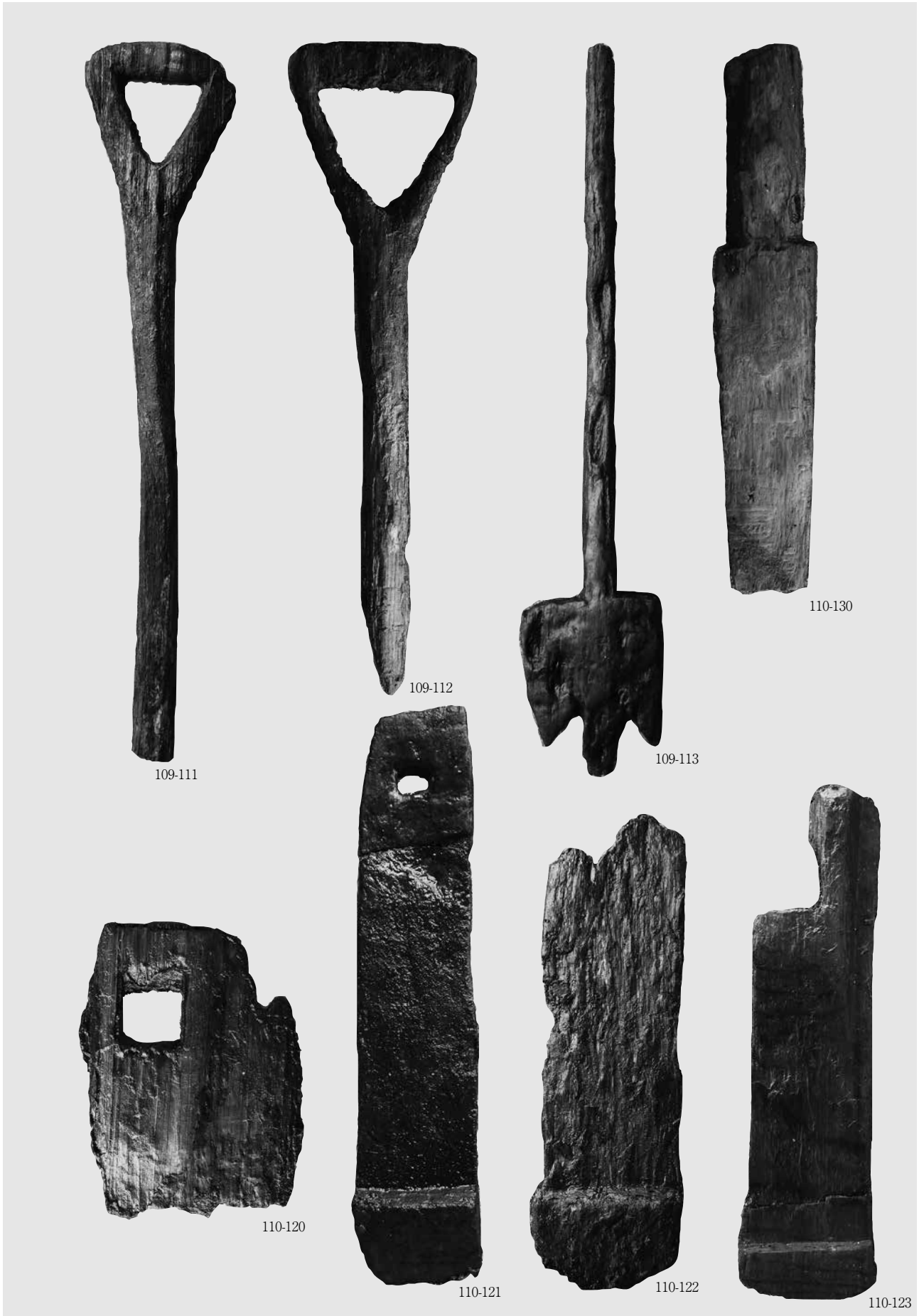


第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（11）

図版 68



第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（12）



第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（13）

図版 70

第 1246 集 42-195

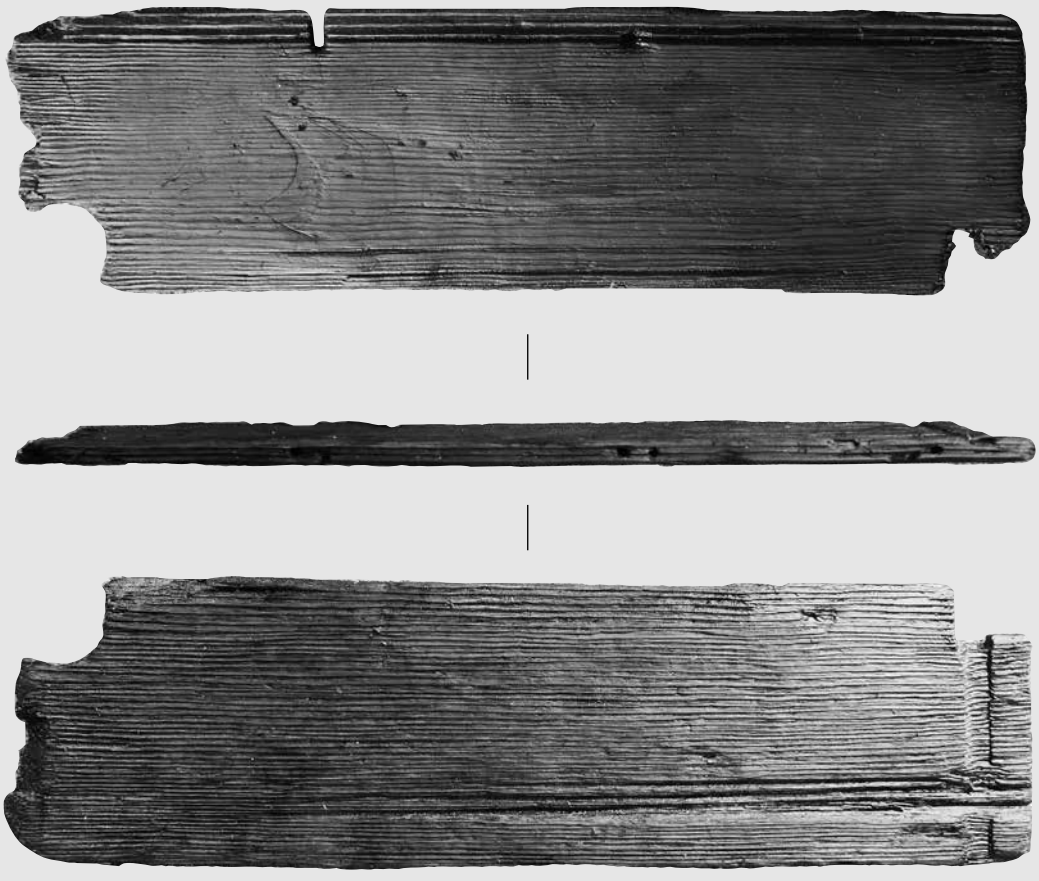
101-56

109-115

第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（14）

97-2-2

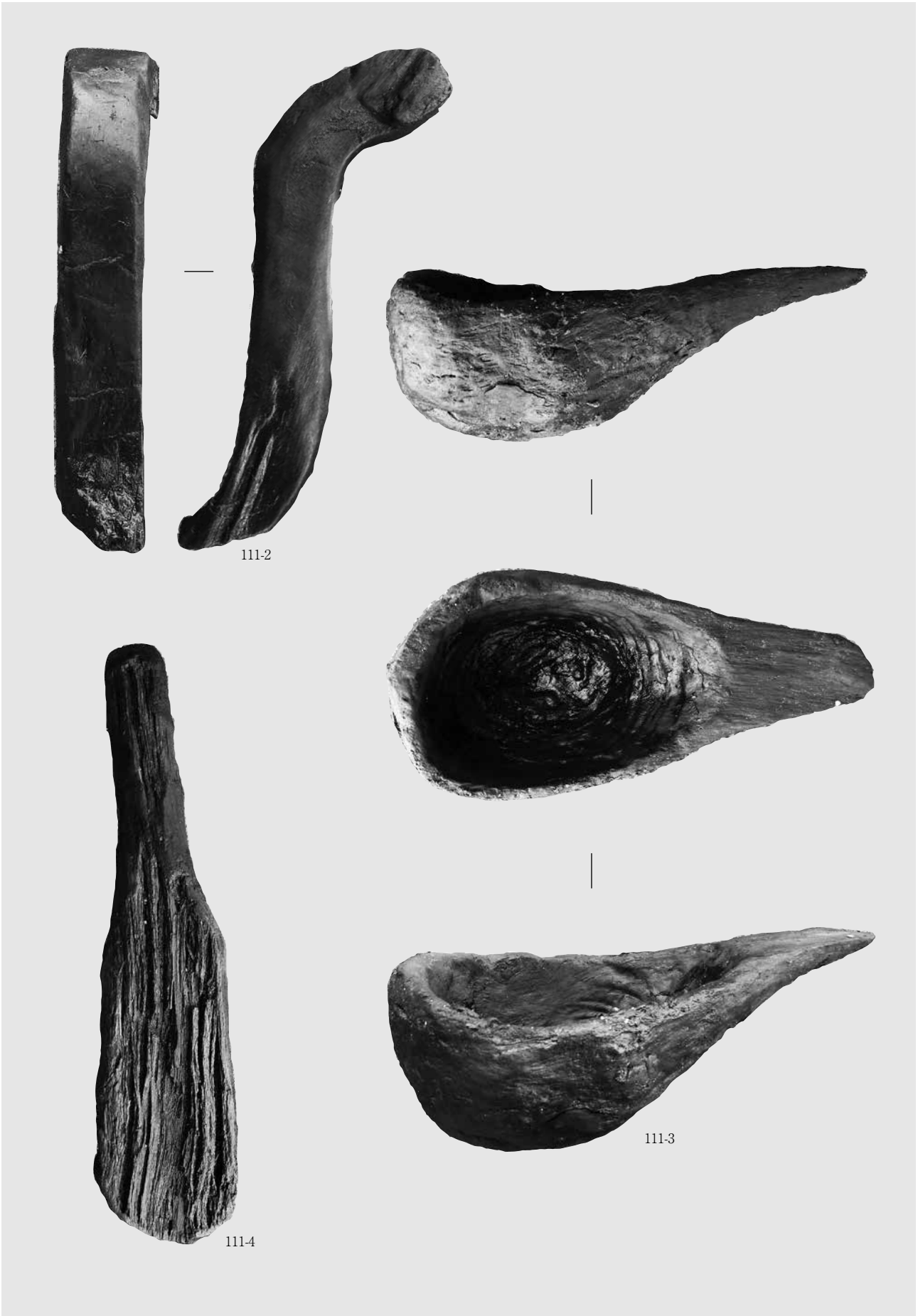
97-2-1（部分）



96-1

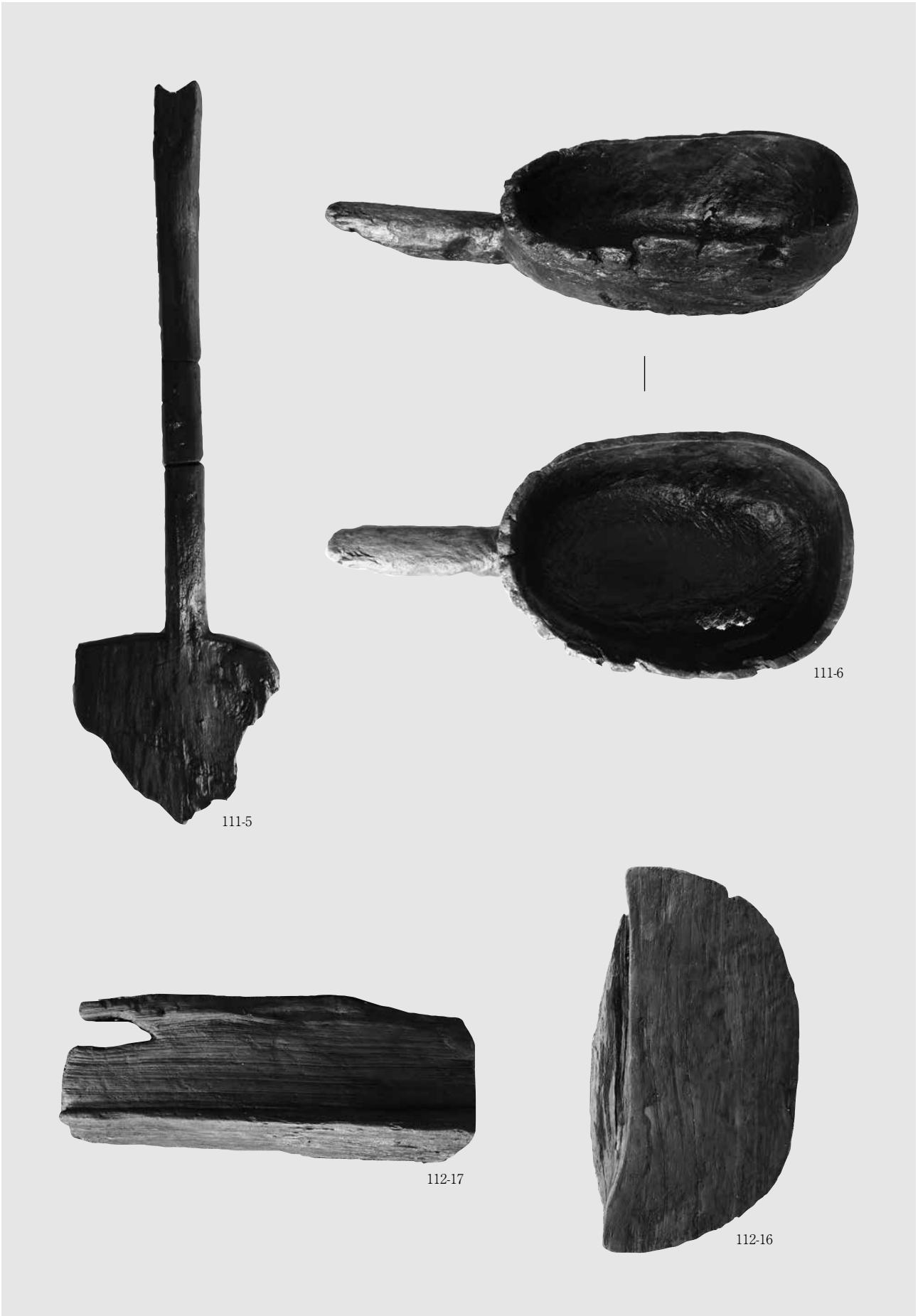
第 52 次調査Ⅱ区出土木製品（15）

第 52 次調査 I 区出土木製品（1）

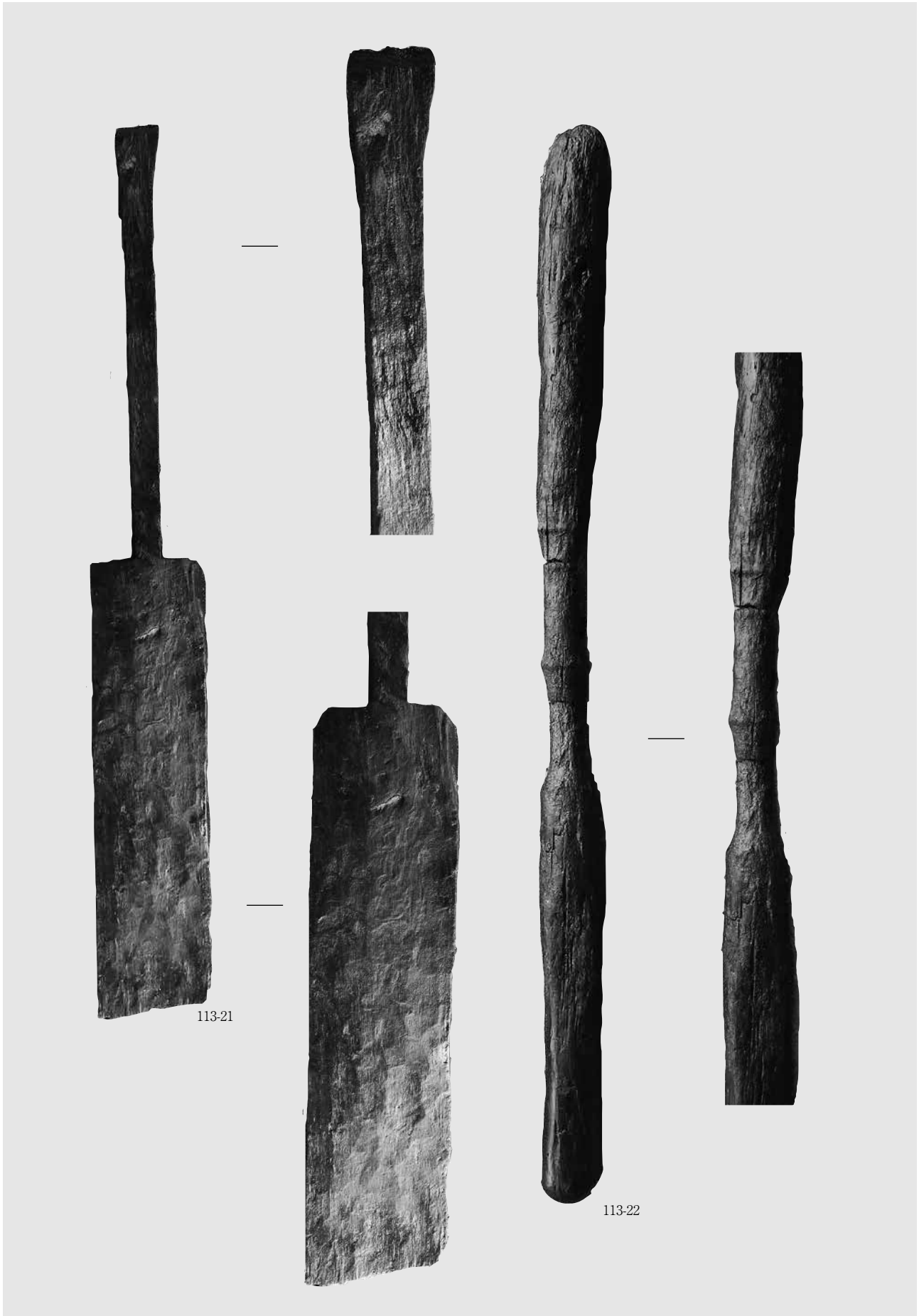


第 52 次調査 I 区出土木製品（2）

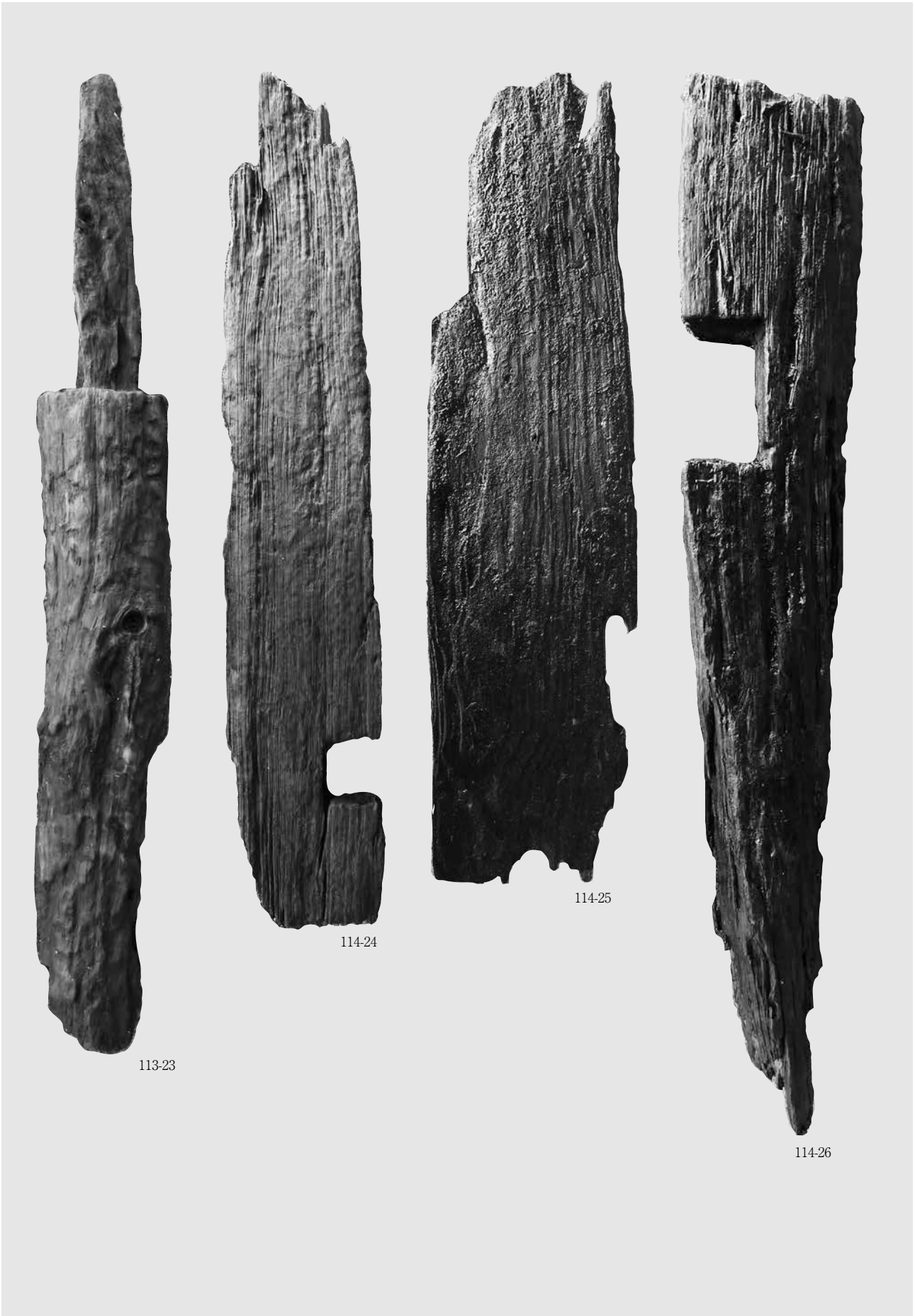
図版 74



第 52 次調査 I 区出土木製品（3）



第 52 次調査 I 区出土木製品（4）



第 52 次調査 I 区出土木製品（5）

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	もとおか・くわばらいせきぐん 29
書　　名	元岡・桑原遺跡群 29
副　書　名	―第 42 次(5)・52 次調査の報告―
シ　リ　ー　ズ　名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シ　リ　ー　ズ　番　号	第 1354 集
編　著　者　名	常松幹雄（編）米倉秀紀　萩原博文　比佐陽一郎　松園菜穂
編　集　機　関	福岡市教育委員会
所　在　地	〒 810-8620　福岡県福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1
発　行　年　月　日	2018 年 3 月 26 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				(㎡)	
もとおか・くわばらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群 だいよんじゅうにじ 第 42 次 だいごじゅうにじ 第 52 次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざもとおか 西区大字元岡	40137	2782	33° 35′ 6″	130° 12′ 4″	2004.10.1 ～ 2009.6.30	8,700 (42 次 4,800) (52 次 3,900)	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桑原遺跡群 第 42 次	集　落	縄文時代～古墳時代	自然流路 竪穴住居　掘立柱建物	縄文土器、弥生土器・土師器・朝鮮系無文土器・楽浪系土器、土製品、石錘、紡錘車、石斧、石包丁、石鏃	
桑原遺跡群 第 52 次	キャンプサイト	縄文時代草創期	遺物集中部	石鏃、尖頭器、楔形石器、スクレーパー類、縄文土器	九州に例のない形態の石器類が出土。剥片や砕片に使用痕（線状痕）が認められた。
	集落	縄文時代～古墳時代	自然流路 竪穴住居　掘立柱建物	縄文土器、弥生土器・土師器・朝鮮半島系土器・楽浪系土器、土製品、石錘、紡錘車、石斧、石包丁、石鏃、青銅器鋳型、木製品	絵画のある琴板、朝鮮系無文土器や山陰・瀬戸内などの外来系土器が出土。

要　約

（縄文）少数の土器と石器からなる遺物集中部が 4 ヶ所認められた。遺物分布や使用痕の分析により、石器製作と日常生活を行う空間の存在が明らかになった。九州に例のない遺跡群であるが、その形態的特徴により寒冷期のヤンガー・ドリヤス期の大原 D14 区より古い、温暖期のアレレード期に位置づけられる可能性が高まった。

（弥生～古墳）谷を南北に流れる２本の自然流路（幅 30 m前後）の中からコンテナ１万箱をこす多量の遺物が出土した。 縄文土器を含んでいるが、主体は弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺物である。土器の集積を構成する在来系土器には絵画土器なども含まれている。外来系の土器では無文土器や楽浪系土器などの朝鮮半島系の土器、国内では中国地方の土器の搬入が目立っている。

小銅鐸２点、五銖銭・貨泉などの漢代の貨幣、小形仿製鏡、青銅製鞘尻金具、辰砂の粒子、銅鏃などの金属器類 が出土しており 1246 集で報告した。絵画のある琴、トリ形木製品、翳とみられる有文木製品、木偶など祭祀遺物、船材を始めとする多種多様な木製品など、特徴的な遺物が出土しており、これらについては 1246 集で報告した。

ＳＤ０１・０２、これら２本の流路の間には、竪穴住居や掘立柱建物群があり、弥生時代中期から後期にかけての時期に比定される。このようにきわめて豊富な出土遺物は、この地が弥生時代から古墳時代初頭にかけて糸島地方の祭祀・交易の拠点として長く機能したことを示している。

元岡・桑原遺跡群 29

―第 42 次（5）・52 次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1354 集

平成 30 年 3 月 26 日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社
福岡市東区松田３丁目９番 32 号